

チリチリするの

鳩屋

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

扶桑海軍遣欧艦隊所属、萩谷信乃。16歳で階級は飛曹長です。

1940年に12歳で扶桑からはるばる欧州に来て以来、輸送船の護衛や各国の部隊への増援、激戦区での強行偵察なんかには駆り出され続けて早4年。休みは少ないしお仕事は大変だし固有魔法は変な名前。おまけに長機は人使いが荒くて毎日毎日危険があぶないです。ああ、それより聞いてください。今度の輸送物資のストライカーユニット、あれ、間違いないですよ、新型です、新型。いいなあ。あたしなんて未だに零式なのに。この前ようやくあたしにも新型が届くっていうから期待していたのに届いたのは52型。違う。違うんですよ。そうじゃなくてもっとこう根本的なのところが……（以下略）……。

追記：

『1. 1944 ガリア共和国東部 リヨン上空』

『15. 遣欧艦隊の魔女達（三人目）』

『17. 強行偵察』

『23. 難攻不落』

『2-5. STELLA』

のあとがきに、本作で登場するウィッチの紹介を載せました。

## 目次

### 第一部 JG54 リヨン臨時基地

プロローグ ―あたしが空を飛ぶ理由― | 1

1. ▪ 1944 ガリア共和国東部 リヨン上空 | 8

2. 遣欧艦隊の魔女達（二名のみ） | 11

3. JG54 リヨン臨時基地 | 24

4. 歪な防衛線 | 31

5. グリユンヘルツ | 39

6. 模擬戦 | 51

7. ありふれた空での日常 | 63

8. オマエのものはオレのもの | 70

9. リヨン⇨ディジョン経由⇨ロンドン行き | 78

10. 506JFW『ノーブルウィッチーズ』B部隊 | 83

11. 時折抜けてる事がある | 96

12. ガリア、我が喜び | 108

幕間 | 1 | 115

13. ナイトレイド | 124

14. 偶発的な共同戦線 | 141

15. 遣欧艦隊の魔女達（三人目） | 149

16. 嵐の前の | 169

17. 強行偵察 | 175

幕間 | 2 | 183

18. 『壁』 | 194

19. ヴァジエトの左目 | 200

番外編 1. 夢の舞台 | 211

20.	フライアウエイ	219
21.	JG54 リヨン臨時基地 2	232
22.	逃避行と総攻撃	247
23.	難攻不落	260
24.	伝説の魔女達	273
	エピソード1 —あたしが空を飛ぶ理由—	280
	エピソード2 —チリチリするの—	285
	おまけ —違う、そうじゃない—	296
	おまけ2. 扶桑皇国海軍遣欧艦隊日報(抜粋)	304
	番外編 こんな事もあったかもしれない、そんな話	
	番外編 2. シュニツク・シュナツク・シュヌツク	312
	番外編 3. 中尉殿は甘えてみたい(前編)	326
	番外編 4. 中尉殿は甘えてみたい(後編)	339
第二部 Let's go to Kauhava		
20.	burst up!!	350
21.	HAGISPECIAL	360
22.	Let's go to Kauhava	372
23.	504. JFW	385
24.	Foxy lady	398
25.	STELLA	408
	Interval —11— 1944 56FG	426
26.	1945 Westhamnett	431
27.	STELLA II	438
28.	STELLA III	451
29.	RTB	464

K a u h a v a l	2 — 2 0 — Ⅲ	E p i l o g u e		L e t , s g o t o	705
	2 — 2 0 — Ⅱ	W i n g s o f		t o m o r r o w	691
	2 — 2 0 — Ⅰ	S I R E N			676
	2 — 1 9	H e r s i l e n t		b r a v e r y	652
幕 間	 3 				634
	2 — 1 8	S w o r n		a v e n g e	612
	2 — 1 7	W I N G G I R L			593
	2 — 1 6	S t .A n g e r			579
	2 — 1 5	D O L L S			556
	2 — 1 4	a l i t t l e		b r e a k	537
523	2 — 1 3	その頃の彼女達		502 and 507	— Ⅱ
	2 — 1 2	h u m a n o i d		Ⅱ	507
	2 — 1 1	h u m a n o i d		Ⅰ	492
	2 — 1 0	その前の彼女達		502 and 507	— Ⅰ
					474

## 第一部 JG54 リヨン臨時基地 プロローグ ―あたしが空を飛ぶ理由―

1940 ブリタニア近海

そこはまるで、地獄だった。

『こちら扶桑海軍遣欧艦隊『龍驤』所属、若本一番。ネウロイの全消滅を確認、周囲の部隊へ、当部隊は引き続き生存者の救出に移る』

『こちらHMWタンクミーア基地所属航空部隊、扶桑及びリベリオン各部隊へ、協力感謝する。近隣の部隊並びに基地へ、当海域にて多数の民間人負傷者を確認、受け入れを求む』

『こちらリベリオン第8航空群第56戦闘航空隊、我が基地に民間人の受け入れ準備あり。負傷者の救助に移る』

『こちら扶桑海軍遣欧艦隊所属、空母龍驤。現在当該海域に向け移動中。負傷者はこちらでも引き受ける』

次々に飛び交う魔導無線。

大破した輸送船と、それに乗っていた多数の民間人。

ブリタニアへと疎開する途中のオラーシャからの護衛輸送船団の中、ネウロイの襲撃を受け、航行不能になった一隻が取り残され、そして水没したのだ。

生き残った多くの人々がこちらに助けを求めるときに手を振っている。

冬の海の温度は人の体温を遥かに下回り、ネウロイの瘴気もごく微量ながら周囲に漂っている。

一分一分が容赦なく人々の命を奪っていく。海に放り出された人々は少なく見積もっても三桁に及ぶが、この空域にいるウィッチは十数人。

人数も、時間も足りない。

「どうすれば……一体どうすれば……」

扶桑皇国のウィッチ、萩谷信乃はその光景を前に立ち尽くしていた。

体が震え、思うように動かない。視線を逸らしたくても、海の上に漂う人から目が離せない。

「落ち着け、萩谷」

そういつて肩を叩いたのは若本徹子。扶桑海軍遣欧空母艦隊に所属する信乃の長機であり、上官だ。

「あ……は……はい……」

乾いた声で返事を返す信乃。そんな信乃に徹子は殊更冷静に、否、冷徹に告げる。

「聞け。あそこにいる全員を助けることはできない。だが、お前が何もしなければ、助かるはずだった誰かが死ぬ。お前がそれでいいなら、ここで震えている」

「っ……」

「いけるよな」

「は……はいっ!!」

徹子の言葉に信乃は震える歯を食いしばり、拳を握りしめて頷いた。

「ウィッチだ!!」

「ウィッチが来てくれた!!」

「助けて!!助けて!!」

人々がウィッチ達を見て口々に叫ぶ。

そのあまりの多さに信乃は愕然とした。ガルネリウスの板という言葉を知らない信乃だったが、昔学校の図書室で読んだ芥川作品の蜘蛛の糸にでもなった気分だった。

「そんな……誰から助ければ……」

その時信乃の目に、板にしがみつこうようにして震えている一人の老婆が目に入った。顔色は蒼白を通り越して白に近く、細い体はガタガタと震え、今すぐにでも海から引き上げなければ命に関わるだろう。

「おばあちゃん!!こっちに!!」

考える間もなく、信乃は声を上げた。その声に周囲の人間が信乃を見、そして理解する。

「よかったなばあちゃん!!ウィッチが来てくれたぞ!!」

男の一人が震えながら老婆に微笑む。

「ウィッチの嬢ちゃん、うちの婆さんを頼む!!」

おそらく息子が孫だろう、一人の青年が信乃に向かって叫んだ。

「了解しました!!おばあちゃん!!捕まってください!!」

そういつて手を伸ばすが、その手を押し戻し老婆は首を振った。

「おばあちゃん……?」

「私はもう無理よ、それよりも……」

そういつて老婆が指をさしたのは、信乃の背後、赤子を海水に濡らすまいと必死に船の残骸に捕まる一人の若い母親だった。

「誰か、この子だけでも」

「可愛いウィッチさん、老い先短い私はいいから、あの人たちを助けてあげて……」

白い顔に笑みを浮かべ、震えるか細い手で信乃の手を握る老婆。

「そんな、でも……」

「お願い、あの子たちには未来があるわ、私と違って……」

周囲の人へと目を向ける。皆、助かりたいのは一緒だ。だが、老婆の言葉に皆頷いた。

「ウィッチの嬢ちゃん。ばあちゃんのいうことを聞いてやってくれな  
いか?いつも頑固でいう事を聞いてくんねえんだけどよ、今回ばっか  
りはばあちゃんが正しいぜ」

「そうだな、赤ん坊は殺しちやなんねえよ。なあ、頼むよ、お嬢ちゃん」  
「誰もあんたを恨んだりなんかしないさ。行ってくれ」

その場にいる誰もが寒さに震えながらも、信乃を促すように口を開く。

「っ、はい、っ」

そういつと、信乃は母親の元へと近づく。

「早く!!捕まってください!!」

「ありがとう。でも、私はいいいから、この子をお願い……」

息も絶え絶えに母親はそういつて信乃に赤子を手渡した。

「でも……」

「いいの、それに……」



そういつて母親が顔を海面の向うへと向ける。

「こつちにも子供がいるんだ!!」

「頼む!!この子だけでも!!」

次々に周囲から声上がる。この人たちは今信乃に助けられなければ死ぬことを知っている。それでも子供を最優先に助けようとしている。

「お願い、子供達を助けてあげて。貴女みたいに小さい子には酷かも  
しれないけど……お願い」

信乃はさすがのように空へ瞳を向け、逡巡するように口を開きかけ、そして一度閉じる。中途半端に伸ばした手のひらを握り締め、口元に無理やり笑みを浮かべ。だが、放たれたその言葉は僅かに震えていた。

「……大丈夫、きつと、きつと今すぐに他のウィッチが助けに来ます。  
だから……」

「ええ、ありがとう。またこの子に会うためですもの……頑張るわ」

悲しい嘘に、優しい嘘が答える。

「さあ、行って」

こくり、と頷き信乃は母親に背を向けた。何かを振り切るように、逃げるように。

銃や糧食、持っている荷物を片っ端から海へと捨て、少しでも体を軽くする。一人でも多くの子供を抱えるために。

抱えられるだけの子供をかかえ、信乃はエンジンに魔力を送る。高度をあげる信乃の耳に、誰かの声が僅かに聞こえた。

「待って、まだうちの子が……」

そこは、まさに地獄だった。

「……泣いてるの？」

抱きかかえた子供が信乃に尋ねる。

「……ごめんね……あたしが弱いせいで……」

子供たちが気丈に泣かないでいるのに。

なんであたしはこんなにも無力なのだろう。

たった二本の手と、小さなこの体で。

多くの人々を見捨ててきて。

「おねえちゃん？大丈夫？」

気丈でいなくてはいけない。子供たちに心配をかけないためにも。赤ん坊と子供を二人、空いた手と背中に預けながら、信乃は自分分に言い聞かせているが、瞳からは涙がにじみ、口を開けば声が震える。

「ほかのういつちのおねえちゃんたちがいるからだいじょうぶなんですよ？」

「そうだよ、きつとパパもママも助けてくれるよ。泣かないで、ね？」

「……うん」

子供たちの無邪気な言葉が信乃の心をえぐる。

「ほら、おねえちゃん、赤ちゃんが笑ってる」

その言葉に信乃が目を見開く。

「……もし、パパとママが居なくても、私も、赤ちゃんもきつと頑張るから」

「っ」

「だからおねえちゃんもわらって、ね？」

「そう、だね」

ああ、なんて弱いのだろう。あたしは。

こんな子供たちにまで励まされて。

赤ん坊の笑顔を見て、信乃は泣きながら笑顔を作った。

子供たちを空母に降ろし、燃料を補給する間も惜しく再び飛び立つ。そしてまた数人の人を救助し、踵を返す。

幾度となく船と海を行き来し、その度に人々の声は少しづつ少なくなっていた。

しかし、それは助けを待つ人が減ったという意味ではない。いや、減ってはいる。

助けを待っている人の定義を『生存者』という括りで捉えるのであれば、確実に減っている。

「……」

静かになった海を見つめ、信乃は震える拳を静かに開いた。

信乃は最初に助けようとした老婆に手を伸ばしかけ、そして止めた。

「……ごめんね、おばあちゃん……」

海の上を漂いながら、動かなくなつた人々を見て信乃はつぶやく。

「ごめんなさい……皆……」

あの時、子供を助けて欲しいと言つた老婆とその息子。

子供を優先させるため最後まで海に残つた大人たち。

自分よりも他の子供を優先させた母親。最後まで助けを求めていた親子。

どれだけの時間を過ぎたかを考えれば、奇跡すら望めない。それなのに再びこの場に戻ってきた。偽善的な行為と言われればそのとおりだ。

周囲には幾人かのウィッチ達が同じように海域にとどまっていた。

涙で瞳を濡らすもの、無表情で海を見つめ続けるもの。悔しそうに罵声を上げるもの、じつと唇を噛み締めるもの、一途の望みをかけ、声を枯らして水面へ呼びかけるもの。皆、気持ちは同じなのだろう。

最後まで救助活動を諦めない、という名目もあるが、そこに生存者などいないことは十分に把握している。奇跡などそう起こるものではない。

それでも。

目の前の光景を前に、有り得ない奇跡を願う。返事をしてほしい。助けを求めてほしい。

これだけ多くの人々の命を背負うなど、10代の少女達には荷が重すぎるのだ。

だが、そんな気持ちを断ち切るような魔導無線が、信乃の耳にも届いた。

『ウィッチ各員に次ぐ。偵察機より、生存者の全救助を確認した。早急に海域を離脱し、原隊に復帰せよ。繰り返す……』

そう。生存者は全て救助した。

助けきれなかった、多くの人々だった目の前のモノたちは、最早生存者ではない。

限界だった。

「っっ……!!」

その場で瞳をぎゅつと閉じ、信乃は堰を切ったように嗚咽を漏らし始める。

「ごめんなさい……ごめんなさい……っ」

それは、ありふれた出来事。

何百万の人々が逃げる中で失われたわずかな端数。ごく小さな出来事に過ぎない。

だが。

その出来事ですら、一人の少女の将来の向かうべき先を決めてしまうには、十分すぎる重みがあった。

「あたしが強ければ……もっと強ければ……」

拳を握りしめ、慟哭する少女。

その日の後悔は、鈍く痛む火種となり、いつまでも、いつまでも、12歳の少女の胸をチリチリと焦がし続けた。

そして、それから4年。

少女は変わらず、欧州の空にいる。

1. ・1944 ガリア共和国東部 リヨン上空

「ガリアが奪還されてからブリタニアへの移動も楽になりましたね」

扶桑皇国海軍の飛行服に身を包み、ストライカーユニット『零式52型』を駆る萩谷信乃が、隣を飛ぶ若本徹子に話しかける。

小柄な少女だ。瞳が隠れそうなほどの長めのボブヘアを髪留めで留め、起伏の少ない華奢な体格に童顔も相まって、十代前半のようにも見えるが、気楽に飛んでいるように見えて、時折周囲に警戒の目を鋭く走らせているあたりは空での経験が長い事をうかがわせる。

「それにしても、一人で大丈夫なんですか？あの人」

リバプールの軍港で出会ったブリタニアのウィッチを思い出し、信乃が呟く。

「渤海経由の北の海域は今のところ安全だ」

黙って話を聞いていた徹子がぼつり、と返事を反す。

「本当にそれだけでなんですか？あたし達が行かなかつた理由って……」

「ハギ。余計な詮索は必要ない。戦場では」

「余計な思考が命を奪う、ですよ。解ってますよ、若」

耳にタコができるほどに聞いた言葉に、うんざりしたように言葉を返す。

「そういえば、さっきの輸送船に乗ってたユニットって最新型ですよ。誰が使うんです？」

解つてるといいながらこれだ。

まあ、話に夢中になって索敵を怠るような失態を今更犯すようなことは無い事は長い付き合いで理解している。

思わず苦笑を浮かべ、徹子が肩をすくめる。

「ブリタニアに駐屯してる奴じゃないだろうな。って事は、リバプールからそのまま船に乗る。海路って事はオラーシャか、スオムスカ」  
徹子が呟く。

年恰好は信乃と比べ年上、身長も頭一つくらい大きい。すらりとした体格に白の扶桑海軍の士官服を纏い、鋭い視線に落ち着いた声色

は、思わず話しかけるのを躊躇いそうになる雰囲気醸し出しているが、信乃は気にした様子もなく話かけている。

「じゃあ、502か507……って事は菅野中尉かモハですね。迫水さんじゃないでしょうし、雁淵妹ちゃんの方は新型の試作機に乗ってるみたいだから。ああ、いいなあ。新しいユニット。あたしも欲しいです」

「菅野に新型だとしたら、来週には壊れた新型のスクラップを回収しにまた来るかもな」

「あはは、まさかそんな……」

「無いと言えるか？」

「……無いと信じたいです」

壊すくらいなら自分にくれと言いたいところだが、残念ながら52型ですらようやく配備が済んだばかりなのに、名前も聞いたことのない最新型に更新される等まだ当分後の話だろう。

「まだどんな機体だか分からない。雷電みたいな奴だったらオレは御免だ」

「えー。あのぽっちゃりした感じ、あたしは好きだったんですけど。どうして返しちゃったんですか？」

リベリオンのF4Fあたりを思わせるずんぐりとした局地戦闘機はおおむね扶桑のウィッチ達には不評を買っている。欧州基準では加速、上昇性能に優れた優秀な機材という評価になるだろうが、何しろ零式の旋回性能の良さを知ってしまった扶桑海軍のウィッチ達にとっては、大味で扱いにくいユニットという評価が大半だった。

「必要ないからだ」

「いいじゃないですか。ハンガーに置いて眺めているだけでも。癒されますよ」

「倒錯しすぎだ、ハギ」

呆れように徹子が呟く。おおよそストライカーユニットを観賞用に欲しいと言い出した奴は歴戦を潜り抜けてきた中でもこの奇妙な趣味を持つ僚機くらいだ。

「ブリタニアもリベリオンも、新型ユニットがどんどん届いてるのに。」

そういえば、カールスラントにはジェットエンジンを使ったストライカーもあるって。いいなあ、見たいなあ、触ってみたいなあ、乗ってみたいなあ」

「無い物ねだりをしてもしようがないだろ」

「むー。若は悔しくないんですか？どんだん零式が旧型になるのに、今だにまともな後継機が届かないなんて」

「そもそも零式が他のユニットとは違うんだ。零式では劣るところは多いが、未だ零式にしか出来ないこともある。それとも、零式じゃハギは他の国のウィッチに勝てないか？」

「そんな事無いですよ!!あたしは……」

その時、魔導無線のオープンチャンネルにノイズが走る。

徹子がいい返してきた信乃の言葉を、手を伸ばして遮る。

「機械の不調ですか？」

「いや、それにしても不自然だ」

耳にあてられた魔導無線を手で押さえ、僅かなノイズも聞き逃すまいと神経をとがらせる。

「……ら……ルス……ヨン基……3中……答……」

「……妨害電波……」

信乃の言葉に徹子が頷く。それが意図することは何か。

「途中で奴らの襲撃が無かったのは幸いだっただな。ちよつと寄り道するぞ、ハギ」

「了解です、若」

徹子の言葉に二人が針路を変える。

最早日常と言っても過言ではない、欧州の空での出来事。

これから始まるのは、決して非日常的な出来事ではない。

この欧州の空では、ごくありふれた日常だ。戦闘

## 2. 遣欧艦隊の魔女達（二名のみ）

扶桑海軍遣欧艦隊航空魔女部隊報告書、甲1023  
作成者、若本徹子 中尉。

1944年9月13日1400ガリア共和国リヨン基地近郊、カールスラント国境付近にて我が小隊ハ交戦状態ニ突入セリ。

「こちらカールスラント空軍所属JG54第1飛行隊、第3中隊アンジェラ・ヴォルフ、リヨン基地へ、連絡求む、我が中隊ネウロイと交戦中、連絡求む」

銀髪を背中まで伸ばした少女が無線機に呼びかける。

「まだですか!?隊長、もう持ちませんよ!!」

「わわ、狙われてるーっ!?!」

不味いな。

「リヨン基地、応答求む、応答を……」

呼びかけもむなしく、激しいノイズの向うからは声の気配すら感じ取れない。ネウロイが妨害しているのか。

先程まで良好だった魔導無線は完全に封鎖されている。

基地とのコンタクトを試みつつ、隊長と呼ばれた少女……アンジェラが手にしたMG42を味方の背後についているネウロイに掃射。

ぱん、と光の粒子となつてはじけ飛んだ。

「ベレーナ!!機首を上げなさい!!また食いつかれますよ!!」

部隊の副官を務める少尉のハンネが叫ぶ。経験の浅い新人曹長は、その言葉に半泣きになりながらも上昇を試みた。

「隊長!!増援は!?このままじゃ弾が足りませんよお!!」

悲鳴のような声を上げるのは同じく若手のユーリ。先程まで引きつった笑みを浮かべ、これじゃあ一日でエースの仲間入りですかねなどと軽口を叩いていたが、いよいよ余裕がなくなってきたようだ。

ユーリもベレーナも若手の中では筋の良い方だが、これだけの相手を前には分が悪すぎる。



加えてこちらは二人の練習飛行の帰り。実弾は最低限、燃料も半分  
以上使い果たしている。

相手からすれば理想的な、こちらからすれば最悪のタイミングでの  
奇襲だった。

「残弾確認、ハンネ」

「予備弾倉一つ……いえ、今なくなりました。これが最後です」

「こちらユーリっ!!予備弾倉無し、弾、もうなくなっちゃいますよお  
!!」

「ベレーナ、残弾ありませんっ!!」

矢張りというか、若手の方がむやみにばらまいたため消費が激し  
い。

残った弾倉はアンジエラも一つ。節約しながら最小限でやってき  
たが、残るネウロイは中型、小型合わせて少なくとも10以上はいる。

このままここに居ては全滅も時間の問題だ。

だが、突破するにしても基地方面は我々の進路をふさぐようにネウ  
ロイが多数展開している。自分一人ならまだしも、心もとない残弾  
で、しかも若手を二人抱えて突破するのは困難だ。

かといって層の薄い基地との反対側に舵を取り、万が一ネウロイを  
振り切ったとしても、そこから基地へ戻るだけの燃料の残量は残らな  
いだろう。

「隊長、どうします?」

進むも退くも地獄。

だが、決断しなくてはいけない。自分が100機以上のネウロイを  
落とした歴戦のエースであり、この部隊を率いるアンジエラ・ヴォル  
フ中尉である以上は。

「ハンネ!!包囲される前に3時方向への道をこじ開けろ!!ユーリ!!ベ  
レーナを護衛しつつ後に続け、私が殿を務める!!」

「隊長!!基地とは逆方向です!!燃料が!!」

「構わん!!こいつらを振り切ったら不時着して助けを待っ!!」

仮に成功しても、生存確率は決して高くはない賭けだ。だが。玉切  
れのひよっこを抱えて敵の中を突っ切るよりはまだ『全員で』生き残

れる可能性は高い。

「隊長!!基地に向かいます!!私が敵を引き付けます!!」

「駄目だ」

ハンネの具申をアンジエラは即座に否定する。要は、アンジエラを、中隊一のエースウィッチを守るため、自分を含めた三人を捨て駒にするつもりだ。

「もし基地方向へ向かえば、私『達』は貴様を置いて行く」

「っ、解りました!!ユーリ!!ベレーナ!!行きますよ!!」

ハンネが3時方向へ舵を切る。目の前をふさぐ数匹のネウロイを手にしたMG42で蹴散らし、退路をこじ開ける。

「よし、行くぞ!!」

ハンネの後ろに続いたユーリとベレーナを確認し、アンジエラはメツサーシャルフBf109の魔導エンジンに魔力を込め、一気に急上昇する。

数筋の熱線がネウロイから放たれるが、ちらり、と背後を見ただけでアンジエラはそれらが当たらない事を確信していた。

ただ落とすだけなら高度をもっと上げるのだが、今の役割は三人の若いウィッチを安全圏まで離脱させることだ。すぐさま反転し、シールドを張りながら四番機の位置につけていたユーリに標準を定めるネウロイを二機、急降下して蹴散らす。

倒したことを確認せず、すぐさま反転、急上昇。だが、次に襲ってきた熱線は直撃コースだ。上昇をやめ、体を捻りながらシールドを展開。すぐさま機関銃の引き金を引くが、狙いが甘くネウロイは仕留められなかった。

「流石に多いな……だが……」

戦闘空域外への進路は確保されている、そう呟こうとした刹那。

「隊長つ!!」

悲痛なハンネの叫び声。

「どうした!!」

「前からネウロイ!!機影多数!!」

その言葉にぞくり、と背筋が粟立つ。

「落ち着け、何機だ」

「た、沢山、ですっ……!!」

ユーリの震える声が届く。

「沢山じゃない!!数を教えろ!!」

「中型5機!!小型5機です!!」

ベレーナの泣き出しそうな叫び声。

くそっ。

奴らの狙いはこれか。

ぎり、とアンジェラが歯を食いしばるが、後の祭りだ。

敢えて包囲の隙を作り、『別動隊』の待ち構えるキルゾーンに追い込み、包囲殲滅する。

「攻撃、来ますっ!!」

「回避しろっ!!間に合わなければ防御!!急げ!!」

アンジェラはすぐさま攻撃を中止し、仲間たちの方へとユニットを疾駆させる。

限界までユニットを回した先、仲間たちが必死にシールドを張り、或いはせめてもの反撃を試みてる。

まだだ。まだあきらめるには早い。私が退路を切り開き、三人を逃がす。

上がりの近い自分とは違い、皆若い。最年少のユーリに至ってはまだ11歳なのだ。

たとえ刺し違えてでも、三人を守ってみせる。否、守らなくてはいけない。

そう自分に言い聞かせ、銃を構えた次の瞬間。

「ぎゃああっ!!」

絶望的な光景が照準越しに飛び込んでくる。

3番機のベレーナのユニットが被弾、急速に高度を落としていく。

「ベレーナっ!!」

一瞬の事に思考が真っ白になる。だが、頭で考えるよりも先に、アンジェラは動いていた。

手にした機関銃を捨て、地面に向かって錐揉み落下していくベレー

ナを負い、その手を掴む。

「うぐっ!?!」

思い切り引つ張られ、ベレーナの肩からごきり、と嫌な音がするが、墜落だけは免れた。

「隊ちよ、っ!?!」

痛みに顔をゆがめながらもこちらを見返してくるベレーナを抱きかかえ、顔を上げる。

「……畜生<sup>シャイセ</sup>」

完全にネウロイに取り囲まれた空域の中心で、ぽつり、と眩く。

「隊長!!ベレーナ!!」

ハンネとユーリが二人を守るように前後につく。

「畜生!!畜生っ!!」

ぼろぼろと涙を流しながらシールドを張り、必死に弾き金を引くユーリ。

だが、既に弾をうち尽くしたMG42は、かちんかちんと無情な音を立てるだけで、一匹のネウロイをも倒す事は出来ない。

「隊長!!隊長だけでも退避を!!私の銃はまだ使えます!!」

シールドを張りながら手にした最後のMG42を差し出し、ハンネが叫ぶ。

「お前らを置いていけるか」

「隊長、逃げて、私はいいですから!!」

ベレーナがアンジエラの手から逃れようと暴れるが、アンジエラの手はベレーナをしつかりと抱きしめ離さない。

「隊長、逃げてよお!!」

嗚咽交じりにユーリが叫ぶ。だが、それが逆にアンジエラの心を決めさせた。

「ありがとう、皆」

次の瞬間、4人の姿を影が覆った。

「お前たちは最高のウイングガールだ」

太陽を覆い隠すように、中型ネウロイがゆっくりと高度を下げて近づいてくる。あと数分か、数秒か。ネウロイの熱線の一斉掃射で、

JG54第1航空隊第3中隊はこの世界から姿を消すことになる。

ユーリがひつと悲鳴を上げ、ベレーナがアンジェラの胸にしがみつ。最後の抵抗を試みるつもりか、ハンネが三人を庇うように前に出て、震える手でMG42を構える。

「各員、方円を組んでシールドを展開。簡単には落ちるな。一秒でも長く生き延びろ。カールスラントウィッチの意地を見せてやれ」

凜とした声で最後の命令を放つが、奇跡などそう簡単に起こりえない。

……ここまでか。

震えるベレーナを抱きしめる力に手を込めた瞬間。

「こちら扶桑遣欧艦隊所属、若本一番。聞こえるか？」

突如、オープンチャンネルの魔導無線に張りのある声が、アンジェラの、否、部隊全員の耳に飛び込んでくる。

最初は何かの間違いかと思った。

几帳面なアンジェラは飛行前には必ず自分の基地の、否、周辺の基地全てのウィッチの航空ルートを把握するようにしている。この空域にウィッチが通りかかるなどアンジェラは聞いていなかった。

では、この声の主は誰なのか。

「こちら扶桑皇国若本一番。聞こえているなら返事をしろ、カールスラントのウィッチ共」

やや癖のあるカールスラント語での再度の呼びかけ。聞き間違いでも、空耳でもない。

その証左に、言葉の意味を理解したハンネの、ユーリの、ベレーナの瞳にわずかな希望の光が灯った。

「隊長っ!!」

ハンネの震える声に頷き、アンジェラが口を開く。

「こちらカールスラント空軍JG54第1飛行隊第3中隊。扶桑皇国のウィッチへ。我々は断頭台の上にいる。今からでも助けは間に合うのか？」

アンジェラの問いかけに、無線の向うのウィッチがふ、と小さく息を吐く。

「流石はカールスラント軍人、その堂々とした立ち振る舞い、まさに騎士の末裔だな」

姿は見えないが、不敵そうな扶桑のウィッチが笑う様子が見えるような気がした。

「……だそうだ。間に合わせろよ、ハギ」

「はい!! 萩谷二番、先行します!!」

その言葉に間髪入れず返事をしたのは、先程とは違う、幼さの残った、だが、凜とした響きの声だった。

その声が響くや否や、上空からメッサーシャルフとは違う魔導エンジンの回る音が響く。

そして、次の瞬間。

「取ったあつー!」

矢のように降ってくる少女の叫び声と、乾いた機関銃の音が空に響いた。

自分たちに狙いを定めていた中型が機関銃の音に合わせてガンガンガンと振動し、次の瞬間光の粒となって爆散した。

「まず一機!!」

その間をすり抜け、ウィッチ……扶桑海軍の飛行服姿の一人の少女が叫び、顔を上げる。

小柄な体を野生動物のようにならせると、急降下の勢いそのまま旋回し、そのまま勢いを殺すことなく上昇を始め、他のネウロイの方へ、真っ直ぐ『正面』から突っ込んだ。

「何!?!」

思わずアンジェラが目を見開く。

カールスラントのウィッチの基本は一撃離脱。奇襲に成功したなら再び敵に捕捉される前に其の場から離脱するのが鉄則だ。

深追いは禁物。ましてや正面から突っ込むなど、正気の沙汰ではない。

当然ネウロイの熱線は突如現れた少女に集中する。

だが。

「うう、チリチリが多いなあ……」

少女は訳の分からない事を呟くと、その熱線のほとんどをすれすれで避けて見せた。

唯一直撃コースの一撃も、そこに来ることが分かっていたかのようにシールドを一瞬だけ、熱線に対して鋭角に展開して逸らして見せる。

受け止めるのではなく、受け流す。

さほど違いが無いようで、それを行えるようになるまでの練度には圧倒的な差のある技を事も無く披露した扶桑のウィッチは、そのまま手にした機関銃を構える。

上昇しながらネウロイに対して20mm機関銃を打ち上げ、その直撃を受けたネウロイが次々に爆発していく。

「あつ!?!」

ネウロイもただやられているわけではない。少女の射線から外れた一匹が素早く回り込み、少女の背後から熱線を放つ。

落とされる。そう思った瞬間。

少女の『足』からシールドが展開される。

シールドに熱線が当たった勢いを利用してくるり、とその場で半回転すると、さかさまになったまま熱線を放った背後のネウロイに、お返しとばかりに20mmを叩き込む。

「ハギ、オレの分もとつとけよ」

「じゃあ早く来ててくださいいよ若。一人で突っ込ませるなんて部下使いが荒い一番機ですね」

さかさまの状態からくるりと反転して飛行姿勢に戻った少女が声の主に言い返す。

「面倒だからな」

次の瞬間、少女に向かって殺到していたネウロイが数機、突如爆発を起こして四散する。

「どうした?言われた通りに来てやったぞ」

その声は、『下』から響いた。

「離脱する。援護しろ。ハギ」

既に機首を起こして上昇に移っている『ワカ』と呼ばれた少女が口

を開く。

「ええ!?あたしも離脱したいんですけどお!」

そう言いながらも『ハギ』と呼ばれた少女は律儀にくるりと反転し、再び集結しつつあるネウロイに向かう。

相手の死角の優位高度からのズームアンドダイブ、そして機首を翻し鋭く上昇。

カールラントの教本に乗せたいくらいに、無駄のない動きだ。

だが、ネウロイたちもそれをむぎむぎ見送る訳もなく、数機がその砲門を『ワカ』に向ける。

だが、そんなネウロイを再び反転した『ハギ』の20mmが打ち抜いていく。

「うわあ、チリチリするう」

先程と同じような事を眩きながら。

今度は『ハギ』の来襲を見越していたのだろう数機のネウロイが、『ワカ』ではなく『ハギ』に熱線を集中させる。

だが、先程と同様、『ハギ』はその熱線を寸で交わし、自身の進路を確保するように20mmの引き金を引いた。

ネウロイにも学習能力はある。恐らく、目の前の『ハギ』を相当な『脅威』だと認識したのだろう。

離脱した『ワカ』と攻撃手段を失ったアンジェラ達などすでにネウロイの眼中にない。

「いいぞ、ハギ。次は『三号』を落とすからもつと密集させろ」

「はあ!?そんなの持ってたなら、なんでさつき使わないんですか!!」

「アレだと落とせて半分だ。それじゃあ面白くないだろ」

「はああ!?どっちにしてもあたしは面白くないです!!」

悲鳴を上げながら、それでも『ハギ』は律儀に、ネウロイをおびき寄せる様に、時折威嚇射撃を織り交ぜつつ急旋回を繰り返しながらその場にとどまり続ける。

それを逃げ場を失ったと判断したのか、アンジェラたちを包囲していたネウロイが、獲物に群がるサメの群れのように『ハギ』に殺到する。



「若あ、チリチリがもう限界っ!!頭が沸騰しそうですよお!!」

「準備完了だ。そのまま上昇して、10秒で離脱しろ」

「鬼い!!」

悲鳴を上げながら『ハギ』が太陽に向かってストライカーを急上昇させる。

背後からの熱線を足で張ったシールドで弾きながら離脱を試みるも、扶桑の零式艦上戦闘脚の貧弱な上昇性能はネウロイに劣る。徐々に『ハギ』のユニットとネウロイとの差が縮まっていく。

6、5、4……

徐々にネウロイのビームで『ハギ』の体が揺さぶられるようになる。攻撃を受け流す余裕がなく、シールドがまともにネウロイの攻撃を受け始めたからだ。

3、2……

ネウロイうちの一匹が『ハギ』の脇につく。

シールドを足に集中させている今、それ以外の部分は完全に無防備だ。ネウロイの体の一部が赤く光り、今まさに熱線が放たれようとした時。

1

突如『ハギ』の体が其の場から消える。

否。

機首を無理矢理さらに上へ上げた事で、限界を超えたユニットは失速を起こし、急劇に速度を落として落下する。

その刹那『ハギ』よりも遙か頭上で、ネウロイの熱線が何もない空間を焼いている。

「零」

『ハギ』がその場から離脱する。上ではなく下。

失速を確認した瞬間、魔導エンジンに送っていた魔力を一旦絞り、自由落下の勢いを生かして体を180度反転させる。

目の前に迫る地面に向けて再度魔導エンジンに魔力を込める。一瞬でもタイミングを間違えば錐揉みを起こし、そのまま機体の制御が出来ずに地面に激突する紙一重の挙動。

それを制御した時点で、一か八かの賭けは成功したも同然だ。  
急上昇するネウロイと、急降下する『ハギ』。そして、ネウロイの目の前には。

「時間だ。あばよ」

『ワカ』の投下した、3号特爆が迫っていた。

どん、という腹に響く音と共に、空で破裂した3号特爆が熱く焼けた焼夷弾子をまき散らす。それに触れたネウロイが次々に炎を上げ、そして四散していく。

「死ぬ!!死ぬかと思った!!」

地面にキスする寸前で機体を起こし、ギリギリ特爆の有効範囲を離れた『ハギ』が息を吐く。

その高度僅か数メートル。一步間違えば全速力での墜落。手を伸ばせば地面に届きそうだ。

「こちら若本一番、ネウロイの全機撃墜を確認」

「こちら萩谷二番。そうじゃないと怒りますよ!!」

「凄い……二機だけで全部倒しちゃった……」

ぽつり、とユーリが呟く。

アンジエラもただ茫然と空を見上げていた。

生き残った。誰一人欠けることなく、生き残る事が出来た。

その思いだけで、体から力が抜けていきそうだ。

「カールスラント空軍機へ、こちら若本一番。戦闘終了」

『ああ……救援感謝する、扶桑のウィッチ』

「気にするな。こつちが好きでやったことだからな……ええと……」

いつまでも『扶桑の』『カールスラントの』と呼ぶわけにも行かないが、生憎先程の長ったらしい部隊名のせいで名前を覚えきれなかった。

『こちらはカールスラント空軍所属、アンジエラ・ヴォルフ中尉だ。そちらは』

気を利かせたのか、無線の向うのウィッチが簡潔に名前を名乗る。

「扶桑海軍、若本徹子中尉。アンジエラ、そつちも中尉か、なら敬語は

抜きでいいな」

元々敬語など使っていないが、相手の階級が上なら口調を切り替えるくらいの機転は持ち合わせている。

向うも合いも変わらない慇懃な口調で返事をかえしてきた。

『こちらこそ。若本中尉、お前らの残弾と燃料はどうなっている?』

ちらり、と『ハギ』を見やると、眉をひそめて首を振る。

「どっちも少ないな。これからジェノヴァまで飛ぶつてのに」

ジェノヴァには扶桑皇国遣欧艦隊の旗艦、空母『瑞鶴』が停泊しており、欧州に展開する扶桑海軍の司令部もそこにある。欧州の戦況に応じて拠点を変える、まさに動く航空基地だ。

『ロマーニャまでか?いくら扶桑のユニットでも無理があるな』

「何事もなければギリギリ行けたんだがなあ……」

ぽりぽりと頭を搔く。生憎増槽も戦闘行動に移る際に切り離してしまった。

有事の際の中継地としてガリアの基地にも連絡を入れていたのだが、ここから引き返していても届かない。

「あー、アンジェラ、助けた恩をねだるようで悪いが」

『解っている。基地には連絡を入れる。燃料補給と機体の整備、それに、大したものを出せないが空腹を満たすくらいの食事は用意させよう』

「マジか?話が分かるな!!」

『ワカ』の言葉に無線の向うから苦笑じみた笑い声が帰ってくる。

『命の恩人への礼にしては足りないくらいだ。遠慮はいらん。ハンネ、二人を誘導してやってくれ』

『了解』

……こうして、あたしと若本徹子中尉はカールスラント空軍JG54の基地へと向かう事になりました。補給と食事。一晩だけの世話になるはずが、まさか、あんな大事件に巻き込まれるなんて、その時は誰一人として想像はしていませんでした。

「おいハギ、余計な文章を付け加えるな」

「何ですか?人に報告書を任せきりにしておいて、文句があるんです

か？」

「オレが上から文句を言われる」

「は？だったら自分で書けばいいじゃないですか」

基地の一室でせっせと報告書を書いている信乃の頭を徹子が叩く。眠そうな目に抗議の色をにじませながら、信乃が言い返した。

### 3. JG54 リヨン臨時基地

「そろそろ到着します」

「ありがとうございます、その……」

「ハンネ・A・ハーン少尉です。ハンネで結構ですよ、准尉」

「はい、ええと、ハ……ハーン少尉、お世話になります」

一度名前で呼びかけ、改めて言い直す。というか、名前が紛らわしい。

ハンネがその様子にわずかに苦笑じみた笑みを浮かべた。きつとしっかりとした教育を受けているのだろう。

「准尉。余りかしこまらないでください。先程の戦いも見事でした。空の上で謙遜なんていりませんよ」

「ええと……善処します」

小さなウィッチは先程の戦闘とは打って変わって控えめな口調でハンネの言葉に頷く。

その言葉にすらりとした長身に眼鏡をかけ、いかにも理知的な雰囲気とは裏腹に、見るものを和ませるような柔和な笑みを浮かべてハンネは頷いた。

「ねえねえ、あれどうやったんですか？あれ」

そういいながら近づいてくるのは信乃と同じくらいの身長の小柄な少女だった。

ブロンドの髪を後ろで二つにまとめ、好奇心旺盛そうな大きな青い目に笑顔を浮かべて信乃の横にストライカーを並べる。

「あれ？」

「ほら、ぱーっとネウロイに撃たれた時に、さつとかわしてぴつと弾いた奴。何かビームが曲がったみたいに見えたんだけど、固有魔法か何かですか？」

「ユーリ、せめて名前と階級を名乗りなさい。他国とは言え、上官ですよ」

ハンネがたしなめる。

「ご、ごめ……じゃなくて、すみません。ボク……じゃなくて自分は

ユーリエ・ブロッケ軍曹です、11歳です」

「ユーリ……ブロッケ軍曹はまだ配属されて1ヶ月くらいなんです。まだ軍になれてないところもあるんですが……」

「あたしは気にしませんよ、ハーン少尉。ブロッケ軍曹、あたしは萩谷信乃准尉です。年は16歳。——よろしくね、ユーリ」

ユーリというのは綽名だろう。カールスラントでは男の名前だ。

最も、ユーリエちゃんというよりもユーリ君といった方がしっくりくる快活な雰囲気少女である。皆もその辺りを踏まえ、敢えて『ユーリ』と呼んでいるのだろう。

「やった、よろしくお願いします、シノさん!!」

「駄目です。萩谷准尉も甘やかさないでください」

ぴしやり、と言い放つハンネと、しゅんとなるユーリ。

「でも、ハーン少尉もあたしに名前と呼べっていいましたよね。敬語はお任せしますが、せめて名前くらいは普通によんでもらいたいです。ハンネ」

その言葉にハンネが目丸くし、やがて苦笑を浮かべる。

「そう言われては立つ瀬がないですね。ユーリ、『シノ』もそう言ってますし、特別に許可します」

「やったあ。少尉大好き!!」

名前を呼ぶくらいでそのまま遙か上空まで飛んでいきそうな勢いで喜ぶユーリ。

「それでシノ、何でレーザーが曲がったんですか？」

「曲がったんじゃないよ。シールドを使って逸らしたの」

年も階級も下のユーリに、若干砕けた口調で信乃が答える。

「シールド?でも、シールドだと当たったらばーって広がっちゃいますよ?」

「それはビームに対して真っ直ぐシールドをあてるから。そうじゃないくて、シールドをビームに対して斜めに張ると、ビームが拡散しないで後ろに逸れていくでしょ?そうすると衝撃が少なくなるから、それを利用して……」

そこまで説明しかけて信乃が言葉をとめる。

「ん……んー？んんー？ええと……つまり……」

「ふふ。まずはシールドでしつかり攻撃を防ぐようにした方がいいよ」

どうやら11歳の軍曹殿にはまだ難しいようだった。

首を捻っているユーリに、信乃が苦笑を浮かべる。

「そのうち解りやすいように教えてあげるから」

「本当!?約束だよ!!シノ!!」

ぱつと花が咲いたように無邪気にほほ笑むユーリに、信乃も思わずつられてほほ笑む。

「ハンネ。そろそろ着陸の用意だ」

無線越しのその言葉に、口に浮かべていた笑みを引き締め、ハンネが口を開く。

「ユーリ、シノ。お話は後にしましょう。着陸しますよ」

その言葉に信乃が下を見ると、田園地帯の中に滑走路が見えてきた。

その周辺には基地……というには少し質素なレンガ造りの建物が立ち並んでいる。滑走路が無ければ、ちよつと大きな農家の屋敷といった雰囲気だ。

『ハギ、先にオレ達が降りるぞ』

「了解です」

魔導無線の向うの徹子の声に信乃が答えて機首を下に向けた。少し前を飛んでいた徹子もほぼ同じタイミングで機首を降ろす。

地面が近づいてくる。ギアを落としてフラップを使い、減速しながら滑走路に近づく。

鳥観図のようだった景色がどんどん広がり、茶色一色だった地面に色が増えていく。

普通航空機なら一機づつ着陸するのだが、それよりずっと小さなウィッチの場合、2、3人が同時に着陸するのはよくある事だ。

徹子との距離に気を使いながら、地面を整地しただけの滑走路に触れる直前、軽く身を起こす。やや前傾姿勢を保ったまま、下半身がユニットで固定されているので、上半身全体で上手く風に煽られないよ

うテレマーク姿勢でバランスを取り、ユニットを制御しながら速度を弱める。

着地成功。

脚からのシールドはユニットに少なからず負担をかける。着地の衝撃でギアやユニットが壊れなかったことにひとまず信乃が安堵の息を吐く。

ユニットが完全に制止すると、待機していた整備兵が駆け寄ってきて、ウィッチを安全な場所まで誘導していく。

「うちの娘（ウィッチ）達が世話になったみたいだな、ありがとよ、扶桑の」

背の高い壮年の整備兵が信乃を誘導しながらいかつい笑みを浮かべる。

「その分今晚はうちの子がお世話になりますから。こちらこそよろしくお願いします」

そういつて信乃が自分の履いているストライカーをこつんと叩く。「うちの子か。任せとけ。お前さんの大事な『お嬢さん』はネジの一本までばつちりと整備してやるぜ」

がはは、と笑いながら工業国のカールスラントの整備兵が胸を張る。これならジェノヴァまで安心できそうだ。

ハンガーに誘導され、ユニットを完全に停止させると、さらに二人の整備兵が駆け寄ってきて手早くユニットにチョーカーをかませしてくれる。

ストライカーユニットを格納する補助装置も主要な基地には配備されていることが多いが、内陸の規模の小さい基地等ではまだ配備が進んでいないことが多い。というよりも、それが普通である。

ユニットを整備兵が支えている間に信乃はユニットに手をかけ、するり、と足を抜く。

裸足で地面に降りたつと、手早く荷物を入れていた靴から靴を取り出す。

任務中は余り大きな荷物は持てないが、その中で一番大きく、重要な荷物がこの靴だ。



頑丈な軍靴を忘れてしまうと、裸足でうろつくわけにもいかず、整備兵に靴の調達を頼む羽目になる。当然基本男所帯の軍の基地で女性の靴を見繕うのもそう簡単ではない。又聞きした話だと、靴を忘れたウイツチが散々待たされた挙句ピンヒールを履かされたという冗談のような話があるくらいだ。

たかが靴、されど靴。

ストライカーユニットという高価な靴を履いて戦うウイツチにとって、靴というのは案外重要な物なのだ。

整備兵たちがユニットを運んでいくのを見送っていると、徹子がこちらに近づいてきた。

「ご苦労だったな。ハギ」

「お疲れ様です、若」

そういつて互いに敬礼を交わす。形式上の物なので、徹子は歩きながら、信乃は靴を履きながらであったが。

その後、徹子が今後の予定をざっと説明する。

取りあえず、この基地の司令官に挨拶をしてからは自由行動。談話室や娯楽室は自由に使っていていいそうだ。

食事は1900から。一応客人でもあるので、徹子は士官たちと共に行われる夕食に招待されるらしいが、信乃の夕食は下士官や一般兵士が食事を取る食堂になるらしい。

「士官ともなると大変ですね、やっぱり」

靴を履き終え立ちあがった信乃が肩をすくめる。

「代わってやってもいいぜ。美味しいものを喰えるかもしれないぞ」

「嫌ですよ。偉い人と顔突き合わせて食事なんて」

「オレだって嫌だ」

「若はもう立派な偉い人じゃないですか」

「なら偉い人のいう事は聞くべきだろ、萩谷飛曹長」

「尉官をいびり倒すのが特務士官の役割です。若本中尉」

飛曹長時代に教えた事がブーメランになって帰ってきた。

「全く……。後は、飯食ったら好きにしていればいいぜ。シャワーも娯楽室も自由に使えるぞ。酒も飲める。寝る時は士官室を借りるこ

とになつてゐるからな」

「同じ部屋ですか？」

「喜べ、同じ部屋だ」

「若はお酒、飲みますよね」

「お前の分も取ってきてやる」

「あたし、廊下で寝てもいいですか？」

「オレがそうさせたみたいになるからやめろ」

軽口を叩き合っているうちにカールスラントのウィッチ達も次々にハンガーに戻つてくる。

アンジェラに運んできてもらったベレーナ用に担架が運ばれてくるが、ベレーナはそれを断り自分の足でハンガーに降り立つと、少しふらつきながらもそのまま衛生兵に付き添われ、救護室へ向かつて行つた。

途中、ちらりとこちらを見ると、背筋を整えしつかりと敬礼をしてきたので、二人とも答礼を返す。

「……大丈夫でしょうか？」

「見たところ軽傷みたいだ。お前が気にする事じゃない」

心配そうな顔を浮かべる信乃の頭をぼん、と徹子が叩く。

「待たせたな、若本」

「おまたせー、シノ!!」

背後から声が響く。二人そろつて振りかえつて敬礼をすると、アンジェラ・ヴォルフ中尉とハンネ・A・ハーン少尉、そして、ユーリエ・ブロッケ軍曹が同じく敬礼を返した。

「後一人、負傷してここにはいないが、ベレーナ・レシユケ曹長の分も合わせて感謝の意を述べさせてもらいたい、若本中尉、萩谷准尉」

信乃がハンネたちと好を交わしたように、帰還の道すがらアンジェラと意気投合でもしたのか。

好意的な笑顔を浮かべるアンジェラに、若本も口に笑みを浮かべた。

「若本は今から司令官室に。その間は、そうだな……」

そういつてアンジェラがちらり、と後ろを見る。

「はいはい。ボクが案内しますよ、隊長」

「私とユーリでシノ——萩谷准尉の案内をします。隊長もどうぞ、こゆつくり」

その言葉にアンジエラが小さく笑みを浮かべる。

「任せた」

「よろしく、ハンネ。それにユーリ」

「こちらこそ。狭い基地ですが、くつろいでください」

「うん、ゆつくり休んでね」

信乃の言葉にハンネとユーリが答える。

「ハギ、迷惑かけるなよ」

「若も先方に失礼の無いようにしてくださいね」

「……おう」

どちらが年上か分からないような、たしなめるような口調に、惘然とした表情で頷く徹子。

その様子にアンジエラだけでなく、その場にいたウィッチ達が一斉にがふふ、と笑みを浮かべる。

「それじゃあ、19時から夕食だ。それまでは一時解散。……ご苦労だったな、皆」

アンジエラの言葉に皆が敬礼を返し、一旦その場はお開きとなった。

#### 4. 歪な防衛線

アンジエラに案内されながら、基地……というよりも、やはり民家といった雰囲気の基地の内部を歩いて行く。

時折兵士とすれ違うが、殆どが整備兵や衛生兵といった雰囲気で、女性やウィッチの姿はいなかった。ハンガーの設備といい、急ごしらえな雰囲気といい、正規の基地ではなく、臨時基地の類なのだろうか。それならば人員の少なさも納得がいく。

そんな事を考えていると、唐突にアンジエラが口を開いた。

「……頼りになる部下だな」

「皮肉か？」

アンジエラの言葉に徹子が肩をすくめる。

「違うさ。忌憚なく会話が出来ているのは、互いに信頼している証左だろうか？」

「まあ、長い付き合いだからな。お蔭で最近反抗期だ」

娘の愚痴を漏らす母親のような徹子の言葉にアンジエラが苦笑を浮かべる。

規律の面で言えば、信乃の態度は好ましいとは言えないが、それを徹子が受け入れており、さらには先程の戦闘中も信乃は全面的に徹子の指示通りに動いていた。

信乃が必要以上に徹子に反抗しているわけではないのはわかるし、それが『長い付き合い』で培ってきた互いのスタンスなのだと思えば、むしろそれが二人にとって理想の距離感なのだろう。

「そんなに長いのか？」

「あいつが欧州に派遣されてきて最初に組んだのがオレだ。それ以来の付き合いだからな。3、いや、4年くらいか。そのうちの半分以上は、オレと組んでいる」

あのころのあいつは確か12歳くらいだったか。うん、あの頃はまだ可愛げがあったのになあ。と、ぼやく徹子にアンジエラが苦笑を浮かべる。

「……私の部下も長く付き合い合えば、いずれはそうなる可能性もあるの

か」

「あの3番機。アイツは怪しい。少し昔のハギに似てる」

「ベレーナか？そうは思えないが。まあ、若本がそういうのなら、今のうちから釘をさしておくか」

冗談交じりに呟くアンジェラ。

どちらかというとき四番機のユーリがそうだと思ったが。

「ハギはまだ大人しいぞ」

「・・・扶桑の『大人しい』の定義は我がカールスラントとは異なるよ  
うだな」

文化の相違だ。と徹子が肩をすくめる。

「・・・それにしても、随分と人員が少ないみたいだな。若手ばかりなのもそうだが、この基地自体も随分と質素だ」

「質素、か。謙虚な言い回しをするのだな」

くすり、とアンジェラが苦笑を浮かべる。

JG54はガリア解放後の部隊の再編制中だ。

隊員の入れ替えが連鎖的に発生したせいで、アンジェラの中隊も気が付けばハンネ以外皆持っていかれてしまった。この基地も空き家だった農家の家を臨時にガリア政府から借り入れたものだ。

「基地っていうより、家だな」

「ああ。家だ」

徹子の言葉にアンジェラも頷く。

幸いにしてネウロイのいる前線からは離れていたもので、部隊編成の合間に若手の訓練でもしてやろうと思っていた。その矢先にこれである。

「・・・ついでに、若本」

そういつて扉の前でアンジェラがたちどまる。

「隊長、アンジェラ・ヴォルフ中尉、入室する」

そう言い、アンジェラが扉を開く。

質素な部屋だった。

民家の書齋を改装したような手狭な空間に、執務用だろう、オフィスに置いてあるような年季の入った木の机が一つ置いてある。

アルミ製の安っぽい本棚に沢山のファイルが乱雑に押し込められ、壁には欧州とガリアの地図が下がっている。

それ以外には埃以外何もないような部屋の主であろう少女は、アンジェラの姿を確認すると、ぱつと顔を明るくして立ちあがった。

「ああ、お帰りなさいアンジェラ。無事で本当によかったわ」

そういつて少女は手にしたペンを放り出す。アンジェラの元に小走りで駆け寄り、その手を握りしめた。

「連絡が取れなくてとても心配していたんですよ。ありがとう、戻ってきてくれて」

「礼ならこちらの若本中尉に行ってくれ。私は……ベレーナを負傷させてしまった。私が至らぬばかりに」

「いいえ。今は生きて帰ってきてくれただけで十分です」

少女がアンジェラの言葉に首を振る。

「それよりも、隊長……」

「あ……そうでした」

アンジェラの言葉に握った手を離すと、こほん、と一つ咳払いをし、少女が体を徹子の方へと向ける。

「私はこのカールスラント空軍JG54、リヨン基地司令代理を務めています、ハンナ・フィリーネ大尉です。この度の我が部隊のウィッチ達の救援に、部隊を代表して心より感謝いたします」

背筋を直し、流れるような仕草でカールスラント式の敬礼を行う。

その真面目そうな性格が言葉の端からも伝わってくる。

背中くらいまでの茶色い髪を三つ編みにし、華美な所はないが整った身だしなみは、アンジェラとは氣質が違うが、いかにもカールスラントの軍人といった雰囲気少女である。

「扶桑皇国海軍遣欧艦隊機動部隊所属の若本徹子中尉だ。オレ達は偶然近くを通りかかっただけで大したことはしていない。感謝するなら、アンジェラ達の幸運にしてくれ」

扶桑海軍式の敬礼を返しながらもぶつきらぼうに口を開く徹子に、ハンナが一瞬目を丸くするが、直ぐにくすり、と口元に笑みを浮かべる。

「随分と謙虚ですね。ジェノヴァに寄港している扶桑の遣欧艦隊司令部に連絡をした時の対応から、もつと問題のある方かと思つていましたか」

「……原隊に連絡したのか？」

「ええ。こちらで少しお世話をしたいと申し出ましたら『有り難い。是非ともそうしてもらいたい。こちらは全く持つて急ぐ必要はないので』と」

「ほう。連絡に出たのは誰だ？」

「そこまでは把握してませんが」

「新藤か？新藤のヤツだな？くそつ。あいつめ、今頃瑞鶴の指令室で鼻歌でも歌っているに違いない」

常日頃から水と油のように反りの合わない遣欧艦隊司令の笑顔を思い浮かべ、徹子が吐き捨てるように呟く。

あいつめ、新部隊の編制とかで任務を丸投げして本土に戻ったかと思つたらすぐさまとんぼ返りしてきやがった。呆れるくらいの勤勉さだ。とつと太平洋に行けばいいのに、そんなにオレの好きにはさせたくないのか。

「萩谷准尉といい、人気者だな」

こんどははつきりと皮肉を口にしたアンジエラにジト目を送りながら、徹子が尋ねる。

「つまり、もう少しオレ達にここに残れ、つて事か？」

「ええ。扶桑海軍に要請した通りです。今回のネウロイとの会敵ですが、どうやら偶然、というわけではなさそうなので」

そういうとハンナは壁にかかっているガリアの地図の前に立つ。

「現在、ガリアのカールスラント及びベルギカ方面の守備は新設された506JFW『ノーブルウィッチーズ』が担当しています」

ノーブルウィッチーズ？徹子が問い返す。

「……正確には、まだ正式に発足していない部隊ですので、余り知られてはいませんが。でも、ガリアに駐屯する他国の部隊を牽制するガリア政府の意向もあり、既に活動を始めています」

ハンナがそう言いながらとん、と地図を叩く。

「我々カールスラントのガリア方面部隊も、拠点としていたデイジョンをノーブルウィッチーズに譲って前線から離れたここ、リヨン臨時基地に移り、新人の育成や部隊の編制をはじめとするオラーシャへの移動に向けた準備に専念する筈でした。ですが……」

そういつてデイジョンから南へ、指を現在自分達が駐屯しているリヨン臨時基地へと移す。

「問題はここからです」

言いながらつま先立ちになり、リヨンから遙か北部、ベルギカ国境付近に位置するセダンの位置を示すハンナ。

「ガリアの意向では、このセダンの基地に貴族出身のメンバーだけで部隊を作ったかのようなのですが、リベリオン合衆国の意向によって、リベリアンで構成されるメンバーが加わりました。その結果、ノーブルウィッチーズはA、Bの部隊に分かれ、それぞれがセダンとデイジョンに展開しており、さらにその両方のチームが互いの立場から連携がうまく取れず、ほぼ断絶状態にあるそうです」

そう言いながら、セダンの南方に位地するデイジョン基地を指で指し示す。

「デイジョンには正規のナイトウィッチがないそうですし、元々セダンの部隊と合わせて一つの部隊になる予定だったので、人員も不足がちだとか。ネウロイがデイジョンの防空網を避けてデイジョンを突破すれば、次に会敵するのは、リヨン。私達JG54です」

最初に指差していたリヨン臨時基地の位置へ指を戻す。

ガリア有数の都市でもあるリヨンの北部、丁度デイジョン基地から真南に位地する。

ネウロイが侵攻してくるルートはそれよりもはるか北。ベルキカ方面からだ。

つまり、地理的に言えば、ここリヨンはネウロイの襲来など想像できない場所と言っても過言ではない。

だが、現実問題ネウロイはここまで侵攻してきた。憶測を並べるよりも一つの事実の説得力は大きい。

「……成程な。だけど、そこまでよく短期間で調べたな」



徹子の言葉に、ハンナが肩をすくめる。

「今の506は張り子の虎。薄々噂にはなっていましたから」

つい今話した506の実情も、予めカールスラントの情報局によりハンナの耳にも届いていたものだ。

「じゃあ、対策を取るべきだ。ガリアの方へ連絡は？」

「とつくに。当の軍司令部は、『506はブリタニアの影響が強いの自分たちの一存では動かせない』とか言っていましたけど」

「やる気があるのか、ゴロワーズめ。ブリタニアへ連絡は？」

「勿論。『ガリア国内で、かつ事実の確認の取れない情報であるため、ブリタニア軍司令部としても独自に情報を収集して慎重に検討し対応を決定する。貴重な情報の提供に感謝する』とのことだ」

「ジョンブルらしい言い回しだ」

アンジェエラが肩をすくめる。

「知ってるぜ、これ。たらいまわしてやつだ」

徹子が肩をすくめて呟く。

「多国籍部隊の弱点ですね」

ハンナも肩をすくめた。正式な発足後はJFWは統合軍司令部の直轄組織になるので、そこに連絡を取ればいい。

だが、そうなっていない今、506JFW(仮)は、各国が主導権の取り合いで足を引っ張り合っている状況だ。

更に間の悪い事に、カールスラントは506に一人しかウィッチを送っていない。

敢えてガリアではなくベルギカに拠点を置いたのは間違った判断ではない。

だが、そのせいで506の政治的な主導権争いに関しては一歩遅れを取っている状況で、現状を動かせるだけの介入は行えないだろう。

「他に出来る事はないのか？」

「サン・トロンのカールスラント空軍基地に連絡を取りました。JG54のオラーシャ本隊に何人かウィッチを補充人員として回してもらうように伝えてくれと連絡はしましたが、連絡の伝達も、補充人員の到着もまだ当面時間がかかるので、その間リヨン近辺の守備は私達

だけで行う事になりますね」

こんなことになるならJG54の戦力をもつと残すべきだったのかもしれない。

だが、ガリア解放という一つの節目を超え、ガリア国内での戦争ムードが急速にしぼんでいるのも、また事実だ。そんな中、過剰な人員を他国に置いていけるとなれば、カールスラント本国への疑惑の目すら生じかねない。

勝利の美酒に酔ったが故の僅かな綻び。それが今まさにつけて、リヨンのウィッチ達の肩に覆い被さっているのだ。

「つまり、その補充人員とやらが来るまで、オレとハギはここに残ってればいいんだな？」

「ええ、そうしてもらえると助かります」

申し訳なさそうに頭を下げるハンナの言葉に徹子がうなずく。

「構わない。しばらく新藤の顔も見なくて済むしな。それに、楽観的に見れば、さっきの侵攻が偶然という事もありえるはずだ」

そうなればちよつとした休暇である。カールスラントの料理は地味だが、先程食べたブリタニアのフィッシュアンドチップスよりはいいものが食えるだろう。

「そうですね。それならそれに越したことはありませんが、楽観的に戦況を判断してネウロイに潰された欧州の大国が『ここ』にありますから」

とんとん、とつま先で床を叩きながらハンナが呟く。此処の土地を支配していたゴロワーズ達は、まさにそれが故に一時国を追われたのだ。

「そうだな。話は変わるが、この部隊でまともな戦力は、アンタとオレ、後はアンジェラとハギ、それに、さっき一緒にいた副隊長くらいか？」

「全員です。ベテランも新人も関係ありません。皆、可能な限り飛んでもらいます」

「実地訓練って訳か。厳しい上司だな」

「私達が緒戦を迎えた頃よりは遥かに易しい状況ですし、リバウの空

に比べればずっと安全だと思えますよ」

「……違う。ま、宜しく頼むぜ、ハンナ」

徹子がそういうと、ハンナは今度ははつきりとした笑みを浮かべた。

「はい。JG54によろこそ。若本中尉」

## 5. グリユンヘルツ

「以上で案内終わりですっ!!質問はありますか?シノ」

談話室の前でユーリが快活な笑顔を浮かべる。扶桑の流儀に従えば、『旅行』にあたるのだろう。配属された船や基地を先任から案内され、一度で覚えなければ上官による海軍精神注入棒のケツバット。

その話を聞いて以来、信乃はこういった行事に対しては殊更慎重に構えていたので、ある意味拍子抜けなところがあつた。

「大丈夫です。ユーリ。なんとというか、その、コンパクトな基地なので……」

言葉を選びながら答える信乃にハンネが苦笑を浮かべる。身もふたもなく言えばただの大きな民家だ。

「夕食までには時間もありますし、少し休憩しましょう。シノ、コーヒーとココア、どちらが好みですか?」

ハンネの提案に信乃の表情が明るくなる。コーヒーに限らず嗜好品の類は戦場では中々口にすることが出来無い。

「ありがとう、ハンネ。じゃあ、ココアの方で……」  
「ボクもココアがいいです!!」

ハンネが苦笑を浮かべて談話室のドアを開ける。同時に何人かのウィッチと、見た事のあるウィッチの視線が一斉にこちらに向いた。

「ユーリ!!生きてたのね!!」

「全く!!心配かけやがって!!このチビ!!」

「わわ、先輩達!?!」

数人のウィッチ達がユーリの元に駆け寄る。もみくちやにされたユーリは目を白黒させながらもそのままウィッチ達の方へと連行されていった。

「……ユーリはうちのマスコットみたいなものですから」

「成程です」

ハンネの言葉に信乃が頷く。庇護欲がわくというか、つつい構いたくなるような雰囲気がある。苦笑を浮かべていると、一人の少女が二人の元へと歩いてきた。

「あの、少尉……」

「ベレーナ、傷はもういいんですか？」

信乃も見覚えのある顔がハンネの言葉に薄く笑みを浮かべる。

「見ての通りです……すみません、先程はご迷惑をおかけしました」

三角巾で腕をつつた状態のベレーナがぺこり、と頭を下げる。

「あ、でも、検査も受けましたがここ以外は大丈夫です」

そういつて固定された手を持ち上げて見せる。癖っ毛の金髪を揺らし、ベレーナが信乃にも頭を下げる。

「先程はありがとうございます。改めてお礼を言わせていただきます。ええと……」

「萩谷信乃准尉です。ええと、ベレーナさん？」

「ベレーナ・レシユケ曹長です。萩谷准尉、先程はありがとうございます。しました」

折り目正しい口調に信乃が敬礼を返す。咄嗟に敬礼をしようとして、その手が固定されていることに気が付いたベレーナが眉をハの字にする。

「……重ね重ねすみません」

苦笑を浮かべる信乃に本心から申し訳なさそうにベレーナが頭を下げる。ユーリとは対照的に真面目で大人しい性格のようだ。

「ベレーナ。待っていてくれたことは嬉しいけど、無理をしているのなら関心はしません。休む時は休むこともウィッチとして大切な事ですよ」

「す、すみません……」

ハンネの言葉にしゅんとなつて目を伏せるベレーナ。

「……でも、自分の口できちんとお礼を言いたくて……萩谷准尉にも、ユーリにも……それに、少尉にも」

どうやら気は弱いが頑固なところもあるようだ。

呆れた様のため息をつき、ベレーナに座るよう促す。

「全く。ベレーナはコーヒーとココア、どっちにするの？」「え？」

「きちんと休憩を取りなさいという事よ。暖かいものを飲んで心を休

めることもウイッチの仕事です」

「あ、は、はい……じゃあ、少尉と同じので」

「コーヒーよ？ コアが良いんじゃないですか？」

「い、いいんです」

背伸びをしたい年頃なのか、それとも。

「その……少尉と同じのがいいです……」

頬を赤らめながらベレーナが呟く。成程。そう言う事か。

「……そう、じゃあ、少し待ってなさい」

「あ。飲み物なら私が……」

「休むのが仕事、そう言いましたよね。座ってなさい」

きつぱりと言われ、ベレーナははい、としぶしぶ頷く。

ハンネが飲み物を取り取りに歩いて行くと、向かい合わせに座った信乃とベレーナだけが取り残された形になる。

上目遣いにこちらを見ているが何を言っているかわからない、といった様子のベレーナにくすり、と笑いかけ、信乃が先に口を開く。

「さつきは災難でしたね。傷はどうなんですか？」

「はい、おかげさまで……肩の脱臼以外はかすり傷程度です」

「レシユケ曹長は実戦経験は？」

「殆どありません……。その時も中隊長や少尉に守ってもらってばかりで、こんな風に本格的な戦闘は初めてでした……」

話をしながらも、ちらちらと信乃の背後……ハンネがコーヒーとコアを入れている方へと目を向けているベレーナ。くすり、と信乃がほほ笑む。

「……レシユケ曹長、ハンネの事が好きなんですネ」

「ふえ!? い、いきなりなに言ってるんですか!？」

途端に顔を真っ赤にするベレーナ。信乃はその様子に首を傾げる。

「違うんですか？ あたしも昔はよく上官と同じものを注文しようとしてましたから。尊敬してる人と同じにしたいって気持ち、何かわかるな、って思ってたんですけど」

「そ、そういう意味ですか……」

「他にどんな意味があるんです？」

「そ、それはその……知りません!!」

ぷい、と顔をそむけるベレーナ。

「そ、それより、今少尉の事を名前で……」

「あ、ベレーナ!!」

快活な声がベレーナの声をかき消す。

ベレーナがびくつと振り返ると、そこには両手にビスケットやクラッカーを抱えたユーリがこちらに向かって小走りで寄ってくるどころだった。

「ユーリ、どうしたのそれ……?」

「先輩達くれたんだ、生き残った記念のプレゼントだって」

そういうとベレーナの横に腰を下ろすユーリ。

「ねえ、ベレーナ。手、大丈夫?」

心配そうに眉を顰めるユーリにベレーナが頷く。

「うん。大した怪我じゃなかったし……って、私の事は曹長って呼べっていつも……」

「そっか、それじゃ良かった。心配したんだよ、ベレーナ」

「えっ……そ、そう……ありがとう、ユーリ」

屈託のないユーリの笑顔にベレーナが言葉を飲み込む。

「はい、ベレーナ。シノも。おすそ分けだよ」

そういつてユーリが机の上に乗せたビスケットの包みを一つづつ二人の前に差し出す。

「ユーリが貰って来たんでしょ? いいの?」

信乃が尋ねる。

「うん。シノのお蔭で助かったんだから遠慮しないで!!」

「ちよ、ちよつとちよつと、ユーリ」

慌てた様にベレーナが口を挟む。

「もう、ちゃんとベレーナにもあげるから、それとももう一つ欲しいの?」

「あ、ありがと……じゃなくて、そうじゃなくてっ!!名前名前!!」

ベレーナが慌てた顔でユーリと信乃を交互に見つめる。

「萩谷さんは准尉さんなんですよ、呼び捨てなんてそんな……」

「えー?だって、シノは呼び捨てにしているって」

「うん、何ならレシユケ曹長もシノって呼んでくれてもいいですよ」

う、その言葉にベレーナが二人の顔を交互に見つめる。

「う、でも……ハンネ少尉に聞かないと……」

「ユーリ、何を騒いでいるの?」

背後から人数分の飲み物を乗せたトレーを手に戻ってきたハンネが声を掛ける。

「あ、少尉!!少尉にもクッキーあげる。今日のお礼です!!」

「あら、ありがとう、ユーリ。シノ、隣良いかしら」

「聞いてください少尉、ユーリってばまた上官を呼び捨てに……少尉?」

聞いてはいけないものを聞いたような顔でベレーナがハンネを見つめる。

「どうぞ、ハンネ」

「……准尉?今何て?」

ぽかん、と、一人取り残されたような顔をしているベレーナ。

「はい、シノとユーリはココアね。砂糖も置いておくわ」

「ありがとうございます」

「わーい、ココア大好きー!!」

「……」

三人の顔を見比べるベレーナ。

「ベレーナはコーヒーで良かったのよね。ミルクは必要だったかしら?私はいらないけど」

「こ、このままでいいです……じゃなくて……」

カップに口を付け、思わず『苦!!』と叫ぶベレーナ。

「……砂糖、いる??」

どばどばと自分のカップに砂糖を投入していたユーリがその言葉にそっと砂糖の入ったポットを差し出す。

「もらいます……もらうけど……」

「だからレシユケ曹長も名前で呼べばいいのに」

「何で?私のいない間に何があったんですか!?!」



置いてけぼりになった子供のようなベレーナの言葉に三人が首を傾げた。

「……帰りの空でそんな事が……」

ユーリに事の次第を説明されてベレーナがため息をつく。

「今度シノにビームをしゅばってやる奴教えてもらうんだ!!」

そういつてユーリがシールドを張る仕草を見せる。

「私も怪我さえしなければ……はあ……」

恨めしそうに包帯で固定された手を見つめるベレーナ。

「そのハートのワツペン、可愛いですね」

「これの事かしら?」

信乃はココアを飲みながら、隣のハンネの腕に刺繍された緑色のハートマークへ目を向ける。コーヒーカップを置いて、信乃が見やすいように軍服の袖を引つ張ってハンネが口を開く。

「これはJG54の部隊章、『グリウンヘルツ』よ」

「え? 部隊章なんですか?」

いろいろな部隊章を信乃も見ただことがあるが、どれも皆戦いをイメージさせるような、勇ましい意匠が多い。シンプルな緑のハートマークは、ウィツチ隊の部隊章としては珍しく思えた。

「これは私たちの誇り。この部隊章グリウンヘルツに憧れてJG54への配属を希望する子も少なくないわ」

「ベレーナもそうなの?」

「う、うん。確かに、憧れではありましたが……」

ウィツチといつても年頃の少女である。精鋭部隊の証であるグリウンヘルツに憧れるカールスラントのウィツチは少なくない。訓練学校で優秀な成績を収めても、JG54への配属は決して簡単な道のりではない。この部隊章を身に着けられるという事は選ばれた者の証でもあるのだ。

「でも、グリウンヘルツを身に着けることが目標じゃなくて。それに見合うだけの実力を身につけなければ、意味が無いです。だから、今日みたいな戦い方じゃ……」

そつとベレーナが軍服に刺繍されたグリウンヘルツを撫でる。

成程、と信乃が内心頷く。だからこそ、この子はJG54に配属されたのだろうと。

「そうだ!!シノもJG54に来ればいいんだ。そうすればシノもこれ、つけられるよ?」

良い事を思いついたとばかりに、ユーリが身を乗り出す。

「それは……また斬新な発想だね。ユーリ」

信乃が苦笑を浮かべる。

「なんならボクの奴をあげてもいいから」

こいつは何でここにいるんだろうか。可愛いから?

「ね、ベレーナ。ベレーナもシノがいた方がいいよね?」

はあ、とあくまでお気楽なユーリにベレーナが頭を押さえる。

「ユーリ。シノさ……萩谷准尉は扶桑のウィッチなの、解る?」

「うん。扶桑のウィッチ、凄いいね。サムライ!!ニンジャ!!リバウ!!シノ!!」

「そうね、解るわよね。で、私達……JG54はカールスラントの部隊よ?」

「あ。そっか」

ユーリが眉を顰める。

「解った?」

「うん、だったらシノがカールスラントの人になればいいんだよ!!」

「解ってない!!何でこれで解決みたくない笑顔してるの!?!馬鹿なの!?!」

ユーリの言葉にベレーナが怒鳴る。

「そんなことしたら国際問題よ!!解る?他所の国のエースを国籍ごと引き抜くとか、怒られるとかそういう次元じゃないわ!!」

「えー?」

「えー、じゃないのっ!!」

何となく三人の性格がわかってきた所で、信乃が残ったココアを飲み干す。

ふと、時計に目を向けると、時間は7時近くになっていた。

「そろそろ夕食ですね。食堂に移動しましょう」

ハンネもその事に気が付いたのか、冷めたコーヒーを飲み干して皆に口を開く。ベレーナも残ったコーヒーを飲み、ユーリは机の上のお菓子を慌ててしまいはじめた。

その時。

「傾注」

慇懃な声が部屋に響く。信乃たちも、そして、思い思いに談笑していた他のウィッチ達も、その視線の先、談話室の入り口に立っていたウィッチを見て、慌ててその場で立ちあがる。

アンジェラ・ヴォルフ中尉と、その隣に立つ徹子。そして、最後に入ってきたのは。

「皆さん、揃ってますか？夕食前で申し訳ないけど、伝えなくてはいけないことがあります」

信乃の見たことが無い少女がそういつて皆に声を掛ける。ハンネたちカールスラントのウィッチが皆その言葉に緊張したように背筋を伸ばす。

「点呼」

「第三中隊、揃っています」

ハンネが素早く返事を返す。

ハンナはその言葉に頷き、ちらり、と目で合図を送ると、アンジェラが手早く手にした地図を談話室の壁にかけ始める。

「誰なんですか？」

「ハンナ・フィリーネ大尉、この基地の司令代理です」

こそり、と尋ねる信乃と、矢張り小声で答えるベレーナ。

周りの様子を見る。一応この基地は1中隊が駐屯しているという事らしいが、数が少ない。

隊長のハンナは別として、アンジェラ、ハンネ、ベレーナ、ユーリ。後は3、4人と言ったところだ。カールスラントの中隊は普通3つのシュヴァーム四人小隊で編成されているはずだ。

「……部隊の再編中で、中隊の人員がそろっていないんです」

ベレーナの言葉に信乃が頷く。

ふと、徹子を見ると、信乃の方へ目を向けており、信乃の視線が向

いたのに気が付くと、小さく手招きをする。遊びではなく真面目な仕事中の徹子に、信乃は直ぐに従い小走りで徹子の脇に立つ。

「ちらり、と横目で隣の徹子を見るが、前を向いたまま黙っているの  
で、信乃もそれに習う。」

ハンナ、ウォルフ、徹子、そして信乃が横一列に並び、ハンネ達他のウィッチと向き直るような形になる。

最初に口を開いたのは、地図をかけ終えたアンジエラだった。

「今から話すのは先程第3中隊がネウロイと会敵した件についてだ」

そう言つて手にした指揮棒を伸ばし、事の次第が説明されていく。

それは先程ハンナが隊長室で話した事と概ね同じ内容だが、506 JFWの部隊の問題点は、部隊全体に他の部隊の悪評をいたずらに流さないという配慮で、発足したばかりで連携が取れていない、と軽く流された。

「説明は以上だ」

指揮棒をしまいながら、アンジエラがハンナに目配せをする。こくり、と頷き、ハンナが前に踏み出す。

「中尉の説明通りです。本時刻をもつて我々リヨン基地に駐屯する私達JG54第1飛行隊第3中隊は506JFWとは別に、ガリア南部へ侵攻するネウロイの迎撃を行う事とします。勿論、訓練中の尉官以下のウィッチ達もこれに加わるようになります。これから先は訓練ではありません、実戦です。総員、一層気を引き締めて任務にあたるように」

つい先般も、オラーシャ方面に新たなネウロイの巣が現れた。欧州にいる以上、いつどこが最前線になるかは分からないというのが常識である。

若手ウィッチ達は自分達も飛ぶことになるかわかり、皆一様に緊張した面持ちを浮かべているが、この欧州の状況を鑑みれば、決しておどろくほどの事ではない。

むしろ、近くにネウロイの巣が出現したわけでもない分、まだマシな報告だ。

だが、次の言葉に信乃は違った意味で驚くことになる。

「更に、506 JFWの体制が整うまで、そして、オラーシャからの増援が届くまでの間、扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属の若本徹子中尉と、萩谷信乃准尉に部隊に参加してもらおう事になります」

ハンナの言葉に信乃は内心『え?』と呟いた。隣に立つ徹子に顔を向けたい衝動を抑えながら、驚いたようにこちらを見ているハンネ達を見返す。特にユーリは目と口をぽかんと開いて自分を見ている。

いや、そんな顔されても。あたしもびっくりなただけど。

「今後の部隊編成は夕食後、勤務表を見る様に。以上、解散です」

そういうとハンナ達は地図を片付けて部屋を出ていく。途中ぽつりと徹子が小声で『詳しくは後だ』と呟き、信乃も小さく首肯する。

談話室の扉が閉まる。

と、同時に、それまでじっとしていたユーリが鉄砲玉のように信乃の元へ飛び出してきた。

「何で黙ってたんだよおっ!!」

「知らないよっ!!あたしも今聞いたんだから!!」

ユーリを抱き留めながら信乃が叫び返す。というか、年齢的にはかなり離れているのだが、体格的にはちよつと信乃が大きいくらいだ。勢いに任せたタツクルは体に堪える。

「でも。本当なんですか、今の話……?」

驚いた、という顔をしているハンネの言葉に信乃も眉を顰める。

「ネウロイの件は良く解りませんが、あたしの件については……まあ、そうなんでしょうね」

似たようなことは今まで無くはないですし……と呟く。

「随分と簡単に決まるんですね。大事な事のように思えるんですが……」

ベレーナの言葉に信乃が肩をすくめる。

「遣欧艦隊の機動部隊はこういう任務が多いですから」

欧州各地のウィッチ隊に欠員が出た場合や戦局が激しさを増し、ウィッチの増員が必要になった場合などに扶桑の部隊へ応援要請が入ると、真つ先に派遣されるのが遣欧艦隊の機動部隊である。

徹子や信乃、それに、リバウの魔王として名を馳せる西沢義子など

もそういった各地を転戦するウィッチの一人だ。急な編成には慣れている。

「じゃあ、萩谷准尉も一緒に戦ってくれるんですね」

ベレーナの言葉に信乃が頷く。

「あ、じゃあ、これつけてもいいんじゃないの？」

そういつてユーリが自分の腕に刺繍された緑のハートグリーンハートを指さす。

「……後で若に聞いてみます」

魅力的な提案に、だが。わずかに理性が上回る。

いろんな部隊と共に行動してきたけど、部隊章まで一緒にしたこと  
は無い。籍を移すわけではないので無理だとは思うが、記念に一つく  
らいももらえるかもしれない。

「……それよりも、同じ部隊になったって事は、今までみたいに遠慮は  
無用という事ですよね」

背筋を伸ばし真顔になった信乃が口を開く。

先程とあまり変わらない、だが、どこか重みを纏ったようなその言  
葉、声色に思わずユーリ達がびくり、と身を竦ませる。

信乃もまた、欧州への派遣部隊に選ばれ、何年も転戦を繰り返して  
いる歴戦のウィッチである。

つい最近部隊に配属されたひよつ子のような自分達からすれば、実  
績も実力も雲の上の様な存在だという事は、先程の戦闘中、肌で感じ  
取れた。

客人でなく同じ部隊の隊員になったという事は、今までと接し方が  
変わるのかもしれない。

それでなくても特務士官は下士官にとっても、新人少尉にとっても  
恐ろしい存在だ。下士官はしごかれ、新人少尉は経験の少なさをいび  
られたりと、そういった話は枚挙に厭わない。

「シノ……じゃなくて萩谷准尉……ええと……」

不安そうにユーリが信乃を見返す。

「お、お手柔らかにお願いします……」

ベレーナも震える声で呟く。

「取りあえず!!」

信乃が声を張り上げる。びくり、と身を竦める二人に、信乃が口を開いた。

「まずは食事にしましょう。同じ部隊なら、あたしから言い出しても構いませんよね」

次の瞬間、信乃のお腹がぐう、と音を立てた。

## 6. 模擬戦

明朝、0600

黎明を待ち、ハンナ・フィリーネ大尉、若本徹子中尉、アンジェラ・ヴォルフ中尉、萩谷信乃准尉の四名は編隊を組み、朝日の元空へと飛び立った。

まずは部隊を組むうえで中核となるであろう、扶桑から来たウィッチ達の実力と連携の確認を重視するため、哨戒も兼ねてこの四人で空に上がる事となったのだ。

「ふぁ……」

「萩谷二番、真面目にやれ」

「あたしは真面目です。でも、欠伸は生理現象です」

いきなりナイトシフトに組み込まれ、ほぼ徹夜状態だった信乃が徹子の言葉に答える。

現状、リヨン基地では夜間哨戒は専らリーダーを用いた哨戒班が行い、ネウロイを発見次第ナイトウィッチがいつでもスクランブルを取れる体制を敷くことにしていた。

昨夜のシフトは信乃ともう一人、訓練を終えて着任したばかりのナイトウィッチの2名。

というより、この二人しか夜間飛行の経験が無い、というのが正しい。

アルマ・ブレヴィスと名乗ったナイトウィッチは元々一般的な航空ウィッチとしてJG54に加入したが、その後ナイトウィッチの適性があることがわかり、かの高名なレント中佐の下で夜間飛行の訓練を詰み、つい先日部隊に戻ってきたらしい。

ナイトウィッチはおとなしいという印象を覆す明るくフレンドリーな挨拶と共に搭乗員室に飛び込んできたアルマに信乃が尋ねた時の事だ。

「ブレヴィス中尉、失礼ですが実戦の経験は？」

「昼間はそれなりに飛んできたけど、ナイトウィッチとしての実戦は今回が初めてだよ。いやあ、今からドキドキするね」



心配に思った信乃が問うと、アルマはこれ以上ないくらいの良い笑顔でこれ以上なく不安な返事をかえしてくるからたまらない。ドキドキするのはこっちの方だ。

その後信乃はカードゲームでの実力は既にエース級だったアルマとの夜間戦闘で夜間当直者に与えられる加食のブルーベリーの砂糖漬けとミルクを巻き上げられる事になり、交代交代に仮眠を取りながらスクランブルがない事をうとうとしながら一晩中祈る羽目になった。

どうやら扶桑の神様は多少ガリアにも融通が利くらしく、昨晚ネウロイはこの近辺には現れなかったのがせめてもの救いだ。

「萩谷准尉、夜間飛行の経験はどのくらいあるんですか？」

「新月の夜でも地面と空を間違わない程度には場数を踏みました」

「そうですか……ナイトウィッチの件は早急に対処しないといけませんね」

ハンナがため息をつく。

『「姫様』をしばらく借りれないのか？カールスラント空軍を通せば……』

「そうしたいところだけど、JFWの戦闘隊長ともなれば、そう簡単にはいかないわね」

アンジェラの言葉にハンナが肩をすくめる。直接本人に言えば義に厚いヴィトゲンシュタインの事なので飛んでくる可能性もあるが、一部隊の隊長代理が国家間同士のもめごとの種を作る訳にはいかない。ついでにあの姫様はハンナでは手に余る。気が付けば部隊ごと姫様の傘下に加え兼ねられない。

「アーヘンかサン・トロロンに駐留する部隊を頼れないのか？あそこにはナイトウィッチもいるはずだが」

「そう思ってミーナ中佐に連絡をしたのですが、余り芳しくありません。向うはここ以上の激戦地ですし」

「扶桑の遣欧艦隊にはいないのか？」

アンジェラの問いに徹子が肩をすくめる。

「ハギと同レベルのヤツがせいぜいだな。陸さんには優秀なのが何人

かいるはずだが、頼み込んでも聞いてくれるような連中じゃないぜ」「いざとなったら速成レベルでもいいのでお願いしたいですね。萩谷准尉が倒れる前に……」

「若が土下座すればいいんじゃないですかね」

「オレにそんな事をしろと?」

「可愛い部下の為に是非お願いします」

「本音は」

「陸さんに土下座してる若とか、愉快にもほどがありますね」

「……良い部下を持って幸せだぜ」

若本が肩をすくめる。

「……周囲の状況はどうですか?」

ハンナが口を開く。

「三時方向周辺は問題ない」

「右舷、怪しい影は見えないな」

「後ろも大丈夫です」

三者三様の返事が返ってくる。それなら大丈夫、と、先頭を飛んでいたハンナが速度を落とす。

「じゃあ、そろそろ始めましょうか。打ち合わせ通り、私と萩谷准尉、ヴォルフ中尉と若本中尉でペアを組みます」

模擬戦のルールはよくあるものだ。一定時間、互いに距離を取るため反対方向へと飛び、一定時間が過ぎた瞬間から戦闘開始となる。

「萩谷准尉はドッグファイトが得意なのでしたね」

「はい」

「無理に食いつかず、私に続いて飛ぶことは出来ますか?」

「ヒットアンドアウェイですか?可能です」

ハンナの問いに信乃が答える。

「アンジェラが長機につくのか?」

一方で徹子もアンジェラに尋ねていた。

「任務はJG54が中心になるからな。我々のやり方も覚えてもらいたい。だが、状況に応じて長機を交代しても構わん」

「了解だ。他人のケツにつくのは久々だからな、うまくいなくても」

文句言うなよ」

「初めから期待はしないさ……いくぞ!!」

その言葉に4人の編隊が2つづのロッテに分かれ、互いに真逆の方向に進路を向けていく。

「萩谷准尉、後10秒で反転します。後は私についてきてください」

「了解。フリーネ大尉、戦闘中はあたしのことはハギでいいです」

「解りました。ハギさん、後5秒よ」

カウントが開始される。打ち合わせ通り、30秒真逆の方向に進路を向けた後、模擬戦が開始される。

「3, 2, 1……行きます!!」

ハンナの声と共にメツサーシャルフが鋭く反転。一気に高度を上げていく。単純に高度を取るのではなく、相手をかく乱する為、敢えて不規則な動きを交える。並の技量のウィッチなら置いて行かれそうなその動きに信乃もいち早く反応し、すぐ脇にぴたりとつけている。

良い動きですね。

信乃の様子を見ながらハンナが内心呟く。

機材で言えば扶桑の零戦は旋回能力以外の面ではBf109に劣るとされるが、その旋回性能の扱い次第で多少のアドバンテージは覆せる。信乃もきちんとその辺りの特性を理解し、小回りを生かしてメツサーシャルフの動きについてきている。十分以上、期待通りの動きだ。

「ハギさん、このままついてきてください」

「了解です」

旋回して徹子達の方向へと向かったハンナ達だが、どうやら徹子達はそのまま上昇して優位高度を取る事を選んだらしい。こちらに背を向けて上昇を続けるアンジェラと徹子の背中がハンナの目に映る。「フリーネ大尉、若は零戦のセッティングを上昇性能に振っていません。あたしの機材だとこれ以上の高度では取り回しに不利が生じると具申します」

零戦の格闘性能を引き出すために中高度での旋回性能に重きを置

いたチューニングを施している信乃に対し、高高度からの急降下攻撃に重きを置いている徹子のセッティングではこれ以上の上昇はこちらが不利になる。

「わかりました。ハギさん、以後戦闘中はハンナと呼んでください」

「了解、ハンナ」

「……ハギさん、この模擬戦は勝つことが目的じゃありません。私のいう事を聞いてくれますか?」

「了解……え?」

その言葉に信乃が一瞬首を傾げた。

一方、優位高度を取ることに成功したアンジエラ達だが、すぐさまズームアンドダイブに移行することは無かった。

「やはり乗ってこないな。ワカの言った通りだ」

途中まで背後に食らいついて上昇してきたハンナと信乃が其の場で旋回し、こちらに背を向ける形となったのを見て、アンジエラが呟く。

「自分を餌にするのはあいつの十八番だからな」

零戦の得意高度に引き付けて、味方の援護を待つ。中高度での粘り強さで言えば信乃は扶桑でも指折りともいえる実力を持つドッグファイターだ。

長年ロツテを組んできた徹子なら信乃の動きは手に取るようになる。

零戦の優位高度では信乃を抜くことは困難などころか、むしろ向うのペースに引きずり込まれ、手痛い反撃を食らう事になる。

「どうする、ワカ」

「優位高度はこっちが取ってるのは間違いない。ハンナを引き付けることは出来るか?」

「空戦技術はハンナが上だ。長くはもたないぞ」

「ハギを落とすまで持たせてくれればいい。二対一なら……何?」

次の瞬間、徹子が眉を顰める。

「何を考えてるんだ、ハンナ」

アンジエラも同様だった。

こちらに背を向けたと思ったハンナと信乃が、事もあるうに目の前で再び上昇を試みていたからだ。

「これは……毘か?」

無謀ともとれるハンナ達の行動に一瞬アンジェラの動きに迷いが生じる。

「アンジェラ、放っておくと向うが優位高度を取る!!」

その言葉にアンジェラと徹子が同時に動く。

「追うぞ、ワカ!!」

即座にアンジェラも判断する。例え策があつたとしても、むぎむぎ優位高度を取らせるわけにはいかない。

そして、その判断は結果として正しかった。

「ハンナ、後ろにつかれます!!」

「ついてきて、ハギさん」

優位高度のアドバンテージ以上に向うにあるのは速度の利。

降下を生かして重力の恩恵を受けたアンジェラと徹子のユニットの速度は重力に抗うハンナと信乃のそれとは対照的だ。

もう少し向うの判断が遅ければ遅い程、こちらの不利は覆せるのだが相手は歴戦のエース。隙を見逃すこともなく有利な状況と見れば迷うことなく食いついてくる。

「どうしたハンナ、お前らしくもない」

アンジェラが眩き、射線をハンナと信乃に向ける。弾き金が引かれる直前、ハンナが身を翻し射線から身を逸らし、寸分たがわぬ動きで信乃がそれに従う。

「何か企んでいるのか……?」

二人の動きを見越した徹子はその先に模擬弾を撃ち込むがハンナはさらにそれを見越したようにさらに減速、寸でで攻撃を避ける。

「危なっ……ふふ、まだついてこれていますね、ハギさん」

徐々に追い詰められている状況ながら、ハンナは満足そうに笑みを浮かべる。

「ハンナ、これでいいんですか?」

「ええ、これでいいですよハギさん」

信乃の言葉にハンナが答える。

「なので、落とされるまで、もう少し頑張ってください」

「こちらアンジェラ。ハンナの撃墜を確認」

「どういう事だ？」

アンジェラと徹子が拍子抜けしたように口を開く。

「やられましたね、萩谷准尉」

「うう、べとべとします……」

頭に付着したペイント弾の塗料を拭いながら満足そうに微笑むハンナと、服に付着した塗料を拭っている信乃。

結果として、特にハンナに作戦があった訳ではなかった。徐々に追い込まれ、まずは信乃が、そしてハンナがペイント弾の餌食となり、そして今に至る。

「ハンナ、どういうことだ？」

アンジェラが尋ねる。もし実戦なら、自殺行為ともとれる行動に、アンジェラが戸惑うのも無理はない。

「アンジェラ、流石ですね。即席で組んだロットでもきちんと任務をこなせていました。無理に残ってもらって本当に良かったです」

「ハギ、真面目にやれ」

「あたしはいつでも真面目です」

徹子の言葉に無然と答える信乃。終始一貫して不利な状況で逃げ回っていただけの模擬戦に何の意味があるのか。

信乃ですら、今の模擬戦の意味を今一つ理解できたわけではない。皆さん。今の戦い方に疑問を覚えたとは思いますが、一応説明させていただきます」

ハンナが口を開く。

「扶桑のお二人と共同作戦を実施するにあたって、まず確認したかったのが、若本中尉の協調性と、萩谷准尉の柔軟性です。お二人にとっては恐らく想定外の動きだったとおもいますが、若本中尉も突出せずアンジェラと連携を組んでくれました。萩谷准尉も私の指示に従って普段とは違う挙動でもきちんとしてきてくれました。私は、

お二人にそれが出来るという事を確認しておきたかったんです」

「何だ？オレ達は試されてたつて訳か」

「その事は謝罪します。ですが、結果は予想以上に素晴らしい物でした」

徹子の呆れたような言葉にハンナは口元に小さな笑みを浮かべる。

「では、次は私とヴォルフ中尉、若本中尉と萩谷准尉でもう一戦。今度は『いつものお二人の実力』を見せていただけませんか？」

ハンナの意味ありげな物言いに、察したように徹子が笑みを浮かべる。

「……だとよ、ハギ。いつも通りだそうだ」

「了解です。いつも通りですね」

徹子の言葉に信乃が頷く。

「それでは、ルールは先程と同じです。行きますよ」

模擬銃を構え直し、編隊をくみなおす。疲れを見せる素振りもなく、4人のウィッチが再度宙に舞う。

「アンジエラ、行きますよ」

「了解」

先程とは異なり、一気に高度を上げる。メッサーシャルフの高い上昇性能を生かして素早く高度を取り、そのまま空中で旋回。優位高度から一気に急降下しての一撃を仕掛ける、優位高度からの一撃離脱。

ルフトヴァッフエの十八番ともいえる戦術だ。

「ハンナ。若本中尉のストライカーは急上昇でも性能が落ちないようチューンされている。予想以上に上に居る可能性があるぞ」

「ええ、萩谷准尉もそう言っていましたか……」

下方を中心に目を凝らしながら、ハンナが頷く。

「アンジエラ、若本中尉の限界高度は？」

「それは普通の扶桑のユニットと変わらないはずだ」

零式は他国のユニットに比べ防御力や高高度での取り回しに難がある反面、中高度以下での旋回性能をはじめとする運動性能はその追随を許さない。

「なら、下に引っ張り込まれないようにしないと……っ!?!」

ぞくり、と背が粟立つ。長年のエースとしての勘が警告する。  
有り得ない。だが、確かに『狙われている』と。

「ハンナ、上だ!!」

「まさか!？」

言いながらも回避行動。ちらり、と太陽の方へと目を向ける。黒い影が二つ。猛然とこちらに向けて急降下してくる。

「くっ!？」

咄嗟にシールドを展開。ほぼ同時に着弾。

「ちっ。ハンナ、すまん。やられた」

舌打ちが聞こえる。すぐ脇を零戦が通過していく。

「まさか零式に優位高度を取られるとは……っ!？」

「アンジェエラ?」

「被弾した。気を付けろ、ハンナ」

僚機に目を向ける間もなく、第二射。次は下からだ。だが。

「食いつきすぎですっ!!」

急降下の勢いをそぐその一撃は余計だ。シールドを張りながらその場で体をくるりと捻り、視界にとらえた信乃に向け、ハンナがズームアンドダイブを仕掛ける。

「っ!!」

模擬銃を構えていた信乃がハンナの攻撃を察知して旋回行動に移る。だが、一度速度を殺した信乃のストライカーは速度に乗ったメツサーシャルフにたちまち背後を捉えられる。

「遅い!!」

ハンナが引き金を引く。放たれたペイント弾が信乃の進路の先に寸分たがわず吸い込まれる。しかし。

「……一機足りない!？」

『その事』に気が付いたハンナが即座に急上昇。降下の勢いをそのまま生かし、再び高度を取る。次の瞬間。すぐ脇をペイント弾がすり抜ける。徹子の放った弾だ。

「流星に冷静だな」

再度急降下を仕掛けてきた徹子が上昇しながら呟く。



「ハギ、やられたか？」

「何とか防ぎました」

脚から張ったシールドでハンナの攻撃を防いだ信乃が返事を返す。

「次はもつと食いつかせろ」

「了解」

「させません！」

一度相手を捉えれば、ハンナのメッサーシャルフの高高度性能の方が有利だ。中高度で待ち受ける信乃への過度な追撃は避け、メッサーシャルフの上昇性能を生かし再度優位高度を取る。

今度は二機、徹子と信乃を眼下にしたハンナが、果敢にも上昇しようとする徹子の零戦に食らい付き、その斜め後ろに回り込んで向けてペイント弾を放つ。

だが、上昇性能を強化した徹子の零戦はそれを寸で交わし、旋回。ぴたりとハンナの背に機体を付ける。

ハンナも即座に旋回し上昇しようとするが、それを阻止するように信乃のペイント弾が下方からハンナを狙う。上昇を諦め速度を稼ぐため降下しながらの旋回行動に移ろうとするハンナの背後に今度は信乃が食らいつく。

「っ!!」

まずい、とハンナの本能が警告を放つ。降下速度を利用した速度の優位性がこのままでは薄れていく。逆に零式の旋回性能はこちらよりも上だ。このまま同高度で二機を相手にする訳にはいかない。

一か八か。再度上昇を試みるハンナ。しかし、並のウィッチならともかく、相手が悪かった。

「これで詰みだ。大尉」

その動きを読み切り、正面上空から急降下してくる徹子。

前と後ろ。上と下。同時に放たれたペイント弾がハンナに襲い掛かった。

「まさか私が二連敗するなんて……ノヴィとやって以来の屈辱よ……」

顔にお尻に背中にお腹。これでもかというばかりにペイント弾をぶつけられて全身を黄色く染めたハンナが呻くように呟く。

「あの時アンジェラがあっさり落とされなければ……」

「すまん」

わざとらしく恨めしい声を上げるハンナに生真面目なアンジェラが肩を落とす。

「大尉、そこまで本気じゃなかっただろ。部下いびりは感心しないな」

徹子が肩をすくめる。

「私は手を抜いたりはしません。あの時ハギさんを落とせていれば状況は変わったんですけど……」

「ですね。胆が冷えました」

急降下から上昇攻撃を仕掛けた序盤戦の事だろう。ハンナの分析に信乃も頷く。

優位高度を取られてたとは言え、あっさり背後に付かれる経験は信乃も多くない。

「……あそこで隙を見せたのは作戦ですか？」

「いえ、割と本気で落とすつもりでした」

急降下後の下からの打ち上げ攻撃は信乃の得意技だ。隙を見せたつもりはないどころか、絶対の自信を持って放った一撃のつもりだった。

それをあっさり防がれたのだ。自分の実力がまだまだトップエースにおよばないという事を痛感させられ、少し気が滅入る。

「メルスの運動性能とハンナの実力を甘くみてました」

信乃がその後のズームアンドダイブを防ぎきれたのはほぼ偶然、運が良かったとしか言えない。回避を諦めシールドでの防御に切り替える決断が少しでも遅れていれば、あの時落とされたのは信乃だった。

「それはこちらと同じですよ。あのタイミングで私の攻撃をかわしたウィッチは数えるほどしかいません。今は503にいるノヴィとキツテル、後は、ユーリですね」

「ユ……？？凄いですねあの子……」

思わぬところで出てきた名前に思わず信乃が目丸くする。

「偶然だと思いたいですが、偶然じゃないと信じたいですね」

ハンナも信乃の言葉に苦笑を浮かべる。偶然でなければ年齢も相まってちよつとした逸材だ。

「まあ、こつちからすれば最初で終わらせるつもりだったんだがな」

零戦でメツサーシャルフから優位高度を取る。もし露見していれば動きの取れない高高度であっさり落とされる可能性のある危険な賭けだ。幸いにして今回は成功したが、警戒が厳しくなる二度目からは難しい。

「次は勝てるか解らん」

「ええ、次は負けません……と言いたいところですが……」

そういつて懐中時計を取り出すハンナ。

「そろそろ戻らないと。メルスの燃料はそちらほど多くは無いので」

ネウロイと遭遇する事態も想定すれば燃料に余裕があるうちに戻る必要がある。ハンナの雪辱戦は今後に持ち越しとなった。

「お蔭で色々解りました。今後の編成の参考になりますので、また機会がありましたらお願いします」

「本音は？」

「悔しいので次こそ勝ちます」

ハンナがそういつて獰猛さを滲ませた笑みを浮かべる。負けてそれで良しとするなど、航空ウィッチの名がすたる。

その言葉に徹子も不敵な笑みを返した。

「返り討ちにしてやるぜ」

## 7. ありふれた空での日常

0730 リヨン臨時基地

早朝の搭乗員室に出撃の令が出たのは、ハンネが淹れたてのコーヒーを搭乗員に配り、朝食のブレートヒエンを皆が口にしかけた、まさにその時だった。

「運が無かったですね」

そう言いながら立ち上がった信乃が搭乗員室から飛び出していく。ちやつかりブレートヒエンをほおびりながら軽やかに基地を駆けていく姿は、こんな事態は慣れっこだと言わんばかりだ。

「全く、食事くらいゆつくりとらせてもらいたいものだな」

「ユーリ、帰って来てからにしなさい」

慌ててブレートヒエンを口に押し込んでリスのようになっていたユーリにハンネが声を掛け、アンジェラの後に続いていく。

折角入れたコーヒーが台無しになる事よりも、今は緊急出撃の用意だ。

ハンガーに入ると、信乃は既に零式に足を突っ込み、整備兵がエナーシヤを回しているところだった。

出撃用の自動施設を持たない臨時基地ではエンジンを始動させる前に整備兵が手動でエナーシヤを回す必要があったり武器を運んでもらったりと、一人でユニットは飛ばせない。

その事を見越しての早目の搭乗なのだろう。ブレートヒエン……要はパンだ。その残りをほおびりながら手早く機体のチエツクを行っている所作は、食事と同じくらい空に上がることが日常になっている事の表れのようにだった。

「回せーっ!!」

続いてアンジェラ、ハンネ、ユーリもそれぞれ自分のユニットへと足を通す。整備兵がエナーシヤを回し、タイミングを合わせて魔力を送り込む。メッサーシャルフの低い唸り音と共にプロペラが始動し、滑走路への道が開かれる。

「偵察班とレーダーの捕捉によると敵は小型四機。一人一機で片が付

く。落ち着いて行けよ」

アンジェラの言葉に皆が頷く。ハンネや信乃は言わずもがな。ユーリですら新兵にあるまじき不遜さでその言葉に笑みを浮かべている。

「ええと、ハンネ。あたしが4番機でしたっけ？」

「シノは3番機です。搭乗員割を見なかったんですか？」

「ええ。見たつもりだったんですけど……」

4番機に入るのは明日だったか。帰ったら確認しなくては。

信乃の言葉に皆が苦笑を浮かべる。ここ数日、ナイトシフトに信乃がずっと加わっていることは承知していた。夜中から昼間まで。昼食を食べてから日没までが睡眠時間という変則的な搭乗編成は信乃にとつては不幸だが、そのおかげで人員、特にナイトウィッチの深刻な不足に悩まされている部隊にとつては彼女の存在は素直にありがたいものだった。

とはいえ、信乃からすればあまり役に立っていないことも自覚している。アルマというナイトウィッチが思いのほか優秀だった事もあがるが、そもそも夜間の戦闘は探索魔法やレーダーなどを用いてアウトレンジで敵を仕留めるのが基本だ。

自分の射程に敵が届く前にもう一人のナイトウィッチが敵を倒して帰還。未だ夜間で一発も銃を撃っていない。

もつぱら自分出来る事と言えば、アルマの暇つぶしにつき合っただカードゲームでお菓子を上げられる事くらいだ。

それでも飛ぶのは、もし何かあった時、アルマを連れ帰る為だ。それはそれで重要な役目だが、もう少し何か出来る事があるような気がする。

少なくとも、こうして心配してくれる人たちの期待に応えるくらいには、何かしなくては、と思う。

「空の上で寝るなよ？ 萩谷准尉」

「あたし、そんな器用じゃないです」

アンジェラの茶化すような言葉に信乃が肩をすくめる。

滑走路から空へ飛び立ち、シユヴァアルムを組む。

四機編隊、一番機と二番機、三番機と四番機、それぞれのペアが編隊を組むという空戦の基本的な編隊で、リベリオンではフォーフィンガーとも言われる組み方である。

一番機のアンジェラと二番機のユーリ、そして三番機の信乃と四番機のハンネがそれぞれ対になり、互いの死角を補いながら索敵を行いつつ、敵に攻撃を加える際には二機のロツテに分かれ、長機の一番機と三番機を、僚機の二番機と四番機が補助する編成である。

一番若年のユーリがアンジェラの僚機というのも、彼女の生還を再優先にしようとする配慮からなのだろう。逆を反せば、信乃とハンネには自力で生き残るという課題が課せられている訳だが。

「隊長、2時方向、敵機確認。小型が……あれ？」

「どうした、准尉」

真っ先に敵を見つけた信乃にアンジェラが問い返す。

「あー……何か変なのがあります。一機は中型ですね」

「索敵班め、日に日に哨戒が雑になる」

アンジェラが毒づくが、それも一瞬。

「相手はまだこつちに気づいてない。一気に決めるぞ」

その言葉に全員が銃を構え、ズームアンドダイブ。一気に敵に襲い掛かると、カールスラントのMG42が次々に小型ネウロイを粉碎していく。

「やった!!」

ユーリが歓声を上げる。だが、そんなユーリの首根っこを掴み、アンジェラがぐいと引き寄せる。次の瞬間、ユーリの眼前を一閃のレーザーがすり抜ける。

「ひゃあっ!!」

「油断するな、ユーリ」

「こちら萩谷、隊長、すみません。仕留め損ねました!!」

唯一中型を狙っていた信乃の無線が響く。MG42よりも大口徑で殺傷力の高い20mmの一射でも、中型ネウロイは健在だった。

「もう一撃だ、上げれ!!」

アンジェラが叫ぶ。だが。

「隊長、もう一撃、いけます!!」

ハンネが叫ぶ。信乃の銃撃で露出したコアをハンネは見逃さなかった。

信乃の斉射から逃れる様に身をよじった中型ネウロイのコアが目前に迫る。ハンネは吸い込まれるように銃口を向け、そして、弾き金を引いた。

次の瞬間、コアを打ち抜かれて爆散するネウロイ。

光の雨の中、ふう、とハンネが息を吐いて銃を降ろす。

「……状況終了。よくやった、ハンネ」

全機撃墜を確認したアンジェラがねぎらいの言葉をかける。

「すみません、シノ。余計にいただきました」

余り悪びれた様子も無くハンネが笑みを浮かべる一方、あと一步の獲物を横取りされた信乃は肩をすくめたため息をつく。

実際は信乃がハンネの援護をした形になったのだが、再度攻撃をする手間が省けたと考えれば、ハンネが信乃を援護したと言っても間違いではないだろう。

「別にいいですよ。ちなみに、ハンネのスコアって今何機なんです?」

同じ年だが自分の方が場数を踏んでいるという自負もある。先輩としては後輩にスコアを譲る事くらい大目に見ることも、先輩としての器量の大きさを示す事になる。

「今のが認められれば、丁度80機ですね」

「前言撤回。今のはあたしがコアを特定したから共同撃墜ですよ」

「長機がそういうなら仕方ありませんね」

早速器量の狭さを見せつける信乃と、ふふ、と余裕の笑みを浮かべるハンネ。

カールスラントの公認撃墜の認定は厳しいので、長機や僚機の判断は元より、観測班の記録や状況の報告書等、多角的な面から調査され、少しでも矛盾があれば公認は認められない。長機が共同だと言えばその時点でハンネが単独撃墜したというスコアはまず認められなくなる。

「ちなみにシノのスコアは?」

ぐ、と信乃が一瞬言葉に詰まる。いつか聞かれると思ったが、出来れば聞かれたくない質問だ。

「……公式で26」

「あら。意外ですね」

ハンネが目を丸くする。確かに、今まで見てきた信乃の技量からすれば、カールスラントでは信じられないくらい少ない数だ。

「あたしは囷とか偵察とか、変な任務を任されることが多いんですよ。大体若のせいで。それに、扶桑では公式撃墜のカウントは行われてませんから、スコアはあつてないようなものです。そう、だから気にしてないです。気にしないでください」

「じゃあさっきの中型も譲つてくれるんですね？」

「それは無理」

正確に言えば、撃墜のカウントはしているが、自己申告と僚機の証言のみで認められるので、簡単に水増しが出来るし、部隊によっては口裏を合わせて撃墜数をごまかしているところもあるらしい。

その為、公式認定の基準が厳しい欧州では扶桑の記録は公式カウントに含まれない事が多く、信乃もそれに照らし合わせれば欧州の部隊との共同作戦で公式に記録した26機以外は参考記録にしかならない。

知っているウィッチの中には約一名、酒の席で『あたいの撃墜数は350!!あのハルトマンよりも上だぜ!!』とかほざいてるのもいた。誰も信じてなかったが。

信乃も途中までは真面目に自分の撃墜カウントを数えていたが、その事を知ってから自分で数えるのをやめた。その為ユニットの撃墜マークも途中で途切れている。

「はあ。折角だからここで少し上積みしようと思つてたんですけど……」

「それは猶更申し訳ありませんでした」

くすくすと笑うハンネ。多分全然悪びれていない。

まあ、実際撃墜記録というのはウィッチの実力を測る上で重要な要素だが、それが全てではない。超一流の爆撃隊のウィッチによる航空



ネウロイの撃墜数がその実力の参考にはならないのと同様、どこで戦ったか、どのような戦闘スタイルなのか、どこの国に所属しているのかで撃墜数は簡単に変動する。東部戦線のハルトマンがアフリカのマルセイユに倍近いスコアの差をつけていても、実力的には同格だとみなされているのと同じ事だ。

「模擬戦なら負けない自信があるんですけどね」

「私たちの敵はネウロイですから。ウィッチ相手に勝った負けたは関係ありません」

口を尖らせる信乃にハンネがさらりと答える。大人な対応に少し頭に血が上りかけていた事に気が付き、信乃がため息をついた。

2、3日の駐屯のつもりがもう1週間近くになる。

カールスラント語の飛び交う基地にも慣れてきたし、期待していた程美味しくもないカールスラント料理の味にも慣れてきた。というか、お菓子以外美味しくない。何なの、夕食に山盛りに出されるあのキャベツの酢漬け。もう主食じゃないですか。

ああ、白米にそつと添えられた2、3切れのたくあんが恋しい。

閑話休題。

それでも、良い事があるとするならば、その間で段々部隊のメンバーの人となりもつかめてきた事だろうか。

ハンネは最初に抱いていた生真面目な印象とは異なり、割合砕けたところがあり、戦闘スタイルもどちらかというと好戦的だ。何となく近しいものを感じる。

ハンナやアンジェラも付き合ってみると割とフランクで、よくも悪くも自分が抱いていたカールスラントのウィッチのイメージがいかにもステロタイプだったかが良く解った。

「まあ、公式記録が伸びてもドヤ顔出来る以外にメリットは無いですけど……」

「カールスラントは勲章がもらえますよ？あと給金の査定にも影響が出ます」

「マジですか？」

「褒美まで出るとか何それずるい。扶桑でも景品と交換できると

かすればすれぱいいのに。

「実は、今回シノが譲ってくれれば勲章をもらえるんですが」

「絶対に譲らない」

「ハンネ、私達も見ているんだ。撃墜数のごまかしは感心しないな」

「ふふ。冗談ですよ、中尉」

ハンネがくすりと笑う。いや、割と本気でやるつもりでしたよね。

はあ、と信乃はもう一度ため息をついた。

## 8. オマエのものはオレのもの

「ふざけないでください!!」

隊長室に罵声が響く。もしその場にJG54の隊員がいたらその光景に目を疑うか、或いは恐怖におののくだろう。

「だから、それが出来ていないからこつちはこつちで手を打つことになつたんです!!それを……ちよつと……あ……!?!」

温厚な性格で知られるハンナ・フィリーネ大尉が一方的に切られた電話を憎々し気に睨み付け、乱暴に受話器をテーブルに叩き付ける。

「畜生!!」  
シャイセ

「荒れてるな、どうした?」

「どうしたもこうしたもありません!!」

部屋に入ってきたアンジェラにハンナが八つ当たりのように怒鳴る。

「……私はいいが、外まで丸聞こえだ。部下が通りかかったら失神するぞ」

そういいながらハンナが部屋の隅のコーヒーマーカーからカップにコーヒーを注ぐ。

「……ありがとう」

「私の分だ」

がくつ。と机に突つ伏すハンナ。

「で、どうした?増員の到着が遅れるのか?」

「それならまだ良いです。いえ、良くはないけどマシです」

空っぽになったコーヒーマーカーを見てアンジェラを恨めし気に見つめるが、素知らぬ顔でアンジェラはカップのコーヒーに口を付ける。

「ガリアの軍部からです。カールスラント軍のこれ以上のガリアへの増兵は認められない。ガリアの防衛はブリタニア、ガリア両空軍と506JFWが担うので手出しは無用、ですって」

その言葉に、はっ、とアンジェラが鼻で笑う。

「それが出来ていたら増兵などしないというのに。余程私達が邪魔ら

しいな」

元々ブリタニアとガリアにとって、カールスラントはネウロイが出現するまでは仮想敵として互いににらみ合う関係にあった。

ガリアを全面的に支援しているブリタニア政府としては、カールスラントのウィッチ部隊がいつまでもガリアに居るのは好ましくないだろうし、その規模が大きくなるのは尚のほか面白くないのだろう。そして、支援を受けているガリア政府もJG54への対応に関しては、ブリタニアの意向とほぼ同調している。

「第二中隊はもうブリタニアに来てるのよ？このタイミングでなくて、絶対に嫌がらせだわ」

「ロンドン観光でもさせていればいい。いい休暇になる」

「羨ましいわね。私も行きたいわ」

ハンナがため息をつきながら体を起こし、椅子の背もたれに体を預ける。

「それで。今日の報告ですね？」

「ああ。私とシノ、ハンネ、ユーリでネウロイ4機。中型が1に小型が3だ。撃墜数はシノとハンネが中型を共同1、小型は私とハンネ、ユーリがそれぞれ1だ」

「……このままじゃユーリが勲章を貰いますね。最年少エースとして」

既に今日まで昼に3回、夜に2回、506の防空網を抜けてリヨン上空までネウロイが到達している。僅か1週間近くで二日に一回ペースの襲撃。これでは他の前線基地と変わらない。

「若本中尉が今朝来たわ。航空爆弾と20mmの弾丸が切れたつて」

「20mmはうちの規格じゃ手に入らん」

「しばらくは予備のMG42を回しましょう。あの爆弾はしばらく無理ね」

「アレがあると楽なのだが……扶桑の方の反応は？」

「遣欧艦隊の方から物資の補給があるそうだけど、後2、3日はかかるわね。増援に関しては『うちのエースをふたりも回しているんだ。これ以上の増援は無理』ですって」

「そつちにもジョンブル共の息がかかっているのかもな。問題は夜間哨戒だが……」

「そろそろアルマの負担が限界ね。速成訓練、ここで出来ないかしら」「誰が教えるんだ」

「私も速成訓練は受けています」

「お前が倒れるぞ」

「そう思うなら私のコーヒーを飲まないで。昨日から寝てないのよ、私」

「……私が淹れなおそう。うんと濃い目にな」

アンジェラが肩をすくめる。

「……何か手はないのか」

「正規のルートはもう無理ですネ」

はあ、とハンナがため息をつく。

「……ねえ、アンジェラ。コーヒーを淹れたらハンガーに行つて。整備兵に予備のメルスを準備するように伝えてもらえるかしら？」

「基地を空けるのか？誰が代わりを……」

「たまにはネウロイだけじゃなくて書類とも格闘しなさい、中尉」

「それが苦手だからお前が司令代理になつたんだろう」

「帰つてきたらうんと濃いコーヒーを淹れてあげるわ」

「……それは、助かる」

コーヒーを飲んだ時よりも苦々しい顔を浮かべ、アンジェラが肩をすくめた。

田舎の大地主の農家の屋敷の納屋を改装したハンガーは昼前だといふのに大忙しだった。

「共同撃墜が1、確かに確認は取れていますね」

「あたしの一撃でひびが入ってハンネの弾が当たる前に撃墜された可能性は……」

「ありません」

偵察班の報告書に目を通していた整備兵の言葉にがつくりと信乃が肩を落とす。

「少尉!!これでボクの撃墜数3機目だよ!!」

「解ったからユーリは少し休みなさい」

戦闘の余韻でハイになったユーリをたしなめながら、ハンネがため息をつく。自分達が乗っていたメッサーシャルフと零式が整備の為に奥に運ばれ、代わりに午後からの搭乗員たちのユニットが並べられていく。

「えー?明日は丸一日休みなのに……ですか?」

「疲れというのは気が付かないうちに溜まるものよ。ユーリ、貴女の動き、明らかに落ちてるわ」

「え、そうなんですか?」

「そうよ。まずはご飯を食べて、体を休める事。娯楽室に行つてはダメよ」

「えー……?」

「ユーリ。昨日も言いましたけど……」

「わ、わかりました……今日はいかないです……」

「明日も午前中までよ」

何しろ遊びたい盛りだ。自己節制の出来る年ではないし、娯楽室は数少ないウィッチ達の楽しみの一つである。昨日も夜遅くまで非番のウィッチ達とダーツをしていたところを部屋まで連行したばかりだ。

「あの。少尉」

「ベレーナ……ああ、今日からでしたね。痛みはないですか?」

「はい。もう大丈夫です!!迷惑をかけた分、これから頑張ります!!」

そういうと包帯の取れた手をぎゅつと握つてベレーナが決意を露わにする。

「ユーリにはもう負けませんから!!」

おそろくこの数日、ベレーナも忸怩たる思いで過ごしていたのだろう。決してベレーナの実力はユーリに劣つてはいない。他の若手たちが成果を上げるのを黙って見ているのは決して面白くはなかったはずだ。

「今日の長機は若本中尉でしたね」

「あ、はい……本当は少尉が良かったのですが……」

「若本中尉は教え上手よ。周りへのフォローもすっかりしてるから、安心していつてきなさい」

「は、はいっ!!」

「大丈夫、見た目より優しい人よ」

そういつて微笑み、ベレーナの頭をぽん、と叩く。

搭乗員の控室に向かって行くベレーナの背を見送っていると、かん高いユーリの声が響いた。

「少尉ー、早くご飯食べようよー」

「すぐ行きます。だからもう少し落ち着きなさい」

やれやれ、これでは軍人というよりギムナジウムの先生のような

「お疲れだったな。ハギ」

「疲れましたよ。本当に」

近づいてくる徹子に信乃が肩をすくめて返す。

「で、何機落とした?」

「……共同で1機です」

苦虫をかみつぶしたような顔を浮かべる信乃に徹子が意外そうな顔をする。

「それだけか?随分とのんびりしてるな」

「そんなつもりはないんですけどね」

補給加食のミルクのパックに口を付けながら、午後からの編成に割り振られた徹子の問いに答える。中堅どころの安定した実力を持つウィッチが少ない現状、信乃のような経験値の高い中堅ウィッチにかかる負担は必然的に大きくなる。

中型を相手にしたのも若手には荷が重くて任せられないという事の裏返しで、それだけ信乃の担っている役割が大きいともいえる。

最も、そのせいで撃墜数は思ったほど伸びていないのだが。

「折角カールスラントの連中と一緒になんだ。撃墜数は増やさないと  
な」

「そのつもりなんですけどね」

「まあ、オレもそろそろ撃墜ペースが落ちる」

肩をすくめて徹子が言う。

「三号が切れた」

「ばかすか落とすからです。一応他国の部隊ですし、補給が少なくなるのは当たり前です。いい加減自己節制する事を覚えてください」

「20mmも切れた」

「ばかすか撃つからです。カールスラントの予備のを借りればいいじゃないですか」

「オレは20mmが好きなんだ」

食い下がる徹子を、じと、と見つめ、ぽつりとつぶやく。

「貸しませんよ?」

「貸せとは言わん。勝手に持つてく」

信乃と徹子の使っている99式2型2号機関銃は扶桑では一般的な20mmに対応しているものだが、欧州に出回っているものはほとんどが欧州規格の13.7mmの改型となっており、純正な20mm規格のものは数が少ない。

だが、扶桑の20mmはかなり癖のある弾道のせいでしょうもなく悪い命中率と、欧州では圧倒的に補給が少ないというリスクを除外すれば攻撃力そのものは非常に高く、一部の扶桑のウィッチ、特に敵に肉薄して戦闘を行うタイプの中には敢えて20mmを好んで使いたがるものもいた。

そして、信乃も徹子もその一部のウィッチの方に該当する。

「な、いいだろ、ちよつとだけ」

「やめてくださいよ。自分のじゃないからって乱暴に扱ってくせに。この前もあたしの予備の20mm壊したばかりじゃないですか」

「MG42を借りればいいだろ?な?」

「嫌です」

MG42に使用されるのは7.92mm。扶桑の99式2型2号20mmからすれば純粹に見て威力は半分以下だ。優秀な銃で欧州では好んで使うものも多いが、扶桑の流儀に従えばこんなちまちました豆鉄砲なんて使つてられるか、である。



「上官命令だ」

「うわあ、そこまでするんですか？ 軽蔑します」

「少しいいですが、若本中尉、萩谷准尉」

その言葉に信乃が振り返り、そして反射的に背筋を伸ばして敬礼をしようとするのを手で制しながら、二人の元へハンナ・フィリーネ大尉が歩み寄る。

司令代理という肩書の割には内気で大人しく、時に周囲に振り回されることもある少女だ。しばしば若手ウィッチに娯楽室に連れられては、ダーツやビリヤードに興じて士官以上に支給される特別な嗜好品を巻きあげられている姿を目撃されている。

プライベートでは些か頼りない所もあるが、慕われているという意味では間違いではない。

背筋を伸ばしたままの二人に歩み寄ると、先に口を開いたのはハンナではなく徹子の方だった。

「大尉、こいつにMG42を貸してやってくれないか？」

「自分が借りてくださいよ、若……本中尉」

他国の上官の前では一応上官扱いをするつもりではいるのだが、つい素で喋ってしまう事も多い。とって付けた階級も何を今更という感じだが、ハンナは徹子の問いにも信乃の言葉にも答えなかった。

「ハギさん、お昼は食べましたか？」

「いえ、まだですが……」

「丁度良かったわ。今から准尉のユニットを用意してもらおう間に一緒に食事を取りましょう。説明したいこともあります」

「え？ 何て？」

信乃が目丸くする。

「私と一緒に嫌ですか？」

眉をハの時に寄せるハンナ。捨てられた子犬のようなつぶらな瞳を向けられて信乃が言葉を詰まらせる。

「そんな事はありませんが……いえ、そっちではなくて」

何でユニット用意するの？ 午後の搭乗員割にあたしの名前なかったよね。

「丁度午後から非番ですよね」

嫌な予感がする。そういえば、どうしてハンナはそんな大きなスーツケースを引きずってきているのか。

「中尉、萩谷准尉をお借りしますが宜しいですか？」

「今はオレもハギもそっちの指揮下だ。あ、ハギ。20mmは置いてけよ」

「駄目です中尉。あの、大尉、どこかに出られるのですか？」

信乃の問いににこり、とほほ笑んでハンナが答える。

「ええ、ちよつと『ロンドン』観光に」

さらりととんでもない事を言いだすハンナ。

え？何？どうしちゃったの？大尉？

信乃は喉まで出かかった言葉を寸前で飲み込んだ。

## 9. リヨン⇨デイジョン経由⇨ロンドン行き

慌ただしく昼食を取り……といっても、慌ただしかったのは信乃の方だ。

ハンナはかいつまんで今後の事を説明しながらも、信乃と同じくらの量のパンとジャガイモと玉ねぎの炒め物とザワークラウトをいつの間にか食べきっていた。

戦場の食事は娯楽ではなく補給。ストライカーユニットが燃料を流し込まれるように、作戦行動にあたるウィッチ達も迅速にパンとジャガイモとキャベツの酢漬けとソーセージを胃に送り込まなくてはいけない。

食べることも作戦行動のうち。迅速な作戦遂行には迅速な食事も含まれる。

とはいえ、別段急いでいるようにも見えないでこれだけの量を食ベきるとは、流石人類史上二番目の速さで200機のネウロイを撃墜したエースは格が違うということか。

単に早食いなだけのハンナを見て変な解釈を試みている信乃の内心など露知らず、ハンナは手短に今回の任務を伝える。

要は、ロンドンに向かうハンナの護衛。自分が選ばれた理由は手が空いていたのと腕が確かだから。

多分にリップサービスが含まれているようだが、カールスラントのエースに腕がいいと褒められて嬉しくない訳が無い。少し疲れているが、つい快諾してしまう。

周りを見ると他の隊員たちが珍しい組み合わせにちらちらとこちらを見ていたが、気にする余裕はない。信乃が食べ終わると同時に再びハンガーへと戻る。

整備兵によって既に用意されていたメツサーシャルフと零戦にそれぞれ足を通し、規定通りのチェックを行うとすぐさまハンナと信乃は空へと飛び立った。

「重くないですか?それ」

「そうですね。ネウロイにぶつけければビビくらいは入るかもしれませ

んね」

「疲れてませんか？」

「二日くらいまともに寝ていませんから」

「さっき言ってた事、本当ですか？」

「本当ですよ」

スーツケースを手に、背にMG42を背負いながらハンナが信乃の問いかけに答える。

もしネウロイと遭遇すれば信乃が護衛に付かなくてはいけないが、オラーシャの最前線ではあるまいし、先程落としたばかりで再びネウロイと遭遇するなど、余程運が悪くない限りはあり得ないはずだ。

隣に飛ぶ信乃は手に扶桑製の20mm機関銃を、背中に予備のMG42を背負っている。20mmは予備弾倉も少ないのでMG42だけでも良かったのだが、基地に置いておく間違いなく上官に持っていかれるのでわざわざ持ってきた。

「もうすぐデイジョン上空ですね」

ふらふらと飛びながら、ハンナが呟く。

「……どうしてロンドンまでいくんですか？」

「増援の第2中隊と一度打ち合わせをしなくてははいけませんから、ですかね？」

何故疑問形？さっきはロンドンにあるカールスラントの西方司令部との会議と言っていた気がするが。

「どうして、わざわざ整備中のユニットを使うんですか？」

「特に意味はありません。強いて言うならそういう気分だったからです」

「……確かそれ、昨日の午後に壊れたやつですよね」

ユーリが使っていて被弾した為、予備に回されたメッサーシャルフを見ながらハンナが頷く。

「そうですね。片方の燃料タンクに亀裂が入っているはずですから、そろそろ燃料が切れます」

ハンナが言うのと同時に、ぶすん、と音を立てて右足のプロペラが止まる。

がくん、と高度が下がるハンナに追隨しながらも、信乃の言葉にはさほど焦りはない。むしろあるのはわずかな呆れだ。

「……大変ですよ？それ」

「そうね。このままじゃロンドンまで飛べないわ。萩谷准尉。近くに基地はあるかしら？」

ハンナにも焦った様子はない。器用に片肺のユニットで体勢を整えながら、信乃に聞き返す。

「……ディジョン基地がありますね」

さつきディジョン上空がどのとか言っていた気がするが。

「こういう事態の場合には、緊急着陸が認められますよね」

「……認められますね」

白々しく呟くハンナに信乃がため息をつく。

「それじゃあ助けてもらわないとダメですね」

そう言いながらハンナが進路を北から西……ディジョン基地上空の方へと向けていく。

『……こちら506統合航空飛行隊ディジョン基地、未確認機に次ぐ、当飛行区域は我々ノーブルウィッチーズの防衛空域に当たる。速やかに離脱するか、国籍及び部隊名を告げよ。繰り返す……』

「お迎えが来ましたよ、司令代理」

魔導無線に響く声と信乃の言葉に、くすり、とハンナが笑みを浮かべる。

「じゃあ、緊急救難信号でも出しましょう」

「……驚かれますよ？」

信乃の言葉にハンナが意地悪く笑みを浮かべる。

「……驚かせるんですよ」

「滑走路を空ける!!スクランブル救護班はハンガーに待機!!消火班急げ!!」

「ジェニフアー、緊急発進の準備は？」

「いつでも行けます!!」

「マリアン、現状を伝えろ!!」

ディジョン基地は突然鳴り響いた緊急救難信号を知らせるサイレンにハチの巣をつついたような騒ぎになっていた。

ポーカーのカードを放り出したジェニフアー・J・デ・ブランク大尉とカーラ・J・ルクシック中尉がストライカーユニットに飛び乗りスクランブルの用意を整え、受け入れ態勢を整えた滑走路に担架をかかえた衛生兵や消火班が待機している。

「ちえ、私のカードフルハウスだったんだ。儲け損ねた」

「そうなんですか？残念です、私はストレートでしたから」

「うわ、危なっ!!」

ジェニフアーとカーラが軽口を叩き合うが、その目には欧州での激戦で培われた鋭い闘気が漲っている。

『こちらマリアン、救難信号を発したウィッチを確認、近くにネウロイの敵影はない、接近する』

哨戒中のマリアンが緊張した声で状況を報告する。

「了解。マリアン、引き続き周囲の警戒は怠るな。負傷者がいる場合は速やかに報告するように」

無線の声にジーナ・プレディ中佐が答える。了解、という歯切れのいい返事につき、ハンガーからの無線が響く。

「隊長、スクランブル、いつでも出れます!!」

「よし。ジェニフアー、カーラ。滑走路に入れ」

「了解っ!!」

がこん、とユニットを固定していた安全装置が外れ、二人のウィッチが滑走路に入る、が。

『ん……………？おいおい……………待て待てっ、何だお前ら!?!』

「……………どうした、マリアン」

ジーナの言葉にしばらくして、マリアンが叫ぶ。

『っ!!隊長!!スクランブル中止!!救難信号を止めてくれ!!』

「はっ…」

きよとんとするジーナだったが、滑走路に目を向け咄嗟に無線に叫ぶ。

「スクランブル中止!!ジェニフアー、カーラ、止まれっ!!」

「え、そんな、急に言われても……………きやあっ!?!」

「じえ、ジェニフアー、いきなり止まっ……………!!ぶつか……………あああっ!?!」

ごろごろと滑走路を転がる二人のウィッチを見て、衛生兵が慌てて飛び出した。

『おい!?何だよ。ちよつとお前ら、ピンピンしてるじゃないか!!何で救難信号なんて出したんだよ!!』

無線の向うからマリアンの怒鳴り声が聞こえる。その向うで小さく聞こえる声が、全く悪びれない口調で言い放った。

『ちよつと、ユニットが壊れたので』

10. 506JFW 『ノーブルウィッチーズ』 B部隊

「……おい、そろそろ到着するぞ」

人はここまで不機嫌を体現することが出来るのか。

ある意味関心させれる程に無作法な言いぐさで吐き捨てるマリオンを見ながら、信乃は感嘆していた。

「丁寧なエスコート、感謝します、カール大尉」

そして、そんな態度などどこ吹く風と笑顔を浮かべるハンナにも。

「……すみません、ご迷惑をおかけしました」

「本当にな。ああ、本当に!!」

「ああ、すみませんすみません……」

ぎろり、と睨み付けられて信乃が体を小さくする。そりや怒る。自分だって逆の立場なら怒る。激おこだよ。

「……海兵隊怖つ……諄子さんが言ってたのは本当だったんだ……」

「……まったく、タケイといい扶桑のウィッチってのは変なのしかないのか……ん?」

「……え?」

ぽつり、と呟いた声。マリアンと信乃が互いに聞き返そうと口を開く直前、視界にディジョン基地が飛び込んでくる。

思わず信乃はその規模に目を見張った。

「広い基地ですねえ……」

きちんと滑走路とわかる、コンクリートで舗装された滑走路。

建物は質素だが、明らかに民家そのものであるリヨンに比べると軍用施設といった感じでしたっかりしている。

そして何より、リヨンの納屋のようなハンガーとは違う、いくつも立ち並ぶ大きなハンガー。

「流石リベリオン。私達がいたころと大違いね」

ぽつり、と呟くハンナ。物資の豊富さで言えばリベリオンは他国を圧倒するだけの豊かさを持つ。

「……ふふ」

「あ、何か企んでますね」



黒い笑みを浮かべるハンナに信乃が突っ込む。

この臨時基地の司令代行殿は、思慮深いと言えば聞こえがいいが、結構腹黒い所が垣間見えるのだ。それが怖い。竹井大尉くらいには怖い。

「……おい、お前達。こんな事してただで済むと思うなよ」

「解ってます。きつと隊長直々に尋問されるのでしようね。きつと私たちの事を根掘り葉掘り聞かれて、しかるべき所にきちんと報告が行くのでしようね、ああ、困りました」

「……何で笑ってんだよ」

満面の笑みを浮かべるハンナに、リベリオンの海兵隊の服を着た少女……マリアン・E・カール大尉が逆に少し引いた様子を見せる。

マリアンに続きハンナと信乃が滑走路に降りたつ。ハンナのユニットは片肺の上、荷物を手にしている為、信乃が手を引いて着地をエスコートする。

「ありがとう、ハギさん」

地面に降りたつたハンナがユニットを脱ぎながら信乃に笑顔を見せる。

『元氣』そうでなによりだよ」

呆れたようにマリアンがため息をつく。

「ええ、本当に。折角ロンドンで羽を伸ばすつもりだったのに」

「それは残念。ここの名物はコーラと口の悪い海兵隊員くらいだよ」  
背後からの声がかかる。

「……後は、最近美しさに磨きがかかっていると評判の隊長も、ですよ  
ね」

ハンナが振り返って声の主に微笑みかける。

「君は、確か」

「お久しぶりです。ブリタニア以来ですね。ジーナ・プレデイ少佐」  
「中佐だ。まさか緊急救難信号を放ったのが君だったとはな。ハンナ・フィリーネ大尉……いや、もう少佐か？」

「大尉のままです。カールスラントでは昇進待ちのウィッチが山ほどいますから」

「隊長、知り合いなんですか？」

マリ안의問いかけにジーナが肩をすくめる。

「リヨン基地、JG54第一飛行隊の司令代理殿だ」

「うえ!？」

ジーナの言葉にマリアンが変な声を上げる。まさかそんな重要人物がこんな事を仕出かすとは思ってもみなかったのだろう。

「おい、何で言わないんだよ、チビ!!」

マリアンの怒りの矛先が信乃に向く。

「何でって……あ、今あたしの事をチビって言いましたね!?失礼な!!扶桑では割と平均身長なのに!!正式な謝罪を要求します!!」

「五月蠅いチビ!!扶桑のウィッチは変な奴しかいないのか!？」

「あ、マリアン、帰って来たんですね」

「うう、ひどい目にあった……」

ハンガーからあちこち擦り傷だらけになったショートカットの海兵隊の服を着た少女……ジェニファー・J・デ・ブランク大尉と髪を二つに結わえた飛行服姿のカーラ・J・ルクシック中尉が姿を現す。  
「どうしたんだお前達」

ボロボロになって二人を見てマリアンが目丸くする。

「どうしたもこうしたもないです……」

「いきなりジェニファーが急制動をかけるから」

「な。止まれている命令が聞こえなかったんですか!？」

「……ごめんなさい」

それもこれもあたし達が悪いんです。信乃が申し訳なさそうにぽつりとつぶやく。

「え?誰?」

「ひよつとして救難信号を出した方……ですか?」

「はい。突然ユニットが片方停止しまして。いえ、もう。本当にびつくりしてしまいました。咄嗟に救難信号を発してしまいました。お手数をおかけして申し訳ありません」

「なんだよもー。心配したじゃん!!全く、しっかりしてくれよな!!」

カーラが人懐っこい笑みを浮かべてハンナの肩をバシバシ叩く。

「おい止めろ馬鹿!!」

相手の素性を知らないカーラにマリアンが真っ青になって怒鳴る。  
「気にしなくてもいいですよ。相変らず無神経すぎるくらいに人懐っこいですね、カーラ」

「いやあ、よく言われるんだよ。ブリタニアのカールスラント部隊と一緒に居た時も……ありや?カールスラント?」

カーラがハンナの制服を見て、その後腕の『緑のハート』グリーンヘルツに目を向け、階級章を見、そして顔を確認する。

「……お久しぶりですね、ルクシツク中尉。お変わり無いようですね、よりです」

カーラの顔から血の気が引く。

「は、ハンナ・フィリーネ……大尉!?何でこんなところにいるんだ!?!」  
慌ててカーラが後ずさる。

「だから言った通り、機材のトラブルです」

「嘘だ!!あ、解った、スパイだ!!隊長、こいつこんな顔してかなり腹黒……むぐつ!?!」

「解ってる」

マリアンに口をふさがれむーむー唸るカーラを横目で見ながら、  
ジーナがハンナに向き直る。

「それで、フィリーネ大尉。『うちの基地』デイジョーンに何か用でも?」

「そうですね、特には、と言いたいところですが、偶然、本当にたまたまここに立ち寄ることになってしまったので、折角ですから少しお話でもさせていただければと思うのですが、どうでしょうか?」

じ、と。ジーナがハンナを見つめる。白々しすぎていつそ清々しい程だ。

先に折れたのはジーナ。肩をすくめ、脇に控えていた少女に口を開く。

「クハネツク軍曹、フィリーネ大尉を私の部屋に案内してやってくれ。マリアン、後は任せた」

そういうとジーナはハンナに背を向ける。

「お心遣い、感謝します」

「ええと……あたしは？」

零式から降りた信乃がクハネツク軍曹に連れられて行くハンナの背を追いかけようとする。

「お前はごっちだ、チビ」

ぐい、と信乃の飛行服の襟をつかみ、マリアンが言い放つ。

「ぐえ……あ、またチビって言いましたね？背が大きいからって何が偉いんですか？」

「黙れ!!五月蠅いチビ!!」

「ま、まあまあ、マリアン、そういう身体的な事は失礼ですよ……」

「そうだそうだ!!背が小さくて何が悪い!!」

「何でカーラはわざわざ小さくした火種をまた大きくするんですか!!?」

「そうですよ!!小さい方が被弾面積が小さくて戦闘には有利なんです!!」

「あ、でも私はお前より大きいけどな」

「え!?!どつちの味方!?!」

二対一から三つ巴の戦いへと変わっていく目の前の状況を見て、はあああ、と、ジエニフアーが大きいため息をついて頭を抱えた。

「……あ、ジエニフアー。私より大きいって言っても世間的にはそんなに大きくないからな、お前」

「私の事はどうでもいいです!!」

飛び火してくる火の粉を振り払うようにジエニフアーが怒鳴った。

「くそ、ハギのヤツ。予備の弾丸までもっていきやがった。一体だれの影響を受けたんだか……」

ハンガーから搭乗員室に大股で歩きながら、徹子がぶつぶつと文句を呟く。

慌ただしく飛び立っていったのを見送ってみたものの、しっかりと自分の20mmは確保していたみたいだ。

昔のようにうっかり置いて行ったという基本的なミスはしなくなったことは褒めるべきところだろうが、今ではその成長が恨めし

い。

「……まあ、今日は定期便も来ないだろうしな……」

呟きながらふと、懐かしい単語が自らの口から漏れたことに徹子は一人苦笑を浮かべる。

激戦区に居た頃、疲れも見せず連日押し寄せるネウロイを扶桑のウイツチ達は『定期便』と呼んでいた。

御多分に漏れず、徹子もまた定期便の相手をすべく毎日のように空へと上がっていた。その後ろではまだひよつこのように頼りない信乃がわたわたと慌てふためいていた時期もあったが、今となつては過去の話だ。

「とはいえ……」

また。厄介な事に巻き込まれたものだ、と徹子は肩をすくめる。

人類の生存域が一進一退を繰り返す中でも、ネウロイの熱線が届かない場所にいる連中は、時に前線にいるウイツチ達の命をもチツプにして政治という名のギャンブルにいそしんでいるのだ。

そして、今。

ハンナもまた、そんな大人たちの駆け引きから、己自身をチツプにして仲間を守ろうとしている。

扶桑海事変や欧州での動乱を経て、『敵』はネウロイだけではないことは、長年ウイツチとして、遣欧艦隊のエースとして戦ってきた徹子もよく理解していた。

だが。

「……解ってるけど、解んねえよな」

自分に何か出来るのか。その答えはおそらく、『否』だ。

徹子は敢えてその『敵』から背を向け、ネウロイとの戦いのみを専念してきた。

20mmがどうか、三号がどうか、そんな事よりも目の前の書類の束やウイツチに対して懐疑的なお偉方をどう懐柔するか。

今まさに故郷を蹂躪しようとしているネウロイにあえて背を向け、背中に同胞の鮮血を浴びながらも、飛ぶことも、振りかえって弾き金を引く事も許されないウイツチすらも中にはいるのだ。

そういつた仲間たちのお蔭で今、自分は飛んでいる。

その事は解っている、感謝もしている。だが、自分には不得手である事もまた理解している。

自分が常に前線に置かれているという事は、執務室から出れずに書類と戦うものがあるという事と同じ事。

哀しいかな、自分が天から与えられた才能は書類や政治家を相手にすることではないし、誰も期待してはいないだろう。

戦いに身を置く事。

自分に期待されているのはそれだけだ。

倒せと言われれば空を覆いつくすネウロイを確実に、一機残らず叩き落とす。それを確実にやってのけることが徹子のすべき事で、そして、それだけは誰にも譲る気はない。

美緒や諄子、それに自分を育てた先生……北郷文香や多くのウィッチ達が出来て自分には出来ない事があったのと同じく、彼女たちが出来ない事を自分が今こなしている。

自分がこうして戦う事に専念出来ているのも、それを支える多くの者たちの手によるものである以上、その期待には応えなくてはいけない。

「全く、どつちが損なんだか得なんだか……今度会ったら教えてくれよ、先生……」

思わず口を出た弱気な言葉に頭を振る。

今すべきことは色々考える事ではない。尻の青いウィッチ達をまとめ、一機でも多くのネウロイを落とす事だ。

「話が分かるなハギ!! そうなんだよ。タケイは消極的なんだよ!! あの時も優位高度を取られた時もう少し押してこられたらヤバかったんだけどな!!」

「ですよ。いつも思うんですけど、慎重なのはわかるんですけどちよつとじれたいんですよね、諄子さ……竹井大尉の戦い方って」  
一方、デイジョン基地。

談話室でソファに並び、まるで旧知の友人同士のように語り合つて

いるのは先程までならみ合っていたマリアンと信乃。

だが、話していくうちに互いの表情から険が取れ、笑みが浮かび、気が付けば肩を叩きながら談笑している。

「仲が良いな、あいつら」

テーブルを挟んで向かい合いながらソファに座ったカーラが呆れた様にコーラの瓶をぶらつかせる。

新しい玩具を取られた子供の様なカーラの言葉に、ジェニファーが苦笑を浮かべた。

「あはは、さつきまであんなに喧嘩してたのに……」

マリアンは口は悪いがそれ以外の性格が悪いわけではない。そう、口が悪いだけなのだ。致命的なまでに。

「そういえば、ハギの故郷ってどんなどころだ？」

「田舎ですよ、神社と田んぼと海しかないような場所で、剣の練習か海で魚を取るか神社で鹿に餌をやるくらいしかやることがないような所です」

マリアンが呆れた様に口を開く。

「なんだそりゃ。まあ、私の実家も何もないくそつたれな所で話す事も特にないんだが……そうそう、あそこにいる奴等はもつと面白い話があるぞ」

「そうなんですか？」

「べ、別に無いですよ。私の実家も田舎ですし……」

巻き込まないで、と目で訴えるが口の乗ったマリアンに通じるわけもなく。

「こう見えて、箱入りのお嬢様なんだぜ、ジェニファーは。この前も料理を教えて欲しいって言ってたから……」

「そ、その話はしないでマリアン!!」

「マリアン!! ナマズの首が……」

「あーっ!! ああーっ!! そ、そういえばカーラの故郷はハワイでしたよね?!」

マリアンの言葉を大声でかき消しながら、必死でジェニファーが話題を逸らす。

「ハワイって、あのハワイ？太平洋の？」

信乃が驚いたように目を丸くする。

南洋島の上の方にあるぼつんとしたリベリオン領の島々で、観光地としても、また、太平洋艦隊の軍事基地としても有名な島だ。

扶桑海軍の演習でも多くのウィッチ達が遠洋航海で訪れる場所だ。温暖で独特な文化、そして、美味しい料理。扶桑人の憧れの場所でもある。

「アローハー。そうそう。太平洋のど真ん中の島の生まれだよ」

ひらひらと奇妙な手つきの踊りを踊りながらカーラが答える。

「ああ。だからなんかそこはかたなく頭があつたかそうなんですね」

「お、何だお前、面白い表現するな!!」

カーラが満面の笑みを浮かべる。口の悪い奴には慣れつのだが、一見澄ました優等生といった雰囲気の情報から出てきた軽口が、カーラにとってはつぼに入ったらしい。

「そういう悪い子にはお仕置きだ!!」

ならば手加減は無用とばかりにびよん、と机を飛び越えると、そのまま信乃の膝の上に飛び乗ったカーラがその頬に手をあてる。

「ひゃあつ!!冷たつ!!」

「私の固有魔法は冷却なんだ。ほれほれー」

「あははっ、冷たつ!!冷たいです、カーラさん!!」

「お痛をする口はこの口かー？」

じたばた暴れる信乃を冷却で冷やした手でまさぐる。

「こ、こら、萩谷さん!!カーラ!!コーヒーがこぼれます!!」

慌てて机の上からカップを避難させるジェニファー。

「ははは……ん？」

カーラが笑みを引つ込め、ジェニファー達に向き直る。

「なージェニファー、とれなくなっただけど、これ、どうなってるの？」

「ふえ!？」

笑っていた信乃の目が丸くなる。

ぐにぐに、と引つ張ったりこねたりして見るが、ぴつたりと張り付



いた手は信乃の頬から離れない。

「……何してるんだ、全く」

「魔法を止めて、しばらくそのままにしておけばじきに取れますよ」  
科学の基礎の基礎。皮膚に氷がくっついた時と同じ原理だ。

小学生のような質問にジェニファーがため息交じりに答える。

「あー……何かごめんな、萩谷」

「ひへ、ほひはほほ……（いえ、こちらこそ……）」

冷静になると何か色々ときどき体勢だ。頬を赤らめカーラと信乃が互いに目を逸らす。

顔を赤らめながら信乃に跨り頬に手を添え、顔を近づけているその様子はまるで……。

「……なんか、こつちまで恥ずかしくなってきましたね、マリアン」  
「言うな」

皆がそれぞれ視線を合わせないようにそっぽを向きながら、生暖かい沈黙が流れる。

「あ、なんかあつたかくなってきた」

「ほほへふへ、ほほほほへはふは？（そうですね、そろそろ取れますか？）」

「うーん……もう少しだなあ……」

ぐにぐにと信乃の頬を揉みながらカーラが呟いたその時。

「済まない。話が長引いてしま……って……」

談話室の扉が開き、部屋に入ってきたジーナが珍しく言いよどむ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

沈黙が流れる。ジーナの後ろから部屋に入ってきたハンナとクハネツク軍曹はその光景に興味をひかれたように目を輝かせる。

「……いや、いいんだ。ルクシツク中尉。萩谷准尉も。その……趣味嗜好は人それぞれだ。部隊の運営に支障をきたさなければ、隊長であ

る私からは何も言う事は……」

「ち、違うんですって、これは!!」

「ハギさん……若本中尉の目の届かないところでアバンチュールなんて……いえ、いいんです。私は口が堅いですから、ええ。どうぞ安心してください」

「く!?!」

「痛い痛い!!引っ張るな信乃っ!!」

必死に手を振りほどこうと暴れる信乃と振り回されて目を白黒させるカーラ。

その騒ぎはカーラの手が信乃の頬から離れるまで続いていた。

「それでは、良い旅を、ファイリーネ大尉」

「お心遣いありがとうございます、プレディ中佐」

互いに握手を交わしながら笑みを浮かべるハンナとジーナ。その背後には最新式の発進補助装置に固定されたハンナと信乃のユニットが出番を待つように待機している。

「良い話を聞かせてもらった。あくまで参考にだが、一考に値する話だった」

「こちらこそ。偶然とはいえ、同じガリアの空の防衛を担う者として、プレディ中佐の慧眼には感服させられました」

「……trying to out fox 狐 と 狸」

ほつり、とマリアンが呟く。こちら。とジエニファーが肘でマリアンの腕をつつく。

「あー、信乃。さつきはごめんな……」

「い、いえ……あたしも言い過ぎました」

一方、妙に気まずい空気を醸し出す二人。

「そ、そうだ、カーラやるから、これで手打ちにしよう!!」

「そんな、気にしてないですから!!」

「私が気にするんだよ!!ほら、持ってけ!!」

強引にカーラが何本も入ったケースをぐいぐいと押し付けるカーラと押し返す信乃。

結局コーラーダースを渡され、信乃とハンナはハンガーを後にした。

「今度は模擬戦だぞ!!シノ!!」

エンジンの音に負けないマリ안의声に信乃が答え、デイジョン基地の面々に手を振る。

名残惜しそうにマリアンが手を振り、カーラは両手をぶんぶんと、ジェニファーはちよこんと手を出して、三者三様の反応を見せるBチームの隊員たちの見送りを受け、信乃たちは滑走路を離陸した。

「良い人達でしたね」

「そうね。でも、戦場では個人の性格だけではどうしようもならないこともあります」

「それは理解してます」

どんなに助けたくとも、親友だろうとも、命令であれば見殺しにするのが軍隊だという事を信乃も理解していなくはない。だが……。

「ふふ、随分と親しくなったみたいですね。特にルクシツク中尉とは……」

「ハンナ、一本のみますか?」

しみみりした雰囲気をぶち壊され、信乃がケースに入ったコーラを差し出す。

「今ここで開けると思い切り噴き出す奴ですよね、それ」

ジト目の信乃にさらりと笑顔で返しながらハンナが辞退する。高度での炭酸はダメ、絶対。

「そういえば、ユニット、治ったんですね」

「流石リベリオンの物量ですね。カールスラントのユニットの予備資材まで持っているなんて思いませんでした」

「もしなかったらどうするつもりだったんですか?」

「ハギさんに抱えてもらいます」

「さらり、というハンナ。」

「これからどうするんですか? ロンドンに向かうと夜間飛行になりますけど」

「帰りましょう。ロンドン観光が出来ないのは残念ですが」

「そうですか」

何となくそういうのかなと思った信乃は素直に頷く。まあ、コーラのケースをぶら下げてロンドンまでいくのも嫌だったので、信乃としても有り難い判断だった。

「……あれ？ハンナ、スーツケースは？」

「重たいので置いて……忘れてきました」

「いいんですか？」

「大丈夫ですよ。基地には予備もありますし、彼女が持っていた方が何かと役に立つでしょうから」

そうですか、と生返事をしながら信乃は手にしたコーラのケースを持ち直す。

必要以上の事は尋ねない。

首をつつこんで厄介な事に巻き込まれる事から自分を守る術は徹子から教わった様々な事の中でも、数少ない素直に感謝出来る教訓だった。

「さて、そろそろリヨンの防空圏内ですね。夕食までには間に合いそうです」

「その後は夜間哨戒……誰か代わってくれないですかね」

信乃の疲れたような呟きにハンナが笑みを浮かべる。

「うまく行けば、これからはしばらくはゆっくと眠れる夜が来るかもしれないですよ」

「……それはありがたいです」

何か含みがあるだろうが、表面上の意味だけを受け止めて素直な返事を返す。その辺りの小難しい事は、素直に士官殿達に任せてしまおう。

だが、信乃は知らなかった。

その士官殿……カールスラント空軍で二番目に200機のネウロイを撃墜したグレートエースを評してこんな一文があることを。

『時折抜けているところがある』  
と。

## 11. 時折抜けてる事がある

……空気が重い。

搭乗員室のソファで徹子は備え付けのカールスラントの雑誌をぺらぺらとめくっていたが、周囲の雰囲気のせいでのんびり読むような気分ではなくなってしまうた。

「大丈夫、大丈夫大丈夫、ユーリでも出来たんだもん、私でも大丈夫……」

自分の目の前で呪文のように大丈夫と唱え続けるベレーナ。大丈夫じゃない。完全に肩に力が入りすぎている。

「アンネ、私扶桑の緊張を解くおまじないを萩谷准尉に聞いてきたの」「マジで、そんなのあるの?」

「手のひらに三つ人(Menschen)って書いて飲み込むんだって」

「それって効くのか?」

「だからさつきからずっと試してるんじゃない」

他の2人も似たようなものだった。ていうか長い、スペルが長い。手のひらに収まらないだろ、それ。

あれだ、これ。ハンナが睡魔に襲われて部隊編成を間違えたに違いない。午前中はアンジェラにハンネ、信乃と経験の積んだ奴が3人いたのにこっちは逆に自分以外の3人がひよっこだ。配分がおかしい。

多分ハンネとアンネだ。『h』のつけ間違えが致命的な事態を引き起こしている。

あるいは余程自分の指導力が評価されているという事か。

いや、それはないか。カールスラント人がハギを見てオレに教育をまかせるはずがない。

まあ、兎に角、空気は変えたいところだ。

「あー。お前ら」

徹子のかけた言葉にびくつ、とベレーナ達が肩を震わせる。

ああ、まずい目をしている。空でこんなに委縮した目をしていたら、真っ先に落とされる。

咄嗟にため息を押し殺し、逆に、口元に不敵な笑みを浮かべる。

「緊張してるな?」

徹子の問いに、少しためらった様子だったが、やがてこくり、と三人のウィッチが頷く。

うむ、と一つ頷き、手にした雑誌を机の上に投げ捨ててその場に足を組む。一つ一つの動作を大げさに、まるで舞台に観客を引き込む俳優のような仕草で、徹子は口を開いた。

「確かに、お前らはまだひよつこだ。だが、訓練はしてきた。なら、きちんと飛ぶことが出来る。飛ぶ事さえできれば後は敵を倒すのに必要な事は?」

ベレーナと視線を合わせる。教師に指名された生徒のようにおずおずと、ベレーナが答える。

「ええと……射撃の腕ですか?」

「それもあるが大して必要な事じゃない。お前はと思う?」

「勇氣……とか……」

「それも大事だ。だが、それ以上に大切な事がある」

そういうと徹子は自分の目を指さして、口を開く。

「敵に見つかる前に敵を見つける事だ。どんなに素早い敵でも、レーザーを沢山撃ってくる敵でも、奇襲をかけて何かさせる前に落とせば問題はない。解るな?」

「ヒットアンドアウェイ……ですか?」

ほつり、とベレーナが呟く。成程、見た目通り座学は優秀そうだ。

「……でも、どうすれば?」

人 (Mensch en) の字を飲み込んでいた少女が尋ねる。

「見るんじゃない、感じるんだ」

適当にそれっぽく答える。

「まあ。お前らにはまだ早い」

そうやって余計な不安は煙に巻いてやる。ようはこいつらを、自分の意のままに動くように誘導してやればいいのだから。

「いいか、敵はオレが見つける。空に上がったらお前らはオレの背中以外見るな。オレの背中についてきて、オレが銃を撃った時だけ前を

見ろ。そしたらそこにネウロイがいる。オレと一緒に撃ってオレが銃を降ろしたら、同じように撃つのをやめてまたオレについて来い。それだけでいい。そうすれば必ず勝てる」

「そ、それだけですか？」

「それだけだ。それでハギはエースになった」

ここに信乃がいれば目を吊り上げて抗議するだろうが、敢えて名前を借りておく。皆が良く知ってる奴の方が具体性があるからだ。

不安が完全に取り除かれたわけではないだろう。だが、空に上がってどうすればいいか、具体的な指針を与えられた事で、ベレーナ達の表情から委縮のような色は薄れてきた。

「……ただし、オレについてくるのは簡単じゃないぞ。オレが銃を撃つまで、お前らは瞬きもするな。もしオレを見失ったら、すぐに戦闘空域を離脱して基地に帰れ」

最後に駄目押し。戦えない奴を守りながら戦うのは、ある意味一人で戦うより困難だ。

真つ直ぐ三人の目を見やる。

「そのくらいは出来るな？」

その言葉に三人が頷く。最初に比べれば大分マシな顔になった。さて、このくらいで良いだろう。

「話は以上だ。レシユケ曹長」

「は、はいっ!!」

「全員分のコーヒーを淹れてくれ。オレのは砂糖とミルクも頼む」

「え……あ、はいっ!!」

徹子の言葉に一瞬きよとした顔を浮かべていたが、すぐにベレーナが立ちあがる。

「お前らはブラックでいいのか？」

その言葉に他の2人もミルクと砂糖を注文する。ベレーナが私も同じでいいですかと聞いてきたので、徹子がそこまでオレに命令権はないと答えると、小さいながらも搭乗員室に笑い声が漏れた。

緊張感は依然として残るが、先程とは違う緊張感だ。少なくとも、嫌な感じではない。

投げ出していた雑誌を再び手に取ると、ソファに背中を預ける。後はナイトシフトの時間まで平穩に過ごせる事を願うだけだ。そう。それだけだったのだが。

ガリアにおける扶桑の神様のコネもそろそろ限界なのか、リヨン基地に未確認機襲来を告げるサイレンが鳴ったのは、甘ったるいコーヒーを飲み干そうとしたその時だった。

ハンガーの中は出撃に備え多くの兵士たちがせわしなく準備を整えている。

徹子は地図を片手に通信兵から届く情報を頭で整理しながらも、緊張した面持ちのベレーナ達を横目でちらり、と見やる。

レーダーに引つかかった飛行物体は二機。反応からして小型。デイジョン方面からこちらへと向かってきている。経度と緯度、飛行速度はと、次々に徹子の耳に情報が飛びこんでくる。

その間も三人の若手たちは飛行脚を始動すべく足をいれ、手順通りに飛行前のチェックを行っている。徹子からすればまだるっこしいくらいにゆっくりとしているように思えるが、それはそれで悪くない。

こういった手順を新人のうちから簡略化したり、サボったりする奴は大抵先が長くない。

機体に乗った瞬間にコンディションが掴めるくらいに慣熟しても尚、不慮の事故とは起こるものだ。ひよっこのうちからエースのまねごとをしても意味はない。そして、エースになっても慢心を忘れず基礎を徹底する。

だからこそ、カールスラント軍は規律正しく、故に、他国からは融通が利かないだの堅苦しいなどと言われたりするが、徹子からすればそんな事だから撃墜数をカールスラントの連中に独占されるのだと言いたいところだ。

こういったしっこいくらいの基礎の反復こそがカールスラントの精強なウィッチを生み出す所以だというのに、それを殆どの国が理解していない。



嗚呼。素晴らしい。流石規律の国カールスラント。

頭の片隅でそんな事を考えつつ通信兵の情報をまとめていると、ふとした違和感が徹子の脳裏をよぎった。

「……」

その違和感に思わず徹子が眉を顰める。

猫だと思っただけで一生懸命組みあげてきたジグソーパズルが途中で実はそれが犬だったと気が付いた猫派のような、そんな顔だ。

「おい、通信兵。無線警告はしたのか？」

「いえ、警告がネウロイに通じるんですか？」

……まあ、カールスラント兵も人間、中には横着な奴はいるという事だ。こいつがウィッチではなくて本当に良かったと思う。

「……後でお前の処遇をファイリーネ司令代行に具申しとくからな」

「ええ!？」

徹子の言葉に通信兵が慌てて警告無線を送るとか言い出したが、徹子はそれを止めさせる。

どうせなら、利用させてもらうまでだ。

内心でほくそ笑みながら次から気を付けろとだけ言い残し、自分もユニットに足を通した。

「三人とも、準備は出来たか？」

機体のチェックをしながら既に離陸準備をしている三人に確認する。

「はい、レシユケ曹長、準備完了ですっ」

「マイヤー曹長、大丈夫です」

「ヴェーネルト曹長、行けます!!」

緊張感はあるが声が震えるまでではない。エンジンと同じで人の思考や感情もレッドゾーンに入る程に昂っては危険だが、適度に回していないといい動きをしないものだ。

そういう意味では今の三人は良く回っているといっても良いだろう。

「了解だ。整備兵、エナーシャ回せ」

その言葉に整備兵が手回しで零式のエナーシャを回す。くおん、と

音を立ててエンジンがゆっくりと始動準備を開始する。他の国のユニットと違い、零戦のエンジンの始動は自動ではない。専用のハンガーゲージがあれば、機械が自動的にエナジーを回すのだが、そんな最新設備の無い臨時基地では、整備兵がエナジーを回す必要がある。

コンタクト、徹子が整備兵に合図し、整備兵が離脱した瞬間にエンジンを回す。どん、と魔導エンジンが音を立て、バラバラと音を手に立て、プロペラが回りだす。

「エンジン出力よし、フリップ、トリム中立……」

機体の隅々まで確認する。カールスラントの整備兵の腕は素晴らしい。何が素晴らしいのかというと、常に同じような状況に仕上げてくれる。マニュアル通りと言えば聞こえが悪いが、それは裏を返せば必要にして十分なラインを常に保っているという事の裏返しだ。

扶桑が悪いというわけではないが、扶桑の技術屋はなんというか求道気質というか、当たり前前の事以上をして当然という気質があるというか、頼んでもいないのにエンジンの出力を強化したり、こちらの体調を勝手に察してセッティングを微妙に変更したりしてくる。

徹子からすれば思い通りに動けばそれでいいし、むしろ毎回均一なセッティングにこちらから合わせていく方が好みである。だが、下手なことを言うと職人気質の整備兵長がへそを曲げるので言いたいことも言えない。

というか、ウィッチの体調に関しては本当に放っておいてほしい。これでも一応まだ10代の乙女なのだ。今日は『あの』日はずですから振動を極力抑えましたとか、何で飛び立つ前から精神に深刻なダメージを食らわなくてはいけないのか。しかも、奴らは純粋に良かれと思っているのが猶更質が悪い。

「出撃準備完了、滑走路チェック」

「滑走路チェック、異常なしです」

ベレーナが返事を反す。チョークが外され、4人のウィッチが空での編隊の位置のまま、滑走路に進んでいく。

着地の時もそうだが、ウィッチは飛行機に比べ格段に小さい。当然

離陸も複数で行う事が可能で、空で僚機を待つて編隊を組まずとも地上から編隊を組み、そのまま離陸する事が出来る。細かい点だが、これも航空機にない航空ウィッチの利点の一つだ。

夕焼けの空に向け、シユヴァルムを組んだ徹子達が飛び立つ。

「いいか、命令は一つ。お前ら、しっかりついて来い」

「了解!!」

無線の向うからの声に、徹子はエンジンの出力を上げる。空へ、瞬く間にウィッチ達の姿が小さくなり、そして消えていった。

早い……。

内心でベレーナが呟く。徹子の背中を二番機の位置で追うが、正直ついて行くのがやっとといった感じだ。旋回性能以外はメツサーシャルフの方が零式より優れているはずなのだが、後ろからついていてもそんな事を感じさせない。ふとすれば舵を切った徹子を追い抜きそうになったり、旋回が大きくなったりと、一時たりとも気が抜けない。他の2人はどうか確認する余裕もない。編隊を保ったまま飛ぶ事がこんなに変に感じたことは無い。

扶桑のトップエース。そんな言葉が頭をよぎる。目の前の中尉は実績、経験ともまさにそう呼ぶにふさわしいし、先日の戦闘で助けられた時思わず痛みを忘れて息を飲むほどの美しい戦い方だった。

そう、美しかったのだ。究極まで無駄を削ぎ落した動きというのは美に繋がるといふが、たった一回のズームアンドダイブで感動したのは初めてだった。

自分も、そうなれるのだろうか……否、そうなりたい。

そんな思考をしていると急に徹子が速度を落としたので編隊を乱しそうになる。いけない。

飛ぶことに集中しなくては。

そう言い聞かせ、ベレーナはじつと徹子の背中を見つめ、余計な思考を頭から追いやった。

一方徹子は背後の様子を時折横目で確認しながら、内心で小さく笑みを浮かべていた。

ベレーナがついて行くのにやつとだと思っただのはある意味当然である。何故なら、徹子は『意図的に』そういう動きをしているからだ。信乃が僚機にいたら、『遊んでないで真っ直ぐ飛んでください』と罵声が飛んでくる事だろう。

では、何故そんな動きをするのか。勿論意図はある。

旋回や急加速、制動を動きに加え、敢えて追従しにくい、だが、脱落するほどではないような動きを交えてやることで、後ろの僚機たちに自分の背中に集中せざるを得ない状況を作り上げる。これで恐怖や逡巡など、飛ぶことにとっては余計な思考を僚機の頭から飛ばしてやることと、ついでに新人たちの現在の練度も推し量ることが出来る。カールスラントのウィッチの育成技術は優れていると聞いたことがあるが、成程、新人でも機体に振り回されたり、咄嗟の動きが出来なかったりすることが無い。

後で信乃が新人だった頃の話をしたらさぞかしベレーナたちは安堵するだろう。信乃は激怒するだろうが。さて。

徹子は十分な高度を取ったことを確認し、視界を下に移す。

索敵というのはただむやみに目を皿にするだけでは意味が無い。相手の位置、速度、進路から、その日の天候、地形、時間諸々、肌で感じるすべての情報を経験則に照らし合わせ、限りなく正確な予測位置を割り出す事が肝要なのだ。

そして、徹子の見立て通りなら、数秒と立たないうちに、そこに『それ』は現れる。

「行くぞ」

徹子が短く呟き、加速しながら機体の高度を下げっていく。夕日の光を受けて、一瞬きらり、と何かが光った。

目標の背後に忍び寄るように旋回を加え、相手の2時方向から6時方向へ。時折反射する光以外全く見えなかった相手が徐々に点になり、そして大きくなっていく。もしネウロイ相手なら、完璧に奇襲に成功したタイミングである。

だが。

「あれ……?」

呟いたのはベレーナだった。

「余裕があるな。オレは背中だけを見てると言ったはずだが」

「いや、でも、あれ……」

その言葉に他の2人も目を丸くする。自分たちはネウロイを追っていたはずなのだ。何故そこに、『自分たちの上官』がいるのか理解できないといった顔をしている。

「持つてろ、レシユケ軍曹」

構わずに徹子は手にしていたMG42を放り投げ、目標に向けてさらに加速する。エンジン音に気が付いたのか、振りかえった信乃が目を丸くするが構わず、すれ違いざまに信乃が肩から下げていた99式2型2号機関銃を奪い取る。

「なー!」

信乃が素っ頓狂な声を上げる。

「よし、弾は残ってるな。結構結構」

「何で!?そこまですますか!?頭おかしいんじゃないですか!」

銃を掠め取られた信乃が叫ぶ。

「若本中尉、一体どういう事です、これは?」

訝しむようにハンナが尋ねる。たかが銃を奪うために部下を引き連れ空に上がるなど、信乃のいう通り正気の沙汰ではない。

「それはこっちの台詞なんだがなあ」

だが、徹子は二人の非難がましい視線を受けても飄々と肩をすくめた。

「オレはただ、未確認機が近づいているって連絡を受けただけだ。まさかロンドンに向かってるはずの司令代理殿が連絡も寄越さず戻ってきてるなんて、解るはずないだろ?」

「……え?」

信乃の非難がましい目がそのまま徹子の脇へそれる。

そして、新人たちもその言葉に信じられないものを見るような目が、司令代理……ハンナへと注がれる。

「連絡、しなかったんですか?」

ぽつり、とジト目の信乃が尋ねる。有り得ないものを見る目だ。たったり、とハンナの額から汗が一筋垂れる。

「ええと、それは……したような……してなかったような……」  
してません。完全に忘れてました。

「予想外のネウロイの出現に基地は大騒ぎだったなあ」

「そう……ですか……」

徹子の言葉にハンナの顔から血の気が引いて行く。

「隊長……」

「まさか隊長がそんなミスを……」

「嘘でしょ、隊長……」

ひそひそと耳に届く新兵の小さな声。

銃を持つ手が震える。こんな羞恥プレイ、雷に怯えて枕を被っていたところをキツテル少尉に見られた時以来だ。内密にするよう念を押ししたのに気が付いたらJG54の200機撃墜のエアースで大人しいけど意外とお茶目で雷が怖い人、という自分を形成するアイデンティティの一部に組み込まれる程に話が広がっていた。許さない。あの子だけは絶対に許さない。

現実を直視するのに耐え切れなくなったのか、うつむいたままぶつぶつと呟くハンナを無視し、徹子が基地へと連絡を入れる。

「予想通り司令代理殿だ。言われた通り、ちよつと釘を刺しておいた……ああ、了解」

通信を切った徹子がハンナに追いうちの一撃となる一言を伝える。

「アンジェラが帰還後第直ちに司令室へ出頭するように、だと」

「……了解です」

えー？私一応司令代理なんだけどなあ。結構お仕事頑張ったんだけどなあ。交代かなあ、それとも更迭かなあ……。

がつくりと肩を落とすハンナ。先程小細工を弄してJFWの基地に乗り込んでいった人物と同一人物とはとても思えない姿だ。

「それじゃあ、帰投するぞ」

徹子の言葉にハンナと信乃も含めたウィッチ達が帰路に付いた。

「……あれ、シノさん、それは……」

「コーラ」

ベレーナの問いに銃を奪われて激おこな信乃がそっけなく答える。

「コーラ？ひよっとしてそれを仕入れるためにわざわざロンドンへ？」

「偶然拾った」

「落ちてるものなんですか、それ」

首を傾げるベレーナだが、視線は信乃の手に行っているコーラのケースに注がれている。リヨン基地にかぎらず、欧州の戦場では嗜好品は貴重である。甘味、それもリベリオンのコーラなど、リベリオン部隊でもない限りは余程の事が無いと手に入れるのが困難である。

いいなあ、欲しいなあ、というベレーナの無言の視線に、信乃が開きかけていた口を止める。

ピンときた。自分だけでは持て余すのであれば、有効に活用しない手はない。

「……ベレーナ、一本いらいますか？」

「いいんですか!？」

ぱつと笑顔を見せるベレーナ。

「別に構いませんけど……あたしも結構手に入れるのに苦労したんですよ……」

信乃の表情にベレーナも意図を察したのか、ちらり、と隊長がこちらを見ていない事を確認すると、そつと信乃の方へと身を寄せ、小声で尋ねる。

「……何が望みですか？」

先程も言ったが、戦場に置いて嗜好品とはそれだけで価値のあるものだ。そしてそれはしばしば取引の材料にも用いられる。

それは教本に乗っていなくても、訓練学校時代からのウィッチの基礎の基礎で、新兵だろうが歴戦のエースだろうが、常識として身に付けているのがウィッチの嗜みというものだ。当然、ギンバイの上手いウィッチは撃墜数に関係なくグレートエース並の尊敬と人気を集める事となる。

「あたし、チョコレートが好きなんですよ」

「チョコレートですか……それは……」

ベレーナが思案する。ウィッチ達の中でもチョコは極めて人気の高い配給品であり、ベレーナにとっても大好物の一つである。それをおいそれと譲る訳にはいかない。

「……じゃあ、コーラ二本で」

「乗りました」

信乃が頭で計算をする。これで自分の手元にはチョコレートが自分の分も含めて二つ、コーラは10本。弾としては十分なスタートを切れる。

現時刻をもつてこの作戦をオペレーション・ミリオネアオブストローと呼称。

最終目標は酒。それも配給では手に入らないクラスの上等な奴が好ましい。

酒を手に入れば後は整備兵だ。上手く丸め込み、徹子にとられた銃を隙を見て奪還する。

待っててね、あたしの可愛い20mm。

決意の籠った眼差しで信乃が徹子の背中から下がっている99式2号2型を見つめる。

ハギのヤツ、何かまた馬鹿な事を考えてるな。

信乃の視線を浴びながら、徹子は小さくため息をついた。



## 12. ガリア、我が喜び

「それで、何か言う事は？」

アンジエラの言葉にしゅん、と肩を落としたハンナが口を開く。

「何もありません……」

「上官にこういう事を言うのは何だが、疲れているのは重々理解しているつもりだ。搭乗シフトの手違いもまあ、よくはないが無理をさせたこつちにも非が無くはない。突然出て行つたのもまあ、事情は分かつた。だがな……」

アンジエラが抑えた声で呟く。その声色は、怒りではなく呆れ。

「無線連絡を怠って部下に襲われる司令がいるか!! JG54の……いや、カールスラント空軍の恥だぞ!! 恥!! どう報告すればいいんだ!!」  
「返す言葉もありません……」

502JFW発祥の懲罰手段『正座』をさせられた司令代理が答える。簡単に出来てなおかつ効果的、その後の任務にも差しさわりの無いという、手ごろかつ人道的な懲罰手段は今急速に欧州の部隊に広がっている。広めた本人がその事を知ったら卒倒しそうだが。

「で。他に何か言う事は？」

「ベレーナ達の動きは実に見事でした。まさか私があの子達に後れを取る日が来るなんて。若本中尉の指揮能力には感服するしかないですわね」

「そうか……正座、後10分追加だな」

きりつとした顔で言い放つハンナを呆れた様に見下ろしながらアンジエラが呟いた。

「うう。だから司令代理なんて嫌なのよ、どうせ私なんて人の上に立つ器じゃないの。フーベルタがノヴィを引き抜かなければこんな事にはならなかったのよ。私ひとりじゃ無理なの……帰ってきてノヴィ……ついでにキツテルも……」

正座の痛みにはハンナが体を震わせながら情けない泣き言を口にする。

「そのフーベルタからだ。そちらで扶桑の腕利きを世話しているよう

だが、503への口利きを頼めないかとのことだ」

「ああもう……くたばれ痴れ者つて返してください」

「他にも502、スオムスのカウハバからも問い合わせが来ていたが」  
「うちは斡旋所じゃないの。無視してください。後フーベルタにはノ  
ヴィとキツテルを返せつて付け加えておいてください」

一体どこからそういう情報を聞きつけてくるのか。今現在こちらの部隊の生命線に堂々と手を付けようとする姿勢は呆れを通り越して畏敬の念すら覚える。

こちらから言わせればエースをかき集めるのは結構だがそれに見合った活躍がもつと出来ないのかと問いただしたくなる。

「それと、つい今501から問い合わせあったのだが……」

「……ミーナ中佐なら特に問題は無いでしょう。グンデュラとか、フーベルタと違って」

保留にしていた電話をアンジェラが持つてくる。どさくさに紛れて立ちあがろうとするも、床に直接それを置かれては立ちあがれない。

憎々し気にアンジェラを見上げるが意に介した様子もない。

仕方ないので正座を続行したまま受話器に耳を当てる。

「お待たせしました。ファイリーネです。お久しぶりです、ミーナ」

『ええ、久しぶりね、ファイリーネ』

聞くものを落ち着かせるような優しい声が耳をくすぐる。

『色々大変な事になっているようだけど、大丈夫？落ち着いたらまた一緒に買い物に行きたいわね。貴女が教えてくれたお店はどこも素敵だったから』

とんとんと受話器を指先で叩きながら、思わずハンナはほっとしたような顔を浮かべる。

「是非。私もミーナ中佐と出かけているときに唯一心が休まる時間ですから。それより、ミーナ……」

『そっちも大変みたいね』

とんとん。とん。

声と共に受話器を叩く音。

「……ええ『ブティック』に『買い物』に行く暇もありません。『ルイ・ヴィトン』の新作の『カタログ』を毎日見えます。どれも『素敵』ですけど、少し値段が『高』くて『手が届かない』物ばかりですね」

『そうね。少し値段が『高い』わね』

とん、とん。とハンナが受話器を叩きながら返事をかえす。アンジェラが差し出したペンと紙を受け取りながら、楽しそうに笑い声をあげて見せる。

『『ブティック』はどここの『町』だったかしら』

『パリ』です。『ロンドン』ほどじゃないですけど、少し『遠い』です。休暇を取って尋ねてみたいですが、忙しくてとても行く暇がありません」

『そうね、流石に『ロンドン』は『遠い』わね。どここの通りだったかしら。確か、シャンゼリゼ通りの『右』の方だった気が……』

『そうそう、たしか『右』の方ですね。一緒に立ち寄った『カフェ』の『近く』で……』

『そんなに近』かったかしら。結構『離れ』ていたような気もするけど』

「少し歩きましたね。でもそんなに」

とんとん、とんとハンナが受話器を叩く。

「離れて無かったはずですよ」

ふう、と息を吐き、書きなぐったメモをすぐ脇に控えていた通信兵にそれを渡す。

それを受け取った通信兵が音を立てずに部屋を立ち去る。

「そういえば、あの時買ったスーツケース、ついさつき忘れてきてしまったんですよ」

『どいこ？』

「デイジョン基地……506です」

『え？何してるの貴女？』

「うちの部隊の増援がロンドンで足止めを受けています。打ち合わせにロンドンに向かったのですが、偶然エンジントラブルが起こってしまつて、たまたま最寄りのデイジョン基地に立ち寄ったんです」

『相変わらず少し抜けているところがあるわね。それさえなければトウルーデやフラウを超えるようなエースになれるのに』

「面目ないです。ああ、それで、折角なので向うの隊長さんと少し話をしてきました。流石に少し危機感を抱いたみたいですね」

『……ふふ、心配しなくても上手くやってるみたいね。それじゃあ、少し事態は好転するかしら』

とんとんとんと受話器を叩きながらのミーナの言葉にハンナが頷く。

「それを願ってます」

頼りになる先輩の心遣いに胸を打たれながら電話を切ろうとしたその時。

『……そうそう、それともう一つ。美緒……うちの坂本少佐から聞いたのだけど、今あなたの部隊に若本徹……』

「失礼します」

がちやん、とハンナは電話を切った。

「あ、あら？」

突然切られた電話に目を丸くするミーナ。

「……美緒の親友だって聞いたから、少し様子を尋ねたかったのに」裏で暗躍しているかつての同僚のせいで後輩が疑心暗鬼に陥っているとなど露知らず、ミーナが首を傾げた。

「……もういいかしら、アンジェラ」

一方ハンナは、しびれる足を摩りながらアンジェラを見上げる。

「10分は経過したな。よし、崩していいぞ、ハンナ」

「はあ……」

ほっとした顔で足を伸ばすハンナ。

「きな臭い話だ。私ではとてもじゃないが対応できない」

騎士の末裔の家系である事を自称しそれを何よりも誇りだと思っており、本人も騎士道精神の塊のような少女の言葉にハンナが口を開く。

「私だつてこういうのは好きじゃないです。今の話を聞く限り、ガリアもブリタニアも一枚岩じゃないって事ですね……困りました」

痺れた足を揉みながら、ハンナが形の良い眉を顰める。

「で、どうする?」

「今現在、私達はガリア南部の守りの要といっても過言ではないですから、ミーナの言っていた『パリの右』もすぐに行動を移すことは難しいでしょう……アンジェラ、ネウロイの出現位置の特定は出来そうですか?」

「大体の位置は把握している」

アンジェラの答えにハンナが頷く。

「敵はネウロイ、お偉方、それに時間ですか……後は、そうですね……」  
目の前にある電話を見つめ、ハンナがため息をつく。

「やっぱり正座は止めませんか?終わってもしばらく立てそうにありません」

同時刻。

「……ラヴアル、一体これはどういうことだ?」

パリ郊外の屋敷を尋ねるなり、男は開口一番そう尋ねた。

「随分不躰ですな。ビゼー少将。パリジャンは常に優雅でなくては。それとも、先の解放戦でカールスラントの悪い影響でも受けましたかな?」

応接間に通されたビゼーと呼ばれた壮年の男は、ラヴアルが勧めたソファに座らず、代わりに机の上に書類の束を投げつけた。ウィッチへの理解を示す制服組のトップの手に、とあるルートから届いたものだ。

「JG54の救援および一部補給物資の要請、補充人員の受け入れ、近隣部隊への応援要請。全て1週間以上前から申請が続いているものだ。何故、私の前で握りつぶした?」

「何故私がそのような事を出来ると?私は一介の政治家ですぞ」

「書類を操作していた者が全て自白した。他の息のかかった者たちも、あぶりだされるのは時間の問題だ」

ほう、とラヴアルが首を傾げる。しらを切るような態度に、ビゼーが口を開きかけた瞬間。

「そうですな。私は関わってはいませんが、敢えて言うなら、必要な

いからでは?」

平然とそう答えると、ソファの上のシガーケースから葉巻を一本取り出した。

「何?」

「JG54……でしたかな?彼のリヨンを占領したままのカールスラントのウィツチ部隊は。かの部隊ではまだ殉職者はおろか、重傷者すら出ていないそうではないですか。今の戦力で十分であれば、それ以上の増援など不要では?」

高級そうな葉巻を切り、マツチで火をつける。

「占領ではない、駐屯だ。戦場も知らぬ貴様には解らんかもしれんが、殉職者が出ていないとはいえ、補給が無ければやがて兵もウィツチも摩耗する。祖国を守るために戦っているものを貴様は見殺しにするつもりか?」

「祖国を?」

その言葉にくっくつ、とラヴァルが笑みを浮かべる。

「何が可笑しい!?!」

「いえ、それならば猶更ガリア軍が守るべきものでしょう。他国の、それもカールスラントのウィツチ達に任せ、後方で震えているとはガリア軍の名折れではないですか」

「黙れ!!」

ビゼーが怒鳴る。

「わが軍にどれだけの力があるのか知っているのか?そうしたいのは山々だ。だが、現状でそれが適わぬからこそ、我が国を守る少女達に協力をせねばならぬだ!!何故それが解らん!?!」

「506で十分でしょう。その為に創設するのですから」

「出来てもいない部隊より、今戦っているものが重要だ!!現にネウロイは我が国に侵攻してきているのだぞ!?!」

それでもラヴァルは笑みを崩さない。ぎり、と拳を震わせるが、暖簾を押すだけのような問答をこれ以上長引かせるつもりはなかった。

「……ド・ゴールにこの事は伝えさせてもらおう。それまで貴様にはしばらく大人しくしてもらおうか」

その言葉と共に、数名の少女が部屋に入ってくる。ガリア空軍の制服を着た少女達に取り囲まれても、ラヴァルは驚いた風もなくビゼーを見返した。

「素晴らしい。ガリアにもこれだけのウィッチがいれば、猶更カールスラントの部隊など必用なく感じますな」

「その口、二度と叩けんようにしてやる……連れていけ」

ビゼーが言い放つ。

だが、次の瞬間。

少女達が抜いた銃口は、ラヴァルではなく。一斉にビゼーに向けられた。

「な……う？」

「どうやら君は勘違いをしているようだね、ビゼー少将」

葉巻を口につけ、ラヴァルが笑みを浮かべる。

「先ず第一に、この子たちはウィッチではない。今頃彼女たちはブリタニアで久々の休暇を満喫しているだろうね。そして第二に、君の行おうとしている調査はいつまでたっても行われぬ。君が動くことは、この前から私も知っている事だからね。そして、第三に……」  
ラヴァルが三本目の指を立てると同時に、少女達が一斉に弾き金を引いた。

「……二度と口を聞けなくなるのは、君の方だよ」

血塗れになり、その場にどきりと倒れたビゼーを見下ろし、ラヴァルは口から紫煙を吐き出した。

「……早く『これ』を片付けてくれないか。サボネリーの絨毯が汚れてしまう。後、『教授』には礼を言っておいてくれ」

そして、最後に一言。

「……ガリア、我が喜び……」

「ガリア、我が喜び」

少女達も一言呟いて動き出した。

1940 ブリタニア タングミーア基地

「おい、ちよつといいか、荻谷」

「あ……はい……。なんででしょうか、若本少尉」

司令室から出てきた信乃はその言葉にわずかに体をこわばらせ、返事を返す。

つい今も、戦闘中の独断行動を咎められたばかりだ。次やれば、営倉に入れるとも言われた。

だが。

怒られるのには慣れている。何処かあきらめにも似た、そんな顔をして振りかえった信乃を見て、徹子は肩をすくめて苦笑した。

「緊張なくていいぜ。オレはあの石頭とは違えよ」

石頭とはこの基地に居る司令官の事だろう。ウィッチ部隊を現場で指揮するのはウィッチだが、基地運営は男性の軍人が仕切っていた時代だ。親の様な年の軍人に説教をされて気落ちをしない少女がいるだろうか。

「ご苦労だったな。酷い事されなかったか？」

「あ……はい……」

ほん、と頭を叩かれた信乃が思わずうなずく。それと同時に信乃の顔に僅かな戸惑いが生じる。

……怒っていないのだろうか。この人は。

この基地に居る人は、皆どこかぴりぴりしている。自分がどんくさかったり、不器用だったりするせいもあるだろうが、自分を見ると少し怒ったような顔をするのが普通だった。

「ちよつとついて来い。良いものをくれてやる」

「は、はあ……？」

そういつて信乃に背を向け歩き出す徹子をちよこちよここと追いかける。

下士官の部屋を抜け、士官室へ。そのうちの入室……徹子の使用している個室に招き入れると、信乃はさらに不思議そうな顔をした。



「いいから入れ」

「は、はい……」

おどおどとした様子で部屋に入る信乃。下士官は個室ではなく数名で一室を利用しているが、士官ともなれば部屋は個室だ。下士官の部屋よりも狭いが、周囲を気にする必要はない。

「まあ、座れ」

そう言い、椅子を指差す。でも、と言う信乃を半ば強引に座らせると、新藤の部屋からくすねてきた瓶を一本信乃に渡して徹子はベッドに座る。

「これが、良いもの……?」

にやっと笑い、徹子が栓を抜いてそれに口を付ける。甘みと炭酸が心地よく喉の奥に流れ込む。

「美味いか?」

同じように口を付けた信乃がこくり、とうなずく。

「サイダーは余り飲まないか?」

「はい……その……」

「良いから飲め、炭酸が抜けると不味くなるぞ」

曖昧に頷きながら炭酸の瓶と目の前の徹子を交互に見つめる。目の前の上官が何を考えているのか推し量っているかのような、そんな複雑な顔だ。

こういったおどおどした所はこいつが遣欧艦隊に派遣された時から変わらない。皆より一回り年が低く、腕は悪くないが、人見知りでやや臆病。

遣欧艦隊のウィッチの中でも、何故この子が派遣されたのか。もう少し内地で訓練を詰んでからの方が良かったのでは、という声もある。

別にこの少女を嫌っているものなどいない。だが、少し戸惑っているのだ。この年で派遣された事に。そして、無謀なまでに敵に食らい付いて戦おうとする事に。

「……いただきます……」

やがて観念したように瓶に口を付ける信乃。

両手で瓶を持ち、舐めるようにちびちびと瓶に口を付けている信乃を見て、ぽつり、と徹子が尋ねた。

「……なあ、どうしてあんなことをしたんだ？」

一瞬びくり、と身を竦ませる信乃の頭を徹子がぽん、と叩く。

「怒ってねえよ。そんな顔すんな」

責めるような口調ではない。

純粹に気になったから、といった口調で徹子が尋ねる。

あんな事。昼間の戦闘のことだ。ロツテを組んだ上官の命令を無視し、敵に食らい付いて撃墜。そのまま合流せずに戦った。

撃墜数3機。それを新人の、それも12歳のウィッチが成し遂げたのだ。大戦果といってもいい。

だが、怒られた。命令を無視したからだ。

「……とせるから……」

「ん？」

「落とせるから、落としました。あたしには、それが、出来るから……」

「そうか。だが、命令を無視してまでやる事か？」

「ネウロイがいるから、皆傷つくんです。倒さないと……また……」

「あの日の事か？」

びくり、と信乃が体を震わせて徹子を見つめる。

いつも伏し目がちでわからないが、信乃は中々可愛い顔をしているのだ。もう少し顔を上げていけば、周囲からもっと可愛がられる筈なのに。

「……はい」

だが、徹子の言葉にすぐ顔を伏せる。サイダーを飲んで少しは気がまぎれたようだが、それでもやはり言葉は少ない。

「……あたしが、弱かったから……」

しばらくの沈黙の後、ぽつり、と信乃が呟く。手にしたサイダーの瓶の中身をくい、と飲み、吐き捨てるように口を開く。

「あたしが弱かったから、あの時、あたしがネウロイを倒し損ねたから……もつと、強くならなきゃいけないんです……あたしが、弱かったから……」

ふう、と徹子がため息をつく。

初戦から酷いトラウマを植え付けられたものだ。はつきり言って、最初の実戦など空に飛べれば御の字、弾き金を引ければ十分すぎるくらいに戦果とっていいくらいだ。

だが、そのせいで自分の目の前で取り逃がしたネウロイが避難民たちを乗せた船を沈めた。結果が全てではないが、考えうる限り最悪の結果となったのは間違いない。

「だからといって、命令無視はするもんじゃない」

「……若本中尉だって、しょっちゅうしてるじゃないですか」

お。うっかり口にしたのかもしれないが、中々こいつは曲者だぞ。思わず苦笑しそうになるが、敢えて押し殺す。

「おい、仮にもオレは上官だ。今の発言は……」

「あ……それは、その……」

すこし慌てた様に顔を上げる信乃。

「冗談だ」

信乃がはう、と息を吐く。

「見た目によらず、頑固だな。お前は」

不器用ともいうが、短所は長所でもある。

「……そっか。まあ、そうだよな」

ぽつりと呟く。流石に引きずるか。あれだけの惨事を目の当たりにすれば。

「……解った」

徹子もサイダーを飲み干して、静かに口を開く。

「強くなりたかったんだな、萩谷は」

信乃は無言のまま、こくり、と頷く。

その姿は誰かに重なる。

自身の魔力を制御しきれず、或いは、自分の弱さを恥じて、泣いていた幼馴染たちの姿に。

「なら、オレが強くしてやる」

「……え？」

ぽつりと呟いた徹子の言葉に、思わず信乃が顔を上げた。

翌日。

朝早く、空も白みかけていた頃。突然の音が部屋に響いた。

「おい、起きろ萩谷!!」

「へ……若本中尉……? いったいどうし……あ……」

眠っていたところをたたき起こされ、わけも解らずストライカーの格納庫へ引つ張って行かれ、朝食代わりの握り飯を二つ、徹子から手渡される。

「食べる、オレの作った朝飯だ」

「あ、はい……」

何故ハンガーで食べる必要があるのか。首を傾げながらもおにぎりをほおぼる信乃に、徹子がまるで散歩に行くかのような口調で口を開く。

「よし。食べたなら空に行くからな。準備しろ」

「あ、はい……はい?」

「特訓だ!! 特訓、オレも暇だしな、みっちりやるぞ!!」

「ええっ!？」

わけもわからぬままおにぎりを二つ腹の中に押し込み、10分後には信乃と徹子は空に上がっていた。

「それじゃあ、ルールは簡単、背後を取って相手のズボンを先に5枚撮影した方の勝ち」

扶桑ではよくある格闘戦の練習方法だ。要は背後を取るための訓練だ。

カメラを手渡され、信乃が顔を上げる。

そして。

「これで5枚目だ」

「あう……」

全然歯が立たなかった。

同じ機材、同じ練習でどうしてここまで差が出るのか。

「はあ、全然駄目だな、萩谷」

その言葉に少なからずショックを受けた様にうなだれる信乃。実戦を重ね、それなりには実力がついてきたと思っていた矢先にこれで

ある。

「解るか、オレに負けた理由」

「……はい」

この年にしては信乃は模擬戦では滅法強い。それは痛覚を察知できる固有魔法で、撃たれる寸前に攻撃を回避できるからだ。

だが、カメラのシャッターには痛覚は無い。

固有魔法を封じられた状況でここまでの差が出る理由。

それはつまり、純粹に飛行技術が劣っている。

それも天と地ほどに。

うなだれる信乃の頭を叩き、徹子が口を開く。

「なあに、そのくらいじゃないと鍛えが無い。これから特訓だ!!  
ビシビシ行くからな!!」

「え!」

それから、ひたすら練習漬けの日々が始まった。

朝も昼も、休みは昼の給油の間、おにぎりを二つ三つほおぼるだけ。日が暮れるまで空を飛び、夜になって休もうとすると徹子が現れ部屋に連れ込み、サイダーや紅茶を飲みながらぐだぐだと話を聞かされる。説教ではない。単なる世間話だ。

その話は自分の身の上からリバウにいる親友たち、そして、上司や同僚の愚痴など様々だ。

しばらくは黙って聞いてた信乃だったが、話を振られるうちに色々な話をしていた。故郷の事、家族の事、ウィッチになりたかった理由。好きな映画や本の事。

「お、扶桑海の閃光か。お前もアレでウィッチに憧れた口か?」

「はい。加東圭子さんに憧れてました。肩を負傷しても敵に弾を当てるところが格好良くて……実際ウィッチになってみると、肩を痛めていようがいまいがあんな風に弾が当たらない事は良く解りましたけど」

「お前が下手クソなだけだ。どうしてそこだけは全然成長しないんだ」

「うう、そう言われても……」

「……というか、あのシーン。オレもいたんだけどな」

「へ？出てたんですか？若」

本気で問い返してくる信乃の頭を思い切りなで回す徹子。わしやわしやと髪を乱され、信乃が悲鳴のような笑い声をあげた。

いつしか信乃は徹子にすっかり懐いていた。呼び方も『若本中尉』から『若』へと代わり、おどおどしたような雰囲気はなりを潜めていた。

人と触れ合わず、任務ばかりをこなそうとしていた時。いつもいつも思い出していたあの日の人々の助けを求める声が、チリチリとする胸の痛みが、徹子という時は不思議と受け入れられるような気がしていた。

一緒に訓練をして、戦い、ジュースやお茶を飲みながら談笑して、夜も更ければそのまま眠りにつく。

そうすると翌日には再び徹子が信乃を引っ張って飛行場まで連れていく。

毎日同じような日々が続いた。

戦闘がある日もお構いなしに、徹子は信乃を二番機につけ、徹底的に振り回す。命令違反をしている余裕などない。何しろ命令が『兎に角敵に突っ込んで掻き回せ』だの、『オレの撃ち漏らした奴、全部撃て』だの、無茶振りばかりなのである。

くたくたになって帰投すると、すぐさま練習を再開する。どこにそんな体力があるのか。

そんな毎日を繰り返して何か月たっただろうか。徹子の部屋に泊まるのが当たり前になっていたどころか、ベッドの脇に自分用の布団まで用意され、まるで泊まり込みで修業を受ける弟子のように、徹子と一緒に過ごす生活が続いていった。

いつしかそれが当たり前になり、そして、それがそのまま続くと思っていた。

だが。

「なあ、ハギ」

「はい、若。なんですか？」

連日の特訓と戦闘の疲れでふらふらになりながらも、サイダーの瓶を手にしながら笑顔で尋ね返す信乃に、徹子が不意に真面目な表情で告げる。

「ハギはもうオレが教えられることは全部身につけた。訓練はもう終わりだ」

「え・・・？」

笑顔が凍り付く。一瞬で疲れが吹っ飛んだ。

「ど、どういうことですか？あたし、何か悪いことでもしましたか？」

捨てられそうな子犬の様な目で徹子を見つめて聞き返す信乃に、徹子が小さな笑みを浮かべる。

「ちげえよ。免許皆伝だ」

そう言い、徹子が信乃の私の頭をいつものようにわしゃわしゃと撫でる。

「近々部隊編成があるのは知ってるだろ？」

「はい、オラーシャ方面で大規模な反攻作戦があるって……」

「遣欧艦隊からも先行して何人かウィッチが派遣される。その一人がお前だ、ハギ」

「…………え？」

「お前の活躍を知った向うのお偉いさんが、是非呼びたいって事だそうだ。こんな事、滅多に無いぞ」

固有魔法もそうだが、徹子の下で信乃はめきめきと実力を付けていた。徹子にはまだ及ばないが、並大抵のウィッチには負けることは無いと徹子は太鼓判を押していたし、信乃もその自信はあった。

そして、それが認められた。13日で敵ネウロイを大型、中型合わせて18機の公認撃墜。これは扶桑海軍、否、扶桑皇国でも歴代一位となる高密度撃墜記録だ。

仲間の援護があつたとはいえ、これだけの記録を打ち立てるウィッチはそう多くない。他国の部隊の耳に信乃の名前が届くのも、時間の問題だったと言える。

しかし。

「そ、そう……ですか……」

「おいおい、そんなに緊張すんな。オレ達もすぐに行くから、それまで向うで戦果を挙げてこい」

「……その、緊張じゃなくて……」

だが、信乃はその言葉にぽつり、と呟く。

嫌だ。

この人と別れたくない。

「……ハギ」

「……あたし、その……」

無理です。そう言いかけた時、徹子が口を開く。

「そうだな、お前はまだまだだ、特に射撃。こればかりはどうしようもない。お前ほど才能の無い奴は初めて見たぜ」

あう、と信乃が更に首を下げる。

「……だけどよ、お前には敵に食らい付く度胸も、技術もある。どんな敵でも近づけば必ず弾は当たる。そうだろ？」

「……」

「それだけじゃないぜ。最近明るくなったからな。前はオレ以外の奴とはまともに話せなかつたくせに、今じゃ他の奴等とも仲良くやってくる。大丈夫。違う国の奴でも、今のお前なら仲間になれる。辛くなったら手紙でもなんでもオレに寄越せ。飛んで行ってやるからよ」

その言葉に信乃が顔を上げる。本当ですか？と尋ねる信乃に、徹子が大きく頷く。

「ああ。任せろ」

そういつて信乃の頭を撫でる徹子。

……大丈夫。こいつは強い。きつと、どこに行っても大丈夫だ。

……だが。

徹子が、その判断が、大きな間違いだったと知るのは、もう少し後の話である。



### 13. ナイトレイド

「しっかし、レーダーも夜間視も無しによく飛べるよね。怖くないの？」

夜間哨戒に備え、明かりが落とされた薄暗い搭乗員室中で、アルマの問いに信乃が肩をすくめる。

「怖いに決まっています」

ありや、とアルマが首を傾げる。思っていた答えと違うからだ。

「でも、怖いからって戦えない訳じゃないですから」

そう言っただけで信乃がカードを一気に4枚捨て、新しくカードを取る。ほう、と笑みを浮かべる。

「どうする？上がる？降りる？」

「こっちも、戦えない訳じゃありません。上がります」

「そっか。じゃあ私も」

そういつて互いにカードを見せ合う。

「スリーカード」

「残念、ツーペアだ」

先程奪い取ったコーラを返しながら、アルマがカードをまとめて再度シャッフルする。ここ数日、夜の間はずっと薄暗い搭乗員室でアルマと当直任務にあたっている。カードゲームをしながら、ぼつりぼつりと話をするうちに、信乃もこの見た目は金髪碧眼のお嬢様、中身はやんちゃな問題児であるアルマの人となりは何となくわかってきた。

ナイトウィッチとしては新人だが、元々JG54に長年在籍し、ハンナ・フリーネ大尉の下、それなりの戦果を挙げてきた事。色々と問題を起こしてはハンナに迷惑をかけてきた事。それでも彼女を尊敬し、再度同じ基地に配属された事を少なからず誇りにおもっている事、ハンネ・A・ハーンとは同期で、昔の彼女はもつと粗暴な性格だった事。ナイトウィッチの訓練を受けるにあたり、部隊から離れる事に少なからず葛藤があった事、そして、今自分が部隊により貢献できるようになったことを誇らしく思う事など。

そして彼女もまた、信乃の事をよく知るようになってきていた。

「シノの固有魔法だけ？その、皮膚を通して伝わる独特な感覚によって感知される痛覚に限定された未来予知……とかいう」

「チリチリです……よくそこまで覚えましたね」

「だってチリチリって……本当にそんな名前なの？」

「残念ながら、本当です。最新版の世界魔女固有魔法辞典にも記載されました。多分世界一聞抜けな名前の固有魔法ですよ」

配られたカードを見て信乃が笑みを飲み込む。スペードとダイヤのクイーン、ジョーカーが一枚。残りの二つは数字は10と8で両方スペード。フルハウスか、ストレートか。フラッシュユカ、或いはフォーカード、より取り見取りだ。

「最初はいいい名前を考えようとしたんですけど、前例のない固有魔法だって事と、説明が難しい能力だったので、結局あたしが『撃たれそうな場所がチリチリするんです』っていったからチリチリになりました」

「……凄いけど、可哀想……」

阿保みたいな名前もそうだが、戦場で常にそんな感覚に晒されるというのはたまったものではないだろう。そんな能力、自分だったら気持ち悪さと恐怖でパニックに陥る自信がある。

アルマがカードを捨てる。一気に3枚。勝ちほぼ確定だが、それを知ったアルマに抜けられては意味が無い。一枚だけ切ったら間違いない向うは降りる。

「便利ですよ？夜で相手が見えなくても、相手がどこを狙っているのかだけはしつかり解りますから」

それがあるからこそ、速成であるが夜間哨戒の訓練も受けたのだ。出来る事は多いに越したことは無い。

10と8を切り、カードをめくり落胆する。8と3。なまじフルハウスの可能性があっただけ後悔が大きい。

「それって、こういう場面でもいかせるの？」

「それが出来たら、今頃アルマの懐の物を全部巻き上げてますよ」

「違う、とアルマが笑う。流石の固有魔法でも懐の痛みまでは予知できない。」

「さて、今度はどうする?」

「……降ります」

信乃が肩をすくめてカードを見せる。

「残念だったね」

そういつてアルマがカードを放り出す。ブタだった。

「連勝にはならなかったね」

「負けなければいいですよ」

そういつて今度は信乃がカードを切る。アルマに鍛えられたお蔭で、大分いい勝負が出来るようになってきた。最も、アルマ曰く、弱い奴から巻き上げるのは好みじゃないという事で、多少は手加減をしてもらってはいるが。

「……信乃は強いね」

一瞬だけ、思わぬ言葉にカードを切る手が止まる。カードの事かと思っただが、声色からそれは違うと察した。

「弱いですよ。空に上がるときはいつでも怖いですから」

忌々しい固有魔法のせいでもいつでも恐怖に晒され続ける空は嫌いだ。そして、そんな臆病な自分をもつと嫌いだ。

「でも、上がるんでしょ?」

信乃が配ったカードを受け取り、アルマが答える。

夜間搭乗員、ナイトウィッチの間には奇妙な連帯感やコミュニケーションが生まれるというのは何となくわかる気がする。暗闇の中の心細さの中では、人は自然と他人の温もりを求めるものだ。

アルマともそうだ。たった一週間で、ここまで赤裸々に自分の気持ちを曝け出すことになるとは思ってもみなかった。

アルマがカードを切る。一枚。

信乃もカードを切る。二枚。

「……どうする?」

「……それはもちろん……」

信乃が口を開きかけた瞬間、薄暗い搭乗員室にサイレンが響き渡った。

「上がりますよ」

カードを放り投げ、立ちあがる信乃。

「うん、じゃあ私も上がろうかな」

アルマもカードを投げ捨て、信乃の後を追った。

灯火管制でぎりぎりまで灯りの落とされた深夜のハンガーは、それでもスクランブルにそなえて騒がしい声に包まれていた。

「お疲れ様です、萩谷准尉」

当直に当たっていた若い整備兵が信乃の姿を認めねぎらしいの言葉をかける。

「そつちも、ご苦労様です」

言いながらユニットに飛び乗る。

「あの……言われた通りに用意したんですけど、大丈夫ですか？」

「夜間なら旋回性よりも火力ですから」

そう言い放ち、アルマの予備のフリーガーhammerを担ぐ。ナイトウィッチの真似事は出来ないが、アルマの火力の足しにはこっちの方がいい。

取まわしに難はあると言えど、重量自体は大したことが無いうえ、夜の空で機動性は求められない。最悪捨ててしまえばアルマをかかえて離脱する事くらい容易いことだ。それに、フリーガーhammerの予備はアルマ一人では持て余すぐらいには残っている。20mmを強奪された以上、こっちの方が夜の空には最適解だ。

「マジで持ってくんだ。使った事あるの？」

「無いです」

信乃はきつぱりと言い切った。

「誘導、索敵、照準、全部アルマに任せます。あたしはアルマに合わせてこいつを撃ったら離脱しますから、後はアルマがどうにかしてください」

カールスラントの夜戦主力ユニット、Ju88Gに足を通したアルマにそういうと信乃は誘導に従い滑走路へと向かう。

逆に言うとなんか自分か夜間で役に立つ手段は存在しないのだ。最初に出会った時、アルマは夜間戦闘は初めてだと言ったが、その緒戦で敵を見つけ、攻撃し、撃破した。自分がついて行っても手伝える

のはせいぜい火力の後押しで、後は正直足手まとい以外の何物でもない。

フリーガーハマーを放つたら固有魔法を生かして逃げ回り、上手くいけばアルマの楯くらいにはなれるかもしれない。それ以上の事が出来ると思えるほど自惚れてはいない。

「格好いいね、信乃」

「茶化さないでください」

「本気だよ」

アルマがそう言ってウインクする。

夜間灯火の発煙筒が並ぶ滑走路に並び立ち、信乃が尋ねる。

「そういえば、さっきのカード、アルマは？」

「スピードのフラッシュ。帰ったらコーラ貰うからね」

「それは残念ですね」

先に離陸体勢に入ったアルマを追いながら信乃が勝ち誇ったように笑みを浮かべる。

「あたしはファイブカードです」

最後の最後でまさかのジョーカー二枚。啞然とするアルマが空へと消えていき、その後を信乃が追う。

暗闇の中、ユニットが発する小さな光はあつという間に夜の闇に飲まれていった。

アルマが先行し、信乃がその後を続いて行く。

幸いにして雲が少ないが、三日月の照らす空は満月の時に比べてやや薄暗い。この前は曇り空で、空と地上の区別がつかない程だったので、まだマシな方ではあるが。

「信乃、ついてきてる？」

「何とか」

Ju88Gに比べ、高高度性能、上昇性能共に非力な零式でアルマの後を追う信乃。

「見失ったらすぐ引き返してね。探してる余裕なんてないよ」

その間にもアルマは同時に魔導針を展開。アルマの探索魔法の範囲や精度は、レーダーを介しても熟達したナイトウィッチに比べては

るかに精度も低く、探索距離も短い。これは元々の探索魔法が弱かったり、或いは魔導針の扱いになれていなかったりと要因は一つではない。

だが、それでも夜間飛行に熟達した普通のウィッチに比べたとしても、ずっと早く正確に周囲の状況を把握できる。

何しろナイトウィッチでなければ、自分の正確な位置を把握するために星の位置や飛行時間など様々な要素を計算して割り出さなくてはいけない。戦闘行動中でもそれを怠れば、例え相手を撃墜してもその後基地にたどり着く事が困難になるからだ。それだけを考えても、速成であれナイトウィッチがいるのといないのでは、2、3人のエースウィッチがいるかいないかくらいの違いがある。

アルマは頭の中に叩き込んだリヨン基地周辺地図と魔導針を介した魔法探査で検知できる周囲の地形を照らし合わせる事で瞬時に把握できる。

索敵班から受けたネウロイの予想針路から最適な位置を割り出しながら移動。敵ネウロイが予想針路から外れていない事を魔導針で確認し、狙撃位置で停止する。

「フリーガーハマーだけじゃなく、メルスも借りてくればよかったですね」

「次からそうしなよ。私の予備があるはずだから」

空中に静止したアルマの隣につけた信乃の言葉にアルマが苦笑して答える。

「さて、信乃、準備はいい?」

そう言いながらアルマがフリーガーハマーを構える。

「私が先に撃つから、信乃は一発目が着弾したらその少し手前へ向けて。この暗さで狙える?」

「無理ですね」

「素直で結構。じゃあ、そのまま構えてて。もし私が外したら、敵が見えるまで引きつけてから撃つて」

「努力します」

「解った。私が撃ち終わったらそっちのハマーと交換。それでいこ

う」

「そうしてください」

「凄い。あたし、何の役ににも立ってない。

「予備のフリーガーハマーを運んでくれただけでも感謝してるよ」

「……気を使われると余計に辛いです」

「格好いいよ、信乃」

「あ、からかわれてたんですね、あたし」

慣れない夜間飛行にもマイペースな信乃の言葉に肩の力が抜けたのか、アルマが笑みを浮かべる。

「それじゃあ、いくよ……」

言いかけて、ふとアルマが眉を顰める。

魔導針から探査魔法を再度放ち、首を傾げる。

「どうしたんですか、アルマ」

信乃の問いには答えず、アルマは耳元の魔導無線に手を当てる。

「コントロール、ネウロイの反応が消えた、そっちで確認できる？」

『いえ……反応消失。中尉が落としたのではないのですか？』

「違う。よく探して」

アルマと信乃の顔に緊張が走る。レーダーからも探査魔法からも姿を隠すことが出来るネウロイなど聞いたことが無い。もしいるとすれば、夜間戦闘の根底を覆す最悪の新種が現れた事を意味する。

『こちら管制。矢張りネウロイの反応確認できません。これは……気を付けてください、中尉』

緊張した声が帰ってくる。ナイトウィッチの探索魔法を逃れる術を持ったネウロイ。そんなものがいれば人類の夜戦の根底が覆る。

「……信乃、ハマーを私に。そして今すぐこの場から離れて基地に戻って。コントロール、もし私の通信が途絶えたら、基地に緊急事態警報を出して」

今までとは打って変わった緊張した声色だ。それだけで事態の重さは押し計れる。

「アルマ、あたしの固有魔法なら視界に関係なく攻撃を察知できます。あたしの後ろに下がって、ネウロイを探すことに集中してください」

フリーガーハマーを渡しながら、信乃がアルマの前に出る。この位置なら固有魔法で敵の攻撃をシールドで防げるはずだ。

「仲間を楯になんかできないよ」

「アルマ一人で残るよりは生存率が上がります、早く!!」

信乃の言葉にぐつ、と言葉を飲み込み、再度探査魔法を放つ。一刻も早く、ネウロイを見つけなければ。

「……反応、見つけた。だけど、遠い」

そういうと、アルマがフリーガーハマーを構えなおす。先程よりも小さく、より離れたところだが、確かに飛行する物体の反応があった。

「いきましよう、アルマ」

「遅れても探さないよ、信乃」

信乃とアルマが手を伸ばせば体が触れ合うほどの至近距離を保ちながら反応のある方角へと向かう。出来る限り近づかなければ、信乃の固有魔法の有効範囲でアルマを守る事は出来ない。緊張感の漂う中、互いの吐息すら感じられる距離を保ち夜の空を駆ける。

「信乃、相手はこちらに向かって飛んできてる。あと5……いや、3キロでフリーガーハマーの射程範囲に入るから。防御、お願い」

アルマがそう言いながら二丁のフリーガーハマーを構える。

信乃は固有魔法で少しでも攻撃の予兆を察知したら、安全範囲までアルマを移動させなくてはいけない。信乃が気にするのは攻撃する対象ではなく、どうやって逃げるか。シールドを張るか、アルマを引っ張って急降下するか、或いは突き飛ばすか。相手の攻撃によって瞬時に自分とアルマの退避先を決めなくてはいけない。役目は重大だ。

射程範囲まであと1キロ。二人の緊張感が最高潮に達しようとした次の瞬間。

『……て……だ……い……って、うた……で……』

魔導通信のオープンチャンネルにノイズと、その合間を縫うように聞こえる女性のような声。

聞き違いかと思ったが、射程範囲に近づくとつれ、その声は鮮明さを増していく。



『……ちら……06所ぞ……ファア……ブランク……味方・撃たないでくだ……い』

「アルマ!!射撃中止です!!」

徐々に鮮明になっていく『聞き覚えのある声』に、信乃が両腕を広げて背後のアルマに叫ぶ。

「っ!」

弾き金を引く手を止め、アルマも顔を上げる。

遙か遠くで一定の感覚で点滅する白い光がアルマの目にも見えた。ストライカーユニットのストロボライトだ。

夜戦時には消灯しているはずのそれが点滅しているという事は、すなわちこの空域で戦闘は行われていないという事だ。そして、探査魔法の反応も、その光を放つ先にある。

「……こちらカールスラント空軍JG54『グリウンヘルツ』第一航空隊所属、アルマ・ブレヴィス中尉。そちらの所属を問う」

アルマの魔導無線に、聞き覚えのある声が信乃の耳に飛び込んでくる。

『ああ、よかった。通じたんですね。こちらは第506統合戦闘航空隊『ノーブルウィッチーズ』B部隊、ジェニファー・J・デ・ブランク大尉です。当空域においてネウロイの撃墜を完了しました。戦闘行動を中止して合流してください』

その言葉に思わず信乃が目を丸くして叫ぶ。

「ジェニファー!?!どうしてここに!?!」

『え、その声……もしかして萩谷さんですか?』

向うもからも驚いたような声が帰ってくる。

「え?知り合い?」

アルマの問いに信乃が答える。

「はい……今日知り合ったばかりですが」

自機の位置を知らせるナビゲーションライトとストロボライトを付けたアルマと信乃の元に、リベリオンのF6Fを履いたジェニファーが近づいてくる。

「ジェニフアー、ナイトウィッチだったんですか？」

「いえ、速成訓練は受けましたけど。幸い、うちの基地には夜間哨戒用のレーダーがあるから、何とか真似事が出来ているだけです」

そういつて謙遜するジェニフアー。

だが、この戦闘をきっかけに彼女は夜間飛行の適性を認められ、後に正式に夜間戦闘脚F7F-3Nを受領して506のBチームの夜の要を担う事になる事になるのだが、その事は今の彼女が知る由もない。

「それでも凄いですよ。あたしも速成訓練を受けたけど、夜に一人で飛ぶ自信はないですよ」

信乃が感心したように呟く。

「だ、だからそれはレーダーのお蔭です……」

褒められることになれていないのか、顔を赤くして照れたようにジェニフアーが呟く。

「積もる話があるみたいだけど、それより……ええと、ブランク大尉？」

アルマが口を開く。

「あ、はい」

「ここからだと言いつつジョン基地まで結構距離があるけど、どうする？」

一旦うちの基地で補給してくっ。」

その言葉にジェニフアーが首を振る。

「有り難い申し出ですが、まだ燃料は持ちそうです」

リベリオン海兵隊の最新機材、F6Fは元々広い太平洋の上を長時間飛行することに耐えられるだけの航続性能を課せられた機体だ。零式までとはいかないまでも、カールスラントのユニットと比べれば段違いの距離を飛ぶことが出来る。

「そっか、残念。これで一勝負でもしたかったんだけど」

そういうとアルマがカードを切る仕草をして見せる。

「機会があれば是非お願いします。ブレヴィス中尉」

差し出された右手を握り返してジェニフアーがほほ笑む。

「あと、それともう一つ聞きたいんだけど、いいかな？」

「何ですか？」

「どうして今回、ネウロイを捕捉できたのかな？」

「ああ、それは、今日から夜間哨戒のルートが変更になったんです。東方向の探索範囲を国境付近までひろげて重点的に哨戒するようにと……まさかいきなりネウロイを見つけることになるとは思いませんでしたが……」

「ふうん……」

アルマが含みのある表情を浮かべる。

「……じゃあ、このあたりにネウロイが頻出しているって報告は？」

「え……？」

その言葉にジェニファアの瞳が驚いたように見開かれる。

「聞いてないんだね、やっぱり」

「どういう事ですか？そんな報告、こちらには一切……」

「言葉通りの意味だよ。最近ずっとリヨン方面へのネウロイの侵攻が続いている。届いていないという事は、こっちの基地からの報告がどこかで途切れているという事。おかしいと思わない？こんな近くなのに」

アルマの言葉に少なからずショックを受けた様子のジェニファア。

ガリアの防衛にあたるはずの自分たちのすぐ脇をネウロイが悠々とすりぬけていたなどと、想像だにしていなかったに違いない。それは、ショックを通り越して、ウィツチにとって屈辱に近い。

「アルマ、余計な事は言わなくても……」

信乃が横から口を開く。

「余計な事じゃないよ。ずっとこっちはそのせいで貧乏くじを引いてたんだから。信乃は悔しくないの？」

「それを今ジェニファアに言う必要は……」

そう言いながら信乃はふと、徹子の言葉を思い出していた。

余計な推察は戦いの目を曇らせる。オレ達は目の前の敵に専念すればいい。

その通りだ。徹子のいう事は正しいと思う。だけど。

「……確かに、悔しくない訳じゃないです。でも、506に報告が届く前に、誰かが握りつぶしていたとしても、今こうやってジェニフアーが動いたって事は、きつとハンナ……フリーネ司令や506の隊長さんのお蔭だと思っんです。だから……」

だが、今まさに、信乃はその余計な推察をしている。

だけど。ああ、ダメだ。上手く説明できない。

自分が見てきたことから想像した事の域での話で、ひよつとしたらとんでもない間違いを犯しているのかもしれない。

だけど。

「でも、アルマや、リヨン基地の皆と同じように、ジェニフアーも、マリアンも、カーラも、皆、いい人たちだと思いますから。そんな人たちが、何か知ってたら、きつとすぐに動いてくれるはずですから……今はあたしたちが何か言うべきじゃないと思っんです」

「新兵みたいなもの言いだね」

アルマが肩をすくめる。

「でも……」

アルマの言う通りだ。何を言っているのだろう、自分は。

そんな事が言いたいわけじゃない。だけど、言いたいことが言葉に出来ない。

「……萩谷さん。ブレヴィス中尉」

そんな二人の会話に割って入るように、ジェニフアーが口を開いた。

「私、戻ったらこの件を隊長に聞いてみます」

それまで黙っていたジェニフアーが呟く。

「もし本当なら、放ってはおけません。お二人に……いいえ、リヨン基地の人たちに対して、これで罪滅ぼしになるとは思いませんが、それでも……」

「……自分で焚きつけておいてなんだけど、やめといたほうが良いよ。感情で動いたところでブランク大尉の立場が危うくなるだけだし」

「あたしもそう思う。無茶はしないでください、ジェニフアー」

信乃がアルマの言葉に頷く。

「でも……」

ジェニフアーなりに責任を感じているのだろう。

優しい人だという事は、アルマにもわかる。嫌というくらいに。

「はあ、信乃といいあんたといい、うちの奴らといい……」

頭を掻いてアルマが肩をすくめる。

「相談するなら信乃の言う『いい人たち』としたほうがいいよ。今日みたいに『たまたま』索敵範囲を広げてくれれば解る事だしね」

「それでも……それだけじゃ、何も変わらないじゃないですか。ネウロイを目の前にして上がこんな状況では……」

どうやら優しいだけじゃなくて潔癖な所もあるようだ。

「私が言いたいのは、国やお偉いさんの考えを変える事なんて私達に出来る事じゃないけど、命令を逸脱しない範囲で最善を尽くす事くらいは出来る……って事だよ」

「そう、それです、それ!!」

腑に落ちたような顔で信乃が口を開いた。突然の大声に、ジェニフアーがびくりと顔を上げ、アルマもぎよつとしたように信乃を見た。

「そういう事ですよジェニフアー!!あたしが言いたかったのは!!」

「調子いいな!」

思わずアルマが突っ込むが、信乃は気にした様子もない。

徹子に言われた事、自分なりに解つても言葉に出来なかつた事が今ようやく解つたような気がした。

余計な推察も下衆な勘繰りも必要ない。あたしに出来る事は、つまりそういう事なのだ。

「ねえ、アルマ。今の言葉、今度あたしも使つていいですか?」

「止めてよ恥ずかしい!!」

ぼかん、としていたジェニフアーがやがてくすくすと笑いだす。

「……やっぱり変わった人ですね、萩谷さんって」

「あたし的には変な人たちに囲まれた常識人的な立場だと思っっているんですけど」

「ええ?マジ?そんな風に思ってたの?」

毒気を根こそぎひっこ抜かれ、最早呆れしか残っていない口調でアルマが呟く。

「……………ありがとうございます、萩谷さん」

「気にしないでください、ジェニフアー。あたしは何もしてないですから」

「うん。今回ばかりは本当に何もしてなかったね」

「……………少しは褒めてください、アルマ。あたし、褒められて伸びるタイプなんです」

「ブレヴィス中尉」

ジェニフアーが口を開く。

「506は……………いいえ、私達リベリオン海兵隊は、欧州を守るためにここまで来たんです。私もマリアンも……………それに、カーラや隊長も、皆、欧州の為にそれぞれ戦ってきました。そして、これからもこの506でそうするつもりです。いえ、そうさせてください」

ジェニフアーの真っ直ぐな瞳と、アルマの視線が交錯する。

先に折れたのはアルマだった。

「……………さっき言った事は取り消すよ」

ふう、とため息をつくアルマ。

「どうやら、貧乏くじを引かされていたのは私達だけじゃなかったみたいだね。今までの分、一緒に戦おう。ブランク大尉」

「ジェニフアーでいいです……………ありがとうございます、ブレヴィス中尉」

「アルマで。シノですら私を呼び捨てにしてるんだから、上官の貴女に堅苦しく呼ばれる必要はないよ、ジェニフアー」

「……………ありがとう、アルマ」

そういつて、二人は再度握手を交わした。

その時、二人は気が付かなかった。▪

読闇に紛れ、地上からその様子を望遠レンズで眺めているものがないたことに。

「成程。普段とは違う哨戒ルートを取っていたのはこういう訳だったか」

ぽつり、と呟いた声は女性の物だった。

『教授』、『お嬢様』が奴らと接触した。地点は……」

無線に向かい、手早く現在位置を伝える。しばらくした後、無線から男の声が響いた。

『……ほう。早速手を打ったか。思いの他動きが早い』

まるで相手がチェスの妙手を打ったかのような、驚きの中にも何処か愉快さすら含んだような声だ。

『あのカールスラントの小娘、ただのお飾りだと思っていたが、中々どうして、食わせ物じゃないか』

ふふ、と無線の向う向うで男が笑みを漏らす。

「手を打ちますか?」

『まだ泳がせておけ。利用できるうちは利用しない手はない』

「了か……っ!?!」

通信を取りながら再度望遠レンズを覗き込んだ女が思わず息を飲む。二人から少し離れたところにたたずんでいた扶桑の少女と目が合う。

否。目が合うように感じたただけだ。数百メートルも離れている上、夜闇の森の中。夜間視の魔眼を持っていたとしても、気配を殺す訓練を積んだ『彼女』が見つかるはずはない。

だが、扶桑の少女は尚も真っ直ぐにこちらを見ている。偶然とは思えない。

『どうした?』

「あの扶桑の……すみません、見つかったかもしれません」

音をたてぬようにしてゆっくりとその場から後ずさる。

数十メートル程移動し、再び望遠レンズへ目を通す。どうやら少女は尚も先程『彼女』がいた辺りに目を向けているようだ。移動した事は気づかれていない。

小さく息を吐く。

「いえ……気のせいだったようです」

『お前をこんなところで失う訳にはいかん。これ以上の偵察は切り上げ、早急に帰投しろ』

「了解しました……ガリア、我が喜び」

『ガリア、我が喜び』

無線が切れる。なおも少女はこちらの付近を見つめていたが、仲間であろうナイトウィッチの少女に促され、その空域を離れていった。

「どうしたのさ、信乃」

帰りの道すがら、アルマが尋ねる。何か腑に落ちないという顔で後ろを何度も振り返る信乃が、首を傾げる。

「いえ、ちよつと気になつて」

「何が？」

「さつきジェニファーと話していた時、一瞬体がチリつとしたような……」

「何だつて？」

思わずアルマが背後を振りかえる。もしネウロイが潜んでいたとしたら、夜闇に紛れて背後をつかれる可能性もあり得る。

「や、多分違いますよ。ネウロイのチリチリは、もつとこう、何ていうか、一点に集中しているつていうか、ちくつとするような、それでいずつと続くような感じなんですけど、今のはこう、ふわつとしているといふか、鈍い感じなんです。チリつて感じというより、ビリつとした感じというか、ジリつとした感じというか……野生の動物とか……」

「違いが全然わからない」

「説明し辛いんです。まあ、多分、寝ぼけたフクロウが一瞬あたしたちを餌の鳥か何かと勘違いしたんじゃないですかね。そんな感じでした」

「そんなもんか？」

「そんなもんです」

呑気な感じの信乃の言葉に、アルマが肩をすくめる。

ある意味信乃の固有魔法は確かだった。相手がネウロイか否かは何度も戦ってきた経験からすぐに察知できるが、それ以外の殺気については余り区別がつかない。



例え、それが命を取すような訓練と引き換えに得た、野生動物さながらの人間の放つ殺気だとしても。

数刻の後、ウィッチ達が去った暗闇に、一機のストライカーユニットが姿を現す。

国籍の無い漆黒のスピットファイアは夜闇に紛れ、リヨンでもデイズンでもない彼方へと消えていった。

## 14. 偶発的な共同戦線

「ハギ、敵の数は？」

「中型が1、小型が9……いえ、今7になりました」

信乃が眼下の光景を見て返事を返す。

「こちらリヨン臨時基地、JG54だ」

『もう来たのか？助かる』

『このまま全部落とそうかと思っただけだなあ』

徹子の無線に二者二様の返事。リベリオン海兵隊の制服を着たマリアンと、陸軍の飛行服を着たカーラが、ネウロイと交戦している。

「だそうだ。ユーリ、ベレーナ、506に獲物を取られるなよ」

「了解!!」

ユーリとベレーナが返事を返す。

そのまま急降下。

マリアンとカーラに食らい付いているネウロイへと向かい、99式2型2号の20mmと、MG42の7.92mmが一齐に火を噴いた。

「まず一機」

そう呟いたのは信乃。そのままぐるりと体を180度捻ると上空の敵のネウロイの集団へと向き直る。地面を背に更に打ち上げの一射。もう一匹の小型ネウロイを撃墜する。

「いいぞ、シノ、そのまま誘い込め!!」

「うう、マリアンまでどつかの誰かみたいな命令しないでくださいよ」  
ぼやきながらも信乃がそのままぐるりとその場で旋回しつつ上昇。スプリットSを逆にしたような挙動でネウロイの集団に飛び込む。小型ネウロイにとっては獲物が飛び込んできたようなものだ。

一齐に信乃にチリチリが集中する間に、マリアンとカーラがその場から急上昇して高度を取る。

「この、このっ!!」

「当たってっつ!!」

一方、中型に向けて飛び込んだのはユーリとベレーナ。

7.92mmの弾丸はネウロイの黒い装甲を削るが、攻撃が集中しないせいで中々コアを発見できない。

攻撃を受けた中型がゆっくりと旋回しながら、ベレーナとユーリに向けて反撃のレーザーを放つ。

「わわっ!?!」

ユーリがシールドを張り、ベレーナは攻撃を諦めて旋回しながら攻撃をかわし、そのまま上昇する。

「ユーリ、一旦上がって!!」

ベレーナが叫ぶがユーリの耳には届かない。

「このおっ!!まだまだっ!!」

熱線を防ぎきると同時にユーリが再度反撃。ばらまかれた弾が回復する前のネウロイをさらに破壊する。

そして、ついにそのうちの一か所が硝子のようにはじけ飛び、赤いコアが僅かに見えた。

「あった!!コアっ!!」

ユーリが興奮したように叫び、狙いを定める。しかし。

「こら、後ろもちゃんと見ろ、ちっこいの!!」

背後からの声と同時にユーリが突き飛ばされる。

ほぼ同時に、後ろから一条のレーザーがユーリの背後を襲うが、間に割って入ったカーラのシールドがそれを防ぎ、逆に手にした水冷式M2重機関銃を叩き込む。

「わわ!?!」

「全く。ほら、ちっこいの。ついてきなっ」

小型を撃墜したカーラがユーリを後ろに続かせる。

「もう!!もう少しで落とせたのにーっ」

「元気が良いな、お前」

素直に従いながらも悔しそうに叫ぶユーリを見てカーラが苦笑する。

「コアっ!?!私がつ……」

一方、上昇していたベレーナもユーリがコアを発見したのを見てその場で旋回、再度中型へと向かおうとする。

しかし。

「残念だったな」

その声と同時に上空から徹子がベレーナの目の前をよぎっていく。中型に狙いを定め、一射。

急降下の勢いを殺さずそのまま上昇に転じると同時に、中型がぱん、と音を立て光の粒へと代わる。

「ああっ!?!」

「早い者勝ちだ。次を喰いたきやついて来い、ベレーナ」

「っ、今度こそっ!!」

にっ、と笑みを浮かべる徹子の言葉に、ベレーナがその後を追って上昇する。

「ああもう、しつこいですね!!」

中型から小型を引きつけていた信乃が叫ぶ。その数は4。チリチリのせいで被弾は無いが、常に背後から敵のレーザーが飛んできている状況は余り長続きさせたくはない。

「待たせたな、シノ!!」

その言葉と同時にマリアンが信乃の斜め後ろの8時方向からネウロイへと飛び込み、信乃の背後に食らいつくネウロイに向けてM2を掃射する。そのうちの2機を落とす、そのまま信乃のすぐ脇を交差するようにすり抜けていく。

そこでようやく残されたネウロイたちが自分たちが罠にかかったことを悟り、二人の背後から上昇して逃がれようとする。しかし。

「ベレーナ、やれ」

「はいっ!!」

ネウロイの逃げるであろう位置を正確に読み切り急降下してくる徹子と、その背後に付けたベレーナが同時に銃を構える。

先日の徹子の教え通り、徹子が引き金を引くのに合わせ、ベレーナも弾き金を引く。

残った2機の小型ネウロイも、徹子とベレーナの一斉射に合わせ、まとめて其の場で光の粒と消えた。

それを確認したマリアンが戦闘飛行を止め、周囲のウィッチに向

かつて魔導無線を送る。

「こちら506B部隊、マリアン・E・カール。当空域でのネウロイの反応の消失を確認。54JG、支援感謝する」

「うええ……また一機も落とせなかった……」

魔導無線の声に、ユーリががっくりと肩を落とした。ここ数日、戦闘空域で『たまたま』506のB部隊とはち合わせるようになってから、ユーリの撃墜数も伸びていない。

「焦るな焦るな、ちっこいの。そういう時もあるって」

「むう、小さい人に小さいって言われたくないよっ!!」

「にやにやい!!恩人になんてこと言うんだ、チビ!!」

11歳と同日線で喧嘩をする16歳ことカーラ。

「そんな奴にはご褒美のコーラはあげないぞ」

「え?コーラ!?ごめんね、カーラ。カーラはおっきい!!強い、格好いい!!」

「ははは、もつと褒めろ」

あつさりと手のひらを返すユーリにコーラを一本手渡すカーラ。

「さあ、ぐつと」

「……これ、今開けたら噴き出す奴だよね?」

「……察しの良いガキは嫌いだよ」

ちつ。と悪戯が失敗したカーラが舌打ちをする。全く、最近の子供は、可愛げのない。

「シノ、『サッチ・ウィーブ』って知ってるか?」

マリアンに振られて信乃が首を傾げる。

「は?ウエーブ……って、何ですか?波乗りの技か何かですか?」

信乃の頭の中で、ハワイの海でサーフィンをするカーラの姿が浮かぶ。

「アホか。何で空でサーフィンの話をするんだよ」

マリアンが顔を顰める。信乃からすればそんな事、尋ねてきたマリアンに問い返したいが、マリアンはまあいいやと言って言葉を続ける。

「私の昔の長機……ジエーン・S・サッチ大佐が考案した、二機一組で

ネウロイを倒すフォーメーションだ。一機がネウロイを引き付けたまま旋回して、もう一機が反対側から旋回して撃つ。お互いに機織りを折るように交差して動くから、『ウイーブ』っていうんだ」

あ……ウイーブじゃなくてウイーブですか。

「あ、さっきあたしの後ろから来たのって」

「そう。丁度いいタイミングだったからな。今のでコツを掴めそう  
だ」

「随分余裕がありますね。あたしは追っかけられていっぱいだったのに」

密かに練習中だった技が上手く決まったことに満足げな笑みを浮かべるマリアンに、知らず知らずのうちに実験台にされていた信乃が思わずむう、と口を尖らせる。

「あんなので落とされないだろ？お前の固有魔法……ええと『モゾモゾ』だっけ？」

『チリチリ』です!!」

何ですかその虫がお尻を這うような表現は。

「どっちでもいいや。ま、それがあるから大丈夫だろ？」

「全然大丈夫じゃないです。後、どっちでもよくはないです。絶対間違えないでください」

全力で釘を指す。アバウトなりベリアンが間違った名前を流布しようものなら、ただでさえかったいな固有魔法の名前が更にひどくなる可能性がある。

といういか、もし痛覚察知の感覚がチリチリしなくてモゾモゾしてたら固有魔法の名前が『モゾモゾ』になってた可能性も確かにある。それは嫌だ。何ておぞましい。

「……どうした、ベレーナ」

徹子に話しかけられ、ぼんやりしていたベレーナがはつと顔を上げる。

「あ?!いえ!!その!!」

「終わったとはいえ、余り呆けるな。まだ何があるか分からないぞ」

わたわたと首を振るベレーナ。戦闘中なら叱責ものだが、その理由

が何となくわかる以上、徹子も苦笑を浮かべ、それ以上は追及しない。

「はい……あの、若本中尉、私……」

「単独撃墜2だ。ここまで長かったな、ベレーナ」

「!!」

ベレーナがその言葉に息を飲む。

「私が……やったんだ……!!」

余り撃墜数にこだわるのは本来は好ましいとは言えない。そのせいで敵を深追いしたり攻撃に夢中になるあまり、防御がおろそかになり、結果として落とされたウィッチの例は枚挙に厭わない。先程のユーリなどもない例だ。

だが、撃墜できない事で自信を失い、空で委縮してしまうウィッチも同じように少なくはない。特にベレーナのように内向的なタイプは、そういった事を内に貯めこみがちなところがある。

そう言った意味では、ベレーナにとって初撃墜は良いころ合いだったともいえるかもしれない。逆にユーリは初撃墜が早すぎたせいで、若干突っ込みがちになっている。どこかで修正を入れたいところだ。「……あのっ!!ありがとうございます、若本中尉!!」

「浮かれすぎるなよ。今日の戦果は次の戦いまでに忘れておけ」

そう言って軽くその頭を叩いて、背を向ける。

「そろそろ帰るぞ……カール大尉」

「ああ。了解した。カーラ。帰投するぞ」

「へいへいっと。じゃあな、ユーリ」

「またね、カーラ」

背を向けたカーラにユーリがぶんぶんと手を振る。

「こっちも帰るぞ」

了解、と三人が返事をかえす。徹子の後が続いて、信乃たちが基地に向かい編隊を組む。

「最近、『たまたま』が続きますね」

「そうだな」

ここ数日、昼夜とわず、506のB部隊と戦闘空域でかち合わせる事が格段に増えた。というよりも、殆ど共同で戦っているようなもの

だ。

カーラとユーリはいつの間にか互いに冗談を交わし合う程仲良しになっていくし、マリアンと信乃も互いの動きを見越してコンビネーションを取れるまでに理解が深まっていた。勿論、ユーリや信乃だけじゃなく、他の面々もそれぞれ頼りになる空の増援に対しては好意的に接していた。

更には夜間哨戒もジェニファーがいる事で、JG54としてもアルマ一人の負担が減り、結果、基地全体としてもようやく一息つけるようになってきた。

「この調子なら、あたし達がいなくてもどうにかなるんじゃないですか？」

「……」

信乃の言葉に徹子は無言。代わりに答えたのはユーリだった。

「えーっ!? シノ、いなくなっちゃうの!？」

「元々あたしたちは臨時編入ですから。あまり長居するわけにも……」  
「そんな、それじゃあ若本中尉も? もつといろいろと教わりたかったのに……」

ベレーナが残念そうにつぶやく。

「……どうだかな」

だが、徹子が呟いたのは、同意の言葉ではなかった。

「え?」

信乃が首を傾げるが、徹子はそれ以上答えない。

期待も不安も不確定な情報から生まれた推察にしか過ぎない。今の三人にそれを与えるにはまだ早い。

「それより飯だ。あと補給。ハギ、帰ったら瑞鶴に催促入れとけよ。特に三号と20mmの弾だ」

「むーっ。やってますよ、毎日。ていうか、いい加減20mm返してくださいよ」

「そうしてやりたいが、こいつがオレに使われたって泣きついてくるんだ」

「嘘だ!!返してっ!!あたしの20mmっ!!」



信乃が徹子の背後に飛びつこうとするが、それをすりと躲す。

「まだまだだな、信乃。お前に背中を取られる程衰えてはいないさ」

「いい加減引退したらどうですか、このロートル中尉」

「お前がオレを追い抜いて、一人前になつたらな」

その言葉にぶくり、と頬を膨らませる信乃。

くすくす、と。ベレーナとユーリもその様子を見て笑顔を浮かべた。

## 15. 遣欧艦隊の魔女達（三人目）

ハンガーに戻ってきた徹子達を迎え入れたのは、普段よりも更に三割増しくらいで騒がしい喧騒だった。

「何かあったのか？」

すっかり顔なじみになったひげ面の整備兵に徹子が尋ねると、整備兵はにやつと笑って返事をかえす。

「補給が届いたんすよ。扶桑から。そろそろメルスから引っこ抜いてきていた予備の部品も限界だったんで、助かりますよ」

「本当か!？」

思わず声が高ぶる。こうしちやいられないとばかりにユニットからとびおけると、靴を履くのももどかしく、ウィッチ用のそれとは少し離れた航空機用のハンガーへと駆け出す。

「あ、若本中尉、良ければ一緒に食……」

「また今度だベレーナ!!事は一刻を争う!!」

話しかけてきたベレーナにそう言い放ちハンガーを飛び出す。気が付いたら、同じように全力疾走している信乃がすぐ後ろについてきていた。

「何焦ってんだよ、ハギ」

「若こそ。さつき飯がどうのって言ってたじゃないですか。どうぞごゆっくり」

「させるか。大方オレより先に支給品をちよろまかそうって魂胆だろ?」

「違いますよ。若に先を越されるとあたしの分が無くなるからです」

「同じことだ。支給品で良いのがあれば上官に快く譲るのが部下の務めだろ」

「もし若が上官じゃなければ今すぐにも締め落して帰りの輸送艇からアドリア海に沈めてもらうところですよ!!」

悪態をつきながら同時にハンガーに飛び込む。モスグリーンに塗装された懐かしい零式輸送機と、その脇で整備兵たちと話している扶桑海軍の士官服を着た少女に向けて二人が走り寄る。

「あ、若本中尉、ハギちゃん、久しぶり……」

「20mmは?」

同時に声を張り上げた二人に、少女がぽかんと目を見開いた。

「三号特爆がこんな……これで百人力だ」

「また会いましたね雷電。ていうかそろそろ誰か引き取ってくれないんですかね、貴女」

酒瓶を入れるようなケースに積まれた三号特爆を満足そうに見つめる徹子と、補給品の隅っこでぽつんとたたずむ雷電に向かい気の毒そうに話しかける信乃。

その他にも大量の欧州規格の7.92mm弾。恐らくこちらでMG42を使っているであろう事を見越しての措置だろうが、そんなのはいらぬ。半分でもいいから20mmが欲しかった。

「あのお、そろそろ私の話を聞いてくれると嬉しいんだけど……」

先程の扶桑海軍の少女が躊躇いがちに話しかける。ちなみに補給物資に20mmが無いと知った時の反応は、徹子が「ちっ」で、信乃が「はあ……」だった。久々の再会なのにあんまりである。

「伊予」

「あ、はいっ」

「少し黙ってる」

「……はい」

伊予と言われた少女がしゅん、と肩を落とす。

同じ階級だが、士官学校を卒業してすぐに中尉に昇進した伊予は扶桑改事変以来の生粋の叩き上げである徹子には逆らえない。一応同じ階級なのに。扶桑海軍遣欧艦隊では戦闘隊長までしてるのに。

「電探まで入ってるぞ。ハギ、使うか?」

「何か使いどころに困った試作品ばかり押し付けられてる感じですね……まあ、あるに越したことは無いでしょう」

電探技術が欧州より劣る扶桑のレーダーは無いよりマシ程度の精度しかない。はっきり言って信乃の固有魔法の方がよっぽどあてになるのだが、夜間で多少なりとも助けになるのであれば、持っていて悪くはない。

「ユニット関係はこんなもんか。後は嗜好品と……」

「あ、まだありますよ、まだ」

口を挟むタイミングをうかがっていた伊予が口を開く。

「新藤少佐からは是非若本中尉に使ってほしいと」

「は？新藤が？」

訝し気に徹子が眉を顰める。徹子とは自他ともに認める犬猿の仲である新藤美枝の申し出だ。嫌な予感がする。

「こつちです、こつち」

そう言つて伊予が零式輸送機の中に案内する。大方荷物が運び出され閑散とした機内に、『それ』はたたずんでいた。

「何だこれ？物干し竿か」

二メートルは優に超える『それ』を見て徹子が眉を顰める。

「ふふん、聞いて驚いてください!!これこそが扶桑海軍の新兵器、十七式『試製』三十耗機関砲です!!」

「30mmだと？」

驚いたように徹子が聞き返す。

「はい。私もテストさせてもらいましたけど、威力は抜群です。小型はもちろん、中型ネウロイでもコアごと粉碎出来る事請け合いです」

自信満々に伊予が自己主張の激しい豊満な胸を張る。伊予……藤田伊予中尉は遣欧艦隊のウィッチの中でもことさら胸……否、射撃の腕は一流だ。年に似つかぬ発育の良い胸がいい具合に反動を吸収しているからだともっぱらの噂だが、真偽のほどは定かではない。

訓練生時代での吹き流しを利用した射撃訓練では、同一個所に連続して弾を当てたため吹き流しが二つに裂け、最後の一撃が二つに分かれた吹き流し両方に命中したため10発中11発命中という記録を打ち立て、欧州の実戦でも、一日で10機の中型及び大型ネウロイを狙撃だけで撃墜したという記録を持つ。狙撃の腕に関しては徹子も一目置いている少女だ。

「……そうか、試したのか」

だが、徹子は冷めた目で30mmから目をそらして伊予を見返す。  
「重いだろ、これ」

「重いです。これを使うくらいなら20mmを二つ担いで飛んだ方がましです」

「命中率が悪そうだ」

「当たるところまで近づけば問題ないです」

「当たるところってどのくらいだ」

「銃口が的にくっついていればまず外しません」

「零式で打てるのか？」

「多分失速しますね。下手すると衝撃でユニットが壊れます。紫電改……ああ、私が受領した新型なのですけど、それでも反動でかなりふらつきます。雷電ならまあ、大丈夫だろうという事で一緒に持つてきました」

「おい」

「はい」

「雷電と一緒に持つて帰れ。あとその紫電改とかいうやつは置いてけ」

「だ、ダメですよ!!折角処分先が見つかったのに持つて帰ったら、私が新藤少佐に怒られます!!」

「今処分先って言ったなおい!?!くそつ、あの目つきの悪い貧乳女め!!20mmを寄越さなかつたのも嫌がらせに違いない」

自分にも寸分違わず帰ってくる罵倒を口にしながら徹子があたりを見渡す。

「こういうのはハギにでも押し付けとけばどうにかするだろう……ハギ、どこいった?」

「ハギちゃんならさつき嗜好品の入った箱を開けてました」  
「早く言え馬鹿!!」

こんなポンコツよりよっぽど重要な発言に徹子が輸送機から飛び降りる。向かった先の嗜好品の入った木箱は無残にこじ開けられ、中身がその辺りに散乱している。

「……やられた」

わなわなと徹子が体を震わせる。

「あ、中尉、ここにいたんですね」

「若本中尉、ご飯食べないと無くなっちゃいますよー」  
ベレーナとユーリがハンガーにとことこと歩いてくる。

「どうしたんだお前ら」

「シノさんに言われたんです。扶桑の珍しいお菓子があるからハンガーに行ってみろって」

「若本中尉が分けてくれるからって言っていました!!」

徹子が二人の抱えている『それ』を見る。饅頭にサイダーに羊羹。ボンタンアメまである。

「どうしたんだ、それ」

「シノさんに貰ったんです」

「このボンタンアメ、ちよつと変わったオレンジみたいな味ですごく美味しい!!」

「……」

遣欧艦隊の萩谷信乃准尉にはちよつと変わった二つ名がある。

曰く、ギンバイのハギ。陸の黒田、海の萩谷。

何処からともなく珍しい嗜好品や娯楽道具を仕入れてくる達人。

本人曰く『皆の生活に等価交換で潤いをもたらす天使』、一部からは

『天使の皮を被ったクズ』。

「全く、補給品が入ったからってあいつはいつもいつも……」

「あはは、ハギちゃんらしいですね」

思わず笑いだす伊予を徹子が睨み付ける。

「このままだと扶桑のウィッチが誤解されるぞ」

「若本中尉がいる時点でそれは覚悟の上ですよ」

「ほう?」

「……と、新藤少佐がおっしゃっていました」

しれつと言い直す伊予。

こいつもこいつで中々癖がある、というか、明らかに新兵の頃の指導を恨んでいるに違いない。何故自分が教えたウィッチはこうも性格が歪むのだろうか。下原なんかはあんなに真っ直ぐなのに。美緒に今度その辺りの指導法を聞いた方がいいのかもしれない。

だが、ベレーナは徹子の言葉に首を振った。

「あ、いえ。これは普通にシノさんから貰ったんです」

「……おい。今、何って言った？」

ベレーナの言葉に徹子が思わず聞き返す。

「何かの間違いじゃないですか？変な書類にサインとかさせられませんでした？」

伊予も思わず真顔でベレーナ達に問いかける。

「シノはそんな事しないよ。カールスラントからの補給が滞ってるから交換できそうなのが無いっていったら、持って行っていいって……」

思わず徹子と伊予が顔を見合わせる。

「……お前らの補給、いつ頃から届いていないんだ？」

「結構前です。若本中尉達が来るちよつと前にあったのが最後ですから……」

「おかしいよね。今までは1週間に1度は補給の飛行機が来てたのに」

ベレーナとユーリも顔を見合わせる。つまり、一ヶ月近く、この基地には一切の物資が届いていないという事だ。

「はあ、ちよつと待ってろ」

「(そごと)嗜好品を漁る徹子。信乃を捕まえるのにはまだ時間がかかりそうだ。」

「何だかんだで優しいですよね。若本中尉は」

「何だかんだは余計だ。オレはいつも優しいぞ……キャラメルでいいか？」

伊予のからかうような言葉に、徹子は無然とした口調で返事がかえした。

「おい、ハギ」

「何ですか若……と、藤田中尉？」

「やはー。久しぶりですね、ハギちゃん」

驚く信乃に向かって人懐っこい笑顔を浮かべる伊予。

「お前、なんだそれ？」

徹子は信乃が抱えている『それ』を見て首を傾げる。

「見てわかりませんか？蓄音機ですよ、壊れてますけど」

いや、それはわかる。問題はそこではない。

「……何でお前がそんなの持つてるんだ？」

「珍しいから貰ったんです」

『オペレーション・オブ・ミリオネアストロー』の事は徹子に知られるわけにはいかないのです、信乃はそう言って誤魔化した。実際はアンジェラの部屋にあったものをワツフルが手軽に焼ける変わったフライパンと交換してもらったのである。

仕事以外眼中にないといった感じのアンジェラだが、実は甘い物や菓子に目が無いらしく、材料があればいくらでもワツフルを量産できるそのフライパンに偉く興味を示したようだった。同じようにワツフルの誘惑に負けてハンネとコーラと扶桑の補給物資のサイダー三本とチョコレートで交換した際は、後で冷静になってどうしたものか思ったが、需要と供給は意外なところで発生する。どこでどう転がるか分からない。

「ギンバイか？」

「フェアトレードです」

信乃が答える。

「レコードなんか持ってたのか？ハギ」

「見てるだけでも癒されます」

「お前のそういうところだけはオレにもわからないな」

機械が動く様子を見るのが好きだったり、自分のストライカーユニットを『あたしの娘』と呼んだり、親し気に話しかけたりと、時折妙な言動を見せる信乃に徹子が肩をすくめる。

「は？他は解ってるみたいない方しないでください」

「あはは……相変らずですね、二人共」

伊予が苦笑を浮かべる。

「む。藤田中尉もいるって事は、補給の件ですね？」

お菓子は返しませんよ、と言い放つ信乃に伊予の苦笑が深くなる。彼女が既にそれを手放してしまっていることは知っている。そして、その理由も。



「はい。今回持ってきた17式試製30mm機関砲の件ですが……」  
「嫌です」

「ハギちゃんにテストを……って、まだ何も言ってますんよっ!!」  
「聞いただけでわかる危険物の名前が出てきた時点で応えは否です。  
試製の時点で応えは否。ノー。ダメ、絶対。あたしは嫌です」

試製、つまり試しに作ってみただけかどうか?という代物に  
対しては古今東西リスクを伴うものが多い。あふれ出る発想力をそ  
のままに、取りあえず作ってみました的な面白兵器は科学者にとつて  
は夢のある代物かもしれないが、それを試す方からすればたまったも  
のではない。稀にテストパイロットを好んで行うウィッチがいたり  
もするが、きつと冒険心とかそう言ったものが危機を感じ取る能力を  
上回っているのだろう。控えめに言つてネジが飛んでいるとしか思  
えない。

断固拒否の姿勢を示す信乃の言葉に伊予がむう、と眉を顰める。

「若がやればいいじゃないですか」

「ただ撃つだけだ。お前で十分だ」

「反動で肩の骨が抜けたらどうするんですか?」

「伊予は大丈夫だって言ってる」

「おっぱいが吸収してるからでしょう」

「ちよ、ちよつとちよつと、勝手な事言わないでください。そもそもハ  
ギちゃんは私より階級が下なんです。上官に対しての侮辱です」

頬を赤らめて胸を押さえる伊予。

「褒めてるんですよ。その緩衝材代わりの駄肉を。垂れろ」

「酷い!?全然いい所なんて無いんですよ、これ!!戦闘中に銃のベルト  
が引つかかったりすると大変なんですから!!」

「もげろ」

「そのまま墮ちろ」

「若本中尉まで!」

自称スレンダーボディの二人が交互に罵声を浴びせる。

孝美みたいに全体的にくまなく大きくなるならまだしも、何でそこ  
だけ大きくなる。根がスケベだからに違いない、このドスケベウィツ

チめ。

「うう、このじつけ……もといテストが終われば、次の補給で20mmを優先的に回してもらおう事も出来るのに」

「マジか？」

「マジです。どうしても二人がテストの件を了承しなさそうならそう言えって言ってました。新藤少佐が」

再び顔を見合わせる徹子と信乃。嘘かもしれないが、可能性は無きにしもあらずだ。

「ハギ」

「ええ、解ってます」

次の瞬間。ぐっ、と同時に腕を引き、今にも殴り合いそうな体勢で同時に叫ぶ。

「最初はグー!!じゃんけんぽんっ!!」

……そして。

「どうしてこうなったんでしよう」

「負けたからですよ。泣きの一回を二回も続けて。逆に驚きました」  
伊予が諦めろとばかりに口を開く。

まさかの三連敗に、信乃ががっくりと『雷電』に足を通したままうなだれた。頭から生じた使い魔の扶桑鹿の耳も気持ち垂れ気味だ。

「どうだい嬢ちゃん、整備はきっちりされてたからあまりいじつてないが、行けそうか？」

「細かい整備に口を出せるほどこの子の事知りませんから、あたし」

壮年の整備兵長の言葉に信乃が肩をすくめる。

「後は……アレか」

「アレですね……」

整備兵長と信乃がちらり、と背後を振りかえる。若い整備兵が2人がかりで17式試製30mm機関砲を持ってくるところだ。

「扶桑の嬢ちゃん!!これ滅茶苦茶重いぜ!!」

「こんなん担いで飛べるんですかい!？」

整備兵が信乃の脇にどん、とそれを立てる。横に並べてみると、雷電に足を通した信乃の背の優に二倍はある。ストライカーユニット

により身体能力が強化されているとはいえ、それでも破格の大きさだ。

「まあ。細かい調整は飛んでみないとわかりません。それより、さっきの蓄音機……」

「おう、ウチの中に好きな奴がいるから直せるってよ」

「頼みます。後は20mmの件も……」

「うまい酒、楽しみにしてるぜ」

整備兵長がにやりと笑う。

蓄音機とついでに99式二型二号20mm機関銃をこっそり失敬してくる件。

酒と交換してくれる手筈はハンナに掛け合って整えた。

最初は信乃が飲むのかと交換を渋っていたハンナだったが、娯楽室に蓄音機を設置したら皆が喜ぶのでは、と、事情を一部省略して説明したら快く応じてくれた。

実力到人柄が伴い最強に見える。うちの長機にも見習ってほしい。

「それじゃあ、準備は良いですか？ハギちゃん」

「はい。とつとと終わらせちゃいましょう」

紫電改に足を通した伊予の言葉に信乃がおざなりに答え、エンジンを回す。零式の栄エンジンよりも強力な火星魔導エンジンを積んだ雷電の足先から魔力で作られたペラが廻り、足元に魔法陣が現れる。

「ん、良い音ですね」

零式の栄エンジンよりも大出力な火星エンジンの音に信乃が僅かに口元を緩めるが、30mmを手にした瞬間その口元がへの時に歪む。

「行けますか？ハギちゃん」

「……自信なくなってきました」

17式試を手にした信乃が呟く。重い、バランスが悪い。加えて長すぎるために背で担ぐことも出来なければ、基本的な射形姿勢を取る事が出来ない。先日コーラのケース持ってきたときのように、ぶら下げていくか、空に上がってから背中中に担ぎなおすかしかない。

「ん？何をしているんだ、萩谷准尉」

レストランで使う手押しワゴンの様なものを手にハンガーに顔を出したアンジェラが信乃たちに目を止める。

「あ、ヴォルフ中尉」

ワゴンを置き、アンジェラがこちらに歩み寄ってくる。

「今からちよつとテスト飛行を。あ、ちゃんとフリーリーネ大尉から許可は取っています」

慌てて言い募る信乃にアンジェラが手を振る。

「いや、別に咎めるとかそういう訳ではないが……テストというのは、『それ』をか？」

信乃の手にしたものに目を向け、アンジェラが僅かに首を傾げる。

「……扶桑の技術者はもつと合理的な考えをすと思っていたが……」

「合理的ですよ。大きければ強い、軽ければよく回る。シンプルイズベストです」

伊予の言葉にもアンジェラは訝し気な顔を崩さない。

「流石にこれは極端すぎるだろう」

「ヴォルフ中尉、よろしければ扶桑の文化を体験してみませんか？」

「いや、結構。飛び立つ前にそいつを地面に引っかけそうだ」

「あたしもそれが心配です」

信乃の言葉にアンジェラが首を振った。その間も17式試の持ち方をいろいろと試していたが、結局腰溜めにして地面と水平に持つ事にしたらしい。

「はあ、とため息をつく信乃と、同情したように肩をすくめるアンジェラ。」

「そんなに心配しなくても。落ちそうになったら拾ってあげますよ」

「銃を？」

「ハギちゃんをです!!」

伊予が心外だと言わんばかりに声を上げる。

「どっちでもいいですけど。ヴォルフ中尉はどうしてここに？」

信乃の言葉にアンジェラが笑みを浮かべる。

「ああ。お前に貰ったあのフライパンで早速ワツフルを焼いてみたん

だ。余りに簡単に作れるので調子にのってしまった。折角だから他のウィッチや整備兵たちにも分けてやろうと思つてな」

成程、今引つ張つてきたワゴンに乗っているのはそれか。というか、貴重品になりつつある食材を浪費してまで整備兵全員にいきわたるだけのワツフルを量産したのだろうか。非番だというのに何をしているのだろうか、この一見堅物そうなカールスラントのウィッチは。「……安心しろ。薄力粉やベーキングパウダーの在庫はまだ豊富に残っている。皆も最近甘味から遠ざかった生活を送っているようだからな。戻つてきたらお前達にも分けてやる」

アンジェラの言葉に二人が頷く。それでも食材を無駄に使つていいのかどうかは解らない。まあ、さしあたり口止め料といった所か。「ええと……楽しみにしてます。それでは。行きましようか、ハギちゃん」

伊予の紫電改に続いて滑走路に向かう。

「結構揺れますね。これ。整備不良なんじゃないですか？」

「ああ、それは機体特性です。そのくらいの振動、欧州のユニット基準で言えばいたつて普通ですよ」

「もうこの時点で零式がいいです」

しれつと言いつつ伊予に信乃が呻く。

「……飛べない方にタバコ一本」

「俺は一箱」

「お前ら、もう少し嬢ちゃんの心配をしろ。担架は用意しとけよ。」

「……飛べない方にワイン一本」

「私は途中で落ちるにワツフル10個」

「おお、ギャンブラーですね、中尉」

「好き勝手言つて……」

早速ワツフルをぱくつきながら整備兵とアンジェラ達がハンガーで会話をしている。ストライカーユニットで強化された身体能力で聴力も良くなっているため、ユニットの騒音越しにも信乃の耳にはその声が届いていた。

「それじゃあ、行きますよ……藤田一番、出ます!!」

「萩谷二番、行きます」

まず伊予が、次いで信乃が滑走路を駆ける。

「っ!？」

驚いたのはその出足の速さだ。重たい30mmを手にしてなお、零式のそれよりもはるかに速い。伊予が飛び立つのに続いて信乃もストライカーの機首を持ち上げる。地上で感じた鈍重さとは裏腹に、零式に搭載された栄エンジンの倍近い出力のお蔭で、機首を持ち上げるとふわりと信乃の体が宙に浮く。

「何ですか、若が言ってるよりずっといいじゃないですか!!」

地面での振動が嘘みたいにするり、と空を駆ける感覚に信乃が軽く歓声を上げる。

そのまま高度を上げてても無理をしているようなストレスを感じる事もない。過給機を積んだ火星エンジンが魔導力を余すことなく出力に変換し、あっという間に高度が3000、4000と上がっていく。5000を超えた辺りでやや重さを感じてきたが、6000くらいまでは問題なく上がれそうだ。

『ハギちゃん、どうですか』

無線から伊予の声が届く。

『今のところ悪くないです。じゃあ、次、急降下行きます』

『解りました。旋回性能は零式よりもかなり悪いですから、零式の感覚で回すと危ないですよ』

『了解です』

信乃がぐるり、と体を捻り、地面へと向かって機首を落とす。こちらも零式と比べ安定している。零式だと無理な急降下をするとすぐに拳動を乱すが、こちらは神経質にならなくても済みそうだ。

さて。

地表が近づきながら、先程伊予に言われていた言葉を思い出す。零式ならまだ機首を起こすのには早いですが、信乃は安全を取って早々に機首を起こして機体を水平飛行に戻すことにした。

そう、安全を取ったつもりだった。

「ひゃうっ!？」

思わず変な声が漏れた。零式なら素直に反応する筈の機首が中々持ちあがらない。

信乃が想定していたよりも大分低い高度でようやく機体は水平飛行に戻った。

『ハギちゃん、大丈夫ですか?!』

信乃の悲鳴が聞こえたのか、伊予の声が無線から響く。

『忠告してもらって良かったです。危うく地面に突っ込むところでした』

その後も中高度で様々な挙動を試す。単純な旋回から、ロール、ターン、スプリットS等。

試せば試すほど、信乃の顔に不満そうな表情が深くなっていく。

『どうですか？ハギちゃん』

『挙動制御が全体的に重くてルーズです。自転車とバイクくらい違いますよ、これ』

徹子が嫌がるわけだ。ズームアンドダイブを得意戦術とする徹子だが、その飛び方は非常に繊細で、むしろドッグファイトのそれに近い。魔法力の扱いも常にデリケートにコントロールしている。零式はエンジンの出力が非力な分、魔力の微妙な出力のニュアンスをユニットに反映させやすい。左捻りこみといった欧州のユニットで再現が難しい技は、多分にこのエンジンの繊細さと舵の俊敏さによっている。

それに比べると、雷電は細かい舵の操作を受け付けない。これでは捻りこみどころか、ロールやターンでも欧州のユニットに後れを取りそうだ。

『後、このエンジン、長時間は飛べませんね』

また、エンジン出力が高い分、魔力を自分で『送る』印象の栄エンジンに比べ、雷電の火星エンジンは魔力を『吸われている』ような印象を受ける。これだけの出力を出しているとデリケートな挙動をした際に機体に大きな負荷がかかるため、わざと操作感覚をルーズにして、その分直進や上昇、下降の安定感に繋がっているのだろう。

『使えそうですか?』

『格闘戦を一切しなくていいなら、使えなくもないです』

『迎撃機ですからね。その辺は割り切っているんです』

まあ、解ってたといった感じの返事が無線越しに届く。何度もいろいろなウィッチチによつて乗って評価されてきた機体だ。特性的にはもう調べる事はほとんどない。

『それじゃあ、次は本番です』

『……ねえ、やっぱり止めましょうよお』

『そんな声を出しても駄目です』

『駄目ですかあ……』

甘えるように言ってみてもあつさり断られる。松さんなんかは意外とこれで甘やかしてくれるのだが、伊予はその辺はきっちりしている。

『じゃあハギちゃん、私が吹き流しを引きますね』

『はあ……了解です』

『あ。出来るだけ近づいてくださいね。離れたところからだ私が危険です。30mmの直撃とか、どう考えても普通に死にます』

『近くってどのくらいですか?』

『吹き流しにくつつくくらいが理想です。お願いですから私にあてないでくださいね』

『それって射撃の意味ありますか?』

暗に当たらないと言っているようなものだ。

『私の吹き流しにあてたら、その後滑走路の先の平地に的を用意してもらってます』

要は対地射撃という訳か。

『了解しました』

じゃあ、始めます、という伊予の言葉に信乃が雷電のエンジンに魔力を込める。伊予のストライカーから流れる吹き流しを追って、信乃が空を駆ける。

『あ。信乃さん、雷電だと紫電改の旋回についてこれません。ズームアンドダイブで狙ってください』

『ええ、余り得意じゃないのに……』



伊予の言葉に眩きながらも、信乃が機首を上げる。先程も感じたが、上昇性能は本当に優れた機体だ。

『じゃあ、行きますよ』

信乃がぐるりと機体を反転させ、眼下を飛ぶ伊予の上空から背後に付ける。腰だめに17式試を構え、そのまま背後の吹き流しへ向かって雷電を急降下させる。

『あの、なるべく真つ直ぐ飛んでももらえませんか？』

『それじゃあテストになりませんよ』

そう言いながらも伊予の旋回は大人しい。腰だめに17式試を構え、視界に近づく吹き流しを狙い、弾き金を引く。

だつ、だつ、だつ、と、じれったいような連射速度で30mmの弾丸が銃口から放たれる。

『っ!!』

三発程打って弾き金から手を離す。予想以上に激しい反動で二発目以降の銃口が大きくずれ、弾は全て吹き流しからかなり離れた方向へと飛んで行った。これ以上撃つと腕があらぬ方向に曲がりそうだ。

『どうですか？』

『作った奴が目の前に居たらこいつで殴ってやりたい気分です』

『もう一回お願いします』

『了解』

とはいえ、普通に撃つたのでは銃口が安定しない。腕だけでは反動を支えきれないのだ。

どうしたものか、と考えつつ信乃は再度上昇。今度は銃身の底をユニットの出っ張った部分に引っかけ、体全体で銃身を支えて安定させる。殆ど17式試を抱きかかえてるような姿勢で再度降下し、吹き流しに近づく。先程よりも十分に引き付け、再度弾き金を引いた。

弾が銃口から放たれるたびに、反動でユニットごと体が揺さぶられるが、手だけで支えるのは違い、銃口の向きは安定している。全身でバランスを取りながら、弾丸が徐々に吹き流しに近づき、5発目がようやく吹き流しに命中した。

『当たった!!』

『やりますね、ハギちゃん』

予想以上に速い命中に、伊予の感嘆したような声が無線から響く。  
「どうでしたか？感想は」

「雷電の出っ張りに引っかければ多少は安定しますね。いつその娘に銃身を固定する部品を取り付ければいいんじゃないですか？」

「成程、ユニットに固定ですか……雷電じゃないと無理ですね。零式や紫電改だと機体の方が破損しかねません」

信乃の隣に並んだ伊予が顎に手を当てる。

「伊予はどうやったんですか？」

「連射すると銃口が安定しないので、弾を一発ずつ撃つてその都度狙いを修正して、何度か繰り返し返してようやく当てました」

「それ、機関砲の意味ないですよね」

「当てろって言われたのでそれしか思いつかなかったんです」

それも間違いではないだろう。闇雲に撃つても意味が無い事を即座に察知できるのは伊予の射撃能力の高さ故ともいえる。

「次は対地射撃ですね」

「むう、了解です」

地面に設置された的に向けて、急降下射撃。次いで低空からの水平射撃と次々にテストを繰り返す。的が動かない分、吹き流しよりは当てやすいが、それでも銃口を支えるのには苦労しているようだ。信乃が四苦八苦しながら的を一つ一つ破壊しているのを見て、伊予がぼつり、と魔導無線を介さずに呟く。

「……やっぱりハギちゃんは適応能力が高いですね」

その声は信乃には届いていない。

信乃の魔法力や飛行技術はせいぜい遣欧艦隊のウィッチの平均レベル、射撃の腕に至っては、未だに遣欧艦隊の中でも最低レベルと言っている。

だが、彼女が他のウィッチに優れている点は独特な固有魔法と、並外れた適応能力にある。

与えられた機材や武器、置かれた状況を直感的に判断して的確に最良の行動に移せる高いセンス。その点において信乃は、伊予の知って

いる遣欧艦隊のウィッチ達の中でも頭一つ抜きんでていると言ってもいい。

現に、腕だけでなくユニット全体を利用して銃口を安定させるといった芸当も、雷電の機体の耐久性や安定性を直感的に理解したからこそ思いついたのだろうし、それを咄嗟にモノにして見せるのは信乃だからこそなしえる技である。

「……新藤さんが『ハギちゃんに』テストさせたがった訳ですね」

元々新藤少佐は徹子にこれを試させるつもりはなかった。ここに持つてくれば、信乃がテストをすることになる事くらいは容易に想像が付く事だ。

伊予の目の前で信乃が最後の的に弾を命中させる。残弾を残してすべての的に当てる事が出来たのは、今まで17式試をテストをしたウィッチ達の中では伊予と信乃だけだ。伊予は射撃の腕に自信があったが、近づかないと弾を当てられない程度のレベルの信乃がそれを成し遂げたのはそれだけ信乃の適応能力が高いからの証左に他ならない。

……そう。

ぼつり、と伊予が表情を暗くする。

だからこそ、ハギちゃんは『あの部隊』でただ一人、生き残ることが出来たんですよね……。

思考を曇らせた瞬間、信乃の声が魔導無線から響いてきた。

『あーもう!!終わりましたよ、藤田中尉!!もう帰っていいんですよね』

『お疲れ様でした、ハギちゃん』

無線の声に向かって伊予が口を開く。顔を上げると、信乃が伊予の元へと戻ってくるところだった。

「うう、まだ腕がビリビリします」

そういつて腕を振る信乃はいつも通りの調子だった。

「ご苦労様です、ハギちゃん。ワツフルが待ってますよ」

伊予の言葉に信乃が眉を顰める。

「タバコとワツフル十個、ちゃんともらわないといけませんね」

人をだしにして遊んでいた連中に目にももの見せてやったのだ。つ

いでに整備兵長には酒と引き換えに20m奪還に協力してもらわなくてはいけない。

「それじゃ、あたし、先に戻りますね」

「あ、待ってハギちゃ……」

言いそびれていた一言を告げる前に信乃が滑走路に向かう。

慣れた所作でフラップを落として滑走路の低空で速度を調整していた信乃が、次の瞬間焦ったような声を上げる。

『え!?あれ!?ちよつと待っ……』

次の瞬間、がくん、と機首が下がる。立て直そうにも高度が低く、そんな余裕はない。

滑走路にまっすぐ頭から突っ込んでいく信乃を見て伊予がため息をついた。

「……だから言おうと思ったのに」

「うわあ!?嬢ちゃんが落ちたぞ!!」

「担架!!担架を用意しろ!!」

幸いにして高度が低い事と、雷電の火星魔導エンジンの高い出力で生み出されたシールドのお蔭で大した怪我はなさそうだが、顔面から衝突している。痛い。あれは痛い。

『藤田中尉い!!どういう事ですかコレ!?!』

案の定信乃はすぐに起き上がり、魔導無線越しに抗議の声を上げている。

『雷電は着地直前に失速しやすいんです』

『そういう事は早く言ってください!!』

『言う前にハギちゃんが降りちやったんです』

無線から届く怒鳴り声に伊予が答える。まあ、これだけ大声で怒鳴れるなら大丈夫そうだ。

「賭けは私の勝ちだな」

「人で遊ばないでください……」

アンジェラのしてやったりな声を聞きながら、信乃が雷電から足を抜いた。

「何だ、聞こえていたのか」

苦笑を浮かべながらもアンジェエラが信乃に手を差し出す。

「顔面でシールドを張る奴は初めて見た。器用だな、萩谷准尉」

「ええ。数少ない取柄ですし……お蔭で頭がくらくらしめます」

アンジェエラの手を取りながら信乃が立ちあがる。はあ。とため息をついたところで、背後からエンジン音が近づいてくる。

「ハギちゃん、大丈夫ですか?」

滑走路に降りたった伊予が声を掛ける。

「大丈夫じゃないです。正式に抗議します。謝罪の見返りにそのユニットをください」

「大丈夫そうですね」

ぶんすかと文句を口にする信乃を見て伊予が苦笑を浮かべる。

「そういえば若はどうしたんです? こういう時真つ先に人を嘲笑うのに」

「ああ。若本中尉ならハンナに呼ばれて司令室に向かったが……」

「ひよつとして、見ていてほしかったんですか?」

「冗談じゃないです。ええ。何言われるか分かりませんし、本当にいなくて良かったですよ」

二人の言葉に信乃が慥然とした表情を浮かべる。だが。

「……何が可笑しいんですか」

アンジェエラと伊予の顔に苦笑が浮かんだのを見て、信乃が口をへの字に曲げた。

## 16. 嵐の前の

「若本だ。入るぞ」

アンジェラからもらったワツフルの包みを手に司令室の扉を叩き、徹子が中へと入る。

「お疲れ様です。急にお呼びしてすみませんでした。若本中尉」

そういつてハンナが立ちあがる。立場上座ったままふんぞり返っていてもいいのだが、ハンナは部屋に誰かが来ると大抵こうやって自ら動いて出迎える事が多い。

徹子にソファをすすめ、自ら炒れてあったコーヒーを二つカップに注ぎ、片方を徹子に差し出す。

「まずは扶桑からの補給、本当にありがとうございます。特に弾薬が不足しそうだったので、7.92mmを優先的に補給していただけたことにはなんとお礼を言っているか分かりません」

「……喜んでもらえて幸いです」

新藤の嫌がらせも、この部隊にとっては降って沸いた恵みなのだ。

ソファに腰掛け、苦いだけの代用コーヒーに口を付けながら徹子が答える。

「……不味いな」

コーヒーは好きか嫌いかわれればそう好きではない。まだ子供の頃に美緒達と一緒に陸さんから掠めてきたコーヒーメーカーで作ったコーヒーの苦かったこと。だが、年を経るにつれてそれなりにコーヒーの味も解ってきたつもりだ。

それを踏まえてこの味を敢えて言わせてもらう。

普通に不味い。

「ええ。もう残っているのがこれしかないのです」

向かい合わせにソファに座り、カップに口を付けたハンナも同様に眉を顰める。

「……苦い。暖かいだけの泥水ですね。控えめに言って」

「……カールスラントからの補給が滞っているみたいだな」

「……申請は出しています。恐らく、今頃ガリア国境の基地にはリヨン

基地あての補給品や人員があふれている事でしよう」

そう言つてハンナが肩をすくめる。

「おかしな話だ。扶桑の補給部隊に対してもガリア政府は難色を示したと聞いたが……」

こつそりと伊予が耳打ちしてくれた話を思い出しながら徹子が口を開く。

「それだけ、私達が邪魔なのでしようね」

ふざけた話です。ハンナはそういうと代用コーヒーを一口舐める。

「……やっぱり美味しくないですね、これ」

肩をすくめてカップをテーブルに戻し、口直しとばかりに徹子がテーブルに置いた差し入れのワッフルに手を伸ばしながら口を開いた。

「……若本中尉は、今の現状をどう見ます?」

ハンナの問いに、徹子が肩をすくめる。

「推察は好きじゃないが、今までの経験上からすれば、余り好ましいとは言えないな」

「……と、言うത്?」

「戦闘面だけならば506と共闘をすることが出来て楽になつている。だが、それだけだ。奴らが動いたのは自発的なモノであつて、上からの突き上げがあればいつ中止されるかもわからん。加えてこの部隊は相変わらず補給も増援もともに受けられない。扶桑の補給にしても、オレとハギに対してという名目だしな。量はたかが知れている」

このままではカールスラント側の物資が緩やかに尽きていく。幸いにして基地内には予備のユニットや弾薬類はそれなりに豊富だが、戦いが続く以上それらは無限ではない。

「……何より問題なのは、今の事態に、この基地の連中が『適応』してきている事だ」

「ええ。私もそう思います」

ぱくり、とワッフルを一口食べてハンナが大きく頷く。

目下のところ大きな危機を乗り越えた、という空気が基地内に蔓延

している。何度か戦闘を重ねた自信も悪い意味でそれを助長している。

現状は谷底に向かって一直線に伸びている線路を走る汽車の速度がややゆっくりになった程度なのだが、人は無意識のうちに自分は安全なのだと信じたがる。

それはウィッチも政治家も同じ事だ。崖から落ちた経験が無ければ、それはわからない。

「ネウロイの侵攻があるという事は、その元があるという事です。それを断たない限り、いつ致命的な事態が起こるか分かりません」

「カールスラント人は勤勉だな。新人教育も出来たし、後は政治家が望むとおりにとつとここを引き払えばいいものを」

「ここがリヨンでなければそうしますよ」

この基地が抜かれればリヨン市街、そして南部の港の要衝であるマルセイユは目と鼻の先だ。ガリア有数のこれらの都市には多くの人々が暮らし、戦禍の復興の為日夜努力を続けている。

「私達が守っているのは人の命です。政治家や国の面子ではありませんん」

「最高のウィッチだな、ハンナは」

皮肉でもなんでもなく、素直にそう思う。

「ありがとう。『扶桑最強のウィッチ』さん」

ハンナの言葉に謙遜も否定もせず徹子が肩をすくめる。そう呼ばれてたくて努力して、結果を出しただけの話だ。

「おだてても出るのは戦果ぐらいだ」

「じゃあ、もう少し出してもらってもいいですか」

軽口を叩き合いながらハンナが手元に地図を差し出す。リヨン周辺には赤いペンでいくつもの線が引かれている。

「これは？」

「今までの空戦資料からのネウロイの飛行経路です」

そうやってハンナが地図を指でなぞる。

「これらの線を辿っていくと、ほぼ全ての線が交わるであろう箇所が、このあたりです」



その個所に、徹子が眉を顰める。

「……これが本当なら、早めに動く必要があるな」

「ええ。だから若本中尉に直接、尋ねたかったです」

「何がだ。オレはまだ上がりを迎えるには早いぜ？」

「その事に関しては理解しています。むしろ……」

そういうとハンナは徹子を見据えた。

「ハギさんは、『あの作戦』の後、偵察任務を行う事に支障が出ていますか？」

その言葉に徹子がぴくり、と眉を動かす。

「……知ってたのか」

苦いだけの代用コーヒーを啜り、徹子が呟く。

「ええ。私も『あの作戦』に参加していましたが。ただ、雰囲気は大分変わっていたので、気が付いたのは、あの模擬戦の途中からです」

信乃の飛び方というのは独特だ。所謂飛行技術的で言えば特段優れているとは言えない。直感的だが天才的ではない。

では、何が優れているかといえば、不器用ではあるが、生き残る為に何をすべきかという事が全てにおいて優先されている事だ。独特なシールドの活用法も、固有魔法を生かした回避方法も、本来であれば不利な下方からの打ち上げ攻撃も、誰かが教えたわけではない。生き残るために誰かがそうしているのを見て学び、そして独自に磨いて行ったものだ。

信乃の飛び方は見るものが見ればすぐにわかる。歪だが洗練された、防御的なインフアイター。矛盾を内包しながらそのまま個性として昇華された唯一無二の戦闘スタイルだ。

カップを置いた徹子に対して、ハンナが口を開く。

「……あの子は今も、東部戦線の強襲偵察部隊……第3統合航空飛行隊の萩谷信乃准尉ですか？」

タイフーン作戦、そして、バルバロッサ作戦。

過酷な強行偵察に従事し、その適応能力で他のウィッチとは違う戦い方を確立した扶桑の少女の事を覚えているウィッチは決して少なくはない。ハンナもその一人だ。

ハンナの言葉に徹子が息を吐く。

「……アイツ次第だ。アイツが無理だと言えば、オレはそうさせる。お前達が何と言おうと、あの時の二の舞だけは御免だからな」  
「嫌と言わなければ？」

ハンナの言葉に徹子が肩をすくめた。

「素直に成長を喜んでやるさ」

「もし私があなたの立場なら、そんな風に思えないと思います」  
「いや、きつとそういうさ」

ハンナの言葉に徹子が苦笑を浮かべる。

「あいつはああ見えて頑固だからな。誰かのいう事を素直に聞くような奴なら、とつくに飛ぶことを諦めているさ」

「それじゃあ、ハギちゃん。頑張ってくださいね」

「藤田中尉も。皆によろしく伝えてください」

零式輸送機の脇で紫電改に足を通した伊予に信乃が答える。

「雷電と17式試は置いて行きますから、使えるようなら使ってください」  
「さ」

「そうですね……言われる程酷い機体じゃないですし、居場所がないのも可哀想です。まあ……仲間のよしみです。彼女はあたしが預かりますよ」

伊予の言葉に信乃が肩をすくめる。

「あはっ、ハギちゃんらしいですね」

ストライカーユニットを仲間と呼ぶ信乃の言葉に伊予が笑みを浮かべる。

「……あの、ハギちゃん、もし……」

伊予が何かを言いかけて口を閉じる。

「藤田中尉」

代わりに口を開いたのは信乃だった。

「ジェノヴァに戻ったら、皆で町に出て美味しいロマーニヤの料理を食べましょう。もう芋とかソーセージとか、キャベツの酢漬けとかは食べ飽きました」

「……そうですね、そうしましょう」

くすり、と優しくそうな。そして、どこか寂しそうな笑みを浮かべ、伊予が答える。

「もし、可能なら……出来るなら私も一緒に残って……」

「輸送機の護衛がいなくなるじゃないですか。あたし達は大丈夫ですから、安心してください」

「……そうですね」

「あ。次の補給で20mmは忘れないでくださいよ。若にとられる前にあたしに回してくださいね」

「あはっ。了解」

伊予が零式輸送艇に続いて滑走路を飛び立つ。

「……無事に帰ってきてね、ハギちゃん」

そう言い残し、伊予が空へと消えていく。

「はあ……まったく、皆、心配性ですね」

手を振りながら信乃が呟いた。

そう、自分は大丈夫。

皆のように強くなれなくても、自分の弱さを誰よりも知っているのだから。

## 17. 強行偵察

ブリーフィングルームに集められたウィッチ達は皆一様に不思議そうな顔をしていた。

何しろ基本的にこのリヨン基地ではこういった改まった形での作戦の伝達はあまり行われない。

せいぜい朝の全体確認くらいで、その場その場の作戦伝達は直接ハンナが搭乗員室や談話室に向いて行う事が多いくらいだ。

他人に対して上から出ようとしないうハンナの人柄もあるし、そもそも基地自体が農家を改造した臨時施設であり、部隊全体が家族的な雰囲気だというのも影響しているのかもしれない。

「ねえ、何だと思う？ベレーナ」

「何でしょうか、若本さん」

「何でもオレに聞くな」

ちやっかりと徹子の隣の席を確保しているベレーナの問いに徹子が肩をすくめる。最近ベレーナは事あるごとに徹子と行動を共にしようとしている。食事中然り、談話室然り。娯楽室に誘いに来たことも一度や二度ではない。

「……随分若に懐きましたね、ベレーナ」

「嫉妬ですか？」

「は？あたしが？は？そんなわけないですし？若が誰と仲よくしようが知った事じゃないですし？」

ハンネの問いに信乃が答える。

「それを言うならハンネだってベレーナを取られて気にならないんですか？」

「あの子は元々惚れっぽい子ですよ。私の前はアンジェラ、その前はノヴォトニー大尉の大ファンでしたから」

「……そうですか」

はあー、と疲れた様にため息を吐き出す信乃。

「眠い」

「アンネもいるんだ、珍しいね」

ユーリの問いに隣に座ったアンネが肩をすくめる。

「全員呼集だからつてたとき起こされた。まあ、ジェニファーがいるから寝不足でもどうにかなるだろうけどね……」

「総員、傾注」

ブリーフィングルームの扉が開き、アンジェラとハンナが部屋に入ってくる。アンジェラの慇懃な声に皆が一斉に立ち上がり敬礼を行う。

「着席」

席に座った皆を確認し、アンジェラがブリーフィングルームの壁に大きなリヨン周辺の地図を広げる。

「何？なんか重々しい雰囲気じゃない……？」

ぽつり、と小さな声が起こる。

「静かに」

言葉を遮ったのはハンナだった。思わず皆が背筋を伸ばす。その声は普段の優し気な物とは違う、真つ直ぐで強い声だった。

しん、と静まり返るブリーフィングルームに緊張感が漂う。いつもとは違う雰囲気の中、正面の机に立ったハンナが口を開いた。

「先ずはここ数日の作戦行動について皆に感謝を。皆の尽力のお蔭でネウロイに対する防衛網は盤石と言っていいでしょう」

普段よりも背筋を伸ばし、堂々とした態度で口を開くハンナには普段の気弱さや内気さは見られない。穏やかながら力強い声色に、皆が自然とハンナの言葉に耳を傾ける。

「……なので、次は今度はこちらから打って出る番です」

ざわ。とブリーフィングルームの緊張感が温度を増す。

「今までのネウロイの出現パターンを解析すると、ネウロイの出現予想位置はディジョン北東部でセダン基地の哨戒範囲が及ばない地域。それはこのガリアに置いてただ一つ」

地図の脇に控えるアンジェラの手で今まで侵攻してきたネウロイの針路が次々に書き込まれていく。そして、その進路から更に北へ、どのようなルートを通りネウロイが防空圏内に来たのか。その予測ルートのほぼ全ての線が交わる『点』。

ハンナは手にした指揮棒で地図を叩いた。

「カールスラント国境の最東端、ジークフリートラインの内側です」  
ジークフリートライン。カールスラントでかつてそう呼ばれ、ガリアではマジノ線とよばれている天然の要害を生かした長大な要塞群による防衛戦だ。

ハンナの言葉に皆が息を飲む。

かつてガリアがネウロイに蹂躪される直前、ネウロイの侵攻を食い止めるべくして作られた長大な要塞の列。しかし、ネウロイはベルギカを落としたままの勢いで北部から一気にガリアになだれ込んできた。人類史上類を見ない屈強な要塞群は、その実力を発揮することなく、その存在意義を失った。

だが、再びガリアを人類が奪還した現在、マジノ線は再び意味を持つようとしていた。

現在、セダン基地の506のA部隊がベルギカ方面への防衛にらみを利かせており、その先ではカールスラントの侵攻部隊がカールスラント国境付近まで到達している。

一方東のカールスラント国境沿いは、未だにマジノ線が手つかずのままに残っている。ガリア東部の高山地域に残るネウロイの遺物……わずかに残ったブラウシュテルマーを完全に駆除した暁には、ガリアはそこに兵士を駐屯させ、カールスラント国境沿いの防衛に再活用するつもりらしい。

だが。もしその内側。ネウロイの物でも、人類の物でもない空白地帯に既にネウロイの拠点が出来上がっていたとするなら。

それは、まさにガリア政府の描いていた防衛線はあつという間に薄氷の上に立たされることを意味している。

「確かな情報ですか？」

声を上げたのは眠気が吹っ飛んだ様子のアルマ。

「ネウロイも一直線にこちらに向かうものばかりではないでしょう。ですが、多くのネウロイがこのように防空圏内を一直線に飛んでいるのは確かです。迂回するような動きを見せるものも、そのまま弧を伸ばせば一点に集中します」

更にハンナは徹子を見やって口を開く。

「ここまではあくまで我々の推察です。その推察が正しいかどうかは動いてみなければわかりません。ただ、いつまでも我々が受け身では、折角解放したガリアが再度危機に晒されかねないのも、また事実です」

そう。現に、ネウロイは既に、このガリアの土地に定期的に現れるくらいには侵攻してきているのだ。

「……あくまで推察ですが、現状を分析すれば、限りなく真実に近い推察だと私は思っています。なので、次はこの推察をアルマの言う通りの『たしかな情報』にすることが肝要です」

どうやって……？ 思わず漏れた問いに、ハンナが答える。

「偵察を出します。敵の懐に飛び込む事になりますので、偵察班には交戦を前提としたうえで挑んでもらいます」

決然とした表情でハンナが告げる。

強行偵察。

敵の反撃が予想される空域に武装して飛び込み、敵と接触、交戦しながら情報を収集する。当然ながら危険度は高いが、大規模な戦闘、特にこちらから相手の拠点に殴り込みに行くような作戦の前には不可欠な任務でもある。

だが、それだけの作戦を、何故今行うのか。

「……我々がこれだけの作戦を実施する為には大量の物資が必用となります。今までのペースで弾薬や燃料、予備部品を消費してしまえば、作戦を実行する事が困難になります。なるべく早期に、物資の不足に悩む事のない今のうちにこの作戦を実行しなくてはいけません」  
ごくり、とユーリが唾を飲み込む。ベレーナも不安そうに隣に座る徹子にちらちらと目を向けている。

徹子は腕を組んだまま黙したままだったが、ぼつり、と口を開いた。  
「……オレ達は軍人である以前にウィッチだ。助けを求められれば手を差し伸べるのは当然なのはわかっている。だが、補給も寄越さない奴らの為に何故、戦う必要がある？」

新兵たちの気持ちを代弁するように徹子が口を開いた。

徹子とて、この作戦が必要なものだという認識はある。だが、部隊の中で疑問を解消しなくては、作戦遂行に支障が生じる。逆に言えば、この質問に満足な答えが出せないようなら、作戦を認めるわけにはいかない。

「ウィッチだからです」

ハンナが答える。簡潔な答え。だが、それがすべてだ。

「人々を守るのがウィッチの役目である以上、自分達がどう思われようが、手を差し伸べなくてははいけません。それが出来ないのであるのなら、ウィッチを名乗る資格はありません」

ハンナの知っているウィッチ達は、地図を見てるだけの政治家が見捨てようとしている人たちを銃を握って守ってきた。ダイナモ作戦、タイフーン作戦、リバウの撤退戦。その戦いの陰で、何とか逃げようとする人たちを守ってきたのは、多くの名もないウィッチ達だ。

膨大な数の中で切り捨てられた端数を一つでも多く積み上げようと、目の前で助けを求める人たちに手を差し伸べてきた。その事は今も揺るがないし、これからもそうだ。

ネウロイの熱線が自らの『グリーンヘルツ緑の心臓』を貫くまで手を伸ばし続けるのがハンナの、否、JG54のウィッチなのだ。

「全く、若はいつも余計な事を言いますね」

信乃が口を開く。

「あたしは賛成です。とっとと倒しちゃいましょう」

信乃の言葉に、ハンナの脇に控えていたアンジェラ同じく頷く。

「同感だ。蠅叩きにはもううんざりしていた頃だしな」

「まあ、ジェニファーを焚きつけたのは私だからね。こっちから抜きましたなんて言えないか」

「ボクも!!ボクもウィッチだもん!!やりますっ!!」

「わ、若本さん、ユーリは止めておいたほうが良いと思うんですが……」

「だからオレに振るな」

ベレーナの言葉に肩をすくめる徹子。他にもJG54の面子が、一人一人と肯定の声を上げる。



皆が頷いたのを見て、ハンナが徹子を見る。

「解ってる。もうこれ以上オレが言うことは無い」

その言葉にハンナが大きく頷いた。

「皆さん。本作戦の開始時刻は明朝0600。翌日の1200には作戦を完了させる予定です。これより、以降の作戦を『オペレーション・ブリッツ』と呼称します」

「……隊長が自分から雷って言った」

ほつり、と誰かが吹き思わず数名が嘔き出す。こほん、とハンナが咳払いをする。雷恐怖症で有名なハンナの頬はわずかに羞恥で赤らんでいるように見えた。

『オペレーション・ブリッツ』の前段はネウロイの拠点の特定です。少数のウィッチによる偵察班を編成。敵の拠点と勢力を割り出します。その後、現時点でのリヨン基地の全戦力、これを持ってそれを速やかに叩きます」

そういつてハンナが視線をまっすぐに向ける。

敵の拠点に突っ込むのだ。偵察とは言え、多少の戦闘は覚悟しなくてはいけない。

「無理は禁物です。生存を再優先に。もし偵察が無理だと思ったら即刻中断して戻ってきてください……アルマ」

「はい」

「貴女の探索魔法は夜でなくても威力を發揮します。偵察班に加わってください」

「了解です」

僅かに緊張した面持ちでアルマが答える。無理もない。敵の勢力の規模が解らないところに突っ込むのだ。だが、緊張した表情を浮かべていても、尻ごみした様子はアルマには見られない。

「ハンネ。貴女は護衛です。偵察班が生還するためには貴女の力が必要です。出来ますね？」

「了解しました」

物言いは静かだが、力強くハンネが答える。この部隊の中で、純粋な実力で言えばアンジェラと互角に戦えるのは彼女だけだ。少数の

部隊なら、自分の力が必要になる事は当然の事だ。

「そして、萩谷准尉。偵察班の班長は、貴女にお願いします」

「……へ？あ、はい!!」

一瞬きよとした後、信乃が慌てて返事をする。

皆の視線が驚いたように信乃とハンナ、交互に注がれる。

「つて。あたし、ですか？」

「はい。萩谷准尉……ハギさんをお願いします」

ハンナが再度頷く。すると、皆の瞳が驚きから疑問へと代わる。

階級が上であればそれに従う。同階級であるならば先任が上に立つ。

カールスラント軍人なら。否、およそ軍隊という組織に属するなら、当然ともいえるその原則を覆すようなハンナの言葉に皆が戸惑うのも無理はない。

だが。

「確かに、階級的には異例の編制です。ですが、空では実力が全てです」

ハンナが言い放つ。

「私達が、シノに実力で劣っているとでも……?」

「少なくとも、偵察任務においては、です。経験、実績。それらを考慮した結果です」

その言葉にちらり、とハンネが信乃を見る。

「ハギさん。もし、少しでも自信が無いようでしたら、無理は言いません。ですが……」

「……いえ、行けます」

その言葉に信乃が頷く。

一瞬浮かんだ戸惑いは既に消え、その目には静かに燃える攻撃的な灯が宿っていた。

「……ならば、お願いします。ハギさん。無理をしないでというのは難しいかもしれません。ですが、皆で、必ず戻ってきてください」

「はー!!」

その言葉に信乃が今度ははつきりと、力強く答える。

「……ハギ」

「何ですか、若」

「……本当に、大丈夫なんだな」

徹子が問う。だが、その目は飛べるのか、と問う目ではない。

無理をするな。という目だ。

彼女は、ハンナとは違い、『あの部隊』の事を断片的ながら直接聞いて知っている。

そして、信乃が遣欧艦隊に復帰した時の事も。

あれほど自らの判断を悔いたのは、後にも先にもあの時だけだ。

もし、ハンナがその場に居るような事があれば、或いは初めから信乃を指名したりはしなかったかもしれない。

だが。

だからこそ。

「はあ、若といい藤田中尉といい……」

徹子の問いに信乃が呟く。一拍の後、今度は、真っ直ぐに徹子を見つめ返した。

「任せておいてください。今度は、皆まとめて連れて帰ってきます」

「……そう、か」

「ええ。あたしはあの時とは違います。生きて、皆で帰る事が目的だって、ハンナが言いましたから」

そう。信乃は変わった、否、成長した。出会ったばかりの人見知りで怖がりな子供でも、遣欧艦隊に復帰したばかりの心に傷を抱えて抜け殻のようになっていた少女でもない。

今の信乃は、徹子の隣に並び飛ぶ、頼りになる二番機なのだ。

「現時刻を持って『オペレーション・ブリッツ』を発動します。各自、任務に備えて行動を開始してください」

ハンナの言葉と共に皆が立ちあがり敬礼する。

皆と同じように立ちあがり、敬礼を返す信乃の胸元。

そこには気を配らないと気が付かない程にひっそりと、小さな偵察徽章が縫い付けられていた。

幕間 — 2 —

1941 オラーシャ

「……乃、信乃ってば」

その声に信乃はふらつく足を止めて振り返る。そこへ背の高い少女が一人、こっちに向かって小走りにかけてくる。

「……何？」

「何って、さつきから声かけてるのに無視するんだもん」

金髪の髪と同じ太い眉を軽く釣りあげて咎めるように口を尖らせるそばかす交じりの少女の言葉に、信乃が僅かに申し訳なさそうに眉をすくめる。無視をしたつもりはない。耳に入らなかったのだ。

「ごめん……」

「もう……薬の副作用？ひどい顔だよ」

そういう少女も中々に酷い顔だ。青ざめたような顔に少しこけた頬、目の下にはうつつすらと隈が出来ている。恐らく自分も大差ないだろう。任務前に接種した薬が切れた後の疲労感にさいなまれるこの感覚は、ついこの前に13歳を迎えたばかりの子供の体には強すぎる苦痛だ。

「……それで。どうしたの、ケリー」

「あ、うん、それなんだけど……」

躊躇いがちにケリーと呼ばれた少女が口を開く。

「……休暇がもらえることになったの、次の任務の後」

「そう……よかったね」

信乃が薄く微笑む。信乃たちの任務は体力以上に神経を大きくすり減らす。既に3回、この任務にあたっていているケリーはそろそろ限界だろう。

「……良かったけど、よくないよ」

信乃の言葉に、きつ、と眉を吊り上げる。

「信乃が休みを譲ってくれたんでしょ？どうして？どうしてそんな事するの……？」

「……それは……」

「信乃、一体何回任務をこなしたと思ってるの!?!そろそろ下がらないと、死んじゃうわよ!!」

「……あは、強行偵察の回数ならあたし、もうトップエースだ」  
「っ!!」

乾いた音が響く。

ケリーが信乃の頬を叩いたのだ。足で体を支えようとするが踏ん張りがきかず、信乃がその場にぺたん、と倒れこむ。

「痛いよ……それに、上官に手をあげちゃダメでしょ、一応あたし、隊長だよ」

「関係ないわよ、そんなの……」

ケリーの目に涙が浮かぶ。

「……あなたが隊長なんて、私はそもそも認めてないんだから。13歳の、妹と同じ年の子を、固有魔法が便利だからって何度も敵の巢に突っ込ませるなんて、控えめに言って狂ってるわ!!」

ケリーはB o Bから戦っているベテランだという自負がある。年も信乃より4つ上だ。理不尽な戦場も、自分よりも年下のウィッチが撃墜されていくのを見たのも一度や二度ではない。

だが、この部隊はそんな戦場の狂気すらかすんで見える……否、その狂気そのものを圧縮して具現化したような、そんなおぞましきすら感じる。

この小柄で華奢な、はっきり言って頼りない少女を隊長と担ぎ上げ、敵の本拠地に放り込む。

もし自分が彼女の親や兄弟なら、こんな命令を出した奴を殴つても止めさせるだろう。

「誰かがしないといけない事だよ?あたしには、それが出来るんだから」

信乃が答える。どうしてわからないの?といった顔に、ケリーが顔を悔しそうにゆがめる。

第3統合航空飛行隊『ヴァジエト』。

信乃の『チリチリ』を含む、『魔眼』や『未来予知』など、防御や索敵に適した固有魔法を持つウィッチで構成された、強行偵察を目的と

した部隊だ。

……いや、そうだった。

今では固有魔法を持つウィッチは信乃一人。後は皆命を落とした。強行偵察の任務は酷く単純で、ひどく残酷だ。

すなわち、カメラを持った一人のウィッチをその他のウィッチが護衛し、ネウロイの拠点、或いはネウロイの巣そのものに飛び込み、カメラを手に情報を収集し、その間は護衛のウィッチがそれを守る。カメラのフィルムが尽きるまでそれを行い、そして人数を減らして帰投するか、或いは全滅する。

『ヴァージェト』という全てを見通す目を持つアフリカの神の名を与えられた第3 JFSは、現在行われている『タイフーン作戦』及び『ダイナモ作戦』において、その偵察任務、特に強行偵察を専門に行う部隊で、信乃はこの部隊の二代目の隊長を務めている。

信乃の前の未来予知の固有魔法を持つ隊長は任務中に仲間を庇って命を落とした。信乃が2度目に強行偵察を行った時の事である。

この部隊においては生存確率が限りなく低い場所から生き残って戻る事だけが至上命題だ。信乃の固有魔法と適応能力がこの部隊に置いて最もその条件に適っている。それだけの理由で、信乃は部隊最年少の13歳で二代目の隊長となった。

そして、信乃はその後、強行偵察を成功させ続けた。

通算10回以上も強行偵察に参加し、ネウロイの巣、或いはそれに準ずる危険地帯を偵察し続け、生き残ったウィッチは他に居ない。

信乃が初めて行った時のメンバーのうち、生き残ったのは信乃を除いて一人。魔眼を持っていたその彼女は目の前で隊長が自分を庇って命を落として以来、精神に異常をきたして本国に強制送還された。その後の事は聞かされていない。

その後、信乃が隊長を務めてから現在に至るまで、追加人員は湯水のように消費され、名前を覚える余裕もない。

この部隊に人員を裂いていた各国も、貴重な固有魔法を持つウィッチを消耗することを避け、捨て駒のように普通のウィッチを差し出すようになった。

まるで、戦場における人身御供だ。

現在の部隊員は信乃とケリーを含め4名。殉職者はその倍を優に超える。

しばしば部隊の内外から解散を求める具申が起こってるが、現状で彼女たちは既に多くの戦果をあげすぎていた。それに、強行偵察が犠牲を強いるものであることは当然であり、彼女たちがいなければ誰かがその役を追わなくてはいけない。そうすれば、もつと多くのウィッチが犠牲となるとというのが部隊存続を進める上の言い分だ。

「ケリー、言ってたよね。ブリタニアに妹がいるって。あたしと同年で、もう一度会いたいって。お母さんの作ってくれたシチューとお父さんのローストビーフがもう一回食べたいって……あたしはそれをしてほしいの」

「……っ」

よろよろと立ちあがりながら信乃が口を開く。

「あたしの事はいいから、ケリーは自分の事を考えて。あたしも、出来る限り頑張るから」

「信乃、貴女は……」

「明日の任務が終われば、サトウルヌス祭までに帰れるよ。タイフーン作戦だって、もうすぐ終わる。だから、生き延びて、ケリー」

13歳の少女にケリーは何も言い返せなかった。目に深い隈を作り、血色の無い顔に、だが、真っ直ぐな瞳だけは失っていない少女に、思わずケリーが言葉を飲み込む。

「解った……だけど、『隊長』も死なないで。それだけは約束よ」

「うん、約束……あたしは大丈夫」

ケリーの言葉に信乃が薄い笑みを浮かべて小指を差し出す。

「……何？」

「扶桑のおまじない。小指と小指を絡ませて、呪文を唱えるの」

その言葉にケリーがおずおずと小指を差し出す。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のます、指切った」

扶桑の言葉で信乃が呪文をとなえ、指を話す。

「どういう意味なの？今の言葉」

信乃が意味を教えると、ケリーが眉をひそめた。

「地味に物騒なおまじないね」

「針を千本も飲みたくないもん。絶対に約束は、守るよ」

翌朝。

「健闘を祈る」

オラーシャ軍の将校の服を着た壮年の男に短い訓示を受け、信乃たちはストライカーユニットに足を通し空を駆けていた。

短い訓示に豊富な加食。干し肉ではない新鮮なトナカイの肉を贅沢に使ったシチーとガリア産の年代物の赤いブドウジュース。そして、希望者には精神に影響を及ぼす薬物の投与。

ブドウジュースは苦手な若年のウィッチも含め、部隊の全員が薬物の投与だけはそれを要求した。

最後の晩餐だ。

編隊の中心にいるのはカメラを手にした信乃。そして、右翼にケリー、左翼と後方に他のウィッチがつける。前回の任務で二人の殉職者を出した為、この二人は今回が初めての強行偵察となる。

今回の偵察対象はネウロイの巢。膨大な犠牲を払いついに近づくことに成功した、人類の忌むべき攻撃目標。

全員が殆ど言葉を交わす事も無く、ただひたすらに目標に向かって空を駆ける。ネウロイに補足されないよう、雲に身を隠しつつの高度を保つての飛行となるが、皆経験を積んだウィッチ、高高度を不得手とする零戦を駆る信乃を始め、編隊を崩す者は一人もない。

「隊長、巢が見えてきた」

カールスラントの制服を着た右翼につけるウィッチが口を開く。名前は聞いていたはずだが、薬の副作用が酷い時に聞いたせいか、信乃は直ぐに思い出せなかった。

「了解。作戦続行が不可能だと判断したら速やかに離脱するように。皆、命を無駄に捨てないでください」

先程投与された薬の影響で、地上とは打って変わった凜とした声で信乃が答える。それは痛覚も和らげるが、固有魔法のチリチリまで鈍らせることは無い。むしろ神経を昂らせ、チリチリに集中させること



が出来る為、戦闘行動に限って言えば、信乃の固有魔法との相性は非常に良かった。

「むしろもう不可能っぽい気分ですわ」

軽口を叩いたのは信乃の後方に付けているオラーシヤの制服を着た髪の長いウィッチ。

「ターシヤ、今逃げ出したら私がアンタを撃墜するからね」

冗談とも本気ともつかぬケリーの言葉に皆が小さな笑い声をあげる。信乃も笑いながら、そうか、こっちがターシヤだったかと記憶の糸を辿っていた。

「突入後は9時方向へ旋回、弾を打ちまくってシールドを張って、偵察終了の合図まで粘って逃げる。以上です」

信乃が命令を出す。アバウトと言えばアバウトだが、それ以上の複雑な作戦行動など不可能な事はケリーも理解していた。他のウィッチも、殆ど投げやりともとれるその指示に、改めて強行偵察の恐ろしさを感じていた。

「それじゃあ、行きます……3, 2, 1……」

突入。

信乃の合図と共に、一気に魔導エンジンを吹かす。ユニットの出せる限界速度で一気にネウロイの巢のある雲の中へ突入する。

途端に体が引き裂かれそうな無数のチリチリとした感覚が信乃を襲う。震えそうになる手を必死に沈めながらシャツターに指をかける。両脇、後ろでは狙いを定める余裕もなくそれぞれが手にした機関銃のトリガーを引く。シールドを張りながらひたすら飛び回り、信乃がシャツターを切る。

まるで蜘蛛の巣か、或いは無数の細いワイヤーの様な腕で絡み合うネウロイの群体。それはまるでニューロンと、それを繋ぐシナプスのようでもある。人体に飲み込まれてしまった非力な病原体のように、巢の中身の全容を目の端で追いながら飛び回る『ヴァシエト』のウィッチ達。

全てのフィルムを使いきるまで1分にも満たない。だが、その時間の中で生きながらえるのはほぼ運任せに近い。

シールドの脇をネウロイのワイヤーの様な体の一部が、ビームがすり抜ける。上下左右、全方向から襲いかかる熱線はともじやないがシールドで防ぎきれようなものではないが、張らないよりましだ。チリチリから身をよじっても更に多くの殺気がチリチリと信乃の肌を焦がす。ネウロイの腕が飛行服を裂き、熱線が黒い火傷の跡を体に残す。それでもカメラを切り続ける。10秒も経過しない後、背後から悲鳴が聞こえる。

チリチリが背中に集中する。オラーシヤのウィッチが落とされたのだろう。最期を看取る余裕もなく、信乃はシャツターを押し続ける。左右に付けたウィッチが悲鳴と罵声を上げる。だが、まだ声は左右から聞こえる。大丈夫、生きています。

30秒くらいが経過しただろうか。左から聞こえていた悲鳴がふと途切れた。同時に左側のチリチリが強くなる。高度を下げてやり過ぎす。視界の隅で黒い塊が蠢いている姿が見えるが、それ以上の事は解らない。目を向ける間もなくその方向へカメラを向け、闇雲にシャツターを切る。濃密すぎるネウロイの瘴気に頭がくらくらするが、まだカメラのフィルムは残っている。シャツターを切り続ける事しか、この地獄から抜け出すすべはない。

そろそろ50秒が経過しようとした時だった。どん、と信乃の体に衝撃が走る。同時にぐちゃり、とトマトがつぶれるような音と共に、何かが視界を遮った。

全身を殴られたような痛みに一瞬被弾したのかと思ったが、そうではない。

視界を遮るそれを咄嗟に拭くと、視界の隅で『何か』がいくつもの破片となって巢の奥へと消えていくのが映った。

それを確認している余裕はない。それを知ってしまう事を感情が拒否する。

四方八方から襲うチリチリとした感覚から身をよじる。

シールドを張り熱線を受け流し、拭った手を見るとべつとりと赤い鮮血が袖を汚していた。ぬめる手から滑り落ちないようにカメラを構え直し、シャツターを切る。程無くしてシャツター音が途切れ、手

にしたカメラがフィルム全てを使い切ったことを信乃に伝えてくる。  
「作戦終了、全機離脱せよ、作戦終了」

予定通りに魔導無線に向かって声を掛け、後はそのまま全力で直進。チリチリする箇所を守るように背後にシールドを張り、次の瞬間。

目の前に眩しいばかりの青空が広がった。

ネウロイの巣を抜けた、その事に気が付いたのは、暫く飛んでから、ちらり、と背後を振りかえった際に黒い積乱雲のようなそれが遠ざかっていくのを確認したからだ。それまではここがああ世なのか現実かどうかの判断すらつかなかった。

「……」

体の右半分が冷たい。左手で頬を撫でると、そこにはべっとりとした赤黒い液体がこびりついている。

「……そっか、終わったんだ」

ぼつり、と眩き針路を基地へと向ける。

周囲に僚機の姿はない。速やかに帰投するため、任務後の集合場所などは設けていない。後は『生きていれば』個々別々に基地へ帰投するだけだ。

真つ直ぐ基地に向かいながら、魔導無線に声を掛ける。

『こちら『ヴァジエト・ワン』、作戦終了、帰投する、繰り返す、こちら『ヴァジエト・ワン』、作戦終了、帰投する。繰り返す……』

応答が届くまで。壊れたラジオのように、信乃はその言葉を発し続けた。

基地で出迎えてくれたのは担架と応急処置用の道具を手にした衛生兵と、どこかで見た事のあるウィッチ達だった。

滑走路に降りたった血まみれの信乃をみて皆が愕然とした表情をする。無理もない。それだけの出血をしていれば、今直ぐにでも処置を行わなければ、命にかかわるのは容易に見て取れる。

「萩谷准尉、大丈夫ですか!? 衛生兵!! 処置の準備を!!」

信乃に駆け寄り身体を支えてくれる長い髪の毛のオラーシャのウィッチ

チの言葉に、信乃が口に笑みを浮かべてぽつりと答える。

血に汚れる事も厭わずに。

優しい人だ。だけど、自分は大丈夫。

大丈夫なのだ、自分は。だから、これ以上余計な手をかけさせるわけにはいかない。

「……大丈夫です……これ……あたしの血じやありませんから……」

確か、偉い人のはずだ。お世話にもなった。あたし達がこれ以上空を飛ばないように、何度も具申してくれた。ああ、なのにどうして名前が思い出せないのか。

さつきから現状認識があやふやだ。薬のせいか、いろいろな事が思い出せない。

信乃の肩を掴むオラーシヤのウイツチの腕が震える。

信乃の言葉の意味を理解した瞬間、血にまみれるのにも関わらず、そのウイツチは自分より頭一つ小さな信乃の体を抱きしめた。

「……ごめんなさい……萩谷准尉……ごめんなさい……」

綺麗な顔をくしゃくしゃにゆがめ、その目から涙を零す嗚咽交じりのウイツチの言葉に、その場が重苦しい雰囲気に含まれる。

だが、信乃はただひたすら休みたかった。

固有魔法を使い過ぎたせいなのか、ネウロイの瘴気にあてられたか、或いは薬の副作用なのか。頭がふらふらして意識が朦朧とする。

強行偵察の後のウイツチに見られがちな後遺症だ。思考も霞がかっており、カメラを誰かに手渡した後は何があったかよく覚えていない。からからに乾いた喉を誰かの差し出してくれた暖かい飲み物で潤し、体を洗いたいと呟けば、誰かがシャワー室へ自分を案内してくれた。

一介の飛曹長がここまでの厚遇を受けるのは、それが彼女のこなした任務がいかに重く、困難だったかを示している。

本来であれば時間制限のあるシャワールームを一人で好きなだけ使っていていいと言われた。

べつとりと赤黒く染まった飛行服とボディスーツを脱ぎ捨て、シャワーの栓をひねって体中にこびりつく液体を流れ落す。

排水溝に注ぐ水は赤い色に染まり、洗い流しても流しても、ぬるつとした感覚と鉄のような臭いはどうしても抜けない。

ふと、髪を擦っていた手に何かが引つ掛かり、目の前に何かが転がる。どうやら髪に絡まっていたようだ。

首を傾げて『それ』を摘まみ上げ、シャワーの水でそれを洗う。

よく見るとそれは人の指だった。

恐らく、先程の戦闘でバラバラになったケリーの一部が血と共に髪にくっついていたのでろう。

しばらく無感情な瞳でそれを見つめていたが、体を洗う邪魔になるので、それを捨てようと排水溝へと手を伸ばしかけたその瞬間。

ふと、小さな声が頭をよぎった。

『嘘ついたら針千本のーます』

指、切った。

「……」

ぼんやりとした顔で排水溝に伸ばしかけていた手を止める。

信乃と同じ年の妹に、もう一度会いたい。

家族皆でママの作ったシチューと、パパの焼いたローストビーフを食べたい。

……今、あたしは何をしようとしたのか。

信乃は捨てようとしたそれをそつと握りしめる。

これは、捨ててはいけない。

霞がかった思考の中で、ようやくその事に思い当たった。

きつと彼女の父と母と妹にとつては、これがたった一つの彼女の形見なのだ。きつと必要に違いない。今年のサトウルヌス祭を、家族皆で過ごすために必要なものなのだ。

大切なものなのだ、これは。

ふと、視界がにじむ。

シャワーが目にはいったのか、だが、シャワーを閉じても視界は元に戻らない。

ほろほろと、ほろほろと瞳から涙が流れる。固有魔法にさいなまれるよりもずつと強く、胸がチリチリ、チリチリと痛む。

自分を心配そうな目で見つめてくれた背の高いブリタニアの  
ウィツチ。

自分の為に悲しみ、怒り、そして、命を落とした彼女と、もう二度  
と会う事は出来ない。

「約束……したのに……」

彼女の名前も顔も視界も、全てが滲んでぼやけて思い出せない。

大切なモノが体から抜け落ちていく。ネウロイの熱線よりも、任務  
の過酷さよりも、彼女の顔と名前を思い出せないことが今の信乃に  
とっては恐怖だった。

ぎゅっと手のひらに彼女の一部分を握りしめる。

……やっぱりあたしは弱いんだ。

また、守りたい人を守れなかった。

朦朧とした意識の中で、多くの人の顔が頭をよぎる。今まで失った  
『ヴァジエト』の仲間たち。そして、かつて助けられなかった輸送船に  
乗っていた人々。

冷え切った体でうづくまる信乃を発見した誰かがその体を抱きか  
かえ、救護室へと運ぶ。

その間も、信乃はうわごとのように謝罪の言葉を呟き続けていた。

## 18. 『壁』

明日、0600、ガリア共和国、リヨン基地。

「ハギ、虎は千里を駆け、千里を戻るといふ」

「何ですか、いきなり改まって」

徹子の言葉に信乃が眉を顰める。

「これは、オレが扶桑改事変の後に北郷先生からもらった『虎徹』だ。これをお前にくれてやる」

「いいません」

徹子が差し出した一振りの扶桑刀を胡散臭げに見つめ、にべもなく信乃が答える。

「遠慮するな」

「遠慮じゃなくて、純粹に邪魔なんです」

ただでさえ撮影用のカメラを持たされているのに、何故余計な荷物を増やそうとするのか、我が親愛なる長機殿は。

そんなものを持っていくなら、一つでも多くの予備のマガジンを持って行った方がいい。

「オレはこれで沢山のネウロイを屠ってきたのに……」

「若がおかしいんです、それは」

今時刀でネウロイを倒して来いとかどんな嫌がらせだ。

いや、確かに古参のウィッチにはいまだに銃より刀を好む酔狂者すきものもいるが、信乃にはいまいち理解できない。威力も射程も桁違いに銃の方が便利なのに。

「そんなものよりもっと必要なものがあります」

そういうと信乃は零式52型に足を通す。火星エンジンの力強い始動音も魅力的だが、慣れ親しんだ栄エンジンの感覚は自分の手足そのもののようにしっくりと体に馴染む。

それに。

「嬢ちゃん、持ってきてやったぜ」

「ふふん、これがあれば百人力です」

整備兵が持ってきた99型2式2号20mm機関銃を手にとると、

信乃はしてやったりといった笑みを浮かべる。

「あ、おい、それ……オレの20mm……」

「だから、元々あたしのですって」

流石に徹子も驚いたようだ。それを見て信乃は満面の、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

『オペレーション、ミリオネアオブストロー』、ミッションコンプリート 作戦成功です」

「嬢ちゃん、酒ありがとな」

「ハンナ大尉のとおっておきの一本ですよ。大事に飲んでくださいね」

「ハギ、まさか今までこそこそしてたのは……」

「ふふん、そのまさかですよ」

信乃の渾身のドヤ顔に、徹子は呆れを通り越して感心したような顔すら浮かべる。

「馬鹿だろ？お前」

「馬鹿じゃありません!!」

20mmを担ぎ、信乃が他の仲間たちへと目を向ける。

「アルマ。ハンネ。頼むぞ」

アンジエラという言葉に二人が頷く。

「バックアップは任せて!!」

ユーリが胸を張る。徹子とアンジエラ、ユーリはバックアップとして帰還してくる3人のフォローに当たる事になっている。

「ただのお出迎えでしょ」

「むーっ!!アルマの意地悪っ!!」

「ふふ、ユーリ。任せました。ですが、無理はしないでね」

「はいっ!!ほら、アルマ」

「何がほらだ」

重要な作戦に抜擢された事にユーリが高揚した面持ちを見せる。こういった場面で委縮しないのはユーリの大きな武器でもあるが、きちんと手綱を握ってやることも大切だ。

「さて、そろそろ行きましょうか。アルマ、ハンネ」

信乃が声を掛けると二人が顔を引き締めて頷く。

「……じゃあ、行ってきますね。若」



「ちゃんと20mmを持って帰って来いよ」

「あたしのですから。当然です」

チヨークが外され、三機のストライカーが滑走路に向かう。

ケツテ編成ではなく、一機と二機。単独で強行偵察をおこなう信乃をアルマとハンネのロットテがカバーする形である。

「シノ。頼むよ」

「了解です……萩谷一番、出ます!!」

信乃の掛け声と共に三人が飛び立つ。前方にアルマとハンネ、少し後ろを信乃が飛ぶ形だ。

久々の昼の空にアルマが思わず声を上げる。

「んー、いい天気。これなら遠くまでよく見えるね。これなら近づかなくても遠くから見て帰れ……」

「近づかないと偵察になりません。敵の数や位置だけではなく、攻撃方法、伏兵のいそうな地形、出来る限りの情報を収集するのが偵察任務です」

「へいへい、冗談だつて。最近は真面目だね、ハンネ」

「私はいつも真面目です」

マイペースなアルマにやや棘のある言葉をぶつけるハンネ。

「アルマ。真面目にやれとは言わないけど、久々の昼なんだから、少しは緊張してください」

「おっと、班長殿に怒られた」

「シノの言う通りですよ、もう……」

苦笑を浮かべるアルマと、肩をすくめるハンネ。

別にアルマは普段通りでも構わないが、アルマの肩を持つとただでさえピリピリしているハンネの頭に更に血が上がるかもしれない。

幸いにしてアルマは自分に注意されて腹を立てるような性格ではないし、ハンネも信乃と意見が一致した事で少し苛立ちが収まったようだ。

一応部隊長らしく、徹子の真似事をしてみたが上手くいっただろうか。

「そろそろジークフリートラインが見えます」

「了解。アルマ、敵の反応は？」

「いや、感じないよ」

魔導針を展開したアルマが首を振る。

「会敵する予測ポイントは？」

「この先5000メートル。丁度あそこの高台から、あの要塞の壁の辺りまでですね」

そういつてハンネが目の前に広がる風景に向かって指をさす。

低い背の木が立ち並ぶ高原の森林地帯の向うにコンクリートの要塞の壁が所々顔を覗かせている。そして、その合間にそびえたつ大きな壁。ネウロイの侵攻に備え、かつてカールスラントに対しての備えだった要塞群はさらに増強され、まさに鉄壁ともいえる人類の防衛線だった。

そう。この世界におけるジークフリートライン……マジノ線は、所謂人だけではなくネウロイの襲来も見越したものだ。

すなわち、数メートルから、高い所では十メートル近い壁が数キロにわたって連なっているところもあり、その様子は扶桑の石垣か、或いは人工の山脈か。

「相変わらずレーダーに反応なし」

「了解。二人はここで待機。アルマはあたしが飛ぶ辺りに探索魔法をかけながら、何かあったらカメラで撮影。もしレーダーに反応があったらあたしに教えて。ハンネは周囲を警戒。アルマを護衛してください」

「解ったよ」

「気を付けてくださいいね、信乃」

二人の言葉にこくり、と頷き、信乃が口を開く。

「萩谷一番、これより偵察を開始します」

そういうと信乃が零式52型に魔力を込め、二人から先行する。ユニットが速度を上げ、目の前にマジノ線の壁が近づいてくる。下に広がる森を見下ろしながら、異常があれば直ぐに撮影に移れるようにカメラを構える。

壁の前までたどり着くと機体を旋回。壁と平行に飛びながらしば

らく飛んで、再びハンナ達の方向へと飛ぶ。

「少し高度を下げます」

特に異常は見られないので、今度はより森に近づいてもう一旋回。それでも異常が無ければ次は森にもぐって偵察を続行する。

「これだけ見てると平和に見えるね」

ぽつり、とアルマが呟く。遠目に見ていると信乃がまるでトンビのように悠々と上空を旋回しているようにしか見えない。

「貴女、すっかりしなさいな。もし信乃に何かあつたら……」

「解ってるって」

眼前では信乃が再び壁の方に向かって行くところだった。

「!?」

瞬間、魔導針に強い反応が届く。否、まるで頭を殴られたような衝撃に近い。こんな反応は始めてだ。

「シノ!!ネウロイ発……え?」

愕然とした表情を浮かべるアルマ。

ハンネもまた、目の前の光景に信じられないといった顔を浮かべている。

「!!」

アルマの声が響いた瞬間、信乃もまた固有魔法でそれを感じ取っていた。

ぞわり、と全身が粟立つ。チリつとしたいいつもの感覚を何倍、何十倍にも増幅させたような感覚。信乃はこの感覚を知っている。

そう、かつて強行偵察部隊に居た時。

あの時、敵の巣に飛び込んだ感覚に、限りなく近い。

「アルマっ!!敵はどっち!!」

咄嗟にカメラのシャッターに手を駆けながら、信乃が叫ぶ。

「壁だよ!!」

アルマが叫ぶ。

「壁方向ですね!!了解……」

「違う、シノ!!」

だが、アルマの声が信乃の言葉を遮る。

「その壁全体がネウロイなんだ!!畜生!!擬態してたんだ!!」

信乃が思わず目を見開く。目の前のジークフリートラインを黒と赤が侵食し、その姿を変えていく。

「……なんですか、これ」

初めて見る異様な光景に、思わず信乃がぽつり、と呟いた。

## 19. ヴァジエトの左目

黒い壁に描かれる、赤い線の幾何学模様。

地響きのような低い唸り声は、耳を切る風の音ではない。壁全体が静かに吼え、接近してくる敵に対して睨みを聞かせているようだ。た。

信乃の視界一杯に広がる『それ』に、思わず背筋が粟立つ。

間違いない、否、間違えようがない。

アルマの言う通り、『この壁がネウロイそのもの』なのだ。

ぞくり、と体中を包んでいたチリチリする感覚が体の数点に集約する。考えるより先に、自らの体を庇うように、信乃がシールドを張った。

次の瞬間。

黒い有機物のように蠢いたハニカム模様の赤いパネルから信乃を目がけ、一斉に熱線が放たれる。

同時に、信乃の指が条件反射のようにカメラのシャッターを押し、目の前の光景を次々とフィルムに収めていく。

「擬態が解ける瞬間を撮り損ねました……っ」

『あの頃のあたし』なら絶対に犯さないような失態に信乃が毒付く。

シールドが熱線に弾かれ、体がぐらつく。壁に対して平行に飛びながらシールドを張りつつ、死角から熱線が届かぬよう距離をつかず離れずの距離に保ちながらさらにシャッターを切り続ける。

「シノ!!近すぎるよ!!離脱して!!」

壁と平行に飛ぶ信乃にアルマが口を開きかける。が。

「アルマ、壁を撮って下さい!!」

アルマの言葉を遮り、信乃が叫ぶ。

その言葉に、思い出したかのようにアルマが慌てて手にしたカメラを構える。この距離ならアルマたちの位置からの方が敵の全容を掴みやすい。震える手でアルマが夢中でシャッターを切る。

「シノ!!壁に穴が!!ネウロイです!!数は5、7……増え続けています!!」

「それも撮影!!なるべく沢山!!交戦はなるべく避けて、でもギリギリまでひきつけて離脱!!」

魔導無線越しに信乃が叫ぶ。普段とは打って変わった厳しい声だ。二人の返事を待たず、信乃は目の前の『壁』と対峙する。

余計な思考を断ち切り、チリチリとした固有魔法の感覚に神経を集中させる。

胸の奥で眠っていた感覚が体を支配していくようだ。それは今の自分とは違う、もう一人の自分。

恐怖を麻痺させ、代わりに神経を極限まで昂らせた、強行偵察に適応しきったもう一人の『あたし』だ。

『あの頃』のあたしが今のあたしを生き残らせるために飛ばせてくれている。

きつとあの頃鏡に映っていた虚ろな目の少女は、折角ゆつくり休めたのに、今更呼び出してなんなのさ、と愚痴の一つでも言いたがっているに違いない。

そうだ。これが強行偵察だ。久しく忘れていた、だが、忘れられない感覚。

命の瀬戸際に自らを投げだしながらも、逃げることは許されない。恐らく背後からのチリチリはその小型ネウロイだろう。

壁とほぼ水平に飛びながら、零式の運動性能だけを頼りに熱線を交わす。壁からの攻撃はシールドで弾く。先程までの全身を包むようなチリチリが細かく分散され、額に、肩に、胸に、わき腹に、太腿に、脛に、体中の至る場所にチリチリとした感覚が付きまとう。それらすべてが熱線の通り抜ける場所だ。考えるよりも先に体が動く。

体をよじり、シールドを張り、それでもシャッターからは手を離さず、壁の至近距離を撮影していく。

「シノ!!危険だよ!!早く上がって!!」

「後5秒!!」

信乃が悲鳴にも似たアルマの声に答える。壁のなるべく端の方まで撮影をしなくては。

ほんの一瞬。だが、その5秒が果てしなく長い。

「……離脱しますっ!!」

信乃が叫ぶ。

「ハンナ、アルマ!!先に離脱!!合流は後!!敵に食いつかれなくて!!」

「了解!!」

「りよ、了解しました!!」

二人の声を待たずに速やかにカメラを降ろし、代わりに20mmを手取る。壁に背を向け足からシールドを張り、目の前のチリチリの元である小型ネウロイに20mmを掃射。針路をふさぐネウロイを蹴散らすように、敢えて弾をばらまくようにトリガーを引いたまま銃口を左右に振る。回避行動が遅れた2機のネウロイが20mmの弾丸に弾き飛ばされるが、他のネウロイは信乃の正面を避ける様に弾丸を回避する。

僅かに生まれたネウロイの編隊の隙間を縫って信乃は小型ネウロイを振り切り、そのまま高度を上げていく。

栄エンジンが破裂しそうな勢いで信乃の送り込む魔導力を推進力に変えていく。

速く、早く、はやく。

じれったい程の速度で、零式が壁から遠ざかる。

背後からのチリチリが一つ、一つと消えていく。

ちらりと背後に目を向けると、遠目に先程まで黒かった要塞線の一角がまるで何事も無かったように元のコンクリート色に戻っているのが目に入った。

この距離ならあの壁型ネウロイのレーザーも届かないだろうが、まだ追手がいないとも限らない。

周囲を警戒しながらも、ようやくチリチリから解放された事で信乃がふっと一息ついた。

ふと、耳に嵌めたインカムから、ひっきりなしに声が聞こえていた事によろしくながら気が付いた。

「……の、シノ!!応答してください!!こちらハンネ、シノ!!返事を!!」

思いのほか大きい、というよりも、耳元で怒鳴られているのと一緒だ。今までこの声に気が付かなかったなんて。

苦笑を浮かべ、インカムのスイッチを入れる。

「そんな大声出さなくても、聞こえてますよ、ハンネ」

信乃の言葉に無線の向うから大きく息を吐く音が伝わる。

「もう。聞こえるなら早く返事してよ、シノ。ハンネが泣きそうだよ」  
「な、違います!!シノ、こいつのいう事なんて信じないでくださいないね!?!」

良かった。二人共無事みたいだ。

「……遅れてすみません。ええと、二人共、どこですか?」

強行偵察の後に互いの位置を確認するのは久々な気がする。

「シノの位置から2時方向で高度は4500m。もうすぐ見えると思  
うよ」

アルマが自分たちの位置を伝えてくれる。指示通りの方角へと目  
を向けると、二人の影が小さく映った。

「確認しました。合流します」

機首をそちらに向けると、二人の姿が徐々に大きくなっていく。二  
人共信乃の顔を見ると安心したように息を吐いた。

「全く、無茶するよ」

呆れた様にアルマが肩をすくめ、ハンネは口を開く前に黙って信乃  
を抱きしめる。

「お疲れ様です、シノ……」

「ええ、疲れましたね」

「あれだけの事をやっておいて感想はそれだけですか」

限りなく呆れに近い苦笑を浮かべ、ハンナが信乃の背に回した手を  
解く。

「じゃあ、戻りましょう、という言葉にアルマたちも頷き、編隊を組  
む。

信乃を長機とした三機編成のケツテでリヨンへと向かって引き返  
す。

「強行偵察ってのはこんなもんですよ。帰ったらゆっくりと休んで  
……」

「そうじゃないです」



信乃の言葉にハンネがかぶせる。

「シノがいつまでも壁にくっついたまま帰ってこないからです。いつ落されるんじゃないかって、生きた心地がしませんでしたよ」

「私、さっきとった壁の写真に写った信乃が最期の姿になるんじゃないかと思っただ」

ああ、心配してくれてたんだ。

信乃はそんな二人の気遣いが素直に嬉しかった。

「……あんな写真を『シノです』って見せたら、真っ平だと思っていたら本当に壁になったのかって思われちゃうよ」

「あ、またからかわれてたんですね、あたし」

ちよつと温まった心が急激に冷える。いくら何でも壁は失礼だ。小さくても多少はある。

「……でも、今度はあれと戦う訳ですよ」

ぽつり、とハンネが呟いた。

確かに。今までは偵察をした後は他のウィッチに任せきりだったが、今度は自分達もあの『壁』と戦うのだ。

果たして、現在の戦力だけで足りるのだろうか。

皆が押し黙った瞬間。

ふと、耳元にノイズが走る。

「……信乃、今、何か聞こえますか?」

ハンネの言葉に信乃も首をかしげる。

「無線かな?」

アルマが魔導無線に耳を当て、耳を澄ました瞬間。

『皆!!大丈夫?!生きてる!?!返事して!!』

思わず頭がくらり、と揺れそうな大声が耳に挿した魔導無線越しに信乃の耳を突き刺した。

「何これ!?これが噂の音波兵器!?!」

「そんな訳ないでしょう……でも、これは強烈ですね……」

不意打ちにしては少し強烈すぎる。

ふと時計を見ると、後続部隊との連絡予定時間を十分近く過ぎていた。

尚も続くユーリの声にインカムを外しながら皆が苦笑を浮かべる。

「ちよつと、五月蠅いよユーリ!!」

アルマが怒鳴り返す。

「こちら偵察班。偵察完了しました」

『了解した……ハギ、連絡が遅いぞ』

「ええと……すみません」

徹子の言葉に信乃が素直に謝罪を述べる。信乃とていつでも徹子の言葉に噛みつくわけではない。作戦中で、しかも自分の不注意であれば、弁解の余地はない。

『首尾はどうだ。全員無事か?』

「ハーン少尉、無事です」

「ブレヴィス中尉、生還しました」

アンジェラの言葉にハンネとアルマが答える。

『成功したんだね!!凄い!!さすが先輩達!!』

ユーリが嬉しそうに声を張り上げる。咄嗟に皆が受信機を耳から離してもその声はしつかりと聞こえる。

『……ご苦労だった。帰ったらゆっくり休め』

アンジェラの短い労いの言葉に皆がようやく口元に笑みを浮かべた。

その時だった。

「……っ!?!」

真っ先に反応したのはアルマ。緊張した面持ちで顔を上げ、後ろを振り返る。

「隊長、レーダーに機影……中型と小型……追っ手だよ!!」

魔導無線越しにアルマが叫ぶ。

『落ち着け。数は?』

「中型1、小型が11です」

アンジェラの無線にアルマが再度答える。

「11?随分多いですね」

「さつき出てきたのが全部追ってきてるみたいですね」

信乃の呟きにハンネが答える。

中型も含めネウロイ一中隊といった所か。どうやら『あれ』を見られたのが都合が悪いのか。それともネウロイの中にも勤勉な奴がいるのか。

『ハギ、ここからお前達は見えている、そのままの高度と針路を保ち、真つ直ぐ基地方向に向かえ』

ちらり、と空を仰ぎ見るが、信乃の目にはまだ徹子達の姿は映っていない。だが、奇襲と索敵に関して徹子を上回るウィッチとは、統合航空戦闘団に配属されるレベルのウィッチを合わせても未だかつて出会った事が無い。

だから、こちらから見えていなくても、徹子が見えていると言えば見えているのだ。

「若、敵は多いですよ。ユーリもいるのに、大丈夫ですか？」

『安心しろ。久々に『アレ』を使う』

「……またばかすか落とすつもりですね」

信乃が肩をすくめる。

「シノ、敵影、こちらに近づいてるよ」

「このまま直進します」

アルマの報告に信乃が短く答える。

恐らく我が敬愛する長機殿は、自分達を餌にして追撃してくるネウロイを一気に叩くつもりなのだろう。

それならば、下手に動くよりも気が付かないふりをしていた方が相手も油断する。

「もうすぐ射程に入るよ、どうする？」

アルマが再度口を開くが信乃は黙って首を振る。『チリチリ』はまだ発動していない。

『10秒後にダイブに入る。ハギ』

「了解。二人共、あたしの合図で散開してください」

信乃の言葉に二人が頷く。程無くして、背中にチリつとした固有魔法の感覚が走る。

もしネウロイに感情があるなら、絶好のタイミングをうかがって舌なめずりをしている頃だろう。

先程の強行偵察とは違った緊張感だ。

じりじりとした感覚はまるで、時間が肌に纏わりついてくるような感じだ。まるで根比チキンレースべのような10秒間。

チリチリとした感覚が限界に達しようとした瞬間、信乃が叫ぶ。

「ブレイク!!」

同時に三機が一気に其の場から散り、一拍を置いて三人の居た辺りをネウロイの熱線が通りぬける。

次の瞬間。

『久しぶりだな、『これ』も』

徹子が投下した『三号特爆』が空中で破裂する。

蝮爆弾と言われるように、炸裂した焼夷弾子が煙を吐き、獲物を絡め取る無数の蝮の足のようにネウロイに襲い掛かる。

危機を察知したネウロイが熱線を放つのを止め散開するが、雨のように降り注ぐ灼熱の礫が次々にネウロイを破壊していく。

「早速ばかすか落としましたよ……補給があつたからつて。学習能力が無いんですかね」

三号の有効範囲の外側を旋回しながら信乃がぼつり、と呟く。

「うわっ!?何これっ!!こわっ!!」

「相変わらずえげつないですね……」

上空で信乃の下に合流しながら、三号特爆を見た事のないアルマト、一度見ているハンネが口を開いた。

だが。

「……ちっ、引き付けが足りなかつたみたいだな。ハギ」

「偵察帰りに何を期待してるんですか?」

三号の煙が晴れると、そこにはコアを露出した中型ネウロイが未だ空にとどまっていた。

「ユーリ、中型をやる。ついて来い」

「了解です!!」

コアを露出した中型に向けてアンジェラとユーリがダイブする。

手にしたMG42の弾き金を同時に弾くと、中型ネウロイは次の瞬間大きな光の閃光になって弾け飛ぶ。

「やったっ!!」

共同とはいえ、久々の撃墜にユーリが歓声を上げた。

……だが。その時。

信乃の目が『それ』を視界の端に捉えた。

固有魔法ではない。これは、経験だ。

今までが順調すぎたのだ。

戦闘行動とは得てしてヒューマンエラーがつきものだ。いくら気を使っても、僅かなミスというのはいつしか生じる。

人の行動が100パーセント思惑通りに進むのであるのなら、事故も奇跡も起こりえない。

そう、これはそんな僅か数パーセント以下の、偶然ともいえる出来事。

徹子の三号特爆は多くのネウロイを落とした。正しい判断だ。

その後のアンジェラとユーリの迅速な攻撃と追撃。当然間違いではない。

だが。

それらの判断をあざわらうかのように、ユーリとアンジェラの背後に、黒い影が迫っている。

先程特爆を回避したネウロイが一機、三号の放つ煙の影に隠れているのだろう。

意図的なものか、それとも偶然かは分からない。

だが、その黒い影はアンジェラ達の背後に回り込み、照準をユーリに向け、今まさに攻撃を行おうとしている。

順調な中での落とし穴が、およそ考えうる限り最悪な状況で生じてしまった。

思考を巡らす時間はない。

信乃が20mmを放り投げると同時に栄エンジンに全力で魔力を注ぎ込む。

背後に目を向けたアンジェラが『それ』に気が付き、何かを叫ぶ。

手にした弾き金を引いて、残りのネウロイを倒したユーリが笑みを浮かべかけ、その叫びに顔を凍らせる。

ユーリの体をネウロイの熱線が真つ直ぐに射抜く。  
その、直前。

間一髪、信乃の腕がユーリを突き飛ばし。

同時に、『その場所』を、ネウロイの熱線が一筋、真つ直ぐに貫いた。

「……………あれ？」

信乃が目を見開く。

がくん、と視界が反転し、青い空が広がる。

痛みは無い。だが、ユニットが言う事を聞かない。

撃たれた。チリチリを感じる間もなく。

今まで一度も当たったことが無かったのに、あっけなく。

この感覚は知っている。何度も意図して行った挙動だが、今はそうではない。

自分の意思とは無関係に、失速している。

空戦で最も危険な挙動。これが起きるといふ事は何を意味するのか。

……………そうか、これが撃たれるってことなんですね。

思いの他冷静な思考とは裏腹に、機体が言う事を聞かない。錐揉みする体を制御できず、地面が近づいてくる。

ああ。

折角取り返した20mmを落としてしまった。最後の一丁だったのに。後で拾いに行かなくては。

それだけではない。こうなるのであれば、カメラを早めにハンナかアルマに渡しておけば良かった。偵察任務は成功したのに。折角の苦勞が水の泡になる。

それだけ？それだけだったかな？

急激に頭の血が抜け、思考があつと言う間に霞んでいく。

「シノ!!機首を上げて!!シノっ!!」

ああ、そうなんだ。

こうやって、皆、落ちて行ったんだ。

ぼつり、と考える。隊長も、ケリーも、『ヴァシエト』の皆も。

「……………めん……………なさい……………」

漏れたのは、謝罪。背負った命を、繋げなかった事への。

生きる意味を教えてくれた人へ、そのお礼をすることが出来なかった事への。

黒く染まる視界。

ああ、このまま静かに目を閉じたまま、何も見なければ楽なのだろうか。

だけど。

……嫌だ。

まだ、落ちたくない。

あたしには、まだ……。

誰かが自分を呼ぶ声が聞こえる。それに答えようと手を差し伸べようとした、その時。

刹那、体に走る強い衝撃。

そして。

信乃の意識は、そこで途切れた。

## 番外編 1. 夢の舞台

たっ、たっ、たっ、と規則正しいリズムで地面を駆ける。

上半身を殆ど揺らすことなく、一定の感覚で足を踏みだし、滑走路の端まで走ると、そのまま反転、基地に向かって駆け出す。

吐く息は白いが、上はシャツのみ、下はズボンのみという軽装で、ハンネ・A・ハーンは淡々と地面を整地しただけの滑走路をランニングしている。

ふと、基地の方で一人の少女がこちらを見ているのに気が付く。偵察にでも出るのかと思ったが、その足にはストライカーは履いていない。

では、何故。そう思った時、少女が手にタオルとコーラの瓶を持っていることに気が付いた。

くすり、と思わず口元に笑みが漏れる。

「お疲れ様です、ハンネ」

「ありがとうございます、シノ」

どうやら、出迎えるためにそこで待っていたようだ。小柄な扶桑の少女……萩谷信乃にタオルを渡され、ハンネはゆっくりと足を止めた。

「訓練ですか？」

「ええ。体が鈍るといけないので」

ハンネの答えに信乃が首を傾げる。二日に一回以上空に上がっていないながら、それでも体が鈍るものなのだろうか。

シャツとズボンの隙間から覗く腹筋は余分な脂肪を一切削ぎ落したアスリートのようなそれであり、足もまた、ほっそりとしながらもしっかりとした筋肉がついている。理知的な雰囲気からは想像もつかないその体つきは思わず同性であつても目を奪われそうになる程に、美しい。

「いつもこうして走ってるんですか？」

「天気が良いからです。雨が降っていれば室内で筋力トレーニングをしますし、他にも、道具があればもっといろいろなと訓練が出来るので



すけども……」

信乃からタオルを受け取りながらハンネが答える。

しれっと答えるが中々凄い事を言っている。扶桑海軍も新兵時代は厳しい訓練が課せられることが多いが、自主的に、それと同じくらいかそれ以上の訓練を行うのは肉体的にも精神的にも強靱でないと続くものではない。

「へえ、凄いですね、ハンネは」

コーラの瓶を差し出すがハンネは首を振る。炭酸は運動と相性が悪い。

「小さい頃からの習慣ですから。逆にしないと体が落ち着かないんです」

そういうとハンネは汗を拭きながら信乃を見た。

「……それよりも、シノも訓練ですか？」

「……違います」

「まあまあ、そう言わずに。折角ですから一緒にやりましょう」  
につこりと笑みを浮かべるハンネ。

単に好奇心から様子を見に来ただけだが、藪蛇だったようだ。

「ベレーナやユーリは嫌がりますし、アンジエラは隊長の仕事が忙しいですから。私も誰か相手が欲しいなと思っていたところですよ」

「いや……ほら、あたし午前中編成に入ってたし」

「私もです。それに、今日はネウロイの襲撃が無かったから、まだ体力があるはずですよ」

一歩後ずさる信乃と、じり、とにじり寄ってくるハンネ。・

「ええと、ほら、あたし、ナイトシフト……」

「今日は入っていないでしょう？」

最近は506が夜間哨戒を積極的に行っているので、ナイトシフトはアルマ一人でこなすことも多い。

「少し体を動かした方が良く眠れて、結果疲れも取れます」

さあ、走りましょう。口にしなければ伝わってくるハンネの熱意に信乃がうう、と肩を落とす。

「……お手柔らかにお願いします」

観念したように信乃が呟いた。

そして。

「……」

ぐったりと談話室のソファに横たわる信乃。

「だらしないですね。あのくらい、練習前のウォーミングアップですよ」

「ウォーミングアップでも練習でもなくて、もはや懲罰ですよ」

ぴくりとも動かず信乃が口だけで応える。地面にへたり込んでもう走れませんなんて泣き言を言ったのはいつ以来だろうか。

「はあ……扶桑のウィッチは体力があると聞いていましたが、やっぱり駄目でしたか」

向かい合わせのソファに座り、コーヒーを飲みながらため息をつくハンネ。

「いえ、体力云々の問題ではありません。運動選手じゃないんですから。一体何を目指しているんです、ハンネは」

同じだけの距離を、否、途中から信乃がペースダウンしたので、その倍近くは運動しているのに顔色一つ変えていない。体力お化けか。

「あれ？シノさん、どうしたんですか？体調でも悪いんですか？」

談話室に入ってきたベレーナが信乃の様子を見て目を丸くする。

「……悪くさせられたんです」

「あら、失礼ですね」

その言葉にベレーナが信乃とハンネを交互に見、理解したようにならず。

「お疲れさまでした。あ、私、ちょっとハンガーに用事が……」

「ベレーナ。待ちなさい」

ハンネに言われ、びくり、と体を竦ませる。ああ、同じ目にあった事があるな、この子。

「わ、私、午前中にシフトがありましたから……」

「ええ。シノも私もね。一緒だったから知っているわ」

「くい、とハンネが眼鏡を持ち上げ、コーヒーを飲み干す。

「最近ベレーナ、なまっているんじゃないかしら」

とん、とカップを机に置き、ハンナがにっこりとベレーナを見る。  
「そ、そ、そうでしょうか？そんな事ないかなー……って……」

ああ、悪いタイミングで見つかった。普段はこんなに強引に誘うことは無いのだが、信乃が不完全燃焼だった分、物足りないのだろう。

そう、シノさんのせいで。

「そんな目で見ないでくださいベレーナ。あたしも被害者です」

「しばらく怪我のせいで動いていないはずです。落ちた筋力を戻す為、今日はしっかりと運動しましょう」

「ああっ!?急に腕が!!腕が!!」

「この前完全に治ったって言ってましたよね。それとも救護室で見てもらいますか?」

「や、それはその……ああっ!?引つ張らないでください少尉」

「良かったですね。憧れのハンネと一緒に」

「それとこれとは話が別です、ああ、駄目、助けて!!おかあさん!!」  
ずるずると連行されていくベレーナを目で見送りながら信乃がため息をついた。

「……明日までに回復するでしょうか、これ」

そして、翌日。

「それは災難だったな。同情するよ、シノ」

搭乗員室で、アンジェラが信乃の話聞き、くすくすと笑い声をあげる。

「全然同情した顔をしてませんよ」

ぶすつとした表情を浮かべ、信乃が手にしたコーヒーにどぼどぼと砂糖を投入する。疲労回復には糖分だ。昨日一日ぐっすり眠れはしたが、疲れは抜け切れていない。

「災難とは心外です。後シノ、糖分は適切に取らないと、余計に体に悪いですよ」

「ハンネの淹れるコーヒーが苦すぎるんです」

「コーヒーは苦いものですよ」

それにしても苦すぎる気がする。普通の人が淹れるコーヒーの二倍くらいは苦みが強いのではないだろうか。

「他人の味が気に入らなければ自分で淹れれば良いだけの話だ」  
アンジェラがカップのコーヒーを飲みながら肩をすくめる。

コーヒーにはこだわりを持つものが多いカールスラント人にとっては常識である一言だが、アンジェラが飲んでいるのもハンネが淹れたものだ。

「そういう隊長は別に味にはこだわりませんよね」

「薄いのは困るが、濃い分には問題ない」

まあ、こだわりも人それぞれだ。

「それにしても、どうしてハンネがここに？搭乗割は確か……」  
「ベレーナと交代したんです。意外と頑張るので、無理をさせ過ぎました」

午後には回復しているでしょう、多分。と、余り当てにならない事を言いながら肩をすくめるハンネ。

「もしベレーナがきつそうだったらどうするんです？」

「東部戦線では一日中飛ぶのが普通でしたから。むしろ半日だけのシフトだと体力を持て余すくらいです」

しれっと言い放つハンネ。

確かに。今のシフトは新人達の事も考慮して半日交代にしているが、激戦区ではそんな悠長な事は言っていられないし、今後、新人達にもそういった経験をさせた方がいいのかもしれない。自分も若に鍛えられていた時はそんな感じだった。

「……どれだけ体力があるんですか」

とはいえ、昨日あれだけ運動しては一日中のシフトは辛いはずなのに、むしろ誰よりも元気そうだというのはどういうことか。

流石にベレーナはもつと体力をつけた方がいいが、ハンネも無理をし過ぎなのではないだろうか。

「体力だけなら私もハンナも、ハンネには到底敵わん。何しろ、元陸上選手で、代表候補にもなった事もある程だ」

信乃の疑念に気が付いたのか、アンジェラが口を開く。

「そうなんですか？」

「ええ、まあ」

曖昧に答えるハンネ。確かにアスリートのような体だとは思ったが、本当に運動選手だったとは。

「なんの選手？どんな大会ですか？」

興味深々といった顔で信乃が尋ねる。

「五輪。オリンピックの五種競技だ」

「へえ、おりんぴ……オリンピック!？」

アンジェラの言葉に信乃が素っ頓狂な声を上げる。

せいぜい学校の代表とか、地域の代表とかそのくらいだと思っていた。

信乃も小さい頃に地元の代表で剣道の大会に出た事があるが、近所の神社の境内で町内の子供たちを集めて行った大会だ。一国の代表とは格が違う。

「でも、まだ代表候補でしたから。それに、正式に決まる前に、開催される筈だったベルリン五輪は……」

「あ……」

ハンネの言葉に信乃が眉を顰める。

平和の祭典であるオリンピックは、ネウロイの侵攻と共に次回開催は無期延期となっている。本来であればベルリンで行われる筈のオリンピックも、欧州がネウロイの脅威から解放されるまでは行われることは無い。

「……それに、ウィッチは五輪には出られません。この能力が発現した時点で、私は代表資格を失いましたから」

すこし寂しげにほほ笑むハンネ。幼い頃からの習慣とは、つまりそういう事なのだろう。

小さい頃から国の代表になる事を夢みて、ついにそれが手に届く前に失われ、ウィッチになった今では、例え欧州が解放されても立つ事の出来ない夢の舞台。

もし、ネウロイの侵攻が無く、無事に五輪が開催されていたら。

ひよつとしたら、ハンネはカールスラントの代表として表彰台できらきら輝くメダルを首から下げていたのかもしれない。

「……すみません、変な事を聞いてしまいました」

申し訳なさそうに信乃が頭を下げる。

「いいんですよ。それに、今の夢はカールスラントを解放して、父や母、妹たちと一緒にゴータ……故郷の地に戻る事ですから」

それが叶うのなら、オリンピッククに出るなんて、ほんの些細な事です。

そういつてハンネがコーヒーに口を付ける。

強い女性だ。きっと、だからこそ五輪の選手という遥か雲上の夢に手が届きそうだったのだろうし、こうして、ウィッチとして戦っていられるのだろう。

「そうだな」

アンジェラが頷く。

「ハンネ、お前の積み重ねてきたものは無駄ではない。ウィッチとして、お前が鍛え上げてきたその体は誰にも勝る『武器』だ。誰が認めなくても、私はお前を認めている」

「ふふ、ありがとうございます。それに、私、また五輪が開催されるようになったら、やってみたいことがあるんです」

「ほう？」

アンジェラが興味深そうに顔を上げる。ハンネが意味ありげに信乃を見る。

なんだろう、凄く嫌な予感がする。

「シノやベレーナ達と練習してて思ったんです。自分が上を目指すのも素敵ですけど、他の子達を遥か上の舞台へと連れてくのも素敵だな、って」

どうやら他人を教える喜びに目覚めたらしい。いや、それはそれでいい事だ。新しい夢を持つ事、戦いが終わった後の希望を持てるという事は、素直に羨ましい。

だが。

「だから、その為の予行演習というか、欧州を解放して、私が五輪のコーチになった時に備えて、今から練習の練習……他人を教える為の訓練をしたいんです」

だからあたしを見ないでください。昨日のあれだけで足が痛い

いうのに。

「ほう、いいじゃないか。手の空いているときなら好きにすればいい。うちには鍛えがいのある若手が沢山そろっているからな」

アンジェラがほほ笑む。悪魔だ。悪魔の笑みだ。ここにベレーナやユーリがいたら震えあがるに違いない。

ちらり、ともう一人の若手であるアンネの方を見ると、いつの間にか席を外している。湯気の立つコーヒーカップと読みかけの雑誌がテーブルに放り出されているのを見ると、慌てて逃げたのが解る。

「というわけで、シノ、これからも協力を……」

ハンネが言いかけた瞬間、ネウロイの襲来を知らせるサイレンが基地に鳴り響く。これ幸いとばかりに信乃も席を立つと搭乗員室を飛び出した。

「また今度、一緒に練習しましょうね!!」

「気が向いたら!!」

扶桑流の曖昧な返事『考えておく』でお茶を濁しながらハンガーへと向かう。

例え夢を失ったとしても、それなら新たな夢を見つけければいい。

簡単な事ではないかもしれないが、生きている限り、人は夢を見るのだから。

「お先に失礼しますね」

「速っ!?!」

ひよい、と脇を抜け、ハンガーへと走っていくハンネを見て信乃が目を見張った。

## 20. フライアウェイ

同日 1100 ガリア共和国 リヨン基地

基地の中は朝とは打って変わり、重苦しい空気に包まれていた。

「ボクのせいだ……ボクのせいで、シノが……シノが……」

廊下に設置された長椅子に座ったまま、ユーリがうわごとのように呟く。その頬には涙を流した後の痛々しい跡が幾筋も残っている。

「ボクがしっかりとすれば……」

「落ち着け、ユーリ」

その頭をアンジェラがぼん、と叩く。長椅子の隣で、ずっと泣きじやくるユーリに付き添っていた。

周囲を見れば、向かい合わせに長椅子に座っているハンネとアルマ。事態を聞きつけてやってきたベレーナや待機中の仲間もこの場に集まっている。

「……ユーリ」

「ベレーナ……ボク……」  
「立って」

その言葉にユーリがふらふらと立ちあがる。次の瞬間。

ぱしん、とベレーナの手が、ユーリの頬を叩いた。

「……っ!？」

「しっかりとしなさい!! 貴女がそんな顔をしていたら、シノさんがどう思つか分かってるの!？」

普段の大人しいベレーナとは思えない、毅然とした口調だ。

「でも……でもっ!!」

「ベレーナ、やめなさい」

ハンネが止めるが、ベレーナは止まらない。

「いつも生意気な事ばかり言って!! 調子に乗って!! その結果でしよ!?! だったら受け入れなさい!! 貴女がこんなんじや、次の作戦に支障が出るの!!」

「でも……っ!!」

「そんな風に、まるでシノさんが死んだような顔をしてたら、シノさん



も迷惑でしょ!!」

「だけど、だけどっ!!」

「え、ええと……そろそろ出てもいいですかね?」

そつ、と扉が開くと同時に響いた声に、はっ、と、ユーリが顔を上げると、

「シノ、シノおっ!!」

「ユーリ、そんな顔は、あたしが死んだときにしてえええっ!!」

がばり、とユーリに抱き着かれて、信乃が目を白黒させる。ていうか痛い。腕が痛い。

「シノお……ボク、シノがボクのせいで死んじゃったらって思ったら……」

「うんうん、解るよ。でも、一応怪我人ですし、もう少し優しくううっ……!!?」

ぎゅっ、と、信乃の体を抱きしめる力がさらに強まる。

散々心配をかけた手前無下に振りほどくわけにもいかず、助けを求め様に周囲を見渡すが、皆苦笑を浮かべて首を振った。

ベレーナすらも、仕方がないといった顔で苦笑を浮かべたまま視線を合わせてはくれない。

何で?死ぬと思っただけど死ななくて良かったねじゃないの?何でそんなマンボウを見るような目をされなきゃいけないんですか?」

「えと、ユーリ……心配してくれるのは嬉しいけど……」

「皆さん、お待ちせしました」

信乃に続いて医務室から出てきたハンナが笑顔を浮かべる。

「萩谷准尉は若本中尉に救助された際の軽い肩の捻挫以外には目立った外傷はありませんでした。ネウロイの攻撃を受けたユニットはしばらく使えませんが、次の作戦に参加するにあたっては支障はありません」

ハンナの言葉に皆がはあ、と息を吐く。

「全く。大げさすぎるんだよ。たかがユニットを片方破損したくらいで」

ハンネに続いて出てきた徹子が肩をすくめる。

「危なかったのは確かなんです。少しはいたわってください」

信乃が口を尖らせる。

ネウロイの熱線が破壊したのは信乃のユニットの主翼とその周辺部分。

そのせいでユニットの制御が行えなくなった信乃の零式52型は失速を起こし、錐揉み状態になったことでもかかった急激なGによって、機体を立て直す前に意識を失ってしまったのだ。墜落直前に徹子はその腕を掴んだ事で事なきを得たが、皆が一瞬ひやりとしたのは間違いない。

「格好良かったよ、シノ」

「どうしてこんな時でもあたしをからかいますかね!？」

ぱちり、とウインクして親指を立てるアルマに信乃ががう、と叫ぶ。

「いや、本当ならもつと心を扶るような事言えるんだけど。お望み？」

「……次の作戦に支障が出ますので、勘弁してください」

控えめに言っつて、今回の落ち度は信乃にある。落ち度100パーセントだ。反省はしているので、出来ればそつとしておいてほしい。

「それよりもハギ、何か言う事があるんじゃないか？」

徹子の言葉に、う、と信乃が周囲を見渡す。

心配そうな顔をするもの、呆れたような顔をするもの。苦笑を浮かべるもの。皆それぞれ思うところはあろうが、一度は皆の胆を冷やしたのだ。連絡を受けたハンナに至っては、思わずその場で失神しかけたくらいだ。

「ごめんなさい、しような」

「……心配かけて、ごめんなさい」

ぺこり、と信乃が頭を下げる。

その言葉に皆が安心したように胸をなでおろした。

同日 1145 ガリア共和国 リヨン基地

「偵察班のフィルムの解析結果が出ました。皆さん、心して聞いてください」

再びブリーフィングルームに集まったウィッチ達を前に、ハンナが口を開く。

「萩谷准尉、ブレヴィス中尉、ハーン少尉の献身的な偵察により、敵拠点の概要は概ね把握出来ました。まずはこれを見てください」

暗幕で閉ざされた部屋の壁に、アルマが撮影した敵ネウロイの全容が投影機で壁全体に映し出される。

「うわ……」

「本当なの？」

隊員たちが思わず息を飲む。

ジークフリートライン……ガリアの誇る要塞群の一角が丸々ネウロイ化しているなど、流石に想定もしていなかったのだろう。

「便宜上、この超大型ネウロイを、『壁』<sup>モリエア</sup>と呼称します」

限りなくシンプルで、それ以外に表現できない呼称。まさにネウロイの『壁』だ。

「ちなみに萩谷准尉はここです。『壁』の大きさは推定で横1キロ、縦20メートル、幅10メートル。動かないだけ良いにしても、これだけ巨大なネウロイは東部戦線ですら中々お目にかかれませんか」

ハンナの手にした指揮棒が豆粒の様な黒い点を差す。

「これがあたしの遺影になりかねなかったわけですか……」

映っていると言っているのかわからないレベルのそれを見て信乃が眩く。

『壁』はこのように壁面のいたるところから熱線を発射し、近づくものを排除します」

そう言つてスライドが切り替わる。映し出されたのは信乃が撮影したネウロイの近接写真。もし後世、人類が生き残れたなら、ネウロイの直撃に限りなく近い瞬間の画像として残りそうな程に鮮明な写真に皆が息を飲む。

「さらに、護衛のネウロイが『壁』の中から現れます。会敵した結果、1分たらずで一中隊ほどのネウロイが現れる事が判明しました」

アルマと信乃が撮影した写真が次々とスライドで現れる。『壁』の一部に空いた穴からネウロイが飛び立とうとしている写真が次々と

映し出されるに従い、皆の顔に絶望的な色が浮かぶ。

「どうするの、これ……」

「取りあえず、手に『Menschen』って書いておけよ」

アンネが肩をすくめる。

「……作戦立案の為、1200から第二段階に移行する予定だったタイムスケジュールは一部遅延します。ただ、作戦の中止だけはあり得ません」

ハンナが口を開く。

「アンジェラ、若本中尉は私と一緒に司令室に。他の者は各自食事を取った後に待機。いつ出撃してもいいように、機体の整備も怠る事の無いようにしてください」

そういうとハンナは指揮棒を机に置き、顔を上げた。

「ブリーフィングは以上とします。解散」

その言葉に全ウィッチが立ちあがり、敬礼をする。

重苦しい空気だ。

無理もない。藪をつついたら蛇どころかヤマタノオロチかヨルムンガンドが現れたようなものだ。何でこんなところにこんな大物がいるのかという思いに加え、それを相手にしなくてはいけないという重圧で、普段は明るいアルマやユーリですら、その顔に悲壮感を漂わせている。

ハンナも敬礼を返しながら、内心で思索を巡らせる。

戦わぬという選択肢はあり得ない。だが、闇雲に戦う訳にもいかず、当然負けるわけにもいかない。最早これはJG54や扶桑海軍遣欧艦隊だけの戦いではない。大げさかもしれないが、事と場合においては人類全体の……。

そこまで考え、あ、と呟く。

人類全体。

そう、これは人類全体の戦いなのだ。

突拍子もない考えかもしれない。空振りに終わる可能性も十分にある。

だが、試してみない手はない。潜んでいたネウロイもこちらが手の

内を知った以上大規模な行動に出る可能性は高い。

ならば、こつちも大規模に、派手に動いてやればいい。

時間は、そう残されていない。

ならば、やれるだけの事はやるのだ。

「……ハンナ、どうした？」

隣に立っていたアンジェラがハンナの異変に気が付き、眉を顰める。

「ふふ。アンジェラ、良い事を思いつきました」

「う、うむ？」

何故か笑い出すハンナにアンジェラが思わず後ずさる。

そう。敵は強大だ。JG54だけで手に負える相手ではない。

なら、どうすればいいのか。

「総力戦です」

答えは簡単だ。

「総力戦でなくてはいけません。貧乏くじをひかされるのは慣れましたけど、折角なので、たまった貧乏くじはあちこちにばらまいてしましましょう」

「だが、どうやって」

アンジェラが呟く。ちよつとやそつとの事では動かなかつた連中を、どうやって動かすというのか。

「ちよつとやそつとの事情ならともかく、今はちよつとやそつとどころではありませんよね？」

そう言つてハンナが意味深な笑みを浮かべた。

同日 1200 ガリア共和国 リヨン基地

『フリーネ、貴女から連絡をくれるなんて何かあったのかしら？ そつちはどう？変化はあったかしら？』

電話の向うのミーナは徐々に連絡が通じた事から少し安堵したような声を見せていた。何度か連絡はあったものの、疑心暗鬼に陥っていたため不在だと伝えていたからだ。

「ええ。ミーナ中佐。ありました。ありましたとも。大きな変化です」

『え?』

普段の控えめなハンナからは想像もつかないような興奮したような声色に、電話の向うの声が戸惑いを見せる。

「つい先ほどこちらに侵攻するネウロイの拠点に強行偵察を行いました。場所はデイジョン東部、カールスラント国境付近のジークフリートラインです。全長1キロにわたる要塞線の一角が丸々ネウロイになっていました。更に、その辺りがネウロイの生産工場も兼ねているようで、こつちが向うの存在を知った以上、いつリヨン上空にネウロイの大群が押し寄せてくるかも解りません。なので、今日の午後、1530から私達JG54はその『壁』に対して総攻撃を行います。もし私に何かあったら骨を拾って新カールスラントの母のもとに……」  
『はあ!? ちょ、ちよつとちよつと。ちよつと待つて!! 待ちなさい!! 何を言っているのファイリーネ大尉!!』

何処をとつても機密情報。まるで言葉による絨毯爆撃だ。

珍しく慌てふためいた口調でミーナがファイリーネの言葉を制する。

「はい?」

『こんな重要な情報を平文でするなんて、どうしたの、貴女』

「聞かれてもいいんです」

ミーナの言葉にハンナが答える。

「盗聴されているなんて百も承知です。いいえ、むしろ聞かせてるんです」

ハンナが言葉を続ける。

「聞こえていますか? レデイの会話をこそ盗み聞きしているお偉いさん。これでも無視をするのなら、もう好きにすればいいです。その代り、貴方達の名誉挽回のチャンスは、私達カールスラントのウィッチでいただきますけど。ああ。後、この事はカールスラント政府を通じてきつちり世間に公表させてもらいます。ガリア政府も、ブリタニア政府も、この国に影響を及ぼそうとする貴方達がいかに役に立たないかが大衆の下にさらされるでしょうが……ミーナ中佐、です」

よね」

『え、ええ……つて、ちよつと、フィリーネ、すこし待つ……』

「失礼します」

言いたい事だけ伝えてがちゃん、と電話を切る。これでミーナにも、恐らくガリアやブリタニアの上層部にも正しく現在の状況が伝わるだろう。

最早、人類同士で足を引っ張っている場合じゃない、と。

「言い過ぎたかしら」

「いや。よく言った、ハンナ」

アンジェラが大きく頷く。

「506への『曲芸飛行』はどんな状況ですか？」

「若本とベレーナ、ハンネとユーリを出した。それぞれセダンとデイジョンの基地に向かっている。ハギはお前の言った通り待機させているが……」

「ハギさんには『アレ』の整備をしてもらっています。最初はお荷物かと思いましたが、今回の作戦には有効なはずです」

「……ひよつとしたら扶桑の連中はこれを見越していたのか……？」

「それなら今頃空母ごと本隊がマルセイユに乗りつけてるはずですよ」

冗談を飛ばしながらハンナが部屋を出る。パズルのピースが一つ一つ嵌っていくような感覚に、知らず気持ちが高ぶっていく。

大丈夫。きつと上手くいく。

私達は所属する国も、組織も、信念も、目的も、何もかもが違うかもしれない。

だが、一つだけ共通している事がある。

私達は、皆、ウィッチなのだ。

国や軍に縛られていても、ウィッチであれば、世界を、人類を脅かす脅威を前に、黙って見ているはずがない。

ハンナには確信があった。東部戦線で出会った扶桑のウィッチの言った言葉を。チリチリと胸を焦がす焦燥を一笑する様な、いつそ清々しいまでの一言を。

そう。

ウィッチに不可能の文字は無いのだ。

同日 1330～1400 ガリア共和国

セダン基地、506JFW『ノーブルウィッチーズ』A部隊

「……何だ、あれは？」

驚き半分、呆れ半分といった面持ちで顔で空を見上げているのは、この部隊に所属するロマーニヤ空軍所属のウィッチ、アドリアーナ・ビスコンティ大尉。

他にも同僚のウィッチ達が、自分たちの頭の上で繰り広げられているその光景を啞然とした顔で見上げている。

「いいぞ、ベレーナ。次は宙返りを三回連続だ」

「はいっ!!」

徹子の後続き、エーテルライトを利用した発光器の光跡を残しながらぐるり、と空に円を描くベレーナ。

「若本中尉!!私、何か楽しくなってきました!!」

他の基地の上空での曲芸飛行。基地にいるウィッチ達の目を引くという名目もあるが、今までの鬱憤を晴らしてきてください、というハンナのお墨付きである。

軍紀違反どころではない。事によっては軍法会議もあり得るようなとんでもない事を行っている背徳感が、ベレーナを高揚させる。

三回連続で宙返りを行った後、更にもう一回おまけで回るベレーナを見て徹子が顔を緩める。

「楽しいか。実はオレもだ」

リバウの坂本達も編隊宙返りを披露した時はこんな気分だったのだろうか。全くあいつ等、楽しい事をしやがって。

「よし、次は編隊飛行だ、ついて来い」

「はいっ!!」

緑色のエーテルライトを噴射し、徹子が叫ぶ。ベレーナが満面の笑みでそれに答えた。



「何なのじゃ、あれは!?隊長!!連絡は受けているのか!？」

「い、いえ、何も……」

予告も無しに始まった曲芸飛行にセダン基地のウィッチ達も、基地に務める兵士たちもその光景を呆然と見上げていた。

デジョン基地、506JFW『ノーブルウィッチーズ』B部隊

「やつほー!!皆見てるー!!」

ハンネと二人で空中にハートマークを描きながらユーリが眼下のウィッチ達に手を振る。

緑色の光跡で描かれるハートマークはまさに『グリウンヘルツ』そのものだ。

「あれ、ユーリじゃん……」

「一体何してるんでしようか……?」

カーラとジェニファーが目丸くしながらその光景を見つめている。

「ユーリ、余り夢中にならないように……そろそろ『アレ』を投下してください」

「はいっ!!」

ハンネの合図と共にユーリが背中に背負っていた『それ』を空へと投げる。

落下傘が付いたそれはふわふわと宙を舞い、眼下にいるウィッチ達の元へと落ちていく。

「ああ、ユーリ。そうじゃなくて、私達は『たまたま』サプライズで曲芸飛行を披露しているうちに『偶然』機密文書を落としてしまった感じでやるのよ」

「あ。ゴメンなさい。じゃあ、もう一回やり直……」

「余計に不自然でしょう!!ああ、もういいです。帰りますよ、ユーリ!!」

「ちゃんと読んでね!!その『きみつぶんしよ』!!じゃあ、『また』ね、カーラー!!」

手を振りながらユーリ達が空に消えていく。落下傘によってふわふわと落ちてきた鞆を、カーラが首を傾げながらも受け止めた。

「何だこれ？コーラ……じゃないな。この重さは」

「……爆弾じゃないよな」

「うわ!?怖い事言うなよマリアン!!」

慌ててそれを投げ出したコーラを見てくすくすと隊員達が笑う。

「兎に角、隊長のところを持って行った方が良いでしょう」

「ついでに金属探知機も持ってきた方がいいかな?」

「いりませんよ……多分」

コーラの言葉にジェニファーが呆れた様に肩をすくめた。

パリ近郊 H M W 『グローリアスウィッチーズ』

「……不自然な待機命令の理由が解ったわね。ラーナ」

軍の司令部からの電話を切ったアッシュブロンドの長髪の少女が  
呟く。

「ふざけた話じゃないか。ジェシー」

もう一人の少女が肩をすくめる。

「お偉方の都合で伝わらなかつた情報のせいで窮地に陥った状況を、  
お偉方の都合でどうにか尻拭いしろ、だど?」

「尻拭い?違うわ。これはチャンスよ」

だが、もう一人の少女はそんな状況にも笑みを浮かべる。

「ガリアを脅かす超大型ネウロイ、それを私達グローリアスウィッ  
チーズが華麗に倒す。こんな大手柄、506やカールスラントの連中  
に譲る訳にはいかないわ。明日のブリタニアの新聞の一面は私の大  
活躍で決まりね」

「お前のそういうところは素直に尊敬するよ」

ラーナと呼ばれた少女が苦笑を浮かべる。

「……まあ、偉い奴らのやり方には辟易していたところだ。奴らのケ  
ツの穴を蹴っ飛ばしてやるのも悪くないか」

「そういう事。ラーナ、『アレ』を用意して」

『『アレ』……って、ジェシー、まさか』

「そのまさかよ」

そう言ってジェシカと呼ばれたアッシュブロンドの少女が、その長  
い髪を灰色のリボンで結わえる。

「さあ、スクランブルよ、ラーナ!!無駄に出来る時間なんて無いわ!!」  
H M W 戦闘隊長にして、ブリタニア王立空軍のエース、『グレイリボン』こと、ジェシカ・E・J・ジョンソンが凜として言い放った。

ガリア共和国 パリ近郊

「行きますわよ!!リーネさん、アメリカー!!」

「はいっ!!」

ペリーヌ・クロステルマンの言葉にリネット・ビショップとアメリカー・プランジャールが同時に返事をする。

孤児院も兼ねている建物から真つ直ぐ伸びる道は、いざという時の滑走路も兼ねている。屋敷の入り口に並んだ発進推進装置に固定されたストライカーユニットに飛び乗った3人が発進準備を始める。

「……まさかこんなことが私たちの知らないところで起こっていたなんて……」

リーネがぼつり、と呟く。

カールスラントの最前線に駐屯するミーナから連絡があったのはつい先ほど。僅か一時間にも満たない間で出撃準備を整えたのは、歴戦を潜り抜けた流石の手腕という他無い。

これだけの大型を相手にするのは501の最後の戦い以来だ。不安もある。

だが、それ以上に、これだけの相手を前にみすみすと黙っている訳にはいかないという気持ちの方が強かった。

「放ってはおけないですよね」

ぐつ、と拳を握るアメリカー。普段は気弱な所もあるが、それだけの少女ではない。

かつて501のガリア解放の陰で、仲間たちとワイト島を防衛したウィッチなのだ。

ガリアが再び脅威にさらされると知れば、真つ先に飛び立つ勇氣も、そして、芯の強さも持ち合わせている。

「その通りですわ、アメリカー」

ペリーヌがその言葉に頷く。

「私たちのガリアに再び手を出そうとした報いは、受けてもらいます

わよ!!」

「そうですね!!」

「はい!!」

その言葉にアメリーとリーネも頷く。

「頑張つて!!ペリーヌお姉ちゃん!!」

「ご無事で、お嬢様」

孤児たちや屋敷で働く皆がペリーヌたちを見送る。その声に笑みを浮かべ、次の瞬間、ペリーヌが口を開いた。

「スロツトル・ミリタリー。青の一番、ブルーブルミエ発進します!!」

ガリア 或る所

『……どうしますか。流石に行き過ぎた行為かと思いますが』

目の前に立つ少女に、男がふ、と口元に笑みを浮かべる。

「仕方あるまい。このような事態は流石に想定外だ。人間相手ならまだしも、ネウロイ相手では我々には何も出来んよ」

『では、様子を見ますか?』

「今はな。この『壁』を彼女たちが破壊するまでは、好きにさせようではないか」

『……破壊するまでは、ですね』

「そうだ」

男が頷く。

「……リヨンの同志たちを奴らのもとへ向かわせろ。ウィツチ達がいなくなった後、行動に移せ」

## 21. JG54 リヨン臨時基地 2

同日 1430 ガリア共和国 リヨン臨時基地

「嬢ちゃん。あの扶桑の娘さんの言う通り、30mmの固定ポイントを増設してみたぞ、どうだ？」

「いいですね。これだけしつかりしていれば、反動にも耐えられそうです」

増設ポイントに17式試製30mm機関砲を取り付け、信乃は満足そうに笑みを浮かべた。

急ごしらえとは思えない。ただ出っ張りを作ったのではなく、ストライカーユニットの機体そのものの外壁を引っぺがし、骨組みから作り直し、短期間で全く新しい増設ポイントを作ったのだ。

最もそのせいで、ただでさえすぐりむつくりな雷電のシルエットが更に新しいこぶを持ってまるで奇形のようにしまったわけだが、飛ぶことに支障が無ければ特に問題が無いうえ、こういういかにも無理のある歪な形状は信乃の大好物だった。

取り付ける側の17式試の方も、銃口から下の全体のレイアウト……信乃の体格に合わせ、照準の位置や弾き金を一から作り直し、ほぼ別物のように造り替えたカールスラントの整備兵の腕にはただただ感服するばかりだ。

機材に足を通してポイントを繋ぎ合わせてみると、丁度良い位置に照準とトリガーが備え付けられている。

輻射でもホバリングの状態でもこれなら射形に戸惑うことは無いだろう。まるで初めからこういう設計だったかのような絶妙な配置だ。

「流石おつちゃんですね。扶桑の技術局が知ったら今の倍の給金で引き抜きに来ますよ」

「ははは、有り難い話だけだよ。娘と孫に解放されたニルンベルグを見せるまでは他所に行くわけにはいかねえんだよなあ」

「おお、流石おつちゃん。凄い、格好いい!!」

「がはは。もっと褒めろ」

信乃の頭をがしがしと撫でながら、しゃがれ声で笑う整備兵長。気が付けば信乃の専属兵みたいに意気投合している。まるで孫を溺愛する好好爺だ。普段雷を落とされている整備兵たちが有り得ない顔をしてその光景を見つめている。

「皆さんもありがとうございます!!ごうございました!!『壁』はあたしが絶対に落とすから、安心して下さいね!!」

ぶんぶん、と、信乃が整備兵たちに手を振る。

その先では娘を見る父のような、或いは、憧れの同級生を見るギムナジウムの生徒のような視線でだらしなく鼻の下を緩めた整備兵たちが信乃に向かって手を振り返している。

信乃の人徳だろうか、あるいは、単に甘え上手なだけなのか。

「おめえら!!何にやにやしてやがる!!時間がねえんだ!!とつとと整備に戻りやがれ!!」

自分の事を棚に上げて怒鳴る整備兵長に、整備兵たちが慌てて作業に戻る。

この任務が終わったら、この基地にいるウィッチも含めた兵士達はカールスラントの部隊と合流し、最後はオラーシャのJG54の本隊に編入される算段になっている。

独断専行でガリア全土のウィッチたちに現状を伝えたりリヨン基地にはガリア政府から何らかの処罰が下る可能性が高い。故に作戦終了後はこの基地に戻らず、ガリア政府が動く前に全員で逃げてしまおうという魂胆だ。

「不要な書類はなるべく焼け!!必要な書類は残らず焼け!!」

基地に残った整備兵以外の兵士たちがハンガーの隅のドラム缶に火をつけてその中に書類をくべている。

飛ぶ鳥後を濁さず。或いは証拠隠滅ともいう。

「変な奴らがリヨン基地を嗅ぎまわっているのはカールスラントの情報局も察知していますからね」

そう言いながら解析班の若い士官が信乃に近づいてくる。

「どうしました?」

「隊長から、作戦の開始時間を早めるとのことです。リヨン市街で怪

しげな動きがあったようなので」

「……そうですか。少し慌ただしいですが、この基地ともお別れですね。皆さんとも」

そういつて見慣れてきた納屋を改造したハンガーを見渡す。

「扶桑の基地に戻っても、達者でな、嬢ちゃん」

「おっちゃんも。オラーシヤはここ以上の激戦区ですよ。ちゃんと生きて帰ってくださいね」

整備の終わった雷電から飛び降り、整備班長と軽くハグを交わす信乃。こちら流の親愛の挨拶もだいぶ板についてきた。

「おうよ、生きて帰って、今度は娘と孫にもハグしてやらんとな」

「その前に、ちゃんと体は洗ったほうが良いです。汗臭いと若い子には嫌われますよ」

残念ながら補給品の一部は破棄することになるが、必要なモノは輸送艇に積み込んである。来た時と同じように、靴の入った鞆を一つ持っていけばいいだけだ。

兵士たちの邪魔にならぬよう、ハンガーの隅に移動して座り込むと、懐中時計を取り出して時間を確認し、ポケットから丸いカールスラント製のチョコの入った缶を取り出して蓋を開ける。

「ふふん。取っておいでよかったですね」

この基地を後にすれば、しばらく食べることが出来ないモノだ。一つはあちこち交換していくうちに渡してしまったが、一つは残っている。時間まで味わって食べることにしよう。

ピザのようにカットされた丸いチョコをちまちま食べていると、整備兵の動きが慌ただしくなっていく。

『扶桑1番』、『音楽隊の3』、戻ってきます!!」

『音楽隊の2』、『音楽隊の4』、着地体勢に入りました!!」

「滑走路をチェックしろ!!ハンス!!チョコク持ってこい!!」

バタバタと走りまわる様子を見ながら初めて信乃はアンジエラ達のコールサインが『音楽隊』である事を知った。

「あら、私達の前に戻った人はいないんですね」

「ただいまー。皆ー」

いつも出撃している方からの目線なので、こうやって出迎えるのは中々に新鮮だ。

「お帰りなさい、二人共」

「あー!!シノ!!」

「こら!!ユーリ!!」

ハンネの制止も聞かず、ユニットを脱いだユーリがぱたぱたと信乃の居る方へとかけてくる。

「ボクにもチョコ分けてー!!」

その言葉に信乃はチョコを口に加えたままユーリに缶を差し出す。中から一つ抜き取ると、ユーリは嬉しそうにチョコを口に運んだ。

「んー。おいしー」

笑顔を浮かべるユーリを見て信乃は内心少し安心した。先日の事は特に尾を引いていないようだ。まあ、特に自分に怪我が無かったからかもしれないが、それでも10代前半の少女であるウィッチは些細な出来事でコンデイションを崩したり、最悪飛べなくなったりもする。

「もう一個いい?シノ」

「あと一個だけですよ」

次いで徹子とベレーナもハンガーに入ってくる。目ざとく信乃を見つけた徹子が、その手にしたものを見て大声で叫ぶ。

「おいハギ、オレにも一つとつとけよ!!」

「は?何ですか?」

「何でだよ!」

さつとチョコを後ろに隠す信乃に徹子が怒鳴る。なんとという上官差別だ。

「ブロッケ軍曹」

先程の若い士官がユーリのもとへと近づいてくる。伝達を聞きながらチョコをほおぼるユーリの姿は、最早一端の若手ウィッチのそれだ。

「……つたく、何だよハギ。ちゃっかり残してたのか」

信乃の手にしたチョコの缶を見て、徹子が呆れた様に呟く。



「どこかの誰かみたいにはかすか食べたりしませんから、あたしは」  
「残しておいて、死ぬ時後悔したくないからな」

こちらに向かつて歩いてくる徹子の言葉に信乃が肩をすくめる。  
「あれ、使うんだな」

徹子の視線の先にあるのは整備の済んだ雷電。

信乃が頷く。

「使いようによつては良い機体です。それに、『壁』をぶち抜くなら30mmの火力は必要不可欠ですから」

「重い機材だぞ」

「知ってます」

チョココに手を伸ばそうとする手を払いのけながら徹子の言葉に信乃が答える。

「でも、メルスも十分重いですし、急いで直しても零式では30mmが扱えないんですから、どっちにせよあの子に頼るしかありません」

「そうか……まあ、ハギなら大丈夫か。オレと違って、器用だしな」  
そう言つて徹子が信乃の頭をぽん、と叩く。

「若本中尉!! 装備の件で相談があるんですがー!!」

ベレーナが整備兵の横でこちらに向かつて叫ぶ。

「おう、今行く!!」

「……若」

「どうした?」

その場を後にしようとした徹子に信乃がチョココを一つ差し出す。

「……特別ですよ」

一瞬目を丸くした徹子だったが、直ぐに口元に小さな笑みを浮かべ、信乃に背を向ける。

「よし、ベレーナ!! 兎に角特爆だ!! お前も三号を詰めるだけ詰め!!」  
チョココを手に叫びながらベレーナ達の方へと向かつて行く徹子を見送り、信乃が肩をすくめる。

「ばかすか落とすの、止めないの?」

「この作戦が終われば落とす相手もしばらくいなくなるからいいんですよ」

「そだね」

苦笑を浮かべるユーリ。きっと信乃は自分より大人だ。何故なら、大概大人っていうのは素直じゃないからだ。

「ふふ、可愛いね、シノ」

「アルマの真似ですか？悪い先輩の影響は受けちゃ駄目ですよ」

ユーリの言葉に、信乃が苦虫をかみつぶしたような顔を浮かべた。

「ユーリ!! 貴女もちゃんと整備するところを見ていなさい!!」

ハンネの声がハンガーに響く。はーいと答え、信乃に向けて手を振ると自分のストライカーの方へとユーリが駆けて行った。

同日 1515 ガリア共和国 リヨン臨時基地

「お別れか。この基地とも、ガリアとも」

「一ヶ月もいませんでしたけど、今となっては感慨深いですね」

アンジエラの言葉にハンネが頷く。

最初はガリア解放後のごたごたに巻き込まれ、部隊再編の為に他のカールスラントの部隊から切り離されてデイジョンに置いていかれ、さらに厄介払いのように民家を改造したこの基地に放り込まれたのだ。リヨンの都市部からは遠い、やる事と言えばノイエカールスラントから送り込まれた若手の指導、或いは娯楽室でのダーツかビリヤードくらいだった。

だが、戦闘に巻き込まれ、若本達が加入し、506のリベリオン部隊と共闘し、気が付けばガリア防衛の最前線に立っている。

「……ハンネ、撃墜数はいくつだ」

「91です」

「ついに80越えか。本隊と合流したら叙勲の手続きだな」

「ええ。合流出来たら」

アンジエラの言葉にハンネが呟く。

「ついでに100機を越しておけ。オラーシャに行く前にグレートエースの仲間入りだ」

「出来るでしょうか」

「出来るさ。あの戦闘でも生き残ったんだ。あれに比べれば、今の私達にはこれだけの仲間がいる。不可能なことなど、あるはずがない」

「そうですね……いえ、そうしましょう」

アンジエラの言葉にハンネが頷いた。

気持ちが昂る。色々と考えていたが、やはり自分にはこれがあつて  
いる。敵を撃って撃って撃ちまくり、そして一機でも多くの撃墜数を  
稼ぐ。

度の入っていない伊達眼鏡を投げ捨てたハンネの口元に獐猛な笑  
みが浮かぶ。

そう、私はハンネ・A・ハーン。JG54の狂犬と揶揄され、それ  
を何よりも誇りとする、カールスラントきつてのインファイターだ。

「いい顔になったな、それでこそハンネだ」

「ええ、これでこそ私です」

アンジエラの言葉にハンネが頷く。

「いくぞ!! 『音楽隊の1』、出撃する!!」

『音楽隊の2』、発進します!!」

「ユーリ、何で『音楽隊』なんですか?」

信乃が先程抱いた疑問を隣に立つユーリに投げかける。

「整備兵の皆が付けてくれたんだ。ボク達にはこれがぴったりだっ  
て」

「どうしてですか?」

「アンジエラ副隊長の使い魔がロバ、ハンネ少尉が狼、ベレーナが猫、  
ボクがオナガドリなんだ」

「ああ。『ブレイメンの音楽隊』!!」

合点がいったという表情で信乃が手を叩いた。そういえば、ユーリ  
は使い魔を出すと耳が出ない代わりに後ろで結んだ二つの髪が足元  
の辺りまで長く伸びて、その先が銀色になっている。

そうか、オナガドリだったのか。

扶桑で品種改良され、中世の頃には西洋にも愛玩用として輸出され  
ていた鶏の一種だ。

「ボクのパパが貿易の仕事をしてるから、うちに扶桑のオナガドリが  
沢山いたんだ。小さい頃からボクが世話をしてたんだよ」

「へえ」

金髪に青い目のいかにもカールスラント人といった風貌のユーリが扶桑原産の使い魔と契約している事に信乃が驚く。ここにきてまさかの発見だった。

「というか飛べない鳥と契約した癖に何故この子は飛ぶ才能に溢れているのだろうか。或いはユーリご主人様と共に空を存分に飛びたいという、飛べない使い魔の願望なのかもしれない。

「今度、アンジェラ副隊長が部隊章を作ろうって。ブレイメンの音楽隊の動物が四匹乗っかってる奴で、4人でお揃いにするんだ」

信乃も子供の頃絵本で見たことがある。ロバ、犬、猫、鶏が4重の塔みたいになっている奴だ。

「可愛くて素敵ですね」

「うん……だけど、オラーシヤに行ったら、皆と一緒に部隊になれないかも……シノとも……」

そう言っただけでユーリの表情が僅かに曇る。『音楽隊』として活動できるのはこれが最後かもしれない。

軍隊にいる以上、配属先は自分の希望通りとは限らない。初めて配属されたのが『音楽隊』だったのは彼女にとって幸か不幸か。優しさと厳しさを併せ持つ先輩達に囲まれ、十分に訓練と実践を詰める。これだけ新兵にとって恵まれた環境はネウロイに囲まれた欧州ではそう多くはないはずだ。

「……ユーリ。例え違う部隊になっても、生きてさえいればきつとまた会えます。もう一度会いたい人たちがいるっていう事は、生きるための糧になります。幸せですね、ユーリは」

「……シノ……」

優しい嘘に、無垢な瞳が答える。

嘘だ。厳しい最前線では、そんな甘い言葉が霞むような現実が待っている。そして、同じように再会を望みながら、果たせずに散っていった仲間たちも沢山目の当たりにしてきた。

だけだ。

「ボク、頑張るよ。強くなって、ネウロイを倒して、いつか今度はボクが信乃を守ってあげるから」

あの時、シノが庇ってくれたみたいに。

ユーリの言葉に信乃が一瞬虚を突かれたような顔をするが、直ぐに笑みを浮かべ直す。

きつと大丈夫。この子は強い。そして、もつと強くなる。どんな辛い事があっても、生きてさえいればきつと乗り越えられるはずだ。

「……楽しみにしていますよ」

「あとね、あのビームをしゅばってやる奴、また会った時に絶対に教えてよ!!」

「そうでしたね」

きつとこの子はあたしに教わるより先に身につけるに違いない。才能は努力に勝らないがモットーの信乃だが、ユーリの才能は認めざるを得ない。

「……今度会った時は、きつと素敵な『ユーリエ・ブロッケ』になるんでしようね」

ユーリ……まるで男の子のような言動をからかって先輩達につけられたあだ名だが、今のユーリには確かにぴったりだ。だが、そのうちきつと素敵な女性になって、信乃を驚かせるに違いない。

だから、あのカールスラントのグレートエースの若かりし頃のように、将来に期待して、あたしもこう呼ぼう。

「時間ですよ。行きましょう、ユーリエ!!」

「はいっ!! 『音楽隊の4』、出ます!!」

『扶桑二番』、行きます!!」

Bf109の後ろに続いて、雷電の火星エンジンがうなりを上げる。

たった一ヶ月。だが、始めて出会った時とは別人のように頼もしくなったユーリの背中を、信乃は追いかけた。

「あの……若本中尉」

「何だ?」

「私。上手くやれるでしょうか?」

ベレーナがためらいがちに呟く。ユニットに搭載された、4基の3号特爆。これが『壁』に対する自分たちの切り札であることは理解し

ている。一つでも多く当てれば、その分勝利に近づくことも、一つでも外せば、それが部隊の皆を危機に近づけることも。

「何、動かない的に当てるなんて簡単だ。今のベレーナなら、それが出来る」

徹子がこともなげに答える。徹子も同じように特爆を4基積み、予備の特爆を肩から下げ、背中には日本刀……『虎徹』を携行している。銃は持たない。今回の任務での徹子の役割に、それは必要ないからだ。ベレーナもまた、特爆とは別にアルマの予備のフリーガーハマーを手にしている。慣れない武器だが、壁に攻撃を加えてネウロイのコアを露出させるためには重武装が必用だ。

「でも……」

「不安なら、オレの背中を見ている」

力強い言葉だ。この基地に徹子が来てから、その言葉に従い、そして生き残った。そして、そうしているうちに自分でもわかるくらい、空戦技術が上手くなったと思う。

だが、まだまだだ。隣にいたはずのユーリは気が付けば一步一步自分の先を行っている。その先のハンネやアンジェラは、まだその背すら見えない状況だ。

だからこそ、辛い。自分が、徹子の後ろしか飛べない事が。

「……シノさんは、そうしてずっと戦っていたんですか?」

口をついて出たのは徹子の二番機。彼女もまた、ベレーナの遥か前に行くウィッチの一人だ。

「ああ。オレの後ろにいた時はそうだった。だが、今は違う」

そう、今の彼女は、徹子の後ろを飛ぶ存在ではない。本来であれば、自分ではなくて彼女が徹子と共に飛ぶべきなのだ。若本徹子というウィッチを理解し、そして信頼し、更には信頼されているからこそ、萩谷信乃は若本徹子の後ろではなく、二番機として隣を飛ぶのだ。

悔しいけど、そうなのだ。

「ベレーナ。今は生き残る事を再優先にしろ。死んだら終わりだ。ハギは生き残れたから、自分の戦う場所を見つけられた。お前もそうだ。オレの後ろが今はお前の戦う場所でも、いつか違う場所を見つけ

る。それを見つづけるまでは、生き残れ。いつか、オレの隣で飛びたい  
ればな」

私は、彼女にはまだ勝てない。

だけど、いつか勝つためにも、今は生き残らなくてはいけないのだ。  
すつと肩から力が抜ける。自分に出来る事は多くない。

だからこそ、今は私に出来る事をするだけだ。

戦場では望む、望まないではないのだ。出来るか、出来ないかだ。

そして。今私に出来る事は。

「はい……若本中尉、私、ついて行きます」

「ああ。ついて来い、ベレーナ」

にやり、と笑い、徹子が叫ぶ。

「若本一番、発進する!!」

『音楽隊の3』、行きますっ!!」

「フリーネ司令代理、ウイツチ中隊の離陸、完了しました」

「そう、じゃあ、後は私達だけね」

ハンナ達のストライカーを担当する数名の整備兵以外は皆輸送艇  
に乗り込んでいる。

「……基地に向かってきている車が2……いや、3台。5分くらいで  
つきそうだね。後は、飛行してくる物体が1……飛行機にしては小さ  
い。ウイツチかもしれないよ」

魔導針を展開させたアルマが口を開く。

「……貴女がナイトウイツチになってくれて本当に助かりました」

ハンナの言葉にアルマが笑みを浮かべる。

「その言葉が聞きたくて、私はナイトウイツチになったんだよ」

「……ありがとう、アルマ」

一見軽そうにも見えるが、アルマの仲間たちへの思いは本物だ。ハ  
ンネと共に部隊に配属され、ハンナやアンジエラの指導を受けなが  
ら、一步一步ウイツチとして経験を積んできた。

彼女たちの力になれるなら。JG54のウイツチとして何が出来  
るのか。

アルマなりのその答えに対して、ハンナがそれを認めてくれてい

る。

その事がアルマにとっては何よりもの幸せだった。

「班長、私達のエンジンを始動させたら直ぐに輸送機に乗ってください」

「わかりやした」

その言葉に班長が頷く。その背にはウイツチ達の使用するMG42の予備が背負われている。

今この場において、敵はネウロイだけではない。ウイツチ隊が基地を空けると同時に、ガリアの諜報部及びそれに先導された兵士たちがリヨン基地を制圧すべく行動を開始するだろうというのがカールスラント情報局の下した結論だった。

そして、其れを裏付けるよう、陸からは軍用トラック、空からは飛行物体の接近をアルマが探査魔法で察知していた。ハンナと共に最後にアルマが残ったのは、探査魔法によって相手の動きの把握するためだ。

さあ、ここから先は時間との勝負だ。

目的地はカールスラントにある前線、マーストリヒト・アーヘン空港。ミーナたちの駐屯する、人類が取り返した数少ないカールスラント本土の地。

南のロマーニヤ方面に進路を取れば、最短距離でガリアの国境を抜けるが、相手もそれを理解しているだろう。

北への針路の先にはデイジョン、セダン、サン・トロン。ウイツチ達の基地のある空域を通れば、追っ手もおいそれとは手が出せない。

「アルマ、輸送機の先導と護衛は貴女に任せます」

「了解」

本当であれば、自分も仲間たちと共に戦いたい。自分の探査魔法は、きつと仲間たちの助けになる。

だが。

同時に、輸送艇に乗る兵士たちもまた、仲間なのだ。寝る間も惜しんでユニットを整備していた整備兵、レーダーに張り付き、時には偵察機に乗ってウイツチ達の目となっていた観測兵や通信兵、そして、



不穏なガリアの動きを的確に察知してくれた情報局の解析班。衛生兵の中には自分達と同じ年位の少女もいる。ウィッチにはなれなくとも、志を同じくした多くの仲間たち。

滑走路に並ぶ輸送艇は4機。それに搭乗する仲間たちの命が、アルマの両肩にかかっているのだ。

「中尉、緊張されていますね」

そうアルマに話しかけたのは若い女性の整備兵だった。

女性の整備兵というのは珍しいが、人類の危機である今、使えるのであれば男も女も関係が無い。両親とウィッチの妹をダイナモ作戦で失い、その弔いの為に軍に入った彼女は整備兵の中でも腕利きの一人であり、ナイトウィッチ用のユニットにも精通した数少ない整備兵の一人だ。

「はは……解ります?」

「いざとなれば、不時着して皆で歩いて国境線に向かってもいいんですから。私達の為に、必要以上に気を張らないで。アルマ」

そして彼女もまるで妹に話しかける様にアルマにほほ笑む。実際、彼女にとってウィッチ達は亡くなった妹と重なる存在だ。

それに、アルマのように、家族を失ったウィッチにとっては、姉ともいえる存在でもある。

「そんな事はさせないよ。絶対に皆をアーヘンまで送り届けるから」

だからこそ、彼女を、否、彼女たちを危険に晒すわけにはいかない。アルマにとっても皆は姉であり、妹でもあり、兄であり、父でもあるのだから。

全ての機体がエンジンを吹かし、今まさに飛び立とうとしている。

「……司令代理」

整備班長が口を開く。

「何ですか?」

「……あなたがこの基地の司令代理で本当に良かったですぞ」

それは整備班長だけではない。他の兵士たち、そして、ウィッチ全員の見意だ。

ウィッチだけではなく、基地の皆が一つの仲間であり家族。そんな

部隊を、ハンナは作り上げたのだ。

「……ありがとうございます」

ハンナが薄い笑みを浮かべ、感謝の言葉を口にするが、直ぐにその表情が引き締まる。

「行きます!!エンジン始動!!」

ハンナが叫ぶ。

同時に、ゆっくりと滑走路から1機目の輸送艇が滑走路を走り出す。

発進補助装置があればまだ良かったのだが、臨時基地に過ぎないリオンではそれは望めない。整備兵がハンナとアルマのストライカーユニットに差し込んでいたエナーシャを回すと、ゆっくりとエンジンが始動準備を始める。

「司令!!いいですね!!」

「中尉、エンジン始動準備完了しました」

「了解!!コンタクト!!」

整備兵たちの言葉にハンナ達が魔導力をユニットに送る。エナーシャにより回り始めた魔導エンジンが送り込まれたウィッチの魔力の奔流により始動する。

「魔導エンジン始動確認!!チョーク外せ!!」

アルマが叫ぶ。

2機目の輸送艇が滑走路を走り出し、整備兵がハンナとアルマのユニットに囁かせていたチョークを抜き放つ。

「班長!!輸送機に!!」

「了解!!」

ハンナの指示に整備兵たちが最後尾に着けた輸送機に向けて駆け出すと同時に、3機目の輸送機が滑走路を飛び立った。

「……ハンナ……いえ、司令代理」

「何ですか?」

「私の、ううん、私達に分まで、あいつの事、ぶん殴ってきてください』『壁』はきつとハンナ達が破壊してくれる。

帰った彼女たちを出迎える事が、自分達の誇りある最後の任務なの

だ。

「アルマ・ブレヴィス、出る!!」

最後の輸送機が離陸すると同時にアルマが滑走路を駆け、空へと飛び立った。

そして。

「……解ってます。アルマ」

ハンナがぼつり、と呟く。

自分が最後だ。恐らくこの先、二度とこの基地を訪れることは無いだろう。

短い間だが、JG54、そして、扶桑からやってきた仲間たちと共に苦楽を共にした場所。

ほんの小さな感傷がハンナの胸をよぎるが、直ぐに顔を上げる。

「こちらハンナ・ファイリーネ。リヨン臨時基地へ。JG54『グリユンヘルツ』、第1航空隊第3中隊。全機、出撃します!!」

誰もいない基地に向かいそう叫ぶと、ハンナもまた空へと飛び立っていった。

## 2.2. 逃避行と総攻撃

飛び立った輸送機隊と、上空で待機していたウィッチ隊が一度リヨン上空で合流する。

しばらくは共に飛び、デイジョン上空でウィッチ達の針路は北から東へ、ジークフリートライン……ガリアではマジノ線と言われる要塞群の一角を侵食したネウロイ『壁』へと。輸送機隊とアルマはそのまま北へと針路を取り、カールスラント空軍の駐留するマーストリヒト・アーヘン空港へとそのまま向かう手筈となっている。

背後からは国籍不明の一軍。最早隠す必要はない。ガリアの諜報部及びガリア軍だ。

JG54に対する圧力がガリア軍部全体の総意なのか、それとも一部の先鋭的な者たちの暴走なのかはわからないが、現に降りかかる脅威である事には変わらない。

空になった基地を見て彼らがどうするかは未知数だ。基地を制圧出来た事で良しとするのか、追撃を試みるのか。前者であることを望みたいが、どうなるかはヴァシエトの左目を持っていても解らない。

「そろそろデイジョン上空だ」

アンジェラの言葉に魔導通信の声が被る。

『こちらデイジョン基地所属、506JFW『ノーブルウィッチーズ』B部隊。JG54、応答願う』

ちらり、とアンジェラがハンナを見る。

「こちらJG54第1飛行隊第3中隊。手柄の横取りですか？ジーナ・プレデイ中佐」

『そうしたいのは山々だが、今回は貴女に譲ろう、ハンナ・フィリーネ大尉』

ジーナの声が響く。同時に、無線の向うからの銃声。

『隊長!! 呑気に無線なんかしている場合か!!』

『ここから先は通しません!!』

506のB部隊の面々の声が無線越しに届く。皆、ガリアの人々を守るため、戦っているのだ。

『……というわけだ。こちらも手一杯で君達の援護をしている余裕はない』

「敵はどちらに向かっていますか？」

『南だ。君達の『居た』基地の方へ向かっている』

やはり、とハンナは頷く。

ネウロイの習性について人類が解っていることは多くはないが、いくつか解っていることはある。例えば、水を苦手としているのもそうだし、縄張りや行動習性に一定のパターンがあることもそうだ。

『こちらは私達で何とかする。君達は『壁』を頼む』

「了解。ご武運を」

『ああ。君達も……』

通信が途切れる。何かを言いかけていたので彼女の意思ではないだろう。恐らく、ネウロイの放つ電波妨害だ。とすれば、彼女たちへ更に多くの敵の増援が向かっているのだろう。

「隊長、どうしますか？」

「デイジョン北部まで直進、その後、ウィッチ隊は予定通り『壁』に向かいます」

アルマの言葉にハンナが答える。デイジョン基地のウィッチ達と敵の交戦ポイントを迂回し、敵に向かう。

彼女たちは救援を求めている。求めているのは、一刻も早く『壁』を破壊する事だ。

一方、リヨン臨時基地。

『やられた。奴等、ウィッチ達と共にここを引き払ったようだ。人っ子一人いない』

その言葉に少女がくそ、と呟く。どうやら、カールスラントの情報局を侮っていたようだ。

『よもや我々が二度までも出し抜かれるとはな』

無線から別の声が響く。

その声は無表情で、何の感情も感じられない。

「……『教授』、今から追えばまだ間に合う」

『我々の目的はこの国から奴等の影響を排除する事だ。自ら身を引い

たのであればそれ以上は求めん……これから先は、政治の話だ』

ちつ、と少女が舌打ちをする。少女達にとっては『敵』である存在をみすみす取り逃した事は屈辱以外の何物でもない。

だが、『教授』の命令は絶対だ。

「了解。ガリア、我が……」

肯定しようと口を開きかけた瞬間、無線の向うから上ずった声が響く。

『おい!?あれは……不味い、ネウロイだ!!こつちに向かってくる!!』

はっ、とその言葉に少女が顔を上げた。

「数は!?大きさは?」

『小さいのが2……いや、3機……まずい、こつちに……』

無線の向うからざざつ、という音が鳴り、通信が途絶える。

例え小型ネウロイだとしても、ウィッチではない一般の人間にとつては防ぎようのない脅威なのだ。デイジョン基地のウィッチ達が打ち漏らしたのだろうか。それならば、いずれウィッチ達がこちらへ向かってくる。いや、それよりも。

『リベリアンめ。大雑把な仕事をする。お前も早く……』

『教授』

ぼつり、と少女が呟く。少女が『教授』と名乗る男の言葉を遮ったのは、少女が彼と出会って以来これが初めてだ。

「……ここを抜ければ、リヨンの都市はすぐ目と鼻の先です」

そう、例え小型ネウロイでも、無抵抗な人間の前では無慈悲な殺戮の使徒となる。

ここを去るのは闇に身を置く自分としては当然の事だ。

だが、そうすれば、小型ネウロイが街に到達する。僅かかもしれないが、人の命が奪われる。

『教授』と呼ばれる男も少女の意図を感じ取ったのだろう。ふう、と深い息が無線の向うから響く。

『まだお前にはやるべき事がある。デイジョンのリベリアンたちとの顔合わせには、まだ早い』

「奴らが来る前に片をつけてみせます」

『もし見つかるような事があれば、貴様の命は無いぞ』

「構いません・・・ガリア、我が喜び」

そう呟き、少女がホルスターから拳銃を抜き、顔を上げた。

これが、後にクリス・キーラと呼ばれることになる少女が、クリス・キーラとなる前の最後の任務となるが、その後の物語は今ここで語るべきものではない。

「後ろの方はどうです？アルマ」

「未確認の航空機、リヨン基地上空で反応が途切れました」

ふう、とハンナが息を吐く。ネウロイらしき機影をアルマが感知したのがつい数分前。場合によってはアンジェラかハンネを引き返させなくてはならなかったが、どうやら貴重な人員を裂く事は防げたようだ。B部隊の誰かのお蔭か。それとも別の何かがあったのか。

「……アルマ、これから先の輸送機隊への指示は貴女に任せます。なるべく交戦は避けてください」

「ネウロイとですか？人とですか？」

「両方です」

いざとなれば撃たねばならないのはハンナも理解している。同時に、ウィッチの敵は同じ人類ではないというハンナの高潔な意思もまた、アルマは理解している。

「……難しい事を言いますね」

だからこそアルマは眉を顰める。

「貴女にしか出来ない事ですから。期待してますよ」

「意地悪です、ハンナ。期待されたからには、応えないといけないじゃないですか」

「ふふん。格好良いですよ、アルマ」

「うわ、今言うか。シノ」

今までの意趣返しとばかりに口を開いた信乃の言葉に思わず皆が一瞬笑みを浮かべるが、直ぐにその表情が硬くなる。

「……それでは、ここで一旦お別れです。また、アーヘンで」

そう言い残し、ハンナ達ウィッチ隊が旋回を開始。そのまま直進していく輸送機隊の姿がみるみるうちに遠ざかっていく。

「皆、大丈夫でしようか？」

ベレーナがぽつり、と呟く。

「気になるか？」

徹子の問いにベレーナが被りを振る。

「はい。でも、今は私達の任務に集中します」

「ああ。そうしろ」

徹子が笑みを浮かべる。ベレーナも少しはいい顔をするようになった。

デイジョンとセダンの中間地点。

「若本中尉、ハギさん。どうですか？」

「こちら若本一番。敵影見えず」

「萩谷二番、電探に反応ありません」

索敵の固有魔法が無くとも誰よりも先に敵を察知する徹子に、扶桑製の対空電探を雷電に搭載した信乃が同時に答える。

つかの間の静かな空が空域を支配する。少し離れたデイジョン上空では激戦が繰り広げられているのが嘘のようだ。

「……こんな空を飛んでいれば、リヨンで何が起きていたかなど解る訳がありませんね」

ハンネが呟く。

『ああ。その通りじゃ』

魔導無線の声がハンネの言葉に答える。

『ならばなぜ、斯様な窮地に追い込まれるまで、其方達はわらわに助けを求めなかったのじゃ？ 同胞を相手に遠慮をするなど、其方達の方がよほど無粋じゃぞ』

「……若本中尉、ハギさん……」

「違う。まだ見えない。遠すぎるんだ」

「……扶桑の電探は精度が悪いんです」

二者二様の言い訳が返ってくる。

『同胞ではないにしろ、水臭いのは確かだな』

『ひよっとして、自分達で片付けるのが格好いいとか思ってるの？ 格好いいけど』



魔導無線に次々と飛び込む声。ハンナも、他のウィッチ達も初めて聞く声だ。

「ハインリーケ大尉がいるという事は、セダン基地506 A部隊ですね」

『その声はフリーリーネ大尉じゃな。という事は、そちらはJG54か。成程、あの下品な曲芸飛行は粗野で粗暴なグリウンヘルツに似つかわしいの』

「あ？なんですか？貴族様？やるんですか？『壁』の前に一発殴られたいんですか？」

ハインリーケの売り言葉に粗野で粗暴を体現したような面白い言葉で応酬するハンネ。

「落ち着け、ハンネ。今まで何もせず優雅にお過ごしになられていたお貴族様に失礼だぞ」

『ヴォルフ中尉にハーン少尉か。相変らずのようで何よりじやの』

「はっ。養成学校時代友達がいなくて二人一組が組めなかったもやしっ娘が随分偉くなりましたね」

『お、なんじやハーン少尉？やるのか？『壁』の前に一発殴られたいんじゃない？』

『おい、そのウィッチ。その話、続きが気になる。詳しく聞かせてくれ』

『僕も興味あるな』

『お、お主たち!?!』

突然の味方の離反に思わず声が裏返るハインリーケ。

「もー!!何でもいいから真面目にやってよ!!カーラ達が頑張ってるのに!!」

ユーリが怒鳴る。

『何じやとお主!?!偉そうに、名を名乗れ!!』

「JG54所属!!『音楽隊の4』ユーリエ・ブロッツケ軍曹!!11歳です!!」

『じゅ……』

『……あー……これは……』

506のA部隊の皆が思わず押し黙る。

子供の正論はある意味どんな大人の理屈よりも強力だ。

「……すみませんでした。ユーリ」

『……済まぬ。わらわともあろうものが、少し頭に血が上っていたよ  
うだ』

ばつが悪そうに、ハンネとハインリーケが素直に謝罪の言葉を述べ  
る。

「……よく言ったね、ユーリ」

「偉いぞ、ユーリ」

「私も、ちよつとユーリの事が格好いいと思いました」

「え？」

仲間たちから感心したように頭を撫でられ、ユーリが目を丸くす  
る。

可愛いのは正義なのだ。

程無くして、3機のストライカーユニットを履いたウィッチ達がハ  
ンナ達と合流する。

一人はアルマと同じく、カールスラントの夜間戦闘隊の制服に身を  
包んだブロンドの令嬢、残りの二人は。

「ロマーニャ空軍所属、アドリアーナ・ヴィスコンティだ。よろしく頼  
む」

赤い髪をした長身の美女が切れ長の瞳に好戦的な笑みを浮かべる。

「ベルギカ出身、ブリタニア空軍のイザベル・デュ・モンソオ・ド・バー  
ガンデール少尉。ふふふ。僕を見たからには今日が皆の命日だよ」

「お帰りください。イザなんとかさん」

「冗談だよ。イザベルでいいから」

いきなり縁起でもない冗談を口にするイザベルに、信乃が冷たい視  
線を送る。

「こちらはぱつと見少年のようにも見える雰囲気で、温和そうに見え  
てその実中々に曲者のようだ。」

「皆さんは506のメンバーではないのですか？」

「まだ結成もされてない部隊だしね。原隊の方が馴染があるよ」

ハンナの問いにイザベルが答える。成程。Bチームよりも結成に

難航しているチームらしい。

「二応、個々の腕には自信がある者が揃っている。チームワークはまあ、どこかのだれかさんのせいで散々だけどな」

「誰の事じゃ、ヴィスコンティ大尉」

「気が付いてるようで何よりだよ、姫様」

成程、とハンナが苦笑を浮かべる。この部隊をまとめるのには骨が折れるだろう。

「ヴィトゲンシュタイン大尉、探索魔法で周囲の警戒を。ヴィスコンティ大尉はアンジェラ……ヴォルフ中尉と、バーガンデル少尉は菘谷准尉と組んでください」

「了解した」

短く答えてアドリアーナがアンジェラとハンナの僚機の位置にく。

「で、ヴォルフ中尉、どうするんだ？」

「簡単だ。勲章と恩賞が飛んでくるから、片っ端から落とせばいい」

砕けた口調のアドリアーナに、上官であつても変わらぬ慇懃な口調でアンジェラが答える。

「解りやすくいいいな」

アドリアーナが口を吊り上げて笑う。いかに命令違反の常習者とはいえ、ここまで単純な命令であれば、それに歯向かうのは難しい。

「腕に自信があるようですね」

「ああ。何なら賭けてもいいぞ。誰が一番多く落とせるか」

「こいつはとんでもない貴族様ですね」

ハンネが苦笑を浮かべて肩をすくめた。

「じゃあ、こつちは？」

「若……若本中尉を援護しながら、『壁』のコアの位置が解った時点でその破壊に集中します」

「そういうのってヴィスコンティ大尉の方が向いてると思うんだけど」

「バーガンデル少尉はブロッケ軍曹と一緒にあたしを援護してください、コアを叩くのは、『この子』ですから」

そういつて信乃が手にした17式試製30mm機関砲を持ち上げる。

「……それ、本当に銃だったんだ」

「何だと思ってたんですか？」

「ええと。鈍器？」

「近づかないとかすりもしないって意味なら、概ね合ってます」

「じゃあ僕達も近づくんだけ。うわあ。ますます大尉と代わってほしい」

「そんな事言わないで頑張ろ……じゃなくて、頑張りましたよ……ええと、バーガンキング少尉」

「……僕の事はイザベルでいいよ。リベリオンのハンバーガーショップみたいな呼び方をされると、僕の些細なプライドも些か傷つくから」

大げさに落ち込んだ仕草を見せるイザベルと、慌てた様に謝るユーリ。

……ボクつ子が増えた。

そんな二人を見ながら、信乃はどうでもいい感想を抱いていた。

「助かりました。ヴィトゲンシュタイン大尉。よく部隊を動かせましたね」

「ハインリーケで構わぬ。フィリーネ大尉。何、止められる前に出てきてしまえば帰って始末書を書いて階級を一つ下げられ、ついでに営倉に入ればいいだけの話じゃ」

「大事じゃないですか」

つまり、無断出撃か。よく他のメンバーが付いてきたものだ。

「ヴィスコンティ大尉の発案じゃぞ」

「……A部隊って貴族の集まりじゃなかったんですっけ」

いつから貴族は愚連隊になったのか。

「貴族じゃからこそ、己可愛さにこのような事態を見過ごすわけにはいかんのじゃ」

『高貴なる者の義務』ですか

ハンナの言葉にハインリーケが大きく頷く。

「魔眼持ちのウィッチがいてくれれば助かるんですけどね」  
「まあ。そうじゃな。どこかに転がってはいないものかの」  
「そんなほいほい転がってたら今頃ネウロイからカールスラントを奪還できてますよ。後、私の事もハンナで良いです」  
「同じ階級とは言え、年上で撃墜数が200機越えのグレートエースを気安く呼ぶ事などできぬわ。フリーリーネ大尉」  
意外と律儀な所を見せるハインリーケにハンナが苦笑交じりに頷く。

敵の情報はJG54から直接輸送された資料で506のA部隊にも伝わっている。一キロ近いネウロイの中から、1メートルにも満たないコアを見つけ出すのは容易ではない。

「どうするつもりなのじゃ?」

「扶桑のクラスター爆弾があります。壁の表面をまんべんなく削れば、いつかはコアが見つかります」

「成程。なまじ成功しそうな気がするのが質が悪いの」

闇雲に攻撃を加えるよりはよっぽど効率が良いが、それでも賭けである事には代わりはない。

「それでもやらないよりかはマシです。高貴なる義務でなくても、私達はウィッチですから」

「良い考えじゃ。ならばウィッチであり貴族でもあるわらわは一層努力せねばならぬな」

うんうん。とハインリーケが満足そうにうなづく。

「……時にフリーリーネ大尉よ」

「何です?」

「先程から後ろについてきているウィッチは、貴様らの友軍か?」

「……何機ですか?全機ウィッチですか?」

「少し鈍いが、この動きはウィッチで間違いないの。数は6じゃ」

ふう、と一瞬鋭さを増したハンナの瞳が緩む。どうやら、追っ手がこちらに来たわけではないようだ。

「こちらカールスラント空軍、JG54第1飛行隊第3中隊です。貴軍の所属を乞う」

『……ほら、バレたぞ。ジェシー』

『残念。このままこっそり追いかけてようと思ってたのに』

「聞こえていますよ。どこのどちら様ですか?」

気の抜けた無線の声に呆れた様に尋ね返すハンナ。オーブンチャネルなので、他のウィッチ達も何事かと耳をそばだてる。

『あー。こちらブリタニア空軍所属『HMW』グローリアスウィッチーズ第二航空隊戦闘隊長。ジェシカ・E・J・ジョンソン中尉。我が部隊は貴隊の勇猛と献身に感服し、微力ながら協力をさせてもらいます』

流暢なクイーンズ・ブリタニッシュの応答が返ってくる。

「結構ですといったら?」

『そんなの、勝手に決めてくに決まってるでしょ』

いきなり口調が砕けた。

はあ、とハンナが大きくため息をつく。

「合流願います……二枚舌に後ろから撃たれては堪りませんから『賢明な判断ね』

程無くして5時方向から複数のウィッチ達が近づいてくるのが目に入る。

アッシュブロンドを灰色のリボンで結わえた少女に率いられた、スピットファイアを履いたウィッチ達。

パリの防衛を担う、ブリタニア王立空軍『HMW』。通称グローリアスウィッチーズ。

元々はロンドンを拠点としていたが、ガリア政府への協力という名目でパリ近郊にも部隊を駐屯させている飛行隊であり、JG54がガリアから撤退を迫られていた理由でもある。

色々と思うところはあるが、『壁』を相手にするにあたり、戦力が増強されるのに越したことは無い。

近づいてきたHMWのウィッチ達を見て、思わず皆が目丸くする。

「何でしょう、あれ?」

「ベレーナにはあれが何に見えるんだ?」

ベレーナの問いに徹子が苦笑を浮かべる。

「私の言いたいことはそういう事じゃなくて……」

「冗談だ。言いたいことはわかる」

理解出来ないのではない。理解したうえでなお、信じられないのだ。

「一応指揮はそちらに任せるけど、特に指示が無ければ勝手に動くわ。折角『これ』も持ってきたわけだし」

「ええ、そうですよね……」

そう言いながらもハンナの目はジェシカの後ろをついてくるウィッチ達が四人がかりで運んでいる『それ』にくぎ付けになったままだ。

「隊長!!重いっす!!」

「そろそろ代わってください!!落としたら大変ですって!!」

「……ラーナ、代わってあげて」

「さっきまで私も持っていたんだ。ジェシーこそ、一度も運んでないじゃないか」

「私は隊長よ?私が持っていたら指揮が取れないじゃない」

「酷いっす!!」

「横暴よ!!」

「そうだそうだ!!」

ウィッチ達が次々と非難の声を上げるが、ジェシカはどこ吹く風と言わんばかりにハンナに、否、其の場にいるウィッチ達に向かい誇らしげに口を開く。

「デカイ敵にはデカイ威力。ブリタニアの開発したこの『トールボーイ』があれば、動かないネウロイなんて楽勝よ!!」

妙な兵器を作る事に定評があるブリタニア軍の作った大型爆弾『トールボーイ』。

大きければ沢山爆薬が詰めて威力が増す、というシンプルな井勘定により作られ、実際地上の大型ネウロイを破壊した実績も持つが、重さが5トンにも及ぶ為、大型爆撃機か複数のウィッチによる運搬以外に手段がない。

「……やっぱり爆弾だったんですね」

ベレーナが呟く。

「あの、ジェシー」

おずおずと口を開いたのは信乃。そちらを振りかえったジェシカの表情にぱつと笑みが浮かぶ。

「あら、シノじゃない。久しぶりね。ふうん、扶桑の増援がいるって、貴女だったの」

「ええ、まあ……とところでジェシー。その爆弾なんですが」

「凄いでしょ!!何?扶桑にも欲しい?ダメよ、凄く高いんだから」

「そんなの抱えて、どうやって『壁』に近づくつもりです?」

「……え?」

真つ当な信乃の疑問に、ジェシカの笑みが凍り付いた。



## 23. 難攻不落

「ほら見る!!ほら見る!!やっぱりあの人って隊長の器じゃないっすよ!!」

「所詮小隊長どまりが関の山よね」

「ドロレス隊長がいてこそその鉄砲玉」

「私は最初から反対だったのよ!!この馬鹿隊長!!」

基地に向かって引き返していくブリタニアのウィッチ達の罵声を背に浴びながら、がつくりと肩を落とすジェシカ。

何しろ、ネウロイの熱線に焼かれた時点で周囲も巻き込んで大爆発するような代物だ。

超高度に到達できるロケットブースターを使用して相手の攻撃範囲外から落とすか、周囲のネウロイを完全に掃討して制空権を完全に確保しなければ使用するには危険すぎる。もしそうでなければ、とつくにあちこちの戦場でトールボーイが使用されているはずだ。

「……馬鹿なの?あの人」

ユーリが信乃の耳元で呟く。

「馬鹿ですよ。あたしの知ってる限り一番の」

11歳でも解る馬鹿なので相当な馬鹿である。

「そこ!!聞こえてるわよ!!」

ジェシカが信乃とユーリを指さす。ひえっ、と思わず悲鳴を上げるユーリと、呆れた様に肩をすくめる信乃。

「聞かせてるんです。全く、後先の事を考えないのは相変わらずですね」

「あんたの口の悪さも相変わらずね」

「……知り合い?」

「ええ。腐れ縁です」

イザベルの問いに信乃が肩をすくめる。

「ふふん。昔一時だけ同じ部隊に所属したこともあるのよ。自分ながら良いコンビだったと思うわ」

「止めてください。あたしまで馬鹿だと思われるじゃないですか」

近づいてくるジェシカの頭を押しとどめて冷たく言い放つ信乃。

「馬鹿ロツテの再結成か」

からかうような笑みを浮かべて徹子が呟く。

「ほらあ……言わんこつちやないです。最近ようやく風化してたのに」

「どうして馬鹿なんだ？いや、馬鹿なのはわかる気がするが」

アドリアーナが尋ねる。いや、貴女初めて会った人に対してそんな事思ってたんですか？

「扶桑で馬鹿つてのは馬と鹿つて書くんだ。ジェシカの使い魔が馬で、ハギが鹿」

「成程。ぴったりじゃな」

「……皆があたしをどう思っているのか良く解りました。貴族なんて大っ嫌いです」

セダンのウィッチ達の観察眼の無さを嘆きながら信乃が呟く。

「あら、私は結構気に入ってるわよ。『Crazy』って意味もあるみたいだし」

「FoolもCrazyもジェシーだけです。あたしはいたって普通です」

「ふふふっ」

「何で笑いましたか、バーガンデル少尉」

「……談笑中済まないが、今は作戦行動中なのだろう？」

もう一人残ったブリタニアのウィッチが口を挟む。

「そうですね。危うくブリタニアの隊長さんのせいで忘れるところでした」

ハンナが肩をすくめる。

「は？作戦行動をわすれるなんて、あんた馬鹿なの？」

「皮肉を言われてるんだ、隊長」

呆れたような顔をするジェシカに更に呆れたような顔をするもう一人の少女。

「貴女は普通そうですね。ええと……」

「アラーナ・C・ディーア。中尉だ。うるさい隊長が迷惑をかけると思

うが腕だけは確かだ。許してやってほしい」

「ハンナ・フィリーネ大尉です。よろしく、アラーナ」

「ラーナでいい」

「ちよつと、ラーナ!!うるさいとか迷惑とか、隊長に向かってどういうつもりよ?」

「うるさい。迷惑だから黙ってろ。隊長」

「……はい」

ぎろり、とアラーナに睨まれ、ジェシカが思わず黙り込む。

「凄。こんな威厳の無い隊長初めて見た。」

「むう……いつか復讐してやる」

「そこは見返しましょうよ……時にジェシー」

「なによ」

信乃が隣に並ぶジェシカに尋ねる。

「何でしれつと私達の一番機的位置にいるんです?」

「あ、それ僕も気になった。凄く嫌な予感がする」

信乃の言葉にイザベルも頷く。

「フォーフィンガーの方がチームとしては効率的よ」

「ええ。そこまではわかります」

「じゃあ、問題ないわね」

「凄。間抜かして言い切ったよこの人」

イザベルが目を丸くする。有無を言わさぬその振舞いはいつそ清々しきすら覚える。

「えーと……ジョンソン大尉。作戦、解ってますか?」

ユーリが戸惑ったように尋ねる。

「『壁』を倒せばいいのよね」

「うん……」

「なら、テツコが装備してるのは扶桑の特爆ね。あれを落としてコアを露出させて、シノの30mmで破壊するって所かしら。なら、私達はテツコ達を援護して、特爆を落とさなきゃなら速やかに遊撃。これで行きましょう」

ジェシカの言葉にイザベルとユーリが思わず息を飲む。

「作戦内容、知ってたんですか？」

ユーリの言葉にジェシカが呆れた様に肩をすくめる。

「このくらい、部隊の編制と装備を見れば解るでしょ。馬鹿なの？」

しれっと答えるジェシカ。

「へえ……こういう人なんだ」

「こういう奴なんです」

イザベルの呟きに信乃が肩をすくめる。確かにジェシカ程の馬鹿はそうそういない。

しかし、馬鹿と天才は紙一重とも言える。少なくとも、ジェシカは両方の側面を併せ持つところがあり、逆に言えば、ジェシカ程の天才も、信乃の知っている限りはそういないのだ。

「……そろそろ真面目にしてもらって良いですか？」

いつまでも騒がしい教室の生徒たちを注意する教師のような口調でハンナが口を開く。

「私はいつでも……」

「はい、真面目にします」

信乃がジェシカの言葉を遮り答える。

「まもなく予測される戦闘空域です。皆、準備はいいですか？」

その言葉にその場に居るウィッチ達の目が鋭くなる。

出自も性格もバラバラだが、皆、何度も戦場を潜り抜けてきたウィッチ達だ。ユーリやベレーナですら、それまでの空気が嘘のように凜とした雰囲気を身に纏うようになった。

「ハインリーケ大尉。若本中尉」

「居るわ居るわ。数えるのも面倒なほどの」

「敵は正面。高度はオレ達の1000メートル下と行ったところだ。3号を落としてやりたいところだが、こいつは『壁』用にとっておく」

「了解しました。アンジェラ、お願いします」

「ああ。行くぞ、ハンネ、ビスコンティ大尉!!」

了解!!と、気合の入った返事が返ると同時に、アンジェラが魔導エンジンに魔力を送り込む。

「む。私もそっちだな」

アラーナが眩き、アンジェラ達の4番機の位置につける。一瞬にして状況を理解して最適な判断が出来る。HMWの練度の高さが伺えるような動きだ。

「小型共がわらわらとっ!!」

急降下の勢いを生かし、小型ネウロイの群れに向けて一斉に弾き金を引く。向うもこちらの動きを察知していたのだろう。散開しながらも反撃の赤い光線が放たれる。

「そんな攻撃で!!」

アンジェラがシールドでそれを弾きながらさらに弾き金を引く。

「これなら狙う必要もないですね。撃てば当たります!!」

「確かに。撃墜数の大盤振る舞いだ」

ハンネとアドリアーナが片っ端から目につくネウロイを落とし続ける。空中に四散するネウロイの光の粒が大量に舞い、昼間だということにまるでスターマインのような光景が広がる。

「!!……ジェシー、行ったぞ!!」

「解ってるわよ」

アラーナが怒鳴る。

ふん、と鼻を鳴らしてジェシカが手にしたM1919のトリガーをピアノの鍵盤を叩くように軽く弾く。

数発の弾丸が数射。それだけでこちらに向かってきていた小型ネウロイはまるで曳光弾の弾道に吸い込まれていくように飛び、そして爆散した。

「うわ、凄い!!」

いとも容易く長距離からの見越し射撃を命中させるジェシカにユーリが感嘆の声を上げる。

「ふふん。でしょ?こんな芸当が出来るのは、私かアフリカのマルセイユくらいね」

呆れるほどの自画自賛。

「ジェシカってただの馬鹿じゃないんだね!!凄い馬鹿だ!!」

「な!?!」

純粹に褒めているのだろうが、言葉だけなら思い切り馬鹿にしてい

る。

「アンジェラ!!そのまま小型を引き付けながら『壁』に向かってください!!若本中尉、ジョンソン大尉!!」

「ああ。『壁』に突っ込む!!!頼むぞ、馬鹿ロツテ」

「任せなさい!!」

「その呼び方は止めてください!!」

高度を上げる徹子達に続き、ジェシカ達はその言葉に素早くブレイク。徹子とベレーナを囲うように前後の位置につける。

「シノ、動きが鈍いわよ。何してんの!?!」

「小回りが利かないんですよ、この子」

ジェシカの問いに信乃が呻く。いつものように囿になるのはこれでは難しそうだ。

「フリーネ大尉、わらわ達はどうするのじゃ?」

「ハインリーケ大尉は索敵を続けて。異常があればすぐに報告。アンネ、グレーテル。アンジェラ達が打ち漏らしたネウロイが背後に付くのを防ぐわよ。ついてきなさい」

「解りました」

「りよ、了解です」

その言葉と共に徹子達とアンジェラ達の背後にハンナ達が回り込む。

アンジェラ達の背を守るように、背後に付こうとするネウロイに向けて弾き金を引く。

「見えた、『壁』だ!!」

徹子が鋭く叫ぶ。

マジノ線、或いはジークフリートラインと呼ばれる巨大な要塞群の一角は、信乃達が命がけで撮影した写真同様、ネウロイの表皮と同じ黒い幾何学模様には侵食され、見るものを思わず怯ませるような威圧感を放ち、そびえたっている。

「……大きい……」

ぼつり、とユーリが眩く。

「あんなの、本当に落とせるの……?」

ベレーナも不安げに呟く。

「落とすのはあたしです。ベレーナ達はその援護をしてくれればいいんです」

「いいえ、私よ!!今までの分、きっちり落ととしてやるんだから!!」

「護衛が先だ。馬鹿ロツテ」

徹子が苦笑を浮かべる。

「解ってるわ!!さあ、ここからが本番よ!!シノ!!バーガンデル!!  
ユーリ!!」

「了解」

「行くよ」

「はいっ!!」

ジェシカの合図と共に徹子とベレーナの前面に信乃とユーリが展開する。ジェシカとイザベルは徹子達の脇へ。信乃とユーリが防御、『壁』から出てくるネウロイはジェシカとイザベルが迎撃する。

「突っ込むぞ!!」

徹子の合図とともに一斉に6人が急降下。同時に『壁』から熱線が針山のように放たれる。

「ユーリ、シールドを右斜め30度に向けて張って!!」

「え!?!こ、こっつ!?!」

ユーリが張ったシールドを斜めに向ける。同時に、信乃もそれに合わせてシールドを展開。

ユーリのシールドと信乃のシールドが溶け合うように合わさり、部隊全体を覆うような大きなシールドになる。

「わわ、なにこれ!?!」

『同調シールド』。

魔力を上手くシンクロさせれば、一人一人で張るよりもはるかに大きなシールドを張る事が出来る。今は専ら信乃がユーリに合わせているのだが、それでも安定してシールドを維持出来るユーリは中々センスがあると言っている。

ユーリの張ったシールドに自らのそれを合わせ、信乃が角度を微調整する。

同時に、そのシールドに当たった熱線が背後に逸れてく。

「しゅばって出来た!!」

驚いたように目を見開くユーリ。

「この感覚、忘れないで」

そう言うと言乃が更にシールドを微調整しながら、『壁』からの熱線をユーリとの同調シールドで的確に受け流していく。

今自分がすべきことは、攻撃をかわす事ではなく防ぐ事。後ろにいる仲間たちを攻撃から防ぎ、そして爆撃ポイントまで導くことだ。

「ジョンソン大尉、小型、出てくるよ!!」

「ふん。返り討ちにしてやるわ!!」

イザベルの声にジェシカが鼻を鳴らす。ボーイズ対装甲ライフルとM1919機関銃の弾が放たれ、『壁』から出てきたばかりの小型ネウロイがなすすべもなく光の粒と消える。

「どんどん出てくるよ!!」

「陽動、どうなっているのよ!!」

「待たせたな」

ジェシカの苛立つような声にアンジェラの声が被る。正面からネウロイを突破してきたアンジェラ達も『壁』にたどり着く。

「ヴォルフ大尉、後ろからも来るぞ」

「ちっ、流石に数が多いな」

何しろ弾を打てばネウロイに当たる程の密集度だ。撃ち漏らしといても相当な数になる。ハンナ達が迎撃に当たってはいるが、相当数の数のネウロイがアンジェラ達の背後に付いてきている。

「ハンネ、私と一緒に後ろをやるぞ!!ビスコンティとラーナは若本達の援護を!!」

「解った」

「了解です!!」

その言葉にシユバルムが二つのロツテに分かれる。

「若!!爆撃ポイントですー」

壁の直上に付いた信乃が口を開く。

「解った。ベレーナ。ついて来い。オレが三号を投下したら3秒後に



投下。一発つつ、慎重に行け。守りはハギたちに任せて、落とす事だけに集中しろ」

「りよ、了解っ!!」

上ずった声でベレーナが返事をする。

「いくぞ、投下!!」

かちん、と、三号特爆を固定していたストツパーが外れる。

「3、2、1、投下っ!!」

きつちり三秒後、ベレーナが特爆を投下する。

三秒おきに次々と、計8発の三号特爆が花を咲かせ、無数の焼夷弾子が『壁』の表面を灼いていく。

「コアは!?!」

『まだじゃ!!まだコアは見えぬ!!』

ハインリーケの無線が響く。

「ちっ、全機一旦離脱!!上昇しろ!!」

「了か……あっ!?!」

「え……?」

ユーリが目を見開く。熱線が一条、ユーリのストライカーユニットを掠めると同時に、がくんとユーリの体が揺らめく。

午前中の信乃と同じだ。

「うわあっ!?!」

「ユーリ君っ!!」

イザベルが手にしたライフルを投げ捨て、シールドを張りながらユーリの体を支える。

「大丈夫かい?」

「う、うん……」

「そっか、でも、これから大丈夫じゃないかもね」

無数のネウロイがシールドを張ったイザベルとユーリの背後に襲い掛かる。

「ばー……イザベルさん!!ボクと一緒にシノとやった奴を!!」

「あんな曲芸無理だつて」

呆れた様にイザベルが呟く。他人の魔力と自らの魔力を同調させ

るなどという芸当など、今初めて見たのだ。

「二人共!! 離脱しろ!!」

アラーナが二人の間に割って入り、シールドを展開する。

「ハンネ!! 徹子達の援護に回れ!!」

「了解です!!」

アンジェラの言葉に、上昇する徹子達に続いてハンネがその後を追う。

「ユーリ君、このまま引つ張るから、後ろが見えるなら撃って!!」

「は、はいっ!!」

イザベルの言葉に襟を引かれたユーリが手にした機関銃を斉射し、小型ネウロイを数機落とす。その間にイザベルがユーリを引つ張り『壁』から離れる。

「ユーリ君のユニットが損傷した。僕も銃が無い、一旦離脱するよ」

「解りました。ハインリーケ大尉、二人の援護を」

「了解じゃ」

ハンナの指示にハインリーケがユニットを走らせる。

「ユーリ君、片肺でいける?」

「も、もちろん!!」

「無理するではないぞ、わらわ達からはぐれるな」

イザベルの手から離れ、ややぎこちないながらも飛び始めたユーリを庇うように前後につくイザベルとハインリーケ。

「このまま安全空域まで下がり、いざとなれば二人は一旦セダンまで退却せよ。ユニットと武器を補給して戻るのがじゃ」

「うん、解った」

「ごめんなさい……」

「謝るのは後じゃ!! しっかりせい!!」

「は、はいっ!!」

ハインリーケの言葉にユーリがうなずく。その間にも熱線とネウロイは三人に向かって襲い来る。

「退けい!!」

ハインリーケが叫び、退路を塞ぐネウロイを次々に撃ち落とす。そ

の後ろをユーリとイザベルがシールドで互いの死角を庇いながら続いていく。ハンナやアンネ達も時折援護するようにハインリーケ達に向かうネウロイを落としていく。

だが、その間にも、手薄になった徹子達にネウロイと『壁』から放たれる熱線が次々と襲い掛かる。

「装填している時間がもったいない。ベレーナ、今度は直接手で落とすぞ」

そういうと徹子が肩から下げた特爆を二つ、ベレーナに渡す。ユニットに装着している暇は無い。

「ハンネ、あたしと二人で若たちの防御を」

「もし撃てるなら？」

「撃つてください」

「了解したわ」

ハンネの言葉に皆が苦笑を浮かべる。

「……行くぞ!!」

再度『壁』に突入する徹子達。先程とはポイントをずらしながら、風潰しに特爆を落としていく。

徹子を信乃が、ベレーナをハンナがシールドで守り、そのすぐ近くでジェシカが近づくとネウロイを機械のような正確さで射貫いていく。

ズームアンドダイブの波状攻撃を第二波、第三波と繰り返すが、いくら特爆が当たっても、コアの発見には至らなかった。

「糞……コアが深いのか、当たり損ねたのか……」

流石に徹子の顔にも焦りが浮かぶ。残る特爆は4つ。ベレーナに残りの二つを手渡しながら徹子が呟く。

「ヴォルフ中尉、残り残弾が少なくなってきた。これ以上は厳しいぞ」「ああ。だが、弾が残っているうちに引くわけには……」

アドリアーナの言葉にアンジェラが顔を歪める。状況は皆同じだ。最初の作戦通り事は運んでいるのは間違いない。だが、コアが見つからなくては意味が無い。

「若、あたしが行きます。弾が残ってるのは……」

「いや……」

それよりももつと手っ取り早い方法が無いわけではない。だが、それは諸刃の刃でもある。

そつ、と背中に背負った『虎徹』に手を触れる。

「ベレーナ。次で最後だ。これはお前が落とせ」

そういうと徹子は手にした特爆をベレーナに渡す。

「え……若本中尉、何を……」

その瞳に並々ならぬ決意が灯っているのを見て、ベレーナが息を飲む。

「シノ」

「何ですか、ジェシー」

「次でダメなら……アレ、使うわ」

「馬鹿なんですか？ただでさえ魔力が減ってきているのに、落ちますよ」

「そうね。まあ、何とかなるわよ」

そう。まだ手が無いわけではない。だが、それを行うリスクは途方もなく大きい。

失敗すれば、生存して帰る事はほぼ不可能だ。

だが……。

「不味いですね……」

一方、ハンナも肩で息をしながらぽつり、と呟く。既に作戦予定時刻は大幅に過ぎ、燃料も弾薬も底をつきかけている。加えて言えば、アンネやベレーナ達若手の体力も限界に近い。

撤退するなら、アーヘンまでの燃料が残っている今しかない。

だが。それは自分達を信じて戦っているディジョンのウィッチ達、それに、リヨンやマルセイユに住む多くの人々の犠牲を生むことになる。

特爆は満遍なく『壁』を削っているはずなのだ。なのに、どうしてコアが見つからないのか。

コアが移動するタイプなのか、それとも別のところにコアがあるのか。

ここは戦場だ。皆、それぞれの決意を抱きながらも、常に身を焼く

熱線とネウロイに向き合っている状況だ。

だが、一瞬、ほんの一瞬だけ、そんな状況に置いて、ハンナの思考は深く入り過ぎた。

その致命的な隙を見逃すほどネウロイは甘くない。

「ハンナ!!」

はっ。とハンナがその声に、そして、ぞつとする様な気配に振りかえる。

中型ネウロイが一機、いつの間にかハンナの死角から背後に回り込んでいた。今まさに赤い光線が放たれようと、ネウロイの正面の一部が極限まで発光している。

目を見開くハンナ。防御も、回避も、反撃も、間に合わない。

そして。

次の瞬間、一条の光跡が空を走った。

## 24. 伝説の魔女達

次の瞬間、一条の光跡を描き、弾丸が中型ネウロイを射抜く。

次いで二撃、三撃、四撃。

「え……う」

思わずハンナが目を見開く。撃たれたのは自分ではなく、目の前のネウロイ。

だが。どうして。

『今ですっ!!止めをっ!!』

魔導無線から飛び込む幼さと強さが入り混じったような声に、ハンナの手にした銃が導かれるように露出したコアに向かい、弾き金が引かれる。

『やったあっ!!』

この場にそぐわないような明るい声が歓声を上げる。

聞きなれない声だ。JG54でも、506でも、HMWでもない。

では、声の主は誰なのか。

『流石ですわね、リーネさん』

『はいっ!!ペリーヌさんは『壁』を!!』

『解っていますわ!!』

その声が響くと同時に、一筋の雲を引きながら、ガリア空軍の制服を着た少女が一直線に『壁』へと向かって行く。

そして。

「トネールっ!!!」

凜とした叫び声と共に、雷を纏った少女が『壁』を横切っていく。

まるでバターを切り裂くように『壁』が破壊されていく様子に一瞬皆が我を忘れた様に見入る。

『皆さん、続いてください!!』

『皆、私に続きなさい!!』

鼓舞する様な、背を押すような。

優しく、力強い、その二つの声に導かれるように。

その場に居るウィッチ達が一齐に『壁』へと向かう。

「そうだ!! コアが見つからねえなら!!」

背中に挿した『虎徹』を抜き放ち、徹子が吼える。

短い黒髪が次の瞬間ばさり、と伸び、零式とは思えない速度で『壁』に肉薄する。

徹子の固有魔法……使い魔との同調を極限まで高め、飛躍的に魔力と身体能力を高める『覚醒』だ。

「うおおおおおっ!!」

壁に『虎徹』を突き立て、そのまま1kmにも及ぶ『壁』を横一字に切り裂いていく。

「コアごと『壁』を!!」

ベレーナが手にした三号特爆を次々に落とす。一旦離れ、背負っていたフリーガーハマーのロケット弾を次々に射出する。

「ぶっ壊すだけよ!!」

ジェシカがシールドを展開させる。ただのシールドではない。地面から壁の天辺まで届くような超巨大なシールドだ。

次の瞬間、ジェシカが拳を握ると同時に、シールドが細く、長く圧縮される。その形は、例えるのなら巨大な一振りの剣だ。

大上段に構えた『それ』を、ジェシカは壁に向かって横薙ぎに振り降ろす。

「切り裂けっ!! 『エクスカリバー』!!」

ブリタニアの伝説に登場する円卓の騎士の王女の持つ剣の名前を冠したジェシカの固有魔法が、壁を貫き切り裂き、ついでに無数の小型ネウロイも巻き込んでいく。

「ああもう、本当に、若もジェシーも馬鹿ですね」

笑うしかない。これだけ長大な壁が切り裂かれ、穴が開き、みるみるうちに破壊されていくのだ。

最早連携は関係ない。信乃が『壁』に肉薄しながら、雷電に半固定された17式試製30mm機関砲の弾き金を引く。

だっ、だっ、と、魔法力で強化された30mm弾が、クレーターのような大穴を『壁』に開けていく。

『アメリカさん!!』

『はいっ!!』

アメリーと呼ばれた少女が背中に背負った大きなカバンの中から次々と弾薬を取り出す。

「補給か、有り難い」

「私に出来る事はこれだけですから」

「いや、最高の仕事だ」

アメリーから弾薬を受け取ったウィッチ達が次々に歓声を上げる。

「行くぞ!!皆!!」

最早小型ネウロイを生み出す余裕もないのか、『壁』は闇雲に赤い熱線を放つが、その勢いは徐々に弱まっていく。

「後れを取ったみたいだな、ハルトマン」

「うわあ、本当におつきいねー」

魔導無線に響く声。確認するまでもない。アーヘンからの増援だ。

「その声、バルクホルン大尉か!!」

「私もいるよ、アンジー!!」

全人類においてネウロイの撃墜数一位と二位のウィッチ達の声が響く。これ以上の増援など望む事など出来ないほどの増援だ。

「行くぞ、ハルトマン」

「任せて!!行くよ!!シュトゥルム!!」

一筋の風の刃となったエーリカ・ハルトマンが『壁』を貫き破壊していく。

『こんなもの、デカいだけのただの木偶だ!!』

ゲルトルート・バルクホルンが肩から背負ったパンツァーフアウストを次々に放ち、次いで手にしたMG42を『壁』に向けて掃射する。

『バルクホルン大尉!!ハルトマンさん!!』

『待たせたな、リーネ。ペリーヌ』

『……全く、遅いですわよ』

『にひっ。相変わらず素直じゃないなあ、ペリーヌは』

激しい攻撃を矢継ぎ早に繰り出しているにも関わらず、無線にはいる声はまるで旧友との再会を楽しむかのように、明るく、弾んでいた。「……まるで、おとぎ話か夢のようですね……」



手にしたMG42の弾き金を引きながら、ぽつり、とハンナが呟く。  
欧州では既に伝説となっていると言っても過言ではないウィッチ  
隊、501JFW。

『ストライクウィッチーズ』と呼ばれたその部隊に所属していた  
ウィッチ達がここにいるのだ。

それだけではない。

「落ちろおっ!!」

アンジェラが。

「落ちてくださいっ!!」

ベレーナが。

「落ちなさい!!」

ハンネが。

「落ちろ!!」

「落ちなさいよっ!!」

アンネが、グレーテルが、JG54の皆の攻撃が、壁を破壊してい  
く。

自然と体が震え、視界がにじむ。

これで負けるような事があれば、人類に未来などない。

逆に言えば、負ける要素など万が一つにも有り得ない。

人類はそんなに弱くない。不可能などないのだ。

「落ち……あ」

かち、かち、と信乃の手にした30mmの射撃が止まる。

弾切れではない。

「うっそ、こんなところでジャムリやがりましたよ、この子」

流石、試製の名は伊達ではない。

「でも!!」

ぎり、と歯を食いしばる。固定装置から17式試を外し、砲身を  
握って大きく振りかぶる。

「だったら!!」

そのまま真っ直ぐ『壁』に突っ込む。最早ダメージを受けていない  
箇所などない『壁』の中、僅かに無傷な場所に思い切りそれを叩きつ

ける。

「これでっ!!」

砲身に残った30mmが誘爆を起こし、17式試が目の前ではじけ飛ぶ。信乃の体に金属の破片が掠め、あるいは突き刺さって無数の傷をつけるが、『壁』の方にはわずかな亀裂が入っただけだ。

しかし、扶桑の神様が上手くガリアの神様を懐柔したのか、それとも単なる偶然か。

「あは……そりゃ見つかりませんよね、これじゃあ」

信乃の瞳が捉えた、亀裂の隙間から覗くモノ。

目の前で輝く赤い小さな宝石の様な『それ』を見て、信乃が苦笑を浮かべる。

亀裂の隙間から覗く、この巨大なネウロイに似つかわしくもない、赤子の握りこぶし程しかない、ほんの小さな『コア』。

さて、どうするか、武器が無い。

ならば、と、肩に刺さった17式試の砲身のかげらを引き抜き、それを握りしめる。

まあ、あたしの肩に刺さるくらいだ。ナイフの代わりにはなるだろう。

ふ、と笑い、信乃がそれを振りかぶる。

悪いですね、皆。こいつの撃墜カウントはあたしが貰いましたよ。

内心で呟き、自らの血で汚れた砲身の破片の尖った部分をコアに向かって振り降ろす。

あつけない程簡単に、『壁』のコアにそれが突き刺さる。

次の瞬間。

『壁』に無数のひびが走り、大きな振動が大気を揺らす。

『やったのか!?誰が!?』

誰かが叫ぶ。

あ、それ、あたしです、と答えようと思ったが、その前に。全身を包むチリチリとした感覚が爆発的に広がっていく。

そして。

『壁』が、ひととき大きな光の奔流となり拡散する。

その衝撃に吹き飛ばされ、信乃の体が空へと投げ出される。身体を走る衝撃。雷電が足から脱げ、体が地面に落ちていく。

……あ、今度こそ駄目っぽいですよ、これ。だが。

「シノーっ!!」

聞き覚えのある幼い叫び声が信乃の耳に届く。

……いつか、今度はボクが、信乃を守ってあげるから。

身体を誰かに抱き留められる。自分よりも一回り小さなその体に体を委ね、信乃の意識が遠ざかる。

いつか、つて、ほんの半日しかたつてないじゃないですか、ユーリエ。エ。

眩いた声は届いたのか届かなかったのか。

ぼんやりと滲む視界の中で、泣き笑いの表情を浮かべたユーリが信乃を抱きしめた。

同日 1752 ガリア共和国東部 マジノ線

超大型ネウロイ『壁』は、JG54、506JFW、HMW、パリ及びアーヘンに駐屯する元501JFWのウィッチ達の活躍により沈黙。

ガリア政府及びブリタニア政府は、新カールスラント政府に対し、事態の公表を控える代わりに、当該作戦に関わったカールスラント空軍のウィッチ達に対して逮捕や尋問などを含む一切の責任の追及を行わない事を約束した。

ガリアの防衛を担う両国にとって、これだけの脅威が国内に迫りながら、その件に関し軍がそれを察知していなかったことは、国の威信にかかわる問題となりかねない。

JG54の応援要請を黙殺してきた軍関係者及びそれに連なる政治家の一部は、その責を問われ多くが職を辞した。

その中の一部が後に『王党派』と呼ばれる過激的な政治思想集団と結びつくことになるが、それはまた別の話。

こうして、ガリア東部に生じていた超大型ネウロイ『壁』による侵攻の危機は、一部の軍および政府関係者以外に知られることなく、静かに幕を下ろした。

## エピソードグー ―あたしが空を飛ぶ理由―

何故、あたしは空を飛ぶのか。

最初は人を助けたいからだと思った。

だけどいざその場になると後悔した。人を助けたいのではなく、ただ、自分の前で人が傷ついたり、死んだりするのが嫌なだけだった。だから敵を倒そうと思った。そうすれば、傷つく人は減るはずだから。

でも、過酷な戦場に置いて、あたしは自分を犠牲にしてまで仲間を助ける勇氣すら無かった。

そして解った。あたしはただ怖かったから、自分を守るために戦っているに過ぎなかった事が。

でも、何故か戦いから、空から逃げていない。それどころか、臆病な自分でも出来る事を探して空を飛ぼうとしている。

何故、そこまでしてあたしは飛ぶのか。

何故。

……ああ。大人のブドウジュースなんて大嫌いだ。飲むと余計な事を考えてしまうから。・

マーストリヒト・アーヘン空港に着いたあたし達は、多くのウィッチ達の出迎えと、リヨンで別れた整備兵たちとの再会を果たした。

おっちゃんもアルマも、あたしの顔を見るなり自分の服があたしの血で汚れることなど厭わずに抱きしめてくれた。アルマなどは傷口が痛いといってもしばらく力任せの抱擁は解いてもらえず、ようやくその手を離すと、目に涙を貯めながらもいつもの意地悪っぽい笑みを浮かべてこういったのだ。

「格好良く決めてきた？」

って。

当たり前ですよと返してやった。あたしが最後にとどめを刺したのだから、そのくらい言っても罰はあたらないだろう。

その後は医務室に送られ、傷の手当てを受ける事になった。何しろ

飛び散った17式試の破片が体のあちこちに突き刺さっている状態だ。

大きなものは手で抜いたが、服を脱ぐと細かい破片があちこちに刺さっていたらしい。そのまままで回復魔法は使えないと、医者がピンセットで一つ一つ丹念にかつ入念に、あたしの体から破片を取り除いていくのだ。

一つ一つ傷口の奥にピンセットを突っ込まれるのを想像してほしい。

む？とか、おや？とか言いながらぐりぐりと傷口を掘り出して、数ミリから数センチの破片を取り出すのだ。痛くない訳が無い。

お蔭であたしはしばらくの間、小骨を取られる焼き魚の気分を味わう事になった。

破片を取り除き、治癒魔法をかけられ、夜中まで続いた治療が終わり一晩寝かせられ、翌朝になると、朝っぱらからユーリの大声で目をさます羽目になった。

どうやら面会謝絶が解かれたらしく、真っ先にユーリとベレーナが部屋に飛び込んできた。

助けてくれたユーリに感謝し、健闘したベレーナを褒め、他愛の無い話も多くした。

特爆の爆撃要員だったベレーナはエースになりそこね、ユーリはちやっかり撃墜数を二桁に伸ばしたらしい。

二人に貰ったチョコレートを食べていると、アルマが尋ねてきた。何か照れたような顔をしていたが、すぐにいきなり抱き着いてごめんと言われた。

人をからかうのには慣れていてもからかわれる事には慣れていないだろう。いろいろと言ってやろうと思っただけで怒らせるのも何なので、お詫びも兼ねて暇つぶしに皆の話聞かせて欲しいと言ったら予想外に長い話になった。

ハンナ・フィリーネ大尉は今回の功績が認められ、少佐に昇進した後、アドルフイーネ・ガランド少将の率いるJG1へと移籍になるらしい。まさに栄転だ。移籍の話聞いて最初すわ左遷かと思った時

のハンナの顔は実に楽しかったと愉快に語った。

あと、矢張りというか、『音楽隊』のウィッチ達も皆違う部隊への配属が決まったらしい。

アンジェラは年齢も考えて前線から身を引き、新カールスラントのウィッチ養成学校で後進のウィッチの育成にあたるという。彼女なら適任だと思う。

ハンネは中尉に昇進してJG54にとどまり、アンジェラから引き継いで第三中隊の隊長を拝命するらしい。真面目ではあるがそれ以上で敢闘精神が上回る彼女が率いる部隊だ。さぞ勇猛な部隊になるのだろう。

ベレーナはハンナと共にJG1へ。ユーリは曹長になりJG54に残るといふ。先程二人でいたのは別れを惜しむ意味もあつたのだろうか。

アンネとグレーテル……手に『Menschen』の文字を書いていた子とその相方だ。は共に他部隊に転属され、東部のオラーシャではなく西部、つまりこちらの方へ残るらしい。あたしと組むことは少なかったけど、二人共今回の戦いで5機以上のネウロイを撃墜し、エースとなったという。今度会った時は、きつともつといろんな話をして仲良くなれるに違いない。

他の部隊の話も知る限り話してくれた。506のBチームはディジョン上空でネウロイの侵攻を防ぎきったらしい。ジェニファーが頑張った、と少し嬉しそうに話していた。

Aチームの皆は降格と営倉入りは免れたが、隊長さんにこつぴどく叱られたらしい。あたしは会ったことがないけれど、ガリアの貴族様らしいし、さぞかし厳格で厳しい人に違いない。

HMWの話だが、案の状というかなんというか。あの銀髪リボン、『壁』を倒し終えたらふらふらと落ちて行つたから皆胆を冷やしたらしい、と。

彼女の固有魔法は強力だが至って燃費が悪い。そのくせそれを使いたがるのだから質が悪い。そのせいであたしも何度か魔力不足で意識を失つた彼女を背負つて基地に戻つた事があつた。

恐らくあの苦労を重ねてそんな雰囲気の副官が担いでいったのだろう。可哀想に。

あと、元501のウィッチ達もこの基地に在るといふ。伝説のウィッチ隊、先程の戦いでもあの人たちがいなければあたしたちの勝利は無かつた。一度会つてお話をしてみたい。後サインと、出来れば一緒に写真を撮つてもらえないだろうか。故郷の家族や友人たちに良い土産になる。

あたしがさういふと、アルマは『どうせシノの事だから、何か交換の材料にでもするつもりでしょ?』とからかつてきた。失礼な。その手があつたか。

アルマは?と尋ねると、私はJG56に残る、と言つた。貴重なナイトウィッチを欲しがらる部隊は数知れないだらうけど、彼女は、私はこの部隊が好きだから、と、はつきり言つていた。きつとどこの部隊も、彼女を引き抜くには苦勞するだらう。

シノはどうするの?という問いに、あたしはううん、と首を捻る。どうと言われても、原隊に戻るだけだ。

まあ、とりあえずは瑞鶴に戻つて休暇を申請してみる。その後はどうなるか分からない。直ぐに飛ばなきやいけないかもしれないし、二三日は待機命令が出るかもしれない。どっちにしても、欧州に在る限りはあちこちの戦場に駆り出されるのだ。

だから、意外とすぐに再会できるかもしれないし、欧州が解放されるまで会う事が出来ないかもしれないね。

さういふと、アルマはそつか、と言つて微笑んだ。それ以上は聞いてこない。

そして、彼女は少しだけ口をつぐむ。

……身体、大丈夫?と尋ねられたので頷く。傷口は回復魔法のお蔭で大方塞がつて在る。残るのは深夜まで続いた治療による寝不足と体力の消耗による少しの体の気怠さだけだ。

じゃあ、少し休みなよ。夕方から祝勝会だよ。私達の部隊に配給されるはずだつた物資が大量にここにあるから、皆で勝利を祝して食べちやおうつて、隊長が言つてたから。



その言葉にあたしも笑みを浮かべる。それは楽しみですね、と。うん、主賓がいないと話にならないから。ほら、休んだ休んだ。とん、とアルマがあたしの額を小突く。それだけであたしの体がぼふつ、と、医療室の固いベッドに倒れこむ。

おやすみ、シノ。

アルマの言葉に、あたしも急激に襲ってくる眠気に逆らいながら口を開く。

うん、おやすみなさい、アルマ。

目を閉じると、あたしの意識は急速に闇に沈んでいった。

よく覚えていないが、夢を見た。若が新藤さんに何故か土下座をしている夢だ。

いつまでも見舞いに来ないからだ。ざまあみろ。

## エピローグ2 ―チリチリするの―

夜のアーヘンにはそこが前線とは思えない程に煌々と灯りがともされ、基地の庭には立食用のテーブルと、そこから溢れんばかりの料理が大皿一杯に盛られて並んでいる。

幸いにしてこの近辺のネウロイ出現予報はしばらく昼夜共にネウロイの襲撃は無いだろうという事だったので、16歳以下のウィッチ達と夜間のスクランブルに備えた数名のナイトウィッチが飲酒を禁じられた以外は、皆好きに飲んで食べて騒いでいいという通達が出された。つまり、無礼講である。

そんな中、庭先に一段高く設けられたステージの上に立つハンナが口を開く。

「えー、皆さん、この度はお疲れさまでした。皆さんの奮闘もあり、ガリアを脅かす超巨大ネウロイ『壁』は無事撃破されました。改めて協力してくれたミーナ中佐を始め……」

「おおい、話が長いぞ!! 『元』隊長!!」

既にアルコールが入っているのか、赤い顔をしたアンジェラが叫ぶ。

酒乱だったのか。

「……ええと、本来であればここでミーナ中佐にも一言いただくわけですが……」

「止めましょう、ハンナ。飢えた狼たちを前に、餌をお預けさせる勇氣なんて私には無いわ」

苦笑を浮かべて首を振るミーナ。皆、久方ぶりの酒と豪勢な食事を今か今かと皿とグラスを手に待ち望んでいるのだ。これ以上のお預けは暴動の原因になりかねない。

「じゃあ、乾杯ということ……皆さん、準備は良いですか?」

その言葉に皆が思い思いに注いだグラスを手に取る。大麦のソーダ、大人のブドウジュース等、年の若いウィッチ達は好きなジュースをコップに注いでいる。

ウィッチだけではない。整備兵や観測兵、衛生兵といった男や非

ウィッチの女性兵士まで、リヨン基地で苦楽を共にした仲間たち、それにアーヘンに駐屯する兵士やウィッチ達も皆集まり、ささやかな宴を楽しもうとしている。

「それじゃあ、『壁』の撃破と皆の未来、そして、カールスラントの未来を祝って……乾杯!!」

ハンナの合図で乾杯!!の声が基地に響きわたった。

「ねえねえ、リーネたちは明日帰っちゃうの?」

「はい。アメリカさんにはゆっくりしていいって言われてますけど、私達だけ休んでたら悪いから……」

「ええ。それに、あの子達、普段は生意気な癖に私たちがいなくなるとすぐに不安げになったり泣き出したりしているらしいので。執事や保母達にあまり苦勞は掛けたくはありませんわ」

「にしし、そうなんだ。いいお母さんしてるね、ペリーヌも、リーネも」「んまつ!?失礼な、私はまだそんな年ではありませんわ」

「ふふっ。そう言ってもらえると嬉しいです」

エーリカの言葉に対照的な返事を返すペリーヌとリーネ。

「それにしても、これだけの食事を私たちだけで消費しても良かったんですの?」

「本来はJG54の部隊が受け取るべきだったものだ。一か月もの間、一回だけの扶桑の臨時補給だけで凌いできたんだ。罰はあたらん」

「そう言ってもらえると嬉しいです。バルクホルン大尉」

「そう言いながらバルクホルンたちの下に歩み寄ってくるのはハンナ・ファイリーネ大尉。」

「これでも補給物資のほんの一部です。二、三日の食事ですから、まだ物資には余裕があるというか……ありすぎるといいうか……」

「はあ、とペリーヌがうなずく。ハンナが何故自分を見ているのかわからないといった顔だ。」

「クロステルマン中尉ですね。私はJG54の……いえ、今はJG1に所属するハンナ・ファイリーネ少佐です。ミーナ中佐からお話は伺っています」

そういつて差し出される手をペリーヌが握り返す。

「ガリア復興の為、自ら孤児院を運営されていると伺いました。ウィッチとしての責務の傍ら、さぞ苦勞なされていると思ひまして……」

「ペリーヌで。そんな事ありませんわ、フィリーネ大尉」

握った手を離し、貴族として自然と身に付いた気高くも、見るものを落ち着かせるような温和な笑みを浮かべてペリーヌが首をふる。

「子供たちの笑みや復興していく街を見ていれば、苦勞など感じることもありません。それに、ウィッチとしての責務と同じくらい、ガリアの復興に尽くす事は私にとって同じくらい重要な務めですわ。決して傍らなどではありません」

「……失礼しました。どうやら言葉に綾があつたようです。気を悪くなさらないでください」

いいえ、とんでもないですわ、とペリーヌが柔和に微笑み首を振る。まるで聖女だ。

扶桑に居る宮藤や501の仲間たちが見たら目を丸くするか、茶々を入れるか。

「ありがとうございます。それで、リヨン基地に駐屯していた我々第三飛行中隊は一旦解散という事になりましたので、ここにある物資をどうすればいいかとミーナ中佐とも相談していたのですが……。それで、もし迷惑でなければ、物資の一部をペリーヌさんの運営している孤児院へと寄付をするような形に出来ないかと……」

「えっ?」

思わずリーネが口を開く。

確かに、孤児院の経営は楽ではない。ガリアや世界各国からの寄付や協力によって何とか運営しているが、それでもまだ多くの物資が不足している状況だ。

「それは、助かりますが……そんな事、出来るんですの?」

ペリーヌも驚いたように目を見開く。確かに申し出は有り難い。だが。此処にある物資はあくまでカールスラント空軍のモノであり、それを民間に譲り渡すなど、様々な問題が生じるのではないか。

ハンナは笑みを浮かべて首を振った。

「元々、新カールスラントの方でもガリア復興に何か力になれないかという皇帝陛下の意向がありますし」

だが、カールスラントのウィッチ達や兵士たちも戦場に身を置いて  
いる以上、中々それに協力をすることが出来ずにいたのだ。そして、  
一旦この部隊が解散すれば、この豊富な物資も宙に浮く。

「それならば、いつそ話を上に通して復興に役立てそうなものや、お菓子や食料等をペリーヌさん達に寄付が出来ないかとミーナ中佐と相談していたんです」

「いいじゃん!!それ!!」

エーリカが声を上げる。

「それいいよ、うん。そうしたほうが良いって。ね、トウルデー」

「ああ……いや、だが、そんな事可能なのか、ファイリーネ……いや、ファイリーネ少佐」

「いつも通りファイリーネで良いですよ。ミーナ中佐も階級無しで呼んでいるのに」

「そうか……いや、それをするにしても、規則や手続きが……」

「こう見えて私、根回しは得意ですから。どうにかします」

自信ありげにほほ笑むハンナ。

今回の一連の事件も彼女の機転が無ければ解決しえなかった事だ。

それはハンナにとって、そう言った面でも自信を付けさせる出来事であった。

「ペリーヌさん!!良かったですね!!」

明るく弾むリーネの言葉に、ペリーヌが信じられないと言った顔で目を見開く。

「本当に……物資をいただけるんですの……?」

「ええ。子供たちにお土産を持って行かないと、落ち着いて食事もとれないでしょうから。安心してください。クロステルマン中尉。私達に任せてください」

自らを救い、心が折れそうになった部隊を鼓舞してくれた恩はこの程度で返しきれものではないが、素直にこの夜を楽しむための心の

重し位は取り払ってあげたいと思う。

「……ありがとうございます……ございます……」

ハンナの言葉にペリーヌがこくり、と頷く。

「にひひっ。よーし、ペリーヌ、リーネ。飲もうよ!!折角だから、カールスラントの大人のブドウジュースも飲んでみてよ。ガリアのよりは有名じゃないけど、新カールスラントでも美味しいのが作れるんだよ!!」

南リベリオン大陸では気候が一部ガリアのように大人のブドウジュース作りに適しており、加えてガリアから疎開したいくつかのシャトーも大人のブドウジュース造りに協力している。その為、新カールスラントもまた、新たな特産地として名前が売れ始めているのだ。

「ほら、トウルデーも、フィリーネも、久々なんだから飲もうよー」

そういつて年上のウィッチ達にグラスを渡していくハルトマン。皆を元気づける意味もあるのだろう。

「おいハルトマン、お前はまだ……」

「もう16だもん。問題無いよねー」

ぐ、とバルクホルンが言葉に詰まる。だが、風紀が、規律が。

そう言つて周りを見ると、既に酔っぱらった連中が騒いでいる。あ

あ、風紀が、規律が……。

「味見だけだぞ。後、ペリーヌとリーネには飲ませるな」

「それじゃあ意味ないじゃん、味見だけ、ね?」

「……舐めるだけだぞ」

そう言い、ため息をつく。

「それじゃ、乾杯だね!!」

エーリカがグラスを掲げるのに合わせ、皆がグラスを持ち上げる。楽しい時というのは短いものだ、だが、その記憶を糧に、苦しい戦いに身を投じることが出来る。

また、皆で笑いあうために。皆の笑顔を曇らせないために、生きて、再会するために。

乾杯つ!!と皆が声を上げ、グラスが軽やかな音を立てた。

「隊長。今まで、ありがとうございました」

ハンネがアンジェラにそう呟く。

新人としてJG54に配属されてから、幾度となく救われ、そして苦楽を共にしてきた敬愛するウィッチだ。見た目にそぐわず反骨心が強く、上官であろうが納得できなければ食って掛かるような生意気ともいえる部下を見捨てる事なく、一人前になるまで育ててくれたのは間違いなく目の前にいるアンジェラなのだ。

「ああ。本当に、苦勞をかけられたよ、お前には。うん。だが、誰よりも面倒を見た分、誰よりも信頼できるようになった。ああ。お前は良いウィッチだ。可愛い。最高だ」

……なのになんで、こんな感じなのだろうか。感傷とか感慨とか、そういったものを吹っ飛ばすくらいに目の前の上司の酒癖の悪さには辟易させられる。成程、今まで酒を口にしなかったのはそう言う訳か。弱いとか強いとか以前におかしい。酒を飲んで乱れる。酒乱だ。そう。

何故私はアンジェラ隊長に膝枕をされているのか。それは無理やりアンジェラ隊長が私を押し倒したからだ。何故逃げないか。隊長が私の頭を片手でがっちりとホールドして逃げられないからだ。その隊長はあいた手で大人のブドウジュースを瓶から直飲みしている。普段の凜々しい騎士然としたカールスラントのウィッチはそこにはいない。ただの酔っ払いだ。それも相当に質の悪い。

膝と腕の間に顔を押し付けられ、ハンナは只考える。どうしてこうなった。どうしてこうなったのか。

思い起こす。最初アンジェラは酒を飲むことを固辞していた。そんなアンジェラにやや強引に酒を勧めたのは誰か。

そう。私だ。

少しでも上官の肩の力をぬこうと、やや強引にアンジェラの飲んでいたジンジャーエールに大人のブドウジュースを混ぜたのがすべての発端だ。一口で顔を赤くしたアンジェラはジンジャーエールを飲み干すと、ハンネから瓶をひったくり、ラツパ飲みを始めた。その時

点でユーリとベレーナはいなくなっていた。子供の勘か、天性の危機察知能力の賜物か。

かくして、ハンネはアンジェラの強制膝枕ホールドという天国でもあり地獄を味わっている。柔らかいアンジェラの太腿の感触も、アンジェラの口から漏れてぽたぽた垂れてくる大人のブドウジュースのせいで台無しだ。

というか、私、まだ何も食べていない。大人のブドウジュースを一口二口飲んだだけだ。

「ハンネは最高のウィッチだ。私が教えてきたウィッチの中でも最高だ。ああ、勿論ベレーナもユーリも最高だ。ベレーナ、ユーリ……ん？」

アンジェラがきよろきよろとあたりを見渡す。

「ベレーナ、ユーリ……いないのか？」

「いませんね、探しに行きましょう。そうやって体を起こそうとするが。」

「まあいい」

よくない。

再度膝に顔を押し付けられる。今度は太腿の間に顔をうずめる形になる。

「私達は、『音楽隊』は最高のウィッチ隊だった。うん。いろんな部隊に居たが、こんなにいい部隊は滅多に無い。頼りになる副官に将来有望な部下達。皆勇敢で逞しい。ああ。お前達は最高のウイングガールだよ」

そういつてふ、とアンジェラの手の力が弱まる。

ん？と顔を上げると、アンジェラはこてん、とその場に横になった。すうすう、と、普段からは想像もつかない可愛らしい寝息を立てて目を瞑っている。どうやら、潰れたらしい。

はあ、とため息をついてハンネが起き上がる。普段の凜とした態度から誤解しがちだが、アンジェラはかなり童顔だ。幸せそうに夢の世界に旅立っている顔は、まるで新カールスラントに残してきた妹のよう、あどけなくて無邪気に見えた。



「全く……」

呆れた様に肩をすくめ、ハンナが羽織っていた上着をアンジエラにかぶせる。

「貴女も、最高のウイングリーダーでしたよ。アンジエラ」

そういうとハンネがその場を後にする。食事がまだだ。お腹がすいたしまだまだ飲み足りない。

とっとと逃げ出したベレーナ達を捕まえて相手をさせよう。ついでにアンジエラの言葉も伝えてやらなくてはいけない。今日が『音楽隊』として迎える最後の夜なのだ。

そつ。と、ポケットに手突つ込む。手先の器用な整備兵が作ってくれた揃いのパーソナルマークのワッペンだ。アンジエラには渡したが、残りの二人にも渡さなくてはいけない。

ブレーメンの音楽隊。あの物語の主人公である動物達は、結局目指す町へとたどり着かなかった。それでも、自らの居場所を自らの手で勝ち取ったのだ。

きつとアンジエラはウィッチである間に故郷を自らの手で取り戻すことは出来ないだろう。自分も解らない。或いはベレーナやユーリなら。だが、それでも、いつかはカールスラントを奪還するために、その為に来る場所を私達は見つけることが出来る。

ならば、同じ屋敷に住まなくとも、私達は一つの『音楽隊』なのだ。

「ハギ、飲んでるか？」

「おかげさまで。ていうか、どうして止めてくれないんですか。あたし、これ、苦手なんですよ」

空になった大人のブドウジュースのボトルを抱きかかえ、今にも倒れそうな顔をして蹲っている信乃が恨めし気な顔で徹子を見上げる。『壁』の撃破に多大な功績をあげた信乃は、乾杯と同時に手にしたグラスに次々と大人のブドウジュースやら麦で作った炭酸ジュースが注がれた。ユーリやベレーナは自分たちは飲まないのに、わざわざ高そうなのを持ってきて信乃のグラスに注いでくる。ユーリが『やっぱりカールスラントに来てよ』という、たしなめるはずのベレーナも『そ

うですよ!!帰化すればいいんですよ!!シノ・H・レシユケになりましょう!!』とか言い出しやがる始末。結局、ハンネが二人を担ぎ上げてどこかに持つていくまで、二人には大人のブドウジュースを大量に飲まされた。それだけではない、アルマも、ハンネも、皆次々にグラスに大人のブドウジュースを注ぎ込んでくる。

最高で、最低で、思わず胃の中のものに戻ってきそうだ。

「それは楽しい思いをしたな。良かったじゃないか。皆に認められて」

「どこがです」

そういつて頭をなでてくる徹子は顔をやや赤らめた程度で言動も比較的しっかりしている。

「あたしは別に認められたいとかそんなんじゃないです。そもそもあたしはとつくに認められますよ。一部では」

そう。あたしはグレートエースじゃない。だけど、それなりに頑張っている。

頑張ってるんですよ。いや本当に。偵察とか囷とかで。

「そうだな。だが、お前を一番認めているのはオレだ」

「は?酔ってるんですか?酔ってるんですね」

わしわしと頭を撫でられ、信乃が胡乱気に眉を顰める。

「何だ、オレに認められるのは嫌か?」

「嫌だなんて一言も言っていないじゃないですか。そもそも、あたしが病室に居ても、一度もお見舞いに来なかったくせに」

ユーリやベレーナ、アルマですらあたしの顔を見に来てくれたのに、この人ときたら。

「一応見にはいったぞ。寝てたから起こさなかったただけだ」

「はあ?人の寝顔を見て何してたんですか?」

「何もしない。わざわざ起こして疲れさせるような真似をしたくなかったただけだ」

「……」

そう言われると何も言えない。新藤に土下座していた夢も黙っておこう。

「だから、今ゆっくり話そうと思ってな」

そういうと徹子が信乃の隣に座る。

「……どうだ？そろそろ見つかったか？お前の……」

「飛ぶ理由……ですか？」

ああ、と徹子がうなづく。

どうしてこの人は、こういう時に限ってそういう事を聞いてくるのか。

あたしが空を飛ぶ理由。

何故、自分は空を飛ぶのか。

幾度となく自分に問いかける問い。

答えが出ない、出したと思っただらあっさりと碎けていくその答え。

顔を上げると、皆が楽しそうな笑顔を浮かべている。

彼女たちにもあるのだろうか。それが。

笑顔の奥で、押し殺した何かをかかえながら、それでも飛んでいるのだろうか。

でも、それはあたしと何が違うのか。

自分だって笑う時は笑うし、泣くときは泣く。

いろいろあったが、それでも飛ぶときは飛ぶし、飛べない時は飛べないのだ。

飛ぶのに理由があるのか。

その問いは、あたしにとって生きること理由を求めるのに等しい。

ブリタニアの山岳家はこういった。

そこに山があるからだ。と。

そうだ。

その通りだ。

あたしが空を飛ぶ理由。

理由なんて、無い。

そう呟くと、徹子が笑う。

そうだな、それも1つの答えだ。

あたしは、ただ空を飛びたいだけなんだ。

そこに理由なんて無くてもいい。

例え、それが『散り』行く刹那の花火だとしても。

若のように、多くの偉大なエース達のように、大きな炎になる事が出来ない一瞬の光だとしても。

燃え尽きる最後の一瞬まで、散り散りと輝く線香花火のように、火花を灯し続ける。

きつとそれが、今まで繋いできた希望の光を、後に続く誰かにつながるような。

小さな希望の灯を、絶やすことなく繋いでいく事になるだろうか。

だから、あたしは、空を飛ぶ為に空を飛ぶんだ。

あたしはきつと、燃え尽きるまで、ずっと。

ストライクウィッチーズ 二次創作

『チリチリするの』

おまけ ― 違う、そうじゃない―

「ん、んう〜」

船室の窓から覗く眩しい朝の光、そして外から響く起床ラッパ。

「ん!?!」

がぼり、と萩谷信乃が飛び起きる。ぱつと立ちあがり布団を畳み、地面に脱ぎ捨てられていた飛行服に袖を通し、手櫛で髪を整えヘアピンで前髪を止めようと髪をまとめかけて。

口に加えていたヘアピンを手に取る。適当にそのまま髪に挿すと、ぼりぼり、と頭を搔いた。

「……………いいんですよね、今日は」

特例で朝の整列への不参加を許されていたが、10を少し超えた年齢の頃には既に軍で生活をしていた身、部屋を出ないにしろここまでの動きは脊髄反射的に行ってしまうのだ。

脱力してベッドに座り込み、はあ、とため息をつく。

「それにしても……………」

二段ベッドの上に本来寝ているはずの上官……………一番機の若本徹子が部屋の床で一升瓶を抱えて爆睡している姿を見下ろして信乃は大きくため息をついた。

頭が痛い。気持ち悪い。

そう言えば昨日はどうしたんだっけ。確か、瑞鶴に戻ってから報告書の存在を思い出し、ここ数週間の記憶を頼りに机に向かい、日が暮れてからようやく報告書を提出し(その後滅茶苦茶査問された)、遅い夜食をとっていたら日付が変わったのでさてようやく寝ようとした矢先、『明日は休みだ!!吐くまで飲むぞ』とかほざきながら一升瓶を両手に抱えた徹子が部屋に戻ってきて、無理やりにつき合わされて。ああ、そうだ。

信乃ははあ、とため息をつく。何が悲しくてプライベートでもこのすちやらかな上官と一緒にいなきやいけないのか。

勿論、嫌いではない。

死ねという命令以外なら何でもするくらいには信頼もしているし、

自分では到底及ばないほどの空戦技術や指揮能力は尊敬すらしている。

しかし。

四六時中空で一緒に居るのにプライベートでも一緒では、流石にうんざりする。どんなに仲がいい恋人同士でもそこまで一緒に居たりはしないはずだ。

仕事は仕事、非番は非番。徹子は尊敬する上官で、空戦の師匠で、面倒な姉であっても、友人では決してない。

というわけで、久方ぶりのまともな睡眠時間を泥酔という名の沼に叩き落としてくれたこの上官とは今日一日関わり合わない。ただでさえここ一ヶ月近く、朝から寝るまで顔を突き合わせてきたのだ。気分転換しなければ。まず、この汗臭い飛行服から私服に着替え、若に見つかる前に半舷上陸し、年相応のウインドウシヨップとしやれこむのだ。

そう、年相応の少女ならウインドウシヨップピングなのだ。好きな店をはしごして回り、お昼を食べて帰る。洋服やアクセサリー。おしゃれなカフェなんかに行けばそれっぽいのだ。

……そう、決して窓を買いに行くわけではないのだ。よくもまあ真顔でとんでもない事を吹き込んでくれましたね若。あの屈辱は決して忘れませんよ。他の小隊のウィッチのいたたまれないような視線。死にたいくらい恥ずかしい目にあっただんですからね。

そうと決まれば早速若をしばく……ではなく、出かけなければ。

ベッドから立ち上がり、年齢通りのスレンダーさと、体を鍛えた者が持ちうるしなやかさでうーん、と大きく背伸びをする。

そしてそつと部屋を出ようと足を踏み出した。

だが、何かに足を取られてその場に転んだ。

「ぐえっ」

潰れた蛙のような声を上げる信乃。ころころころ、と、足元を信乃の踏んだそれが転がっていく。

昨日の夜、徹子に渡されて自分が空にした一升瓶だった。

もうやだ。トシゴロの女の子が一升瓶？このまま洒落なカフェに

入ったらどんな顔をされるか。

ああ。もうやだ。外に出たくない。気持ち悪い。汗臭い。お風呂入りたい。頭痛い、寝たい。

床にうつぶせになったまま、信乃の心は既に折れていた。

それもこれも、全部この一番機の子だ。

ちらり、と腹ばいになったまま首だけを巡らせて横を見る。憎たらしい程幸せそうに寝息を立てている徹子。このまま熟睡させてなるものか。同じ苦しみを味あわせてやる。

「若、朝ですよ」

信乃が徹子の肩をゆする。

「んあ……ぐう」

幸せそうな顔で夢から覚めない徹子を見て信乃がむか、とした表情を浮かべる。

人を散々付き合わせておいて、そのせいでこっちは朝から最悪の気分だというのに、この一番機ときたら……。

体を起こし、徹子の上に馬乗りになり、先程とは打って変わった激しい勢いで肩をゆする。

「若!!朝ですよ!!起きてください!!若っ!!」

「ん……るさい……なあ……」

がつくんがつくと頭を振りながらも、次の瞬間、ごろりと寝返りをうった徹子の踵が信乃のみぞおちに叩き込まれる。

「っっ!?!」

其の場に蹲り、悶絶する信乃。ヤバい、出そう。今ので昨日飲んだのが一気に戻ってきそう。

よろよろと立ちあがり、トイレに向かって駆け出す信乃。

「ん……ハギい……ふへへ、なんだあ、今日は甘えん坊だなあ……」

一方、徹子は一升瓶を抱きかかえながら幸せそうな笑みを浮かべていた。

しばらくして、口を抑えながら涙目の信乃が戻ってくる。据わった目で徹子を見下ろし、足元に転がる一升瓶を拾い上げた。

「よくもやってくれましたね、この馬鹿一番……」

「なあハギ、何か凄え頭が痛いんだけど」

「二日酔いでしよう、あれだけ飲んだんですから」

「そうかあ？何かそれとは違う感じの、思いつきりぶん殴られたような……」

「二日酔いですよ」

「うーん……ま、それもそうだな。ハギが言うなら間違いないか」

頭をさすりながら徹子が呻く。

「なあハギ」

「今日は非番です。お互い自分の時間を過ごしましょう」

とは言え、胃の中身を吐き出して、ついでにストレスも吐き出せたので信乃の気分はだいぶ持ち直していた。そう、余り時間はないが、少しくらいジエノヴァの町をぶらぶらしてもいいか、と思えるくらいには。

私服の上からコートを羽織る。私服はこちらで知り合ったウィッチが送ってくれたものだ。服の事は良く解らないと手紙に書いたら、頭からつま先までコーディネートした私服一式を誕生日に送ってくれたのだ。

「久々に着ましたね、これも」

時折手紙のやり取りがある背の高いオラーシャウィッチに思いをはせながら、コートのボタンを留め終える。

「ふむ」

姿見で自分の姿を確認する。まあまあだろうか。白いコートは汚れが目立ちそうだなあ、という感想はお洒落に興味が無い証拠のようだが、何となく普段とは違う格好をするというのはわくわくする。まるで普通のトシゴロの少女の様だ。これで町を歩けば軍人だと、ウィッチだと気が付くものは少ないだろう。

「顔がニヤけてんで、ハギ」

「いいじゃないですか。非番の時くらいニヤけようが浮かれようが、あたしの勝手です」

振りかえらず信乃が答える。



「ボタン、掛け違えてるぞ」

「嘘?」

慌てて姿見でボタンを確認する。だが、コートもブラウスも、ボタンはきちんと止まっている。

「……だましましたね」

くつくつく、と笑う徹子に信乃は肩を怒らせる。

「兎に角、あたしは町に行くんです。ウインドウショッピングをしてカフェでコーヒーを飲んで、お洒落で平凡な一日を過ごすんです」

「へいへい」

「ついてこないでくださいよ」

「へいへい」

「本当にですよ」

「へいへい」

「解つてます? 本当にですからね?」

「へいへい」

何度も念を押して信乃は部屋を出て行った。徹子は扉が閉まると、見るともなく見ていた航空教本を放り投げ、ごろりと二段ベッドの上から上半身を起こし、さも当然のように呟く。

「……じゃあ、行くか」

扶桑の格言にもある。

『押すなよ!!絶対に押すなよ!!』

その意味は、押せ、の合図だ。

そして。

結論から言えば、信乃の願いはかなえられなかった。

部屋から出るなり伊予と出くわし、出会い頭に先制パンチのような一声を食らう事になる。

「ハギちゃん、少しいいですか?ハンガーに来て欲しいんですが」

につこり、とほほ笑む伊予。休日終了のお知らせ。ああ、と信乃の顔に絶望がよぎる。同い年だが、れっきとした上官の命令だ。

「嫌だっけいったらどうします?」

「折角届いたシノちゃんの新型ユニット、若本中尉に」

「行きます」

零式も雷電も壊してしまった。今の信乃には自分のユニットが無い。これでは菅野の事をデストロイヤーなどからかえない。からかうと殴られるのが目に見えているので、そもそもそんな事間違っても言わないが。

「そんな急がなくても、着替えてきたらどうですか？」

「そんなことしたら若に感づかれます」

「誰に感づかれるって？」

「そりゃあ、若……って、若!?!」

何故か外出用の士官用コートを羽織った徹子の問いに、信乃が目を丸くする。

「ていうか、この人、やっぱりついてくる気だったんですね。」

「ついてくるなって言ったのに」

「オレもたまたま一人で散歩がしたくなっただけだ」

しれっと言い放つ徹子。

「じゃあ、ご自由に。あたしはこれから『新型』ユニットの受領に行くので」

「何？」

新型、を強調して言い放つ信乃に徹子の顔が驚きに見開かれる。

「……伊予」

「し、仕方ないじゃないですか!!若本中尉のユニットはまだ大丈夫ですし!!」

「オレの予備と交換だ、シノ」

「嫌ですよ、あの21型。まるで若の頭の中みたいな色じゃないですか」

「撃墜マークだ!!」

撃墜マークを張り付けた徹子の予備の零戦21型は、『ロサ・パイ』と外国のウィッチから呼ばれている。桜を模した撃墜マークが多すぎて、遠目からでは機体をピンクに塗ったように見えるからだ。

「ハギちゃんにぜひ使って欲しいそうです。というか、試作機で……」  
「嫌です」

また試製。ついこの前それで痛い目を見たばかりだというのは。何であたしなの？

「最後まで言わせてください!!確かに試作機です。試作機ですが、テストは十分にして間もなく量産されるユニットです。量産型と殆ど変わりないですから、安心してください」

「むう……そうですか」

「評判は良いですよ。きっと気に入ると思います。ハギちゃんの為に試製機が一番いい奴をわざわざ新藤少佐が本国に掛け合つて引つ張つてきてくれたんですから」

そう言われると少し安心する。というか、格好いいかも。最新機材を誰よりも早く使えるという事だ。そう思うと少し気分が上向いてくる。

「じゃあ、見にいきましょうか、あたしの可愛い新型機を」

ふふん、と徹子に勝ち誇った笑みを浮かべ、スキップするようにハンガーへ向かって歩く信乃。

「……お前のいったこと、本当か？」

少し後ろを歩きながら、徹子が伊予に尋ねる。

「ええ、概ね、本当です」

そして。

「……くそう、くそう……」

コートが汚れるのも構わず、信乃はハンガーでがつくりと膝をついていた。その後ろでは、徹子が必死に笑いをこらえている。

「これが扶桑の新型、『零式54型』です!!金星魔導エンジンを換装して出力を強化し、運動性を保つたまま限界性能を引き上げた零式の完成形!!量産機は64型になるので、54型を使うウィッチは扶桑皇国の中でもハギちゃんだけです。まさに専用機ですね!!」

「違う、違うんですよ!!」

信乃が怒鳴る。

「そうじゃなくてももっとこう根本的なのところが!!どうして零式にこだわるんですか!!紫電改とか雷電とか、名前が違うだけでもかなりニューフェイス感があるのに、零式!!いつまでたっても零式!!54と

か64型とかどこまで引つ張れば気が済むんですか!!」

信乃の大声に伊予や徹子だけではなく、ハンガーに居た整備兵やウィッチ達も思わずくすくすと笑いだす。

「ああもう!!何笑ってるんですか!!」



さを秘めた青く深い海に思いを馳せていた。この海の間ごうは故郷と繋がり、そして、憎きネウロイの拠点にもつながっていると、複雑な思いに駆られる。

・といった趣旨の言葉を僚機に言うと『この海の間ごうはリベリオンですよ』と小馬鹿にしたような返事が返っていた。素直かつ合理的な思考は僚機の美徳だが、いささか無粋なきらいがある。若いうちに詩や小説を嗜み、感性を豊かにさせた方が良いと思う。誰か彼女に勧められそうな書籍を教えて欲しいものだ。

#### ○珍しい昼食

本日の任務は●●●●●よりの偵察。特に変わったことは無く、先日までの戦闘続きの空とは打って変わって静かな任務となった。それよりも驚いたのは、昼食に出たカレーである。普段は野菜が多めで肉が入っているものが、本日はえびやイカ、貝などが沢山入っており、味もそのせいか魚介の風味が効いているように感じた。聞いてみると、主計課の仕入れ担当が木曜日の食材を一日間違えて注文したから急遽そうなったとのこと。最初は面食らったが、慣れてくるとそれなりに美味しい。これを機に、瑞鶴の食事にこの変わったカレーが加わる事を願う。

#### ○月×日

#### ○六虫

・本日、甲板で行われていた若手の訓練を覗いてみると何やら不思議な事をしていたので話を聞いてみた。ボールを使うゲームで、体を動かすのならたまには趣向を変えてみようという事らしい。六虫、というゲームを知っているだろうか。自分は知らなかったので、ルールを聞いてみた。

・まず、同人数でチームを作る。

・攻守に分かれ、守備側は全員が入れるくらいの大きさの円形の陣地の中に入る。

・その陣地を二か所、数十メートル程離れたところに用意する。

・攻撃側は二人、その陣地の上でボールを投げ合い、ボールを取るたび、半虫、一虫、一虫半と数を数える。六虫までパスが続いたら、防御の陣地にいる防御側の者にボールを当てても良い。当てられたらその場で脱落となる。

・パスの間に陣地を出たものがいたらボールを当てても良い。当然、当てられれば脱落となる。

・防御側はそのボールを奪うか弾く。奪ったら速やかに投げる。もしそのままボールを奪い続けたら反則として脱落となる。

・ボールを弾くか、奪って投げたら防御側は速やかに反対側の陣地へと走る。攻撃側の者はそのボールを逃がっている者に当てる。当てられたら脱落。

・防御側が投げられたボールをキャッチして再度投げるのは反則とならない。

・反対側の陣地に入った防御側の者にはボールは当ててはならない。

・そこから出たら当ててもいい。

・陣地を一回移動すると防御側の半虫となり、誰か一人でも六虫まで陣地を移動すれば防御側の勝利となる。六虫に至らず全員が脱落したら攻撃側の勝利である。

・なお、ボールが当たらなければその間何往復しても構わない。それぞれの防御側の陣地に人が分散した場合はどちらでボールを投げてても構わない。

・攻撃側のコツとしては、陣地ギリギリでボールを投げ合う事でボールを奪おうとするウィッチの数を減らしたり、誤って陣地から出るのを誘う事。

・以上が彼女たちの行っていた六虫のルールである。ボールを追いかけていた●●飛曹長が誤って瑞鶴から落下した以外は特に問題の無い一日だった。

●●小隊、皆極めて健康。

○訓練中の反省

本日の午前中、訓練に熱中するあまりに甲板から落下してしまっ

た。幸いにして怪我はなかったものの、上官からの叱責と訓練器具を取り上げられるという事態になってしまった。自分の不注意であり、共に訓練をしていた仲間たちには申し訳なく思う。どうにか新たな訓練器具を入手したいと思うが、暫くの間は難しいだろう。

○月×日

1. 本日はサトウルヌス祭の準備という事で、私達若手ウィッチの何人かがジェノヴァの街でその準備のための買い物をするになりました。久々のジェノヴァの街はサトウルヌス祭への準備で普段より華やかで、歩いているだけで気分が楽しくなりました。ロマーニヤの人たちはサトウルヌス祭は家族で過ごすことが多いとは買い出しに入ったお店の人の話、日本の正月みたいなものでしょうか。

無事任務を終えると、一緒に買い出しに行つた●●飛曹長がついでにカフェに寄つてコーヒーでも飲まないかと提案してきましたが、私達は曲がりなりにも任務中。そういう事は良くないと周囲の者も反対し、速やかに帰投することにしました。我々は扶桑の代表。慎んだ行動をとることが大事だという事を皆心に改めて刻んだ一日でした。

○ロマーニヤのコーヒーについて

ロマーニヤのコーヒーというのは扶桑ともカールスラントとも違い、ミルクを入れるような小さなカップに濃縮した苦いコーヒーを少量入れてたしなむものというのは知識では知っていたが、いざ飲んでみると本当にこんな苦いのかと驚かされたが、コーヒーそのものの味を楽しむのがロマーニヤ流なのだろう。

そう思っていたら、カフェの店員が『そのままじゃ苦いから、砂糖を沢山入れて飲むのが普通だよ』と教えてくれた。半分くらい飲んでしまったので早く言つてくださいよと思つたが、試しに砂糖を大目にいれると確かに美味しい。ちなみに、カップの底に残つたコーヒーの沁みた砂糖をお菓子のように食べるのもまたロマーニヤ流の楽しみだという。今度カフェに立ち寄つた際には最初から砂糖をたっぷり入れてロマーニヤの味を楽しんでみようと思う。



○月×日

後はいたちがひさしぶりに扶桑のそうめんを作ってくれた。ただゆでただけじゃなくて、しょうがやネギもがんばって用意したようだ。最近はらの調子がよくなかったからするする食べれるそうめんは嬉しかったけど、食べすぎぎてやっぱりはらの調子がわるい。次から気をつけよう。

○今日の昼食について

先日ふらっと戻ってきた●●飛曹長が腹の調子が悪いと言っていたので消化の良い扶桑の料理は無いかと主計課に相談したら、ややあつて倉庫に素麺が残っているといった。季節外れではあるが久々の素麺。それは良いと自分達で作る事を申し出たが、主計課の●●軍曹は生憎賞味期限が一年前に切れているから破棄したほうが良いと断ってきた。だけど素麺は数年熟成させたものが美味しいという話を聞いた事があつたので、折角だから作ろうと申し出た。育ちの良い●●中尉が止めた方が良いというが、説得して作った。予想通り味に問題は無かったが、●●飛曹長が食べ終わった後少し腹が痛いと言い出した。だが、かなりの量を食べていた上、他の者に影響がない事から●●飛曹長の食べ過ぎなのだろう。腹八文目とは扶桑の格言だ。自分も重々心にとめておこうと思う。

1. 本日、●●飛曹長の提案で昼食に素麺を作る事になりました。私が薬味を仕入れて厨房に行くと主計課の●●軍曹と●●飛曹長がなにやら揉めていました。

話を聞くと、どうやら素麺の賞味期限が切れていたとのこと。廃棄を主張しましたが、『素麺は熟成させると美味しくなるんです、絶対大丈夫です』と●●飛曹長が強硬に主張するので仕方なく作ってみることに。変な味がしたら出すのは止めようと言ってみたものの、食べてみると普通に美味しくいただけました。考えてみれば、まだ食べられるものを粗末にするのは前線で戦う仲間たちに対して失礼な事で、自分の見識の無さを改めて恥じる事になりました。

2. 追記。 ●●飛曹長と ●●少佐が腹痛を訴えました。食中毒の疑いがあるとの事。あの二人は一人で3人前ほど食べていたので、そのせいだと思いますが、主犯である ●●飛曹長には何らかの処罰が下る事になりそうです。私は素直に調理に至る経緯を説明したので、おとがめはなさそうです。

○月×日

○再度の反省

先日の素麺テロ事件により自分と ●●中尉に課せられていた毎朝の瑞鶴の甲板ランニングから、ようやく今日になって解放された。今後このような事が無いように気を付けようと思う。

○雪

・ロマーニヤは冬でも暖かい。ジェノヴァもまた同様で、冬でも気温が氷点下に下がる事は稀である。扶桑にいた時に比べれば格段に冬は過ごしやすい。だが、ここ数日、ジェノヴァではかなり気温が冷え込み、温暖なロマーニヤ気候になれていた我が遣欧艦隊のウィッチ達には難儀な日が続く事となった。

・特に驚いたのは雪である。歴史的な建造物が多く残るジェノヴァの街並に雪が降る光景は中々に幻想的で、皆寒さも忘れ甲板に出てその光景に見入っていた。この程度の雪は積もることは無いので、後々の雪掻きの心配は無いのもまた、安心して雪の美しさに見入る事が出来た理由であろう。

・こんな天気でも ●●飛曹長と ●●中尉は元気に朝から甲板を走っていた。最近訓練に目覚めたのは、理由を付けては訓練をさぼろうとする ●●飛曹長にしては良い心がけで、今後とも続けて欲しいものだ。

1. 雪の中走るの辛いです。

○月×日





番外編　こんな事もあったかもしれない、そんな話  
番外編　2. シュニツク・シュナツク・シュヌツク

○月×日

○ガリア共和国、リヨン臨時基地の●●●●●●●●●●の●●●●●●となつて大分日が経った。

・基地の司令代理である●●●●●●大尉や戦闘隊長の●●●●●●中尉とのやり取りも大分慣れ、互いに胸襟を割って話すようになったと思う。

・一方であるが、部隊の隊員達……空で自分の僚機になるウィツチ達との交流は、話す機会も少ないせいもあるが、自分としては物足りない。上の方での作戦行動のすり合わせに時間を取られていたものもあるが、●●●●●●飛曹長がそういった事には積極的なので任せきりになっていた節がある。いざという時に大切なのは信頼関係だ。時間を見つけて彼女達とも交流が出来るよう時間を取ろうと思う。

↳遣欧艦隊リヨン支援日誌より抜粋

「準備は良いですか、ユーリ」

「うん、いつでもいいよ」

互いに向き合い、口を開く信乃とユーリ。その口調はのんびりとしているように感じるが、二人の目は真剣だ。まるでさながら早撃ちを競う西部劇の主人公たちのように、チリチリとした緊張感を漂わせている。

「ごくり、とそれを見ているベレーナが唾を飲む。

「じゃあ、言った通りに」

「うん」

そして、次の瞬間、互いに右腕を後ろに引く。ブーツが地面を踏みしめ、同時に二人が口を開いた。

「シュニツク、シュナツク、シュヌツク!!」

徹子が談話室の部屋の扉を開けると、そこには見慣れたウィツチ達と見慣れぬ状況。

今にも拳を突き出しそうな勢いで互いに向き合う信乃とユーリ、少し離れて腰掛けているベレーナ。

「……何してるんだ、ハギ」

「若。気が散ります。どっか行ってください」

「ううー!!また上手くいかなかった!!」

じろり、と談話室に入ってきた徹子を睨む信乃と、悔しそうにおでこを摩るユーリ。

「談話室に入っただけでそんな顔される意味が解らん。ベレーナ」

「は、はい」

「コーヒーと説明」

「はいっ!!」

その言葉に慌ててベレーナがソファから立ちあがる。

「若、あまり他の部隊のウィッチを脅かさないでください。扶桑のウィッチが若みたいなのばかりだっと思ってられます」

「脅してなんかしてねえよ」

ぎろり、と信乃を睨む徹子。いや、実際は睨んでいるわけではないが、鋭い目つきのせいで知らない者が見れば睨んでいるようにしか見えない。

「はあ……若はもつと自分の立ち振る舞いを客観的に見るべきです」

「どういう意味だ。オレ程紳士的に振舞っている奴はそういないぞ」

「そのせいで逆に怖いんです」

昔はやんちゃな近所の不良といった感じだったのが、今や任侠の若頭だ。落ち着きを身に着けた分、威圧感を増している。

「じゃあどうすればいいんだ？ 諄子みたいにもニコニコしてればいいのか？」

「……それはそれで不気味ですね」

信乃の言葉に肩をすくめながら、徹子が改めて目の前の光景に目を向ける。

談話室の机を挟んで、信乃とユーリが向き合っている。机の上には調理場からくすねてきたのか、大きな鍋の蓋と、怪我をしないように布でぐるぐる巻きにしてある棒が置いてある。

「……いや本当に、何してるんだ、ハギ」

「見てわかりませんか？」

「わからないから聞いているんだ」

アホな事をしてしているのは気配で解るが、どれだけアホなことをしているかまでは良く解らない。ただ、アホな事なのは良く解る。

「あのね、しゅばってやる奴の特訓なんだ」

その言葉に改めて机の上のモノと、信乃とユーリを見比べる。

「……いや、やっぱり解らん」

「はあ。若は察しが悪いですね」

呆れたような声で信乃が肩をすくめる。

「ちよつと待て。何でそんな残念そうな目でオレを見る。どう考えてもその目はオレがお前達に向けるものだろ？」

理不尽にもほどがある言葉に徹子が口を開いた。

「はあ……じゃあ、少し見ててください。ユーリ、もう一回行きますよ」

「うん!!」

頷くユーリと再び向き直り、手を後ろに引く信乃。

「シユニツク!シユナツク!シユヌツク!」

同時に叫び、腕を前に出す。信乃はグー(Stein)、ユーリはパー(Papier)だ。

「えいっ!!」

「甘いです!!」

ユーリが素早く棒を手にとって信乃に振り降ろすが、それよりも先に信乃が手にした鍋の蓋でそれを横へと受け流す。

さらに掛け声をかけて再度手を出す。

信乃がチヨキ(Schere)、ユーリがパー(Papier)。

慌ててユーリが蓋を手取るが、それより先に信乃がユーリの頭にぽこん、と棒を振り降ろす。

「あうっ!!」

「まだまだですね、ユーリ」

ふふん、と笑みを浮かべる信乃。

これでわかりましたよね、と言わんばかりの顔をしている二人の前に、徹子はため息をつく。

「……楽しそうだな、お前ら」

「遊んでなんかいません。特訓です。馬鹿なんですか？」

「馬鹿はお前だ」

何処をどう見ても叩いて守ってジャンケンポンド。扶桑皇国に伝統的に伝わる遊びだ。

「さつきからずっとやってるんです。ユーリが勝つまで終わらないみたいです」

「やっぱりがつとり遊んでるじゃねえか」

「ふふん。甘いですね、若」

ソファに並んで座る徹子とベレーナに信乃がちつつ、と指を振る。ドヤ顔も相まって正直ちよつとウザい。

「いいですか、これは只の叩いて守ってジャンケンポンドじゃありません。受ける方は蓋を斜めにして、相手の攻撃を受け流すんです。反射神経と咄嗟にシールドを張る角度。両方が鍛えられる、あたしの考えた極めて合理的な練習方法。です」

「……」

「ふふん。驚いて声も出ませんか、若」

「……すまん。馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、ここまでだったとは……」

可哀想な者を見る目で頭を抱える徹子を見て信乃が『な!?!』と声を上げる。

「え?これ特訓じゃないの?」

「特訓ですよ、ユーリ。あたしの知る限り、これが最も戦闘中のシールドの受け流しに近い感覚です」

「叩いて守ってジャンケンポンド的な感覚でシールドを張ってたのか、お前」

それはそれで逆に凄い。天才と馬鹿は紙一重というが、もし後者なら今後僚機を組むにあたって非常に不安になってくる衝撃の事実だ。「でも、シノさんは凄いですよ。さつきから2時間くらいやってます



けど、一回もユーリに負けてませんから」

「……凄えな」

こんなアホな事を2時間もやってたのか。というか、途中でユーリかベレーナも疑問に思わなかったのだろうか。

「でも、何となくしゅばってやる感覚がつかめてきた気がするし、間違いじゃないような気も……」

「間違いだと思うぞ」

えー？と抗議の声を上げるユーリと信乃を無視して徹子がコーヒーに口を付ける。徹子の好みに合わせて砂糖とミルクを程よく混ぜた味。コーヒーが飲みたいと言うと黙ってカップと代用コーヒーの入った瓶を渡してくる信乃とは雲泥の差ともいえる心遣い。

もう信乃を置いてベレーナを連れて帰った方が良いような気がしてきた。

「はあ、これだから若は」

だが、信乃は徹子の言葉に肩をすくめて見せる。

「いいですか？シールドでの受け流しに大事なものは『攻撃を防ぐ』という咄嗟の動きを、『攻撃を受け流す』動きに変える事です。シールドを張る動きというのは頭じゃなくて体で覚えるものですから、どういう角度なら敵の攻撃を受け流せるかというのを咄嗟に判断するには理屈じゃなくてうんざりする位の反復で、体に叩き込まなくては意味がありません」

それっぽい事を言いだした信乃の言葉に、む？と徹子が思わず耳を傾ける。

「理屈っぽい若には解らないかもしれないかもしれませんが、体の動きというのはそういう事です。骨の髄までしみこんだ体の癖というのは容易に変える事は出来ないからこそ、最初に最適な動きを覚える必要があります。あとはそれを何度も繰り返すことで、自然とそれが身についてくるんです」

おおー。とユーリが目を輝かせる。

「……良く解らん」

「若ほど才能のあるウィッチには必要のない芸当ですから、当然です」

シールドの角度を調整してネウロイの攻撃を受け流すという芸当が出来るウィッチは意外と少ない。欧州の激戦区を生き残れるような歴戦のウィッチはそんなことしなくてもネウロイのレーザーを防げるような魔法力の高いウィッチが殆どで、それ以外のウィッチは受け流すような技を身に着ける前にネウロイに落とされる。

当然徹子も前者であり、シールドを張るような状況になる前に奇襲をかけて敵を殲滅する戦闘スタイルを取る徹子がシールドを張ることなど滅多に無い。そうなる前に戦況を終わらせるのが徹子の戦い方だ。

それに比べると、信乃は高くない魔力を固有魔法でカバーしつつ、同時にシールドや回避技術を磨き上げて生き残ってきたウィッチだ。「だけど、あたしみたいな平凡なウィッチにとっては、これは何よりも必要な能力なんです」

信乃だけに限らず、身体能力や魔法力が劣るウィッチが生き残るためには、そういった努力が必要不可欠だ。

一撃離脱戦術を生み出し、多くのウィッチ達にそれを指導し、『先生』と慕われるカールスラントのエディータ・ロスマン軍曹も体力的には他のウィッチ達に劣っていたという。だが、どこかが劣っているのであれば、その分努力や研究を重ねて補う『何か』を身に着ければいい。

ロスマン軍曹が編み出した一撃離脱戦法も、ジェーン・S・サッチ少佐の生み出したサッチ・ウィーブも、そうしたウィッチ達はどうやって戦い、生き残るか、試行錯誤した結果生まれてきたものである。そして、そういった一つの国のウィッチの戦術すら変えてしまうような発想や発案ではないにしろ、シールドに関しての経験値なら、信乃も一家言持っているといえる。

多重シールドを展開できるパトリシア・シエイド中尉やフランチェスカ・ルツキー二少尉、強力なシールドで敵の攻撃を完全に相殺できる宮藤芳佳軍曹のような一握りのウィッチとは異なり、一枚の脆弱なシールドをいかに鉄壁の守りにするか。そのための技術や情報を柔軟に吸収、発展させ、状況に応じて使い分ける。

その事に関して、信乃ほど熟達したウィッチはそう多くはない。だから、徹子は一瞬、勘違いをした。

「……本当にこれでシールド技術が上達するのか？」

「間違いないです。何なら若もやりますか？」

自信たっぷり言い切る信乃。

むむ、と徹子が腕を組み、手を口に当て思案する様な表情になる。

そして、一言。

「……よし、解った、やろう」

「流石は若です。もう準備は整ってるはずですから、場所を変えましょう」

「ん？」

徹子が眉を顰める。何の準備だ？

「より実践的な方法があるんです。今からあたしがそれを教えてあげますよ」

自信たっぷりな信乃の顔に不安がよぎる。

信乃がこういう顔をするのは、大抵ろくでもない事を思いついた時だ。

そして。

「どうしてこうなった」

ハンガーに移動した徹子が呻く。目の前には、マンホールくらいの大きさだが、それよりも薄くて丸い鉄板に取っ手を取り付けた謎の代物と、刀くらいの長さの木の棒。そして、興味深げに見つめるハンナ達カールスラントウィッチ。

「成程。これが扶桑の秘密特訓なのか」

「興味深いですね。一見遊びのようですが、若本中尉ほどのウィッチがたかが遊びでそんな事をするとは思えませんし」

ルールを聞いたアンジェラとハンナが呟く。

他にもハンナ達も含め、この基地にいるウィッチ達や手隙の整備兵も集まっている。たまたま談話室に入ってきたアンジェラが話を聞き、そして、それなら搭乗員室で待機中の皆も集めてハンガーでやろうという事になったのだ。それなら出撃指示が出てても其の場で準

備が行えるし、何よりも広いので大人数で集まれるからだとはアンジェラの弁。

思わず頭を抱えそうになる。何だこの公開処刑。

勢いでやるなんて言わなければよかった。真面目でちよつと融通が利かないルフトヴァツフエ達が完全にこれは特訓だと思い込んでいる。

更に。

ちらり、と徹子が後ろへと目を向ける。

「やつぱりおっちゃんは凄いですね。こんなものまで用意出来るなんて」

鉄板で作られた簡易シールドもどきを手に信乃が呟く。

「余った板に取っ手を付けるだけだ。孫の玩具を作ってやるより簡単だぜ」

「おっちゃん、これは玩具じゃなくて遊びでもありません」

「おお、そうだったか、すまんすまん」

何か本格的なブーツを用意している。

信乃の頭を撫でる整備兵長。信乃に甘い整備兵長が手を休めて立派な特訓用具まで作ってしまった。その姿はまさに孫に手作り玩具を手渡す休日のジジイだ。

何で基地総出でこのふざけた遊びに真剣になっているのか。

ともあれ、ここまで来て後には引けない。いや、引いてもいいが、そんな事をすればしばらく信乃が徹子に対してこのチキンウィッチといった顔をしてくるのは目に見えている。

「それじゃあ。始めましょうか」

そういうと信乃が徹子を見る。

「……おう」

湧き上がってくるため息を押し殺し、徹子が立ちあがる。

「じゃあ、ルールはさつきと同じ、殴って防いでジャンケンポンです」  
「何か少し物騒になってないか？」

オレの知っている遊びとは違う。

「がんばれー、シノー」

「わ、若本中尉、頑張ってください!!」

何か声援まで受けている。目の前でユーリに向かってドヤ顔をしている僚機を見やり、『じゃあ、やるか』と呟く。

そして。

「あ、掛け声はどうします?カールスラント風にシユニツク、シユナツク、シユヌツクか、扶桑風にじゃんけんぽんで?」

「重要か?」

「とても」

そうか、と徹子は呟く。もうこうなつた信乃は止められない。扶桑式を選び、足元に鉄板と棒を置き、互いに向き直る。

「それじゃあ、いきますよ」

ふふん、と笑みを浮かべて徹子を見る信乃。

楽しそうだな。おい。

「殴って防いでジャンケン、ポン!!」

徹子がパー。信乃がチヨキ。

「ふっ!!」

吐息と共に信乃の体が沈みこむ。先程までとは打って変わった鋭い身のこなしに徹子の本能が、まずい、と警鐘を鳴らす。こいつは本気だ。

半呼吸程の差だが、互いの身体能力を考えるとこの差は不味い。

意外と、というよりも、信乃の身体能力は遣欧艦隊のウィッチ達の中でも高い方だ。そうでなければ攻撃箇所が解っていたところで交わしたり防いだりすることは出来ない。

剣士だったという母方の血のなせる業だろうか、それとも本人の努力の賜物か。

信乃に続いて体をかがませれば半呼吸の差は即座に打撃として徹子に突き刺さるだろう。

ならば、どうするか。

咄嗟に足が出る。鉄板の取っ手に足を滑り込ませるとそのまま持ち上げ、棒を持った信乃に向け真つ直ぐ鉄板ごと足を上げる。同時に信乃の手にした棒が真つ直ぐに徹子に向かって突き付けられる。

……つて、おい!

脚に衝撃が走る。一瞬の事にカールスラントのウィッチ達が息を飲んだ。

だが。

信乃が徹子の体に突き立てようとした木の棒は、徹子が足で持ち上げた鉄板で防がれている。

アンジェラが扶桑の訓練とはかくも危険なものなのか、と呟き唾を飲みこむ。

基本的に危険なのはこの二人だけなのだが。

「……おいハギ、突きつてありだったか?このゲーム」

「若、足を使うのは反則じゃないですか?」

互いに悪態をつきながら、道具を地面に置く。

「後、これは受け流す練習だから、真っ直ぐ防いだらダメなんです。今回はあたしの勝ちですね」

「解った。お前の言いたいことは良く解った。今回はオレの一敗だが、突きがありなら足もありだ」

「ふふん。いいでしょう」

にやり、と不敵な笑みを浮かべる信乃。

同じくそんな無茶な攻撃を受けても、徹子は何故か顔に獰猛な笑みを浮かべている。

「これでオレに勝ったら20mmを返してやってもいいぜ」

「そうですか、なら、あたしに勝ったら取っておいたビスケットを一袋若にあげます」

「お前の持つてるビスケット全部だ」

「な……!?!」

「怖気づいたか?それとも、怖いのか?」

徹子の挑発に信乃の瞳が鋭く吊り上がる。怒りを笑みで押し隠し、ゆっくりと口を開く。

「……ふふん、いいですよ。若こそ、ウィッチに二言は無いですからね」

「当然だ、いくぞ」

再び腕を引く徹子と信乃。

「最初はグー!!ジャンケンポン!!」

徹子がチョキ、信乃がパー。

互いの手を見た瞬間、徹子と信乃が同時に体を動かす。

「行くぞ!!」

徹子が棒を手にすると同時に素早く後ろへ飛びのく。一度距離を取り、鉄板を手にした信乃に向け鋭く跳躍。そして、手にした棒を鉄板ごと打ち抜くように鋭く振り降ろすが、信乃もそう簡単に攻撃を受けたりはしない。

「勢いをつけて受け流させないつもりですね、甘いです!!」

鉄板を構えながら叫ぶ信乃。

だが。

ふ、と徹子が口元に笑みを浮かべる。跳躍しながら棒を引き、鉄板を構えた信乃の脇に降りたつと同時に信乃の死角に飛び込む。

「フエイント!?!」

ちりつ、という感覚が信乃のわき腹に突き刺さる。いくら攻撃位置が予測できても、防御が間に合わなければ意味が無い。鉄板で防ぐには遅い、と判断した信乃は鉄板を投げ捨てて地面に倒れこむようにして徹子の横薙ぎの一撃を躲す。

「……やりますね、若」

「お前もな」

すれすれで攻撃を躲した信乃と、躲された徹子。

互いに笑みを浮かべるが、目は笑っていない。

「今のは引き分けですね」

「ああ、次、いくぞ」

え?あの鉄板使って無くない?今の。どういうルールなの?

誰かが呟くが、二人の耳には入らない。既にルールは二人の中のみ存在するのだ。

静かに手にした道具を置き、再びジャンケンの体勢に入る。

ジャンケン、ポン。

徹子がチョキ、信乃がグー。

再び静から動へ、素早く棒を手にすると同時に、信乃は徹子の手にした鉄板を、今度は足で蹴り飛ばそうと試みる。

しかし、その行動を見越したように徹子が素早く後ろへ下がりが一気に距離をあける。

「これならどうだ!!」

ぴよこん、と、フソウオオカミの耳が徹子の頭から生えるのと同時に、手にした鉄板を円盤投げの要領で信乃へと投擲する。

「な!?!」

ウィツチの魔力により強化された腕力から放たれた、薄さ十数ミリの鉄板が鋭い刃のように信乃へと襲い掛かる。

咄嗟に信乃の頭からぴよこん、と鹿の耳が飛び出す。同時に上体を大きく体を後ろに反らして鉄板を躲す。

「え!?!」

「嘘お!?!」

当然躲された鉄板はそのまま空を飛ぶ。流れ弾ならぬ流れ鉄板。

巨大なチャクラムのような鋭い円盤状の鉄板が自分達に向かつてくるのを見て、信乃の背後にいたユーリとベレーナが慌ててシールドを張り、辛うじてそれを防ぐ。

「もはや特訓ってレベルじゃないですよ!!」

「ふ、二人共!!落ち着いて!!」

ベレーナ達が抗議の声を上げるが、二人の扶桑のウィツチの耳には届かない。

「防御側が攻撃するのってありですか?」

信乃が眉を顰めるが、徹子は意に介した様子もなく、不敵な笑みを浮かべて信乃に向かい口を開く。

「それよりハギ、オレは今防御手段を失っているぞ」

そういうと徹子は空手になった両腕を広げて見せる。無防備な自分を曝け出すような、挑発する様な姿勢。

信乃の瞳に鋭さが灯る。

「どうした?チャンスだぞ。来ないのか?」

「……言いましたね、若」



そういうと信乃が手にした棒を構える。

「これで勝負を決めます。若に一撃を加えたら、特別ルールであたしの勝ちです」

え？そんなルール作って良いの？

「いいだろう。来い、ハギ」

いいのかよ!?

カールスラント勢の驚愕の顔に目もくれず、信乃が徹子に向き直る。

最早何のやり取りか分からない扶桑のウィッチの戦いに完全に置いていかれているカールスラントのウィッチ達。

「はっ!!」

信乃が地面を蹴り、徹子に向けて手にした棒を上段から振り降ろす。

次の瞬間。

「甘いっ!!」

徹子が開いた両手を信乃に向けて突き出す。信乃の目が見開かれ、徹子の口に笑みが浮かぶ。

「これこそ、扶桑海軍秘奥義、真剣白刃取り」

振り降ろされた棒を両手で挟むように受け止めた徹子が呟く。

次の瞬間、徹子が体を捻りながら腕を引くと、手にした棒ごと信乃の体ぐるん、と宙を舞う。

信乃の体が地面に叩き付けられ、その勢いで思わず信乃が棒を手放す。

「オレの、勝ちだ」

そういうと同時に、徹子は奪いとった棒を信乃の首元にあてる。

徹子の言葉に信乃が一瞬悔しげに顔を歪ませるが、ぽつり、と絞り出すように呟く。

「……完敗です、若」

「……ええと、私達は一体何を見せられたのですか?」

何とも言えない表情を浮かべ、ハンナがぽつり、と呟いた。

○月×日

- シールドの扱い方の指導法について。
  - ・●●飛曹長は指導には向いていない。
- くリヨン基地支援日報より抜粋く

### 番外編 3. 中尉殿は甘えてみたい（前編）

1330 リオン臨時基地

アンジェラ・ヴォルフは疲れていた。

午前中のシフトが終わり、午後からは久々の非番ではあるが、アンジェラはここ数週間、否、リオン基地に配属されてから、ずっと非番の時間も部下の指導や上官であるハンナの補佐に当たっていた。

その事を心配したハンナに休むよう進言されても、いつもの慇懃な顔に薄く笑みを浮かべ。

「気遣いは無用だ。私の取柄は体が丈夫な事くらいだな」

そういつて決して首を縦には振らなかった。

その言葉は決して嘘でも、誇張でもない。

あのタイフーン作戦の中でも、アンジェラは常に仲間たちと共に最前線を飛び、ちよつとやそつとの負傷などものともせずには戦い抜いた。

固有魔法も無ければ、目を見張るような空戦技術を持つわけでもない。何処にでもいる普通のウィッチ、そう評されることもあった。

だが、彼女を知るウィッチの多くが、アンジェラは最高のウィッチの一人であると口をそろえる。

彼女は決して泣き言を言わない。

疲労や弱気、負傷した傷の痛みを態度に表すことも無い。

常に胸を張り、真つ直ぐ前を見て戦場に望む。

無事之名馬、という言葉があるが、アンジェラはまさにそれを体現していると言っている。

どんなに苦しくても、傷ついていても、変わらず戦う姿がどれだけ心強いのか。

その身を常に戦場に置き、前に行くものの背を押し、後ろに行く者を率いる。

彼女は何処にでもいる普通のウィッチなどでは決してない。誰よりも強く気高い心と、それを支える丈夫で強い体を持っている。

そして、その事を知っているからこそ、上官は彼女を信頼し、部下

は彼女について行くのだ。

彼女が50機、100機と着実に撃墜数を重ね、勲章を貰うと本人よりも周囲が我が事のように喜んだ。

彼女よりも撃墜数が多いウィッチも、飛行技術や戦闘技術が高いウィッチも、カールスラントには数えきれない程いるだろう。

だが、それでも彼女はそれらのウィッチ達と肩を並べ、或いはそれ以上に優れたウィッチとして尊敬され、慕われている。

だからこそ。

ほんの少しの気の緩みから、彼女が談話室のソファでうとうとまどろんでしまっても、それに対して誰も咎めたり、茶化したりはしない。先程まで騒がしく騒いでいた部下達も、そつと声を小さくし、代わりに毛布を一枚その体にかけて、静かに部屋を立ち去って行った。

最後に出ていくウィッチが小さく一言『いつもおつかれさまです』と呟いて部屋の扉を閉じて、アンジェラはそれに気が付かない。

普段の凛々しい表情を緩めれば、その顔は年の割に童顔で、可愛らしいといっても良い程だ。わずかに口元に薄い笑みを浮かべ、夢の世界にまどろんでいるアンジェラを見て思う事は、この僅かな午睡の一時が、少しでも彼女の心と体を癒してくれればいい。

そう、アンジェラ・ヴォルフは疲れていた。

だから、これから起きる出来事もまた、仕方のない事なのだ。

……夢を見ている。

ふわふわとする意識の中で、アンジェラはその事を認識していた。

眠りが浅いせいか、それとも他に理由があるのかはわからないが、眠りながら夢を夢だという事を認識する事は珍しい事ではない。

或いは、目の前の光景があまりに現実から剥離しているせいか。アンジェラはこれが夢だという事をうつつすらと認識していた。

それは何故か。

「隊長、疲れてるならボクに甘えていいんだよ」

「そうですね、隊長。休む時は休むのも隊長の仕事ですよ」

これが現実であるはずがない事くらい、どんなに疲れていても理解できるからだ。

柔らかな光が白い世界に差し込んでいる。まるで雲の上にいるかのような、ふわふわとした温かい世界だった。天国、というものがあ  
るなら、ここがまさにそうなのだろう。

そして、その世界には二人の天使がいる。

否、天使のような恰好をしているが、顔ははつきりと自分の部下達  
だ。

何故かアンジェラはユーリの顔をした天使に膝枕をされ、その脇で  
ベレーナの顔をした天使が彼女の手を取り、優しく頭を撫でている。

どう考えてもおかしい。そんな事は解っているが、アンジェラはそ  
の心地よさに流され、なすがままにされていた。

「ねえ隊長、もつと甘えていいんだよ」

ユーリの顔をした天使が囁く。ちよつと舌つたらずに少年の様な  
口調を紡ぐ声は間違いなく聞きなれたユーリの声だが、普段と違うの  
は、まるで母親が娘に諭すような、慈愛に満ちた声色をしている事だ  
ろう。

「何でも言つてくださいね、隊長」

嗚呼、柔らかな声が耳に心地良い。これだけでも十分に満たされ、  
癒される気がする。

そう考えていると、まるで心を読んだかのように（まあ、夢なのだ  
から当然なのだが）、ベレーナが穏やかな笑みを浮かべる。

「甘え方がわからないんですね。隊長」

ああ。とアンジェラは素直に思う。気づけば、普通の子供が親に甘  
えているような年には既に彼女は戦ってきたのだ。誰かに頼ること  
が許されない中、ひたすら銃を手に人の言葉を介さぬ怪異と戦い続け  
た。甘えることも弱みを見せる事も、全ては死に直結する中、いつし  
か彼女はそれを忘れていたのだろう。

「可哀想な隊長。でも、ボク達にはうんと甘えてもいいんだよ」

そんな心を溶かすようにユーリが囁く。夢の中という事もあり、彼  
女は驚くほど素直にその言葉に従っていた。

「隊長、寂しかったんですね」

ベレーナの言葉に胸が締め付けられる。

そうかもしれない。親や家族と別れて何年にもなる。口には出さないし、なるべく考えないようにしていたのだが。そうか、これが寂しいという感情か。

「良いんですよ。隊長。寂しいなら私達を頼ってください」

「ボク達が付いてるよ、隊長」

そつとベレーナの背中に手を回し、ゆつくりと抱き寄せると、まるで子供をあやすようにその胸に包み込まれる。ユーリが膝にのせていた頭をそつと撫でる。

そして。

「隊長、いいよ、ママって呼んでも」

夢の中では何も包み隠さず欲求が露わになるが、流石にそれは憚れる気がした。年下の少女を母と呼ぶなど、カールスラント軍人として、否、一人の人間として間違っていると理性が歯止めをかけようとするが、一言。

「ね、隊長。ママって呼んで」

蕩けるような声色が脳を溶かす。嗚呼、もう、どうでもいい。

甘える様にアンジエラの口が自然に動く。

その寸前。

「ま……なんだって?」

目を開いたアンジエラの顔が一瞬で凍り付く。

彼女の眼前、若本徹子が、眉をひそめてアンジエラの顔を見下ろしていた。

「アンジエラ、飲むか?」

「……ああ、済まない」

まだ少し呆けた様子で身体を起こしてソファに座り、誰かが体にかけてくれていたシーツを畳んでいると、徹子がコーヒーの入ったカップを二つ両手に持ち、一つをアンジエラに手渡した。

いつも通りの慇懃な表情で一言『すまない』と呟き、アンジエラはそれを受け取る。

「良く眠っていたな。疲れてるのか?」

徹子の問いにぎくり、とした表情を一瞬浮かべる。余り変化が無い

ようだが、常日頃の態度からすればかなり動揺していることが見て取れる。

「いや……そんな事は……いや、あるな。そうでなければ、こんなところで眠らんさ」

咄嗟に言いかけた言葉をアンジエラは改める。

そう、余り認めたくはないが、ソファで眠った挙句あんな夢まで見たのだ。疲れていないはずがない。

そう、あんな夢。何故私はあんな夢を……。

一瞬思考に沈みかけ、そして、重要な事に思い当る。

「若本、お前はずっと私の寝顔を見てたのか？」

「そんな趣味は無い。お前が寝言を言ってきたから様子を見ただけだ」  
嫌な予感を具現化する様なその言葉に、どきり、と胸が跳ね上がる。  
思わずカップを取り落としそうになるが、必死に平静を保とうとする。だが、若本の表情を見る限り上手くいってるかどうかは怪しい。

「その……私は何と聞いていた？」

「気になるか？」

「……ああ」

アンジエラが頷く。

寝言で『ユーリママ』などと口走ったりはしていないだろうか。

もしそうだとして、しかも聞かれたとしたら。

アンジエラの心臓が早鐘を打つ。そんな事になったら、死あるのみだ。かのバルクホルン大尉からカールスラント軍人の規範とも称された彼女のアイデンティティはその瞬間に崩壊する。それは、すなわち、アンジエラにとって死を意味するに等しい。

そんなアンジエラの内面に気付いているのかいないのか、はたまた動揺したアンジエラが物珍しいのか、悪戯っぽい顔を浮かべる徹子。

内心気がでないアンジエラに対し、徹子が心配するな、といった顔で口を開く。

「残念だが、マ、と言っただけだった。本当はもっと聞きたいところだったが」

危ない所だった。ほんのわずかな差で意識が覚醒していなければ、

最悪の事態になっていた。

「そ、そうか……いや、止してくれ。趣味が悪いぞ、若本」

「冗談だ」

少し冷静さを取り戻し、引きつったような笑みを浮かべるアンジェラと、からかうように笑みを浮かべる若本。

考えてみれば、階級的に自分と若本は同じで、立場的にも近いものがある。

思えば、この部隊ではハンナという上官に対しても、ハンネやアルマと言った部下達に対しても立場上一つ壁を隔てて接するところがあつた。

対等に話せるような存在は彼女が来るまでこのリヨン基地にはいなかった事を改めて感じていたアンジェラだったが、次の瞬間。

「……随分幸せそうだったけどな」

悪戯っぽく呟く徹子の言葉に、再びカップを折り落としそうになる。そんなアンジェラの様子に興味を示したのか、徹子がさらに話しかける。

「何だ？随分可愛い反応だな、どんな夢を見てたんだ？」

矢張りそう来るか。アンジェラが眉を顰める。

気兼ねなく話せるのは確かにありがたいとは思っているが、アンジェラはこういう風に弄ばれるような扱いには慣れていなかった。

徹子からすれば、どこか距離を感じる普段の態度も好ましくはあつたが、こういう無防備な姿をさらしてもらえるのも心を許した証左と思え、どこか心の距離が縮まった気がして素直に楽しくもあるのだろう。その態度は普段よりも随分と親し気だ。

「止めろ。忘れろ。私は別に……」

「何、変な夢を見る事なんて誰にでもある事だ」

その言葉にアンジェラが顔を上げる。意外な言葉だつた。

そうか？というアンジェラの問いに、徹子が苦笑を浮かべ。

「昨日なんかオレは何故かゾンビになって20mを手にしたハギと部下のウィッチ達に空母内で追い回される夢をみた。美緒……ああ、古い友人だが、あいつが日本刀片手にハギたちを全員海に叩き落さな



ければ多分オレは殺されてた」

ズイカク・オブ・ザ・デッド。

「どんな夢だ」

思わずくすり、とアンジェラが笑う。

「ま。夢なんてそんなもんだろ。突拍子もなかったり、支離滅裂だったり。どんな夢を見たとしても、恥ずかしい事なんてない」

ふ、と徹子が笑みを浮かべるのを見て、アンジェラの顔に少し安堵が灯る。

「そうか……その、例えばだが……私が、誰かに甘えていたとか、そういう夢だとしたら？」

「それこそ意外性の欠片もない。アンジェラは傍から見ても良くやっている。同じ年のオレからすれば、少し無理をし過ぎていると思える程にな。夢の中でくらい、誰かに甘えても罰はあたらないさ」

その言葉にほっとしたような顔になるアンジェラ。他の人間から同じことを言われても逆に下手な慰めと余計に傷つきそうだが、同じような立場の徹子の言い分なら自然と腑に落ちる。

「お前もそう言った事はあるのか？」

「勿論。よくガキの頃……っていつても12、3に戻って、オレの師匠だった北ご……っていつてもわからんか。とにかく、姉みたいだったウイツチに泣きついたりな」

おどけた様に肩をすくめる徹子にアンジェラもほほ笑む。そうか、そうなのか。

「そうか。安心したぞ。何しろ私ときたら、天使の恰好をしたユーリとベレーナをママと呼んで甘えていたのだからな」

「はは、そのくらいは……は？」

一瞬で徹子の顔が凍り付く。

突然真顔になる徹子にアンジェラも同じような顔を浮かべる。はて。何かまずかっただろうか。

「……いや、お前、それはちよつとまずいだろ」

「さつきと言ってることが違うぞ!？」

近づいたと思った心の距離が一気に距離が遠ざかった。

先程とは打って変わった引いた目をしている徹子にアンジェラが抗議の声を上げる。

「だってお前、よりによってお前、ユーリだぞ。ハンナとかならまだしもユーリだぞ？あいつまだ１ーだぞ？どこに母性要素があるんだ？」  
「いや、待ってくれ若本。私だってあいつに母性など……」

自らの不用意な発言を悟ったアンジェラが焦ったように口を開く。確かに冷静に考えればおかしい。何故ベレーナとユーリに甘えなくてはいけないのか。アンジェラにとって二人は部下であり、可愛い後輩でもある。特にユーリ。子供らしい天真爛漫さと、誰とでも打ち解ける人懐っこさ。そして、先輩からの指導を受けても思い悩まず前向きにそれを受け止めて自らの成長の糧に出来る強さと心の広さを持つ自慢の部下で……。

そこまで思考を巡らせ、不意に黙り込むアンジェラ。

……そして、ぽつり、と一言。

「なあ、若本。意外とユーリはいい母親になると思わんか？」

「１ーのガキに何言い出してんだよ!!」

「ああ、ユーリはまだ１ーだ。だが、その無邪気さが時に母性に繋がる」

あの人懐っこさはつまり慈愛、そして、前向きさと心の広さは他人の弱さを受け止める包容力といっても過言ではない、と。

「ねえよ!!母性どころか生理もまだだろアイツ!!新人のひよっこが母とか、何を求めてるんだお前!？」

「わからん。母性だろうか?」

アンジェラの闇の深さに徹子が慄く。ひよつとしたらこいつ、とんでもない扉を開けてしまったのではないだろうか。

「いや、だってお前、どこをどうとればユーリに母性を感じれるんだ?」

「解らん。いや、しかし。考えてみれば母性と強さは違う。戦いに弱くても母性のある者は存在しても何ら不思議じゃない」

「だとしても、ユーリに母性は無い」

ぴしやりと断言する。あれはただのガキだ。同じくらいの子供の

群れに放り込めば、男子女子の隔たりなく遊び回るような年齢のガキに女を、母を意識する方がおかしい。

「なら、この気持ちは何だというのだ」

「知らん」

強いて言うなら、普段の態度の反面から他人に甘えたいという鬱屈した気持ちがふとした拍子に暴発したのだろうか。いや、それにしても爆発が大きすぎる。何だこいつ。

「何だと、それでは私が欲求不満をこじらせているみたいではないか」

「こじらせてんだよ」

「お前だつて甘えたい相手がいるのだろう。それが上官だろうが、部下だろうが、同じ事だ」

「違えよ!!開き直んなよ!!」

居直りやがった、こいつ。

徹子が頭を抱える。

「いや、待て。ユーリに母性を感じるって事は、他の奴はどうなんだ?」

ふむ?とアンジエラの顔に理性が灯る。やっぱり少し寝ぼけてたんだな、こいつ。

ならば、と徹子は考える。

今のアンジエラは夢から覚めてまだ少し頭の回転が足りていないようだ。なら、その頭を回して覚醒させてやればいい。夢の中で出てきた人物に好意を抱くという事は決しておかしい事じゃない。昔それで竹井大尉に不用意に優しく接したところ、逆に怯えられた経験から徹子は判断する。いや、普段からそれなりの親愛の情は抱いているのだが、余程気持が悪かったのだろうか。

「他の奴、とは?」

アンジエラの問いに徹子が口を開く。

「例えばフィリーネ大尉はどうだ?かなり親っぽい感じがするが」

「ハンナは母というより姉といった感じだな。甘えといより、信頼しているといった感じだ。それに時折抜けているしな。むしろ私達が支えてやらねばならん」

普通の反応だ。

「アルマとかハンネは？」

「アルマやハンネは妹という感じだ。むしろ甘やかしたい」

「まだ少し寝ぼけてるようだが、あながち間違いではない。あと少し。」

「ベレーナは？」

「ベレーナは妹というよりも……ふ、そうだな。もし私に娘が出来れば、こんな気持ちを抱くのだろうか」

「さつき夢に出てきたんだろ？」

「冷静に考えればベレーナが母というのはおかしい」

「お、ちよつとまともに戻ってきたか？母性も復活している。これなら大丈夫か？」

「ユーリは？」

「母だ」

「断言かよ」

「駄目だった。まだ少しおかしいぞ、こいつ。」

「ユーリに甘えて童心に帰る。最高に尊い」

「解った。お前は少し疲れてるんだ。いいから少し休め」

「そういうと徹子がシートを広げてアンジェラにかぶせる。こんな危険物は速やかに隔離だ。こんな姿、部下に見せたらとんでもないことになる。特に年少組の心が心配だ。ユーリに至ってはトラウマになりかねない。」

「しかし、ハンナの手伝いが……」

「気にするな。何ならオレが代わりにやってやる」

「その言葉に少し安心したのか、アンジェラの瞳が眠たげに閉じられる。」

「ああ、若本の母性を感じる。いい母親になるな、お前は」

「頼むから寝てくれ」

「そう、疲れているのだ、アンジェラは。そういう事にしておこう。そして。」

「……死にたい」

陽が落ちた談話室のソファの上でひぎに顔をうずめ、アンジェラが呻くように呟く。

……まあ、そうなるな。

「気にするな。オレも誰かに話したりはしない」

目が覚める様にうんと濃い目に入れたコーヒートを差し出しながら、徹子が口を開く。

様子を見にきたらアンジェラが護身用の拳銃を手に何かつぶやいていたので慌てて取り上げた。

そして、それが間違いではなかったと今更ながらに胸をなでおろす。

「というか、こんな事誰かに話せるわけがない。アンジェラのあんな姿が知れば、この基地の指揮系統が崩壊する。この事は死ぬまで徹子の胸の奥で封印される事だろう。」

「若本、私は自分が恐ろしい。大切な部下にあんな思いを抱いてしまいう私が」

コーヒを一息で飲み干し、アンジェラが呟く。良かった、復活した。ついでにかなり大きな心の傷を負ったようだが。

「さっきも話したが、夢ってのは大抵荒唐無稽なものだ。あと、寝ぼけてるときってのは大体夢に引きずられる。オレもそれで失敗したことはあるし、気にするな」

話を聞けば、また同じ夢を見たという。加えて今度はハンネとアルマも一緒だったとか。いい加減にしろ。

「しかし、夢というのは深層心理の表れだとどこかで聞いた事がある。私の深層心理は、その、部下に母性を見出すようなおぞましい……」

「そうじゃないだろ」

徹子がはあ、とため息をつく。

「お前は、部下を信頼してないのか？」

徹子の言葉にアンジェラが顔を上げる。

「それは、しているが……」

「なら、そう言う事だ。信頼しているからこそ、信頼する相手に甘えなくなるのは当然だ。それがまあ、ちよつと極端だったとしても、それ

は疲れているんだからしょうがないだろ」

「そうか？」

「そうだ」

兎に角、今はアンジエラを立ち直らせなくてはいけない。徹子自身、あれが彼女の秘められた願望なのではという疑念はぬぐえないが、少なくとも今までの彼女は理想的な上官であり、このリヨン基地の頼れる姉のような存在だったのだ。そして、彼女には与えられたその役割を立派にこなすだけの強さがある。それは間違いない。

「お前も、そういう事はあるのか？」

「ん？」

アンジエラの問いに徹子が首を傾げる。

「お前も、信頼している人間に甘えたくなくなるという事が。例えば、年下で階級も下で……例えば、萩谷准尉にも、甘えてみたくなるような事があつたりするの？」

それは、と徹子の言葉が詰まる。完全に予想外だった質問だ。

試しに自分が信乃に甘える姿を想像してみる。バブつてオギャる感じで。

『そんな……そんなにあたしの態度が若を追い詰めて……すみません、若。お願いですからもとに戻ってください。若がそんなだと、あたし、どうしていいか……ぐすつ』

想像の中とはいえ普通に泣かせてしまった。

駄目だ。絶対にこんな態度は信乃には見せられない。

だが。

「ま、まあな」

とてもじゃないけど甘えるなんて出来ない、と答えた瞬間アンジエラが落ち込むのは目に見えている。幸いにしてここに他のウィッチ達はいない。

「そうか、お前も萩谷准尉に甘えたいか」

「……」

どう答えたものか。逡巡した結果、徹子はゆっくりと口を開く。

「ああ、俺もハギに甘えたくなる事が……」

「えっ？」

がちやり、と扉が開くと同時に、耳慣れた声が部屋に響く。

同時に徹子の顔から血の気が引く。

そうか、多分オレも疲れているんだ。でなければ、こんな稚拙な判断はしなかった。

扉を開いたまま硬直している信乃の気配を背に、徹子は次の言葉を考えていた。

そう。オレも疲れているのだ。疲れていなければ、こんな風にはならなかった。

だから、そんな顔をするなハギ。お前は悪くない。

## 番外編 4. 中尉殿は甘えてみたい（後編）

「若、いい加減あたしを子供扱いしないでください」

何時だっただろうか。そんな事を若に向かって口にした事がある。

その時、若の答えはこうだった。

「子供扱いなんてしてねえよ」

嘘だと思った。

徹子は信乃を子供扱いしている。

余計な細かい事を注意するし、人の服や趣味にいちいち子供っぽいだのとケチをつけたりからかってきたりする。

だからこそ、つい反発してしまう。

まるで反抗期の妹だ、と周囲にからかわれる度に自分の子供っぽさを自覚するが、それでも上から目線で徹子に何かを言われた時にはついむっとして憎まれ口をたたいてしまう。

上官と部下としての態度ではない事は解っている。甘えているという事も。だが、4年間の月日で培われてきた人間関係は、一日二日では変えられるものではない。

だが。

まさか本当に子供扱いをしてないどころか、それ以上だったとは。

まさに驚天動地。地球は平らだと主張する人が超高高度から地上を見下ろしたらこんな気分になるだろうか。

まさか、若があたしに甘えたいと思っていたんだなんて。

2100 リヨン臨時基地

「……甘えん坊を受け止める心構え、ですか？」

「はい。大尉なら何となく寛大そうですね、そういった部下をどう扱うか、或いは上官をどう扱うかにも詳しいと思って」

思わぬ信乃からの問いに、思わずハンナがブルストを挟んだパンを食べる手を止める。

デスクワークが一段落ついた夜中のリヨン基地。

ナイトシフト中の休憩か、廊下を歩いていた信乃に相談したいことがある、と言われ、それならばと一緒に夜食をとるついでと一緒に人



気の無いウィッチ用の食堂で一緒に眠気覚ましのコーヒーと軽い食事を取っていた矢先、思わぬ質問が飛んできた。

「上官はわかりませんが、部下なら何となく……と言っても、ハギさんもユーリやベレーナに懐かれていますし、相談する事では……」

「どちらかという上官の方の対処の仕方が知りたいんです」

「ええ……？」

一体信乃に何があったのか。

この基地で彼女にとって年齢的にも階級的にも上に当たるのは、ハンナを除けばアンジェラ、アルマ、そして徹子。いずれも他人に甘えるような人物ではないし、ましてや部下に対してそう言った態度を見せる事は無いと言える。

先程の惨事を知らぬハンナが首を傾げ、信乃を見返す。

「ハギさん、私達はウィッチですが、同時に軍人です。上官が部下に甘えるなんて、そんな事……」

そこではっ、とハンナがあることに思い当る。

自分は階級や年齢が上であるが故に、そして彼女が求めるが故、信乃の事を『ハギさん』と呼んでいる。それだけではない、先日はデイジョン基地に向かう際、細かい事を伝えなかつただけではなく、その後酷い失態まで晒してしまった。

それだけではない。引つ込み思案な性格ゆえ、普段から部下達との間に壁を作らぬよう、意識的にコミュニケーションを取ろうと心掛けてきた。

ごくり、とハンナが唾を飲む。つまり、こういいたいのではないか。『フリーネ大尉は代理とは言え基地の司令という立場にありながら、安易に部下に自らを曝け出しすぎている。これは甘えなのではないか』

と。

夜食を取る手を完全に止め、ハンナが信乃の顔を見つめる。

ひよっとしたら彼女は態度に表さないだけで、普段の自分の態度を『上官らしくない』と思っているのかもしれない。

だが、他人のいる前で部下が上官にそういった類の具申をすること

は、軍隊としての規律を乱す恐れもある。

だからこそ、人気の無い場所で、更に念には念を入れ、逆に質問という形を取り、遠回しにそれを自分に伝えて来たのではないか。

萩谷信乃准尉。

扶桑人は真面目さや他人を気遣う事を美徳とするというが、一見マイペースに見える信乃ですら、自らの立場が危うくなるリスクを負って尚、こうして基地の司令に意見を述べようとしている。

何という気遣い。そして、上官に対して敢えて厳しい具申が出来る勇氣。

ひよつとしたら自分は目の前にいる少女を誤解していたのかもしれない。

彼女なりの思い。

それを敢えて伝えてくれるその心がハンナには純粹に嬉しかった。そう。

ならば、自分自身もそれに答えなければいけない。

「あの……ハンナ大尉？」

突然考え込み始めたハンナに向かって信乃がおずおずと話しかける。

ややあつてゆつくりとハンナが顔を上げ、そして、神妙な表情で口を開いた。

「……ハギさ……いいえ、萩谷准尉」

「はい」

ハンナの言葉に信乃が頷く。

何故急に呼び方を変えたのかわからないが、きちんと自分の質問の答えは考えてくれていたようだ。その答えを待つ信乃に対し、ゆつくりとハンナは口を開いた。

「私は確かにハギさ……萩谷准尉に甘えていました」

「どういう事？」

自分に甘えたいと思っている上官について相談したら、相談した上官が既に自分に甘えていたらしい。どういう事なのか。想像の斜め上にも程がある。

「というか、甘えられていたなんて今まで全く気が付かなかった。

「あ、あの、ファイリーネ大尉？」

流石に少し引いた為、思わず敬称で呼んでしまう。

だが、ハンナはその言葉に、矢張り自分が気安く呼ばせた事に信乃が内心反発していたのだと見当違いの理解を示した。

「萩谷准尉、これからは私、きちんと態度で示して行動したいと思いません」

これからはきちんと他人に甘えぬ態度を見せなくては。

ハンナが決意も新たに口を開く。

「そ、そうですか……態度で示しちゃうんですか」

これからは態度に出してあたしに甘えるつもりなんですか。

ごくり、と信乃が唾を飲みこむ。

「私自身が態度で示さないと周囲に伝わりますからね」

「え!？」

周囲に何を伝えようとしているの、この人!?

「あの、そこまでしなくても、その気持ちは心に留めておくだけで……」

「というか留めておいて欲しい。ただでさえ時折抜けている事があるのに、それに加えて部下に甘え始めたら隊長の威厳が地に落ちるところの騒ぎではない。」

「いいえ、それでは私の気持ち収まりません!!」

「そこまで!?!?そこまであたしに!？」

信乃が目を見開く。

「そこまでしてあたしに甘えたいとは。」

「一体何がハンナをそうさせるのか。」

「今日がありますがとうございしました、萩谷准尉。それでは、私は仕事の続きがあるので。准尉は今夜もナイトシフトでしたね。大丈夫ですか? 顔色が少し悪いみたいですが……」

「は、はい……」

正直あまり大丈夫じゃない。

だが、もし正直に言つて『そんなあ、ハギさんが頑張ってくれない

とハンナ、困っちゃいますう』なんていわれたりしたらどうするか。正直、反応に困る。

「そうですか。解りました。くれぐれも体調管理には気を付けてくださいね」

少し心配だが、信乃の前で宣言した以上、当の信乃を甘やかしてはいけない。少し突き放した言い方にならないが少し気にはなるが、ハンナが口を開く。

「大丈夫です、ファイリーネ大尉」

いきなりの甘える宣言を実行させないためにも、甘えさせる隙を作ってはいけない。

「それでは、また明日ですね。萩谷准尉」

「はい」

立ちあがるハンナに声を返ししながら、信乃の心が重くなる。

……そうか、明日から甘えられるのか、あたし。

ファイリーネ大尉と、下手をすると若にまで。

どうすればいいのか。重くなった気持ちのまま残ったブルストとパンを平らげ、ゆつくりと立ちあがりかけたその時だった。

「む？萩谷准尉か」

その声にゆつくりと振り向くと、そこには信乃と同じく夜食のトレイを手にしたアンジェラが机の方へと近づいてくる場所だった。

「ヴォルフ中尉、お疲れ様です」

「萩谷准尉の方がよほど疲れた顔をしているぞ。そんな事でナイトシフトは大丈夫か？」

その言葉に信乃が内心安堵のため息をつく。

そう、上官と部下はこのくらいの距離感でいい。徹子もハンナも部下との距離感の詰め方がアクロバティックすぎるのだ。

「大丈夫です。ただちよつと、気になる事があって……」

信乃の言葉にアンジェラがむ、と足を止め、信乃を見つめる。

「どうした？私で答えられる事か？」

どうしても気になるなら聞く、といった雰囲気の言葉。

安易な質問ならそのくらい自分で考えろと言われそうな雰囲気だ

が、逆にそれが信乃からすれば上官の態度からすれば当然と思える。全て答えず、時には部下に考えさせる。

矢張りアンジェラは有能な上官だ。

「では、一つ聞かせてください」

アンジェラほどの人物なら部下相手に甘えることなどないだろう。

「……ほう？何だ？」

「ヴォルフ中尉は、あたしに甘えてみたいと思いますか？」

「……私が、准尉に？」

「はい」

思わぬ言葉だったのだろう。アンジェラが珍しく目を見開いている。

当然だ。

自分だって部下にそんな事言われたら驚くし、そんな馬鹿げた質問をする自分がどうかしているとするら思う。むしろ叱責の一つくらいは飛んできてもおかしくはない。

むしろ、それを期待さえしている自分がいる。

さあ、常識的な反応をするのだ。

きちんと自分の今の言葉を否定する一言を。

「……萩谷准尉」

すつ、とアンジェラの瞳が元の平静さを取り戻す。おお、理性的な瞳。これは、注意されるか、怒られるか。

むしろ、目が覚める程怒られたいくらいだ。

「……それも悪くないな」

駄目だった。

「ぷ……ハンナに、アンジェラまでそんな事を……」

「笑いごとじゃありません」

薄暗い搭乗員室でくすくすと笑うアルマに対し、信乃が仏頂面で答える。

「だって、『若もハンナ大尉もヴォルフ中尉も皆甘えん坊さんでした』って、そんな深刻そうな顔で言われたらそりや笑うよ」

絶望的な顔で搭乗員室に現れた時はどうしたのかと心配になった

が、話を聞き進めるにしたがってその顔は呆れに、そして、呆れを交えた笑い顔に代わっていった。

「笑いごとじゃありません」

アルマの態度が不服なのか、信乃が口を尖らせる。

「そうかなあ。でも、信乃。そんな事で悩んでいいのかな？」

むしろ、折角なのでアルマも思った事を口にすべきだとばかりに口を開く。

「……どういう意味です？」

「ねえシノ、4年もの間この欧州で戦って生き残ってるっていう意味が解る？ 凄い事なんだよ。逆にそれだけの幸運と経験を持ちながらいつまでも必要以上に他人に甘えようとする方も、ちよつとおかしいよ」

「それは……」

アルマの言葉に、信乃が虚を突かれたような顔になった。

「シノは4年、私も3年くらいは戦ってるし、私に至ってはナイトウィッチだよね。必ずしも戦ってきた期間がすべてじゃないけど、それなりの経験があるなら、それなりの責任が生まれるはずだよ。経験の少ない若手たちを引つ張る義務があるし、同じくらい、上官や先輩を支えないといけないんじゃないかな。まあ、信乃はユーリ達にたいしては上手くやってると思うけど」

その言葉に信乃はまるで心を見透かされたかのようなように目を丸くした。

だが、それと同時に悩みの正体が、もやもやの本質がアルマの言葉で一突きにされたようにも感じた。

甘えたい、という言葉に信乃は割と真剣に悩んでいた。

それは何故か。

まあ。年上の女性が年下に甘えるという歪さに引いたのは確かにある。

だが、それと同じくらい、信乃は本来自分が無意識に甘えてきたものを覆された事にたいして戸惑いを感じたのだ。

12歳という年齢で欧州に渡ってきて以来、周囲は殆ど年上で、階

級も飛曹長止まり。年齢的にも、階級的にも、自己の感情や思考よりも与えられる命令を優先して行動してきた。

『あの部隊』にいた時も、命令は上任せで、自分は部下にそれを伝え共に実行するだけだった。

他人を氣遣う余裕などそもそも無く、与えられた命令を遂行する事だけが彼女のすべきことだった。

だからこそ戸惑った。

信乃にとっては行動基準を与える存在だった徹子や目上の者が自分に『甘えたい』という感情を見せた事に。

だが。アルマの言う通りでもある。

何年たつても徹子の背との距離が縮まないため忘れがちだったが、周囲を見渡せば自分も一介のベテランに手が届く経験を重ねたウィッチだ。いつまでも徹子の背ばかり見ている訳にはいかない。

逆にいえば、上の人間が時に『甘える』くらいにしっかりしていてもおかしくは無いのだ。

「まあ、私も人の事は言えないけどさ。時には甘えさせることが出来るくらいになつてもいいんじゃないかな」

アルマの言葉にちりつ、と胸が痛む。

自分が漫然と生き残ってきたとは思わないが、生き残ってきた以上、その経験はきちんと還元する必要がある。ひたすらに戦果を積み重ねるのもその手段の一つではあるが、それが全てだろうか。

「そう、ですね」

ぼつり、と信乃が呟く。信乃は徹子の二番機という立場であると同時に、4年間もの間欧州の空を飛び続けた扶桑皇国海軍遣欧艦隊の飛曹長なのだ。

部下を鍛え、上官をいびる、と徹子は冗談っぽく言っていたが、上官に対しても甘えて従うだけではなく、逆に自分の意思をきちんと言え、える時期に来ているのかもしれない。

「……ひよつとして、若達はその事を気付かせたくてあたしに甘えると言ったのでしょうか？」

それはどうかなあ、という言葉でアルマは飲み込む。

どうもその『甘える』と、アンジェラ達の『甘える』のニュアンスが違う気がするが。

だが、信乃自身にベテランに差し掛かっているという自覚が薄いのもまた確かだ。

その事に信乃も思い至ったようなので、余計な水を差すような事は言わないでおこう。

「そうそう、ついでに私もシノに甘えたいな」

「それはちよつと……いえ、そうですね。それも敢えて受け入れる必要があるのでしうか」

「そうそう、何しろシノは一年先輩だしね、つと」

「ふえ!？」

信乃が目を丸くする。ソファに座った信乃の脇にアルマが飛び込み、そしてその膝に頭を乗せたからだ。

「ん、細いなあ。シノ、ちゃんどご飯食べてる?」

「いや、食べてますけど……って何してるんですか!？」

「んふふ。シノ先輩に甘えてるんだけど?」

「あ、甘えって、こういうのも含まれるんですか!?!というかアルマ、あたしより年上なのに!!」

振りほどこうとする信乃と逆に信乃の膝にしがみつくアルマ。

「ふふふ。可愛いよ、シノ先輩」

「あ?!解りました!!からかわれてるんです!!からかわれてるんですね、あたし!!」

臆病だつたり他人に甘えたり。

自分自身にそういった一面がある事は信乃も重々承知している。そして、そのせいで多くの過ちを犯してしまった事も。

そういった自分の一面を振りほどくため、逃げないために必死で戦ってきたが、根本的な所から目をそらさずに受け止めなくてはそれ以上の進歩は無い。

そういった弱い自分を受け入れていたつもりだが、実際はそうではなく、意識しないようにしていただけなのかもしれない。

そうか、と信乃は思う。



まだ自分は他人に甘えてばかりだが、いつか甘えられるくらいに成長しないとイケない。

そんな事を思いながらも信乃は膝に顔を埋めるアルマを引き離そうと力を込めた。

「いい加減に離れてください」

「んー、あと少し」

そうだとしても、あたしはこんな甘えられ方は望んではないんですよ。

そして、翌日。

「あの、若」

「あ、あー、なんだ？」

若干気まずそうに尋ね返す徹子に、信乃が決意を込めた口調で言い放つ。

「若、これからはもっと私に甘えていいですよ」

「はあ!?!」

何言いだしてんだこいつは!?

いや、違う。落ち着け若本。きつとこれはアレだ。ハギも疲れてるんだ。

そう思い込もうとするが、その思いとは裏腹に信乃の表情はいつになく真剣だ。

「ですから若、甘えてください。あたしに」

そう、真剣なのだ。何故か信乃は真剣に徹子を甘えさせようとしている。

たった一晩の間に何が信乃に起きたのか。

「待てハギ、誤解だ。オレにそういう趣味は無い」

「無理しなくていいんですよ、遠慮しないで何でも言ってください」

思わずごくり、と唾を飲む徹子。昨日のアンジェラとは逆だ。まさかあの信乃が母性に目覚めるとは……。

「いや、いい。そういうのはユーリやベレーナにしてやれ」

「ダメなんです。若や先輩達に甘えてもらわないとイケないんです」「おかしいだろ!?!」

なんで年上限定なんだよ!?オレの二番機は一体何に目覚めたんだ!?

その後、いろいろな誤解が解けるまで数日程の時間を要するが。

「萩谷准尉、上官に甘えさせるとはいいけませんよ」

「あれ!?昨日と言ってることが違います!?」

それはまた、別の話である。

第二部 Let's go to Kauhava  
2-0. burst up!!

狙撃の上手いウイッチは胸が大きい。

これは覆しようもない事実である。

実際、各国の有名な狙撃が得意なウイッチをざっと見ただけでも、ブリタニアのリネット・ビショップ、リベリオンのジーナ・プレディ、ロマーニャのルチアナ・マツツエイ。そして我が扶桑皇国の誇るエース、雁淵孝美。狙撃とは少し異なるが、見越し射撃の達人であるカールスラントのハンナ・U・マルセイユ。弾道に関わる固有魔法を持つダキアのコンスタンティア・カンタクジノも胸が大きいし、同じくヒスパニアのアンジェラ・ララサーバルもあたしより大きい。

むしろ大きければ大きい程射撃の腕が高いともいえる。そう。

最早これは偶然では済まされない。

伏射の邪魔になるとか苦しい言い訳をしていた子もいるが、そんなことは有り得ない。空を飛んでいる以上伏射の邪魔にはならないし、むしろクツションになって便利なはずだ。

胸。バスト。おっぱい。

射撃の腕が他の者より劣るあたしに足りない要素。

射撃が上手くなればおっぱいが大きくなるわけがない以上、やはりおっぱいが大きければ射撃が上手いのだ。

「というわけで伊予。どうすればおっぱいが大きくなりますか」

「うん。ごめんね。ちよつと話についていけない」

萩谷信乃飛曹長の言葉に藤田伊予中尉がこいつ何いつてんだ、という顔を向ける。ツツコミどころが多いどころかツツコミどころしかない。

確かに伊予の胸は大きい。

何というかこう、出っ張るような形で自己主張も激しい。それに体の線も細いので凹凸の凸が余計に目立つ。言うなればボン、キュツ、

キユツである。何でここだけ出てくるのかなんて、私の方が知りたいくらいだ。

しかもからかわれることも多いので、どちらかというところプレツクスなのだが、それすら贅沢だと言われる。おっぱい税があるなら今頃伊予は借金生活ですね、とか言われても、むしろ心無い仲間の言葉に感謝料を請求したいくらいだ。なんですかおっぱい税って。

ついでに射撃も上手い。

戦闘の際は狙撃を担当することも多い。だが胸は関係ない。

固有魔法の『自動演算』による着弾位置の割り出しが迅速かつ正確なので、後は相手の動きを見ながら打てば結構当たるというだけの話だ。

ちなみに固有魔法が発現したきっかけは、ウィッチになってからゴミ箱にゴミを投げてでも外すことが無くなった事に気が付いたからだ。『そう言えばここ一年くらい一回も外したことないな』とウィッチになって2年目くらいで気が付き、調べて貰ったら固有魔法だった。

本来ならば精密な計算により導き出されるはずの『目標物へ射出した物体を正確に到達させるための演算処理』を直感で理解できるため、『自動演算』なる名前が付けられたが、そのきっかけがゴミ箱である。

何ていうか、仲間の危機で覚醒するとか、もっとう劇的に発現してくれたらよかったのに。

むしろハギちゃんが致命傷を負ってからの覚醒なんて最高に盛り上がるのでは。

『よくも、よくもハギちゃんを!!』

血まみれになったハギちゃんを抱きかかえ、99式2型2号を構える私。目が紅く光ったりしたらそれっぽいのに、固有魔法が発動しても私の目は光らない。

むしろ日常生活からひっきりなしに発動しているため、ウィッチ同士の球技大会なんかは出入り禁止にされてしまった。野球でピッチャーでもやらせようものなら、プロ顔負けのコントロールで勝負にならないからだ。

そう。改めて言うが射撃の腕におっぱいは関係ない。

「ハギちゃん。こういうのは地道な練習しかないと思いますよ」

射撃にしても何にしても、出来なければ繰り返すのが一番だ。

自分にだって苦手な事はあるし、それを努力で克服してきただけの自負もある。信乃もそうだろう。

だが。

「してますよ。でも隣で撃つた新入りの方が上手かったですし、胸も大きかったです」

ああ、そういう。

多分後輩に色々抜かれて焦っているのだろう。そういえば最近来た新人は背も高かった。

「でも、胸が小さくても射撃が上手い人達もいますよ。胸を大きくするよりも……」

「そんな人達なんてどうでもいいんです、とにかく胸を大きくしたいんです!!」

「うん。本音が漏れ始めてきたよ、ハギちゃん」

とにかくそういう事なのだ。射撃が上手くなるだけでは意味がない。おっぱいが大きくなるだけでも意味が無い。両方とも大事なのだ。

「いいから普段どんなものを食べてるか教えてください。ヒントがあるはずですよ」

「皆と同じように出された料理を食べてるだけだよ」

「ええ。あたしだって食べてますね」

伊予も信乃もきちんと三食瑞鶴で出されるご飯を食べている。瑞鶴の主計課が乗組員の栄養バランスもきちんと踏まえたうえで献立を考えてくれている。量も味も文句の付け所は無い。勿論金曜日はライスカレーだ。

「じゃああたしの胸は何で小さいんですか!?!」

「知りませんよ!?!」

え?・何で今怒られたの、私?・

「じゃあ士官にだけ特別に胸が大きくなるようなものが支給されてた

りしませんか?」

「それなら若本さんもきつと大きくなってますね」

「成程。食事は関係なさそうですね」

失礼にも程がある。少なくとも徹子は信乃より大きい。

ちなみに上官への暴言を問うならば伊予も同罪だ。ナチュラルに上官を煽っていくスタイル。二人の数少ない共通点だ。

「伊予は何か自分の胸が大きくなったことに関して心辺りがありませんか?」

「ないですね」

「ないって事はないでしょう。日常的に胸を揉む癖があるとか、見られると興奮するとか」

「それただの痴女じゃないですか。本当じゃないですよ」

「へえ、そうやって秘密にするんですか?そんなに胸の大きさを誇示して優越感に浸りたいんですか?胸は大きいのに心は小さいんですね」

「ええと、そろそろ私も一回くらい怒ってもいいよね?」

信乃の言葉に伊予が拳を握りしめた。

「うぐぐ……取りあえず、伊予に心当たりはない事は解りました」

鉄拳制裁で思い知らされ、頭をさすりながら信乃が呟く。

「あと、脳天にグーパーは止めてください。これ以上縮んだらどうするんですか?」

「大丈夫。縮む程ないから」

萩谷信乃。153センチ。最近1センチ身長のスバを読んでいたことが判明。

本人曰く『みんなが頭を叩くから縮んだんです』。

尚、一部からはまだスバを読んでいる可能性を指摘されている。

少なくとも150センチは死守せねば。

「そうですか。とにかく、伊予が駄目なら他に聞いてみた方が良さそうですね」

「正気? ついにおかしくなったと思われるよ?」

こんな恥ずかしい事、気心が知れた自分だから言ってきたのだと思っていたが、どうやらそうではないらしい。恥を自ら拡散していくこの姿勢よ。

「あたしはマトモです。伊予だつて、胸の大きさと射撃の上手さの因果関係を否定出来ないじゃないですか」

「出来てるよ。ハギちゃんが聞く耳を持つてくれないだけだよ」

「というか、そのガバガバのハギ理論をいい加減おかしいと思わないのだろうか。」

「一度大きくしてみて、それでも駄目なら諦めて練習します。でも、小さいままで諦められるわけじゃないじゃないですか」

「屏風から虎を出したら捕まえてやるみたいなどんち理論は止めて欲しいかなつて」

前提条件の前提が既に破綻している。そんな風船感覚で大きくなるモノじゃない。

「ん？何してんだ、お前達」

「ほらあ。またややこしい人が来ちゃいました」

通路の向うから歩いてくるのは扶桑皇国海軍の士官服を纏った若本徹子中尉。

信乃の長機で、信乃の育成を失敗させた全ての元凶だ。

「何だややこしいつて。またハギと一緒にアホな事をしてんのか？」

「あたしはアホじゃありません。後、胸の小さい人に用は無いので部屋にお帰り下さい」

「は？お前にだけは言われたくねえよ」

年の割には背が低く、体もスレンダーな徹子がむつとした表情を浮かべる。

気が付いたら自分よりもちんちくりんだった幼馴染の竹井醇子大尉にいつの間にか逆転されているのも含め、身長や体形に関する話題は徹子にとつても看過できるものではない。

お願いだから看過して。

「ハギちゃんが射撃が下手なのは胸のせいだつて言い張つて聞かないんです。何とかしてください」

「全く、何をしてるかと思えば……」

伊予の言葉にはあ、と徹子がため息を吐き出す。言うまでもなく徹子の射撃の腕前は扶桑皇国海軍でもトップレベルだ。というか、四六時中この人の後ろに居て信乃は一体何を見てきたのか。

「一理ある」

「ほら、ハギちゃ……んん？」

何かまたおかしな単語が出てきた。

「もしオレに後12サンチ胸があれば、ウィッチの歴史は塗り替えられていた」

どこから出てきたその具体的な数値。

「何言ってるんですか若本中尉」

「運命の神様つてのは気まぐれだな。どうして諄子じゃなくてオレにあの胸を授けなかったのか……」

そう言って士官服の上から自分の胸を触る徹子。そうか、諄子由来の数値か。

というか、この師妹コンビはどうしてこう揃いも揃ってこういうのか。

「後、そもそもハギに胸があったら、偵察や囮に不利だろうか」

「はい？」

唐突に新しい理論が出てきた。

何を言い出してるんだこの扶桑皇国最強ウィッチ。

「いいか。そもそも前衛で囮を務めたり偵察任務に必要なのは鋭い身のこなしと少ない被弾面積だ、無駄にでかいものを二つもぶら下げたら邪魔になるだろ」

前衛を務めるウィッチはスレンダーで小柄で貧乳なウィッチが多い。

最早これは疑うべきもない事実である。

実際、統合航空戦闘団のウィッチ達をざっと見ただけでも、501のエーリカ・ハルトマンやフランシスカ・ルツキーニ。502の管野直枝。504のマルチナ・クレスピなど、前衛のウィッチは総じて小柄でおっぱいは小さい。他にも506のカーラ・ルクシツクや、巴戦



を得意とする507の迫水ハルカ等、小柄な体と小さなおっぱいを生かして前衛で活躍するウィッチは数知れない。

むしろ小さければ小さい程活躍しているともいえる。

そう。最早これは偶然などで済まされるものではない。

全人類一位の撃墜数を誇るハルトマンなどは最早永遠の天使体形だ。

「何よりもオレが見本だ。無駄にでかくなった美緒や諄子とは違う」

「あがりに近い年にもなってハギちゃん以上のガバ理論をドヤ顔で語らないでください」

むしろ前衛で活躍しているおっぱいもいっぱいだ。501だけでもゲルトルート・バルクホルンにシャーロット・E・イエーガー。502でも前衛のブレイクウィッチーズの4分の3はおっぱいが大きい。504のドミニカ・ジェンタイルに至っては最前線であのおっぱいである。

「つまり、おっぱいが加わったあたしはJFWレベルもあり得る……!?!」

「待って、そういう意味じゃないんです」

うっかり間違った方向に援護射撃をしてしまった。

「ハギは小さいからな。胸に余分な重りを積むとバランスが崩れる。そのままでもいい」

「それ、暗に私のバランスが悪いって言ってます?」

「トップヘビーでも射撃に役立つているなら問題ないだろ。縮め」

「腕げろ」

「待ってハギちゃん。今のはただの悪口ですよね?」

純然たる僻みから飛び出した看過できない言葉に伊予が口を開く。「ええ僻みですよ。それが何か?どうせあたしは機動力全振りのデコイウィッチです。伊予みたいに射撃が上手ければもつと皆の支えになれるのに。だから、少しくらいおっぱいが育ってほしいって思ってもいいじゃないですか」

「……はい?」

信乃の言葉に伊予が眉を吊り上げる。

確かに信乃は射撃が苦手だ。だが、それを克服しようと射撃訓練を欠かすことは無いし、何よりもそれをカバーするために常日頃から工夫や努力を重ねている。

短所を克服するのも大切だが、それと同じくらいに長所を生かして部隊や仲間たちに貢献しようとする姿勢を伊予は純粹に尊敬していたのに。

それが何だ。どうせだとかデコイだとか。信乃がそういういった役割に徹することで皆が助けられているというのに。そんな卑屈な気持ちで信乃は自分の身を犠牲にしていたのか。

ハギちゃんは自分の事を何もわかってない。すらつとした体も彼女の可愛い所だという事も含めて。

「そんなに射撃にこだわる必要なんて無いって言ってるんです。ハギちゃんが頑張ってる事くらい皆解ってるのに、そんなひねくれた事ばかり言ってる。おっぱいだけじゃなくて心も小さいんですね」

吐き捨てる様に言い放つ伊予。

「あ？何ですか伊予。やりますか？模擬戦ですか？」

「は？いいですね。やりましょうか？決着付けてやりましょうか？」

売り言葉に買い言葉。肩をぶつけ合いながら瑞鶴の通路をハンガーへと向かっていく馬鹿二人。

は、と苦笑を浮かべて徹子が肩をすくめる。

「何かあったのか？」

「あ？」

背後からの声に徹子が顔だけを向ける。いけ好かない奴が来た、という顔にも涼しい表情を浮かべ、遣欧艦隊のウィッチの司令官……新藤美枝が苦笑交じりに近づいてくる。

「いつから見てたんだ」

「つい今だよ。若がとち狂った理論を展開し始めた辺りかな」

「オレは割と真面目に言ったんだがな」

「それはそれで困るな。若にはもう少し私がいなくなるという自覚をもって貰いたい」

508JFW『マイティウィッチーズ』が創設されれば、美枝はそ

この戦闘隊長を務めることになる。そうなれば、必然的に徹子もこの部隊の中核を担う事になる。否、担わざるを得ない。今までのように前線を飛び回る機会は必然的に減ってくるのだ。

「あの子達ももう少しベテランに近づいているという自覚をもって貰いたいものだ。いつまでも私や若の後ろを見ていては……」

ただでさえ遣欧艦隊には癖の多いウィッチが多い。口の悪い連中は『JFWに選ばれなかったあぶれ者』とか『他国のウィッチにお見せ出来ない変人揃い』などという者があるが少し違う。

『癖が強すぎて多国籍部隊では扱いきれない猛者の集まり』が遣欧艦隊のウィッチ達だ。

そして、それを何よりもの誇りとする、扶桑皇国の最精鋭だと自負するウィッチ達である。

そんなウィッチ達を長年仕切って来たのが新藤美枝だ。

「まあ、あれでも空の上なら頼りになる。あの二人なら、良いコンビが組めるだろ」

前衛の信乃と後衛の伊予。互いを補い合うにはこれ以上ない組み合わせだ。

「……そうか。若がそう言うのなら、大丈夫だな」

ぽつり、と新藤が呟く。ちらり、と胡散臭げにその横顔へと目を向けるが、肩をすくめてそれ以上は追及しない。

「予定通り、午後からはヴェネツィアに向かう」

「ああ、頼む」

目的地は504JFW『アルダーウィッチーズ』基地。

補給物資を輸送する輸送機の護衛の名目だが、物資の流れや隊員の動きが最近妙に活発だ。それに、近々何か動きそうな気配があるという諜報部の報告もある。

戦闘隊長の竹井醇子とのつてもあるので、遣欧艦隊として探りを入れにいくのが目的だ。

「……いいの？待たなくて」

ちらり、と、伊予達が向かった方へと目を向けて美枝が尋ねる。

「どうせ文句を言われるのがオチだ」

今回の任務は単独行動だと言ってからというもの、顔を合わせるたびに嫌味っぽいことを言ってくる僚機の顔を思い出して苦笑を浮かべる。

「それに、オレ以外の奴と組めば、少しはあいつもオレの有難さを理解するだろうしな」

「きつと彼女も同じことを言うだろうね」

「言うだろう、じゃない。もう言われた」

その言葉に思わず美枝がくすり、と笑いをこぼす。

「成程ね。それでもし、若よりも良いなんて言い出したら、どうするつもりだい」

その言葉に徹子がぽつり、と呟く。

「その時は、素直に成長を喜んでやるさ」

## 2-1. HAGI SPECIAL

雲一つない青い空に二筋の航跡雲が伸びる。

冬の青空は高く澄み渡っており、まるで天使がペンキで塗りつぶしたようにどこまでも続く青が広がっている。

ロマーニヤの北西部に位置し、かつては独立した海洋国として栄えた町で、現在もロマーニヤの有数の湾岸都市、ジェノヴァ。

ロマーニヤ海軍が駐留する軍港のその一角に停泊する扶桑海軍遣欧艦隊機動部隊の旗艦である空母『瑞鶴』から沖合数十キロの地中海洋上。

真つ直ぐ伸びていた航跡雲がゆっくりと弧を描く。周囲には二人以外、ウィッチの姿も、航行する船舶の姿も見当たらない。

「やっぱり、54型でも振り切れませんか……」

先を飛ぶウィッチ……『零式54型』を駆る信乃が呟く。

先程までの胸の話をしていた時とはうってかわったような、抑揚の少ない声。

冷静というより、無感情。背中に刺さるチリチリとした感覚から自分が追い詰められている状況を把握しながらも、その顔には焦りの色は浮かんでいない。

「じゃあ、これで私の12連勝かな」

そう帰って来る返事は信乃のそれとは異なる。相手を挑発するような声色。

扶桑の最新型飛行脚『紫電改41型』を履いた伊予が信乃の背後にぴたりとついている。

端を吊り上げ笑みを浮かべた口元とは裏腹に、使い魔のワタリガラスが獲物を狙う時のように。冷徹なまでに醒めた瞳がぴたりと信乃の背後を見据えている。

「かもしれませんか」

面白くも可笑しくもない、信乃らしくもない醒めた答え。

……まあ、空の上でこんな安い挑発に乗るはず無いですね。

伊予が引き金を引こうとした次の瞬間、するり、と信乃の姿が照星

から外れる。

だが、これも想定内とばかりに弾き金にかかった手を離し、鋭く旋回しながら高度を落とす信乃を追うように紫電改を横にすべらせ、その背を追う。

「相変わらず旋回性能は21型並みですね……」

信乃の背後を追いながら、伊予が『でも』と呟く。

欧州の、否、世界中に存在するストライカーユニットの中でも今だに最高水準と言われる零式の旋回性能は零式が紫電改に勝っている唯一の長所だ。

信乃が伊予に勝つためには、旋回性能をフルに活用できるドッグファイトに持ち込む意外に方法はなく、そして、それを真つ向から追いかける伊予もその事は重々承知だ。

そして案の定大回りしてオーバーシュートしかける紫電改だが、次の瞬間フラップを落とすと同時に急激に旋回。

「追いついたよ、ハギちゃん」

振り切ろうとする信乃の背後に伊予が再度食らいつき、手にした模擬銃を再度構える。

紫電改の特徴の一つでもある自動空戦フラップ。

戦闘中のストライカーの挙動や魔力の流れを感知し、自動的に旋回を補助する為に離着陸用のフラップを自動的に作動させることで零式に近い急旋回を可能にする紫電改独自の装備だ。その旋回性能は高く、伊予程の技術を持つウィッチならば、零式相手にでも追隨が可能だ。

だが。

「何度も同じ手を食らうとは思わない事ですね」

小さく笑みを浮かべると信乃が旋回方向とは逆方向へ足を振る。そのまま機体が一瞬横滑りを見せ、唐突に伊予の目の前に無防備な姿をさらけ出す。

「……っ!？」

先に感情を表に出したのは伊予。予想していなかった挙動に、咄嗟に伊予が模擬銃の引き金を引く。

だが。

それよりも早く信乃が体をしならせてエンジンに魔力を叩き込み、更に内側へと鋭くターン。

零式の限界一杯のロールから、更に一回り鋭い旋回に、伊予の放った模擬弾は標的を失った宙を打ち抜く。

思わぬ挙動に一瞬伊予が驚いた様な表情を浮かべるが、すぐに気持ち切り替える。

射線から離脱した信乃はそのまま急上昇により優位高度を取ろうとする。

だが、それは失策だ。

ロールを重ね速度の落ちた零式では、紫電改の上昇速度に敵わない。

当然伊予はその背を追う。自動空戦フラップが畳まれ、誉魔導エンジンの高出力と共にユニットを一気に上へと加速させる。

一度離れかけた信乃との差がみるうちに縮まる。

無防備に背を晒す信乃に向け、伊予が手にした模擬銃を構え、目の前の信乃に『一瞬』で『正確』に『自動演算』で狙いを定める。

特に狙撃に適した固有魔法だが、自分の弾の着弾位置が正確にわかる能力は、近接戦闘でも効果を持つ。

ぴたり、と銃口を固定し、後は引き金を引けば、信乃の背に真っ直ぐ模擬弾は吸い込まれ、模擬戦は終わる。

終わる？

本当に？

ふと、自動演算とは異なる逡巡が、ほんのコンマ一秒にも満たないうちに伊予の頭を駆けまわる。

何でハギちゃんは『敢えて』背後へと回りこもうとしないで、不利なはずの優位高度を取る事を選んだの？

もし狙いがあるとするのなら、それは何？

だが、その思考の答えが出るよりも早く、伊予のウィッチとしての経験が、勘が、はつきりと今の状況を正確に察知していた。まずい。

釣られた。

自動空戦フラップには一つだけ、大きな欠点がある。

フラップを展開、あるいは収納する事で様々な場面で高い能力を発揮できるという利点は、逆に言えば『そのどちらか』でしか動けないという事だ。

つまり、今フラップを収納した紫電改では、零式の得意とする急な挙動変化に対応できない。

「油断大敵です、伊予」

急上昇していた信乃の54型が、唐突にすとん、と真下に落ちる。もし、フラップが閉じられていなければ、或いは伊予も零式を使用していたならば。

信乃のその『技』について行けたかもしれない。

その技の存在を伊予は失念していた。零式特有の、零式にしか行えない逆転の秘策。

「つばめ返し……」

伊予が呟く。

急上昇の失速を利用した垂直降下。

上昇に振った今の状態では、即座に信乃の動きに対応できない。真下に落下しながらも器用に体勢を整え、直上へと銃を構える。

だが。

思わず信乃が目を見開く。

信乃と伊予が交錯した直後。

太陽に体を向け、信乃に背を向けたまま。

伊予の伸ばした手の先。

模擬銃の銃口だけが、真っ直ぐ信乃の方へと向いている。

「……まで『自動演算』済って訳ですか……!!」

チリチリとした感覚が体を刺す。避けようにも、失速状態では思うように動けない。

「ちがうよ、これは私の勘。でも」

伊予が叫ぶ。

「私の勘は結構当たるの!!」



詰みと、詰み。

伊予よりも先に固有魔法で勝敗の結果を悟った信乃が、ああ、そうか。と。思わず苦笑を浮かべる。

やっぱり、伊予は強いですね。

次の瞬間、二人の手にした模擬銃からほぼ同時にペイント弾が放たれた。

「はあ……まさかあそこで反撃されるとは思いませんでした」

「それでも、結果だけみればハギちゃんの作戦勝ちです。最後のは偶然ですから」

『瑞鶴』へと戻る空の上で、ペイント弾で黄色く汚れた互いの姿を見やりながら伊予と信乃が苦笑を浮かべ合う。

「さつきまでの事は謝ります」

そういつて信乃の目が一点に……伊予の胸へと向けられる。

伊予の胸元に広がる模擬弾のペイント。もし胸が小さかったら当たっていなかったかもしれない。

「あたしが間違っていました。やっぱり被弾面積が増えるだけの胸なんて無い方が良いでしょうね」

「私の方こそすみません。こんな近くでもここにしか当てられないなんて、やっぱり少しは練習したほうが良いでしょうね」

「それは嫌味ですか？」

「そんな回りくどい事はしませんよ。ただの悪口ですから」

「成程。垂ればいいのに」

模擬弾を食らったせいで服のあちこちを黄色い塗料で汚しながら、伊予の言葉にふくれっ面を浮かべる信乃。

まるで泥んこ遊びに夢中になった後の子供のようだ。と内心で思うが、同じようにペイント弾で体を汚しながら苦笑を浮かべている自分も、はたから見れば同じ穴の貉なのだろうな、とも同時に思う。

最も、それ以前に、このくらいの軽口で険悪になるような仲ではない。

伊予と信乃の関係を言葉で表すなら、友人であり好敵手。

伊予は兵学校を飛び級で卒業した後、教師としてとどまる事を要請されたものの、それを断り欧州へ渡ったエリート。一方の信乃は速成訓練を受けてすぐに欧州でネウロイ侵攻の初期から戦場を渡り歩いた叩き上げ。

射撃を得意とし、遠距離からの狙撃や一撃離脱の戦法を得意とする伊予と、固有魔法チリチリと経験を活かし、近距離での巴戦による囿や攪乱を得意とする信乃。

まるで水と油のように正反対な二人だが、戦闘に置ける実力に関して言えばほぼ互角。

欧州に来たその年に1日で10機の撃墜をカウントした伊予と、同じく13日で18機の撃墜を記録した信乃。

奇しくも二人共扶桑海軍の記録を打ち立て、乗っているユニットの性能がそのまま模擬戦の結果に反映されるくらいには、互いの実力は伯仲している。

だが、それ以上に、二人の間柄は極めて単純だ。

同じ空母で同い年の、気の置けない友人。

それこそ、互いの気になっている所を互いにぐさぐさと刺し合える程度には親しい間柄である。

「そういえば、さっきの急旋回。あれ、狙ってやったんですか？」

伊予が尋ねる。

それは模擬戦の最中、ロール中に横滑りを利用して更に急旋回を重ねた挙動の事だ。

「ああ。あれですか」

信乃が伊予の言葉に口を開く。

「最初のロール中に足を外に蹴りだしてからエンジンの回転を一旦落とすんです。そうすると体がそのまま横滑りしますが、体を内側にちよつと落としてからエンジンに魔力を叩き込むと、フェイントからの急旋回になるんです。失速からの立て直しの応用ですね」

「ハギちゃんって時々しれつとそういう事思いつきますよね」

苦笑を浮かべる伊予。

「あの技をあたしは特別に『ハギスペシャル』と名付けようと思うので

すが」

「それは止めた方がいいよ、絶対に」

苦笑を引つ込め真顔になる伊予。どうしてこの子はそういう事をするのか。

昼下がりの地中海を背に、二人のウィッチはジェノヴァへと、そして、そこに停泊する遣欧艦隊旗艦『瑞鶴』へと向かう。

眼下に広がる地中海の向う、一際目を引く近代的な軍港と、その周辺に広がる昔ながらのロマーニャの漁村らしいカラフルな建物という独特な光景が広がって来る。

二人の見慣れた、現在遣欧艦隊が拠点としている『瑞鶴』の停泊する港町、ジェノヴァである。

「瑞鶴コントロールへ、こちら藤田一番、着艦許可を求めます」

停泊している瑞鶴に藤田が無線で着陸許可を取る。

くるり、と瑞鶴を一周するように上空で旋回し、停泊してる瑞鶴の背後から、飛行甲板にむけて高度を下げる。

空母への着艦とは、身もふたもなく言えば緩やかな墜落に近い。地面に着陸するのと比べ、難易度的にも技術的にも格段の差がある。

最も、扶桑海軍のウィッチ達は速成レベルからして既にこの空母着艦の技術を叩き込まれる為、新人だろうがベテランだろうが余程の事が無い限りは着艦に戸惑うことは無い。

減速と同時に上体を起こし、着艦用のロープに手をかける。ユニットの速度が出過ぎていれば腕だけで体を支えきれずに体ごとロープにぶつかる事になる。それでも止まれるし、そもそもその為のロープなのだからそれでも構わないが、航空母艦勤務のウィッチたるもの、そんな無様な姿を周囲に晒すわけにはいかない。

伊予も信乃も殆どロープをしならせる事無く体を起こし、そのまますんと、と甲板へと降り立つ。

着艦時のロープにはそっと触れるだけ。揺らしたり、握ったりするのは問題外。

それが、扶桑の航空母艦乗りの矜持である。

「お疲れさまでした。今回は上手く着艦出来ましたね、飛曹長」

「当たり前です。なんて言ったってあたしですよ?」

顔なじみの整備兵の言葉に信乃が鼻を鳴らして答える。

「一ヶ月も空母から離れると感覚が鈍るんだって言い訳していた人がどこかにいましたよね?」

「あたしですよ。ユニット傷つけてすみませんでしたね」

そして、その矜持に反すれば少なくとも半年はそれを基にからかわれることになる。

そして更に度が過ぎれば『ゲストロイヤー』だの『クラッシュヤー』だの『ついてない』だのと不名誉な異名を付けられる事もある。

そのまま甲板勤務の整備兵に促されて後部の格納エレベーターへ。ウィッチ二人にはいささか大きすぎるエレベーターがゆっくりと下降して格納庫へ。居並ぶ艦載機の合間を縫い、ストライカーユニットが並ぶ艦載ウィッチ達の整備区画へと向かう。

「それにしても、随分派手にやられましたね」

「やられてません。相打ちです」

甲板員が模擬弾のペイント塗れになった零式54型と、その上でしれつとした顔をしている信乃の姿を見て苦笑交じりに肩をすくめる。

ストライカーユニットの整備だけではなく、ペイントの汚れを落とすのも整備兵の仕事だ。普通なら余計な仕事を増やしやがって、と思うのも無理はないが、夜遅くの作業をしている甲板員たちにとって菓子や煙草、酒などを差し入れに来るこの小さなウィッチは整備兵たちからすれば割と『話が分かる娘』の部類に入る。

兵士とは言え人間だ。任務に私情を挟むなど言われれば『はいそうですね』と頷くものの、そんな事を口を酸っぱくいつてくる上官と、『まあ、これでも飲んで頑張ってください』と言って一升瓶を差し出してくるウィッチなら、口に出さなくとも後者を可愛がったり、人気が集まるのは当然であり、必然的に整備の優先順位が高くなる。

「ハギちゃん、お疲れ様です」

整備兵と話をしていると、背後から声がかかる。

振りかえると、既にストライカーを脱いだ伊予がこちらに向かって歩いてくるところで、それを見た整備兵が思わずばつが悪そうに眼を

反らす。

「……どうかしましたか？」

「ああ……いえ。お疲れ様です、藤田中尉」

落ち着かない様子で返事を返す整備兵と、その様子に首を傾げる伊予。

伊予が気が付いているのかいないのか、被弾している箇所は普段から男性乗組員の視線を密かに釘付けにしている部分だ。

そんな部分がペイント弾で汚れた上にべつとりと素肌に張り付いて形を強調している様は、男所帯の甲板勤務では相当に目の毒なのである。

だが、視線に気づかれる事はもちろん、その事を下手に指摘して『あの整備兵が私をいやらしい目で見てました』などと訴えられては、下手をすると軍法会議ものである。

更にそこまではいかなくとも、甲板勤務、特にウィッチと触れ合う機会が多い整備兵は、それこそ普段見られないようなウィッチのアクションお宝場面に出くわすこともある。

もしそういった場面に出くわした幸運な甲板員などは、うっかりその事を口走ったりしようものならその日の整列で上官からやっかみ交じりの『教育』が行われることもある。そのため、そう言った場合は見て見ぬふりをしつつしっかりとその場面を記憶に刻み付け、決して口外しないのが甲板員達の暗黙の了解である。

「……何というか、もう少し危機感というか、慎みを持ったほうが良いんじゃないですかね、藤田中尉」

ぽつり、と呟きストライカーから飛び降りる信乃。

前線勤務の経験が少なく、男所帯をあまり知らない伊予はそう言った事には割と無頓着だ。

勿論瑞鶴内の風紀が前線と比べて高い水準にあるのも一因であるが、逆に前線経験が長いウィッチの中は男性職員の視線や動向に神経質になる者もいる。

まあ、年頃の少女が行方不明になったと思った自分のズボンが男性兵士のテントから出てきた経験をしようものならその後は自分の立

ち振る舞いにも相応に注意を払うようになるのは必然であるし、そういった事案は割と少なくないどころか、腕白な男性兵士たちの中にはそういった事を兎角武勇伝のように語るものまでいる始末である。もし露見すればただでは済まないだろうが。

ちなみにそのせいもあるのか、かの501などは、ウィッチと一般の男性兵士との関りを一切禁止しているらしいが、現実問題、何か『間違い』が起これば、ウィッチだけではなく、関わり合いのあった男性にまで罪が及ぶ上、罪は男性の方が重いので、あながちウィッチの一方的な自衛というだけでなく、男性兵士の安全保障という面でも合理的な措置といえるのかもしれない。

「まあ、ここにいる以上は気にしなくても良いですかね」

無関心を決め込もうとしながらもちらちらと時折視線を短く寄越すだけという、極めて紳士的な態度を見せる整備兵の様子を見て見ぬふりしながら、伊予の元へと歩み寄る信乃。

「改めて、ご苦労様です」

「へ？あ、はい、お疲れ様です、伊予」

ぴしり、と両足をそろえ、海軍式の敬礼をする伊予とは対照的に、だらり、と形ばかりの敬礼をして見せる信乃。仮に新兵教育の場でこんなふにやっとした敬礼を見せれば即雷が落ちてくるに違いない。

「萩谷、敬礼くらいいきちんとしたまえ。今はまだしも、後輩の前でそれをされては示しがつかない」

ほら、こんな風に……。

「え？」

次の瞬間、頭をこつんと叩かれる感覚。

驚いて振り返ると、そこには背の高いショートカットの女性が切れ長の目でこちらを見据えている。純白の士官服に縫い付けられた階級章には三本の線に一つの星。

思わず信乃が背すじを伸ばす。

「新藤少佐!? いつからここに……」

「つい今だよ。二人が戻ってきたと聞いてね」

ちらり、と伊予を見る。恐らく位置的に気が付いていたに違いな

い。だからこそこの敬礼だ。自分にではなく、音もなく自分の背後に立っていた上官である新藤美枝に対しての。

この中尉殿、こう見えてこういうしたたかな所があるのだ。

「それで？萩谷、いつまでそうやって突っ立っているのかな？」

「は。失礼しました新藤少佐。萩谷信乃飛曹長、飛行訓練よりたつた今戻りました」

よろしい、と大仰に頷く美枝に促されて信乃が敬礼を解く。

何というか、こういう微妙なユーモアを真顔でするのだ。この親愛なる司令官殿は。

「……伊予……じゃなくて藤田中尉。気が付いていたのなら声を掛けてください」

「目で合図はしましたよ。それに、ハギちゃんが普段からしつかりしていればこんな事にはならない筈です」

「普段からとか、どの口が言いますか？」

「私は真面目ですよ？」

「あたしもです」

「二人共、仲が良くて結構」

こほん、と一つ咳払いをする美枝に伊予と信乃が慌てて背筋を伸ばす。

「ご足労をおかけしました。本来であれば報告はこちらから伺うべきでしたが……」

「ああ、気にしなくていい。それに、その恰好で部屋に入られてもね」

伊予の言葉を遮りながらもくすり、と笑う美枝。ペイント弾でベトベトになった姿で掃除したばかりの部屋を汚されるのはいただけない。

「後、これからはきちんと私に話を通してから訓練を行うように。いつも事後報告で事務を丸投げされては困るよ」

「はい。尽力します」

直訳すれば頑張ります。つまり、結果を出すとは言っていない。

まったくこいつは、という顔で苦笑を浮かべる。大人しそうに見えるてその実いざとなれば独断で動くことも厭わなくなってきた辺り、大

分先輩たちに毒されてきている。

先日も徹子と信乃が臨時配属されていたガリアのリヨン臨時基地への輸送任務の際、輸送機の中にこっそり補給品を水増しして乗せていたが、そのまま黙認していたらその余分な弾薬ごとリヨンに残りかねないので無理やり降ろさせたばかりだ。

いちいち伺いを立てなければ動けないのはもちろん論外だが、独断が過ぎるのも困りものだ。

「それよりも、わざわざ新藤少佐直々に出向いて来られるなんて、何か火急の事態でも？」

伊予が尋ねる。司令官といっても部隊ごとに氣質が異なり、自ら足しげく部下の元に出向くものもいれば、指令室でどっしりと構えるものもいる。前者は度が過ぎれば些か軽く見られ、後者はふんぞり返って偉そうだと言われることもある。

美枝はやや前者よりの中間といった所だろうか。必要とあれば部下の元にも出向くが、意味も無くそれをするような人物でもない。つまり、わざわざ出向いたという事は、それなりに意味がある。

伊予はそう捉えたのだが。

「……いや、そういう訳じゃ無い」

意外な答え。

きよとん、と似たような表情を浮かべて自分を見返してくる伊予と信乃。あれだけ子供のような喧嘩をしていたのが嘘のように息の合った顔をしている。

仲が良くて結構。

今回ばかりはどうやら徹子の見立ての方が正しかったようだ。

それならば心配は無い。

くすり、と笑みを浮かべ、美枝が口を開く。

「二人共、そのペイントの汚れを落とした後で指令室へ……ああ。急ぎじゃないから、きちんとその汚れは落としてくるように」



## 2—2. Let's go to Kaunaha

「ハギちゃん、きちんと頭も洗ったほうが良いですよ」

先に湯船につかった伊予が信乃の体を洗う様子を見ながら口を開く。

「ペイントを落とすのが先です。それに、あたしは一日くらい平気ですから」

伊予の言葉に肩をすくめる信乃。

空母において真水は貴重だ。使える水は毎朝支給されるウィッチ用のオスタップ一杯のみ。

ウィッチ用のオスタップは男性兵士の使う物に比べて大きい上、現在は洋上ではなく港に停泊しているため、支給される水の量は洋上航行中や戦闘行動中に比べて多いが、それでもトシゴロの少女からすれば些か物足りない量なので、上手く節約する必要がある。

身体を洗うにしても上手く水を節約するためのコツがあり、普段ならそうやって頭を流す分の真水を確保するが、ペイントの汚れを落とすためにはそうもいってられない。

特に被弾箇所が多い場合は後から入るものの迷惑にならない程度に湯船の海水を失敬したり、余りに被弾が過ぎた場合等、場合によっては航空甲板から『誤って』落ちる事で強引にペイントを洗い流す方法もある。

だが後者の場合、その後の叱責はまず免れないので、どうしようも無い時の最終手段である。

否、それ以前にこれは上官が無知な後輩を揶揄う為の冗談話の類なのだが、その冗談話を間に受けて実践してしまう素直な若手も一定数いたりするのだ。

……そう。あくまで冗談なのだ。よくもまあ真顔でとんでもない事吹き込んでくれましたね若。飛行甲板ではせいぜい背後に気を付ける事ですね。

「伊予って結構変なところに気を使いますよね。若や西沢さんは気にしないですよ?」

「あの二人が気にしないから大丈夫って思わない方がいいと思うよ？」

見習ってはいけない先輩ツートップの名前をそこで出されても。

「前線じゃあ川が見つからなければ一週間くらい体を洗う余裕がないなんてさらにありますよ」

それでも行水が出来ればまだマシなほうで、北の方にいけば川があっても凍り付いてたり、下手に飛び込むと命にかかわるような気温だったりもする。最も、汗も凍るような極寒の中、体の汚れを気にする余裕があるかどうかはまた別の話だが。

「うん。それは解るけど、まだここは前線じゃないよね」

ペイント弾を使用した模擬戦の後、のんびりと湯船につかる余裕がある部隊などは欧州ではかなり贅沢か、相当に後方か、或いはその両方か。

それでも、そういった部隊、或いは状況に置かれている事の有難みをかみしめるのは決して悪い事ではない。どのみち欧州の情勢は、昨日まで安全だったはずの場所が一夜にして最前線に変わったりするなど酷く不安定だ。あの時あすれば良かった、こうすれば良かったという後悔はなるべく残さない方がいい。

模擬弾のペイントをあらかた落とし終えた信乃が立ちあがる。瑞鶴内のウィッチ専用の浴場は基本的に一か所、下士官から佐官まで、大まかに時間は指定されているものの、全ウィッチが共同で使用する。少ないようにも思えるが、1500人近くの人員を収容する正規空母内で、足を伸ばしても10人近くが同時に入れる大浴場を備えた浴室を20人前後のウィッチだけで独占するのは、他の男性乗組員からすれば非常に羨ましい話だろう。

ふと、浴場の湯船に足を付けた信乃が眉を顰める。

「随分油が浮いてますね。あたし達の前に誰か模擬戦しましたっけ？」

「今日はしてない筈だけど、この時間だし、昨日の湯船に浸かった子達の残りじゃないですか？」

ガリア解放後、遣欧艦隊の機動部隊も大規模な再編制が行われ、扶

桑からまとまった数の新人のウィッチが各地に配属された。連日続く訓練の中、空母での体洗いに慣れないウィッチも少なくない。当然、そう言った子が湯船に使えば油や垢といった汚れが湯船に残る。年功序列の意味以外にも、新人たちの入浴が一番最後に回されるのは艦隊生活に慣れていないが故にお湯を汚しやすいというのも理由の一つだ。

「まあ、それなら良いんですけど……」

そう言いながら信乃が湯船に体を沈める。やや熱めのお湯が一瞬体を刺すように感じるが、次の瞬間押し寄せるのは圧倒的な心地よさだ。

信乃が気にしていたのは油で汚れるというよりも、油を浮かせた犯人という濡れ衣を着せられるかもしれないという事だ。

特に、一番風呂を頂かる下級士官の後は上級士官や佐官がゆっくりと風呂に浸かるので、真っ先にお湯を汚そうものなら、部隊や上官次第では大目玉である。

お湯に肩まで浸かり、はあ、と緩んだ顔でため息を吐く信乃。

空母や戦艦といった自国の戦艦はもとより、JFWに所属する扶桑のウィッチの中にはわざわざ他国の基地に扶桑式の風呂を作らせる者もいるくらいだ。扶桑人以外のウィッチ達からすれば何故そこまでお湯につかる事に執着するのか理解できないものも多いと聞く。

だが、こうして暖かいお湯に肩まで浸かると、やはり、サウナやシャワーではなく、扶桑人の生活に風呂は欠かせないものだと思改めて思う。

「余りのんびりは浸かってられないのが残念ですね」

ふにやりと緩んだ顔で呟く信乃。そもそもの美枝からの命令が『体を洗え』である以上、風呂に浸かるのは余計な行為だ。

だが、体を洗う隣で浴槽から暖かそうな湯気が上がっていれば、それは最早入れと言っていても当然だ。そもそも急がなくていい、という美枝の言葉も裏を返せば風呂に入っても良いという意味だ。きつとそうだ、そうに違いない。

「そうですねえ。ああ、このまま寝ちやいたいなあ……」

信乃の言葉に答える伊予も、その表情はだらしなく緩んでいる。二人して都合の良い解釈を決め込むと、ぼんやりと伊予が目の前の壁を見つめる。

軍艦にオーシャンビューなど望めるわけもないが、窓の一つもない殺風景な壁を見ている面白みは無い。扶桑の銭湯などは暇つぶしにか富士山などの絵が描いてあったりもするが、今度新藤の許可でも貰ってこの殺風景な壁に何か絵でも描いてやろうか。

そんな他愛もない事を思いながらちらり、と横を見る。

「……何でいきなり人を残念そうな目で見るんですか？胸ですか？」  
「そんな目してないです！」

ジト目でこちらを見ていた信乃と思い切り目が合った。

いや、最終的な信乃に関する結論が『色々ともつたいな』なので無意識のうちにそう言った顔をしていたかもしれないが、どちらかというと褒めていたのだ、内心で。

「後、相変わらず伊予の胸は生存確率高めな感じですね」  
「どういう評価ですか!？」

伊予の大きなバルジがぷかぷかと湯船に浮いている様を見て信乃が呟く。まるで広大な海原に浮かぶ空母ならぬ乳母。脂肪の塊の癖に。きつと海に落ちた時は良い具合に救命胴衣のかわりを果たすに違いない。

「そういうえば伊予、一度被弾して海に着水した時、半日くらい救助を待って浮かんでたって言っていましたね。やっぱりそこが浮くから……」

「いいからそんなにじつと見ないでください!!」

「伊予だってあたしをってます。だから見ても問題ないはずです」  
「そういう問題じゃありません!!」

慌てて胸を隠すように湯船に沈めようとする伊予。くっ。抵抗するな。沈め、沈めよ。

「……まあ、そういう仕草とか、見る人が見たら興奮するんでしょうね」

その言葉に胸を湯船に押し付ける行為をぴたり、と諦め、代わりに

頬を赤らめながらブクブクと口元を湯船に沈める伊予。

頬が赤らんでいるのは湯船に浸かったせいだけではなさそうだ。

「……変な事言わないでください」

咎めるように横目で視線を送って来る伊予。

「変ですか？そういう伊予も魅力的だという意味だったんですが」

「変な事ですよ」

はあ、とため息をつく。恥じらう姿が可愛いなんて台詞、同い年の友人に言われても嬉しくもなんともない。

「……そろそろ上がりましょうか。余り新藤少佐を待たせるわけにはいかないですから」

気が付けば随分と長風呂をしてしまった。否、時間としては短かったが、随分と温まった気がする。

ざばり、と湯船から上がり、体についた塩を拭う。

海水を用いた風呂は保温性が高く、湯冷めしにくいという利点もある。ただ、傷口等がある場合は滲みる事と、そのまま上がると体に塩がこびりつくという欠点もある。その為、上がる前にきちんと落としておかなくてはいけない。

そう、色々と面倒だが、それを踏まえても風呂に入れるというのは素直にありがたい事なのだ。

「失礼します。藤田、萩谷両名参りました」

扉をノックし返事を待つて室内に入る。変えたばかりの新しい士官服を身を纏い、海軍式の敬礼を行う伊予と信乃。

「お疲れ様……ん？萩谷がその恰好なのは珍しいね」

士官服姿の信乃を見て、美枝が意外そうな顔を浮かべる。

「飛行服は代えも含めて洗濯中なので……」

一着は昨日洗濯に出して今は干している途中。おろしたてのもう一着はつい先ほど洗濯に出さざるを得ない状況になってしまったので普段はあまりしない格好をせざるを得ない。

「いや、良く似合ってる。普段からそうしていれば少しは先輩らしく見えるのにな」

ウィッチとしての年数ならば瑞鶴でも上から五本の指に入るくら

いのベテランなのだが、年齢や外見なども相まって良くも悪くもそうは見えないのが信乃というウィッチだ。

「また汚してしまいそうで落ち着かないです」

それに、洗濯をした後に限って服を汚してしまうというのは、古今東西よくある話だ。

一応特務士官なので制服は下士官のセーラー服ではなく士官服なのだが、信乃の士官服は徹子のお古を仕立て直したもので少し丈が長い。その為、何となく着させられている感じがして落ち着かない。

「まあ、丁度良かった。客人の前ならその恰好の方が示しがつく」

その言葉に伊予と信乃が互いに顔を見合わせる。

「どなたかいらっしやっていますか?」

「ああ。そろそろ来ると思うのだが、君達が先に来てしまったみたいだね……もう少し長風呂をしても良かったんだよ」

「あ、あはー。バレてましたか」

どうやら風呂に入っていたことは美枝にはお見通しだったようだ。

思わず苦笑を浮かべる伊予。

「おっと、噂をすれば……」

廊下の向うから近寄る小走りな足音。そして、次の瞬間。

「髪を乾かしていたら遅れたねー!!ミィはオヘアウチツ!!」

ばん、と勢いよく扉が開くが、その勢いで扉が壁に激突。その衝撃で跳ね返った扉が一瞬顔をのぞかせた金髪の女性らしき人影の顔面に叩きつけられ、その勢いのまま、ばん、と締まる。

え?何、今の?

唾然としている信乃と伊予……ついでに美枝も余りの事に微動だにせず扉の方を見つめていたが。

『オウシット!!ヤンチャなドアーね!!ドアーならドアーらしく素直にオープンするねー!!』

扉の向うから何やら叫ぶ声が聞こえたと思ったら、少しの間を置き再度扉が思い切り開かれる。先程とは比べ物にならない勢いで、壁にぶつかった扉が蝶番ごと壁から根こそぎこじ開けられ、扉だった鉄の

板はそのまま床へごとりと、と転がる。

「ハーイ、ミーはオヘア、キャサリン・オヘアねー。元合衆国海軍の22歳、今はテキサスの気ままなカウガールねー」

そういつて再度飛び込んでくる背の高い女性。

金髪碧眼、長く伸びた跳ね気味のブロンドを頭の後ろで一つにまとめ、底抜けに明るいきりベリオンの太陽の様な明るい笑顔を浮かべながら頼んでもいない自己紹介を始める。

「……あ、はい。ようこそミス・オヘア」

珍しく間の抜けた声で答える美枝。流石にいきなり扉を吹っ飛ばされるとは思ってもみなかったようだ。

「ソー、元気がありませんねー!!挨拶は大事だとトモコも言っていましたよー!!コンニチハ、扶桑の皆さん!!」

扉を破壊する行為は元気とは言わない。少なくとも、扶桑の常識の範疇ならそれはテロリストだ。

「アーハー?コンニチハは扶桑の挨拶では?コニチハ?コンニチハ?」

「アィムソーリー、ミスオヘア。アィムフソニーズ、アィドントアンダスタンドブリタニッシュ」

「ノー!!ユーは理解してるね!!ブリタニア語喋れない人なんて見た事無いね!!」

片言のブリタニア語でごまかそうとする伊予に斜め上の反応を見せるオヘア。

「ブリタニア語さえ話せば世界全土で言葉が通じるなんてリベリアンの傲慢です!!」

言葉はブリタニッシュ、地図はリベリオン合衆国、主食はハンバーガー。それが世界の全てみたいな顔しやがって。

「藤田中尉。一応その方は客人だ。もつと丁寧に接してくれないかい?」

気持ちには痛い程解るが。

「ノープロブレムね、キャプテンシンドー。堅苦しいのはこう見えて苦手ねー」

こう見えてって、一体本人の中では自分がどう見えているつもりなのか。

「私はキャプテンではないのだが……あー。まあいい。二人共、改めて紹介する」

こほん、と小さく咳払いをして美枝が改めて口を開く。

「こちらはキャサリン・オヘア女史。元リベリオン合衆国海軍大尉。スオムスの義勇独立飛行中隊に所属していた元ウィッチだ」

「キャサリンでいいねー、二人共」

そう言つて笑顔を浮かべるオヘア。だが、美枝の口から出てきた単語に伊予と信乃は揃つて目を丸くした。

「義勇独立飛行中隊って、聞いた事ありません。たしか……」

そこまで言いかけた伊予があ、と口を閉じる。その様子を見たオヘアが意図を悟つたようにくすり、とその口元に先程とは違った温和な笑みを浮かべる。

「氣遣いは不要です。ミーは『いらん子中隊』、氣に入ってるねー」  
スオムス義勇独立中隊。

設立当初は各国から不要とされたか、或いは厄介払いの為に集められた多国籍のウィッチ部隊で、設立当初は『いらん子中隊』という蔑称を付けられる程、部隊としての機能すらしていない状態が続いていた。

しかし、部隊内の結束が高まるにつれ、スオムス本国の部隊と比べても遜色がないどころか、時に上回る戦果を積み重ねたエース部隊として、そして、現在の統合航空戦闘団につながる初の多国籍ウィッチ部隊の成功例として知られるようになった部隊だ。

そして、現在は507統合航空戦闘団として、先日も扶桑海軍からウィッチが一人新たに派遣されたばかりだ。

「失礼しました。知らずとは言え、とんだ失礼を……」

申し訳なさそうに伊予が頭を下げる。

元統合航空戦闘団という事は、すなわち送り出した国を代表するウィッチという事だ。当然、ウィッチとして上がりを迎えても、軍の内外から引く手数多だろう。



「気にしてないねー。それに、頑張ったのはトモコや他の皆ね。ミーは『クラッシャー』なんて言われて皆について行くので精一杯だったねー」

「でも、クラッシャーなんて格好いいです」

「ミーがクラッッシュしたのは主に味方のストライカーね」

「あー……そういう……」

オヘアの言葉に助け舟を出したつもりだった信乃が口を閉じる。そういえば扶桑にも一人いる。

デストロイヤーの系譜がここにもまた一人。むしろ時期的に元祖といつていいのかもしれない。

「ところでユー達の名前をまだ聞いてないねー？」

「あ、私は……」

「こっちは藤田伊予と萩谷信乃。伊予が中尉で信乃が准尉。胸がでかいのが伊予で小さいのが信乃だ」

何というか、雑な紹介だ。一瞬伊予と信乃が抗議の目を向けるが、その言葉にオヘアがぱつと笑顔を浮かべる。

「解り易くていいねー。誰が何の勲章をもらったとか、何の成果を上げたとか言われてもピンとこないね」

つくづく元軍人らしからぬ女性だ。

「じゃあ、ユーがフジタね？」

「ええと、初めましてミス・オヘアああっ!？」

「ミーはキャサリンでいいねー。その代り私もイヨって呼びまーす」

そう言いながらがばつと伊予にハグをするオヘア。欧州流の挨拶に慣れていない伊予が思わず悲鳴を上げる。

「そ、それは階級的にちよつと……」

「ミーは退役してるからノープロブレムでーす!!」

「わ、解りましたキャサリンさん、解りましたから離してください!!」

じたばたと暴れながら腕を振りほどこうとする伊予。名前を呼ばれた事にオヘアが満足したらしく、ようやく解放された伊予がはあ、とため息をつく。

「胸がつぶされるかと思いました」

「そのままつぶれれば良かったのに」

ぽつり、と信乃が呟く。

何だ今の。大きいのもっと大きいのが圧迫され合ってつぶれかけていた。

隕石の衝突か何かですか？

「そっちがシノ？小さくて可愛いねー」

くるり、と信乃に向き直り、次の標的に向けてがばつ、とハグをするオヘア。

「……はい、宜しくです。キャサリン」

胸の隙間から返事を返す信乃。抱きかかえられて足をぶらん、ときせながらもぴくりとも動かない。

「……ハギちゃん、大丈夫？」

「あたし知ってます。こういうのは心を無にして抵抗しないのが一番なんです」

かつて同じような経験をした事があるから解る。下手に暴れると逃すまいとして力を込めてくるので呼吸が困難になる。こういう時は黙って相手の心臓の音を数えながら飽きられるまでじっとしているのが一番。嵐はいつか去るものだ。

「んー。反応が可愛くないね。ウルスラを思いだすねー」

返事以外の反応が無い信乃を離して不服そうにオヘアが呟く。そのウルスラという人はきつと聡明なのだろう。尊敬する。

「……あの、そのオヘアさんはどうして瑞鶴に？それと私達が呼ばれるのに何か関係があるのでしょうか？」

信乃が解放されたのを見て伊予が尋ねる。キャサリンねー、と横で口を挟むオヘアを無視して美枝が口を開いた。

「ああ……ようやく説明が出来る。藤田、明日からの任務は輸送機の護衛だったね」

「はい」

明日0900からブリタニアに向かい、明後日1000よりオライシヤのペテルブルグへ向かう輸送機を護衛。その後バルトランド上

空で502の部隊と合流し、そこで護衛を502に引き継げば任務完了である。

よくあるルートで、今さら復唱するほどの任務でもない。

地味に見える任務だが、航空機による物資輸送は、海路でのそれに比べると物資の量は少ないものの、必要になったものを素早く現地へと届ける事が出来る。

更に、輸送船に比べると艦隊のような大規模な護衛は必要なく、護衛のウィッチが一人か二人いればすぐに輸送機が出せる為、火急の事態が発生した場合等でも直ぐに対応することが出来る。

特に遣欧艦隊のウィッチ達は激戦地への輸送に駆り出されることが多く、今回もネウロイの出撃報告が多いとされるオラーシャへの最短距離を、バルトランド経由で突っ切るルートが取られている。

「それにもう一機追加だ。急で悪いが萩谷も藤田と一緒に護衛任務についてくれないか？」

「え？」

伊予と信乃が目を丸くする。

「ミーの輸送機も一緒に護衛してもらおうねー。ブリタニアで足止めされていたけど、ようやくこれでスオムスに向かえるねー」

そう言つて笑顔を浮かべるオヘア。

「慰問活動だ。よくある話さ」

伊予と信乃に美枝がかいつまんで事情を説明する。

オヘアは軍を退役した現在、リベリオンの故郷で農場を経営している。

だが、かつての仲間達の為にと、私財を投げ打ちスオムスの507の為の義援物資を送り届ける為に欧州に渡ってきた。当然、リベリオンのウィッチも護衛につく手筈になっているが、我々も丁度同じ時期にペテルブルグに向かうので、合流すれば護衛も増えてお互いより安全に任務が遂行できるだろうという申し出があり、それを扶桑海軍の上層部が承諾した。

「かつての英雄が今も戦う仲間たちの為に激戦地に戻るなんて、いかにも新聞記者や銃後の臣民が好きそうな話じゃないか。リベリオン

から打診を受けて、上層部も良い宣伝になると思ったらしい」

美枝が苦笑を浮かべる。まあ、上層部が持ち込んだ面倒を押し付けられるのは何時もの事だが、輸送機の護衛程度なら他の任務に比べて格段にリスクが小さいのも確かだ。

それに、肩書だけは立派なお偉方の『視察』とは違い、物資なら間違ひなく前線の足しになる。喜んで引き受けるわけではないが、507にも扶桑海軍からウィッチを出している以上、無碍に断る必要もない。

「それにしても、私財を投げ打ってなんて、キャサリンってそんなにお金持ちなんですか？」

一方別の事に驚いた顔をする信乃。個人で軍の輸送機をチャーターして物資を送る等、ちよつとやそつとの金を積んでも不可能だし、仮に金があつても軍とのコネクションが無ければ不可能だ。

「ミーは沢山畑を持つてるね。そのうちの三分の二くらいを売れば物資やストライカーが何機か買えるねー」

アバウトにもほどがある。広大なアメリカの土地で三分の二とか言われてもいまいちピンとこない。

「最近畑が広くなりすぎて、馬に乗ってもミーの畑を回るのに2、3日はかかるようになったね。だから余計な分は仲間の為に使おうと思つたねー」

「ストライカーを何機もって……そんなに土地を持っていたんですか？」

伊予が尋ねる。飛行機、それも軍用機となれば相当な値段となる。相当な土地を売らないと購入など出来るわけがない。

「詳しくは覚えてないねー。カウハバから戻つて軍の退職金で買った土地と元々あつたママの土地でトウモロコシを作つて売つて、余つたお金で畑を買つて綿花を作つてまた売つて、余つたお金で土地と馬を買つてジャガイモを育てていたらアステカの国境の辺りまでずっとミーの土地になつたねー」

スケールが大きすぎて矢張りピンとこない。ただ扶桑とは比べ物にならない程スケールが大きな話だという事は何となくわかつた。

「成程、これがリベリアアンドリームですか……」  
ぽつり、と信乃が呟く。

「ミーが故郷に帰れたのも仲間たちのおかげねー。だから、上手くいった分は仲間達に返すのが当然の事ねー」

そう言つて嬉しそうに笑顔を浮かべるオヘア。余程仲間が好きらしい。

「今はカウハバにはいないけど、ユー達にもいつか紹介したいね。トモコにウルスラ、エルマにビューリングにジユゼ……」

そこまで言いかけて、ふと口を閉じる。

「……あー、『あの子』はちよつとやめた方がいいかもしれないね」  
「？」

首を傾げる伊予と信乃。

「ちなみにイヨ、シノ、ユー達は同性愛者じゃないね？」

「はあ!？」

突然の質問に思わず変な声が出た。

「ち、違います!!?ていうか何を唐突に!?!」

「そうです!!抗議します!!あたしはそんなんじゃないです!!」

二人の言葉にオヘアが肩をすくめる。

「やっぱりハルカには紹介しないほうが良いね。普通の子にはちよつと刺激が強すぎて危険がアブナイね……」

ぽつり、と聞こえないくらいに小さな声で呟くオヘア。

だが、オヘアはまだ知らない。

あれから数年が過ぎ、一度士官教育で扶桑に戻った『あの仲間』の『今』を。

そう。

彼女はまだ、カウハバに居るといふ事を。

1330 ヴェネツィア公国 504 JFW 『アルダーウィッチー  
ズ』基地上空

「竹井大尉、もつと高度を取った方が良いのでは？」

ルチアナ・マッツウェイ少尉の言葉に、話を振られた竹井醇子大尉がややあつて口を開く。

「これ以上の上昇はこちらの速度が落ちるわ。仮に既に私達が補足されているとして、そこを狙われるくらいなら、このまま迎え打った方が良いと……」

そこまで言つてちらり、と、醇子が前を飛ぶフェルナンディア・マルヴェツツイ中尉を見る。

「思うけど、今日の一番機はフェルだから。どう思う？フェル隊長」

醇子の言葉に長くウェーブした茶色い髪に、気の強そうな大きな釣り目。やや子供っぽさを残す体にロマーニャ公国空軍の精鋭部隊の証……『赤ズボン隊』の制服を纏ったフェルナンディア……フェルがつぶやく。

「タケイの言う通りよ。皆、上を警戒して」

「「了解」」

幾度となく繰り返されたやり取り。模擬戦が始まって既に30分。優位高度を抑えられたままじりじりと時間を削っていくのもそろそろ我慢の限界だ。

「隊長、やはり……」

「いいから。黙って上見てなさい」

「見えますよ。今日もいい青空ですね」

「うわ、あの雲ゴリラみたい、ウツホウツホ」

同じく赤ズボン隊のウィッチ達……ルチアナとマルチナ・クレスピ曹長が口を開く。

勿論皆、一番の脅威が上からの攻撃である事は理解している。元々は対地爆撃を専門にしていたこともあるし、対空戦闘に配属されてから優位高度の絶対性を痛感させられた今ならなおさらだ。

だが。

「実はもう後ろにいたりして」

「それは無いわ。ドッグファイトにもつれ込めばこっちが有利だって事くらい、徹……若本中尉は理解しているわ」

ルチアナの言葉に諄子が返す。

相手は上から来ることはほぼ間違いない。

仮に後ろから奇襲をかけられても3対4、こちらが一人多いうえ、こちらにはルチアナとフェルがいる。パティは防御主体、アンジーは中距離よりも離れてからの攻撃で本領を発揮する。ほぼ同高度での近接戦闘なら、例え徹子がいたとしてもこちらのほうが有利だし、そもそも、今の徹子は、そんな戦いを望まない。

だからこそその確信。

敵は優位高度からの一撃離脱を仕掛けてくる。

ならば、こちらはそれをコンマ一秒でも早く補足し、すぐさま相手の射程の外へ向けて急降下。速度を稼いだら相手より先に上昇に移る。

そうすれば有利高度を取られることを嫌がる相手は攻撃を諦め再上昇を始めるしかない。

こちらもそれに合わせて高度を稼ぎ、相手のズームアンドダイブを封じる。互いに高高度を維持すればそれで形成は逆転する。

相手もそれを理解しているからこそその膠着状態。

こつちも相手も、互いにお互いがしびれを切らすのを待っている。

そして、そんな状況が永遠に続くと思われた瞬間。

「っ!!隊長!!4時方向から西北西!!今何かが光って!!」

ルチアナが叫ぶ。きらり、と、太陽の光を反射し、空に一条の線が描かれる。

「10時方向へ降下!!急いで!!」

フェルが叫ぶ。その言葉を聞き、皆一斉に急降下。

だが。

「……違う」

ぽつり、と諄子が呟く。

その言葉に振り返ったフェルが思わず目を見開く。

それは人ではない。

それは一振りの刀。

きらきらと太陽の光を受け、抜き放たれた徹子の刀……『虎徹』が地面に向けて落下している。

ぞわり、とフェルの肌が粟立つ。

「釣られたわ!!皆、上がりなさい!!」

フェルの合図に諄子たちがストラライカーの機首を引き上げようとする、その先。

その頭を押さえる様に、徹子達が真っ直ぐこちらへと急降下してくる。

あの刀は自分達をキルゾーンへと誘い込む囷。上昇してくるフェル達の頭を叩き、逃げ場を失わせるつもりだ。

どうする。どうする?」

一瞬諄子の言葉を待つが、この部隊の隊長はフェルだ。フェルが決めるしかない。

「このまま再降下、地面すれすれまで降りて……」

いや、違う。

自分達が降下に転じれば徹子達は一度高度を取ってすぐさま背後を追ってくる。

速度に乗った徹子達からすれば、それ以上下に逃げられない自分達は只の目的だ。

一か八か、自分達の腕を信じるしかない。

「このまま突っ切るわ!!皆!!ついてきなさい!!」

フェルが叫び、真っ直ぐ徹子達へと向かっていく。互いに速度が出ていけば会敵は一瞬。数が減っても、その分優位高度を取り戻せる。

「いくわよ!!」

フェルが叫ぶと同時に、皆が模擬銃を構える。眼前のウィッチ……

扶桑皇国海軍遣欧艦隊の若本徹子中尉が自分を見、そして。

にやり、と笑ったように見えた。

数分前。



「やっぱり上がってこないみたいね」

「ああ。意外と粘るな。フェルの事だからすぐしびれを切らすと思っ  
ていたんだが」

パトリシア・シェイド中尉の言葉にアンジエラ・ララサーバル中尉  
が眩く。

「このまま集中力が切れるのを待った方が良いかな」

「そうだな。マルチナの奴、日光浴でもしてるような顔してるからな」

「いや、あれはあれで悪くない」

ぽつり、と若本徹子中尉が眩く。

「余り根を詰めても集中力つてのは続かないもんだ。あまり一点に集  
中せず、全体を俯瞰的に眺めていた方が変化に気が付きやすいし、気  
持ちも切れにくい」

「ひよつとしてマルチナ、それを知っていて……」

「偶然だろう」

「だろうな」

即座に否定する二人の言葉にパトリシア……パティが思わず苦笑  
を浮かべる。

「でも、見ることは確かですし、このまま突っ込んでも……っ  
ていうか、竹井大尉、もうこっちに気が付いているんじゃないかしら」  
「たぶんな」

自分達が太陽を背にしていてそうそう肉眼では見つからない事は  
理解していても、遮蔽物の無い空では死角は限られる。諄子ならばそ  
れに気が付き、こちらの出方をうかがっている可能性が高い。

「なら、私が囷になって攪乱しましょうか?」

「悪くないな。だが、他にも手はある」

似たような戦術は徹子の、否、ここにはいない普段の僚機の十八番  
だ。

だが、相手は諄子と赤ズボン隊。まとめて引き付けられなければ逆  
にパティが孤立させられてしまう。

そうなればこちらは二人、戦況は逆に苦しくなるだろう。

「さつきも言ったが、集中力つてのは続かないもんだ。そろそろ諄子

「たちも動きたくてウズウズしている頃だろうからな」

「そう言つて徹子にはやり、と笑うと、腰から下げた扶桑刀……『虎徹』を抜き放つ。」

「若本中尉、何を？」

アンジューの言葉に徹子にやり、と笑う。

「今なら、些細な変化にも敏感に反応する」

「そう言つて徹子が虎徹を思い切り投げる。まるで疑似餌に騙される魚のように、一斉に諄子たちの注意が誰もいない空……虎徹の方へと向く。」

「隙が無ければ作ればいい!!行くぞ、奴らの頭を押さえる!!」

「成程、そう言う事」

「そう言つてパティが銃を構える。」

「若本中尉、あの扶桑刀はどうするんだ？」

「終わったら探す。お前ら、手伝えよ」

「にやり、と笑う徹子に『ええ!?』と思わずパティとアンジューが叫ぶ。」

「そんな声を背に徹子が反対方向へと急降下。」

「気づいた気付いた、あれは相当焦ってるわね」

「パティが口元に笑みを浮かべる。」

「油断するな。来るぞ」

アンジューの言葉にパティが笑みを消す。

「パティ、頼む」

「任せて!!」

「そういうと真つ直ぐ上昇してくる諄子たちに突っ込みながらシールドを張る。」

「一つではない、同時に四つ。シールドの操作はパティの十八番だ。」

「左右に散開する徹子とアンジューを狙う模擬弾もまとめて遠隔操作したシールドで防ぎきる。」

「手元から離れたところにシールドを張ると強度は一気に落ちるが、パティはそこに上手く角度を付け、貫通させる前に受け流す。」

「シールドコントロールの技術の中にはネウロイのビームに弾き飛ばされることを防ぐため、シールドに角度を付けて受け流す技術があ

るが、その応用だ。

「貫った!!」

アンジーが模擬銃を構える。パティを中心に扇型に広がり、反対側の徹子と共に両脇から、真つ直ぐ突っ込んでくるフェル達にペイント弾を掃射。この角度なら、アンジーの弾を防げば徹子の、徹子の弾を防げばアンジーの弾に当たる事になる。

「隊長っ!!」

「竹井大尉!!」

咄嗟にルチアナとマルチナがフェルと諄子の前に出る。二人を庇うようにシールドを張るが、同時に被弾。その間に諄子とフェルが徹子達の脇をすり抜ける。

「ちよつと、何してんの二人共!!」

「隊長たちの方が勝てる確率高いから!!」

「後はお願ひします!!隊長!!竹井大尉!!」

確かに、一人が一人を庇った方が確実に二人は守れる。

全員で突っ切っていたら、ひよつとしたらそれ以上、否、全員が撃墜判定されていてもおかしく無い状況だ。

だが。

もし、これが実戦だったなら。

今まさに、フェルの判断がかけがえのない戦友二人の命を奪った事になる。

「タケイ!!アンジーを狙って!!」

そう。

これが実戦だったなら。

二人の犠牲を無駄にするわけにはいかない。少しでも、二人の犠牲を勝利に結びつけるのが、せめてもの二人への弔いだ。

「二人共!!仇は取ってあげるわ!!」

『いや、死んでないよ』

『ピンピンしてます』

無線から届く部下二人の声を無視して即座に反転。急降下でこちらに背を向けたままのアンジーに向け、フェルと諄子が一齐に模擬銃

の弾き金を引く。

「くっ!?……やるな、フェル」

アンジエラのユニットにペイント弾が付着。これで2対2。

「パティ、まだこっちのほうが足がある。そのままフェルを引き付けろ!!」

「了解!!」

すぐ後ろにぴたりとつけるフェルを引き離すべく、そのまま高度を落とすパティ。

「逃がさないわよ!!」

だが、フェルはそんなパティの背後にぴたりとつけて、銃口を背中に向けている。

『パティ、あまり離れすぎるな!!こっちに誘導しろ!!』

「……って、これは結構きつそうね……」

大回りに旋回しながら上昇を始めるパティ。

「いいぞ、後は……」

パティとは反対方向に退避しながら徹子が背後を振りかえる。

図らずしも一対一。背後を取られる形になるが、それでも徹子是不敵に笑みを浮かべる。

「行くよ!!『徹子ちゃん!!』」

背後から追い縋って来る諄子の声に、徹子が口元に獰猛な笑みを浮かべる。

「返り討ちにしてやるぜ!!『諄子!!』」

徹子の機体は零式だが、諄子は紫電改。いくら急降下で速度を稼いだとしても、紫電改の降下速度には及ばない。加えて今から上昇しても、紫電改の上昇能力を加味すれば逃げ切る事は不可能だ。

「初めからこれが狙いか!!諄子!!」

紫電改から逃げられなければ、選択肢はただ一つ。

ここから先は巴戦だ。

「ここで徹子ちゃんを落とせば、フェルがパティを落としてくれる!!」

「それはどうかな?パティの方が今は冷静だぜ」

「熱意ならフェルの方が上よ」

零式の旋回性能を生かして水平飛行に移った徹子の背を追う諄子。紫電改の自動空戦フラップが落ち、旋回性能を増した紫電改がぴたり、と零式の背後につける。

「いい機体だな、羨ましいいぜ。せめて54型を持ってこれたらもっと楽だったんだがな」

「戦闘脚の性能が戦いの全てじゃないよ、徹子ちゃん」

諄子が叫び、模擬銃の弾き金を引く。当てるのではなく、誘い込むように、徹子の動きを真綿をからめとるように誘導していく。

まるで詰み将棋のように、一手一手、着実に徹子の逃げ場を奪う。今の諄子がかつての扶桑改事変の時の少女とは違う。リバウの貴婦人と称えられるまでに成長した、扶桑海軍でも随一の、腕利きのウイツチだ。

「その通りだ!!例え紫電改だろうが何だろうが!!」

徹子が体をくの時に曲げる。限界ぎりぎりまでの速度が一気に落ちて、零式52型が悲鳴をあげる。

「なっ……」

零式の限界寸前の急制動。オーバーシュートする諄子の背に向け、徹子が銃口を向ける。

だが。

「やっぱり、徹子ちゃんならそうするよね」

薄く笑みを浮かべて体を捻った諄子の目の前に先程徹子が投げた『虎徹』が落ちてくる。

そう、だからこそ諄子は徹子をこの場所に『誘導』したのだ。

「っ?!まさか、そこまで狙って!?!」

「いつまでも、昔の私だと思わないで、徹子ちゃん」

諄子が叫ぶのと同時に、手にした『虎徹』の峰で徹子の銃身を殴りつけて射線を反らす。

「諄子の癖にやるじゃねえか!!」

「誰かさんが鍛えてくれたからねっ!!」

「確かに……だがなっ!!」

身体を捻りながら、自分に向けられた銃口を掴む。

「待ちなさい!!パティ!!」

「若本中尉!!今です!!」

「な……っ!?!」

予想外の闖入者。

こちらに真つ直ぐ向かってくるパティとフェルに、思わず諄子が目を見開く。

「オレも昔の『徹子ちゃん』じゃない!!」

『冷静な観察眼と奇襲攻撃が身上』と称される、頭脳戦を得意とするウィッチ。

そして、それ以上に。

『扶桑最強のウィッチ』

その肩書を背負う徹子が、模擬戦とは言え、諄子相手に敗北を期すわけにはいかない。

次の瞬間。

諄子とパティ、そしてフェルの模擬銃の銃口が、同時に火を噴いた。

「……え?」

自分の顔面にべつとりと付着したペイント弾を拭い、フェルが間の抜けた声を上げる。

虎徹に弾かれた勢いを生かし、反対側の手で諄子の模擬銃を掴み、その狙いをフェルに反らす。

結果として、諄子の放った模擬弾は、フェルの顔面に寸分たがわず命中した。

「頭に血が上ったほうが負け。一応これでも、経験は豊富なのよ」

同じようにフェルの放ったペイント弾で背中を汚したパティが笑う。

徹子の様子を見て、半ば賭けだったがパティはフェルの攻撃を受ける代わりに、今一番落とせそうな相手を狙った。

そして、その相手は。

「……してやられたわね。若本中尉、パティ」

諄子が呟き、肩をすくめる。

その胸元には、パティの放った模擬弾のペイントが、べつとりと付

着していた。

結果として、生存判定は徹子ただ一人。

模擬戦は、徹子達の勝利で終わった。

「臨時教官、引き受けてくれてありがとう、徹子」

ストライカーユニットから降り、ハンガーの片隅で諄子が手にしたカップに口を付ける。

激戦区では滅多に口に出来ない、きちんと豆から挽いてドリツプしたコーヒード。

この部隊の隊長がロマーニヤ人で、かつこういつた部隊に楽しみや潤いをもたらすような物資の調達に余念がない人物であるため、こういつた嗜好品の類は比較的楽に手に入るのだ。

「気にすんな。オレだって願ったり叶ったりだ。それに、この部隊の連中は素直な奴ばかりで鍛えがいがありそうだ」

諄子の脇で同じくカップに口を付けながら徹子が答える。

それに比べて瑞鶴の連中は。きつと今頃、鬼の居ぬ間になんとやらと、ゆつくり羽を伸ばしているに違いない。特にハギと伊予。あいつらがあつと勤勉なら、オレも新藤のヤツも安心して後を任せられるのに。

「変わったわね、貴女も。昔なら、『誰かに教えるよりもオレが教わるほうが先だ』ってつっぱねてたし」

「今も同じだ。教える事で教わることもある」

あくまで戦うのは自分の為ならば、教えるのも自分の為だ。

成長したとすれば、他人に教えるという行為は他人を知る行為でもあり、背を並べて戦うためには、他人を知るといふ事は必要不可欠であるという事。そして、自分が育てた奴が自分の手を離れ、いつしか前を飛んでいるのを見るのも、悪くない光景だと気が付いた事くらいだろうか。

そう、自分はお人よしの『あいつ』とは違う。扶桑一の魔女になりたいという願いも、アイツのそれと自分の利己的なそれとは似て非なるところから生じたものだ。

だが、その結果生じた『答え』が同じになる事もある。ただそれだ

けだ。

「それに、強くなってももらわないと、オレ達が困る。あんな作戦を聞かされたら、猶更な」

模擬戦の前に諄子と、504の司令を務めるフェデリカ・N・ドツリオ少佐から聞かされた、504JFWが行う秘密作戦。

その作戦に対する自分の感情は脇に置く。あくまで実行するのは504であり、諄子であり、その指揮に従うウィッチ達なのだ。

模擬戦をやってみて皆経験豊富で優秀なウィッチである事は理解した。

だが、徹子から見ればまだまだ成長の余地はある。生き残るためには少しでも経験を積ませ、成長を促さなくてはいけない。

「フェルがあれだけやる気を出したのは久々よ」  
「その分頭に血が上り易そうだがな」

まあ。それはね。と諄子が曖昧にほほ笑む。

フェルだけではなく、この部隊は自分の感情に素直な子が多い。その分やる気を出した時の爆発力は他のJFWと比べても群を抜いていると自負するが、やる気が無い時の緩さも他のJFWの部隊とは比べ物にならない程だとは思う。

ふと空を見上げると、模擬戦を終えたばかりだというのに各々のウィッチたちが自主的に訓練を行っている。赤ズボン隊の3人がパティを集中攻撃していたり、陸軍の服を着た眼鏡の少女が同じく陸軍の制服を着た短髪の少女を誤射していたりと、ところどころ怪しいところもあるが、概ね徹子と模擬戦をした事は皆の心にそれなりに響いたようだ。

「それはそうとして、やっぱり徹子は強いわね。上手く裏をかいたと思っただのに」

普段の大人びた雰囲気、諄子しか知らなければ驚くかもしれない、だが、徹子からすれば幼いころから見慣れた、どこか無邪気な雰囲気、のふわつとした笑顔に思わず照れ臭くなって視線を逸らす。

「……いや、裏をかかれたのは間違いない。僚機についてくれた二人が良い動きをしてくれたからどうにかなっただけの話だ」



「ふうん」

「……何だよ」

徹子の言葉に悪戯っぽく微笑む諄子。

「別に。『徹子ちゃん』が謙遜するなんて、大人になったな、って思っただけ」

「な!？」

予想外の諄子の言葉に、徹子の頬が赤くなる。

「ふ、ふざけんな!!人が真面目に話してんのに!!」

「ふふ。ごめんね。うん、やっぱり徹子は徹子ね」

徹子も昔の徹子とは違う。

それは坂本や西沢といった古くからの友人達も口をそろえる。

冷静な観察眼と奇襲と一撃離脱を身上とする扶桑最強のウィッチという肩書は、かつての友人達からすれば同姓同名の他人なのでは、と疑いたくなくても不思議ではない。

だが、それは諄子も美緒も同じだ。

人見知りで泣き虫のお嬢さんだった諄子は今や背も階級も自分を飛び越し、各国のエースを集めた統合航空戦闘団の戦闘隊長を務めている。

だが、顔を合わせて話をすれば、その根底の部分是不変。仲間を失うのが怖くて、任務と素顔のはざままで揺れている様子を見ているうちに、気が付けば臨時教官などを引き受けてしまった。

そう。

なんだかんだで徹子は諄子に甘いのだ。

「……死ぬなよ。諄子」

「うん。徹子も」

美緒のヤツも含めて、全員あがりを迎えたら一度皆で先生に会いにいこう、というと、諄子も小さく頷いた。

出来る事なら『世界をネウロイから救ったら』といたいところだが、それが不可能なのは徹子も、諄子もうっすらと悟っていた。

本人は隠してはいるが、魔眼を酷使しすぎた美緒はもうシールドを張る事は出来ない。

それはつまり、自分達にも間もなく同じ時が訪れるという事だ。  
だが。

それでもまだ、オレ達に出来る事はまだあるはずだ。

そう。

例え、残された時間は短くても。

## 2-4. Foxy lady

1300 ガリア パリ上空

「扶桑の整備兵は優秀ねー。あつという間にミーのユニットも元通りね」

そう言いながらリベリオン製ストライカーユニット『グラマーF4 Fワイルドキャット』で空を駆けているのはキャサリン・オヘア。

軍属ではないので自前の革製のフライト・ジャケットに身を包み、既にあがりを迎えているとは思えないほどしつかりとした航跡を描きながら空を走っていく。

その後ろには『紫電41型』を履いた伊予と、『零式54型』の信乃。信乃は先日の士官服ではなく、洗濯が済んだばかりの扶桑海軍の飛行服に袖を通している。

「ていうかあのお風呂の油、キャサリンだったんですね」

ぽつり、と信乃が呟く。

昨日模擬戦の終えた信乃達が戻る前、オヘアは久々の空母の着艦で思い切りやらかし、機体を破損させていた。

その後、油まみれになったオヘアを見て美枝が風呂を勧めたらしいが、成程、あれはその時の名残か。

「お風呂に入るときは体を洗うのが礼儀ですよ」

「ソーリー、次からはそうするねー」

伊予の言葉に悪びれた様子も無く答えるオヘア。どうやら扶桑の風呂が気に入ったらしい。

また入りたいねー、と呑気に呟いているオヘアを見て、思わず伊予が苦笑を浮かべる。

「ウエストハムネット基地まで丁度半分くらいですね。どうします？オヘアさん、少し休みますか？」

「キャサリンねー。ん、まだいけそうね」

久々のフライトを気遣った伊予が提案するが、オヘアは少し思案し首を振る。

「現役の際はこのくらいの遠乗りはよくある事だったね。『ヒーシ』へ

の強行偵察前の訓練の時はこの二倍は飛んでたねー」

かつてリバウから欧州の最前線への千キロ以上の道のりを毎日のように往復していたのを始めとして、扶桑のウィッチにとって遠乗りは日課の様なものだ。

だが、リベリオンの海軍や海兵隊も負けてはいない。ずんぐりとした見た目とは裏腹に、F4Fもまた、空母での運用を主眼に設計されているため、零式ほどではないが航続能力は非常に高い。

拠点となる基地を転々としながら、前線に向けて長い距離を飛んでいた為、欧州のウィッチに比べリベリオンのウィッチもまた、遠乗り慣れているものが多い。

「そういえば、そのF4Fって、海軍の物ですか？」

「ノー。いくらミーでも軍のモノにこんなペイントしないねー」

そういつてこんこん、と自分のストライカーユニットを叩くオヘア。

「これはミーのお金と寄付とで手に入れたモノね。向うについたらコレも向うに置いて来るねー」

「報国號みたいなものですね」

信乃が納得したように呟く。

まるでテキサスの空の様な派手な水色と白で塗装され、更にはテキサス州の州旗を象ったペイント。

そして、妙に達筆な扶桑語で大きく書かれた『不燃物』の三文字。

「……誰が書いたんですか？それ」

思わず尋ねる伊予にオヘアが答える。

「ここに来る前、アフリカでトモコのフレンドに会ったね。『いらん子』っていう意味らしいね。事情を説明したら大喜びで書いてくれたねー」

どこの誰かは知らないが酷い悪戯だ。きつと陸軍の仕業に違いない。

オヘアに限らず、欧州やリベリオンの人間にとって、扶桑の文字というのは、一種の記号やデザインとして目に映るらしい。

その為、欧州では時折扶桑人からすれば明らかにおかしい漢字など

を見かける事があるが、意味を知らなければそれは単にデザインの一部である。

そして、その事を知っている一部の扶桑のウィッチが欧州のウィッチに頼まれ、ストライカー等に扶桑語を書きこむ事も珍しい事ではない。

大抵は相手に合わせて真面目に書いているのだが、たまに悪戯心を発揮した一部のウィッチが相手が読めないのをいいことにとんでもない文字を書きこんでいたりもする。

「そう言えば、前にリベリオンのウィッチのストライカーに『不良』って書いてました」

ほつり、と伊予が呟く。

「ワツツ？イヨ、フリオウってどういう意味ねー？」

「ええと……ヤンキー？でしょうか」

「別に変じゃないねー？」

首を傾げるオヘア。リベリアンに対しての蔑称としてもつかわれるが、リベリオンでは野球チームにもなるくらいには一般的な俗称だ。

言葉というのは難しい。

「今度あたしも何か一筆書きましようか？」

「ワオ、全然オーケーね。楽しみにしてるねー」

「止めたほうが良いですよ」

ほつり、と呟く伊予。信乃の事だ。絶対に碌な事にならない。

「何がいいですかね。『破壊魔』<sup>クラッシュヤ</sup>か、それとも『牛女』<sup>カウガール</sup>か……」

「オヘアさん。不良の正しい意味が解りました。この子みたいなのです」

「キャサリンねー。シノはヤンキーじゃないね。他に意味があるのですかー？」

「バッドガールとか、クレイジーもそうです」

「んー？どっちもピンとこないね。シノは良い子だと思うね」

きよとん、と首を傾げるオヘア。殺人トナカイと死闘を繰り広げた拳句味方を生贄に捧げ合った経験から言わせてもらえば、バッドガール

ルとはいらん子の事を言うのだ。

それと比べれば、信乃などはまだまだ悪ぶって背伸びをしている子供に過ぎない。

「……ひよつとしてあたし、凄く大人げないですか？」

「うん。基本的にハギちゃんは大人げないよ」

オヘアの言葉に何かを悟った様子の子の信乃と、何を今さらといった顔の伊予。そんな二人を見て、くすり、とオヘアが笑みを浮かべる。

「二人共いい子ねー。リベリオンに連れて帰って一緒に農業がしたいねー」

「やりましたよ伊予。あがりを迎えた後の再就職先が内定しました。リベリオンで小麦を大量生産です」

「私は嫌です。あがりを迎えたら航空機のパイロットになるって決めてますから」

二者二様の反応を示す扶桑ウィッチ共。

「イヨは飛行機に乗りたいんですかー？」

「はい。軍だと飛ぶ場所が限られますし、ウィッチとして飛べるのは今の内ですから。早くネウロイから空を解放して、自由な空を好きなように飛び周りたいんです」

「素敵な夢ねー。その時はテキサスにも遊びに来て、ミーも飛行機に乗せるねー」

「勿論。ハギちゃんも連れて行きます」

「あたしはキャサリンと農業をするんです。遊びに来るのは自由ですが」

「待ってるねー二人共……ウツプス？」

にこやかな笑みを浮かべていたオヘアの顔が唐突に曇る。

「どうしました？キャサリン」

「……何か嫌な感じがするね。これは悪人の気配ねー」

そう呟き表情を硬くするオヘア。

「まさか、ネウロイ……」

「任せて、ハギちゃん」

ぽつり、と呟く信乃の傍らでS—18ライフルを構える伊予。狙撃

手らしい無駄のない動きで、周囲に警戒の目を走らせる。

『おいおい。相変わらず失礼な奴だな、植民地人』

聞き覚えのある声に、一瞬オヘアの目が驚いたような色を浮かべる。

「その声、ひよつとして……」

『久しぶりだな、オヘア。二、いや、三年ぶりか?』

涼やかな声が魔導無線に響く。

からかうような、それでいてどこことなく懐かし気な口調の声。

「ビューリング……」

二、三度目をしばたたかせ、ぽつり、と呟くオヘア。

その瞳に徐々に懐かしそうな色が灯っていき、そして。

「撃つねイヨ!!アイツは根つからの悪党ねー!!」

「や!!今の絶対そういう流れじゃなかったですよねオヘアさん!!」

慌ててライフルの構えを解く伊予。向うから近づいてくる黒い影は紛れもなく人……それも女性の姿をしている。これだけ目視出来ればネウロイではないのは明らかだ。

「黒いからネウロイの手先ね。撃つね、ミーが責任を持つね!!」

「そういう服ですって!!ていうか民間人がどう誤射の責任を!」

「ミーのパパは弁護士ね、多分大丈夫ねー!!」

「多分じゃダメです!!後、軍法会議は民事不介入です!!」

戦争映画の無能な指揮官のように、躍起になって『撃て、撃て』とまくし立てるオヘアに伊予が目を丸くする。

さつきまでの振舞いが嘘のようだ。一体何がここまでオヘアを掻き立てるのか。

『ちよつとちよつと!!何で『戦友』に銃を向けられそうになってるんですか先輩!?!あの人に昔何をしたんですか!?!』

『知らん。大方植民地の野蛮人は人の顔も三日で忘れるくらいの脳しか持ち合わせていないんだろう』

『多分忘れてるのは先輩の方です!!それかそういう事ばかり言ってるからです!!』

「シイット!!そつちこそ、今すぐその嫌味と皮肉しか詰まっていない

脳みそ吹っ飛ばしてやるね!!イヨ!!」

「だからしませんって!!」

放っておくとS-18を強奪しそうな勢いのオヘアから慌てて伊予が距離を置く。

『ああもう、イヨ!!シノ!!私よ私!!こっちは私が止めるから、そのリベリアンを止めて頂戴!!』

「なれなれしいですね。何処のどちら様でしょうか?」

「そうねー!!まずは名を名乗るね!!この不良ウィッチ!!」

たった今覚えたばかりの単語を口に、無線の向うへと叫ぶオヘア。

『何でシノは私に厳しいの!?ああもう、わかったわよ!!こちらH M W、グローリアスウィッチーズ第二航空隊戦闘隊長ジェシカ・イーデイス・ジュリエット・ジョンソン中尉及び随行者一名!!合流を求めます!!はい、これでいいのね、シノ!!』

「扶桑では戦いの前に名乗りを上げるのがルールです、名乗ったという事は、そういう事ですね、ジェシー」

律儀に名乗らせておいてこの言い草。

『はあ!?どういう事よ!?島国の面白ルールなんて知らないわ!!ここは欧州よ!!』

「そつちこそ島国じゃないですか」

「うるさいっ!!いいから合流よ、合流!!」

白い肌にあっしゅブロンドの長髪、灰色のリボン、灰色を基調にしたブリタニア空軍の制服と、やたらと色素の薄い少女が掴みかかりそうな勢いでオヘア達の間を飛び込んでくる。

いつもは不敵そうな顔をしているが今日は随分と疲れた顔をしている。

ブリタニア空軍の『グレイリボン』ことジェシカ・E・J・ジョンソンの顔を見た信乃が眉をひそめて首を傾げる。

「何ですかジェシー、あたしたちは今作戦行動中です。妨害は国際法違反ですよ」

「この空は私達の防空圏内だから、緊急時には従ってもらおうのがルールよ」



「緊急事態なんてどこにもないじゃないですか」

『あの人』が緊急事態なのよ」

そういつてジェシカがちらり、と脇へと目を向ける。

「相変わらずで何よりね。まだ空を飛んでいたなんて、そろそろ後進の邪魔にならないように引退したほうが良いね、ビューリング」

「そっちこそ。今さら戻ってきて早速あちこちに迷惑をかけてるみたいじゃないか。オヘア」

底意地の悪そうな笑みを口元に浮かべた長身の女性が、オヘアに向かって笑みを浮かべる。

「欧州にはユーがいる事を忘れてたね。見たくない顔を見て今日は厄日ねー」

「私は会えてうれしいぞ。お前の顔が曇るのを見るのは何よりも楽しいからな」

「……仲、悪いんですかね」

ぽつり、と伊予が呟く。

「さあ。さつきまでは楽しそうにしてたのに……ていうか、今も楽しそうなのかしら……?」

ジェシカの視線の先に伊予と、信乃も目を向けている。

「相変わらずひねくれてるねー」

ふん、と鼻を鳴らすオヘアだが、その口元には攻撃的だが笑みすら浮かべている。

「そっちも相変わらず単細胞そうで何よりだ」

ビューリングも同様。口からは相手に対する罵倒と皮肉しか出てこないが、その目は心底愉快そうである。

「あの一、先輩、そろそろ説明を」

「オヘアさん、その方は何方です?」

ジェシカと伊予が互いのエスコート相手に口を開く。

ちらり、と互いに顔を見合わせたオヘアとビューリング。

「……ミーはキャサリン・オヘア。元リベリアン合衆国海軍大尉ね。ビューリングとは、スオムス義勇独立飛行中隊の頃の、あー……仲間ね」

ややあつて先に口を開いたのはオヘア。

わざわざ名を名乗ったのは初めて会うジェシカに対する配慮だろう。しぶしぶといった口調で、特に最後の一言はかなりの躊躇いの後に発せられたように感じた。

「私はエリザベス・F・ビューリング。一応まだブリタニア空軍に所属しているはずだ。かつての仲間が近くに来てると聞いたから、ちよつと顔を見に来てやったんだが……」

「余計なお世話ねー」

「というわけだ。私は何も悪い事をしたわけではないのに」

「私の休日をふいにして空に引っぱりだしたのは悪い事じゃないんですか?」

「コーヒーを奢つてやっただろう?」

「あれはこの前先輩が部隊の銃を勝手に持ち出したことを見逃したお礼って言つてたじゃないですか。後、私は紅茶が良かったんですけど」

「そうか。ならまたコーヒーを奢つてやろう」

「……見るね、あの言い草。まさに極悪人ねー」

肩を震わせるジェシカと悪びれもせずしれっとしてるビューリングを見比べ、ぽつり、とオヘアが伊予達の耳元でささやく。

「うう、私が何したつて言うのよ。先輩に無理やり護衛をさせられたと思つたら喧嘩に巻き込まれて。何なのよ。もう……」

「……大丈夫ですか?ジェシー。コーヒー奢りましょうか?」

「いらないわよ!!あの人に来てからもう一年分は飲まされたわ!!」

くわつ、と顔を上げて噛みつくように怒鳴るジェシカ。相当鬱憤がたまっているようだ。

「ああもう、無茶苦茶なのよあの人。部隊にふらりと戻ってきたと思つたら皆で飼つてたラブラドルを拉致して調教して猟犬に仕立てて、勝手に銃を持ち出して鹿を撃ちに出かけるし、仕留めた獲物をトラックに積んで持つて帰つて来るし……山中の鹿を駆逐したんじゃないかしら」

「害獣の駆除のついでに食卓に潤いをもたらしてやったまでだ」

「うちの基地の納屋を肉屋みたいにしておいて……まだ残ってるんですからね、あの肉」

基地に居る兵士とウィッチ総出で解体作業に追われたあの日を出す。全員血まみれで黙々と鹿を解体している様子ははたから見るとちよつとしたホラーだったに違いない。

「鹿の肉って固いんですよね……」

納屋から大量にぶら下がった鹿の肉を想像して伊予が肩をすくめる。

「そういうえば、その扶桑のウィッチの使い魔も……」

「う、撃たないでくださいね」

びくり、と信乃が体を竦ませ、その様子を見てくすり、とビューリングが嗜虐的な笑みを浮かべる。

冗談だとはわかってはいるが、使い魔の方の怯えている感情が伝わってきてどうにも落ち着かない。

「どうしてそれをスオムスでしなかったね。黒パンと塩と豆のスープしか食料が無かった時にそれをやったら英雄だったねー」

「あそこにはやたらと警戒心が強くて狂暴なトナカイしかいなかっただろう。それに、外に出たら寒いからな」

「だからやるべきだったねー。ビューリングが肉を手に入れてもウィン、トナカイに屠られてもウィン。まさにウィンウィンねー」

「成程、これがいらん子中隊ですか……」

ほつり、と伊予が呟く。

「どうだ、予想以上にいらなさそうだろう?」

伊予の呟きに、にやりと笑うビューリング。

「ええ。でも、お二人共仲が良さそうですね」

「正気?・イヨ?」

呆れた様にジェシカが呟く。

「そうねー。こんな奴と宜しくするくらいならまだハルカと……」

「正気か?オヘア?」

「……流石にそれは無いね」

思わず真顔になるビューリングと、同じく真顔で否定するオヘア。

「でも、オヘアさんも言っていましたよね。いつか仲間に合わせていて。確かその時、ビューリングさんの……」

「ストップ!! シャラップねイヨ!!」

慌ててオヘアが伊予の口を塞ぐが後の祭り。

「ほう……お前がそんな事を、成程な? ほーう?」

「ほらあ、早速調子に乗り始めたね、このブリタニア人……」

にやにやと笑いだすビューリングを見てがっくりと肩を落とすオヘア。

「それで、実際は何の用なんです? ジエシー」

「ウエストハムネットまでの先輩の護衛よ。建前は」

「良く通りましたね」

「申請は出したけど許可はまだ。この人を向うに引き渡せば後は向こうが頭を悩ませればいいだけの話だから」

「見ろ、私はこうやってあちこちの部隊をたらいまわしにされているんだ。仲間達から見捨てられて。悲しい話だろう?」

「自業自得ねー」

大げさに肩をすくめるビューリングと、大げさでもなく本当に疲れた様に肩を落とすオヘア。

「まあ、ウエストハムネットまでまだ距離はある。そっちの自己紹介もまだだ。ゆっくり空の旅を楽しもうじゃないか」

「楽しむ余裕なんて今無くなったねー」

うんざりした顔を浮かべ、オヘアが呟いた。

## 2—5. STELLA

1938 リベリオン合衆国 ペンシルバニア州

「ステラ、いい加減機嫌を直しておくれ」

その日、彼女の父親は扉越しに声を掛けていた。

「嫌」

「ステラ!! パパが出かける前に出てきなさい!!」

「嫌だもん!! パパが残ってくれるまで、部屋から出ないもん!!」

「ステラ!!」

母親の怒鳴り声にも部屋の中にいる娘は出てこない。

泣いているような震え声で大声を上げる娘に、はあ、と母親も困ったように形の良い眉を潜ませる。

「困ったわね……。あなた、そろそろ出ないと、汽車に間に合わないわよ」

その言葉に旅行用のコートに身を包んだ若い父親が苦笑を浮かべる。

そして。

「……ステラ。必ず帰って来るから、その前に顔を見せて欲しいんだ」

「……やだもん。欧州はあぶないって、ラジオでも言ってるもん」

彼は移民だった。

欧州のオストマルクの貧しい家庭に生まれた彼は、経済成長の著しいリベリオンに渡り、ペンシルバニアの小さな町工場に努めていた。

誰よりも努力家だが、その苦労を顔に出さずにいつも温和に微笑みを浮かべ、給金の多くを両親の元へと送っていた為生活は決して楽ではなかった。

仕事にも慣れ、彼は工場での作業員たちのまとめ役として徐々に周囲から認められ、信頼されるようになっていった。

そして、そのひたむきな姿に町工場の社長の末娘が恋に落ち、彼の努力を誰よりも見続けていた社長は彼と娘の結婚を許した。

一人娘が生まれ、そんなささやかながら確かな幸せをかみしめていた折だった。

故郷にネウロイが侵攻しているというニュースが飛び込んできたのは。

「オストマルクはまだ安全だよ。だから、今のうちに早く行って、おじいさんとおばあさんを連れて帰ってこないといけないんだ」

1938年に突如欧州に現れた怪異。未だ『ネウロイ』という呼称すらなかったこの頃は、多くの人々が、やがて欧州全域がこの得体の知れない存在に蹂躪されていくなどとは想像すらしていない時代だった。

否、国の上層部の中にはそう言った可能性を指摘する声も無くは無かった。

だが、上層部は怪異による危険よりも、次の選挙に備えて国民の混乱を煽らない事を重視していた。

この時は、まだ。

「……」

扉越しに呼び掛けて、少しの間待つ。

だが、扉は開かない。

「……ステラ。僕はもう行くけど、帰ってきたら元気な顔を見せておくれ。おじいちゃんとおばあちゃんと、沢山お土産を持って帰って来るから」

落胆した顔も見せず、目の前に娘がいる時と同じ笑顔を浮かべて男が語り掛ける。

「あなた、いいの？」

部屋に背を向けた夫を心配するように妻が話しかける。

「ああ。それに、こっちの方が良かったかもしれない」

そういうと男は心配そうな妻に向かってにこり、とほほ笑んだ。

「これが最後の別れになるなんて御免だからね。ステラの顔を見るためなら、僕は何があってもここに帰ってこれるよ」

「……あら、じゃあ、私もステラと一緒に部屋に閉じこもろうかしら？」

「勘弁してくれよ」

僅かに眉の根を緩め、薄い笑みを浮かべた妻を抱きしめて男がその

頬にキスをする。

「……早く帰ってきてね」

「わかってる。『オヤジ』にもとつと帰って来いって言われてるからね。すぐ、戻ってくるよ」

そういつて男が懐中時計に目を向ける。

「……それじゃ。行ってくるよ」

「ええ。行ってらっしゃい、あなた」

この時誰が予想出来ただろうか。

ほんの一握りだと思われた怪異の群体があつという間に勢力を広げ、精強だと思われていたオストマルク軍がわずか数か月で瓦解するなど。

そのまま、カールスラントやガリアといった大国が欧州から消え去り、多くの人々が戦禍に飲み込まれていくなどと、誰が想像出来ただろうか。

そして。

男は、二度と家に帰る事は無かった。

1945   ブリタニア   ウエストハムネット基地上空

――

ブリタニアのチチエスターにあるウエストハムネット空軍基地。

H M W 第一航空隊の本拠地でもあるロンドン郊外にあるタングミーア空軍基地のすぐ脇にある農場の跡地に設けられた、元々はタングミーア基地の緊急着陸用の滑走路として整備された場所を拡張して作られた飛行場で、現在はリベリオンの第八航空軍を中心に、多国籍に開かれたウィッチ及び軍用機の運用拠点の一つとなっている。

とはいっても、すぐ脇に広がる広大なタングミーア空軍基地に比べると、いかにも急拵といった雰囲気なのはぬぐえない。

加えてなまじ距離が近いため、空から俯瞰して見るとその規模の差が余計に鮮明に見える。

「明らかに差別ねー。どうしてブリタニア人は自分達だけ立派な基地を使って他国のゲストはあんな納屋みたいな建物に押し込めるね」

「飯が不味いだのサービスが悪いだの文句を言う奴ばかりだから、わざわざゲストハウスを用意してやったんだ。文句をいわれる筋合いは無い」

オヘアの言葉に肩をすくめるビューリング。

501JFWが解散した現在、この基地が西部方面統合軍のロン<sup>L.N.A.F</sup>ドン周辺における拠点となり、ブリタニアに積極的に支援を行っているリベリオンを中心とした統合軍が各国のウィッチや軍用機を受け入れている。

もしHMWの拠点であるタングミニアに西部方面統合軍が本拠地を置けば、ガリアやカールスラントを始めとする欧州の国々の上の連中が、ブリタニアによる統合軍の私物化などといちいち文句をいいだすのは目に見えている。

それに、ブリタニアとしても王都の防衛拠点の中に多国籍部隊の中心を置くと指揮系統が混乱する為、HMWと統合軍を分ける必要があった。

ブリタニアからすれば政治的な対立を避けるために様々な配慮をした上で新しく基地を設けてやったのに、更に文句をいわれてはたまったものではない。

「ビューリングらしくないねー。いつから愛国心に目覚めたね?」

「私はいつも祖国を愛している。新兵の頃無理やり買わされた戦時国債がガリアの解放で紙屑から煙草の資金源に変わったからな。ハイル・ブリタニア。王室万歳だ」

「現金な人ですね」

「伊予。国債は現金じゃなくて有価証券です」

「ハギちゃん。何でも言えばいいって思ってた?」

扶桑人にしか伝わらない冗談を呟く信乃を呆れた目で見る伊予。

「皆、そろそろ降りるね。日が暮れてからの着陸には自信が無いねー」  
オヘアが脇から口を挟む。一日中飛んでいたもので、そろそろ陽が地平線に沈みかけている。

「お前はいついかなる時でも着陸には自信が無かったはずだが」

「昔の話を持ち出さないで欲しいね。今は平気ねー」



茶化すビューリングにオヘアが答える。

何故昨日瑞鶴でやらかしたばかりなのにここまで言い切れるのか。管制官からの無線指示を受け、ウィッチ達が次々にウエストハムネット基地へと降り立つ準備を始める。

「……あれ？ジェシカさんも『こつち』ですか？」

「私がいると迷惑かしら？」

「そんなことは無いですが……」

伊予の言葉にジェシカが肩をすくめる。

「今の私はH M Wの第二航空隊所属よ。護衛対象もこつちにいるし、わざわざタングミニアに行く必要は無いわ」

「成程、左遷ですね」

「オー、ユーも『いらん子』ね？」

『『グレイリボン』も落ちたものだな』

「……ねえイヨ、あいつら片っ端から撃ち落としていいかしら？」

擲楯うように口を開く信乃達を見、肩を震わせながら背中に背負ったM1919機関銃に手をかけるジェシカ。

「私の見てないところでお願いします」

扶桑人らしい事なかれ主義で肩をすくめる伊予が基地へ向けて降下していく。

「……シノ、後で覚えてなさいよ」

そう吐き捨てて後に続くジェシカ。その後ろを次々と他のウィッチ達が続く。

次々に滑走路に降りたち、静止したユニットから順に整備兵に誘導されてハンガーへと向かう。

質素なハンガーだが、基地の目的上様々な国のウィッチが立ち寄る事を見越してか、格納ゲージを始め、多種多様なユニットの予備部品が国別で所狭しと積まれている様は、リヨンのそれとは違いあちこちから資金が集まっている証左の用だった。

「お疲れ様でした、萩谷飛曹長」

ユニットを固定していた整備兵から突然扶桑語で話しかけられて信乃が驚いたような顔になる。

ウエストハムネットには何度か来たことがあるが、扶桑語で話しかけられたのは初めてだ。

「え？ひよつとして扶桑の人ですか？」

「はい。『赤城』から501に移って、解散と同時に一度扶桑に戻っていたんですが、今はここです」

青年といった雰囲気の間兵が苦笑を浮かべる。ああ、成程、と信乃が頷く。整備兵が来ている地上勤務者用の被覆は扶桑の間兵のそれではなく、統合軍所属である事を示す刺繍が入ったりベリオン製のものだ。

「お疲れ様です。それなら欧州の生活にはもう慣れてます？」

「ええ、とつくに。ブリタニア流のこっちの食事にも慣れましたよ」

多国籍部隊で戦っているのは何もウィッチだけではない。整備や通信、或いは主計課等、多くの扶桑の兵士も同じように、人数の多少はあれども各国にある統合航空戦闘団に移籍している。

そして、大抵一度多国籍部隊を経験した者は、その経験を生かして再度多国籍部隊に移る事が多く、原隊に復帰するのは長期の任務を終えて本国に帰る直前くらいという者も少なくはない。

「他にも、この連中は501から異動した奴が多いんですよ。生まれた国は違いますけど、長い事一緒にいるんで、むしろここが第二の原隊みたいなもんです」

そういつて笑みを浮かべる整備兵にユニットを託してハンガーに降りたつ信乃。周囲を見渡すと、成程、多様な国の整備兵たちがそれぞれの国の訛りのあるブリタニア語で作業に取り組んでいる。

「……あれ？この52型、金星エンジン積んでますね」

信乃のストライカーを見て整備兵が首を傾げる。

「54型です。新型ですよ、一応」

信乃の言葉に整備兵が首を捻る。まあ、当然の反応だ。知らない人間が見れば、零式と金星エンジンのニコイチ以外の何物でもない。

「そういうえば、飛曹長は『あの人』の護衛で？」

そういつて整備兵がオヘアの方へと目を向ける。信乃が『そうです』と答えると、一瞬悪戯っぽい表情を浮かべるが、信乃が問い返す

より前に直ぐに元の顔に戻ると、お気をつけて、とだけ口を開いた。思わせぶりな態度に少し首を傾げる信乃だったが、直ぐに意味を理解した。

オヘア達と合流し、ハンガーを出た瞬間。

「来たぞ!!キャサリン・オヘア元大尉だ!!」

ぱっぱっ、と、幾度となくカメラのフラッシュの灯りが灯り、メモ帳を手にした男達が一斉にこちらに、否、正確にはオヘアの元へと殺到する。リベリオンにブリタニア、他にも欧州各地、果てには扶桑の人間まで交じっている。

まるで獲物に群がる小型の肉食動物の群れのようなその勢いに、慌てて信乃達はその場を飛びのくと、護衛対象である筈のオヘアはあつという間に人の波に飲み込まれ、その姿が見えなくなった。

「ワーオ、また増えてるねー」

呑気そうな声が聞こえてくる。その口調はもうこんな事は慣れっこだと言わんばかりに聞こえた。

「オヘアさん!!まずはこの司令官に挨拶に行かないと!!」

「先に言ってるねー!!ここはミーが食い止めるねー!!」

まるで戦場でのような言い回しに思わず伊予も、他のウィッチ達も思わず苦笑を浮かべる。

「お前達、奴らにかぎつけられる前に早くいった方がいいぞ」

リベリオンの英雄オヘアの護衛がすぐここにいる事がわかれば、すぐさま二人して質問責めに合うのは必須だ。

「取材ですか?」

その言葉に目を輝かせる信乃。一度扶桑の雑誌でもある『ワールドウィッチーズ世界ノ魔女達』のインタビューを受けた事があった。

だが、調子に乗ってあれこれ喋っている内に途中から余計な事を話し過ぎて結局お蔵入りになった苦い記憶から、いつかは長機である若や先輩の坂本や竹井、或いは年の近い下原や管野、陸軍の黒田中尉のように華々しく紙面を飾ってみたいと思っていたのだ。

「お前が何を考えてるかは知らんが、奴等はおつかないぞ。余計な事を言おうものなら、前後の文脈を無視してそこだけを面白おかしく書

き立てた挙句、自分達の言いたい事にすり替えてあつという間に自分たちの真実に作り変えてしまう」

「何かまるで経験したような物言いですね」

「スオムスに左遷された『いらん子』達が英雄になるんだ。報道つてのは実に恐ろしい」

そう言つてポケットから煙草を取り出すビュering。成程、実体験らしい。

「ビュeringさんは残られるんですか？」

「まあ、な」

色々思うところがあるのだろうか。本人のいる前ではそんな態度は見せないものの、少し離れてかつての仲間が取り囲まれている様子を見つめているビュeringの表情は、先程とは少し違って見えた。

「解りました。それでは、後はお願いします」

ならばこそ、間に入るのは無粋だろう。

後は任せる事にして口を開いた伊予に、ビュeringが声を掛ける。

「ああ。後お前ら、誰かマッチ持っていないか？」

ポケットからマッチを見つけられなかったのか、両手を持ち上げるビュering。

「良ければどうぞ」

そう言つて信乃がポケットからマッチと、まだ封を切っていない扶桑製の『ほまれ』を取り出し、ビュeringへと放り投げる。

それを受け取ったビュeringが一瞬驚いた顔をするが、直ぐに口元に笑みを浮かべる。

「ちやつかりした奴だな。私におべっかを使つても何も出てこないぞ？」

信乃の意図を察し、笑みを苦笑に変えるビュeringに背を向け、伊予達を追つて信乃が基地の廊下を歩き始める。

「あんなの持つてたんですか、ハギちゃん」

「配給に入つてたら取つておくと便利です。あたしは吸いませんが、

整備兵や、おつかない先輩とかに渡すと喜ばれます」

伊予の言葉に信乃が答える。

扶桑の煙草『ほまれ』は他国のそれと比べても質が良く、支給品や酒保でも人気の品だが、喫煙するものが少ないトシゴロのウィッチ達の中では大抵『こんなモノ貰っても』というのが大方の反応である。

しかし、贈答用と考えれば決して無駄なものではないし、その辺りを良く理解しているのが信乃というウィッチである。

「お菓子と違ってあたしの口は寂しくありませんし、扶桑のは質が良いので喜ばれます。心づけにはもってこいですよ」

— 2 —

新しいが質素な作りの基地の廊下を歩き始める3人。

「司令室ってどこですかね？」

「さあ。でも、一番手前の部屋って事はないでしょ？」

信乃の呟きにジェシカが答える。大抵偉い人というのは上か奥にいるものだ。

「誰かに聞けば間違いないんですが……」

そう呟いて伊予が周囲を見渡すが、人の姿は見えない。

「今この基地を護衛しているのはリベリオンでしたよね」

「リベリオン陸軍の航空軍第8軍団。その第56戦闘航空群よ」

伊予の問いかけにジェシカが答える。かつての宗主国と植民地であるブリタニアとリベリオンは、国民感情はさておき、今でもなお関係が深い国である。

特に、ブリタニアに関しては、ブリタニア以外では友好国であるリベリオンの影響が強く、主要なリベリオンの部隊の多くもブリタニアに基地を置いている。

そして、リベリオン陸軍航空軍第8軍団もその一つであり、ブリタニアにおける統合軍でもリベリオンは大きな影響力を持つ。ウエストナムネット基地の護衛にリベリオンの第8軍団の部隊が当てられているのもその辺りが理由だろう。

「56FGって聞いた事ありません、確か……」

『ウルフパック』

背後から響く声に、思わず伊予が口を止めて立ち止まる。

振りかえると、そこにはリベリオン陸軍の制服を着た一人の少女が立っていた。

「群れを成して敵を狩る。宛ら狼のように。さればこそその群狼。多くの戦いを経て、いつしか私達はそう呼ばれるようになった」

いきなり語り始めた少女を前に、ん？と伊予が思わず首を傾げる。

「……ええと、貴女は……」

「リベリオン合衆国陸軍航空軍第8軍団第56戦闘航空群所属、フランチースカ・エストレラ・ガブリシエフスキー中尉。リベリオンではフランセス・ステラ・ガブレスキー。最も、呼び方も階級も、私はそう言ったものにはこだわらない」

伊予の言葉に少女が口を開く。明るいうらぶらうの髪に、リベリオン人らしからぬほっそりとした体つき。少し眠たげな雰囲気、瞳に無表情も相まって、まるで欧州人形の様な雰囲気だ。

しかし。

「どつちも呼びにくいわ、フラン」

「……私としてはフランチースカと呼んで欲しいのだけど、何故か皆はフランとしか呼んでくれない。名前が長いのが理由なのだろうか、ジエシー」

「知り合いなんですか？」

すこし驚いたように伊予が尋ねる。

「この子、元H M Wの亡命オストマルク戦闘飛行隊なの。そのころからの付き合いね」

ブリタニアのH M Wは本国のウィッチのみならず、オストマルクを始めとしてダキアやモエシアといった東欧から亡命してきたウィッチ達や、アウストリスやニューゼーランドといった南半球の太平洋諸国からの義勇ウィッチなども積極的に受け入れてきた経緯がある。

そんな中、リベリオン出身ながらオストマルク出身の父を持つフランも欧州に渡りしばらくはH M Wの第303亡命オストマルク部隊の一員としてH M Wに籍をおいていた。

ジエシカと知り合ったのもその時期だ。

「ジェシーには世話になった。ジェシーが居なければ、私は航空ウィッチとしての見込み無しと見做されて、リベリオンの母の元へ送り返されていた。感謝している」

「ええと、フランさん、それで……」

「隊長が貴女達の迅速な出頭を希望した。なので、私はここにいる」

伊予の言葉にフランが答える。

「つまり、出迎えて事ね」

ジェシカの言葉にフランがこくり、と頷く。

「……変わった子ですね」

信乃が肩をすくめる。所謂思春期特有の少し面倒臭い言い回しのだろうか。

「人の評価を私は気にしない。気にしたところで私の本質に変化はないから」

「変わった子ですね」

「何故繰り返すのか気にはなるが、私は私。自分を曲げる気はさらさらしない」

信乃の言葉にも涼し気な口調で答えるフラン。だが、わずかにその眉尻が持ち上がっているので、少し機嫌を損ねているのかもしれない。

「何を言っても無駄よシノ。この子の頑固さはドロレス隊長でも動かせなかったわ」

そういつて肩をすくめるジェシカ。

「頑固なのは周りの皆。私の本質が変わらない事は解り切っているのに、私には頑なに変化を望む」

「ん。良く解りませんが、フランが変な子だったのは解りました」

「……チビ」

「え？ちよつと待つてください。まさか直球で罵倒されるとは思っていなかったんですけど。あたし、そこまで悪い事しました？」

いきなりピンポイントで痛い所をつけてきましたよ、この西洋人形。

「私を変だつて言った。目には目を、歯には歯を。有史以前から伝わ

る人類の大原則」

「性格は改善できませんが、身長は違います。気にしていたのなら謝りますが、多分あたしの方が歯の一本分くらいは酷い事を言われて……」

「はいはい、ハギちゃん。落ち着いて。ええと、フランチースカ中尉、ですよ。案内していただけるって事でよろしいんですね？」

信乃の前に割り込むように出ると、伊予が目の前に立つフランチースカに話しかける。

しかし。

「……今、何て？」

何故か突然真顔で問い返してくるフランチースカ。

え？案内してくれるんですね？

「だから、案内を……」

「違う、その前」

ちよつと首を捻り、そして、ぽつりと。

「……フランチースカ中尉？」

伊予の言葉にフランチースカが雷に打たれたように硬直する。

「もしよければ、もう一度お願いしていいだろうか？」

「フランチースカ中尉」

何故何度も繰り返させるのか。発音でも悪かったのだろうか。

疑問に思う伊予の目の前で、しばらく無言だったフランチースカが、ややあつて口を開く。

「……貴女の名前を聞かせて欲しい」

「あ、失礼しました。私は藤田伊予です。扶桑海軍中尉で、この子は……」

「イヨ。とてもいい名前だ。とても短い言葉に魂を感じる」

「あ？はい……そうですか？」

真つ直ぐな目で見つめられて困惑する伊予。

そこまで自分の名前に感動する要素があるとは思っていなかった。

「あの、あたしは……」

「それじゃあ行こう。ジェシー、イヨ、チビ」



「シノ!!萩谷信乃ですっ!!」

信乃の何が彼女をそこまで駆り立てるのか。

慌てて訂正する信乃を冷たい瞳で一瞥し、一言。

『彼女は違う』か。お似合いの名前だ」

『She—no』じゃなくて『信乃』!!『Trust me』で『信

乃』ですよ!!」

「はっ」

「……何で今笑いました?ジエシー」

隣を歩くジエシカをジト目で睨み付ける信乃。

人の名前を鼻で笑うな。

「私は初対面の相手を変人呼ばわりするような奴は信じられない」

「ハギちゃんも変わってるからあまり気にしない方がいいですよ、フ

ランチースカ中尉」

「待ってください」

「成程。変人は自分が変だと気が付かないという事だな」

「何で」

「そうです。それに、変わっているっていうのは裏を返せば個性です

し、何も変わってない人なんてかえって面白みがありませんから。私

はフランチースカさんみたいな人は嫌いじゃないです」

「おい」

「……ふふ、初対面でそう言われたのは初めてだ。大抵はそのチビ

……ああすまん、シノみたいな反応をするからな。少し、照れる……」

「いら」

そう言いながら、無表情な中にも僅かにはにかんだような笑みを浮

かべるフラン。

何ですかそれ。可愛いじゃないですか。

「……打たれる方になると弱いわよね、シノって」

「一緒になって打ってきた人に言われたくありません」

「大丈夫?紅茶飲む?」

「いいません」

……ぞとばかりに追い打ちをかけるジエシカ。馬鹿の癖に。

「馬鹿の癖に」

「口に出てるわよ、馬鹿」

「……着いたぞ、お前ら」

『司令官室』と書かれたプレートの据え付けられた扉の前で、黙れ馬鹿、と言わんばかりの目を信乃に向けながらフランが口を開いた。

— 3 —

「フランセス・S・ガブレスキー中尉、入ります」

流れるような仕草で扉を叩き口を開くと同時に扉を開くフラン。

ノックの意味とは？と思う間もなく扉が開かれ、そして、目の前では。

「……部屋に入る前には声を掛けろといったろ、ギャビー」

「掛けました」

「違う。かけてから返事を待て……まあ、声を掛けるようになっただけ進歩か」

目の前の光景に後ろにいた三人が目丸くする。

リベリオン陸軍のフライトジャケットを羽織った背の高い女性が、中年の同じくリベリオン陸軍の制服を着た男の胸倉をつかみ、そのまま自分の頭の上に持ち上げていた。

「は、離さんかゼムケ!!客人の前で無礼だと思わんのか!?!」

「見られた以上今さら取り繕っても無駄だろう?」

じたばたと暴れる男と、耳からびよこん、と犬の耳を生やした女性を見比べ、フランが首をかしげる。

「……またですか、隊長」

「「また!?!」」

思わず後ろの三人が声をハモらせる。

「ギャビー。その言い方だと私がいつもこいつを締め上げているように聞こえるだろ。時々だ、時々」

「「時々!?!」」

それでも十分に多い。というか、軍の中で掴み合いの喧嘩等、そもそも起こらない筈なのだが。

「……イヨ、半月に一回は『また』か『時々』か。客観的に見てどつ

ちだと思う?。」

「……『また』かなあ……」

フランの問いに伊予がぼつり、と呟く。

どつちもどつちだが、徹子と美枝が言い争ってるのも大体同じくらいの頻度で、大抵その時は『ああ、またか』と思うので多分前者で間違いない。

「『また』だそうです、隊長」

「……そうか。それなら仕方がない」

肩をすくめてゼムケ、と呼ばれていた女性が男の胸倉をつかんでいた手を放すと同時に、そのまま床に落ちた男がどしん、尻もちをつく。

「酷い目にあつた……何故私は毎月の予算を伝える度にこんな目に合うんだ……」

「足りないからだ。群狼を群狼たるに維持する為にはそれなりの予算が必要だ。准将はこの部隊を群狼から一匹狼にする気か」

「足りないものはお前の頭だ。もう少し考えて予算を使い」

「それならば、もう少し熟達したウィッチかPー51を後1ダースは寄越せ。お蔭でレベツカとギャビーがうちのトップエースになってしまった」

「……お取込み中みたいですね。フランチースカ中尉」

ぼつり、と伊予が呟く。何処の国でも上とのやり取りというのは面倒な物らしい。

最も、手を出しているを見るのは初めてだが。

「隊長。お取込み中すみませんが、客人を連れてまいりました」

「待つて!!そういう意味じゃないの!!」

そんな中でもマイペースに口を開くフラン。怖い物知らずというかマイペースというか。

どちらにせよ、取り込み中の上官の間に割って入るなど、並大抵の胆力ではない。

だが。

「ああ。解っている。エイカー准将、この話は後にしよう」

「……また後で締め上げられるのか」

「お前の態度次第ではな」

平然と答えるゼムケの言葉にはあ、とため息をつくが、直ぐにしやんと背筋を伸ばした男が伊予達へと向き直る。

「見苦しい所を見せてすまん。私はアーノルド・エイカー准将。第八空軍指揮官だ。このウエストハムネット基地は間借りさせてもらっている立場だが、一応司令官を務めさせてもらっている」

先程とは打って変わって、温和そうな雰囲気ながら、その実目の奥で鋭く伊予達を見据えるエイカー。思わず伊予達も背を伸ばして向き直る。

「あちこち飛び回ってるから実質私が切り盛りをさせられているのだがな」

「……この口も態度も性格も悪いのはヒューベルタ・A・ゼムケ。こんなのだが一応大佐でこんなのだが一応戦闘隊長を……っ……!?!」

「失礼准将。足元に虫が」

デスクの裏で思い切り上官の足を踏みつけるゼムケ。

直立不動の姿勢のまましゃんと背すじを伸ばしている姿は、艶やかな黒髪と端正な切れ長の瞳も相まって、まるでハリウツドの銀幕女優のようなのだが、先程のやり取りを見ている限り見かけ通りの女性ではない事は明らかだ。

「……伊予、呆けてる場合じゃないですよ?」

信乃の言葉に伊予がはっ、と顔を上げる。

「し、失礼しました。私は扶桑皇国海軍遣欧艦隊『瑞鶴』機動部隊所属の藤田伊予中尉です。こちらは随行している萩谷信乃准尉。キャサリン・オヘア元海軍中尉の護衛の為、こちらに参りました」

「HMW第二飛行部隊戦闘隊長、ジェシカ・E・J・ジョンソン中尉。エリザベス・F・ビュリーリング大尉の随行です」

伊予に続いてジェシカも口を開く。何で私が報告に来なきやいけないのか、という態度を必死に押し殺しているのが見て取れる。

「ああ。話は扶桑海軍及びブリタニア空軍から聞いている。輸送機も昼には到着済みだ。早速輸送機の司令官やオヘア中尉も交えて今後の打ち合わせをしたいところだが……」

「准将。こんな時間だ、食事が先決だろう。それにオヘア女史は今インタビューの最中だ。そんな事だから独身なのだ」

「一言余計だゼムケ大佐!!今まさにそう言うつもりだったというのに!!ああ、藤田中尉、ジョンソン中尉。食事は士官室で用意してある。萩谷准尉もそちらで一緒に取るように」

「良いんですか?」

信乃が思わず口を開く。

基本的に瑞鶴では准士官は下士官と同じ食事待遇となる。

恐らく先程の整備兵の言葉通りなら、下士官の食事は例の味気の無いビーンズスープだろうから、まさに降って湧いた行幸だ。

「言っておくが、准尉殿。ここでの飯など、不味い豆スープか、ただの豆スープの違いしかないぞ。うちのコックは皆ブリタニア人だからな」

それまでにこりともしていなかったゼムケが信乃に向かって僅かに口元に笑みを浮かべる。

一瞬きよとんとするが、どうやら彼女なりのジョークらしい。

「残念です。ローストビーフでも食べれると思っただんですが」

「サトウルヌスの夜にでも来れば食べれたかもしれないな。さつきも聞いていた通り、うちも予算が少ないんだ。使うところでは使い、減らせるところは減らす。戦地の食事など、ストライカーの補給と同じだ」

信乃の言葉に、にやり、と笑うゼムケ。どうやらそれなりにユーモアがある人らしい。

「准尉の癖に。隊長に失礼です、チビ」

そして冗談を解さないフラン。

毎度毎度のストレートな罵倒は結構応えるからやめてほしい。

「ていうかあんた達、ブリタニア人の前で良く食事の文句が言えるわね」

隣で聞いていたジェシカが呟く。

「ブリタニアの食文化は素晴らしい。アフタヌーン・ティーは私がブリタニアに来て最も感銘を受けたものの一つだ。味は好みではな

いかな。中尉殿」

「コークとコーヒーとハンバーガーのキメ過ぎで味覚がおかしくなっているのでは？大佐殿」

まるで狼のように歯を見せて笑うゼムケに対して、ジエシカが呆れたように肩をすくめた。

1944 ガリア パ・ド・カレー上空

「それにしても多いですね。ガリア中のネウロイ全部こっちに來たんじやないですか?」

ブラウンヘアーの少女が手にしたM1919機関銃の引き金を引 きながら呟く。

「この程度で全部なら、今頃501がガリアを解放してるさ」

「むしろ501が今まで解放できなかった理由が良く解ります」

軽口を叩きながらも次々に小型ネウロイを破壊していくブリタニアのウイッチ達。

HMW『グロリアスウイッチーズ』の精鋭、タングミーア基地航空部隊第3中隊のウイッチ達である。

「隊長!!8時方向より敵増援!!太陽の影、小型が10つす!!」

「了解!!エツタ、反転して上昇、頭殴りつけるわよ!!」

「マジっすか!?!てか無茶っすよ!!」

ジェシカ言葉に僚機のヘンリエツタ・マクラウドが悲鳴のような声を上げる。

フアラウエイランド訛りが強い、小柄な『元』義勇ウイッチにジェシカが言い放つ。

「あいつらは馬鹿だから平気よ!!」

「馬鹿は隊長っす!!ああもうっ!!」

ダイブから一気にスピットファイアを引き上げるジェシカに、ヘンリエツタ……エツタが後に続く。

フアラウエイランドの義勇部隊からジェシカ自ら引き抜いただけあつて、その動きは口とは裏腹に迷いがない。

ジェシカとエツタがM1919を構え、一射放つと同時に左右に散開。ネウロイのダイブからの攻撃を旋回でやり過ごし、そのまま二人そろつて背後につく。

そのまま再度斉射。一気にその大半を打ち落とす。

「いいか、ここが正念場だ。奴等の巢を本隊が叩くまで、何としても食い留めろ!!」

部隊の副隊長、アラーナ・C・ディーアが檄を飛ばすと同時に手にしたボーイズ対戦車ライフルの引き金を引くと同時に、味方に襲い掛かってきたネウロイが次々に爆散し、青空に白い光の花が咲く。

「流石副隊長!!」

「これなら負ける気がしないっす!!」

歓声を上げるH M Wのウィッチ達。

「……何か私の時と反応が違くない?」

ジェシカがぼつり、と呟く。

「負ける気はしないのに、何で私達が本隊に選ばれないのかしらね、ラーナ」

「さあな。最近の上の考えはドロレス隊長でもつかめないらしいからな」

ジェシカの問いかけにアラーナが答える。

ダウンディング空軍大將が失脚し、その後トレヴァー・マロニー空軍大將が台頭してきてから、ウィッチ部隊そのものが軽視される傾向にあった。

H M Wではそこまで顕著ではないものの、漏れ伝わる情報からは、解散したばかりの501に対しては相当な圧力があつたとか、マロニー個人の私怨があるとか、どうにもきな臭い。

今回の作戦も詳しくは聞かされていないものの、本隊の主力はウィッチではないらしい。

当然H M Wの総隊長であるドロレス・バーター大佐を始め、H M Wのウィッチ達からは不満の声が上がったが、マロニーを始めとする上層部は聞く耳を持たないどころか、囹の任務に虎の子のウィッチ部隊を使う事を決めてしまい、今に至っている。

「ふん。こんな作戦、失敗するのに1ペニー掛けてやりませう」

腹立たし気にブラウンヘアーの少女が呟き、M1919の引き金を引く。

「あ、じゃあ私は5ペニー」



「10ペニーと隊長の僚機になれる権利をかけるっす」

「おい、絶対に成立しない賭けを持ち出すな」

「どういう意味よ!？」

軽口を叩きながらだろうとも、敵が多かろうとも、小型の群れを相手に苦戦をする程HMWの精鋭の練度は低くない。

「それにしても、きりがないっす。隊長、弾足りるっすかね？」

「そうね、『私達だけ』じゃ足りないわね」

エッタと共同で中型を撃墜したジェシカが呟く。

落としても落としてもきりがない程、目の前の空を覆いつくすように展開する無数のネウロイ。

例え銃弾を節約しても、仲間達の数と携行弾数を考えれば、『自分達だけ』で落とし切れるわけがないのは明白だ。

だが。

「戦ってるのは、『私達だけ』じゃない」

アラーナが呟く。

本隊が敵の巢を叩けば、そこから派生するネウロイも自然に消滅する。

それに。

『待たせたな、『グロリアスウィッチーズ』。こちらリベリオン陸軍第8航空軍団、第56戦闘航空群。今より支援に入る』

待ち望んでいた声がオープンチャンネルの魔導無線に響きわたる。

「来ました!!『ウルフパック』!!」

「リベリオンの第56戦闘航空群だ!!」

HMWのウィッチ達が歓声を上げる。

「HMW全機は一旦離脱!!『狩り』に巻き込まれるわよ!!」

無線の声にジェシカが叫ぶ。

スピットファイアがすぐさま離脱を始めると同時に、遙か上空から無数のエンジン音の唸り声が響いてくる。

雲の隙間から覗く無数の影は、遠目にはネウロイの増援のようにも見える。だが、時折太陽の光を反射しきらきらと輝く姿は、禍々しい黒色の外皮を持つネウロイとは異なる。

『こちら『HV-A』、フランチースカ・E・ガブレシエフスキー。ウルフパック第二中隊は私に続け!!』

『LM-S』、ディアナ・シリングよりウルフパック第一中隊全機へ、全機突撃。ギャビーに遅れを取っちゃ駄目よ』

短い指示が魔導無線に響くと同時に、1000メートルの上空からウィッチ達が一斉に急降下を始める。

P&WR-2800ダブルワスプ魔導エンジンの大出力により、あつという間に超音速域に入ったP-47Dが、一斉に雷のようにネウロイに襲い掛かる。

そして、次の瞬間。

ウルフパックのウィッチ達が手にしたM2重機関銃が一斉に火を噴き、ガリアの空に雷鳴のような銃声を響かせる。

「うわ、壮観っすね!!」

エツタが歓声を上げる。

ウィッチという名の雷サンダーボルト撃と12.7mmの豪雨に晒されたネウロイの大群がたちまちはじけ飛び、その数を減らしていく様は、群狼の狩りというよりも鉄の嵐だ。

しかも空には第二波に備え、同数かそれ以上のウィッチたちが指示を待って控えている。

『第三中隊、行け』

眼下の様子を眺めていたゼムケが人差し指を伸ばし、背後に控えるウィッチ達に合図を送る。

『了解!!第三部隊は『LM-Q』、あレベッカ・S・ジョンソンたしに続けっ!!』

その猟犬に命を下す狩人のような、冷徹な口調に弾かれるように、空で出番を待っていたウィッチ達が一斉に降下を始める。

その眼下では攻撃を終えたウィッチ達がすぐさま上昇に移っている所だ。

何とか一矢報いようと、上昇に転じたウィッチ達を追おうとするネウロイだが、入れ違いに降り注ぐ第三中隊のウィッチ達のM2機関銃の12.7mmが残ったネウロイを容赦なく削り取っていく。

『ディアナ、前方よりネウロイの増援を確認。焦らず引き付けろ。』

ギャビーは再度降下、深追いはせず、増援が来る前に上昇しろ』

『第一中隊、了解ですわ』

『第二中隊、了解!!』

「……凄いつすね、あのウィッチの数」

「37」

「うえ、隊長数えてたんですか?」

ジェシカ言葉にエツタが目丸くする。

「まさか、『あそこ』にいる『あの子』に聞いたのよ。リベリオンは一中隊12人。3中隊と指揮官でそのくらいの数でしょう?」

「あの子……って、ひよつとしてフランっすか?」

ぱつ、とエツタの表情が輝く。

フランセス・S・ガブレスキー……オストマルク義勇兵としてリベリオンから渡ってきた年下の少女が再度リベリオン陸軍航空隊に復帰していったのはつい先日だ。

来た頃に比べマシになったとはいえ、少し無鉄砲な所があるので心配していたが、どうやらまだ生きているらしい。

「そうよ。今は中隊長。もうあんたより階級が上よ」

ジェシカ言葉にエツタが思わず口元に笑みを浮かべる。

「そっかあ……向うで立派になったんすね!!元僚機として鼻が高いっす!!」

フアラウエイランド出身のエツタにとって、オストマルク系リベリアンのフランはいわば同じ大陸で産まれて同じ国の部隊で戦った、所謂戦友でもある。

かつての三番機の活躍を喜ぶ二番機言葉に、ジェシカも一瞬口元に笑みを浮かべるが、すぐさま表情を引き締めて口を開く。

「エツタ!!フランになんて負けてられないわ!!全機増援に備え集合!!これ以上横取りはさせないわ!!」

「二了解!!」

ジェシカの声にHMWのウィッチ達が再度上空へ集結を始める。

「さあ、無駄にしてる時間なんて無いわ!!私達も行くわよ!!」

1945年 1930 ブリタニア ウェストハムネット基地

「何ででしょう、ハギちゃん。他所の国の料理の筈なのに、凄く食べなれた味がします」

「というか、具体的に言えば週に一回は必ず食べる味ですね」

ウェストハムネット基地の士官用の食堂で振舞われたブリタニア料理は、豆スープではなく、豆の代わりに野菜と肉が入った香辛料入りのとろみのついたスープに、扶桑でもお馴染みの炊いたご飯をよそい盛りつけたブリタニア料理。

そう。カレーライスである。

「そういえば、扶桑のカレーってブリタニアから来たモノでしたね」

伊予がそう言って残りのライスをカレールーに絡める。

扶桑海軍にカレーが定着したのはブリタニアの影響だ。

ブリタニアはかつての植民地の宗主国としての名残から、インドから引き揚げてきた商人やインド系の移民の影響もあり、文化の一環としてインド料理が広まっている。

カレーもまた、フィッシュアンドチップスなどと並び、パブ等でも定番の品となっている。

特に、本場であるインドのカレーのように家庭ごとに手作りでハーブやスパイスを調合するのではなく、予めそれらの香辛料を調合し、『カレー粉』として売り出したのはブリタニアが世界で初だ。

そしてそれがインドを通り越して扶桑に渡り、海軍では金曜日の定番料理として定着したのである。

そういった意味でおなじみの食事の本場なのだから、そこまで味が変わるものでもない。

「ブリタニアの料理を見直してくれたようで何よりだ」

そう言ってコーヒーの入ったカップを手に肩を竦めるのはオヘアと共に合流したビューリング。

「何というか、外国で地元の幼馴染と再会した気分です」

信乃が呟く。

「んー。味付けがブリタニア料理らしくないねー」

「元植民地から味付けまで搾取したモノだからな。それを自国の料理と言いつ張るのは流石は我らが宗主国様といったところだ」

「聞こえているぞ、植民地人共」

オヘアとゼムケの呟きにビュリーリングが口を開く。

「そんな事より、折角のブリタニア料理なのに食後が『これ』なのが納得いかないわ」

食後のコーヒーを飲みながらジェシカが一人苦い顔をする。

味を誤魔化すためにミルクと砂糖を大量に投入しているので、苦い顔をしているのは味というよりもむしろコーヒーそのものに対してのブリタニア人としてのプライドというか、複雑な思いのせいだろう。

「ジェシー、折角のインスタントや代用じゃないコーヒーだ。余計な物を投入するな」

「お言葉ですが、最高級の茶葉で入れた紅茶でもミルクを入れた方が美味しいんです」

ビュリーリングの言葉にジェシカが反論する。

机の上の調味料は飾りではなく必需品というのがブリタニアの常識だ。ろくに味付けをせず調理するのも、各々が好きな味付けに出来るようにとの配慮である。

それを味が薄いだの大雑把だのと文句をいわれるのはブリタニア人としては甚だ遺憾であり、むしろその為に敢えて紅茶の味は薄いのだというのがジェシカの持論だ。

それに比べ、いくら砂糖とミルクを入れてもしつこく自己主張をしてくるコーヒーの厚かましい事。まさに目の前の先輩そのものである。

「そういうえば、フランチースカ中尉も護衛に加わるんですか」

苦そうな顔をしながらコーヒーを舐めていたフランが伊予の言葉に頷く。

「P-47は護衛任務向きではないが、迎撃は得意だ。微力ながら手伝わせてもらう」

「確かに、足回りは悪いですよ、あの『安全靴』」

信乃が口を挟むとフランがじろり、と信乃をにらむ。

リベリオンのP-47は、その頑丈さと大火力から、リベリオンのウィッチ達の間では『ジャガーノート』という東洋の雷神の名で親しまれているが、その旋回性能の悪さから、他国のウィッチからは丈夫なだけの『安全靴』と揶揄されるユニットだ。

「この部隊ではドッグファイトなんて前時代的な戦い方をする必要は無いからな。『零式』のような旧型とは違う」

「その分小回りが利くから護衛は得意ですよ。適材適所、お互い頑張らしましょう」

信乃の言葉にふん、と鼻を鳴らすフラン。どうやら中々心を許してくれないらしい。

「……さて、丁度いい頃合いだ。明日以降の予定についても話をしておこう」

コーヒーのカップをソーサーに戻し、ゼムケが口を開く。

その言葉に、傾注の合図をせずとも、その場に居た皆が口を閉じてゼムケへと目を向ける。

「皆も知っているだろうが、北海はネウロイと遭遇する可能性が今までと比べても遥かに高い。つい一週間前にも我がリベリオンの輸送機と護衛……第56戦闘航空群に所属するウィッチが二人、行方不明となったばかりだ」

その言葉にフランが表情を硬くする。無理はない。第56戦闘航空群のウィッチという事は、その『つい先日』まで共に戦ってきた、良く見知った仲間という事だ。

「この一ヶ月でこのウェストハムネット基地からバルトランド方面へ向けて行った輸送は12回。先週も含め、その間で輸送の失敗は3度」

「少なくともないですが、多くも無いですね」

信乃の言葉に、伊予とジェシカ、それにゼムケも同様に頷く。

ネウロイと遭遇する可能性のある空域では常にそう言った事態は想定されるし、何度もそういった事態を経験していれば、ゼムケの言

う数値が決して異常な数字ではない事は感じ取れる。

それに、最前線での大規模作戦の前等は、護衛のウィッチや輸送機の喪失を前提とした大規模なコンボイ輸送が行われることもあり、それに比べても、通常の損失割合としては決して高くはない。

「問題はここからだ。三度の内、一度は輸送機の残骸が見つかったが、残りの二度は通信が途絶した海域を調べても、撃墜の痕跡が一切見つからなかった」

「二度とも、ですか？敵ネウロイは？」

「それも見つかっていない。念のため、ブリタニアやガリア、バルトランドやベルギカの各基地にも連絡を取ったが、当該機体及びウィッチの目撃情報は入っていないとのことだ」

ゼムケの言葉に、流石に伊予も首を傾げる。

護衛のウィッチも含めて行方不明という事は、十中八九ネウロイに撃墜されていると考えられる。

だが、その場合、後程の搜索で輸送機やストライカーユニットの残骸といった痕跡や、或いは輸送機を撃墜したネウロイとの遭遇等、撃墜理由を特定できるような、何かしらの情報を得る事が出来るはずだ。

余程大きく針路を外れていない限りは、そのいずれも見つからないという事態はそうそう起こりえない。

だが、それが短期間に続けて二度。異常事態と言って差し支えが無い事態だ。

「問題はまだある。その後、行方不明になった輸送機を探すために北海空域を調査していたウィッチが同様に消息を絶った」

「行方不明？ウィッチ『だけ』がか？」

ぴくり、と、その言葉にビューリングが目を細める。

「ああ。僚機の証言によると、調査をしていたほんの短い間に姿が見えなくなったらしい。当然搜索はしたが、輸送機同様、墜落や撃墜の痕跡は矢張り発見されていない」

ちらりと隣に座るオヘアを見ると、矢張り同じように表情をこわばらせてビューリングを見返していた。

「……質問しても良いね？」

「構わない。ミス・オヘア」

「本当に、その空域でネウロイは発見されてないね？例えば、所属不明のウィッチが目撃されたりとか、或いは……」

言葉を濁しながら、他のウィッチの目を気にするように、オヘアがちらり、と周囲を見る。

だが、それよりも先に、ゼムケが口を開く。

『或いは、人型のネウロイを見なかったか？』

「イエス」

ゼムケの問いに、オヘアがややあつて頷く。

「そして、私が『何故そのような事を聞く？』と尋ねても、貴女はそれには答えられない」

「……イエス」

再度肯定するオヘアを見て、ゼムケが肩を竦める。

「502や507に連絡をしたときにも同じことを聞かれた。詳細は『最高機密』らしい」

非常事態において、その解決の糸口となりうる情報を口にしない、或いは出来ないという事は、余程重大な機密か、或いは相手が開示すべき情報か否かを判断できない無能であるかのどちらかだ。

そして、ゼムケが知っている以上、統合戦闘航空団を任せられるウィッチの中で、そんな無能な人物はいない。

「似たような状況、ミーは……ノー、『ミー達』は知ってるね」

ぽつり、とオヘアが呟く。

だが、軍事機密、それも最高機密に属する類の事は、いくら軍を離れても守秘義務は残る。

いべきか、言わざるべきか。

だが、それを制するように、ゼムケが口を開く。

「生憎、人の姿をしたネウロイを見たという情報はわが部隊からも、隣隣の部隊からも入っていない。北海でネウロイに遭遇した他の輸送部隊からも、ネウロイに変わった様子は見られないという報告が入っている」



ゼムケは言葉を続ける。

「しかし、状況によっては507及び502を含めた周囲の部隊とも連携し、速やかに脅威を排除することも視野に入れる必要がある。だが、先ずは輸送機を送り届けるのが先決だ」

後方の都合に合わせてネウロイは待つてくれない。

輸送機が落とされたという事は、それだけ前線での物資が減少するという事だ。

補給が何よりも生命線である最前線への輸送任務は、危険な状態であるからこそ、他のどんな任務よりも優先される。

「輸送機の進路に合わせ、こちらでも出来る限りの哨戒は行わせてもらうが、作戦の遅延はあっても、変更は認められない」

そう言い、ゼムケがその場に居る皆へと目を向ける。

「承知します」

伊予が頷く。

「危険ではない任務なんてこの欧州では有り得無い事くらいは、私達遣欧艦隊も理解しているつもりです。積極的な協力に感謝することはあっても、謝罪される理由なんてありません」

「変な奴を見つけたら、私達がぶっ飛ばしてやるから安心していいわ」  
伊予とジェシカが口を開く。

「頼もしいな。だが、異常を感じたらすぐさま撤退するように。物資さえ無事なら再度輸送を行えば良いが、失えばそこで終わりだ」  
「承知しています」

伊予が頷く。

「ミス・オヘア。それにビューリング中尉。それで良いだろうか？」  
ゼムケの問いに、ビューリングが口を開く。

「構わない。ただ、我々が『戻る』という判断をしたときは必ず従って欲しい。例え危険だと思わなくてもだ」

「それは、先程の人型に関する話か？」

ゼムケの問いにオヘアが頷く。

「イエス。本当なら、事態がクリアになるまでは皆の安全のためにも出て欲しくないね。でも、物資は前線には必要なものなのはミー達も

理解してるね。だからこそ、物資とユ一達を失わないためにも、ミー達のリクエストには従って欲しいね」

ビューリングもオヘアも、先程までとは打って変わった真剣な表情を浮かべている。

その様子を見て、伊予が口を開いた。

「こちらはそれで構いません」

伊予の言葉にゼムケも頷く。

「その判断は藤田中尉に一任する……ギャビー」

「はい」

『あのユニット』にはもう慣れたか?」

「問題ありません」

フランの言葉にゼムケが頷く。

「……あのユニット?」

首を傾げる伊予。横で聞いていた信乃とジエシカも興味をそそられたのか、ゼムケとフランの方へと目を向ける。

「我々の戦い方は数を持つての一撃離脱だ、だが、今回ばかりは数が足りない。それを補うためのユニットだ」

フランが頷くと同時にゼムケが立ちあがる。

「皆。今日はゆっくり休め。明日は予定通り0900に搭乗員室に集合するように」

その言葉に皆が立ちあがり、それぞれの部隊の流儀に則った敬礼を返した。

## 2-7. STELLA II

—1—

明朝 0830 ウェストハムネット基地

「飛び立ってるんですかね？こんな人に人がいて」

「流石に離陸前には離れると思うけど……」

呆れたように呟く信乃の言葉に、伊予が苦笑を浮かべる。

早朝のウェストハムネット空港の滑走路は人と機材でごった返していた。

そこにいる人の多くは新聞記者やカメラマン。人が多すぎて整備兵を捕まえるのも一苦労だ。

「いい写真を撮ろうとしてカメラマンが飛び出してくるかもしれないわね」

「その時は頭を蹴っ飛ばせばいい」

「意外と武闘派ですね、フラン」

既に整備を終え、駐機するストライカーユニットの脇に待機する伊予、信乃、ジェシカ、そしてフラン。

全員が全員バラバラの機体で、ペイントもそれぞれ異なる。そんなちよつとした統合航空飛行隊の様な姿を時折カメラマンが写真に収めていくが、話しかけようと近づいてくる記者は整備兵たちがそれとなく止めていた。

伊予の脇に駐機する、モスグリーンと白に塗装された紫電改。

白にブルーのラインの塗装が施された信乃の零式54型。

『J E—J』の文字が入っているスピットファイア Mk. V がジェシカ。そして。

「それが昨日言っていた機体ですか？」

鮮やかなマリンプルーに塗装された大型ユニットを見ながら信乃が首を傾げる。

「P—47M。P—47DにP&Wの2800—57エンジンとCH—5過給機を積んだユニットだ。つい最近まで手直しが続いていたが、ようやく安定して実戦に持ち込めるようになった」

「成程。うちの子と同じですね」

エンジンを換装した新型なら零式54型と同じだ。何となく似た者同士、親しみも沸く。

「ちなみに最高速度は756キロ。並みのネウロイ相手ならば、水平飛行でも十分ヒットアンドランが可能だ」

「は？全然違うじゃないですか」

何ですか750キロって。零式の限界降下速度より速いじゃないですか。

「そんな速度で旋回出来るの？ただでさえ取り回しが悪いのに」

「曲がる必要は無い。回避しなくてもP-47Mなら逃げられる」

「私達の任務は護衛よ。逃げてどうすんのよ」

はあ、とジェシカが肩を竦める。これでは細かい空戦拳動には期待出来そうにない。

「で、イヨ。どうすんの？」

「え？そうですね……」

先日のゼムケ達の言葉はさて置き、指揮官として現状の戦力をどう割り振るか。

「……取りあえず、直掩は私とハギちゃん。ジェシカさんは少し先行して、フランチースカ中尉は高高度を保ってそれぞれ周辺の警戒をしてください。もしネウロイと会敵したら、フランチースカ中尉とジェシカさんが攻撃、私は輸送機を守りつつ二人の援護、ハギちゃんは輸送機に張り付いて、いざという時のシールドを担当……で、どうでしょう？」

「ま、そんなところね」

「悪くない」

ジェシカとフランが頷く。

しかし。

「シールド、あたし一人ですか？」

伊予の言葉に信乃が眉を顰める。

「自信無さげだな、シノ」

何となく発したフランの言葉に、信乃が当然とばかりに頷く。

「当たり前です。あたしが抜かれたら輸送機に乗ってる人たちが『死ぬ』んですよ」

「……っ」

何気なく出てきた信乃の言葉に、一瞬フランが言葉を失う。

そう。いくらネウロイを落としても、輸送機は一撃でも熱線が直撃すれば撃墜される。

当たり前前の事だが、当たり前すぎて麻痺していた感覚。

だが。

「何、臆病風？心配しなくても、近づいてくる前に私達が全部落とすわよ。フラン」

ジェシカが呆れたように言い放つ。

そう。ジェシカはそういうウィッチだ。自分の実力に疑問を持たず、そして、その実力通りの戦果を挙げて見せる。

「……ああ、そうだな……」

内心の動揺を悟られぬよう、冷静を保ってフランが頷く。

「状況次第では私もシールドに回ります。一人で一機なら、多少不利でも守り切れますよ。ハギちゃん」

護衛任務には性格が出る。積極的に敵を落として脅威を排除するタイプと、守りを固めて迎撃に専念するタイプ。信乃は完全に後者で、伊予は戦闘スタイルに似合わず前者寄り。ジェシカは状況にに応じて柔軟に動けるタイプだが、フランは完全に前者だ。

「確かに、輸送機の直掩はシールド操作に長けたジェシカさんが向いているかもしれません。でも、ジェシカさんとハギちゃんでは前衛での戦闘能力に大きな差があります」

「護衛任務じゃなければ、私じゃなくてシノを前衛に回すところね」

ジェシカが肩を竦める。護衛任務である以上、囷にネウロイが食いつく可能性は低い。

なにしろ、もつと落としやすい『輸送機標的』がすぐ先に居るのだ。

「……フラン、あたし、自分を守るのは得意ですが、他人を守るのはそうでもないんです。適材適所、前衛は任せました。その代り、輸送機はあたしが守り切って見せます」

先日と似たような台詞だが、意味合いは大分異なる。

真つ直ぐ見つめてくる信乃の目を見返すフラン。

信乃の目は真剣だった。

「……ああ」

フランは信乃がこんな目をするウィッチだと思っていなかった。

……そう。自分達の背に掛かっているのは、人の命だ。

もし父の今際の時、今の自分がいたのなら。

なすすべもなくネウロイに蹂躪された父の母国に私が居たのなら。

「……解っている、『シノ』」

だからこそ、フランは頷く。

「片っ端から私が敵を落としてやる。だから、お前は片っ端から敵の攻撃から輸送艇を守れ。もしネウロイのレーザーが輸送機にかすりでもしたら、その身長を更に縮めてやる」

「ちよつと待つてください。落とされなければノーカンですよ?」

眉を顰める信乃に、僅かに、ほんの僅かだけ頬を吊り上げ、フランが小さな笑みを浮かべた。

— 2 —

「ヒーハー!! 見ろよジョーイ、かわいい子が一杯だぜ!! お前、どの子が好みだ?」

「ウィッチが4人、しかも皆エースでかわいい子ちゃん!! 迷いますが、オレはやっぱりあの扶桑の隊長さんがいいっすね!!」

「あの中じゃそうだが、やっぱりオヘア中尉が一番だな。中尉を乗せる事が出来るなんて、サウスタコタの仲間たちに自慢できるつてもんだ」

背後から響く声に思わず振り返るウィッチ達。

見ると、ストライカーと一緒に滑走路に並んでいる輸送機に、リベリオンの輸送機乗りらしき男達が大声で話しながら向かって行くところだった。

本人たちからすれば聞こえてないと思っっているのか、それともわざと聞かせているのか解らないが、多国籍部隊ながらスレンダーが4分の3の多数派を占めているウィッチ達の間に一瞬剣呑な雰囲気の流れ

れる。

「他所の国の兵士じゃなかったら海軍精神注入棒ですね」

「ハギちゃん、物騒だよ。解るけど」

護衛する輸送機に乗る相手に向ける目とは思えない剣呑な視線を送る信乃に伊予が呟く。

男達が向かう先。

スオムスへの義援物資を積んだダグラスC-47は迷彩など知つたものかとばかりに大きく描かれたリベリオン国旗と『Crusher Ohea』の文字。

輸送機にクラッシュとは、戦意高揚の宣伝も兼ねているのかもしれないが縁起でもない。

そして、極めつけは機首部分には布面積が少ない水練着を纏ったオヘアがその豊満なボディを強調するようなポーズを取ったノーズアートだ。

誰だ描いた奴。

「どうせだからあそこのカワイ子ちゃんたちも書いてやれよ、ボブ」  
「いいねえ。どんな『せくしーな恰好』にしてやろうか、グフフ」

……そうか、ボブの仕業か。

……いかにもボブって感じのリベリアン体型ね、ボブ。

……方が一それを実行したら北海に沈めますよ、ボブ。

……覚悟しててくださいいね、ボブ。

ジトつとしたウィッチ達の視線を知ってか知らずか、意気揚々と輸送機に乗り込んでいくリベリオン兵達。

一方。

「やれやれ、これだからリベリアン共は解ってない。やれ胸だ、やれ尻だど。女のケツについていくことしか出来んのか」

「いい事を言うな、志村。見て見ろ、萩谷飛曹長のあの守ってやりたくなるような儂い体つき。あれこそ至高」

「他の2人も中々にスレンダーで可愛らしいじゃないか。ああ、守護りたい。扶桑男たるもの、『可憐な少女』の楯になる事こそ本懐だ。なあ、中本」

「ふっ。良く解ってるじゃないか、加藤」

C-47の後ろに並ぶ、武骨なモスグリーンに塗装された扶桑海軍の零式輸送機へと向かう飛行服姿の乗組員たち。

元々伊予達が護衛する予定のペテルブルグに向かう扶桑海軍の零式輸送機だ。

「……勝手にネウロイに突っ込んでいたりしないでしょね、あの扶桑の輸送機」

ジェシカが呆れたように呟く。

もとはC-47と同じく旅客機として設計されたDC-3を基にした機体であるため、並んでみるとその形状自体は似通っているのかもしれないが、塗装のせいではっきりと見は全く別の機体のように見える。

乗組員の気質もリベリアンとは異なる、いかにも扶桑軍人といった雰囲気だが、話している内容からして案外似たもの同士なのかもしれない。

「皆、待たせたねー」

そんな4人の元へ、呑気そうな口調でオヘアとビューリングが近づいてくる。

「取材が長引いたねー。特にカメラマンがここばかり取るから中々話が進まなかったねー」

そういつて胸元を隠す仕草を見せるオヘア。

「失礼なカメラマンだ。オヘア元中尉をそんな安っぽい目で見るなんて」

「そうですね。そのカメラマン共、あたしが片っ端からドーバー海峡に沈めましようか？」

珍しく意見が一致するフランと信乃。

「そこまでしなくていいね。フランもシノも優しいねー」

「……多分ハギちゃんのは優しさからの発言じゃないです」

持たざる者の僻みを散々聞かされてきた伊予がぼつり、と呟く。

「……なあ、どつちかに乗らないと駄目なのか？」

一方、先日までの態度とは打って変わり、うんざりとしたような顔



で輸送機を見ながら、ぽつり、とビューリングが呟く。

「好きな方を選ぶといいですよ。最も、私ならどっちも御免ですが」  
にやにやと笑うジェシカをビューリングが睨み付ける。きつと  
散々振り回してきた罰が当たったに違いない。

「私のハリケーンはどこだ?」

「ミーの輸送船に乗せたねー」

「今すぐ出せ」

「シールドを張れない人を守る余裕はないです。素直にあの『クラツ  
シャールオヘア号』に乗ってください」

シールドが張れないウィッチなど、平たく言えばただの的だ。ただ  
でさえ鈍重な輸送機を護衛しなくてはいけないのに、小型ネウロイの  
熱線がかすただけで致命傷を負うようなウィッチを守るような余  
裕などない。

ちっ、と舌打ちをすると、忌々し気な目でオヘアの義援物資の積ま  
れたC-47を睨み付ける。

「あんな輸送機に乗って落とされたら地獄で待ってる旧友がどんな顔  
をするか……」

「きつと大爆笑ねー」

何故か嬉しそうな顔をするオヘア。

「一体何を考えてあんな塗装にしたんだ、オヘア」

「ミーじゃないねー。パイロットが勝手にやったねー」

「……正確には、寄付をした国民の希望に沿ってパイロットが描いた、  
といった所かな」

その声はここにいるウィッチのものではない。

首から下げたカメラに手をやりながら、人懐っこい笑みを浮かべて  
近づいてくる女性に、皆が反射的に目を向ける。

「どうも。もしよければ輸送機をバックに一枚いいかな?」

ブルネットの緩くウェーブした長髪に、セーターとストラックス。

見た目からして軍人らしからぬ女性だが、一般人ならこの場所に立  
ち入る事は出来ない。となると、記者か、カメラマンか。

「決められた場所での取材は禁止されている。基地から追い出された

くなければカメラを下ろして回れ右だ」

一步前に進み出たフランの言葉に女性が肩を竦める。

「許可は取っているよ。ここでの取材も、何なら、あの派手な輸送機に乗り込む許可もね」

訝し気な顔を浮かべるフランの肩をオヘアがぽん、と叩く。

「心配ないね、フラン。彼女はミーと同行するリベリオンのカメラマンねー」

オヘアよりやや背は低い、一般的な扶桑人からすれば高いくらい。茶目つ気のありそうな細い瞳をさらに細めて笑顔を浮かべてウィッチ達に向かって口を開く。

「あたしはデビー・シーモア。リベリオンのグラフ社と契約している。グラフ誌は今回のオヘア女史の義援活動にも資金を提供しているからね。お蔭で私はフロリダでのバカンス中に呼び出されて冬のストムスに送り込まれることになった訳だけど」

そういつて愉快そうな笑みを浮かべるデビー。

言葉とは裏腹に嫌がっているそぶりは無く、むしろどこか楽しそうだ。

「スポンサーは大切ねー。お金を出してくれた分、写真移りが良くなるように目立つ塗装をすることになったねー」

国民個人や団体がスポンサーとなって、軍に戦闘機やストライカーユニットを寄付し、その代わりに機体に入名を入れてもらうといった事は扶桑でもよく行われている。

リベリオンでも同様で、寄付という名の賄賂をする事で便宜を図ってもらうという事は決して珍しい事ではない。

「他の記者が臆病で良かった。お蔭でここから先は私の独占取材だよ」

「ストムスまで行きたがる物好きなりベリアンがいる事がむしろ驚きね」

戦地から遠く、かつ未だネウロイの被害にさらされた事が無いリベリオンの人々にとっては欧州の激戦地は遠い『他人事』だ。興味はあっても巻き込まれるのは御免だというのが普通の感覚だろう。

だが。

「1年前まであたしは502で取材してたから慣れっこだよ。向うにつけば知り合いも多いし、その間は腕利きのウィッチが守ってくれるんでしょ？」

そう言っつぱちり、とジェシカにウインクしてみせるデビー。

前線で取材していたなら、その危険性は身をもって理解している筈だ。何度も行きたがる等正気の沙汰とは思えない。

だからきつとこの女もまともではない。まともではないという事は、いくら正論を言ったところで通用しないという事だ。

「……何を取材してきたのか知らないけど、余程運が良かったのね」  
呆れたようにジェシカが肩を竦める。

「ああ。運が良い。だからその幸運に感謝しつつ一枚撮らせて貰えないかな」

『偶然』カメラを叩き壊されたくなければ、ご自由に」

カメラを構えるデビーに挑発的な笑みを浮かべるジェシカ。どうせ壊されてもまだ予備は十分に持ち合わせているのだろう。

こういう凶太さも前線に向かうカメラマンには必要なのだ。

「そろそろ出発ね、皆、デビー」

オヘアの呼びかけに、ウィッチ達はそれぞれのユニットへ、デビーとビューリングはオヘアに続いて輸送機へと向かう。

「……何だか大変そうですね」

オヘアの後をぞろぞろと続いていくカメラマンや記者達を見送り、ぽつり、と、紫電改に足を通そうとする伊予。

「大変なのはこれからだ。藤田中尉」

そんな伊予の元へ一人の女性が歩み寄る。

「ゼムケ大佐。どうかしましたか？」

取材から抜け出てきたのか、昨日とは異なるリベリオン陸軍の礼装に身を包んだゼムケが伊予の元へと近づいてくる。

ちらり、と周囲へと目を向けるゼムケ。記者たちはオヘアの方へ向かい、二人の様子を見ているのは既にストライカーに足を通した他のウィッチ達だけだ。

「……昨日の話の件ですか？」

「ああ」

僅かに緊張した面持ちになる伊予にゼムケがそっと近づき、その耳元に顔を近づける。

ゼムケの声はストライカーと輸送機のエンジン音にかき消されて伊予以外には届かない。

ただ、二人の表情から重要な話である事だけは伺える。

「……一体何を話しているのだろうか、あの二人は」

「さあ。大人の事情って奴かしらね」

フランの問いにぼつり、と呟くジェシカ。どうやら質問に答える気はなさそうだ。

やや不服そうな顔をしたフランが隣の信乃を見るが、こちらも素知らぬ様子で手にした扶桑の99式2型2号改機関銃の点検をしている。

「……一応、あたしの方が先輩みたいですから一言だけ。フランはゼムケ大佐を信頼してますか？」

「勿論だ」

フランの言葉に信乃も頷く。

「なら、この話はここまでです。あたしも伊予を信頼してますから」

セーフティの確認を済ませ、99式を背に背負いながら呟く信乃に、フランが尋ねる。

「……シノはそれでいいのか？」

「ええ。『余計な詮索は必要ない。戦場では余計な思考が命を奪う』ですよ」

自らの長機の口癖を真似しながら、信乃が肩を竦めた。

—2—

『こちら『扶桑一番』、周囲の状況はどうですか？』

『ブリタニア一番』異常なし』

『リベリオン一番』、敵機見えず』

『扶桑二番』、異常ありません』

魔導無線から響く声に輸送機の搭乗員たちは緊張した面持ちで耳

を傾ける。

ウエストハムネット空港を離陸してブリタニアを離れば、いつネウロイと遭遇してもおかしくない空域に入る。

冬の北海は温度も低く、ネウロイに落とされて仮に不時着に成功したとしても、その後の生存の可能性は限りなく低い。

だが。

「懐かしいねー、このコールサイン。ミー達と同じねー」

「そりやそうだ。私達の後に広まったんだからな」

コーヒーのカップを手に呑気な口調で目を細めるオヘアと、肩を竦めるビュリング。

国名の後に階級順の番号を振るコールサインの原点は、世界初の多国籍ウィッチ部隊となったいらん子中隊が発祥である事を知る者は少ない。

コールサインが必要だという穴吹智子少尉の発案に、エルマ・レイヴオネン中尉が当時思いつきで提案したものだのだが、その後多国間で部隊を組む際に『シンプルかつ識別が楽で、どんな馬鹿でも間違えない』という合理的な理由で、今では方々の部隊で使用されるコールサインである。

「成程、意外な事実ですね。あ、これは記事にしても大丈夫な情報？」

「問題ないね。でも、こんな情報、面白いね？」

「こういうった裏話をコラムとして乗せると、意外と反響が良かったりするんですよ」

嬉しそうにメモにペンを走らせるデビー。

ま、判断するのは上の人間ですがね、と笑みを浮かべるデビーを尻目に、ビュリングが機長に向かって口を開く。

「おい、煙草吸ってもいいか？」

「こんな狭い所で止めるね、少しは我慢するねー」

操縦席のすぐ後ろ、搭乗員用の休憩用に用意された長椅子に体をくつつけるように座っていたオヘアがその言葉に露骨に嫌な顔をする。

「後で一本貰えるなら」

「そのくらいなら構わん」

「いえ、その綺麗な口で吸った方をですね」

にやり、と笑う年配の機長。いい年をして何をほざいているのか。「火が付いたまま押し付けられたいのか？そういう被虐的な趣味の相手は専門外だ」

肩を竦めながら新しい煙草の封を切るビューリング。先日信乃からもらった『ほまれ』である。

「……皆さん、随分余裕がありますね」

そう呟いたのは副操縦士のジョーイ。先程4人のウィッチの中から伊予を選んだ巨乳好きの若者だ。折角すぐ脇の直掩に伊予が付いているのに、鼻の下を伸ばす余裕も無いようだ。

不安げに時折空をきよろきよろと見まわすジョーイに、ビューリングが口を開く。

「お前さん、欧州に来てどのくらいだ？」

「一年になります」

「ネウロイに会った事は？」

その言葉に黙って首を振るジョーイ。

「姉さん、こいつは『ラッキー・ジョー』って言うんだぜ」

横から口を開いたのは航空機関士のボブ。飛行機乗りにしては珍しく小太りな体型をしており、オヘアのノーズアートを書いた張本人だ。

「こいつが来て一年、ほぼ毎日空を飛んでる癖に、こいつが乗った輸送機は未だ一度もネウロイと遭遇していないんだ。だから機長が縁起がいいってこの機体に乗せたのさ」

「ほう？」

得意げにボブがそう言った次の瞬間、魔導無線から緊張したような声が響く。

『こちらリベリオン一番、5時方向にネウロイらしき機影を確認』

『ブリタニア一番、こっちも確認したわ!!機影は一機、偵察型ね!!』

凍り付くボブと、静まり返る機内。

無言のままビューリングが煙草を口につけ、火を灯す。

ふう、と煙を吐くと、ややあつて一言。

「……初遭遇おめでとう。『ラツキー・ジョー』」

「……どうも……」

その言葉に、ジョーイが乾いた笑顔で応えた。

## 2—8. STELLA III

—3—

「こちら扶桑一番、ネウロイを確認しました」

伊予が呟き、背負ったS—18を構える。カールスラントとヘルウエティアにより開発されたライフルは、欧州各地で使用されるモデルで、遣欧艦隊でも狙撃を得意とするウィッチたちの間で用いられている。

『こちらリベリオン一番だ!!攻撃を仕掛ける……』

『いえ、その必要はありません』

緊張したフランの言葉を伊予が遮る。

伊予の目は既に敵を捕らえている。

それが何を意味するか。

「どうやら、向うもこっちに気が付いたようですね」

ぽつり、と呟く伊予。

相手が『はぐれ』ならまだよかったが、ネウロイはこちらに向かうのではなく、反転して空域から離脱しようとしている。

ウィッチでもネウロイでも、偵察型の役割は交戦ではなく敵の補足。むやみやたらに攻撃を仕掛けてくる『はぐれ』とは違う。

相手の動きを予知し、銃口をやや先に向ける。伊予の固有魔法『自動演算』は視界内の着弾位置を正確に割りだすが、相手の動きは他のウィッチ同様偏差射撃の技術が必要となる。

敵が飛び込んでくる位置に狙いを定め、一射。引き金を引く。

次の瞬間、遙か先にいるネウロイの動きが止まり、花火のように白い光をまき散らして爆散する。

『こちら扶桑一番、敵ネウロイ撃墜』

『……え?』

ぽつり、と呟いたのはフラン。

射程距離外どころか、狙撃銃とは言え弾が届くかどうかとも怪しい距離で正確に相手を射抜いた伊予に、信じられないといった声を上げる。



『流石、相変わらずいい腕ね』

弾んだ声で声を上げるのはジェシカ。

伊予の固有魔法を知っていれば驚く事ではないが、これだけの距離で相手の動きを読み切るのは並大抵の技術ではない。

『やった!!一発だ!!』

『うおお、当てたぞ!!』

護衛する輸送機からも歓声上がる。ジョーイも思わず隣の機長に抱き着き、思い切り頭に拳骨を食らっていた。

『凄い……こんなことが出来るのか、伊予』

フランが呟く。ジェシカや信乃とは違い、初めてみたのであれば驚くのも無理はない。

だが。

「こちら扶桑一番。相手が偵察型なら、間もなく敵の本隊と遭遇する可能性があります。進路を変えつつ、各ウィッチは警戒を密にしてください」

その言葉にジョーイの笑顔が再度凍り付く。

『扶桑二番、了解です』

『ブリタニア一番、了解したわ』

『リベリオン一番、了解』

伊予の言葉に他の三人が答える。

「ど、どういう事です?先輩……」

「オクラホマにいるお前のママよりおっかない奴に見つかったって事さ、ジョー」

ジョーイの言葉にボブが呟く。先程までの温厚そうな顔は鳴りを潜め、ジョーク交じりながらもその表情は硬い。

「……やれやれ。後は扶桑の隊長さん次第だな」

吸いきった煙草を飲み終えたコーヒーマグのカップに入れ、ぽつりと呟くビューリング。

「デビー、ここに残って、動かないところに捕まってるね。ビューリング、いざという時の準備はしておくね。輸送機だから銃と弾だけは豊富ね」

「了解だ」

「解りました」

デビーの返事を待たずそう言って立ち上がり、後部の積み荷の方へと向かって行くオヘア。

「オヘア、魔導無線を忘れるな。左を見てろ、私は右を見る」

「了解ねー」

先程まで散々いがみ合っていたとは思えない程息の合った動きで、すぐさまストライカーの梱包をほどき、銃を用意すると輸送機の窓に張り付くオヘアとビューリング。

偵察型を出すだけの敵ネウロイがまさか1機や2機な筈は無い。

相手は少なくとも中隊規模。それも、中型か、下手をすると大型が率いている可能性が高い。

『扶桑一番、さっきの偵察型は南、カールスラント方面から出てきたわ』

『了解。輸送機は高度を7000まで上昇、バルトランド各基地に緊急応援要請をお願いします。私達はこのまま進路をソラ空港からオーランド空軍基地へ』

ジェシカの報告に伊予がすぐさま指示を出す。

C-47の実用上昇限界が8000程なので、ウィッチ隊のユニットの上昇限界も考えギリギリの高度を保つ。相手がそれより高度から奇襲を仕掛けてきたとしても、急降下で逃げ切るために必要な距離を今の内から稼ぐのと、輸送機を追うネウロイに逆にヒットアンドランを仕掛ける為に必要な余裕を持ったためだ。

偵察型ネウロイがどれだけの情報の本隊に送ったかは分からないが、少なくとも偵察型が落とされた時点でその位置は把握しているはずだ。もし針路まで把握されていれば、最悪待ち伏せに会う可能性もある。

まずは針路を東北東に位置する北海沿岸のソラ空港から北部のオーランド基地へと変更し、502や507の部隊が待っているであろうリュツゲ基地も含め、バルトランドの沿岸沿いの航空基地へと輸送機から救援を要請しつつ、ネウロイの襲撃に備える。

偵察型の戻ろうとしていた方向が現在の6時方向のカールスラント方面。

ならば、敵が前から来る可能性は低い。真後ろからの襲撃ならば、ウィッチだけなら引き離せるが、鈍重な輸送機がいるとなると追いつかれる可能性が高い。

『リベリオン一番、高度を後1000上昇、背後に特に気を付けてください』

『リベリオン一番、了解した』

上昇していくフランがP-47Mはここにあるストライカーユニットで最も限界高度が高い。それを生かし、可能な限りの高高度へ。そこで索敵を行いつつ、いつでも迎撃に移れるように配置させておく。

『扶桑二番は輸送機の後方へ。いつでもシールドを張れるようにしておいてください』

『了解です』

信乃が伊予の二番機の位置を離れ、輸送機へと向かう。

信乃の役目は本来彼女が得意とする先行しての囿ではなく、零式の機動力を生かし、輸送機に張り付いてシールドで壁になる事だ。

『こちらブリタニア一番。こつちも余り離れすぎない方が良さそうですね』

『はい。後ろはリベリオン一番と私が見るので、高度を取りつつ、左右からの奇襲に警戒してください』

輸送機の前方にフランとジェシカ。直上に伊予、背後に信乃。

『ネウロイ、来ますかね?』

『来るか来ないかよりも、ここまできれば倒すか落とされるかを気にしたほうが良いぞ、『アンラツキー』ジョー』

ジョーイの言葉に機長が肩を竦める。

『こちらリベリオン一番!!6時方向より敵機らしき影を複数補足!!』

1、2……』

フランの声が魔導無線に響く。

『おちついてリベリオン一番、敵は沢山?』

『沢山だ!!』

『了解しました、輸送機及び扶桑二番は2時方向へ回頭!!』

伊予の指示と同時に旋回を始める輸送機の脇につけながら、信乃がふん、と鼻を鳴らす。

『任せましたよ、フラン、ジェシー』

敵は中型らしき一際大きな影が1、そして、随伴らしき小型が10と少しといった所か。

『この程度ならどうにでもなるわ』

無線越しに不敵に呟くジェシカの声に皆が頷く。

『こちら扶桑二番、輸送機へ、9時方向にも目を配ってください』

『こちらオヘア、了解ねー』

信乃の無線にオヘアが答える。

『ひいい、来た、来たあ〜』

『そう簡単に落とされるもんじゃない、大人しくしてろジョーイ』

……こういう時に『若』が居れば近づいてくる前に特爆で敵を減らせるのに。

ぽつり、と信乃が考えるが、すぐさま余計な思考を頭から追い出す。

上を見ると、高高度から敵へダイブするタイミングを見計らっているのであるうジェシカとフラン、そして、手にしたS-18を構える伊予の姿。

「来る前に皆落とせばいいだけの話です」

ぽつり、と呟き伊予が引き金を引く。

相手の攻撃よりも先に、一射、二射と弾を打ち出す。次の瞬間、小型ネウロイが3機、光の破片へと変わる。

『そういう事!!リベリオン一番!!』

『了解!!』

突然のアウトレンジからの攻撃で虚を突かれたように散開を始めるネウロイの群れに向け、ジェシカとフランが急降下攻撃を仕掛ける。

『行くわよ!!』

手にしたM1919機関銃の引き金を軽く叩くと同時に放たれる

7. 62mmが散開を始めていた小型ネウロイに吸い込まれる。すぐさま銃口を脇に向け再度一射。まるで手品のように寸分たがわず銃弾がネウロイへと吸い込まれていく。

『やっぱりジェシーは上手い……けどっ!!』

きつ、と目を釣りあげ、フランが中型へと狙いを定める。手にしたM2重機関銃を構え、急降下で稼いだ速力を生かし一気に中型へと肉薄する。

『危ない!!』

誰かが叫ぶと同時に、まるで中型を庇うかのように前にでた数機の小型ネウロイがフランに向け赤く輝く熱線を放つ。

しかし。

『P-47<sup>ジャグ</sup>の防御を甘く見るな!!』

フランがシールドを展開。

後ろにいるジェシカすら覆いそうな程に大きなシールドがネウロイの熱戦を弾き、逆に速力を落とすどころか加速を増すP-47Mが中型を庇うように前に出る小型ネウロイと肉薄する。

『っ!!』

フランが引き金を引くと同時に小型ネウロイがはじけ飛ぶ。超音速でネウロイの脇をすり抜け、上昇に転じるフランの背後に小型ネウロイが殺到する。

『フランっ!!』

『危ない!!』

ジェシカと伊予の放った弾丸が次々にフランの背後のネウロイを蹴散らしていく。

降下で得た速力を上昇力に変え、再度高高度へ上がるフラン。

『すまない、中型を……』

『いいからフランは高度を取る!!次よ次!!』

『後ろは私に任せてください!!』

ジェシカと伊予の言葉に頷き、再度急降下に転じようとフランが身をよじった矢先。

『まずいね!!輸送機の9時方向!!伏兵がいたねー!!』

魔導無線に飛び込んでくるオヘアの声。

『ちゅ、中型だっ!!助けて!!パパ!!ママっ!!』

ジョーイの悲鳴が無線に響く。ウィッチ達の意識が向いている反対側に、それを待っていたかのように現れた中型ネウロイが輸送機に狙いを定める。

「ハギちゃんっ!!」

伊予が叫ぶ。それと同時に。

『ふふん!!あたしは貴方のママじゃないけど、助けてあげますよ、ジョーイ!!』

ぴつたりと輸送機に張り付いてた信乃がネウロイの死角から飛び出す。

ネウロイと輸送機の間割って入り、射線上でチリチリと疼く感覚を振り払うようにシールドを展開。角度をつけてネウロイの熱線を脇に反らすと、そのまま一気に中型へ肉薄。

『この距離なら、あたしでも楽勝です!!』

信乃が叫ぶと同時に、手にした99式2型2号の20mmがハニカム模様の外壁を食い破る。

機械的な叫び声を上げる中型ネウロイ。コアをむき出しにしたまま、低空へと逃げようと降下していく。それを見送りながら、信乃が叫ぶ。

『今です!!誰か止めを!!』

低空での戦闘を得意とする信乃からすればこれ以上ない程に美味しい状況だ。追いかけて巴戦に持ち込めば、まず間違いなく落とす事が出来る。

だが、信乃の任務はネウロイの撃墜ではない。輸送機の護衛だ。必要以上にネウロイを追い、輸送機から離れるわけにはいかないのだ。

『譲るわ、イヨ!!』

フランの撃ち漏らした中型を追っていたジエシカの叫びに伊予が手にしたS-18を構え、そして一射。むき出しになったネウロイのコアを銃弾が貫き、白い光の花が咲く。

『ごめんね、ハギちゃん』

『謝るならあたしじゃなくて輸送機に。奇襲を許すなんてらしくないですよ』

信乃の言葉に伊予が表情を引き締める。今は撃墜数を競っている場合ではない。

一方。

『いい加減落ちなさい!!』

ジェシカが叫び、手にしたM1919の引き金を引く。コアを露出させた中型など、ジェシカの前では模擬戦の引き流しよりも御しやすい。旋回しながら逃れようとする中型の進路に向け、7.96mmが流れるように吸い込まれ、次の瞬間爆散する。

『中型全機撃墜を確認、あとは小型が……』

フランの言葉が一瞬途切れ、直ぐに緊張感を増して無線に響く。

『……敵機増援!! 8時方向!!』

『……撤退します!! 輸送機は及びウイツチ全機は速やかにウエストハムネット基地へ!!』

伊予の判断は迅速だった。どうやら完全にこちらの位置は補足されているようだ。

このままでは、第二波、第三波とネウロイの襲撃を迎え撃つことになる。

その言葉にすぐさまC-47と零式輸送機が旋回を開始し、元来た航路へと針路を向ける。

『何よもう!! 折角ここまで来たのに!!』

ジェシカが悔しそうに呟く。銃弾も燃料も、まだ十分に余裕がある。強行突破も一つの手だが、戦闘飛行は巡行中のそれと比べて魔力の消費がけた違いに高い。

波状攻撃を受ければ補給の間も無くあつという間に追い込まれてしまうので、撤退は当然の判断だ。

だが。

『……え?』

無線に飛び込んできたのは困惑したようなフランの声。

『フランチースカ中尉?』

『ネウロイが引き返して……何……これ……』

フランの声途切れ途切れに聞こえ始める。魔導無線に何らかの異常が生じたのか、無線の音にノイズが混じり始める。

『不味い、あの時と同じ……』『持ってたか』『ぞ!!』

『っ!!誰か、あの子を探すね!!』

ビューリングとオヘアの声が魔導無線に響く。

『フラン!!どうしたのよ!?落ち着いて、位置を知らせなさい!!』

ジェシカが焦ったように無線に話しかけ、その脇ですぐさま信乃がその場から上昇を始める。

『ハギちゃん!?』

『索敵はあたしの得意分野です!!輸送機の護衛を代わってください、ジェシー!!』

そう言いながらもフランの居た方向を中心に、周囲に目を配りながら上昇を続ける信乃。

12歳の頃から若の僚機について、散々索敵をやらされた上、偵察部隊で隊長を務めたこともあるのだ。どんな敵でも真っ先に見つける徹子には及ばないが、それでも徹子以外のウィッチに索敵で後れを取ったりはしない。

『……見つけました!!』

ややあつて信乃の声が無線に響く。

『P-47M』を履いたフランが、輸送機から遠ざかっていくネウロイの編隊の背後を追うような形でふらふらと飛んでいる。

『シノ!!気を付けるね!!相手はどんなネウロイね!!』

オヘアの言葉に信乃はフランを追いながら、その先のネウロイを見据える。

『見た目は普通のネウロイです!!中型が1、後は小型が多数!!』

『普通、だと……?』

ぽつり、とビューリングが呟く。

『ジェシカ、イヨ!!シノを見失っちゃ駄目ね!!もしシノもおかしくなったら、直ぐに追いかけるね!!』

『了解です!!』



『わかってるわ!!』

無線から緊張した雰囲気の二人の声が届く。

『こちら扶桑3番、リベリオンの2番、俺達も追うか?』

零式輸送機の機長が無線越しに尋ねてくる。

『準備はしておくね!!ジョーイ、ユーもねー!!』

「嘘だろお……」

オヘアの言葉にぼつり、と呟くジョーイ。

「ママの代わりに助けてくれた扶桑のウィッチを見殺しにするな!!気合入れろ!!ジョージ!!」

機長がジョーイを怒鳴りつける。

『フラン!!大丈夫ですか!?応答してください!!フラン!!』

一方、近づいてくるフランの背に向けて呼びかけ続ける信乃。だが、フランは尚も応答が無い。

『ちよつと!!応答してください!!フラン!!散々人を罵倒しといて何ですか!!目の前に敵がいるんですよ!!とつとと正気に戻ってください!!馬鹿!!アホ!!フラン!!』

『……何か言ってるね』

『聞こえて無いと思ってる好き勝手言ってるのか、アイツ?』

オヘアとビューリングが呟く。一応信乃なりにフランを振り向かせるための努力をしているつもりなのだが、はたから見ているとただの鬱憤晴らしにしか見えない。

そうこうしているうちに、気が付けば数メートル近くまで信乃がフランに接近している。

幸か不幸か、フランのユニットは失速しそうな程の低速しか出ていない。もし本気で信乃を振り切ろうとすれば、P-47Mの200キロ近い速度差であつという間においていかれるが、今の状態なら零式の巡行速度でも容易に追いつくことが出来る。

『ああもう!!フラン!!こつち見ろ!!この貧乳!!』

『……誰が貧乳だ!!』

突然フランがその場で立ち止まり、振り返ると同時に信乃へ向けてM2を向ける。

『何でそこに食いつくんですか!?!』

慌てて速度を落としながら体を捻るが、止まることが出来ずにそのままフランに抱き着くように飛び込んでいく。

『つつ!?何だ?喧嘩を売ってるみたいだな、このチビ』

『……やった!!皆さん!!フラン確保!!フラン確保ですあ痛っ!?!』

抱き着いたまま離れようとしないうちに信乃に対して、M2重機関銃を持つ手と反対の手でその脳天に拳を落とすフラン。

『いいから離せ!!何でお前が私に抱き着いている!?!ここを何処だと……ん……?』

ごんごんと拳を脳天に叩き込みながらそこまで口にし、フランが眉を顰める。きよろきよろと辺りを見渡し、すぐ背後から遠ざかるネウロイに目を止めてはつと我に帰る。

『シノ!!ネウロイだ!!くそ、私としたことが……』

信乃を振りほどき、銃を構えようとするフランに信乃が怒鳴る。

『それどころじゃないです!!フラン、貴女、今何してたか覚えてますか?』

くらくらする頭を振りながら信乃が尋ねる。混乱した状況で頭を殴られたのは不問にしても良いが、危うくネウロイに拉致られそうになったところを助けてやったのだ。折角追いついたのに、感謝の一つもされないのは納得がいかない。

『決まっている!!アイツらを追って……追っ……?』

フランが軽く頭に手を当てる。

『……追って、どうなった?ここは、どこだ?一体何が起きた……』

『それは……っ?』

次の瞬間、フランの背中越しにチリつとした感覚が信乃の体を刺す。

『危ない!!』

咄嗟にフランを突き飛ばし、固有魔法のチリチリした方向へ向けシールドを張る。

それと同時に、信乃が張ったシールドがネウロイの熱線を弾き飛ばす。

『シノ!?!』

この状態でシールド操作をする余裕はない。真正面からネウロイの攻撃を受け続け、元々高くない信乃の魔力が急激に消耗していく。

『大丈夫です!!大丈夫ですから、あたしの後ろに居てください、フラン!!』

叫びながらもシールドを張り続ける信乃を見、今は余計な事を考える場合ではないと悟ったフランが素直に信乃の背後につく。

『敵機反転!!シノ達に向かっているわ!!イヨ!!』

『この距離じゃ届きません!!二人共、回避を!!』

『シノ!!回避だ!!』

フランの言葉に信乃は99式機関銃を放り捨て、空いた手でフランの手を握る。

『大丈夫です!!このまま降下して振り切ります!!ついてきてください!!』

ネウロイの攻撃の第一波を防ぎ切った信乃がフランの手を掴んだまま一気に高度を下げる。

『後ろは任せてください!!』

限界降下速度が高いフランを放り投げるように先行させ、信乃は背後に意識を向けた。

消耗した魔力でも、固有魔法はまだ健在だ。シールドを上手く張れば、生き残れる。

一方、絶好の好機を逃すまいと、ネウロイ達も二人の後を追うように急降下を始める。

しかし。

『馬鹿ね!!空では欲をかけた方が負けるのよ!!』

信乃達の降下した方向の上空から、スピットファイアが矢のように降下してくる。

頭を押さえるように降下してくるジェシカを認めるや否や、優位を失ったと判断したネウロイの編隊は蜘蛛の子を散らすように散開、急降下の速度を生かし再度反転して空域から離脱していく。

その様子を見てジェシカも無理には追わず、輸送機の方へと向

かっつてく信乃とフランに合流する。

『助かりました、ジェシー』

『感謝するならイヨの判断にしなさいな。アンタの言う通り輸送機に張り付いてたら間に合わなかったわ』

どうやら伊予がジェシカを先行させたようだ。

伊予一人では輸送機の護衛が脆くなるが、攻撃的な伊予の判断の方がこの場合は正しかったらしい。

『……何があつたんだ？私は何をしていた……？』

一方、まだ混乱している様子のフランだったが、その様子を見た信乃が気を遣うように口を開く。

『仕方ないですね。帰りながら説明しますよ』

信乃の言葉にフランが目を見開く。

『帰る？どうして？ネウロイは追い払ったはずじゃ……』

『作戦失敗です。あと少しで未帰還を二人出すところでした』

伊予の通信を聞き、未帰還？と呟くフランを見て信乃が肩を竦める。

『貴女とあたしですよ、フラン』

『……え？』

その言葉に、フランの顔が驚愕の表情を見せた。

「フラン、フラン」

聞こえるはずの無い声。もう二度と聞く事の出来ない、だが、忘れる事の出来ない懐かしい声。

「フラン、どうしたんだい？」

「……パパ？」

「怖い夢でもみていたのかい？ずっととうなされていたよ？」

ああ、そうだ。

夢を見ていたのだ。

憧れていた航空ウィッチになり、仲間達と戦う夢。

「……ううん。怖くない。とても素敵な夢」

ベッドの脇ではほほ笑む父に、フランも笑みを向けた。

「貴方、フランは起きた？」

「ああ。今起きたよ、さ、フラン」

その言葉にフランはベッドから体を起こす。何となく体が小さいと思うが、それも当然だ。

夢の中のフランはティーンエイジャーで、今のフランはまだ9つ。ようやく大人用のベッドから足がつくようになったばかりだ。

ベッドから降り、父の頬におはようのキスをして、食卓へと向かう。「もう、お寝坊さんね、フラン。あまりパパに迷惑をかけちゃ駄目よ」

母の言葉にフランが『ごめんなさい、ママ』と呟く。食事を机の上に運んでいた母のもとに駆け寄り、父と同じように身をかがめた母に抱き着き、おはようのキスをする。

暖かいスープとスクランブルエッグ、そして焼き立てのトーストの匂いが鼻をくすぐる。

ぐう、となるお腹を押さえながら、父の隣の席にちよこんと座るフラン。

「貴方、今日は遅くなるの？」

夫と娘のトーストにバターを塗りながら、母が口を開く。

「戦争が終わったからね。今日も残業はなさそうだ。親父の奴が嘆い

ていたよ。『あと1年ネウロイが頑張ってくれてたら、新しい工場に建て替えられたのに』って」

「まあ。父さんったら」

くすくす、とほほ笑む父と母。

「そう言えば、フランはどんな夢をみていたんだい？」

父の言葉に、トーストに手を伸ばしていたフランが答える。

「ウィッチになる夢。ウィッチになってお友達と一緒に空を飛ぶの。お空が凄く綺麗で、友達も凄く優しいの」

「フランはウィッチになりたいのかい？」

父の言葉にフランが頷く。

「もう、フランったら。ウィッチなんて危ないわ」

母が眉を顰める。

「空から落ちればとても痛いし、死んでしまうかもしれない。パパやママとも会えなくなるのよ」

噛んで含めるように言っけて聞かせる母親に父親も笑みを浮かべる。

「そうだね。空を飛びたいのなら、飛行機に乗ってもいいし、わざわざウィッチにならなくても良いんだよ？」

「でも……」

「そうだ、今度一緒に飛行機に乗って欧州に行こうか。おじいちゃんもおばあちゃんもフランに会いたがっていたし、僕も久々に里帰りが見たいな」

「あら、2人だけで行くつもり？」

「まさか、3人で一緒にさ。どうだい、フラン？」

それは凄く素敵な事だ。仕事が忙しい両親と旅行なんて今まで経験した事がなかったし、物心ついてからフランは父の両親には会った事が無かった。だが、父や母の口から語られる、まだ見ぬ父の故郷の祖父と祖母に、いつか会ってお話してみたいと思っていた。

「うん、行く!!」

フランの言葉に両親がほほ笑む。

だが。次の瞬間。

『いいからとつと起きてください!!この馬鹿!!アホ!!フラン!!』

さわやかな朝の音楽を流してたラジオから突然罵声が響いた。驚いたように顔を上げるフランと父と母。

『どうしたんだ？故障かな？』

『もう、後で父さんに見てもらわないと』

母が呟き、ラジオを消す。けたたましい声は鳴りを潜め、食卓に静寂が戻る。

『びっくりしたね、フラン。さ、ご飯の続きにしよう』

そう言つて微笑む父の笑顔。ありきたりな日常に再び穏やかな空気が流れる。

しかし。

「……違う」

ぽつり、と呟いたフランを見て父と母が首を傾げる。

『フラン？』

『どうしたの？フラン』

ぎっ、ぎっ。と、フランの頭にノイズが響く。ラジオを消しても消えないノイズだ。

父と母の声だったはずのその声に、今は強烈な違和感を感じる。

「違う。ここは違う」

『何を言ってるの？』

『そっだよ、ここは君の家だよ、フラン』

「違う!!」

フランが叫び、椅子を蹴飛ばして立ち上がる。手に『M2重機関銃』を握り、『13歳』のフランが目の前にいる『何か』を睨み付ける。

「貴方達は誰だ。何故私をここに連れてきた」

『どうしたの、フラン。何を言っているの？』

『そっだよ、フラン。さあ、食事を続けよう』

「……違う。貴女達は私のパパとママじゃない。私のパパとママは、私を『フラン』なんて呼ばない!!」

そう。これは違う。

限りなく記憶の中の故郷に、そして、戻れない日々に近いが、そうではない。

ようやく思い出した。

私の『本当の』父と母は、私を『フラン』とは呼ばない。

『ステラ』と呼ぶはずだ。

じゃあ、こいつらは誰だ。

気が付けば、周囲の空間も、目の前にいる両親『だった』モノも、黒いハニカム模様が蠢く異形へと姿を変えていた。穏やかだった食卓もここにはない。

黒い空間に、黒い異形。

あのラジオから響いた声には聞き覚えがある。

どこか子供っぽくて能天気な、少しいらっとする扶桑のウィッチ。癩に障るが、感謝する。

あの耳障りな罵声が無ければ、私はずっとまやかしの幸せに騙されて続けていたのだから。

『オチツイテ。ステラ』

『アブナイカラ、ソレヲオロシテ』

黒い異形がなおも語り掛けてくる。

「……黙れ、ネウロイ」

ざり、とフランが奥歯を噛む。怒りで頭が沸騰しそうになるが、何とかこらえて目の前の『ネウロイ』にM2の銃口を向ける。

そう。

私はフランチースカ・エストレッラ・ガブレシエフスキー中尉。

リベリオン陸軍第八航空群、第56戦闘飛行群『ウルフパック』第二中隊飛行隊長。

父の無念を晴らすため、父の故郷を解放する為に銃を取ったりベリオンのウィッチだ。

「よくも、私を騙したな」

父と、母の姿を偽って。

許せない。否、絶対に許さない。

『ヒンニユウ』

「誰が貧乳だ!!」

混濁した意識の中、『ステラ』が叫ぶと同時に、周囲の闇が青に変



わった。

—1—

1330 ウェストハムネット基地 滑走路

「どけどけ記者共!!邪魔だ!!」

『LQ—S』、第6小隊降下中!!滑走路を開ける!!おいその馬鹿!!  
とつとと下がれ!!」

午前中とはうって変わった緊迫した雰囲気ウエストハムネット  
基地は包まれていた。

冬であるにも関わらず、大粒の汗を垂らしながら整備兵たちがハン  
ガーと滑走路の間を駆けまわる。

特ダネを待ち受ける記者を今にも殴りかかりそうな剣幕で追い散  
らしながら、次々と帰投するウィッチ達を迎え入れる為の準備を整え  
る。

『こちら『扶桑一番』及び輸送機二機、着陸許可を求む』

『こちらコントロール、了解。各小隊へ、『LQ—S』着陸後は上空で  
待機、滑走路への侵入ポイントを空けてください』

管制官からの指示に、上空のウィッチ達が滑走路への侵入経路を開  
くために旋回を開始する。その中心に割って入るように、C—47輸  
送機と零式輸送機、そして、その周辺を護衛するように飛んでいた  
ウィッチが滑走路へと高度を下げる。

「扶桑二番とリベリオン一番が先行してください。輸送機が降りるま  
で、私とブリタニア一番は上空で待機」

「こちら扶桑二番、了解です」

「リベリオン一番、了解した……」

フラップを展開しながらランディングギアを落とし、信乃に支えら  
れるようにフランが着陸体制に入る。

「……もういい、大丈夫だ。一人で降りられる」

「解りました。すぐ脇にあたしもありますから、落ちついて」

フランを支える手を放すと、ふらりと一瞬その体がぐらつく。

咄嗟に信乃が手を伸ばすが、その前にフランがそれを制する。

多くのウィッチ達や基地勤務者が心配そうにその様子を見上げて

いるが、直ぐにフランはその態勢を立て直し、信乃にエスコートされるように高度を下げていく。

土煙を上げながらのランディング。すぐ脇でフランの体が軽く地面を跳ねたのを見てどきりとしたが、直ぐに体勢を立て直してフランは信乃の目の前で無事着陸を終えた。

「萩谷飛曹長!!大丈夫ですか!?!」

すぐさま走り寄って来るのは、先日もエスコートしてくれた扶桑の整備兵。ブリタニア語ではなく扶桑語で話しかけてきてくれる事に内心で感謝すると共に、改めてかなりの大事に巻き込まれたのだと実感する。

「あたしは大丈夫です。99式を落としてしまいましたが、それよりフランが……」

「敵のネウロイに連れ去らわれかけたと聞きました。銃の一つや二つ、大したことじゃないですよ」

窘められるように言われてしまった。連れ去られかけたのはフランの方なのだが、大分情報が錯綜しているようだ。

「ガブレスキー中尉!!お話を!!」

「ネウロイに連れ去らわれたと聞きました!!」

「お前ら退け!!滑走路に入るな!!」

殺到する記者達を整備兵や衛生兵が払いのける。その場でユニットを脱ぎ捨ててぐったりとへたり込んだフランが衛生兵の用意した担架に乗せられて、信乃も整備兵のエスコートでハンガーに向かう。

「ハギノ准尉!!輸送護衛の失敗について一言!!」

「新型ネウロイと遭遇したと聞きましたが!?!」

「黙れお前ら!!あとハギノじゃなくて萩谷だ!!きちんと名前を憶えて出直せ!!リベリアン共!!」

ハンガーへと向かう信乃の元にも記者達がわらわらと押し寄せる。陸上ネウロイの方がまだ性質が良いのでは、と思えるくらいにしっかりと寄ってくる記者を整備兵が怒鳴りつけながらようやくハンガーへと戻って来る。

ユニットから降り立ち、整備兵から渡された靴に足を通している

と、近づいてくるウィッチから声を掛けられる。

「無事で何よりだ、萩谷准尉」

「今日は運がいい方です。全員揃って帰ってこれました」

ゼムケ大佐の言葉に敬礼を返しつつ、信乃が口を開く。

強がりではなく、本心だ。

零式54型の金星エンジンは魔力の消耗が栄エンジンと比べ物にならない程激しい。

加えて戦闘中の全力飛行にシールドの連続使用、フランを背負いながらの離脱と帰投。フラン程ではないにしろ、ここまで魔力を消費したのは久々だ。

「ああ。良く帰ってきてくれた……いや、良く連れて帰ってきてくれた」

そう言ったゼムケの顔に一瞬重苦しい雰囲気漂う。

「随分とハンガーが騒がしいですが、あたし達以外にもトラブルが？」

「その事は追って話す。起きた事は想定外だが、結果は想定内といった所だ」

ゼムケの言葉に信乃が眉を顰めたその時。

「兵長!!扶桑一番、ブリタニア一番が帰投!!」

「ゲージを開けろ!!早く迎え!!」

整備兵長の合図と共にどたばたと数名の整備兵が滑走路とストライカー用のゲージに向かう。

「……すまん、萩谷准尉。少し藤田中尉と話がしたい。准尉は先に休んでいてくれ」

ゼムケの言葉に信乃が頷く。わざわざそう言うということは、その場に信乃が居ない方が良いという事だ。

「了解です、大佐」

互いに敬礼をしてハンガーを出る信乃。

リベリオンの制服を着たウィッチや統合軍のジャケットを羽織った兵士たちが行き来する基地の通路は、昨日の夜の静寂とは打って変わって騒がしい。

搭乗員室に向かおうかとも思ったが、その足を止めると、直ぐに元

来た通路を引き返す。

その際背後を小走りに駆けていた白衣を着た小柄な少女とぶつかりかけるが、急いでいるのか、その少女は『失礼』と一言残して去っていく。

「……面倒臭くなりそうですね」

白衣の少女の背を見送りながら、ぽつり、と信乃が呟く。

若の真似をして『余計な詮索をするな』などと言ってみたものの、今後の事を考えると多少気が滅入る。

だが、あれこれ考えすぎても仕方がない。

そういうのは上官や、頭の良い者が考えるべき事なのだ。一介の特務士官である自分に求められているのはそういう事ではない。

ポケットの中を漁りながら、信乃は目的の部屋の前で立ち止まる。

『医療室』と書かれた扉の前で、ふと若の言葉を思い出す。

部下を鍛え、上官をいびるのが特務士官だ。

「……そういうの、あたし向いてないと思うんですけどね」

ぽつり、と呟きながら、信乃はそつと扉に手をかけた。

— 2 —

「成程、な」

伊予からの報告を受け、ゼムケが大きく息を吐き出す。

「部隊は生還、だが、ギャビー……ガブレスキー中尉が敵のネウロイと接触後に自由を奪われ、萩谷准尉により奪還された。間違いないな」  
「はい」

ゼムケの言葉に伊予が頷く。

司令室に集まったのは、部屋の主であるゼムケとエイカー准将。それに伊予とオヘア、そしてビューリング。そして。

「……507からの情報が間に合って良かった。悪い報告だが、最悪ではなかった」

「……いえ」

白衣を纏った小柄な少女が首を振る。

「後一日でも早く、私が到着していればこちらが後手に回る事は無かったかと。最悪ではないにしろ、もう少し打つ手があったかもしれない」

ません」

「それを言うのなら私もです」

伊予が口を開く。

「撤退の判断が遅すぎました。偵察と気が付いた時点で直ぐに引き返せば、フランチーヌスカ中尉を危険に晒す事は無かったはずですよ」

出撃前にゼムケから……否、507JFWからもたらされた情報を伝えられていたにも関わらず、自分の行った判断の過ちを伊予は自ら口にしました。

『想定外のネウロイと交戦する可能性があるため、危険を察知したらすぐに撤退し引き返すように』

離陸直前にわざわざゼムケから伝えられえたにも関わらず、伊予は敵の第一波に対して戦闘による突破を試みた。

その結果、フランは危うくネウロイに連れ去らわれかけたのだ。護衛任務を任されたものとしては決して褒められた結果ではない。だが。

「ここが欧州で、私達がウィッチである以上、いつ危険に晒されるかわからないのは当然だ。むしろ、貴重な情報をもたらしてくれた事を、そして、持ち帰ってきてくれたことに感謝する」

そう言ってゼムケが手にした書類を机の上に投げ出す。

「これは、56FG……否、ブリタニアやリベリオンの問題ではない。放っておけば、北欧への補給路が失われかねない、由々しき問題だ」  
北海はブリタニアを始めとする西欧と、北欧諸国やオラーシャを物資で繋ぐ人類の生命線だ。

もし北海経由の補給路がネウロイによって絶たれたとすれば、それはすなわち北欧やオラーシャ、東欧に展開するJFWを始めとする人類の防衛線が風前の灯となる事を意味する。

「例えどんな相手であろうとも、犠牲を払おうとも、北海を守り抜くことが我々の……否、人類の責務だ。例え君が多くの仲間を失ったとしても、誰も君を責める事は出来ない」

ごくぐり、と唾を飲み込み、伊予が机の上に投げ出された書類を見つめる。

それは、現時点で伊予に、否、信乃やジェシカ、そして、この場に  
いるウィッチ達に課せられた任務が酷く重いものになってしまっ  
たことを意味する。

最早一機二機の輸送機の護衛どころではない。  
そう。

「我々が守るのは、北海、そして、人類の生命線だ」

ペテルブルグの空は昼間だというのにどんよりと曇り、薄暗い空からは白い雪が風に舞い、無人の町を白の世界へと変えていく。

郊外にある第502統合戦闘航空団『ブレイブウィッチーズ』の基地も同様。

いくら勇猛さを身上とする部隊であっても、寒いものは寒い。極寒の冬をしのぐと、そこに駐屯するウィッチも兵士も皆、非番ともなれば暖かい宿舎に閉じこもったきり出てこようとはしない。

そんな中、こんな景色見慣れたものだとはばかりに雪かきのシフトについて相談しているのは、ここオラーシャ出身のウィッチ、アレクサンドラ・イワーノヴナ・ポクルイーシキン大尉とスオムス出身の整備兵長。

二人共、寒さにも慣れっこと言った様子で、湯気の立つコーヒーが数分もすれば凍り付くような環境でも平然とした顔でやり取りをしている。

「第一滑走路は常に空けておくとして、予備の第二滑走路までやるとなると時間も手間もかかります。吹雪の日はむしろ第二滑走路は閉鎖したほうが」

「そうですね。これから先、降雪量はもっと増えますし、いざという時両方使えないなんて事になったら困りますからね」

ただでさえここ502の整備兵は激務で知られている。

勿論戦闘が多い事もそうだが、ウィッチ達が出線に出る時は整備兵たちも野宿同様の生活を強いられるし、おまけに此処はかの整備兵泣かせとして知られる『ブレイクウィッチーズ』の本拠地でもある。

戦闘の時よりもより、下手をすると戦闘が無いのにユニットが全損で戻って来ることもある。そうなれば修理は夜通し行われることも珍しい事ではない。

更には長い冬の間振り続ける雪。氷点下二桁を日常的に記録する

ような極寒の世界では、雪が降っても春まで溶けることは無い。滑走路に積もったまま放置しておけば当然出撃は出来ないし、下手をする  
と建物から出る事すらままならないので、一日数度、それも何時間も  
かけて雪を除ける必要がある。

そう。雪の降る地域において雪かきというのは仕事ではない。食  
事や睡眠と同じくらい重要な生活の一部なのだ。そして、その苦労を  
含めて尚日常には不便が付きまとう。

冬將軍は人にもネウロイにも等しく牙をむく。オラーシヤでの戦  
いは、ネウロイだけではなく、自然との闘いでもあるのだ。

「それでも、今年は楽になりました」

そういつて整備兵がハンガーの隅に鎮座する『それ』を目を細めて  
見つめる。

「ええ。隊長が無理を言つて持つてこさせたのは正解でしたね」

そこに鎮座するのは一台の大型のブルドーザー。

リベリオンの部隊が基地の整備用に本国から持つてきたものが一  
台、不思議な流通経路を辿りペテルブルグにもたらされたのだ。

人の手では数十人がかりで一時間以上かかる雪かきを、このリベリ  
オンの力持ちは僅か一台で、それも半分くらいの時間で済ませてしま  
う。整備兵たちの疲労の緩和と睡眠時間の増加をもたらした、まさに  
武骨な天使様だ。

「ええ。ただ、リベリオン製なので寒さにどれだけ耐えられるか……」

「あいつに何かあれば意地でも直しますよ、サーシヤ大尉」

「お願いします」

整備兵の言葉にサーシヤが苦笑を浮かべて頷く。

「後、他にも、整備兵のシフトについて……」

サーシヤが口を開きかけた時だった。

「駄目だってカンノ、ブルドーザーは玩具じゃないよ」

「大丈夫だって。車と大して変わんねえよ。な、ひかり」

「私、車なんて運転できませんよ」

「オレが動かすから心配すんな。丁度いい具合に雪も積もつてきた事  
だし、整備兵の手伝いをしてやらねえとな」



「とか言って、本当は乗ってみたいだけなんですよ?」

サーシャと整備兵の体が硬直し、ゆっくりと振り返る。

その視線の先、ハンガーに入ってきた三人のウィッチが真っ直ぐブルドーザーの方へと歩いて行く。

2人の顔が青ざめる。

どうやら話している内容からするに、ブルドーザーを動かすつもりらしい。

そういえば、先日ブルドーザーが除雪している様子をウィッチ達が興味深そうに見つめていた。下手に弄られる前にそれとなく釘を刺そうと思っていたところだが、昨日の今日で早速動かそうとするのは流石に予想外だ。

「ま、待って、待ちなさい、ニパさん、菅野さん、ひかりさんっ!!」

硬直が解けたサーシャが慌てて3人の方へと走り出す。一人はデストロイヤーで、もう一人はついてない事には定評があり、もう一人は(ブレイク的な意味での)大型新人。それこそ去年の冬、ただのソリ遊びを強制寒中水泳に変更させた実績のある三人組だ。本人たちにその気はなくとも、貴重なブルドーザーを壊しかねない、否、壊すに違いない。

「あれ?サーシャさん」

ブルドーザーの上に乗ったニパが振り返り首を傾げる。

「降りて!!今すぐそこから降りてください!!」

ばたばたと手を振りながら叫ぶサーシャ。

だが、その声は菅野が始動させたブルドーザーのエンジンにかき消される。ニパはというと、ひかりと一緒に呑気にサーシャに向かって手を振り返している。

「違うんです!!見送りとかじゃなくて!!それが壊れると基地が、雪が……」

「あ」

一番聞きたくない一言が、エンジンの音の向うから聞こえた気がした。

「バルトランド？」

いつもよりだいぶ長い正座とサーニヤの説教が終わり、壊れたブルドーザーの代わりに雪かきを済ませ、くたくたになったところでの隊長室への呼び出し、そしてこの一言。

「……ついに左遷だ」

ぽつり、と呟いたのはニツカ・エドワート・カタヤイネン曹長。愛称はニパ。

スオムスカラーのセーターに身を包み、金髪をショートカットにした少女が暗い表情で呟く。

「ニ、ニパさん、縁起でもない事を」

「でもヒカリ、いつもユニットを壊してて、その上ブルドーザーまで壊して。整備の人たちの顔見たでしょ？ワタシ達がウィッチじやなかったら今ごろラドガ湖の氷の下に沈んでたかも」

ぶるり、と身を竦ませてニパが呟く。

「そ、それはそうですけど……」

そういつて暗い顔をするのはネイビーブルーの扶桑皇国のセーラー服を着たウィッチ、雁淵ひかり軍曹。

普段は快活そうな雰囲気を湛える大きな瞳に不安気な表情を浮かべ、目の前の指令用の机に座った女性と、隣に立つ女性を交互に見つめる。

「ニパ、早とちりをするな。行くのは菅野と雁淵だ」

そう口を開いたのは机に座っていた長身の女性、502JFWの司令官を務める、グンデユラ・ラル少佐である。

鋭い目を向けられ、えっ、と言葉を飲み込む直枝とひかり。

「えっ？そうなんですか？だったらいいや」

「おいニパ!」

「ひどいですよニパさん!」

一瞬で悲壮感を失うニパに向かって抗議の声を上げる二人のウィッチ。

「ニパは残って雪かきの手伝いだ。ブルドーザーが直るまで、整備兵の倍は働け」

「うええ!? そんなあ!!」

ラルの言葉にニパの表情が再び泣きそうになる。

「……あの、ニパさん……」

「ヒカリい……」

声をかけられ、ニパがひかりへ潤んだ目を向ける。

「……私たちの分まで、頑張ってくださいね」

「ヒカリ!」

「いい性格になって来たなあお前……」

につこりとほほ笑むひかりを見て、隣に立っていた小柄でボーイツシユな雰囲気の少女……菅野直枝中尉が呆れたように呟く。

「で、わざわざバルトランドに何しに行くんだ? ザリガニでも釣りにいくのか?」

「まだ季節には早いだろう。取ってきても構わんが」

「わあっ!! いいんですかっ!? 意外とおいしいですよね、ザリガニ」

「冗談に決まってるだろバカ」

ザリガニはバルトランドを始めとする北欧では貴重かつ人気のある食料品だ。

どのくらい貴重かというと、乱獲が過ぎてザリガニが減少し、政府が直々に狩猟期間を設けるくらいだ。更に、短い狩猟期間が始まると同時に北欧全土でありつたけのザリガニが捕獲され、それを皆で食べるザリガニパーティーなる風習まで生まれた程だ。

502基地にも一度バルトランド政府からの義援物資として大量に持ち込まれ、初めてザリガニを料理する羽目になった定子がおつかなびつくり調理したが、その味は以外な事にエビとカニの合いの子のように、最初は警戒していたニパとサーシャ以外のウィツチ達も気が付けば夢中になって食べていた。

「扶桑からの補給を乗せた輸送機の護衛です」

話が進まないと見たのか、ラルの隣に立っていた小柄な銀髪の女性……エディータ・ロスマン曹長が口を開く。

「護衛……ですか?」

「今回はリベリオンからの義援物資を積んだ民間輸送機も同行してい

る」

「隊長、それは507へ向かう予定の輸送機では……」

「菅野、『おそらく』その日は天候が不順になる『予定』だ。扶桑の輸送機共々、一度『ここ』に立ち寄ったほうがいいだろう」

エディータの言葉を遮り、ラルが口を開く。

「天気予報では……」

「猛吹雪だ。『そういうこと』にしておけ」

「あー……そういう事が……」

ラルの言葉の意図を察した菅野が苦い顔を浮かべる。見るとラル隊長が珍しくせつせと手を動かしている。

はあ、とエディータがため息をつく。

「……仕方ねえな。おい隊長、菓子くれ菓子。扶桑で手に入りにくいような奴なら尚いい」

「あ、ずるい。私も欲しいです!!」

「ちげえよ、オレが食うんじゃねえ」

隣で声を上げるひかりに呆れたように突っ込む直枝。

食べたいのは山々だが、ウィッチにとつて嗜好品は金と同様の価値がある。ちよつとしたことに目をつぶってもらうなら、それなりの対価は必要だ。

後は需要と供給。自分たちのような前線のウィッチなら懐かしい扶桑の菓子、比較的余裕のある輸送部隊のウィッチなら、欧州の珍しい菓子などが喜ばれる。

「サルミアッキ、持ってくる?」

「馬鹿、そんなの渡したらこっちの物資まで507に流されるぞ」

ニパの善意からの提案を全力で拒否する直枝。

物資の裁量の決定権は当然それぞれの国や統合軍にあるのだが、現場に至るとそうとも限らない。護衛のウィッチや輸送機の搭乗員の気を損ねると、突然物資が書類にない動きを見せる事もある。

すげなく断られたニパは『おいしいのに……』とむくれている。

「台所に何かあるだろう。この時間なら下原がいるはずだ。聞けばいい」

「わかった。ついでにつれていって構わねえか？」

この部隊にいるもう一人の扶桑ウィッチ……下原定子少尉の方が一匹狼だった自分よりも遣欧艦隊のウィッチには顔が利く。直枝とは異なり、温和で優しい彼女の事を若手の中には慕っているものも多い。

こういう任務なら、むしろひかりよりも相方としては都合がいいくらいだ。

だが。

「駄目です」

ラルが口を開く前にエディータがやや強めに否定する。

「……メシならジョゼでもいいじゃねえか」

「ち、ちがいます!!その心配じゃありません!!」

直枝の言葉に僅かに頬を赤らめさせながら否定するエディータ。

部隊内でも娯楽や食に拘る傾向が強いため誤解されがちだが、流石に任務と食事なら任務を優先するくらいには真面目な性格なのだ。単に食い意地が張っているとみなされるのはエディータとしても本位ではない。

なお、真面目であるが場合によっては任務より食事を優先しがちなイメーজのあるウィッチがこの部隊にはもう一人いるが、そんな彼女も当然仕事はきちんとしていることは名誉のために付け加えておく。

「夜間哨戒がある。誰か連れて行っても構わないが、下原以外にしろ」  
そういうラルの言葉には流石に直枝も黙らざるを得ない。

攻撃部隊である502において、定子は貴重な『なんでもできる』ウィッチとして、ジョゼと並び目立ちはないが部隊の要として重宝されている。

特に夜間哨戒に関しては現時点では定子が一手に担っており、隊長であるラルや戦闘隊長のサーシャは別格として、現在部隊で最も仕事をこなしているウィッチといっても過言ではない。

ラルが501のリトヴァク中尉を始めとするナイトウィッチを欲しがるのも、ミーナや他の部隊への嫌がらせや自己満足ではなく、純粹にその部分が今現在502にとっての一番の泣き所だからに他な

らない。

「ねえカンノー、ワタシも連れてってよー」

「そんなことしたらオレがサーシャに怒られる。オレ達の分まで黙って雪かきしてろ」

「そんなあ、あの距離をワタシ一人で？ねえひかりー」

「あはは……」

「あははじゃないよ!!ねえヒカリい」

部屋から出ていく菅野を追いかけるひかりとニパを見送りながら、ふう、とため息をつくエディータ。

「……ひかりさんのためですか？」

ぼつり、と尋ねるエディータに、ラルが肩をすくめる。

確かに。部隊の中でも欧州での経験が少ないひかりにとって、他の扶桑のウィッチとの触れ合いは些かの心の慰めになる。

それに、長距離の護衛任務は訓練としても打ってつけでもある。だが。

「愛弟子に今更そういった配慮など必要が無い事は一番わかっているだろう？『先生』」

薄い笑みを浮かべて答えるラルに、一瞬エディータがきよんとした顔になるが、すぐに口元に笑みを浮かべる。

確かに、ひかりの実力はこの502部隊の中で一番下かもしれない。

だが、あくまでそれは『502JFW』というエース部隊を基準にした話である。欧州の平均的な部隊の基準に照らし合わせれば現時点での実力は決して低くは無い。

エディータの訓練は続いているが、それはひかりがより高い技術の取得を希望しているからであり、かつてのようには最低限戦場に立たせることが出来るために行っているものではない。

そう。ひいき目や同情を抜きにしても、今のひかりは502の貴重な『戦力』だ。

「『今の』ひかりさんなら、扶桑の方から欲しがるかもしれませんね」  
「ああ。他にも501……ミーナは怪しいな。ああいうタイプは奴の

好みだろう」

限定的だが魔眼持ちで、性格は癖がなく素直。任務に対しても忠実で誠実。加えて明るいムードメーカーでもあるひかりのようなウィッチは、最近になり囁かれている501の再結成にあたり、引退が近づいていると噂される坂本美緒少佐の後任としても魅力的に映るに違いない。

「そうですね。では、本当にそうだった時ははどうします?」

エディータの悪戯っぽい言葉にラルが口元に薄い笑みを浮かべたまま、一言。

「くたばれ、と言ってやるさ」

「へ?バルトランド?」

一方、カウハバでは、一人の少女が思わぬ言葉に目を丸くしていた。「うん。オヘアさん、ハルカさんの友人でしょ?会いたくない?」

「それはまあ。ええ、会いたいかと言われればもちろん……あ、でも、智子お姉さまじゃなくてオヘアさんですか……ううん……」

隊長室の机に座るハッセ……ハンナ・ヘルツタ・ウインド少佐の言葉に、扶桑の士官服を纏った童顔な少女……迫水ハルカ中尉が首をかしげる。

「というか、こつちに来るんですよね、私がわざわざ迎えに行く必要は……」

「502が護衛を出すんだって」

「ああ……迎えが必要かもですね」

ハッセの言葉にハルカが頷く。

502の手癖の悪さは他の統合戦闘航空団の間でも有名だ。ついでに、507に悪知恵をもたらしたのも502である。

かつてのいらん子中隊も中々に悪名高くはあったが、悪い事といってもせいぜい飲酒やちよつとした賭け事、ハンガ―の爆破程度である。最後のは程度で済ませて良いのかわからないが、余りに頻発していたので途中から感覚が麻痺しているところがあった。

それに比べ、502に至っては組織ぐるみで堂々と他部隊の物資

や、場合によっては所属するウィッチに手をつけたりもする。

部隊によっては502のウィッチが近づいてきた場合は無警告で発砲して良いというところでもない命令が出ているところもあると噂されており、いらん子が田舎の不良ならば502は政府とつるんだマフィアである。

「流石に義援物資までは手を付けたりしないと思うけど、警戒するに越したことはないからね」

机の上の書類を片付ける手を休めずにそう呟くハッセ。勿論、ペテルブルグで今まさにその相談がなされていたとは知る由もないが。

「ふふ。随分と司令が板についてきましたね、ハッセさん」  
「自分でもびっくりだよ」

ハルカの言葉にハッセも苦笑を浮かべる。

最初はこの大きく立派な机も自分には不釣り合いだと思っていたが、使っていくうちにそれなりになじんできた。

隊長としてはじめてこの部屋の扉をくぐった時は、机の上に山盛りになった書類を見て気が遠くなったが、書類整理に長けたウィッチ……同じスオムスの先輩であるエルマやハツキネン、それに、他のウィッチ達の協力も得てどうにか要領が掴めてきた。

忙しい時に声をかければ隊員であるリーやヴェスナ、プロイ。そして最近加わった三隅美也軍曹も率先して書類整理に協力してくれる。

他の統合航空戦闘団に比べると人員は少ないが、カウハバのそういったアットホームな雰囲気はハッセのひそかな自慢でもあった。

「……あの、何かしれつとひどい事をされている気がするのですが……」

何故かそういった書類整理には呼ばれたことが無いハルカが首をかしげる。

「そうかな？私はいつも仲間を第一に考えているけど」

「その仲間に私も入ってますよね」

「……勿論」

「何ですか今の間。いえ、今回もそうですけど、最近事あるごとに私を遠くに飛ばそうとしてませんか？」



「頼りにしているからだよ」

「それならいいですけど。ほら、私ももうすぐ上がりを迎えるわけですし、もっと部隊の皆といちゃいちゃ……じゃなくて、いろいろ教えてあげたいとおもっているのですが。そう。ほかの隊員たちともっと一緒に、朝から夜まで、手取り足取り……」

「うん。そうだね。そういうところだよ。あと少しの辛抱……じゃなくて、あと少しの間、みんなの戦闘技術の向上に努めてもらいたいな」  
「それ以外にも!!プライベートでも!!こう!!なんかいいんですかね!!」

「無いと思うな」

にべもなくハッセが言い放つ。最初の頃こそまともにハルカと話そうと試みていたが、どうやら無駄だと悟ったらしい。

「うう……それにしても、随分と忙しそうですね」

ハルカと話しながらも書類にサインする手を止めないハッセを見てハルカが尋ねる。

「午後からプロイと模擬戦の約束をしてるんだ。それまでに終わらせないと」

部隊の司令ともなると書類仕事に追われることが多い。そのため、戦闘以外では中々空を飛ぶ暇もない。

特に、ハッセのように脂の乗り切ったウィッチにとつて、空を飛べないのは中々苦痛なのだ。久々の模擬戦が楽しみで仕方がないのだろう。

「話はそれだけですか?」

「ああ、もう一つ……」

ハッセが口を開く前に扉を叩く音が聞こえた。扉の向こうから透き通るような声が響く。

「隊長、ヴェスナです」

「早かったね。うん、入って」

扉が開き、背の高い金髪の女性が一步部屋に入る。ハルカの姿を確認して足を止め、一步後ろに下がる。

「あれ?ヴェスナさん、どうしたんですか?」

「美也、部屋に入っちゃ駄目」

「いや、入って。大丈夫だから」

背後からの声にこたえるヴェスナに、ハッセが溜息混じりに口を開く。

「わかりました。ですが隊長。美也に見せてはいけないものがあります。それを窓から放り投げてから美也を入室させます。いかがでしょう」

「投げちゃ駄目。気持ちはわかるけど」

ヴェスナの妥協案を即座に却下するハッセ。どうもヴェスナは転属してきて以来面倒を見ている扶桑の後輩を甘やかしすぎるきらいがある。

「あの、そこまで言われるとさすがに傷つくのですが……」

「いくら傷ついても三步あるけば傷がふさがるじゃないですか。むしろ少しは傷ついて下さい」

「あの、ヴェスナさん……」

背後から促され、はあ、とため息をつきヴェスナが部屋に入る。その後ろから、やや切れ長の大きな瞳をした三つ編みの小柄な扶桑の少女がおずおずと入室する。

「ヴェスナ・ミコヴィツチ曹長、三隅美也軍曹、参りました」

ヴェスナが敬礼するのに少し遅れ、美也もやや肩に力の入った扶桑海軍式の敬礼を行う。

「楽にしていよいよ」

「そうですよ、リラックスしましょう。特に美也ちゃん。大丈夫怖くないから」

「は、はあ……」

「駄目です美也。このカウハバで最も警戒すべきは当然ネウロイですが、その次がこの女です。いいですか、会うときは最低二人一組で。夜中に遭遇したら大声を上げて即座に離れるように」

「ひどいっ!!野生動物か何かですか私は!?!私はただ同じ扶桑生まれの美也ちゃんと仲良くしたいだけなのにつ!!」

「それは言葉通りの意味ですか?」

「言葉通りってどういう意味です？そりゃあ仲良くって言えば二人つきりでご飯を食べたりお茶したり、お風呂に入ったりその後ベッドで……」

「成程。二度と美也に近づかないください」

「うん、そろそろ話をしてもいいかな？」

ハッセがとんとん、と書類の束を机でまとめながら声を出す。その言葉にヴェスナとハルカも開きかけていた口を閉じた。

「ミコヴィッチ曹長。それに三隅軍曹。二人にはハルカさん……迫水中尉と一緒にリュツゲ基地へ向かってもらいたいんだ」

「リュツゲ基地……バルトランドですか？」

形の良い眉を顰め、ヴェスナが尋ねる。

美也はというと、まだ欧州の地理が完全に頭に入っていないので、空港の名前だけでは位置もまいちぴんと来ていない様子だ。首をかしげてハッセとヴェスナを交互に見つめている。

「前も話したけど、オヘアさんが義援物資を持ってくる。その輸送機の護衛と、美也ちゃんの飛行訓練も兼ねて、3人で迎えに行つて欲しいんだ」

「成程、私と美也だけで十分ですね」

「まあ、そうなんだけど。守つてほしいのは、ネウロイ相手だけじゃないくて……」

「中尉ですね。わかります」

「違います!!502も護衛を出すそうです!!」

ハルカが慌てて口を挟む。

「502?ひかりさんの!?!」

ハルカの言葉に美也が思わず口を開いた。

スオムスの西に位置するカウハバと、オラーシヤとスオムスの国境近くに位置する502が駐屯するペテルブルグは行こうと思えばすぐ行ける距離の所にある。

しかし、そこにいる旧友のひかりとはこちらに来てから互いに忙しくて殆ど会っていない。

休日が重なったらヘルシンキと一緒に行こうという約束はしてい

るが、肝心の休日が無い状態だ。非番の日はあるにはあるが、大抵その時は先輩であるヴェスナやプロイ、リーに頼んで訓練をつけてもらっている。

ひかりの活躍の噂は聞いているので、呑気に遊んでいる暇などない。約束を守れないのは心苦しいが、今の自分にのんびりしている時間が無いこともよく理解している。

一応手紙のやりとりは続いているが、約束とは裏腹にしばらくは会えないと思っていた矢先である。

ひよつとしたら任務の合間に、久々に雁淵さんに会えるかも。そんな期待を持ちながら、ヴェスナの方をちらりと見る。が。

「……そうですか、502がわざわざ出るといふ事は、目的は……」

「うん。十中八九、『アレ』だね」

何故か神妙そうな顔を浮かべているヴェスナとハッセ。

507に物資をうまく動かす術をもたらしたのは確かに502だが、隙を見せればその502が自分たちの物資に手を付けてくることも少なくはない。

むしろハンナからすれば、原隊にいたころから時折スオムス宛の物資が不思議な経路をたどることもあった意味をようやく理解し、それ以来502の動向には常に気を配っている。

「生憎、私もヴェスナも扶桑の人たちの好みはよくわからないしね。その辺、うまくハルカさんと美也ちゃんにやってもらおうか……」

一体どういう意味？美也が首をかしげていると。

「はい!!私はずいぶんと格好いいお姉さんが好きだと思えます」

「それはハルカさんだけ。美也ちゃん、こつちに来て何か恋しいものとかある?」

「ええと……和食とか?」

意味は解らないがとりあえず答える。502とは違い、507では和食を作れるものはない。

美也が和食を食べたのは、カウハバに向かう直前、遣欧艦隊の母艦である『瑞鶴』での歓迎会の時が最後である。

実家にいる間、ウィッチの訓練だけではなくきちんと料理も学んで

いればよかった。

美也がこつちに来て最も後悔したことの一つである。

一応、材料さえあれば好きに料理を作っても良いとは言われているが、肝心の腕が美也にはない。

歓迎会の時、空母勤務のウィッチ達が『今のうちにたくさん食べた方がいいよ』と言っていた意味が今となっては理解できる。

一杯の味噌汁、暖かな白いご飯。今となっては全てが恋しい。

「それはさすがに用意できないなあ……じゃあ、こつちにきておいしかったものとか、もらってうれしかったものとかは？」

「うれしかったもの……」

その言葉に色々思い出す。嬉しかったもの。

ひかりさんから届いた手紙とか、電話で声を聴いた時とか、502の活躍を伝える記事にひかりさんが載っていた時の新聞とか……。

「やっぱりここは無難にお菓子ですよ。お菓子。ほら、サルミアツキとか」

「そうですね。あれは良いものです。きつと甘味に飢えている扶桑のウィッチも喜ぶでしょう」

「もつたないけど仕方ないか。一箱くらい用意すればいいかな？」

美也が友人に思いをさせている間にどんどん話は進んでおり、気が付いた時にはサルミアツキを一箱渡せば扶桑のウィッチは物資の移動の阻止にきつと協力してくれるだろう、という事に話が落ち着きかけていた。

何故か507ではサルミアツキが人気である。ハッセはもとよりヴェスナやハルカ、そして、その味に馴染みが無いはずのリーやプロイまで美味しそうに休憩中サルミアツキを頬張っている姿がよく見られる。それは、サルミアツキが一口大にカットされた車のタイヤにしか見えない美也にとっては衝撃的な光景だった。

我に返った美也が必死に止め、結局サルミアツキは中止となり、対案としてかつてこの基地に在籍していた『いらん子中隊』の私的な写真はどうだろうという話になった。

「成程。護衛のウィッチのみならず、輸送機のパイロットも取り込む

のですね」

ヴェスナが感心したように頷く。リベリオンではオヘアのプロマイドは印刷すればただけ売れると言われてるし、扶桑のウィッチの中でも一際人気の高い『扶桑海の巴御前』の穴吹智子の秘蔵写真ともなれば男所帯の輸送機のパイロットのみならず、護衛のウィッチ達も食いつくに違いない。

「中々良いアイディアだと思うよ。美也ちゃん。良く思いついたね」  
「え、ええ……はい……」

まさか自分がこの基地に残されていた穴吹智子中尉の生写真を大喜びで集めていたとも言えず、曖昧に頷く美也。そのせいでハルカに密かに同好の士扱いされているのにも納得がいかない。

そう、美也とてついこの間まではウィッチに憧れる女学生だったのだ。

ひかりは姉一筋で他のウィッチにはさほど興味が無かったのとは違い、美也はそれなりに年頃の少女。同級生の『秋山さん』や『渡辺さん』と一緒にウィッチを題材にした映画を見に行ったり、秘蔵のプロマイドを見せあつたりと、年相応に憧れのウィッチの話題について盛り上がったたりしていたものだ。

……秋山さん、元気にしてるかな。

何か高高度での迎撃を主とした局地戦闘脚を扱う部隊に抜擢されたと聞いてはいるが、控えめな性格なので上手くやっているか、些か心配ではある。

「他にもお菓子とか……サルミアッキ以外で、だよな」

「そうですね。リーの補給物資からキャラメルでも持つていきましよう」

ハッセの言葉にヴェスナも頷く。

「美也ちゃん。比較的安全な任務だけど油断はしちや駄目だよ」  
「はい」

この部隊に来て数か月。美也はまだ飛べるようになったばかりの若鳥だ。それでも、来たばかりの雛鳥の頃に比べれば格段に進歩している。

それでも、まだまだだ。そのことは美也も痛いほど理解している。前線で戦うひかりとは違い、後方の美也に不足しているのは実戦経験。ひかりの努力を知った上で、負けなくらいの訓練を積んでいたという自負はある。

しかし、慢心してはいけない。

ひかりは美也にとって、友人で、恩人で、そして目標だ。

佐世保の予備学校時代、ひかりになくて、自分にあつたものは才能でも、魔法力の強さでもない。

『慢心』という心の隙だ。

佐世保の予備学校時代、成績で劣っていたひかりと欧州派遣の座をかけた争った際に彼女に負けた理由。それに気付かせてくれたのが、あの事故であり、助けてくれたひかりだった。

そう。私は二度と慢心しない。

ひかりに追いつき、そして隣に並ぶために。

その様子を見てハッセとヴェスナが互いに顔を見合わせる。

まだ未熟な部分が多いが、扶桑皇国海軍がその威信を持つて送り出したウィッチだけの事はある。

来たばかりの頃からその才能には目を見張る物があり、そして、誰よりも努力を惜しまない姿勢から、最近はめきめきと実力をつけている。

美也だけではない。部隊の中で美也に年の近いプロイも触発され、最近では美也と一緒に積極的に訓練に参加するようになった。

ヴェスナも、そしてリーも美也を指導することで年長者としての自覚が出てきた。

所謂ムードメーカー的な性格ではないが、美也が部隊に加わった事で確実に507の空気が変わってきている。

502の支援部隊から、共に戦う部隊として、そして、スオムスの精鋭部隊として恥じない姿を見せるべく変わり始めている。

ひかりが502に必要なピースだったのと同様に、美也もまた、507にとって必要なウィッチなのだ。

「……美也ちゃんを頼むよ、ヴェスナ」

「はい。任せてください」

あれ？また私だけ置いてかれてませんか？と眩くハルカを尻目に、ハッセとヴェスナが自然と笑みを浮かべ合った。



## 2-1-1. humanoid I

1944年10月28日。

リベリオン合衆国バージニア州、ノーフォーク海軍基地を出港した護衛駆逐艦『エルドリッジ』は大西洋を航海し、ブリタニアのポーツマス軍港を目指していた。

しかし、同日早朝、ブリタニア領海からドーバー海峡にまもなく入るといふ通信を最後に、『エルドリッジ』の行方は途絶えてしまう。

この事件は火薬庫の爆発説、ネウロイの襲撃による轟沈説など様々な噂が飛び交ったが、1945年、リベリオン海軍は『原因不明』として、200名近くの乗組員と共に行方不明となったこの事件の捜査を異例の速さで打ち切った。

だが、当編集局は当時のリベリオン海軍関係者とみられる男性とコインタクトを取り、その驚くべき実態を明らかにした。なんと、その積み荷はブリタニア上層部から極秘に依頼された凍結したネウロイのコアであり、先月号で伝えたブリタニアの軍部が極秘に推し進めていた『レインボープロジェクト』が密接にかかわっており……

『1998年 扶桑皇国 雑誌『モー』 6月号より抜粋』

—1—

1430 ウェストハムネット基地 医療室

「……なんだ、シノか」

近づいてくる足音にベッドから体を起こしたフランが、その姿を認めてため息をつく。

広い空間に幾つものベッドとカーテンの仕切りだけがある部屋の奥。

外傷は無いが、大事を取ってしばらく休むよう言われたものの、天井の染みを数えるのにも飽きてきたところだった。

「なんだとは失礼ですね」

フランの言葉に信乃が眉を顰める。

はあ、とフランがため息をつき、そして、こちらをじっと見ている信乃に口を開く。

「……私の顔に何かついているか？」

「いえ。思いの他元氣そうですね」

信乃がそういうと、フランは肩をすくめて口を開く。

「……誰かさんのおかげで怪我無く無事に助け出されたからな。隊長には次あつた時に礼を言っておけと言われた」

その言葉にふん。と信乃が笑い、ベッドの端に腰掛ける。

「何でそこに座る？」

ベッドサイドには面会者用の椅子もあるというのに、何なんだこいつは。

扶桑のウィッチは奥ゆかしいと聞いたことがあるが、そんな事全然ない。初対面の頃から馴れ馴れしいというか、むしろぐいぐい来るくらいだ。

「フランの言葉を聞き逃さないためです。どうぞ、好きなだけ感謝してください」

そういつてずい、と顔を寄せてくる信乃。

誰かさんが自分だと確信し、感謝の言葉をかけられることを疑わない様子だ。まあ、その通りなのだが。

フランはむっとした顔を一瞬浮かべるが、すぐにため息交じりに首を振る。

「……変な奴だ」

「失礼な子ですね」

「お前、私に最初何て言ったか覚えてるか？」

「変な子って言いましたね」

「どの口が言ったんだ」

「フランを助けたこの口ですかね？」

しれつと言いつ放つ信乃。

失礼なのはどつちもどつちだ。むしろ最初に言った分、信乃の方が悪い。

「……本当に、変な奴だな」

ぼつり、とフランが呟く。

自分に愛想がない事くらい解っている。直す気もないし直せない。

私なんかは愛想よくして楽しいのだろうか、こいつは。

だが、信乃は首を小さくかしげると、ポケットに手をつ突っ込んで一言。

「よくわかりませんが、そうですね。フラン。手を出してください」  
意味の解らないその言葉に、フランが片手を毛布の外に出す。

「ああ、甲の方じゃなくて掌の方を……そうそう」

そういうと信乃はポケットから取り出した箱から一つ二つ、と、オブラートに包まれたオレンジ色の四角いキャラメルのようなものを渡す。

「……扶桑の薬か？」

「そうですね、似たようなものです」

そういうと信乃はフランに渡したものとおなじものを口に放り込む。

視線に促されるように、フランも一つそれを口にする。

オブラートが解け、甘さと酸っぱさ、そして柑橘系の香料の香りが鼻から抜ける。

不思議な味だ。触感はいかにかいキャラメルのようなだが、少し違う。

「これは……菓子か？」

「ふふん。魔女にとっては最高の『薬』でしょう？」

そういうと信乃が笑みを浮かべる。扶桑の菓子、ボンタンアメ。ウィッチとはいえトシゴロの少女。甘い菓子は何よりの薬だ。

だが、そんな信乃の言葉にも、フランは僅かに視線を落として口を閉じる。

まただ。

どうして彼女は『笑う』のか。

出会う前に彼女の情報は断片的ながらゼムケから聞いていた。

自分が欧州に渡った年と同じくらいの年で欧州に渡って来たというが、フランには信乃がそれだけの経験を重ねているようには到底見えなかった。

先程の戦闘までは。

だから。

「……何故、笑える」

ぽつり、とフランが呟く。

散々失礼な態度をとった挙句、自分のせいで信乃にも、周囲にも迷惑をかけた。本来なら文句や叱責が飛んできても仕方がないはずなのだ。

なのに。

「フラン、今何歳でしたっけ？」

「13だが……」

信乃の唐突な問いかけに、僅かに戸惑ったようにフランが答える。

「あたしがそのくらいの際はもっと駄目駄目でした。任務は辛いし仲間は助けられないし、困ったときには助けに来るって約束した上官はいつまでも来ないし。シャワー室やベッドの中で泣いてばかりでした」

そういつて信乃が笑う。

「……先程のフランに落ち度はありませんでした。もちろんあたしにも。ジェシカも伊予も、輸送機も最善の選択をした結果、失敗しました。そういう時は面倒な事はとりあえず置いておいて、まずは生きていて良かったと思うくらいでいいんです」

そう言うと言乃はボンタンアメをもう一つ口に運ぶ。

作戦の失敗はネウロイの物量と、フランが意識を失うという不確定要素によるものだ。前者はある程度想定範囲内だが、後者は完全に予測不可能な出来事だった。むしろ、そんな事態に出くわして尚、皆で戻ってこれたのだ。

その身を案じることはあれど、フランが責められる要素などありはしない。

「とにかく、元気そうで良かったです。これでも心配してたんですよ。あたし」

「……へ？」

不意打ち気味の言葉に思わずフランが目丸くする。

「……まあ、そういうハトが豆鉄砲食らったような顔を見るのも好きですが」

フランの顔を見ながら、ふふん、と笑う信乃。

「そうか、からかわれていたんだな、この……」

じとり、と信乃をにらみながら、だが、いつものように『チビ』と呼ぶのが躊躇われた。

代わりに、ふと胸によぎった言葉を口にしてみる。

「……ありがとう」

「は？」

唐突なフランの言葉に今度は信乃が豆鉄砲を食らったような顔になる。手にした菓子を落としかけて、慌ててそれを両手で拾い上げる。

「なるほど。いいことを教わった」

「ずるくないですか？ どうしてそのタイミングで言うんです」

「お前が感謝しろと言ったからだ。シノ」

うつすらと口元に笑みを浮かべるフランに、むう、と僅かに頬を赤らめながら口を尖らせる信乃。

……まあ、少しは気がまぎれたのならいいですけど。

慣れない事をしたせいであたしは少し気恥ずかしいですが。

そんな事を考えながら、フランの差し出す手にボンタンアメを乗せてやっている。

「こんなところで油を売ってたのね、シノ」

入り口の扉が開けられ、見慣れた銀髪の少女……ジェシカが二人に声をかける。

「ジェシカ、何の用です？」

「油を売りに来たのよ」

そういつて何の躊躇いもなく信乃の座っている反対側のベッドの脇に腰を下ろすジェシカ。

「狭い」

フランの眩きを意にも介さず、ん、と掌を信乃に向けるジェシカ。眉をひそめながらも仕方なく一つ、半分ほどに減ったボンタンアメを渡す信乃。

「二つだけ？ 何よ、けち臭いわね」

「あたしからももらえるだけありがたいがたく思ってください。基本ケチですからね、あたし」

「フランにはほいほいあげてたじゃない」

「後輩と年下には優しいんです。あたしは」

「狭い!!」

一方、ベッドの両脇から圧迫されたフランがたまらず抗議の声を上げるが、信乃はどこ吹く風といった調子でジェシカを見る。

「ジェシカのお尻が大きいんです。ブリタニア人は毎日お茶の時間と称してお菓子をむさぼり食べますから」

「失礼ね!!あとティータイム馬鹿にしないでよ野蛮人」

素晴らしいながらボンタンアメを口に運ぶジェシカ。はあ、とため息をついて一言。

「……お茶の話をしたら飲みたくなかったじゃない。なによこの基地、コーヒーしか無いって」

口直しとばかりにゆっくりとボンタンアメを咀嚼しながら文句を言うジェシカ。

コーヒーも前線に出ればのどから手が出るほど欲しい嗜好品なのだが、戦車の中でお茶を淹れられる装置を作ってしまうブリタニア人は一味違う。

「そういえば、紅茶を作れるストライカーユニットがブリタニアにはあるんでしたっけ?」

「違うわ信乃。魔導エンジンの熱と凍った川の水を利用してお湯を沸かすだけよ。そうすれば冬場のオラーシャでも紅茶が飲めるわ」

旧式のストライカーユニットを利用して暖房を起こす機材があるように、ウィッチの魔力を動力に変える事が出来るストライカーユニットには様々な用途がある。ちよつと工夫すればお湯を沸かす事も可能だが、何故わざわざストライカーユニットでお湯を沸かす必要があるのか。

「お前……いや、それも十分どうかと思うが……」

どうやら二人ともベッドから降りる気はないようだ。あきらめたようにフランが会話に混じる。

「扶桑のウィッチだつて、いついかなるところでも扶桑食を食べようとするじゃない。発酵させた大豆の調味料……なんだっけ」

「味噌と醤油。扶桑の代表的な保存食ですよ」

ジェシカの問いに信乃が答える。何に混ぜてもおいしくなる万能調味料だ。

「……それで、本当は何の用なんですか？」

信乃が尋ねる。

「指令室に呼び出しを食らったの。ついでに信乃とフランも連れてこられるようなら連れて来いって」

「何!？」

がばり、とフランが布団を剥ごうとする。が、信乃とジェシカが両脇に座っているの、仕方なしにもぞもぞとベッドから這い出す。

「普通それを最初に言うでしょう?」

「言ったらフランがすぐにでも着替えようとするでしょ」

呆れたような信乃の言葉にジェシカが肩をすくめる。

「当たり前だ!!何故それを先に言わない!？」

目の前ではベットから飛び起きたフランが病室衣を脱ぎ捨て、ベッドサイドに畳んであった制服を身に着けようとしている。

「ああ、フラン。そんなに急いで着替えなくてもいいわ。私が言われた通りに様子を見て、少し休憩の必要を感じたので様子を見てた、つていえば少しくらい遅れても文句は言われないわ」

「そんなわけには……というか軍人としてどうなんだ?それは……」

呆れた様に呟くフラン。ジェシカだけではなく、よく見ると信乃もため息をついてはいるが、別段急ごうとしているようには見えない。「軍人だからよ。どうせ馬鹿正直に行つたところでまた新しい厄介事が待ってるんだから、うまく一息つかないと」

そういうとジェシカは手を差し出し、さらなるボンタンアメの催促を行う。

「ああ。あとは紅茶の一杯でも飲めればいいのに」

— 2 —

「ジェシカ・E・J・ジョンソン大尉、フランチースカ・S・ガブリシエフスキー中尉、萩谷信乃准尉、入ります」

相変わらず扉をすぐ開けようとするフランを信乃が押しとどめ、ジェシカがノックしてから声をかける。

入れ、の言葉を待ち扉を開ける。

司令室で3人を待つていたのはエイカー准将にゼムケ、そして伊予。そしてもう一人、白衣を着た少女。

報告を終えたオヘアとビューリングが退席してからそれなりの時間が経過している。

そんな中で伊予は居心地が悪そうな顔を浮かべながら、ゼムケが淹れてくれたコーヒーの入ったカップにちびちびと口をつけていた。

「遅かったな。ジョンソン大尉」

「すみません。フランチースカ中尉の容態を確認していました」

しれつと言いつつジェシカの言葉に、ゼムケがフランへと目を向ける。

「ギャビー。体調はどうだ」

「は、はい。問題ありません」

ゼムケの言葉にフランが答える。

「……3人で時間を潰していた訳じゃないですよね？」

ぽつり、と呟いた伊予の言葉に思わずフランが助けを求める様にジェシカと信乃を見る。

「体調の管理も仕事のうちよ」

しれつと言いつつジェシカ。はあ、と伊予がため息をつく。

「諸君」

コーヒーの入ったカップを机に置き、ゼムケが口を開くと同時に皆が一斉に背筋を整える。

「先刻の任務では苦労を掛けた。輸送機も皆も、無事に戻ってこれた事が何よりの成果だ」

そういうとゼムケが口元に笑みを浮かべる。

「よく戻って来てくれた。ギャビー」

視線の先のフランが一瞬きよとした顔を浮かべるが、ちらり、



と隣に立つ信乃を見、そして『はい』と頷く。

「早速任務の話といきたいところだが、疲労は良い判断の妨げとなる。時間も時間だ。ギャビー」

「はい!!」

「皆の分のコーヒーを」

「了解しました」

その言葉にフランがすぐさま部屋に備え付けられているコーヒーメーカーへと向かう。

「……ゼムケ大佐。一つお伺いします」

「何かな、ジョンソン大尉」

「紅茶はありませんか?」

「無いな」

「……」

その言葉に、捨てられた仔猫のような顔になるジェシカ。程なくして、砂糖とミルクのたっぷり入ったコーヒーが皆に配られる。

「……好みとか聞いてくれないんですか?」

「嫌なら飲むな。私は甘いのが好きだ」

「いえ、あたしも好きですが……」

ちらり、とゼムケを見ると、特段文句を言う素振りも無くカップの中身を口に運んでいる。

扶桑ではコーヒーは基本ブラックだが、リベリオンでは砂糖とミルクを入れるのが主流だ。最初から入っていても、文句があるなら最初に何も入れるなどオーダーすればいいのだ。

ちなみにフランにそういうと、へそを曲げて本当に何も入っていないカップを渡してくる。

全員にいきわたると、甘ったるいコーヒーを啜っていたゼムケが口を開く。

「……そういえば、紹介がまだだったな。中尉」

「はっ」

視線を送られた白衣の少女が口を開き、同時に、皆の視線が白衣を

羽織った小柄な金髪の少女へと送られる。

おとなしそうな顔立ちに眼鏡をかけ、白衣の下から覗くのはカールスラントの軍服。

その顔に信乃は見覚えがあった。

眼鏡で気が付かなかったが、シヨートボブに切りそろえられた金髪、そして、小柄な体、そして、美人だがそれ以上に可愛らしさが先に立つ童顔。

半月前程にあつた戦い……ガリアのマジノ線での戦いでJG54らと共に共闘し、そして、その後マーストリヒト・アーヘン空港でちらり、と顔を見かけた程度だが、その屈託のない笑顔は記憶に残っていた。

「紹介する、彼女は……」

「……ハルトマン中尉？」

思わず口を開いた信乃のその言葉にフランとジェシカが同時に、え、と首を傾げる。

「シノ、何を言ってる？こんなところにあのハルトマン中尉が……」

「はい、ハルトマンです」

白衣の少女が頷くと同時に、フランとジェシカが、ええ!?!と声を上げる。

エーリカ・ハルトマン中尉といえば、ウィツチの間では、否、欧州では知らない者を探す方が難しいくらい有名な名人だ。

カールスラントのグレートエースで人類4強の一人。前人未到の撃墜数300機越えの記録を持つウィツチ。

ブロマイドや雑誌の切り抜きを集めるような熱心なウィツチのファンでなくても、その名前は新聞やラジオでよく喧伝されている。例え他国の部隊に疎くても、その名前くらいは聞いたことがあって当然である。

「ハルトマン中尉って、あの、カールスラントの？」

「はい、カールスラントのハルトマン中尉です」

ジェシカの問いかけに頷くハルトマン中尉(仮)。

「本当にハルトマン中尉か？」

「ええ、本当にハルトマン中尉です」

だが、よく見るとその脇では伊予は苦笑を浮かべ、ゼムケは肩を竦めてため息をついている。

「……言っておくが、お前らの思っているハルトマンではない。中尉も、あまりうちの部下をからかわないでもらいたい」

え？と三人が同時に首を傾げ、あるいは眉を顰める。くすり、と笑みを浮かべ、ハルトマン中尉（仮）が口を開く。

「失礼しました。皆さんの反応が面白くて。私はカールスラント空軍技術局所属のウルスラ・ハルトマン中尉です。おそらく皆さんが言っているのは姉様……エーリカ・ハルトマンの事でしょうが、残念ながら私はその妹です」

そういつて改めて自己紹介を行うウルスラ。動揺したのはジェシカとフランダ。

「い、いえ、残念では……ちよつとシノ、あんたのせいで恥ずかしい思いましたじゃないの」

「シノのせいでとんだ恥さらしだ」

「ちよつと待つてください。あたし間違ったことは言っていない筈なんですけど。後ジェシカ。あの時会ってたでしょう？」

「あの時？」

「ほら……ええと、『壁』の」

ガリア国境での超大型ネウロイ『壁』との戦いは軍事機密だ。

ひそひそと耳元で囁く信乃にジェシカが眉を顰める。

「ああ。あの時。大変だったわ。あれだけ活躍したのに基地に戻たらなんか皆白い目で見てるし、一面どころか情報規制で新聞には一切記事は載っていないし。ラーナは2、3日肩が痛いだのなんだの文句をいうし、エツタはしばらく口をきいてくれなかったし……」

「あの時いたじゃないですか？」

「嘘?!そういうことはその時言いなさいよ!!」

「いつ言うタイミングがあったんです?あの時に」

連携も何もあったものじゃない乱戦の中、悠長にそんな話をしている余裕などあったものではない。かく言う信乃もあのハルトマン中

尉とバルクホルン大尉が共に戦ってくれていた事を知ったのは、マー  
ストリヒト・アーヘン空港についてからだ。

大人のぶどうジュースを飲まされたせいで、折角話が出来たのに何  
を話したのかいまいち覚えていない。朝起きたら飛行服の胸ポケット  
トにあの場所にいた501のウィッチ達のサイン入りのプロマイド  
が入っていたのには心臓が止まるくらい驚いたが。

「……すみません。失礼な事を言ってしまった」

素晴らしいながらハルトマン（仮）改め、ウルスラへと目を向ける信  
乃。

悪戯が成功した子供のようにつつすらと笑みを浮かべている姿は、  
確かに、あの時アーヘンの基地で見たハルトマン中尉とうり二つのよ  
うで、よく見ると太陽と月のように纏っている雰囲気異なってい  
る。

「いえ、気にしなくていいですよ。萩谷准尉」

「え、あたしの事を知ってるんです？」

ごく自然に名前を呼ばれ、信乃が驚いたような顔を浮かべる。

「はい。先程藤田中尉から。それに、貴女のお話はフィリーネさんか  
ら伺っています」

「え？ハンナ大……じゃなくて、少佐から？」

元JG54、現JG1に所属するハンナ・フィリーネ少佐とは、昨  
年のリヨン基地での戦い以降も時折手紙のやり取りが続いている。

今はアドルフイーネ・ガランド少将に付き合わされて各地を転々と  
していると、先日届いたサトゥルヌスカードに書かれていた。

あれだけ優秀なウィッチが自分の話なんてしてくれていたのか、と  
少しだけ嬉しくなる。

「はい。なんでも優秀なテストウィッチだと……」

「普通のウィッチです!!」

目をきらきらと輝かせているウルスラに信乃が慌てて首を振る。  
いったい何を吹き込んでやがるんですか、あの時折抜けてる雷嫌いな  
少佐殿は。

「そうですか？試験中の30mm機関砲で大型ネウロイを軽々倒した

と伺いましたが」

「違……わないですけど、違うんです!!」

あれはたまたま、偶然だ。軽々でもないし、機関砲としてではなく鈍器として扱ったままで……。

それを聞いて益々面白そうな顔をするウルスラ。

「30mmはうちでも開発中です。どうですか、今度そっちのテストも」

「お断りです」

「そうです。ハギちゃんは零式54型のテスト中なんですから、それが終わってからにしてください」

「テスト!? やっぱりテストって言いましたね!？」

「……実践運用試験の最終段階で限りなくテストではないテストです」

しれつと言い直す伊予。

まずい、このままじゃあなし崩し的に本格的なテストパイロットにされかねない。

「あたしは十分な実践と実績を積んだ機材が好きなんです。技術屋のおもちやは傍から見ているのが面白いのであって、自分で使うのとは話が別です」

「わかる」

ジェシカが何故か頷く。

「うちの国の技術屋も時々わざとやってるんじゃないかってくらい変なの作るんだから。地上ネウロイ撃退用の大きな車輪とか」

「パンジャンドラムですね。あれはいいものです」

「あー……そっち方面の人なのね……」

ウルスラの答えにジェシカがため息をつく。

「どっち方面かはわかりませんが、私はまともな方だと思いますよ」

「どうやら『英国面』に理解のある人らしい。」

技術者は大まかに分けて二つに分けられるといわれる。

変なことを考えるか考えないかではない。

思いついた変な事を実行することに対して自制がきくか、きかない

か。

つまり、技術者とは基本的に変なことしか考えない。

かつてのウルスラは、思い付いた事を実行する事に躊躇いが無かった。カウハバで倉庫爆破の代名詞だった頃に比べれば、今のウルスラは、少なくとも周囲に巻き込む人がいない事を確認してから爆破を行うようになっていた。

そういった意味で、それなりに自制が効くようになった今のウルスラは至極まっとうな技術者の筈なのだ。多分。

「……すまないが諸君。積もる話は後にしてくれないだろうか。君たちを呼んだのは別の訳がある……あるんだろうな？ハルトマン中尉」  
それまで指令室の椅子に座り様子を見ていたエイカー准将がようやく口を開く。まるでなかなか騒ぎが収まらない女学校の教員のような口ぶりだ。

「はい」

エイカーの問いにウルスラが頷く。

残ったコーヒーを飲み干すと、改めてその場にいるウィッチたちに向き直る。

先程までの技術者としての顔とは異なる、一人の前任ウィッチとしての表情に、皆も一樣に真剣な表情を浮かべる。

「皆さんが、先程輸送機の護衛任務にあたったウィッチで間違いありませんね」

「はい」

他にもオヘアとビューリングがいるが、彼女たちはストライカーを履いて空を飛んでいたわけではないし、輸送任務が行えない以上はしばらく空を飛ぶことは出来ない。

「先日の戦闘の概要は既に藤田中尉から聞いています。フランチースカ中尉が意識を失ったというのは本当ですか？」

「……ああ」

フラングが頷く。

「意識を失ったはずなのに、飛行を続けていた、というのも」  
「本当です」

それに答えたのは信乃。目の前で連れ戻したのだから間違いない。皆が頷くのを見て、ウルスラはその表情を引き締め、ゆつくりと口を開いた。

「……率直に聞きます。この中で、『人型』のネウロイを目撃した方はいませんか？」

思わぬ言葉に、思わず皆が顔を見合わせた。

## 2-1-2. humanoid II

— 1 —

1939年。スオムス。

スオムス空軍義勇独立飛行中隊……通称『いらん子中隊』の隊員だった迫水ハルカ一飛曹とジユゼツピーナ・チュインニ准尉が人の姿をしたネウロイ、通称『もどき』によって操られ、連れ去られた事件。ネウロイの欧州侵攻以来、『人型』の存在が初めて公式に確認された事例である。

その数か月後には同じく『いらん子中隊』及び、スオムスの『第24戦隊』に所属するウィッチが連れ去られ、そのうちの穴吹智子中尉並びにエリザベス・F・ビューイング少尉が負傷する事件が起きた。この事件にも矢張り『もどき』が関わっていたとされる。

正確な目的は不明だが、結果として当該ウィッチ二名は血を抜き取られ、危うく出血死しかけた。

ネウロイがウィッチに対して何らかのアプローチを試みているのでは、という説は当時より囁かれていたが、それが友好的なものではないというのもまた、その当時において、そして今現在に至るまでの主流な考えでもある。

そして、その4年後の1943年。同じくスオムス。

502JFWとスオムス空軍義勇独立飛行中隊……現507JFWの共同作戦『ミエリツキ』で、再度『人型』のネウロイが目撃される事となる。

『人型』との戦闘において、502JFWの隊員の数名が意識を奪われ、そのうちの一人、ジョーゼット・ルマール少尉はほんの短い時間ではあるが、『操られた』とみられる動きを見せた。

『シリンダー』と呼ばれるネウロイを相手に戦ったその後の戦闘は、その名前だけは公式に残されているが、詳細に関しては軍事機密として秘匿されている。『シリンダー』は大型のネウロイであると同時に、人型ネウロイの『基地』のような役割を果たしていたと考えられるからであり、作戦の詳細そのものが、『人型』に密接に関わるからである。



これらの事件が起こった1943年時点では、『人型』の出没地域はスオムスに限られるとされ、『人型』に関する全ての情報は厳重に秘匿されてきていた。

しかし、その矢先の1944年。

今度はスオムスから遠く離れたブリタニアを拠点とする501JFWに所属する宮藤芳佳軍曹が人型ネウロイと接触、一時行方不明となる事件が起きた。

宮藤軍曹への聞き取りによるとその行動は『自発的』なものだったというが、何らかの精神に対する干渉があったとする考えも根強く、後日原隊である扶桑皇国において、当該ウィッチに対する精密検査が行われたというが、身体には異常は見られなかったという。

一説によると、その際の人型ネウロイは『非攻撃的』で、あくまでウィッチとの『接触』を望んでいたとも言われるが、真偽は未だ不明である。

どちらにせよ、度重なる『人型』との接触が続く事態を重く見た統合軍は、情報の機密レベルを一段階下げ、各国の上層部及び各方面の統合軍に情報を提供し、さらなる情報の収集へと乗り出し始めた。

そして、その矢先。

今回の事件が起こった。

ウルスラの話が終わると同時に、誰ともなくため息を吐き出す。ゼムケとエイカーはその話を聞いていたようだが、この場にいるウィッチ達はそうではない。互いに顔を見合わせ、難しそうな表情を浮かべている。

「……小説みたいな話ね」

ぽつり、とジェシカが呟く。

「そう思うか？私もそう思った」

ジェシカの言葉にゼムケが肩をすくめる。

『人型』に関する情報は現在でも高レベルの機密事項である。ジェシカ達も、この話を聞くに至るまで、いくつかの書類へのサインと宣誓を行わされ、更には一度それぞれの原隊から西部方面統合軍への臨時移籍の形を取る必要があった。

万が一機密漏洩があつた場合、それに関わつたウィッチを統合軍管轄での国際軍事裁判に遡及的に出頭させるための措置である。

「……無理はないと思います。私も、自分の目で見るまではオヘア少尉がまたいつものように適当な嘘を言っていると思つていました」

ウルスラも二人の言葉に同意する。

ネウロイが人の……ウィッチの姿を模倣し、そのまま連れ去るなど、俄かに信じられる話ではない。

そう。自分の目で見るまでは。

ウルスラも、あの出来事が起こるまでは、ネウロイというのは本能に任せて自らの縄張りを広げるだけの、いわば野生動物と同等程度の存在だと思つていた。

だが、そうではない。そうではなかった。

ネウロイという存在は明確な知性を持ち合わせ、自らの意思で人類を蹂躪する『侵略者』なのだ。

「オヘアさんとビューリング少尉も知つていたんですね」

「ええ。当事者ですから」

伊予の問いかけにウルスラが答える。

先日の夕食の際、空では自分たちに従つて欲しいと珍しく強く言つてきたことが引つ掛かつていた理由がようやく解つた。

フランがおかしくなつた時、真つ先にフランを逃がさないよう行動を促したのもあの二人だ。

「……私からすれば、『あの』二人がきちんと守秘義務を守つていた事が信じられないのですが」

ぼそり、とウルスラが呟く。どうも話を聞いていると、無意識なのかわざとなのか、ウルスラはオヘアとビューリングに対して妙に辛辣である。

「今まで行方不明になつた連中は、ネウロイに連れ去られたという事か」

「恐らくは」

「連れ去られたらどうなる?」

「それは……」

ゼムケの問いかけに、無言で視線を落とすウルスラ。

最初の時はハルカもチュインも帰って来れたが、二度目の時は危うく智子とビューリングが命を落としかけた。

今回の『人型』の目的は解らないが、解らない以上、希望を持たせるような事は口にできない。

「……いいわ。大体解った。フラン、やっぱりシノによく感謝しとくのね」

ウルスラの沈黙から察したジェシカが肩をすくめる。

「ゼムケ大佐。私たちを『編入』したつてことは、今後も私達が飛ぶつて事でいいのよね？」

「臨時編入に承諾した以上、諸君らにはその覚悟が出来ていると判断している」

ジェシカ達を統合軍に臨時編入させたのは、勿論機密保持の意味もある。しかし、事情を聴取するだけならそもそも極秘情報を教える必要は無い。

「うちの部隊は現状、数が多いが若手ばかりだ。育てば引き抜かれ前線へと送られる。まるでウイツチの農場だ」

特にここ最近は何のガリアの危機が去り、主戦場がカールスラントやオラーシャといった東部方面に移行している。

ブリタニアに駐留していた56FGも、経験を積んだウイツチの多くはそちらの方面の部隊へと移籍となり、代わって本国から新たに若手のウイツチが送られてきて、専ら今はその錬成に力を入れている。

更に間の悪いことに、今まで消息を絶つたのは部隊の中でも比較的場数を踏んだ、少数で哨戒任務や護衛任務を行えるくらいには成長したもののばかりだ。

ジェシカや伊予、信乃といった中堅以上のウイツチが足りていない状態では、ゼムケも増援に頼らざるを得ない。だが。

「悠長に構えてはいられない。北海を絶たれては、オラーシャやオムスの前線への補給が滞る。そうなれば、人類の反抗作戦の大半が水泡に帰することとなる」

北海を經由し北歐のバルトランドやスオムスへ向かう補給路は、陸

路を寸断された北歐方面や、502を始めとする前線部隊の生命線である。

ガリアが解放された現在、北海のシーレーンの確保は、ブリタニアに駐屯している西部方面統合軍の至上命題ともいえる。そのためなら、他国のエースでも何でも、使えるものは使う必要がある。

「どうやって『人型』を？」

「拠点を叩く」

ゼムケが言い放つ。

「ハルトマン中尉の情報が確かならば、『人型』には必ず拠点となる場所が存在する。諸君らの手で血路を開き、我々56FGの持てる武器、持てるウィッチの大火力を持ってそれを殲滅する」

「リベリオンらしい発想ね」

ジェシカが肩をすくめる。物量に物を言わせるのはリベリオンとオラーシャの特権だが、その片割れである北の大国であるオラーシャ帝国はネウロイの侵攻によりこの世界から姿を消した。

現在、全世界で唯一ネウロイの侵攻を受けたことのないリベリオン大陸の豊富な物量こそが、この欧州を開放するための鍵を握っているといっても過言ではない。そして、その恩恵を最も受けた部隊だからこそ、他の国の部隊では不可能な発想が可能となるのだ。

「戦術としては間違っていないと思います」

ウルスラが口を開く。

今まで人型と戦った部隊は少数のウィッチによる精鋭部隊だったため、一人の欠員は戦力の大幅な低下につながるケースが多かった。

加えて、接触したウィッチの空戦技術を『コピー』することも出来るため、『人型』は飛躍的に脅威を増し、対して味方はどんどん苦境に立たされるといふ悪循環が成立していた。

だが、『56FG』が得意とする多数のウィッチによる飽和攻撃。こればかりはさすがの人型でもコピーのしようがないだろう。

「……問題は、どうやって拠点の位置を割り出すか、ですね……」

伊予の言葉にウルスラも頷く。

「人型のネウロイの多くは、戦闘の時以外は自らの拠点を偽装してい

ることが多いので、正直発見は困難です」

「それも人数でどうにかするつもりなのかしら？」

「……無理だと思います」

ジェシカという言葉に信乃が呟く。その言葉に、その場にいた皆が信乃へと一斉に目を向ける。

「ほう、萩谷准尉はそう思うか？」

ゼムケの言葉に信乃が地図からはっと顔を上げる。

「……すみません。出過ぎた発言でした」

思わず出てしまった言葉に信乃が視線を逸らす。

普段の会話ならいざ知らず、このような状況での上官への具申なら、もったときちんと言葉を考えるべきだった。

だが、ゼムケは叱責するどころか、むしろ鷹揚な笑みを浮かべている。

「何故無理だと思う？」

「……それは……」

「准尉。その偵察徽章が飾りでなければ、忌憚のない意見を述べるべきだ」

その言葉に信乃が一瞬逡巡したような表情を浮かべ、だが、観念したように口を開く。

敵の拠点として候補が上がるのは、北海に面した沿岸全域。

最初に会敵した場所と方角を考えれば、カールスラント北部周辺が拠点の場所としては最も可能性が高い。しかし、『人型』にある程度の知性があると考えれば欺瞞航路を取っていた可能性も否定できず、ブリタニア、ガリア、バルトランドも候補から除外できない。

そうなると、その範囲は広大になりすぎるし、それらの範囲をやみくもに飛んでも、偵察経験のないウィッチでは肝心の目標を見落とす可能性もある。偶然見つける可能性を考慮しても、同じ場所への偵察は一度や二度ではすまないだろう。擬態している相手なら猶更であり、相手がネウロイである以上、強襲の危険も考慮する必要がある。

偵察経験があり、ネウロイの奇襲に対応できるだけの練度のウィッチとなると、欧州全土を見ても数が限られる。たとえばき集めること

が出来たとしても、一日二日でどうにかなる話ではない。  
だが。

ゼムケが求めているのは不可能な理由を述べる事ではない。そんなのは誰でも考えればわかる事だ。

むしろ、必要なのはその打開策。それを求めているのだという事も、信乃は理解している。

「……最も発見の可能性が高いのは、多少の犠牲を覚悟したうえで、再度ネウロイと交戦した後、撤退する相手を少数……出来るなら二人一組で追跡することです」

思案する表情を浮かべながら、ゆっくりと信乃が口を開く。

「可能であるなら北海沿岸にある各国の航空基地や偵察部隊とも連携し、各方面から電子機器や偵察機なども用いる事が出来れば……」

オラーシャで強硬偵察部隊を投入する前段階で行われていた隠密偵察のやり方だ。

相手の位置を特定して引き返す為、強硬偵察に比べ危険度は低い。しかし、それを行っていたのは主に偵察機だったので、発見された後撃墜されることも多かった。

今回はウィッチが行う事となるが、操られる危険性を考慮すると、最低でも二人。相手に悟られないように、なるべく少ない人員で行う事が隠密偵察では肝要となる。

危険はあるが、今行える偵察としては一番確実な方法である。他に手があるのなら取りたくないが、時間も人員も足りないのなら、この方法しか思いつかない。

「連れ去られるリスクは？」

「あります」

「ネウロイに通信を妨害されることは」

「考えられます」

連れ去られるリスクは確かにある。電子機器も妨害される可能性が高い。偵察機に至っては万が一発見されれば逆に撃墜される恐れもある。それに、一度大規模な追跡を受ければ、ネウロイも次は更なる警戒をしてくるはずだ。

だが、リスクと利益。両方を天秤にかければ、最小の被害で最大の情報を手に入れられる手段はこの方法くらいしか思いつかない。

「……あたしは特務士官ですから、作戦の立案に関しては門外漢です。ですが、この作戦なら、実行する立場としては納得ができます」

「……ふむ」

信乃が口を閉じると、ゼムケが大きく頷く。

正直、信乃の意見は意表をつくようなものではない。ゼムケもまた、バルバロッサ作戦では一人の前線に立つウィッチとして銃を取っていたのだ。机上の理想が現実の戦場で通用しないという事も、身に染みて理解しているつもりだ。

それを踏まえた上での信乃の意見は、現場からの意見としては些か挑戦的な内容にも思えるが、理には適っているように思えた。

「どう思う、准将」

黙って話を聞いていたエイカーがその言葉にふむ、と大きく頷く。

「准尉の意見に概ね同意だ。だが、危険も大きい。もし実行するのなら、まずは周辺国からの協力を得るのが前提だ」

「それは准将の仕事だ。その強面は一体何のために行っていると思っ  
ている?」

「少なくとも、恐喝のためではないな」

無然とした表情を浮かべるエイカー。いかつい顔に澁面を浮かべる姿は、成程。人となり判らなければ相応に威圧感を感じるだろう。本人は至って温厚な苦労人なのだが。

「問題は囷となるウィッチだが……」

「ま、順当に行けば私とシノで……」

「あの……」

それまで話を聞いていたウルスラが口を開く。

「一つ、私からも提案があります」

「何か、作戦に不備があるのか?」

ゼムケの言葉にウルスラが首を横に振る。

「そうではありません。リスクを減らすための提案です。そのための『機材』もベルギカから取り寄せました。まもなく到着します」

「機材？」

「はい」

ウルストラが頷く。

「敵のネウロイが『人型』であるのなら、おそらく有効なはずです。うまくいけば、『人型』との接触を行うまでもなく相手の拠点を割り出せるかと」

「ふむ……」

ゼムケが口元に手を当て、思案するような顔になる。

「どう思う？ 萩谷准尉」

「偵察をする側からすればリスクが少ないに越したことはないです。有効な手なら、採用すべきかと思えます」

もともとリスクの高い作戦だ。出来ればもっと良い案が欲しいくらいだったので、少しでもリスクを減らす方法があるのなら、断る必要などない。

「時間はどれだけ必要だ？」

「3日……いえ、2日で」

その言葉にゼムケが頷く。

「……結構。一体どんな『からくり』を用意したのか、聞かせてもらおうか？」

ゼムケの言葉にウルストラがはい、と答える。

そして、机の上に置いていたファイルを取り出す。

「……かつて、ネウロイに操られた私たちの仲間は、定期的にどこか遠くに向かって話しかけるような仕草を見せることがありました。最初はちよつと頭がおかしくなったのかな、と思う程度でしたが……」

元々からして少しおかしいですし、という言葉は省略し、ウルストラは続ける。

「あの時、『人型』は、一度操ったウィッチをそのまま自らの支配下に置き続け、そして、定期的にこちらの情報を操ったウィッチを通じて入手していた、と考えられます」

「……ん？」

その言葉にフランがウルストラを見る。



「それならば、私がここにいてもいいのか？」

「はい。意識を奪われた程度が短いウィッチはそこまで深い支配を受けない事も、今までの事例で確認されています。それに、操られているウィッチは明確に違和感のある行動をとるので、今のフランチースカ中尉なら問題ないでしょう」

そう言いながらウルスラがファイルの中から数枚の書類を取り出す。

「ですが、『人型』は常に一度接触したウィッチへのアプローチを続けていると考えられます」

「アプローチ？」

「いわばマーカ―でしようか。それまで正常だったウィッチが、『人型』の接近と共に正気を失う。フランチースカ中尉も、その恐れが完全に払拭されたわけではありませんから」

そういつてウルスラが手にしたファイルの中から、机の上に書類を数枚並べて見せる。

「……何だね、これは？」

覗き込んだエイカーが眉を顰める。

一見してみるとただの波形を描いたグラフが並んだ表だ。

「502、および501の中で、『人型』と接触をしたウィッチに後日行われた精密検査の結果のうち、脳波と魔法力の測定結果です」

そして、そのうちの一つの波形を指さして、ウルスラが一言。

「この痕跡。これが、今回の『人型』搜索の鍵となるのです」

自信ありげにウルスラが言い放った一言に、思わず皆が顔を見合わせる。

そして。

「……すまんが、もう少しわかりやすく頼む」

「あ。はい……」

医者でも技術者でもないウィッチや軍人にそこまでの専門的な知識は無い。

ゼムケの至極真つ当な言葉にウルスラが肩を落とした。

翌日 0800 ウェストハムネット基地 医務室

医務室のベッドの上に横たわるフランに向かって、白衣を纏ったウルスラが尋ねる。

「気分はどうですか？フランチースカ中尉」

「実験動物にでもなった気分だ」

薄い検査服に着替えさせられ、体中によくわからない装置を取り付けられたフランが呻くように呟く。そして、そんなフランを取り囲む、ウルスラ以外の軍医や看護師たち。

この場にいる者もまた、全員機密保持文書へのサインと誓約を行っている。この場で見たもの、聞いたことは外部に流出することはないし、万が一それがあれば、関係者皆が決して軽くはない責任を負わされる。

「随分と仰々しいな」

ゼムケの言葉にウルスラが頷く。

フランの横になるベッドの周囲にはウルスラが持ち込んだ様々な機械が並び、そのうち、フランに繋がれたケーブルの先にある二つの機械の前にウルスラは立っていた。

「こちらが脳波計で、こちらが魔導計です」

機械がはじき出すグラフの数値を目で追いながら、ゼムケに対し、ウルスラが口を開く。

「こちらの脳波ですが、見て分かる通り、ごく僅かですが、一定の周期で波形に異常な反応が見られます」

「見てもさっぱり解らんが、それが先日言っていたネウロイの影響か？」

「……ええ」

ふむ、とゼムケが眉をしかめつつ口を開く。

「……フラン、何かに呼ばれている感じはするか？」

「食堂の朝食が私を呼んでいます」

朝早くの検査なのでまだ朝食は取っていない。自分の分がちやんと残っているか、正直気が気ではない。その言葉に思わずゼムケもウルスラも、そして、その場にいた女医や看護師たちも思わず苦笑を浮

かべる。最も、普段から冗談を言う性格ではないフランなので、あながち本気でそう思っている可能性も否定できないが。

「この程度の反応なら違和感を感じる事は無いと思います。それよりも……」

そう言うとうルスラはもう一つの波形へと目を移す。

「こちらの方が明瞭ですね」

そう言って指示したのは魔法力を測定する計器。脳波計と同じように、機械からは波形を示すグラフを刻んだ紙が一定のスピードで流れている。

「……私は医者でも技術者でもないので意味が解らん。説明を頼む」

ゼムケの言葉に頷くウルスラ。

ウィッチが正常な状態であれば、機械で測定される魔法力の波形は心臓の脈動のように一定の間隔で反応を示す。

微弱な魔力が常に体内をめぐっているからこそ、シールドや未来予知、信乃のチリチリといった魔法が、外部的な要因をきっかけとして、自らの意思とは無関係に発動するのだ。

逆に、魔法圧に異常があったり、魔法を使用している最中にはこの波形が不規則な反応を示したりもする。

また、外部から魔力が作用している時……治療魔法を使用されている時なども、治療者の魔力が波形に現れるケースが見られる。

「フランチースカ中尉の魔法力がこの大きな波形なのですが、その合間に小さな波形があるのが判りますか？」

ウルスラが指し示した波形に、ゼムケが頷く。

「この波形の周期は脳波に見られる異常な波形の周期と一致しています」

「……どういう事だ？」

首をかしげるゼムケとフラン。話を聞いていた軍医や看護師も、その言葉に耳を傾けている。

「フランチースカ中尉の体が、外部からの魔力に反応しているという事です」

その言葉に真っ先に反応したのは軍医の女性だった。

「外部からの……まさか……」

「はい」

ウルスラが頷く。

『人型』がウィッチを操る原理については今まで謎とされてきました。しかし、一部の研究者の仮説として、『人型』が『魔力』を用いているのでは、という説があります」

その言葉にその場にいた皆が思わず目を見開く。

「ネウロイが、魔法だと……？」

「ネウロイの構成物は主に金属です。そして、金属や鉱物が魔法を帯びるという現象は決して珍しくはありません」

魔導エンジンなどに用いられる魔導鉱石のように自然界で魔力を帯びた希少な鉱物、或いは刀や銃弾といった武器に魔力を付与させる技術や魔法は、古来より『この世界』に存在している。

そして、『怪異』と呼ばれていたネウロイも、それに対峙する『魔女』も、古くから人類史に記録が残っている。その中には、魔力としか思えないような現象を司るネウロイの記録も、決して少なくはない。「人類の科学の発展に合わせ、ネウロイが科学技術を模倣して進化したと考えれば、その後のウィッチの『進化』に、ネウロイもまた適応しようとしても不思議ではない筈です」

人類にとつて今現在のネウロイが脅威であるのと同様、ネウロイにとつても現在の『ウィッチ』は脅威なのだ。だとすれば、ウィッチの使用する魔法という『能力』にネウロイが目をつけても不思議な事ではない。

「……成程。最高機密になる訳だ」

ぽつり、とゼムケが呟く。

「つまり、これからのネウロイは魔法を使ってくるという事か？」

フランの問いに、ウルスラは首を振る。

「その可能性は否定できませんが、決して多くはない筈です」

魔力を帯びたネウロイの個体が滅多に見られないのも、自然界で魔法を帯びた鉱物がそもそも希少である事。産出される場所もオーストラリアや南リベリオン大陸の一部、そしてアフリカ、太平洋の南洋島等、

ごく限られた地域に限られる。特に強い魔力を帯びたアフリカ原産の鉱石は宝石並みの価格で取引される事も珍しくはない。

それを踏まえた上で、『人型』が初めて目撃されたのは1939年。もし簡単に量産できるようならば、5年もの間発見が数件に留まっているのは不自然だ。

『人型』がオラーシャ近辺……スオムスでのみ目撃されていたことも、希少な鉱物を取り込んで魔力を帯びたという説を補強している。

「その辺りは科学者の領分だ。相手の手口が解ったとして、どう対処するか。今はその方が先決だ」

ゼムケの言葉にウルスラも頷く。各国の上層部が『人型』の研究を急ぐ理由もそこにあるが、実際にそれと相對するウィッチにとってはその対処方法こそが喫緊の問題なのである。

「それについては、こちらの方を見てください」

そういうとウルスラがもう一つ、数字の並ぶ計器を指さす。

「これはフランチースカ中尉の魔力の波長の周波数を示すものです。魔力そのものは強力ですが、波長が普通のウィッチと比べ長い為、ストライカーユニットの調整に特別な共鳴子が必要となります」

それがフランの飛行適正が低いと判断された理由の一つでもある。三次元を把握する能力とストライカーユニットの調整の難しい周波数の魔法波。

だが、今はそのことを問題にしているわけではない。

「問題はここです。フランチースカ中尉の本来の魔力とは別に、とても短い周波数の魔力が紛れ込んでいます」

そういつて指さした先には、確かに、魔力の周波数を示す数値の一番下に、僅かな数値の『ぶれ』が見られる。

「恐らくこの周波数が『人型』の放つ魔力の波長です。隣にある機械が自然界の魔力を探知するレーダーですが、こちらでも同じ周波数の魔力を探知しています」

自然に流れる魔力ではこの周波数は決して珍しくはない。だが、通常自然界で検出される値に比べ、その値は不自然なまでに大きい。

「……あくまで私の仮説ですが、『人型』は狙った相手に何かしらの手

段で、我々ウィッチが言うところの『術式』……『マーカー』を植え付け、そこに特定の周波で魔力を送る事により『マーカー』を起動させて人の精神に干渉する。『マーカー』の汚染が強ければ強いほど、微かな魔力にも反応して精神を操られるのではないかと思われまます」  
術式とはいわば魔法のプログラムであり、魔法陣がそのわかりやすい代表例だ。

普通の魔法はウィッチが自らの中で組み立てて発動するが、術式は既にその組み立てが終了しているので、魔力を注ぐだけで自動的に発動する。実際に物質に書き込むことも出来るし、頭の中で『知識』として得る事で脳内に直接術式を刻むことも出来る。

『知識』を用いた術式でわかりやすいのはナイトウィッチの魔導針『八木・宇田式呪術陣』で、術式を覚える事で魔法探査を行う際に呪術陣を形成させて探査方向に指向性を持たせることが可能となる。

逆に他人を操る洗脳魔法などはその仕組みを利用して何らかの手段で相手の精神を操る術式を覚えこませることで発動する。現在では禁忌とされ、多くの国で使用を禁止されている魔法の一つだが、中世の頃までは尋問や諜報活動などで良く用いられていた魔術でもある。

そして、ネウロイの精神操作はその原理に極めて近いと考えられる。

人類とウィッチがその非人道性から捨て去った古代の魔術でも、古来から人類と接触していたネウロイからすれば、それは便利な『技術』に他ならない。

「ギャビーが『人型』に近づくのは危険という事か」

「この程度の反応であれば影響は少ないと思われませんが、それでも、万が一という可能性もあります。今回の任務にはフランチースカ中尉は……」

「……」

その言葉にフランが無言で横になっているベッドのシーツを握りしめる。

「ですが、フランチースカ中尉に干渉しようとしている魔力の周波数

をたどる事さえできれば、我々は必ず『人型』にたどり着くという事です。そういった意味でも、フランチースカ中尉が戻って来てくれた事には大きな意味がありました」

気休めにはならないだろうが、紛れもない事実だ。

「準備は出来るのか？」

「今回の検査の結果は私の仮定に沿ったものでした。予定通り、明日の午後までには準備を整わせることが可能です」

ウルスラの言葉にゼムケが頷く。ならば、予定通り作戦の決行は明日の早朝からとなる。

「結構。後は准将の政治力次第だな」

ほつり、とゼムケが呟く。かつては優秀なパイロットだったエイカーだが、政治家としては些か一本気すぎるきらいがある。同じ軍人としては好ましいが、一軍を指揮する責任者としてはもう少し強かなところがあっても良いと思う。

そう。かつて同じ『バルバロッサ作戦』で共に戦ったJG52のグンデュラ・ラル等はその点で言えば素晴らしい司令官である。他の部隊にいたのならばこれほど厄介な者もないが、もし上官であるのなら、これほど頼りになる者はそうはいまい。

そんなことを考えながらゼムケが医務室を後にする。後はこの基地にいる56FGのウィッチ達への作戦実行までの飛行中止の伝達と、周辺各国への航空機並びに船舶の航行の中止の勧告。

作戦まであと2日。だが、その間にやるべきことは山ほどある。

だが、今最もなすべき事は。

「……ギャビーの分も残してやらんとな」

ぐう、と小さく抗議の声を上げる腹を抑え、ゼムケが呟く。

育ち盛りの新人共がカフェテリアの朝食を食べつくしていない事を祈りつつ、ゼムケは食堂へ向かって行った。

「いつになったら飛べるんでしようね……」

ぼつり、と窓の外を見て眩くひかり。ペテルブルグから途中ストツクホルムを経由し、北海沿いのバルトランドの南方に位置するリュツゲ基地。

目と鼻の先の北海を超えればブリタニア。だが、そこから来るはずの輸送機は2日たっても来なかった。

「輸送部隊に何かあったんでしようか」

「面倒くせえ。ネウロイが出たんだったらオレ達でとつとぶつ倒せばいいじゃねえか」

「まあまあ菅野中尉。お茶でも飲んで。きっと何か事情があるんですよ」

「……そうすればアンタと早く離れられる」

リュツゲ基地に来てみたら何故かいた507、そして、何故かいた迫水ハルカ。

ひかりは扶桑以来の友人の再開に大喜びしていたが、菅野はその目を察して渋い顔をしていた。

「リベリオンからの義援物資は私達でしっかりエスコートしますの  
で、502は扶桑の輸送機の護衛を。こちらの事は気にしないでくだ  
さい」

出会い頭から気持ち冷たさを増しているヴェスナの涼し気な声色で悟った。

つまり、お前たちのしようとしていることは全てお見通しだ、と言われているのだ。

もし相手がプロイヤーだったなら、上手く丸め込むことが出来たかもしれない。あるいは、互いの物資の交換という形の融通も利いたかもしれないが、ヴェスナはその辺り流石はカールスラントで鍛えられただけの事はある。規律には厳しい。



……最も、直枝の良く知るカールスラントのウィッチでここまで真面目なウィッチは見たことがないのだが。

「ひかりちゃんも、そんな暗い顔しないで。むしろちようどいい休憩だと思ってくらいの余裕があったほうが……」

そう言つてひかりににじり寄るハルカ。びくり、と身を竦ませ、ひかりが直枝に口を開く。

「か、菅野さん!! 私、ちよつと体を動かしてきましたね!!」

「おう、行つてこい」

「行つてきます!!」

そう言つて部屋を飛び出していくひかり。取り残されたハルカがきよとんとした表情を浮かべる。

「どうして逃げるんですかね。あの子、まだ初対面なのに」

「初対面からそんな顔でにじり寄せられたらそりや逃げるだろ」

どうやらハルカは502で唯一面識のなかった『純粹で疑いを知らなさそうな』ひかりを偉く気に入つたらしい。

事あるごとにちよつかいをかけようとして、そして逃げられること数度。見事な危機回避能力と言わざるを得ない。或いは、曲者揃いの502でそのあたりの嗅覚も日々磨かれているのか。

そして。

「元氣だねえ、ひかりちゃんは」

そんな様子を少し離れたところで見ているヴァルトルート。

下原を連れていけないとなつたので誰を連れて行くかと思つていた矢先、どこから聞きつけたのか勝手に立候補してきた。

ジョゼを連れて行くと下原の負担が大きくなるので無理、サーシャはついさつき叱られたばかりなので無理、ニパも無理、そうなるに残りはエディータかクルピンスキーだが、エディータがうれしそうな顔で、『ぜひ連れて行ってください。むしろ置いてきても』というので仕方なしに捨てるに……否、連れてきた。

「ヴァルトルート中尉!! 麗しの君!! またお会いできて嬉しいです!!」

「僕も嬉しいよ。後はブドウジュースでもあればもつと嬉しいんだけど」

「うちの義援物資の中にあるかもしれません。カリフォルニアのワインとか」

「良いね良いね。ねえ、『ハルカ』。他にも何か良いものがあるんじゃないかな」

耳元で囁くヴァルトルートにハルカがとろんとした目を向ける。

「うふ、融通つけましょうか？そのかわり、今夜は伯爵様のベッドの中であんなことやこんなことまで……」

その結果がこれである。ある意味ここに来た目的はきちんとこなしているのだが、手段がえげつない。

「というか、女好きと女好きが合わさって変な化学反応が起こり始めている。」

「直ちゃんも、そんなところで本読んでないでこつちにおいでよ」

「そうですよ、ゆつくりと語り合しましょう」

「こつちみんな」

二人の座っている机と対角線上にある最も離れたソファにいる直枝にヴァルトルートが声をかける。

内心既に読書どころではないが無視。誰が入るかあんな空間に。

急な訪問だが快く基地内の談話室をウィッチ用に開放してくれた人の好きそうなバルトランドの空軍少将には悪いが、一刻も早く帰りたい。

バルトランドもウィッチ隊がいるが、その数や練度は隣のスオムスや海の向こうのブリタニアに比べるとやや劣る。加えてその戦力の大半は危険度の高いオラーシャよりのストックホルムやカールスラントの目と鼻の先であるケベンハウンに集中させている状況だ。

そのため、ここ、リュツゲ基地に常駐しているウィッチは今はいない。ガリア解放まで一中隊がいた名残か、ハンガーにはいつでもユニットをメンテナンスできるだけの設備は残されていたが、整備兵長以外は航空機はともかく、ストライカーユニットの整備には殆ど慣れていないという有様だ。

暇つぶしの為に持ってきた芥川を流し読みするも、頭に内容が入ってこない。久々の扶桑の本を堪能する予定が台無しだ。

「……仕方ねえ」

本を閉じて立ち上がる直枝を見て、ヴァルトルートとハルカが目を輝かせる。

「ようやく来る気になった?」

「ちげえよ。そつちじゃねえ」

そういうと本を机の上に放り投げ、出口へと向かう。他国の軍事基地なので行けるところに制限があるが、ここよりマシだ。

ちえー、というヴァルトルートの残念そうな声を背に、直枝は談話室を後にした。

「ええっ!?手紙って人に見られてたの!?!」

「知らなかったの、ひかりさん」

ひかりの言葉に呆れた様に美也が苦笑を浮かべる。戦地からの手紙には検閲が入るのが常識だ。恐らく、うっかり機密事項を書いてしまったであろう時のひかりの手紙には、墨で潰された後がいくつもあつたりもした。

「恥ずかしい……変な事書いちゃってなかったかな」

「それは大丈夫じゃないかしら」

むしろ微笑ましい内容ばかりだと思う。

訓練が大変だとか、他の部隊のウィツチも一緒に皆でサトウルヌス祭をしたとか(名前の所はきれいに墨が引かれていたが)、気温が低くて服が凍ったとか、そんな内容が多かった。

読まれて恥ずかしいようなプライベートについてまでは書かれていなかったか、或いは検閲に引つ掛かって届かなかっただけか。

それよりも、美也の印象に残っていたのはひかりから送られてくる写真の方だ。

検閲に許されて時折同封されていた写真。そこには、部隊の仲間と上手くやっている証でもあるように、相変わらずの笑顔を浮かべているものばかりだった。そして、その写真の中の顔が、文章よりも何よりも、ひかりが無事であるという事を雄弁に物語っていた。

そして、今、目の前にその笑顔がある。ちよつとだけ大人びた気もするが、欧州に向かう前と同じく、ひかりという名前に負けない、き

らきらした笑顔を浮かべている。

「……どうしたの、三隅さん？」

「な、何でもない……って……」

慌てて目を逸らした美也が空を見上げる。ぽつ、ぽつと、曇った空から冷たい雫が美也の頬を叩き始める。

「降ってきちゃったね……」

「そ、そうね。戻りましょうか、ひかりさん」

美也の言葉にひかりも頷き、小走りで基地へと戻る。その間も雨は徐々に強まり、冷たい風が北海から吹き付けてくる。

そういえば、あの日。欧州行きの選抜試験もこんな感じだった。急に降り出した雨と風が無ければ、あの時失敗をする事も無かつただろうが、結果としてはこれで良かったのだと思う。

ひゃあ、と悲鳴を上げながら、二人のウィッチが屋根の下へと飛び込んだ。

「あら、菅野さん」

「ヴェスナか。調子はどうだ？」

「どうでしょう。先輩としてあまり変な姿は見せてはいないつもりですが」

そう言いながら手に湯気の立ったカップを持ち、丁度反対側から歩いてくるヴェスナ。

互いに顔見知りでかつ、現状では最も安心して話せる相手だ。

「談話室にはだれかいますか？」

「迫水中尉とクルピンスキー」

その言葉に黙って談話室へ向かっていた足をくるりと翻し、直枝と並んで歩き始めるヴェスナ。ヴァルトルートと会いたかったのかもしれないが、一緒にいる相手を考えると懸命な判断だ。

「それで、菅野中尉はどちらに？」

「ハンガーにでも行こうとおもってた」

「勤勉ですね」

「居場所がねえんだ」

その言葉にくすり、とヴェスナも笑う。

「私もです。雁瀨軍曹に美也を取られてしまいました」

佐世保の予備学校の同期という事もあってか、あの二人は積もる話もあるようだ。折角の機会ヴェスナが遠慮して二人きりにしてあげたらしい。

「伯爵の奴にあわねえのか？」

「どんな顔すればいいかわかりません」

「今日は先生はいないぜ？」

「……なおの事、抑えがきく自信がありません。美也の前では良い先輩でいたいで」

「あー……いい天気だな？」

「今にも雨が降り出しそうですが？」

「いい天気だ。オレはこういう曇り空が好きなんだ」

適当に振った話が藪蛇になりそうだったので強引に話題を変える直枝。

「天気の話はどうでもいいですが……」

ヴェスナがぽつり、と呟く。

「美也が雁瀨さんのユニットを羨ましがってました」

「だろうな。オレも正直羨ましかった」

ヴェスナから話題を変えてもらえて助かった、といった顔で直枝も頷く。その言葉に、ヴェスナが首を傾げる。

「扶桑ではユニットの配置転換が遅れているのですか？この前護衛に来ていたウィッチも零式を使っていました」

「……紫電改は色々面倒なんだ。おかげで零式がまた改良された」

直枝が肩を竦める。

扶桑の最新型戦闘脚である『紫電改』は生産台数が少なく、かつ、仕様が複雑で量産が中々進まないのが現状だ。

502でも直枝が受領してから定子が受領するまで結構な間があり、ひかりの使っている紫電改『チドリ』も、量産機と変わるところはないとはいえ試作機だ。最新機材が優先して投入される前線部隊である502ですらこの状況なのだから、他の部隊の配備状況は推して知るべしである。

本来であれば次期ユニットに代わり退役するはずだった零式に64型という新型が急遽開発されたのも、紫電改の生産性が悪く、『繋ぎ』のユニットが必要になったからに他ならない。

『雷電』も悪いユニットじゃないぜ。オレは使いたくないけどな」  
「美也も戸惑っていました」

美也が現在使用しているストライカーユニットは、扶桑皇国製の戦闘脚、『雷電』333型である。

零式や紫電改に比べると旋回性能が悪く、扱いも難しいため、扶桑海軍のウィッチからは余り良い印象を持たれていないが、火力と高高度性能、そして速度は零式はおろか、紫電改と比べても決して引けを取らない。むしろ、一撃離脱に割り切れれば非常に優秀なユニットだ。

欧州の部隊で他国のウィッチと共に戦う機会が多い統合戦闘航空団等ではどうしても非力な零式では後れを取ることが多い。多少機動力を犠牲にしても安定性と高高度性能を高めた『雷電』の方が、欧州のユニットとは相性がいいのもまた事実だ。

「まあ、扶桑じゃ真つ先に巴戦の技術を叩き込まれるからな」

それに、そもそも欧州のウィッチの戦い方は、巴戦ではなく一撃離脱戦術が基本だ。当然ユニットも、取り回しの良さよりも頑丈さや速度、安定性が重視される傾向にある。

扶桑海軍でも早い段階でそういった戦いに慣れてしまえば、雷電でもさほど違和感を感じずに済むはずなのだが、扶桑の軍学校や航空予備学校の訓練では零式11型を用いているので、零式とはそもそも設計思想の異なる『雷電』に美也が違和感を感じるのも無理はないだろう。

そして、その傾向は直枝も含め、零式に慣熟したベテランに強く見られる。それを考えると、美也のような若手の方が雷電のような機材に慣れるのも早い筈だ。ヴェスナを始め、507には一撃離脱の手本となるウィッチも多いのも美也にはとっては僥倖だ。

それに、前線では常に自分の機材が万全とも限らない。

もし、自分のストライカーが使えなくなった時、他国のユニット……メルスやスピットファイア、P-51Dといった機材を扱う事に

なった時にも雷電に慣熟しておけばさほど違和感を感じることもなく乗りこなせるだろう。

「あ、菅野さーん!!」

そんなことを考えているうちに、廊下の向こうから響く声に二人が顔を向ける。手を振りながら近づいてくるセーラー服姿の二人の少女を見て、直枝が怪訝そうに口を開く。

「何だよひかり。外に行くんじゃないのか?」

「戻ってきました」

そういつてひかりが窓の外へと目を向ける。その視線を追うと、雪交じりのみぞれが窓を叩き始めている。

「……これでも外に行けっというんですか?」

「……オレなら行かねえ」

「ですよね」

はあ、と揃ってため息をつく直枝とひかり。かといって談話室に引き返すのもアレがアレだし、ハンガーにぞろぞろいっても整備の邪魔になるし。

「……ま、ここでいいか」

そう言って直枝が壁に寄り掛かる。

「ここですか?」

「屋根があつて窓がある。ここでいいだろ」

他愛のない雑談でもしていれば時間も潰せる。最前線のテントに比べれば、隙間風の吹かない建物の中ならどこでも快適だ。

そんなことを考えていると、今まで黙っていた美也がおおずと口を開いた。

「あの、菅野中尉……」

「ん?確か三隅、だったか?」

「はい!!」

ついさつき談話室で507との顔合わせは済ませてある。ハルカが存在が強烈すぎて自分の事など覚えていないのかと思っていたが、そうではないらしい。

名前を呼ばれて少し安心したのか、美也が直枝に話しかける。

「その、カウハバに来る前から色々とお話を伺っていたので、一度お話が出来ればと思つていて……」

そういつて何か言いたそうな顔を浮かべる美也。緊張して言い淀む姿を見、何かを察した直枝が眉を寄せてひかりへ目を向ける。

「……おいひかり。その手の嫌がらせは止めろ」

「な、何も変な事は話してませんよ!? 佐世保の話とかお姉ちゃんの話とかしかしてません!!」

慌てて言い訳を始めるひかりを横目に直枝がさらに尋ねる。

「じゃあ何だ? 502に合流する日に喧嘩して留置所に入れられた話でも聞いたか? アレはオレは悪くねえ」

「ち、違います!!」

驚いたような顔を浮かべる美也と、ああ、やりそう、という顔を浮かべるひかり。

「そんな事してたんですか菅野さん……」

「それより前か。ああ、それなら無断で萩谷の22型を持ち出して壊した事か?」

「違います!!」

「それ、ちゃんと謝つたんですよね?」

「じゃああれだ。予備学校時代に曲芸飛行をした後教官のいたテントに落ちた。あれは多分伝説になつてるはずだ」

「菅野中尉だったんですか、あの伝説……」

横須賀でも佐世保でも、陸軍でも海軍でも、言われた以外の事はするな、と、最初の訓練飛行の前に必ず語られる逸話の主がここにいた。「やつぱりアレって菅野さんの事だったんですね。一緒にいてなんとなく気がつい痛っ!!」

さつきからやかましいひかりの額にデコピンを食らわせながら直枝が首をかしげる。自分の噂などてつきりそのあたりから出たものだと思つていたので。

「ええと、『協調性のない一匹狼、でも腕は一級品』……」

「どこのどいつだ。今度ぶん殴つてやる」

「……『だけど、私は助けられた。感謝してもしきれない』つて」



「はっ。」

最初の言葉はヴァルトルートがかつて自分を評した伝聞と同じものだが、後半には聞き覚えが無い。

「スオムスまで送ってくれた方が言っていました。過酷な場所かもしれないけど、隣の基地にいる菅野中尉ならきつと助けになつてくれる。敵にも仲間にも容赦なく粗暴だけど、仲間を見捨てるようなことだけはしない、って……」

「オレほど仲間思いなウィッチに対して粗暴はねえだろ」

「どの口が」

「次言ったらもう一発だぞ、ひかり」

「……いえ、その通りだと思います。他にも、いろんな方から菅野中尉に遭った時に感謝しておいてほしいと頼まれたので、伝えられて良かったです」

遣欧艦隊の旗艦『瑞鶴』で、着任先を答えた際に言われた言葉は主に二つ。『迫水中尉は危険がアブナイ』と『いざとなれば502を頼れ』の二つだ。

そのうちの最初はカウハバに着任してすぐに思い知らされたが、もう一つはそれだけ502に派遣されている直枝や定子が他の扶桑のウィッチから信頼されている証だろう。想像していたよりも若干……否、かなり粗暴な印象だが、ひかりがこれほど懐いているのだ。きつといい人に違いない。

そう言つて笑顔を浮かべる美世の言葉に、ばつが悪そうな顔を直枝が浮かべる。

そう。直枝は自分が思っているほど、扶桑のウィッチからの受けは悪くない。特に、上官以外の尉官や下士官たちからはむしろ好意的な目で見られている。

粗暴ではあるが馬鹿ではない。

不条理に見えて理に適っている。

そして、理に適っているなら妥協しない。

そういつた真つ直ぐな姿勢は、後ろを追うものからすれば頼もしくすらある。

それに、意外と面倒見がいいのだ。

これでも尉官である。下士官のために上官や陸軍の憲兵に対して声を荒げたことも何度もある。ガキ大将に他の子供が怖がりながらも付いていくのと同じで、まだ年場もいかない若手ウィッチからすれば直枝は怖いけど頼もしい姉貴分なのだ。

……まあ、大抵の顔見知りは顔を合わせると『ユニット壊してないですか?』だの『他国のウィッチに誤解を招くような事はしてないか?』だの散々な言い草をしてくるのだが、それも直枝に対しての友情の裏返しなのだろう。

「……あいつ等。面と向かつては絶対に言わねえ癖に」

ぼつり、と呟く直枝。だが、満更でもないといった口調に、隣に立っていたひかりがじとじとした視線を送る。

「ふーん。よかったですねー、菅野さん。大人気じゃないですか。ふうーん」

「……何だよ、何が言いてえんだ?」

普段とは違うひかりの雰囲気、眉を顰める直枝。

「べつにー。いつもは『オレの相棒は孝美だけだ』なんて言ってる癖に。なーんだ。菅野さん、より取り見取りじゃないですかー」

「なっ?」

「えっ?」

「まあ」

思わぬ言葉に直枝が、そして隣にいた美也とヴェスナも揃って驚愕の表情を浮かべる。

それってつまりアレ?そういう事なのでしょうか?

「違!?何言ってるんだお前!!これはそういう意味じゃ……」

「……私にだって相棒って言ってくれたのに」

「んなっ!」

「ええっ?」

「まあまあ」

その言葉に美也とヴェスナが違う反応を見せる。心底驚いた表情を見せる美也と、興味深そうな表情になるヴェスナ。

「お、お二人ってそういう関係なんですか!?それに、孝美さんって……まさか姉妹揃って!？」

何それ凄い。流石歴戦のエース。そっちの方も凄い。ひよつとして自分が伝えた事もそういう事なの?みんなまとめて『剣一閃』しちゃったの?

「ちげえよ!!」

「でも、女の子……ウィッチ同士でなんて……ヴェスナさんはどう思います?」

「……えっ……ま、まあ、健全とは言えないかもしれませんがね」

『えっ』て何ですか?」

「……何でもないですよ」

「何で間があるんです?」

どうしよう。安全だと思っていたのにヴェスナさんも何だか少し怪しい。危険がアブナイのはハルカさんだけだと思っていたのに。

私は欧州を守るためネウロイと戦いに来たはずなのに。

貞操を守るために他のウィッチと戦いに来たわけじゃないのに。

「……ねえ三隅さん。『相棒』ってなんか変な意味でもあるの?」

「え?」

ひかりのきよとん、とした顔に思わず目を丸くする美也。

最初からひかりの言葉には深い意味など無い。姉や自分が一番の相棒と言ってくれた直枝に対するちよつとした嫉妬に過ぎない。変な風にとらえるのは、心が汚れている証拠だ。

「そ、そうだぞ三隅。相棒ってのは背中を預けて戦う仲間って意味だ。不健全じゃない。お前の考えてるようなことは決して、ない」

「そうですね。その通りです。美也が私の相棒になるのならもう少し実戦を積んでからでないと。そういう意味です。ええ」

ひかりの天然発言にここぞとばかりに乗る薄汚い先輩共。

「しっ……失礼しました!!私、変な誤解を……!!」

それというのもひかりさんが思わせぶりな態度をとるせいなんですけど!!そういうところが可愛いんですけど!!もう、ひかりさんの馬鹿、大好き!!

「いや、いい。誤解が解けたなら何よりだ」

はあ、と直枝がため息をつく。その時。

「こんなところで何をしてるんだい、皆」

「……談話室を占拠している上官達に対しての抗議の集会だ」

「ひよつとして上官って僕の事？まあ、上官なんだけどね」

そういうヴァルトルート顔を見て直枝がわずかに眉を顰める。

ヴェスナも何かを察したのか、やや真剣な表情を浮かべる。

「……やっぱり輸送機に何かあったのか？」

「うん」

その言葉にひかりと美也の表情も強張る。

「落とされたのですか？」

「大丈夫。輸送機も護衛のウィッチも無事だつて。ただ……」

ちらり、とひかりたちを見、ヴァルトルートが口を開く。

『相手は『人型』らしいよ』

「な……」

「っ!？」

その言葉に驚愕の表情を見せる直枝とヴェスナ。

「え？何？」

「カールスラント語……でしょうか？」

一方、カールスラント語を聞き取れなかった二人は首をかしげている。多国籍部隊、そして外国語というのはこういう時便利だ。欧州での生活が長い直枝はカールスラントの言葉が喋れるし、ヴェスナはカールスラントの部隊にいた。一方でひかりや美也は、ブリタニア語以外の欧州の言葉は理解できない。

『確かな情報か？』

直枝の問いかけに頷くヴァルトルート。

『ハルカちゃんはこの基地の司令官に呼ばれている。詳しい話は分からないけど、ボク達にも応援要請がかかるかもしれない』

「あの……クルピンスキーさん」

不安そうな顔を浮かべるひかりを見、ヴァルトルートがいつも通りのブリタニア語でにっこり、とほほ笑む。

「なあに、大丈夫だよひかりちゃん。今から説明してあげるから。あ、一応外にばれちゃいけない情報だから書類にサインは必要だけどね。さ、談話室に行こう」

そういつて皆を促すヴァルトルート。

もし本当だとすれば、ただの護衛任務が一転して厄介な戦闘に巻き込まれる可能性が高い。或いは、隊長たちはこのことを予め知っていたのかもしれない。

だとすれば、これから先に起こることは容易に想像がつく。

「……嫌な天気だぜ」

一番後ろを歩きながら、直杖がちらり、と窓の外を見てぼつり、と呟いた。

## 2-14. a little break

1430 ウェストハムネット基地 談話室

「ここにいたのね、二人とも」

ウェストハムネット基地内の談話室のソファに、フランと向かい合うようにして座っていた信乃の背後から、唐突に声がかかる。

リベリオンのダイナー風に設えられた談話室には、赤や白を基調としたソファと机が並んでおり、誰かが持ち込んだのか、蓄音機から本土で流行しているビッグバンドの軽快な演奏が流れている。

リベリオンの制服を着たウィッチ達が思い思いに時間を過ごしている様子は、軍隊と言うより放課後のハイスクールのようだ。

「ああ、ジェシー。ジェシーからも何か言ってやってください」

振り返った信乃の言葉にジェシカが眉を顰める。

「何？厄介事なら面倒だからパスよ」

「ジェシーからも信乃に言ってやってくれ」

「……何か解らないけど厄介事ね。絶対に嫌」

今にも回れ右をしそうな顔でジェシカが肩を竦める。

「またフランがごねてます」

「やはり私も出撃したい。もう一度隊長に掛け合えば、或いは……」

「だから無理ですって」

「……まだ言ってたの、フラン」

午前中の検査の後、フランが出撃停止を言い渡された事を聞かされた時にも同じような事を言っていた。

少し遅い時間のカフェテリアに残っていたのはパンとソーセージ以外は味気の無い豆スープと大量のポテトのフライ。

ブリタニア風に設えられた士官用の食堂よりも、リベリオンのウィッチ達はこの下士官以下用のカフェテリアの味と雰囲気馴染みが深い。フランも同様で、尉官であるが味はともかく沢山食べられる下士官のカフェテリアの方を利用する方が多い。

パンでソーセージを挟み、ホットドッグのようにして口にそれを押し込んでいるフランを見、ジェシカが溜息をつく。

「出撃停止なんて良くある事。前線に行けば、戦いたくなくても戦わざるを得ない状況だつて出てくる。それに、何時状況が変わるかもわからないのに、不貞腐れてコンデイションを落したりしていたらウイツチ失格よ」

「……解つてる。だからきちんと食べている」

フランもそのくらは理解している。

あのカールスラントの英雄であるルーデル大佐も、着任したばかりの頃は上官と反りが合わず、中々出撃できず悔しい思いをしたと言う。

フランも歳の割には悔しい思いをした事は数えきれないし、それを乗り越えてきた自負もある。

だが、感情を整理するには多少の愚痴も言いたくなるのだ。

そのせいでさつきから一時間近く付き合わされている信乃からすればとんだ災難だが、落ち込んでると思ひ話しかけたのが運の尽き。

フランは普段はあまり喋らないが、不満が溜まるとそれが一気に愚痴となって口から溢れ出す。彼女なりの気持ちの整理の方法だが、付き合わされる相手からすればたまったものでは無い。

お陰で信乃は何故彼女が仲間であるリベリオンのウイツチ達から『ギャビー』と呼ばれているのかを小一時間もの間、存分に思い知らされる羽目になった。

「愚痴ってお腹が膨れれば少しは気持ちも落ち着くわ。後、疲れも取れる」

そう言つて、どさり、と乱暴な勢いで信乃の隣に腰を落とすジェシカ。一応ブリタニア淑女を気取っているジェシカにしては珍しい行動だ。

「……ひよつとして、疲れてます?」

信乃の言葉にジェシカが肩を竦める。

「多少はね。ユニットの整備に原隊との折衝。それと、ゼムケ大佐と明日の作戦の打ち合わせ。ビューリング先輩の異動の手続き。ミス・オヘアは自分の事は自分で済ませてるのに、あの人、私が来るまで何もしないで煙草加えて待つてるの。どうかしてるわ」

「お礼にコーヒーでも入れてもらったんでしよう?」

「よくわかったわね。うんと苦めにされたわ」

「あの人なりのお礼なんでしょう」

「いやがらせよ。間違いないわ」

「コーヒー淹れます? うんと苦めにしますよ?」

「いやがらせね。間違いないわ」

ぶつくさと文句を言いながら、ジエシカが手にしていた瓶とプレートを机の上に置く。

山盛りのポテトフライにパンと豆のスープ。それと、リベリアなら誰もがなじみ、コーラの瓶。

来たばかりの時に利用した士官用の食堂はこの時間にはもう閉まっていたので、仕方なしにカフェテリアで残り物を掻き集めてきたが、トシゴロの少女のランチとしては内容も味も些か物足りない。

だが、信乃は其中で目敏く『あるもの』に目をつけた。扶桑では滅多にお目にかかれない代物に、物欲センサーが反応したようだ。

「コーラなんてあるんですか? この基地」

「あるだろう、普通」

コーラを見て首を傾げる信乃と、同じように首をかしげるフラン。

信乃からすれば、否、扶桑のウィッチからすれば、コーラは貴重な甘味である。

扶桑海軍にもラムネのような清涼飲料はあるにはあるが、その大半は扶桑からの補給や現地調達が殆どであり、常に飲めるとは限らない。補給があつた時に飲まずにとつておけば、後々ギンバイ等で役に立つくらいには貴重な品物だ。

だが、リベリアンでは事情が異なる。

リベリアンの駐屯するところにコーラ有り。それはリベリアンにとって常識である。

コーラを製造する会社の社長が『我々はリベリアンの軍服を着ているすべての兵士とウィッチが、どこで戦つていようと、またわが社にどれだけ負担がかかろうと、5セントの瓶入りコーラを買えるようにする』と高らかに宣言をし、実際に少くない資本を投じて欧州の各



地に次々とリベリアン向けのコーラを製造する工場を作っている。

更に困ったことに、本来諫めるべき立場の軍部までもがその宣言に強い感銘を受け、工場の責任者に階級を与え特務士官にするなど、全面的な協力を惜しまない姿勢を見せている。その場所も未だネウロイの侵攻を防いでいるブリタニアやヒスパニアなどはもとより、復興したばかりのガリアや、前線にほど近いベルギカやスオムスにもその建設の手は及んでいるという。

甘味、特にコーラはリベリアンにとっては必要不可欠な代物であり、むしろリベリアンがいるところにコーラがない方がおかしいのだ。

控えめに言っただうかしている。

「ああ、コーラって最高。もう苦いのは嫌」

コーラの瓶の中身を飲み干し、一息ついたように言い放つジェシカ。

「あのジェシカにそこまで言わせるとは……」

「よっぽど追い詰められてるんですね……」

気の毒そうな顔をジェシカに向ける信乃とフラン。

普段『コーラなんて植民地人の飲み物。野蛮。下品』とでも言いたげな顔をしているくせに、紅茶がないだけでこうもブリタニア人というのは追い詰められるものなのだろうか。

「……それにしても、皆暇なのかしらね」

口の苦みが中和され少し落ち着いたのか、皿に盛られたポテトに口をつけながら、ジェシカがあたりを見渡す。

ダイナー風にしつらえられた談話室には、空軍の制服や飛行服を着たウィッチ達が思い思いに軽食を取ったり、飲み物を片手に談笑をしている。

「……言われてみると、多いな」

フランも首をかしげる。普段なら訓練や任務で、この時間帯に談話室は閑散としているはずなのだが。

そういつている間にもウィッチたちが数名、談話室を覗いて席がないのを確認すると、肩をすくめて部屋を出て行った。

代わりに、見慣れたウィッチが一人、きよろきよると談話室を見渡して、こちらと目が合うとほっとした顔で近づいてきた。

「ああ、よかった。ここにいたんですね、ハギちゃん」

そういうながら伊予が小走りに三人の座る席へと駆け寄る。

「イヨ、ここが空いている」

「ありがとう、フランチースカ中尉」

フランチースカの言葉に伊予がその隣へと座る。

「何か人が多いみたいです。伊予」

「ええ。部隊全体に飛行禁止令が出てみたいですよ」

アイスを口に運びながら、さっぱり、と口にした伊予に、ジェシカが思わず尋ねる。

「……本当に？そんな情報入ってないわよ？」

「『これ』を待っている間に後ろの人に聞きました」

そういつて伊予は手にしたアイスクリームの入ったカップを皆に見せる。

「どうしたの、そのアイス」

「食堂の前で行列ができていたので並んだら貰いました」

「知らないで並んだの？」

呆れた様にジェシカが尋ねる。

「行列って見ると並びたくなるんですよ」

扶桑人は行列が好きだ。流行りの店や映画の新作、何か珍しいことがあるたびに行列を作つてとにかく並ぶ。

むしろ並ぶと何かいいことがあるのではと、何の行列か解らなくてもとりあえず並んでみる事も扶桑では珍しくはない。

「ていうか基地でアイスって。そんなものまであるんですか？」

「あるだろう、普通」

先程と似たような疑問を口にする信乃の言葉に、同じように再度首をかしげるフランチースカ中尉。

リベリアンの駐屯するところにアイスあり。それはリベリアンにとって常識である。

本土では勿論、欧州に遠征する巡洋艦以上の軍艦には必ずアイス製

造機を設置し、陸に上がればアイスを製造するためだけの陸上車輛が存在し、アイスを製造する設備を持たない駆逐艦や陸上部隊がウィッチを救助すればそのウィッチの体重と同じだけのアイスが褒美として振舞われ、新造艦に求めるものとして駆逐艦艦長が『アイス製造機』を上げ、なければ作るとばかりに勝手に駆逐艦にアイス製造機を増設し、ついには1945年には待望のアイスクリーム補給専用の特務艦が完成。欧州に到着してしまった。

その名もアイスクリーム・バージ。

その珍妙なニュースに欧州全てに展開していたリベリオン兵士とウィッチが歓喜し、あのパットン提督が直々に歓迎のセレモニーを開き、初めて到着したガリアのパ・ド・カレー軍港はちよつとしたお祭り騒ぎだった。

控えめに言わなくてもどうかしている。

「でも、いいわねアイス。どのくらい並んでた？」

自分が食事をとりに行った時にはそんな行列は出来ていなかった。今から行けばデザートが手に入るかもしれない、といった顔でジェシカが尋ねるが。

「私で終わりました。後ろに並んでいた人が泣きそうな顔をしていたので、情報提供のお礼にハギちゃんの分を渡してしまいましたか……」

「待ってください」

その言葉に信乃が言葉を失う。

「別に頼まれた訳じゃないですし。ちなみに後ろに並んでいたのはエイカー准将でした」

「ちよつと待て」

続いてフランも言葉を失う。

この基地で一番偉い男が下士官やウィッチに交じってアイスを貰いに来ていたのか。

しかも他国のウィッチにおこぼれを恵んでもらうとは。

「アイスの前では皆平等だから仕方がないと准将は言っていました。肩を震わせながら」

「……そんな話聞きたくなかった」

頭を抱えるフラン。

「それよりも、ウィッチや軍用機だけじゃなくて、民間の船や航空機も全部止まっているみたいですよ」

少しだけ声のトーンを落とした伊予の言葉に皆が顔を見合わせる。

「ちよつと、それって……」

「ジェシカさん、機密」

伊予の言葉にジェシカが慌てて口を閉じ、あたりを見渡す。どうやら耳を立てているものはいないようだ。

「……それってつまり、『アレ』のせいよね？」

「……でしようね」

つまり、今現在、完全に北海のシーレーンは閉鎖されているという事だ。

「皆不安そうでした。近々大規模な出撃があるんじゃないかって」

「……それでもアイスは食べるんですね」

「そのくらい肝が据わってないとウィッチなんてできないって事だよ、ハギちゃん」

そういいながら伊予がぱくり、とアイスを頬張る。成程、肝が据わっている。

「伊予ほど凶太くないんです、あたし。こう見えて繊細ですから」  
「は」

「……だから鼻で笑うのは止めてください、ジェシー」

伊予のいう事は概ね合っている。不安だろうが何だろうが、命令があれば一秒でも速く空に上がり、一匹でも多くのネウロイを落とすのが航空ウィッチの使命だ。噂程度で動じていては、空に上がる前に神経が参ってしまう。

「シノ、繊細という言葉の意味を理解しているのか？それとも扶桑のジョークか？」

「失礼ですねフラン。扶桑では真冬の甲板の上で上半身裸で体を布でこすったり、扶桑刀や拳一つで大型ネウロイを葬り去ったりするのが普通ですから。繊細なあたしには出来ません」

「……イヨもそうなのか？」

若干引いた顔を浮かべるフランを見、伊予が慌てて口を開く。

「変な事言わないでくださいハギちゃん。扶桑のウィッチが誤解されます」

「嘘はついてませんよ？」

「それは……そうですけど……いや、でもやっぱりその基準は……」

坂本、若本、西沢、菅野。

海軍の先輩達だけでも思い当たるウィッチが多すぎる。

しかもそう言うウィッチに限って扶桑はおろか欧州でもそれなりに名が知れている。

一応補足するのなら、扶桑でも近接戦闘はあくまで非常時の最終手段であり、訓練でも実戦でも極力避けるように、という勧告は何度も出ている。

ただ、一部のウィッチはその非常時や最終手段に至るまでの判断が極めて緩いようで、倒せば官軍とばかりに隙さえあればネウロイを相手にばっさばっさと斬ったり殴ったりしている。

扶桑のイメージが一部の特殊すぎるウィッチ達のせいで斜め上の方向で定着しつつあるのは、同郷のウィッチとしては甚だ遺憾なのである。

何であの人たちは揃いも揃って。

「それに、坂本少佐がスカウトしてきた宮藤軍曹なんて、初飛行で中型ネウロイを共同撃墜したそうですから」

「初飛行？初撃の間違いだろう？」

思わず聞き返すフラン。自分が初めて飛んだ時など、いきなり垂直に飛び上がって数メートルで地面に落ちた。

程度の差はあれど、初飛行でまともに飛べるウィッチなど滅多にいないものではない。

「あたしもそう思いました。でも、若……あたしの長機が何度読み返しても報告書には確かに初飛行と書いてあったらしいです」

普通のウィッチの間では、初めての出撃でさえ、飛べれば御の字というのが常識である。

仮に飛びたてたとしても、あのエーリカ・ハルトマン中尉ですら、初めての实战では僚機のロスマン曹長をネウロイと誤認して逃げ回っていたくらいだ。ましてや、初飛行初撃墜など、初めて自動車に乗った人がそのままフリーで優勝するようなレベルの出来事で、信じる信じないという次元の話ではない。

「いつそここまで飛んでこないですかね、宮藤軍曹」

「無茶言わないで下さい。そんな子には見えませんでしたよ」

信乃の言葉に伊予があ、と溜息をつく。これ以上扶桑のイメージをおかしくされても困る。

報告書の誤表記の可能性もあるし、そのせいで面白おかしく話が盛られている可能性も否定出来ない。それに、噂の元が徹子だと言うのも、信乃をからかうために嘘をついたのでは、と思わせる要因の一つである。

それに、信乃は不在だったが、伊予は坂本少佐と共に扶桑へ戻る宮藤軍曹を空母までエスコートした事がある。

信乃がどういう人物像を思い描いているのかは知らないが、とても初飛行で初撃墜を上げるような雰囲気の子ではない。むしろ小柄で可愛い、ふわっととした笑顔が印象的な少女だった。

後、やたらと自分の胸を見ていたのはよく覚えている。信乃同様、自分の胸が小さいことを気にしていたのだろうか。

「馬鹿みたい。そんなウィッチがいる訳無いわ」

ジェシカが肩をすくめて口を開く。

「今起きている問題は、今ここにいる私達でどうにかするしかない。そして、ブリタニアの新聞の一面を私の大活躍で飾る。今できるのはそれくらいでしょ?」

「最後が余計ですが、まあ、そうですね」

ジェシカらしい言葉に、信乃が苦笑を浮かべる。

「どうにかできると思いますか?」

伊予の言葉に薄い胸を張るジェシカ。

「できるわよ。私もいる、シノもいる。あんたもいるし、ハルトマン中尉の秘密道具もある。いざとなればフランもいるし、どこに悩む要素

があるっていうのよ」

「そうだな。その通りだ」

背後から響く声と、ふわり、と漂う煙草のにおい。

「……前言撤回。ここにあったわ、悩む要素」

「失礼な奴だ。どうやら目上の者に対する口の利き方を知らないに見える」

「私の方が階級は上ですけど。ビューリング少尉」

「ならば先輩だ。ブリタニア空軍はこうも軍紀が緩んでいるのか、嘆かわしい」

「その元凶の大半のくせに……」

どかり、と、信乃とジェシカの間は無理やり座るビューリング。

「狭い。また尻が大きくなったな、ジェシカ」

「何でビューリング先輩までそんな事知ってるんですか!?!」

「ジェシー、やっぱり……」

「違……違うわよ!!今のは無し!!無しだからね、シノ!!」

H M Wのエース、油断して尻が太る。

タイムズやガーディアン誌に乗る事は無いだろうが、タブロイド紙なら面白おかしく掻き立てそうな内容ではある。

足を組み、まるでそこに最初から座っていたかのような遠慮のない仕草で、隣に座るジェシカに口を開く。

「何故私のコーヒーがない。後灰皿も」

「取りに行けばいいじゃないですか」

「私はもう座ってしまった」

「私も座ってます」

「何故三人も座っている。ここは二人掛けだ」

「……えと……あたし、立ちます?」

即座に危機を察知した信乃が立ち上がろうとするが、その肩をビューリングがぐい、と掴む。

「まあ座っている。お前のよこした煙草、中々美味かったぞ」

「いえ、コーヒーと灰皿を……」

「見ろジェシカ。これが理想的な後輩の態度だ」

しまった。変なのに目をつけられた。

信乃の後悔よりも先に、ジェシカがああもう!!と叫んで立ち上がる。

「早くしろ。灰が落ちる」

「早速煙草に火をつけようとしなくてください!!全く!!全くもう!!」

肩を怒らせながら小走りにカウンターへと向かうジェシカ。当たり前のように空いた席に体をずらしながら、やれやれ、とビューリングが肩をすくめる。

「ええと、ビューリング少尉……」

「ビューリングでいい。私相手に階級は抜きだ。信乃、だったか？」

「あ。はい……」

ふむ、と信乃を見つめて腕を組む。そして、一言。

「……よく敵の動きに対応していた。もつと無鉄砲なタイプかと思っていたが、准尉の肩書に嘘はないな」

「へ?あ、はい……ありがとうございます……?」

目を丸くする信乃。

恐らく、先日の護衛の時の話だろう。

言動や雰囲気から勝手に若のようなタイプだと思っていたが、若はこんな風に褒めてはくれない。

根が単純な信乃の好感度がたった一言で一気に跳ね上がる。

何ですか、思ってたよりもずっと良い人じゃないですか。

「後は、伊予だったか？」

「は、はいっ!」

唐突に名前を呼ばれてびっくり、と伊予が返事を返す。

「狙撃手の目で周囲を見すぎだ。部隊を率いるのなら、一点よりも全体を見る。ウィッチとしてなら上出来だが、指揮官としてはまだ成長の余地があるな」

「……はいっ!!」

その言葉に伊予が頷く。

ビューリングの言う通り、どうしても戦場を見る際には狙えそうな敵を目で追ってしまう傾向にある。視野を広くしろというのは美枝



にも、そして、徹子や信乃からも指摘されている。

だが、それが『狙撃手の目』という表現はわかりやすい。漠然としていた癖の正体がわかったような、そんな目から鱗が落ちたような気分だ。

「次から私も九十九式を持っていいのかな……」

「それもいいかもな。後は、フラン」

「……はい」

二人への言葉から、何を言われるのか不安気な表情を浮かべるフラン。

先日の戦いでは気負いのせいもあり、思ったように動けなかったという自覚もある。おまけに意識まで失った。厳しい言葉を覚悟してぎゅ、と拳を握る。

しかし。

「自分の悪いところをきちんと理解しているようだが、消極的にならなくていい。もっと回りを信じる。お前くらいの腕があれば、空ではふてぶてしいくらいが丁度いい」

そういつて笑みを浮かべるビューリング。

思いもがけない言葉にフランが目丸くする。

「……ありがとうございます!!」

「持ってきましたよ先輩。ほら。ちよつと脇に避けてください」

「……お前は相変わらずだな。ジェシー」

「は？何がです？」

どん、と乱暴に灰皿とコーヒーの入ったカップをビューリングの前に置き、ぐいぐいと自分のスペースを確保すべくソファのビューリングを追いやるジェシカ。

「乱暴なのはよくないですジェシー。あとお尻が大きいです」

「先輩にはもつと敬意を払うべきだと思いますよ、ジェシカさん」

「こないだ先輩に対して失礼な奴だ」

「ちよ……何を吹き込んだんですか先輩!？」

「率直な感想を述べたまでだ」

席を外したほんのわずかな間に何故か籠絡されている仲間たちを

愕然とした表情で見つめるジェシカ。

……騙されてる。この子達完全に騙されてる。

ビューリングは問題児であると同時に、非常に魅力的な人物でもある。忌避している者も多いが、同時に慕っている者も多い。

噂ではあの『扶桑海の巴御前』ですら落としたと言うが、流石にそれは噂話だろう。

「……薄い。リベリアンテイストは私の口に合わない」と知ってるだろう」

その言葉に完全に言い返す気力を失うジェシカ。代わりに頭を抱え、はあ、と思いい切り深いため息を吐き出した。

1900 ウエストハムネット基地 第一格納庫

ウエストハムネット基地のハンガーは近いうちに行われるであろう作戦に備え、整備兵たちがせわしなく動き回っていた。

「おいピーター!! 『ジャグ』が優先だ!! 『ムスタング』は後に回せ!!」  
整備兵長らしき男が受領したばかりのP-51を整備しようとしていた若い整備兵の背に向け怒鳴る。

「久々の『ウルフパック』だ!! ジャグを揃えろ!!」

「扶桑とブリタニアの奴はどうしますか!?!」

他の整備兵が尋ねる。

「おい、タケ!! お前スピットいけるよな!?!」

「501じゃリネット曹長のユニット任せられてたの知ってますよね!?!」

先日信乃を誘導した整備兵が整備兵長に向かって怒鳴り返す。

整備中のハンガーにはあちこちから響く機材の音のせいで、大声を張り上げなければ声が相手に届かない。

誰も怒って無くともまるで怒号が飛び交っているようなこの場所は、まさに整備兵達の戦場なのだ。

「扶桑のユニットとスピットは任せた!! おいマーティ、お前も手伝ってやれ!!」

そういつて尋ねてきた整備兵の背を叩いて送り出す。

「あっちはどうします!?!」

「あのお嬢ちゃんのはやらなくていい!!自分でやるんだとよ!!」

そう言つて整備兵長が肩を竦める。

彼が501JFWで整備を担当していたシャーロット・E・イェーガー大尉もまた、整備兵にそうそう簡単にユニットをいじらせない事で有名だった。整備はほぼ自分でこなすし、その腕は整備兵顔負けだ。

それでもやむを得ない事情があった時、その独自のチューニングを施した機体に触ることを許されていたのは、ストライカーユニットを知り尽くした整備兵長か、その隣に並ぶ最古参の整備兵だけだった。「……しかし、いったい何をしてるんでしようねえ?」

「さあな。オレ達や整備兵だ。科学者の考えることなんざさっぱり見当がつかねえよ」

肩をすくめる整備兵の視線の先で、ウルスラが一機のストライカーユニットをいじっている。いくつかの器具を取り付けているようだが、どれも整備兵たちにはなじみのないものだ。

流石に少女一人ではしんどいだろうと、整備兵を一人つけようと申し入れても丁寧に断られた。

そしてそのまま数時間、休みなしでずっと作業に没頭している。

「おおい!!誰だこのM型整備した奴!!魔導圧縮器の設定がD型になつてんぞ!!」

やれやれ、と肩をすくめた整備兵長がウルスラから目をそらし、力をやらかした整備兵にむかって雷を落とすべく、肩をいからせ並んだストライカーユニットの方へと向かっていった。

「お疲れねー、ウルスラ」

「カフェオレはそのこの机の上に。後そのファイルを取ってもらえないでしょうか?」

かけられた声に顔を上げず、ウルスラが答える。

「ソーリー、カフェオレじゃなくてコーラしかないね。後、そのくらい自分でやるべきねー」

その言葉にウルスラの手が止まる。

油のついた手を白衣で拭いながら顔を上げると、そこには予想とは

違った、だが、よく見知った顔が笑みを浮かべていた。

「相変わらず、集中していると周りが見えなくなるみたいね。よくこんな五月蠅いところで集中できるねー」

そう言っただけで湯気の立つカップを机に置くオヘア。

書類を取る代わりに手近な椅子を引っ張って、ウルスラの声が届くすぐ隣の位置に腰掛ける。

喧騒から少し離れたハンガールの隅で、怒号のような整備兵の声もここなら些かは音量が下がる。しかし、それでも耳障りになるくらいにはうるさい場所だ。

……懐かしい。

ウルスラの脳裏に最初によぎったのは、そんな感情だった。

そう。何年も前。あの寒いを通り越して痛みすら感じるスオムスの薄暗いハンガーで、時間を見つけては実験や研究に明け暮れていた日々。

仲間たちはめったに顔を出すことはなかったが、そんな中でオヘアは時折顔を見せていた。

時折コーヒーや菓子などの差し入れを持って。

「……わざわざこんな五月蠅いところに来るなんて、何か用ですか？」

あの時と同様、そっけなく尋ねるウルスラに、オヘアもあの時と同様に返事を返す。

「別にないねー」

「……そうですか」

あの時と同じように作業に戻ろうとするウルスラに、オヘアが一言。

「仲間と会うのに、理由なんて必要ないね」

「……」

ウルスラがちらり、と視線だけをオヘアに送る。

「戻ってきたらウルスラがいて驚いたね。一体どんな魔法を使ったね」

ウルスラが所属するカールスラント技術省の拠点は新カールスラントにある。時折手紙のやり取りがある際も、その消印は南米の新

カールスラントの消印が押されていた。

「……新型ユニットの実地訓練のためにベルギカに滞在していたので」

ベルギカからブリタニアのウエストハムネット基地までは、ストライカーを使えば半日もかからない。

ウルスラのもとにウエストハムネットの西部方面統合軍から507JFW経由で人型ネウロイと思わしきネウロイの報告が入ったからの判断は早かった。

一応ウルスラは未だ507JFWに籍を置いていることになっている。

今は507で地上勤務に従事しているかつての仲間からその報を受けて直ぐ、原隊に一時的に復帰するという書類の手続きをハンナ・フリーネ少佐に押し付け（いきなり押し付けられたハンナは目を白黒させていた）、ほぼ夜通し必要な機材や道具を準備し、夜明けと共にドーバー海峡を渡ってウエストハムネットに到着したが、行き違いで輸送機は出発してしまった。

「……あと少し、早く着いていれば護衛のウィッチや、オヘア達を止められたのですが……」

視線を目の前に戻し、ぽつり、とウルスラが呟く。

「ひよつとして心配してくれてたね？」

『人型』への対策を試すチャンスをおヘアに邪魔されなくなかったんです」

「やっぱりウルスラはウルスラねー」

皮肉めいた言葉にも、おヘアの顔は随分と穏やかだ。まるでこういうやり取りすら懐かしい、と言わんばかりに、二人の口元には笑みすら浮かんでいる。

「あれから何年ね？」

その言葉が何を指しているのか。少しだけ重みを増した気がするおヘアの声から察する。

「5年」

「その間、ずっと準備してきたね？」

「まさか。やるべきことは山積みです。こればかりにかまけている暇はありません」

「それでも、やめなかったね」

「やっぱりウルスラは凄いねー、と、あの頃と同じ能天気な口調で言うオヘアにウルスラはぽつり、と一言。

「……やられっぱなしは嫌ですから」

2年前。

1943年に502が人型と接触したと聞いた時は、新カールスラントからすぐにでも飛んできたかった。

1年前もそうだ。人型と接触した、姉の友人でもある扶桑のウィッチの救助が遅れていたら、一体どうなっていたかのか。

ウルスラの脳裏に様々な光景がよぎる。

人型に操られ、仲間を攻撃したハルカの感情の無い瞳、痛々しい針に貫かれ、命の瀬戸際にあっても自分たちの救助を信じた智子とビューリング。

皆が生還できたのは皆の幸運が紙一重で重なった結果。少しでも行動がかみ合わなければ、ウルスラはあの時、生涯の友になるはずだった仲間たちを永遠に失う事になっていた。

いつまでも幸運に頼るのは、ウルスラの、技術者としての矜持がそれを許さない。

「そうね。ミーもそんなの、まっぴらごめんね!!」

「がたん、と目の前で音がする。椅子に座っていたオヘアが勢いよく立ち上がる。

「人でも牛でもトナカイでもネウロイでも、舐められたままじゃ本当にただの『いらん子』ね!!」

「思わずくすり、と笑みを浮かべるウルスラ。

「そう、私たちはずっとそうしてきた。

元居た部隊から文字通り『いらん子』として北の果てに放りだされても、侮られても舐められても、それだけで終わらなかつたからこそ、今の自分があり、そして、オヘアがある。

「そう。自分は姉のお荷物なんかじゃない。誰からも必要とされて

いない、哀れな出来損ないなんかじゃない。

そう気づかせてくれたのが、あの『義勇独立飛行中隊』だ。

「……はい」

「つれないねー。そこはもっと乗ってほしかったねー」

オヘアの言葉に肩をすくめる。一応これでも随分社交的になったのだ。久々に会った姉が驚愕するくらいには。

「……でも、オヘアは戦いに参加できません」

「そこをどうにかできないねー？ シールドを出す機械とか、魔力を100倍にする機械とか」

「無理です」

「じゃあ応援するしかないです!! ファイツ!! ファイツ!! ウルストラ!!」

「オヘア」

「ファイティングスピリットが足りないですか?」

「五月蠅いです」

「了解したね」

ウルストラの言葉に黙って椅子に座りなおすオヘア。

「……思い出したね。ウルストラはいつでもそんな感じだったねー」

「大体みんなそんな感じですよ」

意味もなく騒がしいオヘアに対してはビュールリングが時折絡む以外は割と皆そんな対応だった。

「……ビュールリングは?」

「後輩で遊んでるね」

「後輩……ああ、あの子ですか」

後輩というのはあの銀髪の子だろう。

明るく負けん気が強そうで、何よりもいじりがいがありそうなあの雰囲気は、確かにビュールリングが好みそうな感じだ。

「……あの子、トモコに少し似てると思うね」

内緒話をするような口調でオヘアが呟く。思わずウルストラの口元に苦笑が浮かぶ。

「……わからなくはないです」

「後でトモコに言いつけるね。一緒に旅行に行く約束をほったらかして、自分の面影がある部下に手を出してらって」

「いいですね。ついでに口止めの扶桑のユニットを送ってもらいましょう」

「ミーは扶桑のお酒を送ってもらうねー」

もしそれが出来るのであれば、智子の事だ。扶桑刀を片手に殴り込んできそうだが、それはそれで楽しそうだ。

『アンタたち、好き勝手言ってくれるじゃない!! あ、あと私とビュリーングはそんな関係じゃないから!! 誤解しないでよね!!』

いかにも智子が言い出しそうな台詞に思わず二人して笑みを浮かべる。

どうせ3人も集まったのだ。後1人2人増えても変わらない。

「そうですね」

「そうねー」

一瞬の沈黙。

「……無理は禁物ね、ウルスラ」

「……オヘアも。あまり変な事は考えないでくださいね」

周囲の喧騒の中、黙々とウルスラが手を動かす。その様子を、飽きることなくずっとオヘアは見つめていた。



## 2-15. DOLLS

0815 ブリタニア ウェストハムネット基地

「……モスキートだ」

「モスキートですね」

「モスキートですねえ」

『そのストライカーユニット』を取り囲んだウィッチ達が声を上げる。「ちよつと!!これうちのモスキートじゃない!!何でこんなところにあるの!？」

「事情を話して一機譲ってもらいました。相当難しい顔をされましたが」

「ジェシーは二つ返事で了承されたんですね？」

「ぶつわよ、シノ」

にまにまと笑みを浮かべる信乃を横目にジェシカがため息を吐き出す。

デ・ビバランダー・モスキート。

ブリタニアの主力爆撃ユニットで、最高速度はブリタニアの最新ユニットであるスピットファイアを上回るという傑作ユニットだ。さらに拡張性も高く、戦闘用や偵察用等、様々な用途に換装されたユニットが存在する。これはそのうちの偵察型だ。

「装置を取り付けるのに金属では時間がかかります。これなら私も短時間で改造できます」

その足元には様々な工具のほかに、削られたような木屑が散乱している。

そう。モスキートにはもう一つ、最大の特徴がある。

「……本当に木なんですね、モスキートって」

そう。デ・ビバランダー・モスキート。またの名を『木製の奇跡』。兵器用の素材としては時代遅れとされていた木をエンジン以外の大部分に使用する事により、機体の軽量化と魔力伝導率を高め、驚異的な速度を叩き出しただけではなく、軍需品である金属の節約や、仕事を失っていた家具職人などの手を借りることでの短時間での量産

を可能にするなど、様々なメリットを持つ機材。

まさに『奇跡のストライカーユニット』である。

加えてこのように加工もしやすい。試作ユニットのモックアップ等も自作しているウルスラにとって、このくらいの改造は朝飯前……作業は夜中だったので夕食前といったところだ。

「これがその『秘密兵器』ですか」

ストライカーユニットの尾翼部分の手前から大きく伸びる金属製のアンテナ。そして、横から延びる配線の先には片手で持てるサイズの器機とヘッドセットが伸びている。

「はい。これを使えば『人型』の位置を特定できます」

「仕組みを聞いても？私の体をいじくった事と何か関係が」

フランの問いにこくり、と頷くウルスラ。

「ネウロイが放つ周波数の魔法力を感知しているんです」

それは、先日フランの魔力に交じっていたネウロイの放つ魔力と同じものだ。

「この機械は空気中に漂う魔力の強さと方向を探るものです。研究所用に作られているものを私が小型化し、感度を強化しました」

実はその過程でウルスラは特許を幾つか取得していたのだが、目的はそれではない。すべては自分の仮定に基づいた『人型』の対策の為だ。

「このユニットに取り付けたものと同じものがベルギカにもあるので、向こうでも連絡を取って確認したところ、向こうでも同様の周波数の魔力が感知されました」

その調査は昨日の午後に行われた。

夕方前にはベルギカのカールスラント基地から送られてきた情報で、自らの仮説の穴を完全に埋めたウルスラは、それから夜通しモスキートの改造を行った。

「魔力は一定方向ではなく、『人型』か、その『拠点』を中心に全方向に放たれているので、その発信源をたどれば『人型』か『拠点』にたどり着くはずです」

そう言い切るウルスラ。つまり、こちらは『人型』を完全に補足出

来るだけではなく、その『人型』が『拠点』にいれば、『拠点』そのものを補足できるという事だ。

「私も行きたかった……」

「『人型』を倒したらまたすぐにでも飛べますよ」

「解つてる。私とその『人型』を倒したかったんだ」

その気持ちはわからないでもない。ウィッチたるもの、自らの雪辱は自らの手で果たす。

せめても見送りに来てくれた事はあるがたいが、内心悔しくて仕方がないのだろう。

「シノ、しくじるなよ」

「解ってますよ。フランもおとなしく待っていて下さいね」

「じつとしてられる気がしない」

その言葉にジェシカや伊予も思わず苦笑を浮かべる。

「いいか。まずいと思つたらすぐに引き返せ。こちらはいつでも援護できるようにしておく」

そう言つたのはフライトジャケット姿のゼムケだ。背後にはおそらく自分用なのだろう。白と灰色の航空迷彩に塗られたP-47Dがケージに格納されている。

「いざとなつたら私自ら救援に向かう。大船に乗つたつもりでいろ」

「……じつとしてられないのは同じなんですネ」

ぽつり、と伊予が呟く。

この場にいるウィッチは知らないかもしれないが、もともとゼムケも司令官ではなく一人のエースウィッチである。バルバロッサ作戦に参加した際は、JG52とも共闘し、現502JFWの司令であるグンデユラ・ラル少佐とも親交を持っている。

最も、その縁のせいで、不思議な動きをしている書類の後始末やら、おかしな方向へ向かう輸送機を黙認させられているのだが、最前線の機密情報という名のリターンも少なくない。今回の『人型』の件に関しても、少なくない情報の提供と、いざというときに援軍を送るといふ『密約』を取り付けることが出来たのも、ひとえに二人の『友情』があつてこそだ。

「あのP-47D。今朝からうきうきで整備してました。私の横で」  
そう呟くのはウルスラ。

「成程……気になったでしょうね、ハルトマン中尉」  
「ウルスラで」

その言葉に皆がウルスラへと目を向ける。

「私も、階級で呼ばれるのは余り慣れていませんので。空の上ではウルスラと呼んでください」

「……はい、わかりました。宜しくお願いしますね、ウルスラさん」  
にこり、とほほ笑む伊予。それにつられるように、ウルスラも口元に薄い笑みを浮かべた。

「こちらこそ。私は皆さんの誘導に徹しますので、そのほかの事はお任せしてしまうと思いますが……」

「オーケー、解ってるわよ」

ジェシカがつつ、と笑みを浮かべる。

「そのために私達がいるのよ」

今回の任務で最も核となるのは、武器を持たないウルスラである。装置を両手で操作する必要がある以上、必然的に残りの三人はウルスラを守ることになる。

いざという時は、ウルスラを真つ先に離脱させる必要があり、そのために残りの3人が盾になるという状況も想定しなくてはいけない。「それと、私の事もジェシカでいいわ。階級付けなんて堅苦しいの、私のチームには不要よ」

「しれつと自分のチームにしちゃいましたよこの人……」

苦笑を浮かべて信乃が肩を竦める。まあ、今回の任務では一番階級の高いジェシカがウイングリーダーとなるので間違いではないが、それを即席の小隊で堂々と言い切るのは中々凄い。

「まあ、そういう事です。改めて、宜しく願います、ウルスラ」  
「はい、よろしく願います。ジェシカさん、シノさん、イヨさん」  
そう言っただけな微笑を浮かべるウルスラに皆が頷く。

そうこうしているうちに三人のユニットも運ばれてきた。

離脱を目的とした高速型であるウルスラのモスキートとは異なり、

3人の機材は空中戦も見越しているため普段通りの機材だ。

J E—Jの識別コードの入ったジェシカのスピットファイアMk—Vに、モスグリーンに塗装された伊予の紫電改。白を基調とした信乃の零式54型、それに、チューンが終わったばかりのウルスラのモスキート。

整備兵達の手によって次々と滑走路に運び込まれていくユニットには増槽が取り付けられ、長距離の偵察にも対応できるように整備が施されている。

先日とは異なり、滑走路に報道陣の姿はない。極秘任務という事もあり報道管制がしかれているのだ。

「それでは、ジョンソン大尉。頼むぞ」

ゼムケの言葉にジェシカが頷く。

「時刻を合わせるわ。現時刻は0832、出発は0845よ」

その言葉に皆がそれぞれの懐中時計を取り出す。

海の上の任務では、飛行した時間が自分の位置を割り出す貴重な情報となる。一秒の狂いが自分の位置を失わせる。

海の上には慣れている伊予や信乃以上に、ジェシカとウルスラが真剣な顔で時報の音に時計を合わせた。

「……行くわよ。搭乗開始!!」

「了解!!」

時計の長針が9時方向を指した瞬間、ジェシカの合図と共に4人が自分のストラライカーへと向かう。

「機体チェック」

手慣れた動作でユニットに足を通した信乃が整備兵に伝える。てきぱきとした動作で魔導エンジンや機体の動きをチェックしていく。

「ん、いいですね。異常なし。いつでも行けます」

「……萩谷飛曹長」

その声に顔を向けると、初めてこの基地に降り立った時に世話をしてくれた整備兵が笑っている。手にしていたものを信乃に向けて放り投げるので、慌てて信乃がそれをキャッチし、そして、思わず破顔する。

「キャラメルじゃないですか。いいんですか？」

「食べきる前に落ちないでくださいよ」

封の空いていないキャラメルをポケットに忍ばせ、信乃が親指を立てる。恐らく、整備兵なりの願掛けなのだろう。任務の間に時折つまんでも、箱一つ分のキャラメルを作戦行動中に食べきるのは難しい。

残りは戻ってから食べる。そういう意味だ。

「了解です。戻ったらハグしてあげましょうか？」

「501なら懲罰房行きですね」

冗談めかして言う信乃と、苦笑を浮かべる整備兵。

『さあ、行くわよ皆。ブリタニア一番、J E—J、出るわ!!』

『扶桑一番、藤田伊代中尉、行きます!!』

『カールスラント1番、ウルスラ・ハルトマン、発進します!!』

魔導無線に次々と飛び込んでくる仲間の声。

「こちら扶桑二番、萩谷信乃、出ます!!」

遅れじとばかりに魔導エンジンに魔力を込め、零式54型の金星エンジンが回転数を上げていく。

ストツパーが外されると同時にユニットが滑走路を飛び出し、軽量化された零式と信乃の体がするり、と宙を舞う。

滑走路が面から線へ、高度を上げるにつれどんどん小さくなり、やがて目の前には厚い雲が広がった。

「雲の上まで出ますか？」

「そうね、一旦抜けるわ」

伊予の言葉にジェシカが答える。雨雲を抜けるとそこには青い空が広がっており、久方ぶりの太陽がきらきらと、雨に濡れたストライカーユニットを照らす。

「ウルスラ、機械の調子は？」

「良好です」

「ウルスラが一番、二番は私、シノは3、イヨは4」

その言葉に4人がさまざま編隊を組みなおす。ジェシカが下がり、後方にいたウルスラが一番機の位置へ、信乃と伊予がそれぞれ二人の左後ろに並ぶようにつける。

『こちらウエストハムネット基地管制』

『こちらカールスラント1番。これより作戦行動に移ります。どうぞ』

『了解……お気をつけて、カールスラント1番』

管制の最後の交信が途切れ、皆がヘッドセットを首から頭にかけてなおしたウルスラへと目を向ける。

「……このまま12時方向を保ちます」

「この先って、バルトランド？隠れるところなんてあるのかしらね？」  
ジェシカが眉を顰める。

このままの進路を保つと、北海を突っ切ってバルトランドになってしまう。ネウロイが確認されていない地域だが、やはりウルスラの言う通り、擬態しているのだろうか。

「私の知っている『人型』の『拠点』は主に地中に隠れていました」  
「成る程。敵は隠れ放題、目視では見つけ辛い。その機械が無いとそう簡単に見つけられませんね」

関心したように呟きながら、信乃がぱくり、とキャラメルを一口口に放り込む。

「あれ？そのキャラメル、ハギちゃんも貰ったんですか？」

その様子を見ていた伊予が尋ねる。

伊予もですか？と問い返す信乃にジェシカが口を開く。

「この基地の風習らしいわよ。なんでも、もらい損ねたウィッチが一度未帰還になったって。それから必ず渡すらしいわ」

「それ、聞いたんですか？」

「私にプレゼントを送ってもデートなんかしないわよ、っていったら懇切丁寧に教えてくれたわ」

そういつて肩を竦めるジェシカ。流石ブリタニアの有名人。最も、性格を知っていてなお彼女にデートを申し込むのは中々の度胸の持ち主か変わり者か。

「何か失礼な事考えてない？」

「いえ、別に」

信乃が肩を竦めながら太陽を中心に空を見上げる。

軽口を叩きながらも周囲の警戒は怠らない。話に夢中になって警戒を怠る程度のウィッチであれば、少なくともこんな作戦に参加させることは出来ないからだ。

ジェシカは口を動かしながらも視線を一点に絞らず周囲を見渡しているし、伊予も雲の隙間から下の海の様子を探ろうとしている。ウルスラもヘッドセットに耳を当て、もう片方の手で握った機械の計器の動きに神経を尖らせている。

そして。

「……妙です」

ぽつり、と呟いたのはウルスラ。その言葉に皆の緊張感が一気に高まる。

「近い……まだバルトランドまで距離はあるのに……」

「海の上って事？」

ジェシカの言葉にウルスラがはい、と呟く。

「敵の『人型』じゃない？」

「その可能性もありますが、『人型』ならもつと動きが速いはず……」

その言葉に皆が言葉を噤む。ここからの判断は長機の仕事だ。

「……後どのくらい？」

「11時方向、距離は約50000」

「近いわね……」

ジェシカが呻く。この速度なら10分程で到達してしまう。

「どうします？」

「……シノ、引き続き上を警戒。伊予は下を。600秒後、周囲に敵影がなければ雲を降りるわ。『人型』と交戦になったら無理せず一旦離脱。いいわね？」

「了解」

ジェシカの矢継ぎ早な指示に皆が頷く。懐中時計を取り出し、手にした機関銃のセーフティが解除されているか確認する。

「……なんか、嫌な感じがします」

ぽつり、と伊予が呟く。

「こういうの、鬼が出るか、蛇がでるか。っていうんですかね」



「扶桑のことわざですか？あまり良い意味じゃなさそうですが」  
「まあ、概ねそうですね」

ウルスラの言葉に信乃が答える。鬼も蛇も、出来ることなら出てほしくはない。

「後100」

ジェシカ言葉に皆がさらに警戒に意識を集中する。

「上は？」

「いません。太陽の中にも隠れてはいません」

「下」

「駄目です、雲が厚くなって……」

「もう下はいいわ。伊予、周りを見て」

「了解です」

ジェシカ言葉に伊予が頷く。

「目標、およそ30キロで我々と同方向に前進中」

「……」

ウルスラの言葉にジェシカが一瞬思案気な表情を浮かべる。

もしネウロイが目の前にいるなら、視認出来ていても良い距離だ。たとえ小型でも、ジェシカの視力なら太陽に反射する僅かな光も見逃すはずはない。

「……時間が無い。あと10秒で降りるわ」

その言葉に皆の表情が強張る。懐中時計をしまい、いつでも発砲できるようそれぞれが武器を構える。雲を抜けたら目の前にネウロイという事態も想定できる。否、可能性は極めて高い。

「あと5秒!!いくわよ、3、2、降下!!」

ジェシカのスピットファイアが一気に高度を下げる。それに続くように、残りの3機も雲の海に向かって飛び込んでいった。

「っ!!」

一瞬の白い光が灰に染まり、そして、視界が開ける。

冷たい雨を降らせる雨雲に覆われた冬の北海は、青というより紺、黒に近いような深く暗い色をたたえ、白い波が細く長く、幾重にも重なり流れていく。

半分雲に身を隠すように編隊を組みなおし、周囲に目を送る。しかし、空には人型はおろか、ネウロイの姿すら見えない。

ウルスラの言葉が正しいのであれば、『人型』は目の前をのろのろと飛んでいるはずなのだが。

「……え……っ」

ぽつり、と呟いた声が皆の魔導無線に届く。

「イヨっ？どうしたの？」

「……」

「伊予？」

「下に……でも……あれって……」

「下ですって!？」

その言葉にジェシカと信乃が機銃を構える。しかし。

「……何よ……あれ？」

その光景に、思わず息を飲むジェシカ。

皆も声には出さないが、同じ気持ちだ。

「船……？」

下、遙か下方、北海の海上。

一筋の航跡を残し、一隻の船が目の前を進んでいる。

「リベリオンの駆逐艦……いえ、あれは……」

ぽつり、と信乃が呟く。

影のように見えるシルエットは扶桑の特型駆逐艦より一回り小さい。リベリオンの護衛駆逐艦のようなシルエットだが、艦橋のあたりが何か巨大なものに押しつぶされたようになっていいる。

「あれって、まさか……」

ぽつり、と呟く信乃。

近づくとつれ、その正体が明らかになる。

「……っ……」

ウルスラが息を飲む。ウルスラだけではない。その場にいる皆が、信じられない、といった表情を浮かべる。

まるで船に産み付けられた寄生虫の卵のように乗っている、巨大な卵のような造形をした球状の『ネウロイ』。

艦橋を押しつぶして駆逐艦の上甲板の中央に居座り、下部からは幾筋もの触手のようなものが真下の駆逐艦に突き刺さっている。

後数十年技術が発達すれば、ウルスラであればその形が細菌に感染するファージウイルスの一種に酷似している事に気が付いただろうが、現状ではそれは生物と機械が合わさったような『異形』の姿であるとは思えない。

駆逐艦の上甲板から上はネウロイと同様、黒と赤のハニカム模様に乗まっているが、そこから下は駆逐艦のまま利用し、水に漬かるのを防いでいるようだった。

向こうもこちらを察知したのか、ネウロイ特有の金属がすり合わさるような高い音を立て、ゆっくりと海の上を回頭していく。

「来るわ!!」

ジェシカの言葉に皆が銃を構える。だが、その動きは皆が予想していなかったものだ。

回頭しながら、ゆっくりと卵型の部分が開いていく。

その下から、赤く発色する巨大な宝石のような『それ』が姿を現してく。

「……自分から、コアを露出して……?」

ウルスラがぽつり、と呟く。

そこに現れたのは巨大なコアだった。

「……?」

そして、そのコアの中には、ぽつぽつと、黒い点のようなものがいくつも見える。

それが何なのか、目を凝らした皆が、同時に呻くような声を上げる。

「……っ……!?!」

「……そんな……これって……」

信乃と伊予が同時に口を開く。

「何よ……嘘でしょ……こんなの……」

ジェシカの声が震える。声だけではない。体もだ。

震えで思わず手にした銃を取り落としそうになる感覚は、どんな強大なネウロイと相対した時でも感じたことがない。だが、その感覚は

恐怖ではない。

ネウロイのコアの中に見えた、小さな点のようなもの。

それは。

「人が……ウイツチが……取り込まれて……」

余りに酷い光景に目を見開き、思わず口を押えるウルスラ。

「ウルスラさん!？」

「大丈夫……大丈夫です……」

絞り出すような声でウルスラが呟く。技術者であり一介のエースウイツチでもあるウルスラですら、その光景は直視し難い物だった。

それは、人、人、人。

まるで琥珀の中に取り込まれてしまった虫の死骸のように、リベリオンの制服を着た何人もの少女たちの姿がコアの中から透けて見える。

ウイツチだけではない。輸送機のパイロットなのか、飛行服を着た男の姿も何人か。

10人以上の人間を取りこんだ『それ』は、まるで自慢のコレクションを見せつけるかのようにゆっくりとこちらに向かってくる。

これが、人型の新たな『拠点』。破壊すべき大型ネウロイ。

「……撤退するわ」

ぎり、と歯を食いしばっていたジェシカがぼつり、が呟く。震えの正体は怯えではない。怒りだ。

目の前の光景は、ウイツチへの、否、人類に対しての冒瀆であり、そして、明確な悪意を持った挑発だ。

今すぐにも降下して手にした機銃の引き金を引き、目の前のネウロイをバラバラにしてやりたい。無残な姿を晒されている仲間たちを開放してやりたい。

だが、僅かに理性がその衝動を上回る。自分たちがこいつに取り込まれるわけにはいかない。報告しなければならぬ。そして、確実に倒さなくてはいけない。

「りようかつ……しまった!?!?上……っ!?!?」

「伊予っ!?!?」

背後から響いた伊予と信乃の叫び声に、はっとジェシカが我に返る。

目の前の光景に気を取られすぎたせいだ。周囲の警戒が一瞬緩んだ隙をつき、雲の中から飛び出してきた『それ』が、伊予の体にしがみつく。

『人型』!?!』

ジェシカがとっさにエンジンに魔力を送り、回避行動をとりながら叫ぶ。だが。

「……違う」

ぽつりとつぶやいたのはウルスラ。

「これは、この『人型』は、私の知っているのとは違う……」

「考えるのは後よウルスラ!!今は伊予を助けて離脱つ!!」

「つ!!」

ジェシカの叱責のような叫びにウルスラがきつ、と眉を吊り上げる。

そうだ。惚けている暇はない。ここは研究室じゃない。空の上なのだ。

「この!!伊予を放せつ!!」

一方信乃は、伊予を捕まえたまま降下していく『それ』を追っていた。

一見すると『それ』は、人の形をしているように見えた。

だが、その形状は、それまで欧州に現れていたものとは異なる。

頭部に当たる形状はのつぺりと丸く、胸部や腕は平面パネルのみで構成されており、足に当たる部分はない。代わりに、背骨の脊椎のような、凧の足のような部分が存在するだけだ。

それは精巧にウィッチを模した『人型』ではなかった。

まるで出来ないな、『人形』のようなネウロイドだった。

「イヨ!!」

ジェシカとウルスラも信乃に続き『人形』ネウロイドを追う。

そのまま銃口を構えるが、伊予に覆いかぶさるように抱き着き、こちらに背を向けているため、銃で撃つとそのまま貫通してしまう。

「伊予!!聞こえますか!?!そのネウロイを振りほどいて下さい!!このままじゃ当たります!!」

銃を構えたまま信乃が魔導無線に向けて怒鳴る。

「任せて!!」

ジェシカが信乃の脇をすり抜け、降下したまま銃を構える。

ジェシカの見越し射撃の腕は、ブリタニアでも、否、ウィッチ全体を見ても頭一つ抜けている。

伊予に射線が被らないよう、斜めに滑るように体をしならせ、そして、引き金を引く。

次の瞬間、人型の頭部分が吹き飛び、金属じみた堅い悲鳴と共にネウロイが伊予から離れる。

「シノ!!」

「任せてください!!」

零式54型の金星エンジンに魔力を込め、伊予と『人形』に近づいた信乃が、伊予から離れた『人形』に向け銃を構える。

射撃が苦手な信乃でも、距離としては十分だ。

引き金に手をかけた、その時。

「え……っ?」

信乃が目を見開く。

顔を上げ、『人形』と信乃の間に割り込むように前に出た伊予が、『信乃に向けて』、手にしたS-18ライフルを構える。

「っ!」

額にチリつとした痛みが走る。咄嗟にシールドを張ると、引き金が弾かれるのはほぼ同時。

「シノさんっ!」

「……っ」

信乃が頭を押さえながらも伊予と『人形』の脇をすり抜けて旋回し、そのまま回避行動に移る。

「……迷わず頭を狙って来ましたか、伊予」

飛行服の手袋がぬめる感覚と感じる痛み、そして滲む視界。あと少しシールドを張るタイミングが遅ければ、完全に撃ち抜かれていた。

ぐい、と血を縫うと、少しだけ視界と思考が鮮明になる。  
意識を奪われ、操られる。

成程。こういう事ですか。

血に濡れた髪の間隙から覗く信乃の表情が変わる。

この『人型』、否『人形』は、伊予を使ってあたしを殺させようとしたのだ。

あたしの仲間で、あたしの親友でもある少女の手を使って。  
ぎり、と歯を食いしばる。

現状を認識した信乃の目が冷たい色を帯びる。感情が抜け落ちた様な視線が片目を覆った前髪の間隙から覗く。

その表情は、ネウロイの巢に飛び込んだ時よりも更に冷たく、そして、鋭利な色を帯びている。

許さない。

こいつだけは許さない。

こいつは、あたしと伊予を殺し合わせるつもりだ。

そんなことは、絶対に許さない。

こいつだけは、絶対に。

「イヨさん!!……ジエシカさん、シノさん、イヨさんが!!」

「解ってる!!シノ!!いったん離れて!!」

ジエシカの言葉を待たず、信乃のストライカーユニットの金星魔導エンジンが回転数を一気に上げる。

増槽を落とし、身軽になった体で一旦、伊予と『人形』から距離を開ける。

信乃は旋回を繰り返しつつ伊予と人形から離れようとするが、背後を取った伊予は、信乃に目掛けて淡々と引き金を弾き続ける。

同時に、体にまわりつくチリチリとした感覚も鋭利なものとなり、本能が自らの危機を意識に伝える。

旋回しつつ伊予の攻撃を回避。伊予の狙いは『自動演算』の能力で極めて正確だが、信乃も、『チリチリ』による痛覚に限定した未来予測でそれを寸手で躲し切る。

「っ!!」

何度も視界をふさぐ血を拭い、顔を上げる。治療している余裕はない。

「シノ、迎撃用意!!」

顔を上げると、『人形』と伊予はこちらに攻撃を加えながらも後退していく。そして、その先にはあの『コア』がある。

「させません!!」

「イヨを返しなさいっ!!」

叫び声と同時にジェシカが再度上方から人形に襲い掛かる。

『人形』もそれに対して急降下。ジェシカを振り切るように速度を上げる。

「っ!!」

それを援護するかのように、伊予も『人形』に続く。

一番機を援護する二番機のように、ぴたり、とロツテを組み、ジェシカを振り切ろうと旋回を始める。

「ジェシー!!」

「解ってる!!ウルスラはこの場から退避!!基地に戻って。私とシノは、イヨを救助する!!」

「でも!!」

「ウルスラがいても意味はないの!!それよりも早く!!救援を!!」

「っ!!」

その言葉にウルスラが頷く。モスキートの両足の双発エンジン、計4発のマーリン魔導エンジンが回転数を上げ、その場からウルスラが撤退していく。

援護の無い状況で『人形』に捕まったら終わりだ。周囲に対して注意を向けつつ、全力で基地の方面へと飛び去るウルスラを見送る余裕もなく、ジェシカと信乃は『人形』と伊予を相手にし続ける。

「援護します、ジェシー!!」

ジェシカを追う『人形』と伊予の背後につき、引き金を弾く信乃。

『人形』を狙ったのだが、伊予がその射線軸上に飛び込むように割り込んでくる。

「っ!?!」



思わず引き金から指を放す。

至近弾がすぐ近くをかすめても、伊予はシールドを張ることもせず、信乃の射線を妨害し続ける。

「こいつ……っ!!」

「人質ってことですか……」

ジェシカと信乃が呻く。シールドを張らない状態の伊予を信乃への盾にしつつ、『人形』がジェシカを追いつめる。

何とか振り切ろうとするジェシカだが、スピットファイアでは紫電改に旋回力で劣る。

このままドッグファイトの様相を呈したら、ジェシカが圧倒的に不利だ。

「ジェシー!!上昇してください!!」

「無理よ!!無茶言わないで!!」

高度を取れば仕切りなおせる。だが、この状況で上昇しようとする、敵のいい的になってしまう。

「いいから!!あたしが援護します!!早く!!」

普段とは違い、有無を言わさない信乃の言葉、否、命令にジェシカがぎゅ、と拳を握る。

「……信じてるわよ!!」

次の瞬間、ジェシカが魔法力をマーリンエンジンに叩き込む。回転数を上げ、そのまま体を起こして一気に上昇。

「このおっ!!」

ストライカーを旋回方向の外へ蹴りだし、一気に魔法力を叩き込む。『人形』と伊予の旋回している内側へと飛び込み、『人形』に一瞬だけ肉薄する。

ジェシカに照準を向けるように手を上げていた『人形』が、その動きに一瞬動作が遅れる。

伊予との模擬戦で一度試した、旋回からの急旋回。そのまま一気に『人形』に接近、その隣に並ぶようにすぐさま拳動を立て直し、ぎろりと、そのマネキンのような頭部を睨みつける。

「近くで見ると、不細工な顔ですね」

そう眩き、手にした99式の引き金を弾く。『人形』が避けようと高度を落とすと同時に、背後からちりつとした感覚が背を襲う。

「っ!!」

足元からシールドを張ると同時に、伊予が引き金を弾く。はじかれた勢いで体をひねると、そのまま信乃は逆に伊予の背後にぴたり、とつける。

「アンタの相手はこっちよ!!」

割って入るようにジェシカが『人形』に向けてダイブ。

背後から手にしたM1919の引き金を弾くが、『人形』はそれをすり、とかわす。

「っ!!何よ、イヨの真似でもしてるつもり?」

憎々し気に眩くが、それでも冷静に、ジェシカが再度引き金に手をかける。

旋回方向へ向けての見越し射撃。旋回する人形が銃弾の方向へ飛び込むように見えたが、寸手の所で体を振って回避する。

「シノ、こいつは任せて!!」

「了解です!!」

信乃がそう答え、『人形』に合流しようと信乃に背を向けた伊予を追う。

相変わらず、シールドを張る素振りは見せない。

信乃が伊予を傷つけることが出来ないのを見越したように、こちらを狙う事もせず、旋回しながらジェシカの背後へつけようとしている。

「だったら!!」

伊予を追い越すようにエンジンをふかした直後、零式のフラップを落とし、その先に回り込むように急旋回。

そのまま伊予の脇腹に突っ込むように速度を上げ、その腕を掴む。

「取っ組み合いならあたしの方が上ですよ!!」

そう言い、腕を掴んだまま背後に回り込もうとする信乃。

伊予も感情の無い瞳を大きく見開き、抵抗するように体を振る。

空中でもみ合いバランスを崩した二人の体が、ぐらりと海に向

かつて降下する。伊予はまるで狂ったように反対側の手にしたS—18ライフルの引き金を弾きながら、ライフルを振り回す。

「っ!!」

シールドを張りながら伊予を拘束しようとしていた手を放し、距離を開ける信乃。

「このっ!!」

99式を肩から外し、シールドを張りながら伊予へ再び接近する。銃剣の応用とばかりにその砲身でS—18の銃身を思い切り殴りつけると、伊予の体がぐらりと傾く。

しかし、そのまま体を起こすと、再度信乃に向けて発砲した。その攻撃をシールドで弾く信乃。ほぼゼロ距離での殴り合い。文字通りの肉弾戦である。

それでも、時間を稼げばいい。ジェシカならきつとあの『人形』を……。

そう思っていた矢先、伊予が思わぬ行動に出た。

信乃に背を向けた伊予の紫電改が突然加速したのだ。

突然戦闘を放棄したような挙動に信乃が戸惑うが、すぐにその意図は理解できた。

伊予の向かう先は、あの駆逐艦の上の『コア』だ。

どくん、と信乃の心臓が跳ねる。

まずい。

恐らく、あの『人形』と『コア』の目的は、操ったウィッチをコアの中に取り込むことだ。

信乃とジェシカとの戦闘が不利になると悟ったネウロイは、信乃を振り切り強引に伊予をそのコアの中に取り込もうとしている。

「伊予!!」

手にした機銃を放り投げ、ありつただけの魔力を金星エンジンに注ぎ込んでその背を追う信乃。

過負荷をかけられた魔導エンジンが悲鳴を上げ、限界速度を超えた機体が悲鳴を上げる。

「伊予っ!!」

それでも信乃は速度を上げる。近づいてくる伊予が視線をこちらに向け、腕だけで信乃へ向けて発砲する。

先日の模擬戦と同じ状況だ。だが。

「伊予の……真似をするなあっ!!」

信乃が叫び、シールドを張る。

伊予の中の経験を真似したところで所詮ネウロイはネウロイ。本来の伊予なら相打ちになった戦法に固執したりはしない。

むしろ、あの戦いの後更に研究を重ね、信乃を出し抜くもつと良い一手を思いつくはずだ。

許さない。

信乃が呟く。

伊予に、伊予の真似事をさせようとするネウロイを。

伊予の体が近づいてくる。ストライカーも限界に近い。だが、ひつきりなしに打ち込まれる銃弾を前に、シールドを張ったままでは伊予を捕まえることは出来ない。

「それならっ!!」

ギリギリまで近づき、あと少して伊予の体に手が届く。

そして。

信乃がシールドを解除する。

チリっという感覚が身体に走る。今すぐ防ぐか回避しなければ、伊予の放つ弾がそこを貫く。

だが、『そこ』なら大丈夫。

そこなら致命傷にはならない。一発や二発なら大丈夫なはずだ。多分。

だから。

「届けえええっ!!」

腕を伸ばして叫びながら、そのまま突っ込む。

次の瞬間、どん、と、わき腹から全身を貫くような衝撃が全身を走り、思わず悲鳴を上げそうになるが、すぐ目の前、驚愕したような顔を浮かべる伊予の顔を前に、その口を食いしぼる。

ぐい、と、引き金を握る腕を掴み上げ、反対側の手で伊予の体を抱

きしめるように引き寄せ、ありったけの大声で怒鳴った。

「その程度か!? あんたの覚悟は!! そうじゃないだろ!! 目を覚ませ!!

『藤田伊予』っ!!」

その言葉と同時に、びくん、と跳ねると同時に伊予の体から力が抜けていく。

「シノ!! こっちは撃破したわ!!」

一瞬、奇跡でも起きたかと思っただがそうではないらしい。

魔導無線からジェシカの声が届いてくる。

「え……ハギ……ちゃん……う」

伊予の瞳に感情の色が徐々に戻る。

生温かな感触が腹部のあたりに広がっていくのを感じ、そして、胸元に抱き着くようにしてこちらを見上げている信乃の顔……その半分ほどが額から流れる血で染まっている信乃の顔を見て、伊予が息を飲む。

「……ですね、伊予は……」

安堵したような笑みを浮かべ、伊予の頬を撫でる信乃の震える指先。

指先のぬるり、とした感覚に思わず伊予が目を見開く。

「ハギちゃんっ!!」

安堵した表情を浮かべると同時に、力尽きたように体から力が抜けていく信乃。

伊予を掴む手から力が抜け、そのまま落下しそうになる小さな体を慌てて伊予が抱きとめる。

「シノ!! どうしたの!? シノっ!!」

「ジェシカさん!? 一体どうなってるんですか!？」

「伊予!? ようやく起きたの!? 遅い!! いいからアンタはとっとと逃げる!! シノは!？」

「ハギちゃんは……」

その言葉に伊予が目の中の信乃を見る。

浅い呼吸を繰り返し、飛行服を汚す鮮血が、ぞっとするような勢いで広がっているのを見て、伊予が叫ぶ。

「負傷……重症です!!ジエシカさん!!ハギちゃんが!!」

「っ!!イヨ、シノはどこ!?!」

「私が支えています!!」

「そのままつれて逃げる!!後ろは敵よ!!急いで!!」

その言葉に弾かれるように、振り返る事もせず震える手で信乃の体を抱きしめると紫電改のエンジンに魔力を込める。

体の魔力が半分以上奪われたように重いが、それでも信乃を放さぬよう、必死に加速していく。

程なくして、ジエシカが伊予の脇に着ける。信乃の姿をみて一瞬絶句するが、きつ、と伊予を睨みつけ。

そして。

「……よく帰って来たわね。イヨ」

食いしばっていた口元を僅かに緩め、そして、絞り出すように伊予に言い放つ。

「どうなったんですか、あの後、私は、ハギちゃんは……ウルスラさん!?!」

周囲にウルスラがいない事に気が付き、慌てる伊予に、肩を竦めてジエシカが口を開く。

「とつくに逃がしたわ。アンタはネウロイに操られるし、シノは負傷するし、最悪よ」

「……っ……!!すみません……でした……」

「アンタは悪くない」

ぴしやり、と言い放つジエシカに、でも、と伊予が口を開く。

「でも、私がハギちゃんを撃つたなら、私……私は……」

「そんなの知らないわ。私はそれどころじゃなかったし、アンタは操られてたんだもの」

「っ、『人型』!!あの『コア』は……」

『人形』は私が倒した。あのデカイの、一発かまさないと気が済まないけど、今はそれどころじゃないわ」

感情を押し殺すように淡々と呟くジエシカ。だが、M1919のグリップを握る指は白くなるほどに力が籠められ、その銃口はわずかに

震えている。

「全員離脱成功。シノなら大戦果ですつていうんでしょうね、こういうの」

「……そう……です……大戦果、です……」

伊予の胸元で信乃が呟く。はつとして顔を上げるジェシカと伊予。

「ハギちゃん!」

「シノ!!大丈夫!」

「……もちろん……と言いたい、ですけど……やっぱり……痛い……です……」

そういうと信乃がわずかに腕に力を籠める。

止まりかけていた金星エンジンが再始動し、伊予の体をすり抜けるように自力で飛行を再開する。

「ちよつと!?!シノ!!」

「伊予も、ジェシーも……増槽、が……スピットだと……あたしも、まだ……基地に戻るくらいまでは、まだ……」

ぽつりぽつりとつぶやきながら、飛行服のポケットに手を入れようとして、『その場所』がなくなっていることに気が付いた信乃が、ああと悔しそうに呟く。

「……キャラメル、落としてしまいました……」

ぼんやりと呟くその言葉にジェシカは叫びだしそうになる声を飲み込み、すぐさま魔導無線の全周波数を開く。

「メーデー!!こちら西部方面統合軍ジェシカ・E・J・ジョンソン大尉、当部隊において重傷者一名!!救援要請求む、繰り返し、こちら西部方面統合軍ジェシカ・E・J・ジョンソン大尉!!救援要請求む!!」

悲鳴のような、今にも泣きだしそうな声が魔導無線を通じ、北海沿岸の全域に響き渡った。

## 2-16. St. Anger

2330 ウェストハムネット基地 医務室

—1—

医務室の長椅子に座り、一人の少女がうつむいている。

薄い検査着とズボン以外は身に着けておらず、足は素足。スリッパをはいたままだ。太腿の前で握られた右の拳は僅かに震え、反対側の手でその拳を握りしめている。

うつむいた所為で、その癖のないさりとした黒髪に隠れ、その表情は見えないが、ぎゅつと真一文字に閉じられた唇には僅かに感情が滲み出ている。

「……………めんね……………ハギちゃん……………」

その口が僅かに開き、震える声が奥から漏れる。

処置室の扉は固く閉ざされ、その奥では、今でも信乃の治療が続けられている。

信乃の命を救ったのは、奇跡的に数週間前に配属されたばかりの『治癒魔法』を使える新人ウィッチだった。

もし『彼女』がいなければ、信乃は既に命を落としていたか、例えば一命をとりとめても、いわゆる『休眠』状態に陥り、数か月、或いは一生目を覚まさなかつただろう。

初めて見た見た重傷者に、あどけない顔をした長い栗色の髪の毛のウィッチは一瞬戸惑った様子を見せたが、ぐったりとした信乃を見て即座に覚悟を決めてくれた。

今でも処置室の奥では、回復魔法と輸血、それに外科手術を同時に平行した治療が休み無しで行われている。

大規模な作戦を前に、本来であれば、軍医や衛生兵、それに貴重な回復魔法を使えるウィッチの体力を減らす事は好ましくないだろうが、ゼムケは信乃の様子を見、すぐさま数少ない重傷者用の処置室と、この基地で一番腕がいい軍医と回復魔法を使えるウィッチを手配してくれた。

それだけの厚遇を他国のウィッチである信乃が受けられるのは、そ



れだけ偵察任務というのが重要であるからだ。

ウルスラのもたらした情報は、それだけの対価を与えるに十分なものだった。

『人型』ではなく『人形』。そして、駆逐艦を用いた『拠点』。

先刻、処置室から出てきた軍医は、血まみれの手袋を脱ぎながら僅かに笑みを浮かべ、治療は夜通し続くが、生死の境の山は越えたと言っていた。

その時は一瞬喜んだが、次の言葉に、伊予の心は再び奈落の底に落とされることになった。

問題は、信乃に残された魔力。

信乃が伊予との戦闘で消費した魔力量を加味すれば、休眠状態に陥るかどうかは五分五分だという。

夜中の間に体温が上がってくれば、休眠は避けられるだろうが、もしそうならなければ、信乃は休眠状態に入ったという事になる。

ちらり、と時計を見上げる伊予。気が付けば、10時間以上もこの椅子に座っている。

日の出まではあと6時間と少し。

伊予の検査はすぐに終わった。

僅かな右腕の打撲以外、体にはかすり傷一つ負っていない。

『人型』……否、『人形』と接触した為、任務終了までの飛行停止を命じられたが、それ以外は何も……そう、仲間に銃を向けるという、本来であれば軍法会議に掛けられるべき事案についても、罰や咎は一切なかった。

自分の体も経歴にも、一切の傷はついていない。

信乃が、ハギちゃんが身を挺して自分を助けてくれたから。

本来ならば自分が命を落とす筈だった状況で、自らの命を引き換えに救おうとしてくれたから。

何が起きたのか、誰に聞いても曖昧に濁されるだけで、きちんとした事は教えてくれない。だが、状況と記憶、その二つを照らし合わせれば、伊予でなくても容易に答えにたどり着ける。

操られた自分が、信乃を撃った。

そして、信乃は撃たれながらも自分を助けた。

その結論を胸で反芻する度、口から叫び声が漏れそうになる。

もし、いつそあの時ネウロイに『飲まれて』いれば、こんな思いはしなくて済んだ、と思う反面、そんな思いはしたくない、生きていて良かったと思う自分がここにいる。

自己保身と自己嫌悪。自らの感情を、もう一つの感情が否定する。自分を許せない自分と、許されたい自分。

そして、そんな自分をまた自分が否定する。

ジェシカやフラン、それに、先刻合流した502や507のウィッチ達がせめて着替えるように言ってくれたり、カフェテリアから食事を持ってきてくれたが、今の自分にはそれを受け取る資格がない。

出撃が出来ない自分とは違い、彼女達にはやるべきことがある。

次の任務に502と507のウィッチの参加が決まった。部隊の調整や作戦の確認、その合間を縫って、見知ったウィッチも、初めて会うウィッチも、皆、自分を心配してくれていた。

優しい人たちだ。そして、今、一人にしてくれているのも、彼女たちなりの優しさだろう。

その優しさが解るからこそ、余計に自分が許せない。

時計の針は0000。日付が変わった。

処置室の扉は、まだ開かない。

— 2 —

どん、という音に、その場にいた皆が顔を上げる。

直枝の拳が壁を殴った音だと気が付いても、皆、どう口を開いていいのかわからない。

時計は既に0300……午前3時を指している。

タイムリミットは長く見積もって後2、3時間。

人気のない談話室に集まった502と507のウィッチ達は、時折時計を見ながら、沈黙の時を過ごしていた。

ウエストハムネット基地に信乃達を搬送し、ヴァルトルートとハルカが司令室に呼び出され、他のウィッチ達は談話室へ集合させられた。

二人が戻り、それぞれ個室が用意されているといつても、静まり返ったりベリオンのダイナー風の談話室に集まっていた皆は、その場にとどまり続けた。

普段はレコードの音にかき消されている時計の針の音だけが、静まり返った談話室に響き渡る。

「……大丈夫でしょうか、萩谷さん、藤田中尉も……」

ぽつり、と、美也がヴェスナに呟く。

先程美也が伊予に夜食を差し入れようとしていたが、それを見たヴェスナが止めた。

今回、一番心を痛めているのは、直枝でも、意識を取り戻していない信乃でもない。

操られていたとはいえ、自ら仲間を傷つけた藤田中尉だ。

大丈夫ですよ、とヴェスナが宥める様に口を開く。

後輩のその優しさは愛すべきところだが、今はその優しさはかえって『彼女』を傷つける。

藤田中尉……伊予とは初対面だが、空で戦う者、仲間を失ったことのある者なら、その気持ちは痛いほどに解る。

仮に仲間がネウロイに落とされたのであるのなら、その怒りをぶつける先があるが、今の伊予にはそれが無い。

オストマルクから撤退する際、自分もまた、多くの仲間が落とされた。

今でもあの時の事は鮮明に覚えている。

あの時の悲しみが、怒りが心の底にあるからこそ、自分はカールスラントの義勇ウィッチとして戦い続け、そして、今に至っている。

もし、その怒りが、全て自分に向いたとするのなら。

きっと彼女の、伊予の怒りは、今でも自分自身を責め続けている。

そんな時、優しさは逆に彼女を傷つけかねない。

もし、萩谷准尉が目覚めなければ、伊予の消えない怒りは、伊予が生きている限り伊予自身に向かう事になるだろう。

そんな怒りが自身に向けば、たちまちその怒りは自分自身を焼き尽くす。

今はただ、萩谷准尉が早く目覚め、そして、藤田中尉が自分を許すだけの強さを持っていることを願うだけだ。

こち、こち、と、時計の針は無常に進んでいく。

どんなに願っても、戻りはしない。

— 3 —

「……馬鹿野郎……」

ぽつり、と直枝の口から声が漏れる。

時計の針は0530……5時30分を指した。

まもなく日の出だ。夜は明けようとしている。

「偵察じゃねえか……お前の一番得意な任務だろ？何しくじってやがるんだよ、萩谷……」

ぽつり、と呟く声に、その場にいた皆がうつむく。

直枝と信乃は、いわゆる友人と言えるほど親しい関係ではないのかもしれない。

だが、同じ時期に欧州へ渡り、同じ東部戦線を経験し、そして、部隊は違うが、輸送任務の引継ぎや、『瑞鶴』へ訪れた際などは顔を合わせては、互いに軽口を叩き合える程度には見知った間柄だ。

東部戦線から撤退する際、たまたま同じ船に乗り合わせた信乃の零式22型を無断で借用して敵を迎撃したのは良いが、代償としてユニットを大破させ、周囲が引くくらの取っ組み合いの大喧嘩をして以来の付き合いだ。

あの頃はお互い子供だった。

自己主張が少なく、大人しいウィッチだと思っていたので、あの時の無言のパンチは今でも忘れられない。後、無駄に厄介な固有魔法のせいで黙らせるまで時間がかかった事も。

それ以来、何故か仲良くなったものの、顔を合わせるたびに『ユニットは大丈夫ですか？』と、からかい交じりに尋ねてくるし、対価を払えば物資の融通も利かせてくれるが、逆に機嫌を損ねると手元の物資がどこかへ向かう。護衛任務を上手く利用しているのだ。伊達に『ギンバイのハギ』などと呼ばれていない。

……そう。思えば長い付き合いだ。

東部戦線を生き残った扶桑のウィッチで、かつ年が同じウィッチなど、欧州ではもう片手で数えるくらいしか残っていない。

それ以外の僅かなウィッチは扶桑に戻り、残りの全ては欧州の空に持っていかれた。

「菅野さん……」

いたたまれずにひかりが口を開く。

飛行服を真っ赤に塗らして浅い呼吸を繰り返す信乃と、それを左右から血塗れになりながら支えるジェシカと伊予。

ベテランのハルカやヴァルトルートから見ても、もう手遅れだと思う程に信乃の傷は深かった。

だが、直枝は諦めなかった。

燃料の乏しい伊予とジェシカの代わりにひかりと美也で信乃を支えさせ、愛用していたマフラーを包帯代わりにして応急処置を施し、そのままウエストハムネット基地へ向かうように指示をだした。

本来であれば同じ中尉で先任であるハルカが指示を出すべき場面だが、ハルカも、そして他のウィッチ達もその指示に黙って従った。

本来であれば、帰還すべき場所はウエストハムネット基地ではなく、最も近いリュツゲ基地。

三人が遭遇した『人型』、否『人形』の再襲撃のリスクを考えても、それが正しい判断だっただろう。

だが、敢えて直枝はウエストハムネット基地へ向かうように指示を出した。

その理由は一つ。

信乃を生き延びさせるためだ。

リュツゲ基地の医療施設では、例え連れ帰っても信乃の傷では治療は不可能だろう。

しかし、ウエストハムネット基地に駐留しているのは統合軍……その中核はリベリオン陸軍の56FG……『ウルフパック』だ。

リベリオンの物資なら、おそらくは必要な処置が受けられる。

信乃の生命力とリベリアンの人情を信じての、半ば賭けのような判断だったが、幸いにしてその賭けの半分には勝つことが出来た。

だが、残りの半分までのタイムリミットは短い。

日が昇れば、信乃が目覚ます可能性は極めて低くなる。

生きているだけ良かった、という言葉はその通りだが、休眠状態になったウィッチが目覚めるまでは短くても数か月から長くて数年。

孝美のケースは不幸中の幸いで、一度休眠に入ったウィッチの大半は『あがり』の年に命を落とすか、或いは生涯目を覚まさない。

そのことを知っているからこそ、皆押し黙っている。

今の直枝に何を言っても、信乃の回復以外は何の慰めにはならない。

ひかりや美也、ハルカといった扶桑のウィッチにとっても、程度の差はあるが、扶桑海軍のウィッチ部隊の旗艦である『瑞鶴』を守る機動部隊のウィッチ達の事は知っている。

カウハバへ向かう美也の護衛を務めてくれたウィッチ隊の長機は伊予で、いろいろと世話になったし、直枝と行動を共にすることの多いひかりは信乃にこっそりお菓子を貰ったことがある。

姉である孝美に一度命を救われた事があるという信乃は、護衛任務の引継ぎの最中、『菅野中尉には内緒ですよ』と、こっそり胸のポケットにボンタンアメの箱を二つ忍ばせてくれた。

ネウロイの巢……『グレゴリー』を撃破した直後で、扶桑の甘味に飢えていた頃だ。あの時のことは今でも鮮明に覚えている。

まもなく時計の針は垂直を……午前六時を指す。

窓の外から気の早い鳥たちのさえずりが聞こえ、先日から珍しく晴れ渡っていたウエストハムネット基地の空がうつすらと色づいていく。

「……まだ、時間はありますよね……萩谷さん、大丈夫ですよね？」

今にも崩れそうな笑顔を浮かべたひかりが、ぽつり、と、すぎるような声で呟く。

幸か不幸か、ひかりは親交を結んだウィッチを失った経験をしていない。美也も同様だ。

美也がひかりの肩に手を当てる。

ヴェスナもハルカも、そしてヴァルトルートも口を開かない。直枝

も黙って空を見上げています。

邪魔な太陽め。今すぐ頭を引っ込めろと言わんばかりの瞳も、徐々に赤らんでいく空を止めることは出来ない。

そして。

時計の長針が頂点を指した。

0600。午前六時だ。

ただ一人、それまで終始無言だったヴァルトルートが立ち上がる。

「直ちゃん、ひかりちゃん。ボクが様子を見てくるよ。いいね?」

背筋を伸ばし、前を向き、誰もが聞きたくなかった一言を放つ。

この場で誰よりも戦果を上げたグレートエースは、同時に、誰よりも多くの仲間を看取ってきている。

明けない夜はない。

だから、誰かが確認しなければいけない。残ったチップの半分の方を。

「……ああ。任せた」

拳を握りしめ、辛うじてそれだけを呟いた直枝が、力なくソファに座り込む。

だが。

「た、大変です!!皆さん!!」

そういつて飛び込んできたリベリオンの制服姿のウィッチの声に、皆が思わず顔を上げる。

先程まで信乃に回復魔法を使っていた新人のウィッチだ。狼狽した様子に、その場にいた皆が一斉に立ち上がる。

「すぐに来てください!!特に菅野中尉!!」

「は?」

直枝が目丸くする。いきなり名指しされた事に驚いたが、それよりも、太陽と共に差し込んだ僅かな光明に直枝の顔に僅かな希望が灯る。

「まさか……起きたのか……?」

ひかりと美也が顔を上げる。ヴェスナも、ハルカも、そしてヴァルトルートも、直枝の言葉に僅かな望みを託し、リベリオンのウィッチ

を見つめる。

だが。

「ええ!!そうです、そうですけど!!」

直枝が首を傾げる。

何か様子がおかしい。

「とにかく大変なんです!!助けてください!!」

—4—

「嫌です!!あたしはもう大丈夫ですから!!迷惑はかけませんから飛ばせてください!!」

「落ち着いて、ハギちゃん!!」

「怪我人は黙って寝てろ!!」

「何だ、何があつたんだ!?!」

頭にたんこぶを作ったりベリオンのウィッチに促され、怒号の飛び交う処置室に直枝が飛び込む。

そして、目の前の光景に思わず目を見開く。

目の前では、見たことのあるウィッチと見たことのないウィッチがベッドの上で暴れている信乃を必死に押さえつけている。

「あんな奴、あたしが倒してやります!!あたしは操られてませんし、伊予にあんなひどい事させるなんて、絶対に許せません!!」

「私はどうでもいいから大人しくして!!」

「そうだ!!お前もこっち側だ!!大人しく寝てろ!!」

「本当に怪我してるんですかシノさん!?強い!!力が強い!!」

両手を伊予とフランが、じたばた暴れる足をウルスラが抑え、その中心で目を覚ましたばかりの信乃が喚いている。

「……萩谷……」

ぼつり、と直枝が呟く。

時計が指し示している時間は0605。

文字通り、戻って来れるかどうかの瀬戸際で、信乃は奇跡的に意識を取り戻した。

明らかに窓からは光が差し込み、朝が来たことを伝えている。

ぎりぎりだったが、信乃の生きる事への執着が……というより、『人



形』を殴りたいという怒りの感情が信乃を覚醒へと引き戻した。

ウィッチの魔力は精神状態に左右される。伊予を助けられたという安堵感でそのまま休眠するよりも、痛い目にあわせてくれたネウロイへの怒りが残された魔法力を引き上げたのだろう。

最も、覚醒直後の朦朧とした意識のせいで、その怒りがおかしな方向に向かっていているようだが。

「……良かったですね、菅野さん……」

ひかりが呟く。姉の事を思い出したのか、うつすら浮かんだ涙を手で拭い、にこり、いつものような明るい笑顔を浮かべる。

だが、直枝の表情はいまいち腑に落ちない、といった様子だ。

「どうしたんだ、あいつ？」

直枝が隣に立っていたアツシユブロンドの少女に尋ねる。

「……知らないわよ。あんな馬鹿」

はあ、と大きなため息をつくジェシカ。それでも、口元はほころび、その瞳には安堵したような笑みの色が浮かんでいる。

とんだ腐れ縁だ。何度も助け、助けられた。心配をかけたことも、かけられたことも数知れない。

異国の親友達の馬鹿な姿がまた見られたことに、ジェシカの口元からは自然と笑みがこぼれる。

「菅野中尉じゃないですか!!先程はありがとうございました!!」

信乃の中では時間の経過があいまいなようだ。

いつそ能天気とも思えるその笑顔と言葉に、思わず、げ。と直枝が呟く。

「こつちみんな」

「聞いてくださいよ!!皆あたしに出撃するなっていうんですよ!!オラーシヤじゃこのくらいの怪我で飛ぶなんてあたりまえですよね!?菅野中尉からも言っちゃってください!!あたしは全然大丈夫だって!!」

「お、おう……」

ちらりと隣を見ると、ひかりと美也が笑みを浮かべて信乃を見ている。

「萩谷さん!!大丈夫ですか!」

「勿論です、ポケットを撃たれてなかったらキャラメルを分けてあげるんですけど、今度何か融通しますね!!」

ひかりの言葉に笑顔で答える信乃。

「良いから寝てろ!!」

「雁淵軍曹。刺激しないでください。今のハギちゃんはまともじゃありません」

そういつて再度ベッドに体を押し付けるフランと伊予。

「良かったね、直ちゃん。あの子、すっかり元気みたいだよ」

後ろにいるヴァルトルートが耐え切れずに笑みを漏らし、ハルカとヴェスナもくすくす、と口元に笑みを浮かべている。

……いや、元氣すぎるだろ。

肩から力が抜けそうだ。このままでは扶桑のウィッチが更に誤解されてしまう。

—5—

曰く、信乃は目が覚めるなり『あの野郎、ぶっ殺してやる』と暴れだしたらしい。

ぶんぶんと振り回す腕の流れ弾に、リベリオンのウィッチと軍医がまず犠牲となり、部屋に飛び込んできた伊予、続いて知らせを受けたウルスラとフランが慌てて取り押さえ、そして、今に至る。と。

どう考えても頭がおかしい。

「あんたも知り合いでしょ?何か言ってやってくれない?」

げんなりとした顔でアッシュブロンドの少女……ジェシカが呟く。

「いや……そういわれてもな……」

検査着というほぼ全裸の状態でぎやあぎやあと騒ぎ立てている遣欧艦隊のウィッチ達。特に伊予。体の一部がぽよんぽよんと揺れている。

その光景に、おお……と思わずため息をつくハルカ。

「前から思ってたんですけど、あの二人っていいですよね……カウハバに来て欲しい……お持ち帰りしたい……」

扶桑の恥だ。まとめてぶん殴りたい。

「……鎮静剤でも打てばいいんじゃないのか?」

「打ったわよ、とつくに」

衝撃の一言をジェシカがさらり、と呟く。東部戦線でヤバめの薬をキメすぎたことの弊害か。或いは、脳内麻薬がどぼどぼと分泌されているのか。

「マジか」

マジか。

「ふふん!!最早薬程度であたしを押さえつけられると思わない事ですね!!これでもあたしはあああつ!!」

つかつか、とベッドに歩みよった直枝が包帯の上からつん、と傷口のあたりを指で押してみる。

途端に悲鳴を上げて涙声になる信乃。

大丈夫。ただの虚勢、意地を張ってるだけだ。

「嘘でしょ!?!鬼ですか!?!怪我人の傷口を抉るなんてこれだからあ痛たたたたたた!?!」

ちよつと突つっただけでこれだ。どうにか傷口はふさがったみたいだが、ダメージは消えていない。この程度の刺激でこの反応だと、99式の反動ですら激痛に代わるだろう。

出撃させてもこれでは何の役にも立たない。控えめに言つてゴミ。ただのいらん子だ。

「……もつと強い麻酔とかないのか?この馬鹿を黙らせるくらい」

「これ以上となると野生動物の捕獲用になります」

「それでいいだろ」

適当に直枝が答える。安堵と同時に疲れが襲ってきた。とにかく今はひと眠りさせて欲しい。

「良くないです!!何考えてるんですか菅野中尉!?!二度と目が覚めなくなりませよ!?!」

「それよりも萩谷、オレのマフラーは?」

「知りませんよそんなのあ痛たたたた!?!何で!?!何が気に入らないんですか!?!」

人のお気に入りのマフラーを駄目にしておいてこの言い草。つい

でに今までの分をお返ししておく。これはひかりの分。これは美也の分。これはヴェスナの分。

包帯の上からつんつんと傷口を突つついていているうちに、看護師がえげつない太さの注射器を持ってくる。なんだそれ。人に打つていいやつなのか？

「さっきの倍の鎮静剤を用意しました。これ以上は『休眠』の恐れがあるるので、これが限界です」

「マジか」

マジか。

「いや、嘘!? 何ですかそれ? いやいやそんなの打たれてもあたしはあきらめませんよ!? ……いや冗談でしょ何それ本気ですか!?! いやそんなの絶対無理無理!! 大人しくしますから止めて!! 絶対痛い奴じやないですかそれ!!」

チリチリが身の危険を信乃に訴える。いや、その太い針はどう考えても駄目でしょ。そもそもあたしは痛いのは嫌いなんです。伊予に撃たれた時、正直泣き叫びそうになったんですよ? もつとあたしを労わってください。

だが、当の仲間は容赦がない。

「お前の傷口よりマシだ。いいから黙って寝てろ」

「ごめんね、ハギちゃん。あとでちゃんと謝るから……」

「観念してください。シノさん」

フランがぐい、と体を押しさえつけ、両手両足を押しさえつけていた伊予とウルスラもその力を籠める。

「くっ……あたしは絶対に屈しません!! そんな鎮静剤なんかであたしは絶対に……」

スヤア……。

秒で夢の国に旅立った信乃を、皆が呆れた様に見下ろす。

まさに即落ち。それを見ていたウィッチ達も、今までの苦労をねぎらうように互いに苦笑を浮かべ合う。

「……少し休む? 休めるのかな……」

「そうですね……ふあ……」

疲れた顔を浮かべながらも、ひかりと美也が互いに笑みを浮かべ合う。

「ブリーフィングまではまだ時間があるからね、ゆっくり休もう」  
そう言っつてヴァルトルートがぱん、と手を打つ。

これで長い夜は終わり。数時間後にはブリーフィングだ。

「伯爵様、私も一緒に……」

「北海に沈められなくては、大人しく一人で寝ていてください」

平常運転に移ったハルカを睨みつけ、ヴェスナが呟いた。

そんな中、信乃はベッドの上で静かな寝息を立てていた。

二度と目が覚めない『休眠』ではなく、穏やかな眠りの吐息を。

閉じられた瞳を覆うその髪を軽くジェシカが撫で、フランと伊予が安堵のため息を漏らす。

鎮静剤には勝てませんでしたよ……。

## 2-17. WING GIRL

111

1000 ウェストハムネット基地 医務室

こち、こち、と、時計の音が部屋に響く。

処置室の窓からは雲の間から時折覗く太陽の白い明かりが差し込み、ベッドの上を明るく照らし出す。

その明かりに照らされている少女……信乃の体からは既に輸血用の点滴や検査器具の類は取り外され、毛布の上から薄い胸元が規則的に上下している。

「全く、人騒がせな奴だ」

その様子を見ながら呆れたように呟くフラン。

ベッドで寝息を立てる信乃の脇では、椅子に座った伊予がその手を黙って握っている。

「大丈夫か、イヨ?」

「……はい。ご心配をおかけしました」

そういつて笑みを浮かべる伊予。

僅かに疲れたような表情を浮かべているが、それでも信乃が意識を取り戻した事で、先程までの今にも自決しそうな状態からは大分持ち直したようだ。

「……あまり気に病むな……と言いたいが……」

「ハギちゃんが元気なのに、私だけ落ち込むわけにはいかないです」

「あれは元気というか、なんとというか……」

一応部下に当たる回復魔法の使い手に回復してもらったが、抑え込む過程で頭にたんこぶまで作らされた。アレでは、心配していた方が馬鹿馬鹿しくなる。

「……馬鹿だから、仕方がないんです」

ぽつり、と伊予が呟く。

先程の事か、と思ったが、伊予の口から出てきたのは意外な言葉だった。

「医者や皆から止められても、軍学校の士官過程への推薦を貰っても、

それでも無理して飛び続けて……」

ぽつり、ぽつりと呟く伊予。

信乃の魔法力は遣欧艦隊の中ではせいぜい中の中から中の下。決して高くはない。

だが、最初からそうだった訳ではない。

異常が見られたのは東部戦線の最前線から遣欧艦隊に復帰した直後。

戦えないわけではない。しかし、今までと同じような戦い方は出来ないだろう、というのが軍医の診断だった。

周囲も一度扶桑に戻るよう説得し、信乃が望むなら士官学校への再編入の手続きを行う準備もしていた。

だが、信乃は首を縦には振らなかった。

例え魔力が落ちても、固有魔法を持つ信乃は戦力として貴重な存在だ。

周囲を納得させるため、それまでの徹子に倣った戦闘スタイルを捨て、減少した魔法力で固有魔法を生かすための戦い方へと切り替える事で、辛うじて遣欧艦隊に残ることを認められた。

だが、いつ未帰還となるかわからない欧州と、ネウロイのいない内地。

どちらが信乃にとって望ましいかは明らかだ。

「そうか……」

部屋に残ったのは軍医と、出撃停止を告げられた信乃とフラン、そして伊予のみ。

その軍医も、今は席を外している。

時計の針は10時を指している。もう丸一日眠っていない。

伊予も、そしてフランも疲れている。

だからだろうか。

誰にも話していないような話が、思わず口から洩れるのは。

「……私も、何度も国に帰れと言われた。お前には無理だ。お前には荷が重い、と」

窓の外へ遠い目を向けながら、ぽつり、とフランが呟く。

そもそも、一度は本国の入隊試験に落ちたのだ。魔法力は高いが、飛行適正無し。陸上ウィッチという手もあつたが、フランは敢えて国を渡った。ブリタニアで亡命者を中心にした義勇軍を募っていたからだ。

父がオストマルク人だったため、フランは審査をパスして航空ウィッチの速成訓練を受けた。死に物狂いで努力をし、結果を残し、そして今ここにいる。

もし、あの日。意地を張らずに旅立つ父の顔を見ていたら。

あの時、一言父の前に顔を出し、『行かないで』と言えていたら。

そこまで考え、フランは首を振る。終わった事だ。そんなことをしても、結果は変わらない。

信乃が何故飛びたいのかはわからない。だが、フランには、それを否定することは出来ない。

自分も同じように、他人の言葉を無視して飛び続けたのだから。

「……イヨは優しい。だが、そんな同情、シノは望んでないはずだ」その言葉にぴくり、と伊予が顔を上げる。

本来であれば伊予に賛同すべきだろうが、そんな資格はフランにはない。

今となつてはわかる。

父を失った、そんな自分の事情を知つて尚、フランの入隊を認めなかった大人たち。

自分に対して国に戻るよう説得したH M Wの連中も、幼い少女をむざむざ死地に向かわせたくなかつたからこそ、心を鬼にしていた。

そして、その想いを無下にして自分は飛び続けてきた。

唯一自分を受け入れてくれた亡命部隊のウィッチ達も、優しさからフランを受け入れたわけではない。

自分達と同じ怒りを胸に宿しているから。仲間の屍を乗り越えてでも先に進む覚悟が出来ていたから。

例え空に散つたとしても、それをせずにはいられないという想いを持っていたから。

バルバロッサ作戦で、或いは、タイフーン作戦、ガリアの解放戦で



空に散ったものは少なくない。いつかは自分に順番が回ってくる。

この欧州の空で、私を守るのは、私しかない。

蜘蛛の糸は、もう降りてこない。

差し出された優しい手を振りほどいて、自ら地獄へ落ちる覚悟を決めたのなら、後は血の池の中で沈むまで足掻くだけだ。

だが、伊予は黙って首を振る。

フランに背を向けたまま、その瞳に自嘲気味な色を浮かべ、ぽつりと、一言。

「……私は、優しくなんてない」

そう。止めるべきなのだ。信乃の事を。

もうこれ以上飛ばなくてもいい、と。

これだけ戦ったのだ。きつと許してくれる。

かつて救えなかった人たちも、仲間だったウィッチ達も。

だから、後は私達に任せればいい。と。

本国に帰れば兵学校で士官教育を受けられる。尉官になっていい給金を貰って、父や母、兄妹や本土の友人達といつでも会える場所だ。暮らすことが出来る。

信乃の腕なら、教官でもテストパイロットでも、内地での任務に困らないだろう。

もし、真の友人であるのなら、止める事が真の優しさであり、友情だ。

しかし。

兵学校卒のエリートと、予備学校の速成を受けただけのたたき上げ。

正反対の経歴だが、同じ年で、ライバルであり、そして親友でもある少女。

現金なものだ。

先刻まで散々嫌悪してきた自己保身に、今もまた流されようとしている。

私は優しくなんてないし、自己中心的で利己的なウィッチだ。

模擬戦のスコアは上回ったし、撃墜数も追い抜いた。

しかし、まだ、『借り』を返していない。  
そして、また一つ、『借り』を増やした。

助けたこともあるが、助けられたことの方が圧倒的に多い。  
それを返すまでは……否。

そこまで考え、伊予が黙って首を振る。そんなのは後付けだ。  
理由はもつと単純で、直情的なただ一つの感情。

そう。医務室の椅子の上で、ずっと否定しようとしていた感情。  
そこに理屈なんて無い。

……私は『また』ハギちゃんと一緒に飛びたい。  
ぽつり、と伊予が呟く。

もし信乃が馬鹿なら、私は同じくらい馬鹿なウィッチだ。  
他に理由なんて無い。

理由なんて、ただ、それだけなのだから。

121

1030 ウエストハムネット基地 司令室

「……成程、驚いたね直ちゃん。こんなところにも『人型』が出るなんて」

ゼムケの呼集によりウエストハムネット基地の司令室に集められたのは、502と507のウィッチ達、そして、HMWから臨時配属されているジェシカの7名。

そこでゼムケが語ったのは、先程直枝達が行った救助活動の直前に行われた任務……北海に現れたネウロイの搜索と、その結果についてだ。

『人型』と思われるネウロイを搜索した結果、海上で大型ネウロイと遭遇。

同時に現れた『人型』と交戦している間、操られたウィッチを救助中にもう一人のウィッチが負傷した。

幸いにして『人型』はジェシカが撃墜し、行方不明者も出さずに撤退に成功したが、重傷者一名。

具体的な内容については触れず、ただ、大まかな概要だけだ。

だが、それでもその場にいた直枝達を凍り付かせるには十分すぎる

内容だった。

特に、『人型』の脅威を身に染みて感じた経験のある直枝やヴァルトルート、ハルカは神妙な顔をしている。

「……俄かには信じられねえ」

ぽつり、と直枝が呟く。

『人型』が出たという事ではない。問題はネウロイの出現位置だ。

ネウロイは水を嫌う。海を渡るのは大型か、大型に近い中型。稀に海で小型と会敵したとしても、それは空母のような大型から生み出された随伴型であることが大半だ。海はあくまで通過するだけ。ネウロイにとつての海は、陸地から陸地への中継地点に過ぎない。

だからこそ、海の上を拠点とするネウロイが出るなど、想像も出来ない……いや、想像したくない事態だ。

「出てしまったものは仕方がない。我々の役目は怪奇映画で怪物相手に驚く役ではない。倒す役だ」

そう言い放つと、ゼムケは直枝達に目を向ける。

「詳しくは、ハルトマン中尉と解析班の結果待ちだ。後のブリーフィングで詳細は伝えるが、参加は任意だ。強制ではない」

ここまでの情報は、あくまで『ゲスト』に対するものだ。これ以上の情報は部外者には与えられない。

つまり、これ以上の情報を聞くという事……ブリーフィングに参加するという事は、それはこれ以降の作戦にも参加するという意思表示に他ならない。

「だつてさ。どうする直ちゃん？」

「決めるのはオレじゃねえ。ここでの先任はそつちだ」

肩を竦めるヴァルトルートに直枝が答える。

だが、その表情から答えはわかりきっている。

「……ネウロイを倒さなければ、北海は閉ざされたまま。補給はないまま、春を待たずに凍り付くのみですから」

ぽつり、とヴェスナが呟く。

彼女もまた、スオムスやオラーシャで戦い続けてきたウィッチだ。補給の大切さは、身に染みて感じている。

急な戦いには慣れっこだ。人型が相手というのは少し厄介だが、冬  
のオラーシヤの最前線に比べれば大分マシな戦場だ。

「ジョンソン大尉にも参加してもらおうが、問題ないな」

「勿論、そのつもりよ」

頷くジェシカ。臨時ではあるが、ジェシカはウエストハムネット基  
地に所属しているし、所属しているという事はゼムケの指揮下だ。

むしろ、参加するななどと言われれば、ゼムケの手前のブリタニア  
製の高級そうな机を叩いて問い詰めるまでだ。

その言葉にうむ、と頷くゼムケ。

ここに皆を集めたのは、それぞれの原隊から56FGとの共同作戦  
の許可が下りているという事の伝達と、機密事項の漏洩に関する宣  
誓、そして、参加作戦への意思の確認。

その全てが終わった今、後はブリーフィングを待つのみだ。

「ひとまず、この話はここまでだ。ブリーフィングは1800からだ  
が……ジョンソン大尉」

「何かしら？」

「君に客人だ」

「……客人？誰か来るのかしら？」

思わぬ言葉に思わずジェシカが首を傾げる。

「正確にはずっと来ていた。萩谷准尉のごたごたで待たせていたのだ  
が、ようやく呼ぶことが出来るが……」

「ひよつとして、ボク達はお邪魔かな？」

ヴァルトルートが気を利かせる様に口を開くが、ゼムケは肩を竦め  
る。

「好きにして構わない。『今はまだ』、直接的な関係はないだろうが  
……」

だが、言い終わる前にドアの向こうから声がかかる。

「お連れしました。大佐」

「……解った。入ってくれ」

ゼムケがドアの向こうへ声をかける。

『はいっす』と、ドアの外から快活な声が響き、ブリタニアの制服を着

た一人のウィッチが部屋へと入ってくる。

「へ？あんた……」

その顔を見たジェシカが目を丸くして硬直する。

「諸君。こちらはブリタニア王室空軍ウィッチ隊『HMW』第一航空部隊所属、ヘンリエッタ・マクラウド中尉だ」

「どうもっす!!初めまして、統合戦闘航空団の皆さん。お会いできて光栄っす!!」

ゼムケの言葉に茶目つ気たっぷりといった童顔に笑顔を浮かべ、ぴしっ、と敬礼をして見せる少女に、ジェシカ一人を除き、皆敬礼を返す。

「HMW……って?」

ぼつり、とひかりが口を開く。

「HMW、通称『グローリアス・ウィッチーズ』。ブリタニアを守る防衛部隊よ、雁淵さん」

キョトンとした顔を浮かべているひかりの耳元で美也が囁く。

「あ、あー、聞いたことあるかも。学校の授業で習った気が」

「そこまでは習ってないわよ」

「……あれ?じゃあ何で三隅さんは知ってるの?」

「……馬鹿ひかり……」

皆が苦笑を浮かべる中、直枝だけが頭を抱えて呻くように呟く。

欧州情勢を本格的に学ぶ前に最前線に送られたひかりは、ペテルブルグ周辺については大分詳しくなったが、全体的な知識が不足している。

一応欧州の地図自体は頭に入っているが、それぞれの国の部隊についてまで習熟しているわけではない。特にHMWは他国との共闘よりも自国の防衛という任務に特化した部隊だ。逆に言えば、ブリタニア国内とそれ以外の地域で知名度に此処まで差のある部隊も珍しいのだが。

それに比べると、勉強熱心な美也は、欧州に渡る前に独学で欧州情勢を学んでいた。

無論、自分がいずれそこで戦うであろうことも踏まえてだが、半分は欧州のウィッチ達に興味があるからでもある。

その他にもこつそりプロマイドを集めたり、ウィッチの記事をスクラップしたり。著名なウィッチにサインをもらおうとノートとファイルを一冊ずつ荷物に忍ばせてきたものの、任務に追われてそれどころではなかった。

だが、その時の知識はこうして時折役に立ったりもする。

「いえいえ、扶桑にも私達の事を知っている方がいるだけで光荣つす!!」

だが、エツタは美也が自分の部隊を知っている事を素直に喜んでくれるようだ。

「まさかこんなところで統合戦闘航空団の皆さんにお会いできるとは思ってもみなかったす。もしよければ後でサインとかもらっていいすか? 部隊の皆に自慢……」

「ちよつとエツタ、何でここにいるのよ!!」

一方、ようやく硬直から立ち直ったジェシカがエツタに怒鳴る。

無理もない。ジェシカが一時期、ブリタニアの亡命義勇ウィッチ隊に出向させられていた頃からの知り合いで、ずっと僚機を務めていた少女だ。その後、パリへ移籍になるときにも無理やり引き抜いた。

同じく引き抜いた副官のアラーナと共に、最も親しかったウィッチの一人でもある。

「あ、久しぶりっす、隊長。いえ元隊長っすかね」

「アンタの基地は隣でしょ?」

フアラウエイランド訛りの強い小柄なウィッチのからかうような言葉に、ジェシカが不機嫌そうな表情を浮かべる。

エツタ……ヘンリエツタを亡命義勇ウィッチ隊からHMWの本隊に引き上げたのは、ジェシカの口利きだ。それなのにこの言い草。

この恩知らず、とでも言いたげな顔を浮かべるジェシカの顔を見、苦笑を浮かべるエツタ。

「まあまあ。うちのお優しいドロレス隊長が、『元』隊長の様子を見てきてほしいって私にお願いしてきたっすから、仕方なく来てやったっす」

エツタは先日のガリアでの『壁』との戦闘後、パリの第二航空団か

らタングミニアの第一航空団への移籍が決まった。部隊が違うので、今は隊長ではなく『元』隊長だ。

ついでに階級も一つ上げ、今や中尉である。

『壁』の撃破に貢献したジェシカは部隊も階級も据え置きなのに対して、この処遇はどういう事か。

「ふうん。私が弱ってるのを見るのがそんなに楽しい？」

「弱ってるかと思って期待してたらピンピンしてるじゃないっすか。もっとこう俯いて涙を流してるかと思ってたのに、拍子抜けっす」

「そんなのイヨだけよ。貴女、そんな悪趣味だったかしら？」

どうやらかつての僚機も第一航空部隊のブリテン気質に毒されてきているようだ。

「どこかの誰かさんのお蔭っす」

「ドロレス隊長ね。あの人、ああ見えて執念深いのよ」

「そう言うところっすよ、元隊長」

ジェシカの言葉にエツタが苦笑を浮かべる。一応心配はしていたのだが、いつも通り過ぎるほどいつも通りな様子に、ほっとすると同時にこの人はぶれないなあ、と妙な関心をしてしまう。

勿論感謝はしているのだ。だが、それ以上にジェシカの無茶に振り回されてきた。

むしろ、変に気を使うとすぐ調子に乗るので、ちよつと悩んでいてくれるくらいで丁度いいのだが、鋼のようなメンタルで、ちよつとやそつとで凹んだりはしない。

「昔隊長の秘蔵のスコッチを皆でこつそり飲んだのを根に持つてるに違いないわ」

「そんな事までしてたんっすか。混ぜて欲しかったっす」

「エツタがいない頃の話よ」

「だからこそっすよ」

ふうん？と首を傾げるジェシカを見て、相変わらず馬鹿な人だなあ、と苦笑を浮かべるジェシカ。

だが、馬鹿だからこそ裏表がない。そして、どんな苦境も笑って跳ねのける事が出来る。

そんな彼女の僚機だったからこそ、無鉄砲だった自分も少しだけ、落着く事が出来た。

どんなに無鉄砲でも、ここまで馬鹿にはなれないと悟ったから。「募る話はあるだろうが、用事を済ませてもらえないか？」

ゼムケの言葉にエツタは「ほん、と一つ咳ばらいをし、改めて向き直る。」

「失礼したつす。そのドロレス隊長から伝言を届けに来たつす。ええと……」

そういつてごごごそ、とポケットの中からしわだらけになった便箋を取り出す。

「すぐそこにいるのにわざわざ手紙？」

「今まで何でこの基地とタングミーアが距離を置いていたかわからないつすかね」

はあ、とため息をついてエツタが手紙を読み上げる。

『久しぶりです、ジェシー。古い貴女の友人たちの具合はいかがですか？すぐ近くに居ながら、困っている貴女を助けに行けない代わりに、せめて手紙を送ります』

「手紙じゃなくてもっと別のモノが欲しいわね。具体的には紅茶とか、最高級の紅茶とか」

「黙って聞くんす。ええと、『勿論、貴女は手紙だけじゃ満足しないでしょう。このタイミングになって申し訳ないのですが、ようやく貴女の分が届きました。今頃そちらのハンガーには貴女のスピットファイアMk-22が』……え？」

その言葉にジェシカも、そしてゼムケやその場にいたウィッチ達も、ついでにエツタも驚きの声を上げる。

「Mk-22!?最新鋭じゃない!!」

スピットファイアMk-22。

既存のスピットファイアに2000馬力級の最新鋭魔導エンジンのグリフオンを積み、速度と航続距離を飛躍的に上昇させたブリタニアの最新鋭機材だ。

「ええと、それってどのくらいの凄いんですか？」



「そうだね。カールスラントの今一番新しいユニットがFw-190のD-9型で、Mk-22はそれと同じくらい新しいかな」

ひかりの言葉にヴァルトルートが答える。カールスラントのウィッチの中にはFw-190よりBf-109を好むものもいるが、格闘性能以外の基本的な性能や扱いやすさで言えばFw-190の方が上だ。

「扶桑で言えば紫電改ってところだ」

直枝が呟く。

実際には零式の54型の方が近いのかもしれないが、実用性や性能で言えば、スピットファイアそのものの限界性能も踏まえ、格闘性能と航続距離を除けばMk-22の方が性能そのものは遥かに上だ。

「どうして大尉が受領するんっすか!? 第一部隊でもまだ配属が済んでないのに!! 私ですらっつい数日前に受領したばかりっすよ!!」

「何でエツタまで驚いてんのよ?」

「ドロレス隊長にジェシカの前で読むまで手紙は開けないようにって言われてたっす」

むす、と口を尖らせるエツタ。

「ていうか、アンタ、私より先にMk-22を受領って……」

「あーっ、聞こえないっす!! 続きっす続き!! 『Mk-22を届けます。Mk-IXとは違い癖があるユニットですが、性能は折り紙付きですよ。後、そこにいるエツタを任務が終わるまで置いておきます。手続きは済んでいるので、存分にこき使ってください』……えっ?」

そこまで読んで思わず首を傾げるエツタ。

「……何を言ってるんっすかね? ドロレス隊長。ブリタニッシュジョークはファラウエイランド出身の私には難しすぎるみたいっすね……」

「何かもう一枚あるわよ?」

その言葉にエツタが手紙をめくる。

そこには、エツタの転属書がドロレスの綺麗な文字で書かれていた。

「……ええと」

二度三度と読み返しても、文面に変化はない。ゆつくりと顔を上げると、そこには満面の笑みを浮かべたかつての……否、たった今再度長機となったジエシカの顔があった。

「……久々にロツテが組めるわね。ウイングガール」

「……うつつ」

「統合戦闘航空団とも一緒よ。良かったわね」

「……うつつ」

「それじゃあこの転属書は預かるわ。ゼムケ大佐、どうぞ」

「……うつつ」

硬直したエツタの手から転属書を抜き取ると、苦笑を浮かべているゼムケにそれを渡す。

まるで新しいおもちゃを見つけたような目でエツタを見つめるジエシカ。

「新しい機体とかつてのウイングガール。ドロレス隊長も粋な計らいをしてくれるわね」

先程とは一転、ジエシカは機嫌がよさそうだ。

「おい、そのうつつすうつつ言ってる奴、腕は確かなんだろうな？」

直枝がジエシカに尋ねる。ジエシカの腕に関しては、先刻『人型』を一人で撃墜したらしいので問題はないだろうが、『人型』相手に中途半端な援軍では逆にお荷物だ。

「エツタはブリタニアの亡命義勇ウィッチ隊出身よ。その中じやまあ、5本の指に入るくらいかしら」

そういつてぽんぽん、とエツタの頭を叩くジエシカ。

ブリタニアの亡命義勇ウィッチ部隊は、フアラウエイランドやアウストリウス等、ブリタニア連邦傘下の諸国からの義勇部隊と、オストマルクやベルギカ、ダギアなどのネウロイに侵攻された欧州からの亡命部隊の混成部隊だ。

義憤に駆られて海を渡り、或いは祖国を取り戻すために立ち上がったウィッチ達の士気は高く、また、陥落した各国のエースも集まっているため、HMW本隊と比べても遜色のない実績を誇る部隊だ。その中でもエツタは一貫してジエシカの僚機についていた。

気心の知れたウィッチは、ジェシカにとってはこの上ない援軍である。

「何でっすか……ドロレス隊長……ひよつとして、お茶の時間にファラウェイランドの父から送られたコーヒーを出してみたのが悪かったんっすか……?」

一方、お茶目なサプライズに付き合わされたエツタがこの世の終わりの様な目をして眩く。

「ま、そういう事ならよろしく頼むよ。エツタちゃん」

「うっす……エツタちゃん……!?隊長!!元隊長!!今あのクルピンスキー中尉が私の事エツタちゃんって!!」

ヴァルトルートの言葉にはつと顔を上げ、ジェシカへと感動の視線を送るエツタ。

かつてヴァルトルートと直枝、そしてひかりに助けられた船団護衛HMW所属のウィッチの喧伝により、タングミーアのHMWのウィッチ達の中ではヴァルトルートはまるで憧れの王子様……伯爵様な扱いを受けている。

何しろ、見てくれだけは完璧なのだ。背の高い男装の麗人といった面持ちのヴァルトルートのブロマイドはいきなり口説いてきたり、ユニットを壊したりはしない。

HMWのトシゴロの乙女の勝手な空想が独り歩きし、完璧な伯爵像が出来上がりつつあるとは、まさかこの場にいる誰もが想像の出来ない事だろう。

きよとんとしているヴァルトルートがそのことを知れば、大喜びで『隣の基地』に飛んでいこうとするだろう。

最も、そんなことがエディータの耳に入った時、どうなるかは火を見るより明らかだろうが。

「はいはい。ま、ロットを組むのは中尉じゃなくて私だけど」

「うっす、いいところ見せるっす。元隊長、サポート頼むっす」

「サポートするのはあんた。それに、今は『隊長』よ」

「どっちでもいいっす!!」

ぐつと拳を握りしめるエツタ。

「ブリーフィングまでは時間がある。それまでは自由にしている構わない」

「じゃあ、お言葉に甘えて。談話室って空いてます?」

「好きに使えばいい」

クルピンスキーの言葉にゼムケが頷く。

「私も色々話が聞きたいっす」

「アンタはハンガーよ。付き合いなさい」

「嫌っす!! あっ嫌襟引っ張らないでほしいっす!! 力、力強……っ!?」

ジェシカに無理やり襟をつかまれ、ずるずると引きずられていくエツタ。

「……大丈夫かあいつ等……」

そんな様子を見ながら、ぽつり、と直枝が呟いた。

131

1130 ウェストハムネット基地 第二格納庫

「夜逃げの準備ですか? 二人とも」

背後からかけられた言葉にオヘアとビューリングが振り返る。

ストライカーユニット用の隣に設けられた航空機用のハンガーの一角で、オヘアとビューリング、それに『クラッシャー・オヘア号』の搭乗員たちが積み荷を外に運びだしている。

「それも良いな。軽くなれば速度も上がる。『人型』なんぞに構ってられるか。私は逃げる」

「違うねウルスラ、これはただのガレツジセルの準備ねー」

てんでばらばらな返事にウルスラが肩を竦める。

この二人にコンビネーションなど期待できない。下手をすると義勇独立飛行中隊の中で最も相性が悪い二人だ。

オヘアの言葉通り、『クラッシャー・オヘア号』の脇には積んでいたと思われる荷物が山積みになされ、搭乗員たちが更に中身をそこに積み上げていく。流石に過積載なのでは。

「まあ、どちらでもいいです。オヘア」

「ホワット?」

じとり、とした目を眼鏡越しに向けられ、オヘアが首をかしげる。

「変な事考えないでくださいって言いましたよね？」

「言ってたねー」

「……では、何故？」

「ミーは考えないとは言っていないねー。それに変な事じゃないねー。これは……」

「あー!! やっぱり集まってたじゃないですかー!!」

弾むような声にオヘアが言葉を止め、代わりに小さなため息をつく。

「……やっぱり来たね」

どういうわけか縁は重なる。ビューリングと会い、ウルスラとも会ったとなれば、同じ基地にいるはずのハルカとも会わない筈がない。

「もう、水臭いじゃないですかオヘアさん、ウルスラさん。ビューリングさんも。折角同じ基地にいるのに、どうして会いに来てくれないんですか？」

「さつき会いましたから。もう会う必要はないと思って」

「私も見かけたぞ。息を止めて気配を殺していたが」

「そういうところですよ、二人とも!!」

そっけないウルスラとビューリングの態度にハルカが頬を膨らませる。

「それで、何の用ね？」

「4人ですよ、4人。4人も集まったんです」

相変わらずハルカの話は唐突というか、脈絡がない。まあ、そうでなければハルカではないのだが。

「何だ？再開を祝してのパーティーでも開くのか？私はごめんだ」

「ミーもね」

「私も。明日の準備もありますので」

「違いますよ。この面子でそんな事してもお通夜みたいになるだけじゃないですか」

流石にハルカも首を振る。この面子の事をよく理解しているのだ。

「では、何故？」

「今から祈りましょう」

ハルカが唐突に意味不明なことを言い出した。

「……何か悪い宗教にでも嵌ったね？」

気味が悪そうな顔をする3人を見て、ちがいますよ、とハルカが首を振る。

「智子大尉を呼ぶんです。私はいつも夜空を見上げて智子大尉が現れることを祈っていますが、一向に現れる気配がありません。でも、奇跡的に昔の仲間が4人。4人分の祈りなら、きっと智子大尉にも伝わらずです」

「想像以上に訳の分からない用だったね」

「ああっ!!智子大尉、智子大尉!!聞こえますか!?ハルカはここです!!ここで貴女を待っています!!届け!!扶桑の智子お姉さまに届け!!この思い!!」

「今頃くしゃみしてるねー」

ハルカを無視し、オヘアが呟く。

「それならまだいいです。突然倒れたりしてないでしょうか？」

「あり得るな。私もとつととくたばるように念の一つも送ってみるか」

「ちよつと、真面目にやってください!!」

「ここまでふざけたことをしておきながら真面目とは。」

呆れたように煙草に火をつけるビューリング。それを見咎め、ハルカが口を開く。

「相変わらず煙草は止めないんですね」

「何故止める必要がある。健康の為だというのなら聞かないぞ」

「キスした時煙草臭くなるじゃないですか」

「それが良いという奴もいる」

「少数派です」

「もしトモコがその少数派なら？」

「吸います」

即答するハルカ。

「……少数派なんですか？智子大尉」

「知るか」

本当ですか？本当ですよ、と呟きながらも、ハルカが積まれた荷物へ目を向ける。

「……これ、うちの部隊で頂けるんですよ？」

「イエス。そのために持って来たね」

「何で運び出してるんです？」

「色々事情があるね」

「502の人達に何か言われました？」

「ノー。まだ会ってもいないねー」

本当ですかあ？と疑わしそうな眼を向けるハルカ。

例えばそうでなくても、彼女達の手が届くところにこれを置いておくのは不味い気がする。

「積み荷が不思議な動きをしてペテルブルグに行くことがあったら困るんですけど」

「心配ないね。『この荷物』は、きちんとカウハバに送るねー」

そう言つて積み荷の木箱の山をぽんぽん、と叩くオヘア。

「……さっきの話の続きですが、オヘア」

ウルスラが口を開く。一体何故、オヘア達はわざわざ積み荷を運び出しているのか。

「……ウルスラ、今回の作戦、成功すると思うね？」

「作戦内容は機密事項です。お二人は知らないはずでは？」

「そうだ。オヘアは知らん。だが、私は一応関係者だ」

一応まだ軍属であり、ジェシカと同行しているという建前になっている。加えて、人型ネウロイとのかつての戦鬪の関係者である。機密保持の対象どころか、本人そのものが機密事項なのだ。

「ミーは心配ね。ミーを護衛してくれた子も怪我したって聞いたね。きつと痛かったねー」

「それは……」

その言葉にウルスラが僅かに目を伏せる。

信乃の負傷に責任を感じないわけではない。

むしろ、自分の見通しが外れたからこそ、ジェシカ達に無理をさせ

てしまった。

信乃の負傷に関しても、ウルスラには責任があるかと言えば、そうではないだろう。想定外の事態ながら情報を収集し、当初の作戦通り全員戻ってこれた。ウルスラが一番に離脱したのも、目的が調査であつたため、当然の判断だ。

他に手段はなかったし、他の手段ではもつと被害が大きくなつていたらはずだ。

作戦と、それに伴う各自の行動は間違つたものではない。

だが、正しい事をしたからと言って何も思わないところが無いわけではない。

「……次の作戦は、必ず成功させます。オヘアが心配する必要はありません」

「心配なのはそこじゃないねー」

苦笑を浮かべるオヘアがぼん、と、ウルスラの頭を叩く。

あの時から背は伸びたが、さらさらとした金髪の感触は変わらな  
い。

そして、何故撫でられたか解らず、きよとん、と見上げる表情も。

「お願いがあるね、ウルスラ」

真つ直ぐ見つめてくるオヘアに対し、ウルスラが口を開く。

「嫌です」

「せめて話をきくねー」

「嫌な予感しかしません」

そう言い放ち、その目にジトつとした目を向けるウルスラ。

そう。どういうわけか、ここにいるのは皆『いらん子中隊』なのだ。

嫌な予感がする。否、嫌な予感がしない訳がない。



「凄い人数ですね……」

感心したような、驚いたような声でぽつり、とひかりが呟く。

「流石リベリオン。物資だけじゃなくて、ウィッチの数も圧倒的だね」  
ヴァルトルートがそう言って周囲を見渡す。大学の講堂のような  
雰囲気のブリーフィングルームには、502や507も含めて数十人  
のウィッチが集まっている。

殆どがリベリオンの56FGのウィッチ。だが、数人別の制服の  
ウィッチが混じっている。

その一人はこの場で堂々と真ん中に居座り、周囲のウィッチ達の  
視線も気にならないとばかりにその場にふんぞり返っている。

ジェシカである。

その隣には、消え入りそうに身を竦ませながらちよこんと座ってい  
るエツタ。どうやら上官に無理やり同行させられたらしい。

「……すげえなアイツ」

「直ちゃん、エツタちゃんと変わってあげたら？」

「お前が行け。女共の注目浴び放題だぞ」

「見られるだけなんて嫌だよ。ボクはお話したいんだ」

502と507のウィッチ達は一番後ろの席の一角に、並ぶように  
座っている。というよりも、そこしか空いていなかった。席は殆ど固  
定されているのだろう。後から来たりリベリオンのウィッチ達は、ジェ  
シカとエツタに席を取られた二人のウィッチ以外は、皆迷うことなく  
席についた。

途方に暮れていたウィッチ達は仕方なく直枝のすぐ隣に座ってい  
る。前に座っているエツタ同様、ものすごく居心地が悪そうだ。

「何となく第22飛隊を思い出しますねえ……」

ぽつり、と呟いたのはハルカ。スオムスのアホネン大尉が率してい  
た部隊である。

同じ国のウィッチだけで構成された部隊というのは義勇独立飛行  
中隊一筋だったハルカにとって殆ど馴染みがない。何しろその部隊

から追い出されてきたのだ。

そういつた正規の部隊でも、スオムスの第24戦隊ではなく第22戦隊を思い出したのは、第24戦隊が所謂エースの集まりだったのに対し、第22戦隊は優れた隊長に従う事で結果を出す統率のとれたウィッチ達の集まりで、この部隊の空気はエース部隊というよりさらに近いからだ。

規律を重視し、大人数を生かした一撃離脱を徹底させることで部隊全体で成果を上げる姿勢はリベリオンの部隊とは思えないが、一定の成果を出しつつ、なるべく若手を失わないようにするには良い方法だ。

「美也、きよろきよろしない」

「は、はいっ」

ヴェスナの言葉に頷きながら、美也は何となく佐世保の予備学校を思い出していた。

教室を思わせるブリーフィングルームも相まって、筆箱とノートを持っていれば今から授業が始まるといわれても納得してしまいそうな雰囲気だ。

いくなれば自分たちは急にやってきた転校生。そんな雰囲気の中でも自分以外は皆落ち着いている。

自分と同期だったあのひかりですら、興味深そうにしてはいるものの気圧された様子はない。欧州での経験故か、それとも単に図太いだけか。

学校の記憶を遡ると、何となく後者な気もする。

「傾注」

その言葉に部屋の空気が凜、と静まる。音もなく立ち上がるリベリオンのウィッチ達に合わせて、客人であるところのJFW所属のウィッチ達も立ち上がる。

静まった部屋の中、こつこつ、と3組の音が響く。一人はこの基地の責任者であるエイカー准将、もう一人はゼムケ大佐。

そして、最後の一人はウルスラ・ハルトマン中尉。ヴァルトルート  
の友人でもあり元同僚のエーリカの妹だ。

ゼムケが中央に立ち皆に向き直ると同時に一糸の乱れもなく一斉にリベリオンウィッチ達が無礼を拒む。リベリオンの部隊とは思えないほどの規律の高さだ。慌てて直枝達も敬礼を行った。

「座れ」

ゼムケの言葉に席に着くウィッチ達。

「突然の飛行中止に驚いた事だろう。腕は鈍っていないか、ベツカ」

その言葉に前列の方に座っていたウィッチがイエス、ママ、と一言答える。

この部隊では作戦会議中、許可を得ない発言は一切禁止されている。唯一、肯定を除き。

よろしい。とゼムケが一つ頷く。ホームワークの確認のようなやり取りの後、ゼムケが口を開く。

「これから話すことは機密事項が含まれる。先刻配られた書類にサインをしていない者は退室するように」

無論、部屋を出るものはいない。直枝達も指令室で一筆書かされた。

緊張の度合いが高まったブリーフィングルームの中、ゼムケが口を開く。

「ここ最近、6人の仲間たちが相次いで行方不明になった事は知っているだろう。オヘア女史の輸送任務の失敗も」

あちこちでウィッチが頷く。

「ここ数日の調査と検証により事態の把握が進んだ。諸君らも勘付しているだろうが、原因はネウロイ……『人形』のネウロイだ」

その言葉にブリーフィングルームのウィッチ達が困惑した表情を浮かべる。

「詳細は秘匿されていたらしいが、6年前……1939年の時点で、既に入オムスで確認されていた。詳細は私ではなく、当事者からだ」

そこで言葉を切り、ゼムケが後ろに下がる。部屋の明かりが落とされ、代わりにウルスラが前に立った。

「ここからは、私が説明します」

そういうとウルスラは皆に向かって口を開いた。

「初めまして。私はカールスラント技術省所属のウルスラ・ハルトマン中尉です。今は技術者ですが、6年前、私はスオムスの、義勇独立飛行中隊に所属するウィッチでした」

ハルトマンという名も、義勇独立飛行中隊という部隊名も、少し勉強をしているウィッチならよく知っている。前者はグレートエース、後者は統合戦闘航空団の先駆けとなったウィッチ隊だ。この場に入ったウィッチ達も、多くがその名前を知っている。

『人型』と接触したのは、スオムスのヴァルチラ基地における任務中の事です」

そして、ウルスラはかつてあった人型との戦闘について語りだす。

その内容はかつてジェシカ達を前に指令室で話した内容とほぼ同じだ。501の遭遇した人型、そして、『シリンドラー』。今まで秘匿されてきた人型ネウロイの情報に、その場にいたFG56のウィッチ達の表情に驚きの色が広がっている。

私語は禁止されているが、口を押えたり目を見開いたり、リベリオンのウィッチ達が驚愕する様子は、無言の中でも伝わってくる。

「……この度、北海に現れたネウロイも、この人型に連なるタイプだと考えられますが、一部、あるいは決定的に異なる点もいくつかあります」

そういうと、あらかじめ用意されていたスライドの光がウルスラの背後の壁面を照らす。

手にしたフィルムを一枚、一枚とセットし、口を開く。

「便宜上、このネウロイを『セイレーン』と呼称します」  
セイレーン。

欧州の古い神話に登場する、美しい歌声で船乗りを惑わし、岩礁に誘導して船を座礁させる魔物の名称だ。

ウルスラがかるうじて撮影していた数枚の写真は、美しい人魚の姿と伝えられるセイレーンとは似ても似つかない。

下部をハニカム模様のパネルに覆われた巨大なコア。

駆逐艦の艦橋を半ば押しつぶすような形で、いくつもの触手のようなネウロイの一部が甲板や砲塔、駆逐艦の様々な部分に突き刺さって

いる。

船を侵食した寄生虫のようなその異形の姿は、かなり離れた撮影地点からの写真でもそのグロテスクさが伝わってくる。

「このネウロイが操る人型は、今まで確認されているものと形状が異なります」

そういうと、ウルスラが自ら見たものを描き起こした概要図をスライドに映し出す。

「……『人型』ってより『人形』だ」

ぽつり、と直枝が呟く。

扶桑に伝わる、人の形を模して厄を祓う、紙で人を模した『人形』。偶然かどうか、その形状はそれに酷似していた。

「このネウロイは、半人型の子機……『人形』を使用し、ウィッチを操って自らの元に呼び寄せます。そして……」

そういうと、ウルスラは手にした棒でコアを指して一言。

「自らのコアに、取り込みます」

よく見ると、コアの中に点々と黒い影が見える。遠目ではよくわからないが、よく見ると人の形に見えるものもある。

「……」

痛いような沈黙がブリーフィングルームを包む。

「嘘よ……」

その静寂を破ったのは震えるような、まだ幼い小さな声。ウィッチ達が声のした方へと目を向ける。

「嘘よ……それじゃあキャロルは……もう……」

直枝の斜め前に座ったウィッチが呟く。見たところ、12、13くらいだろうか。

「落ち着きたまえ。マクレガー軍曹」

窘める様に、だが、その気持ちを憂慮するようにエイカーが口を開く。

「……イエス……イエス、サー……」

部隊に配属されて間も無いのか、傷一つない階級章をつけた少女が、その言葉に肩を震わせながら口を閉じ、横にいた先輩らしき少女

が、無言のまま慰めるように肩を抱きしめる。  
そんな中である。

「……おい。いいか?」

重い空気を破ったのは、ぶっきらぼうな少女の声。

502 統合戦闘航空団。ブレイブウィッチーズに所属する菅野直枝少尉が手を上げながら口を開く。

ちらり、とウルスラがゼムケを見る。ゼムケに咎める気配はない。

「どうぞ、菅野中尉」

『人形』の数は?」

直枝の質問にウルスラが口を開く。

「ジェシカ……ジョンソン大尉達が交戦した際は一体のみと聞いています。ですが」

「オレ達の時は二体いた」

直枝の言葉にウルスラも頷く。

「……はい。『人形』が複数目撃されたケースは何度か確認されています。今回もそれに準じた警戒が必要です」

その言葉に直枝が口笛を吹く。重苦しい空気を吹き飛ばすような、軽やかな音だ。

「そりゃいい。おい伯爵、一体はくれてやるぜ」

その場にいたウィッチ達が驚いたように顔を上げる。まるで空気の違うその言葉に、先程まで涙をこらえていたウィッチも目を丸くして振り返っている。

その言葉にヴァルトルートが思わず口元に苦笑を浮かべ、許可を待たずに口を開く。

「一体だけ? 少なくない?」

「獲物は仲良く分け合うのがオレ達ブレイブウィッチーズのやり方だろ?」

「ええ……どの口が……」

「聞こえてんぞひかり」

「聞かせているんです、菅野さん」

「……取り込む以外に何か攻撃は?」

502流のジョークの応酬を無視してヴェスナが尋ねる。

「私たちが接触した際は特に動きはありませんでした。しかし、可能性はあります。例えば、ネウロイを生み出す能力。『人形』以外の攻撃型ネウロイを生み出せる可能性は高いと思われれます。当然、それ以外の攻撃もです」

輸送機の護衛の失敗の際には通常型のネウロイも同時に現れた。

フランを操り連れ去ろうとする動きに連動していた以上、このコアが生み出した可能性は高い。

それに、1943年にスオムスに現れた人型及び『シリンダー』は、人型を出している時は攻撃を停止し、人型を回収した時に攻撃を行っている。ネウロイを生み出す他に、直接的な攻撃手段を持っている可能性は高い。

『人形』が出ている間は攻撃が止むという事かもしれませんが。これは猶更、ヴァルトルートさんたちには頑張ってもらわないといけません」

そう言うヴェスナの表情にはうつすらと笑みが浮かんでいる。502の毒気に当てられたのか、揶揄うような切れ長の視線に、直杖が肩を竦める。

「……おい伯爵。お前の後輩だろ。何とか言えよ」

「私からも」

ハルカが手を上げる。

「何で『セイレーン』は海の上でも平気なんですか？」

「この写真と、私とジョンソン大尉の目視から推察すると、船体部分まではネウロイ化していないと考えられます。艦橋と甲板、内部の機関部分だけを取り込み、そのほかの部分そのままにしておけば、ネウロイでも理論上は海上の移動は可能です」

そう言うって再度ネウロイの写真をスライドで映し出す。

「写真と照合したところ、船体部分はリベリオン海軍所属のキャノン級護衛駆逐艦『エルドリッジ』。半年前のガリア解放の直前、ドーバー海峡で消息を絶った同艦と船体部分が一致しました」

「駆逐艦」と乗っ取られたという事ですか」

「そうです」

意外とまともな質問に美也が意外そうな顔をしている。

「ですが、浮力や動力を船に頼っている以上、その速度は速くとも30ノット程度。いざとなれば船の部分を狙えば、『セイレーン』は海上から離れざるを得ません」

「あのっ!!」

「お前は黙ってろ」

ついでとばかりにひかりが手を上げるのを見、直枝が眉を顰める。

「何ですか？雁淵軍曹」

ウルスラの言葉にほっとしたようにひかりが口を開く。

「あの、『セイレーン』は、何で人を取り込むんですか？」

「現時点では不明です」

直枝が無言でひかりの足を蹴飛ばす。それほど力を込めていないが、ひかりはむっとした表情を浮かべて直枝を睨みつけようとする。だが。

「ですが、いい質問です。仮定や推測は可能ですが、確信には至っていません。むしろ、それは私も知りたいところです」

「どうせろくでもない事に決まってる」

「私もそう思います」

直枝の言葉に頷き、ウルスラが皆を見渡す。

「今までネウロイからの人類に対しての接触は、一方的かつ悪意のあるものでした。今回もそうです。ウィッチを取り込むことの目的は不明ですが、目的を理解するよりも先に、一刻も早くこの海域から消し去ることの方が重要です。雁淵軍曹」

最後の言葉はひかりに向けてのものだ。その意図を理解したのか、はい!!とひかりが力強く頷く。

「現時点で把握できている情報は以上となります。他にも何か、我々の想像もしていない事態があるかもしれません……」

「それでも、敵はネウロイで、コアはコア。破壊すれば死ぬ。むしろ、的が大きいのは好都合だ」

ウルスラの言葉を待たず、強く、張りのある声がブリーフィング



ルームに響く。

立ち上がったゼムケがゆつくりと前に進み出る。

「コアの位置がわかつているのなら、そこに向けて銃弾と爆弾を叩き込め。粉々に砕け散るまで何度も繰り返せ。連れ去られそうになった仲間は羽交い絞めにしてでも助け出せ。邪魔をする『人形』は……」  
そう言っつてゼムケが直枝達の方を見る。一人一人を見つめ、一言、口を開く。

「頼めるな？ 統合戦闘航空団の諸君」

「勿論ですよ。 マム」

ゼムケの言葉に皆を代表し、ヴァルトルートが答える。

「もたもたしていると、ボク達がコアまで潰してしまいますよ？」

口元に浮かべた笑みは、いつものそれとは違う、カールスラントのグレートエースの見せる、美しくも獯猛な笑みだ。

部屋に明かりがともり、皆の顔が照らされる。

そこに見えるのは、怯えではなく、僅かな闘志。

確かに彼女たちはまだ経験は浅い。だが、味方を信じ、隊長を信じ、だからこそ困難な任務を成し遂げてくれた。

「諸君、確かにこれは困難な任務だ。だが、決して不可能な任務ではない。我々は今までも不可能と思われる任務にあたり、そして、それを遂行してきた。バトルオブブリタニア、大ビフレスト作戦、ダイナモ作戦。そして、先日のガリア解放戦。その全てにおいて、我々もまた、困難な作戦を乗り越えてきた」

主力となつたHMW、JG52、そして501JFW。その裏では彼女たちのような多くの名もなきウィッチ達はその脇を、後ろを支えてきた。

「それに、この戦いは連れ去られた6名。キャロル。ジャンニス。ベス。アマンダ。ニーナ、リズ。そして、駆逐艦に、輸送機に乗り組んでいた勇敢な同胞たち。この戦いは、彼女ら彼らの魂に、そして、祖国に捧げる復讐の戦いだ」

ゼムケの言葉の一つ一つ、そして、仲間たちの名前が一人一人の呼びあげられる度、部屋の熱気が、ウィッチ達の瞳の力が徐々に高ぶつ

ていく。

「無念を晴らせ。そして思い知らせろ。『群狼』は仲間を奪った者を決して許さないという事を」

その言葉に56FGのウィッチ達が、『ウルフパック』が一斉に立ち上がる。

ブリーフィング中の私語は禁止されているので皆無言だったが、もし許されるのであれば今にも拳を突き上げ叫びだしそうな雰囲気だ。

「作戦開始は明朝0700。ユニットの点検を済ませろ。よく食べよく休め。明日は総力戦だ。『群狼』の銃声と爆撃で北海に響く『サイレン』をかき消せ。蹂躪された魂と誇り、そして北海を我らの手に取り戻せ」

さながら野生の狼の群れの咆哮のような『了解』イエス・マムの声がブリーフィングルームに響き渡る。ウィッチ達は部屋を飛び出し、ハンガーへと向かっていく。

叫び声を上げるもの、思い切り拳を突き上げるもの、仲間の背を力いっぱい叩くもの。皆思い思いの方法で自らを鼓舞して部屋を飛び出していく。

「……あの!!」

直枝達に声をかけてきたのは、先程思わず声を上げてしまった新人ウィッチ。マクレガーと呼ばれていた少女だ。

その瞳はわずかに潤んでいるが、迷いのない強い視線で直枝達を見つめる。

「明日は、よろしくお願いします!!」

その言葉に皆が笑みを浮かべる。

お前もな、と突き出す直枝の拳に、力強い笑みと共に小さな手に握った拳を力いっぱい叩きつけ、先輩のウィッチ達に交じって部屋を飛び出していった。

121

ウルスラとエイカーもその場を去ると、後に残ったのは壇上の3人とジェシカ、そして直枝達統合戦闘航空団の面々だ。

「まるで大統領の演説ね」

ぱちぱち、と手を叩くのはジェシカ。

まだ経験の浅い新兵をまんまと担ぎ上げ、恐怖と悲しみを怒りと勇気に変えた。これがゼムケという隊長の資質だろうか。

「……茶化すな、大尉」

肩を竦めるゼムケ。先程までとは違い、やや肩から力が抜けた雰囲気だ。

「奴等はまだ若い。心の持ちようでは出来ること、出来ない事が大きく変わる。おびえて萎縮しては普段の訓練の成果の半分も発揮できません」

小隊規模と中隊規模、中隊規模と大隊規模では上に立つものに求められる資質は異なる。

これだけの人数の、それも若手のウィッチばかりの大所帯をまとめるためにも、新兵からは恐れられるくらいで丁度良い。

「君達にも感謝する」

そう言い、直枝達へと向き直るゼムケ。

若手達の動揺を察し、敢えて大したことのない敵のように振舞う事で萎縮していた空気を変えた。

空気が読めなかったのではなく、敢えて空気を読まずに違う方向へと持って行った。

その点では、流石はベテランである。

「先行しての小型及び『人形』の露払い。期待しているぞ」

既に統合戦闘航空団側との打ち合わせは済んでいる。『セイレーン』のコアを破壊するための装備に換装したP-47は格闘戦には向いていない。

『コア』に近づくための血路を切り開くのが直枝達の仕事だ。加えて相手には『人型』に似た『人形』も混じっている。その厄介さは一度戦闘を経験した直枝達には痛いほどわかってる。

口で言う程簡単な任務ではない。だが、ヴァルトルート顔にはうつすら笑みが浮かんでいる。

「輸送機が北海を渡れなければボク等も帰れないからね。それに……」

「それに？」

「あんな沢山の可愛い子ちゃん達の前で活躍すればきつと皆ボクに夢中だよ」

「いいよね、リベリアンガール。欧州の子達ともまた違って開放的な感じでき。」

「またかよ、という表情を浮かべ頭を押さえる直枝。」

「その脇ではヴェスナが物理的に刺さりそうな程冷たい視線を送り、わかります、とハルカが鼻息を荒くしている。」

「言っておくがうちの部隊は恋愛は禁止だ」

「ええ!?もつたない!!」

「そうですよ!!私ならそんなルール絶対に認めません」

「……貴女達のために必要になりそうですが」

「ぽつり、とヴェスナが呟き美也もこくこくと頷く。」

「……うちの部隊にいる間だけだ。一人前になれば好きなだけすればいい。ルーキー共が技術を身に着ける前に訓練をおろそかにされては困る」

「まあ、そうだけどねえ……」

「ゼムケの言葉は最もだ。それに。」

「……それに、そんな理由で落とされては、残された恋人が可哀相だろう」

「その言葉には流石のヴァルトルートも苦笑を浮かべて頭を掻く。そういわれてはぐうの音も出ない。」

「その通りです。ええ、全くその通り」

「まいったなあ……」

「そして、先程からヴェスナの視線がチクチク刺さっていたが、今の言葉で更に鋭さを増した気がする。怖い。」

「大佐様……素敵、抱いて……」

「一方、頬を赤らめうつとりとした表情でぽつり、とハルカが呟く。「恋愛禁止って言ってるでしょう。馬鹿なんですか?」

「上官に対しても遠慮のないヴェスナの言葉にひかりがあはは、と苦笑を浮かべる。」

「ルールは破る方が燃えると思いませんか？ひかりちゃん？」  
「思いません……」

いらん子の面々ならまだしも、予備学校で素直な教育を受け素直に育ち、同じ部隊に何人も反面教師がいるひかりにその言葉は刺さらない。

「それに、一夜の関係なら恋愛ではなく快ら……」

「頼むからそれ以上はやめろ。扶桑全体が誤解される」

流石に耐え切れなくなり直枝が後ろから口を塞ぐ。

「……まあ、扶桑のウィッチが変なのしかないのはよく知ってるけど」

ほつり、と呟くジエシカ。

「きつとアンタが会った奴がおかしかったただけだ、ジョンソン大尉」

「ジエシカで良いわ。菅野中尉」

直枝の抗議に肩を竦めるジエシカ。

そういう直枝も普通のウィッチの基準からすると相当ぶっ飛んでいる。オレがコアをぶん殴ればいいとか言い出すウィッチがおかしくないわけがない。

コアをぶった切れればいいと内心思ってたジエシカが言えた口ではないが。

「それに、そつちにも新人がいるみたいだけど、大丈夫？」

「美也」

「大丈夫です。無理は絶対にしません」

ヴェスナの言葉にそう言っただけで拳を握りしめる美也。

「だよ。お前も見習え、ひかり」

横目で無茶ばかりする相棒へ目を向ける直枝。

「三隅さんは優秀だから言われた通りに出来るんですよ。私はもつと頑張らないと……」

こつちに来てすぐに共同とは言え撃墜を記録した美也と、実力不足であわや扶桑に送り返されかけたひかり。

その実力は予備学校時代から知っているつもりだが、その後も、欧州に来てからもきつと自分に負けないくらいの訓練を積んできたの

だろう。

「そんなことない。雁淵さんは今までもつと大変な状況を乗り越えてきたんだから、もつと自分に自信を持ってもらいたいと思う」

「三隅さん……ありがとう」

美也の言葉にひかりが照れたように頷く。

「二人とも、『人形』を相手に一人で行動をしちや駄目だよ。ひかりちゃんは直ちゃんに、美也ちゃんはヴェスナに必ず従う。これだけは必ず守る事」

ヴァルトルートが再度念を押す。ブリーフィングの前から何度も念押ししてきたことだ。

直枝とひかり、ヴェスナと美也は小型に集中し、一撃離脱に徹して決して深追いはしない。

ヴァルトルートとハルカ、それと今回加わるジェシカは周囲を警戒し、もし『人形』が現れたらそれぞれ遊撃を行う。

「連絡は密に。少しでも異常を感じたら必ず無線を使う。ジェシカちゃん、エツタちゃん」

「私達は後ろから、ゼムケ大佐は上から全体を見る。絶対に背後は取らせないわ」

本当は前に出たいが、連携を考えると自分たちがデイフェンダーに回ったほうがチームとしては上手く連携できる。

「助かるよ」

ヴァルトルートの言葉にも当たり前とばかりに肩を竦め、ぽつりと呟くジェシカ。

『『あいつ』を倒すためなら、いくらでも手を貸すわ』

信乃と伊予、フランの為にもだ。ジェシカが背負っているのは、H MWの看板だけではない。

ここに至るまでに身を削った仲間たちの、親友達の誇りも共に背負っている。

それだけは絶対に汚すわけにはいかない。タイムズ紙の独占インタビューには絶対に三人の名前を出してやらなくてはいけない。

それだけはやめろ、と言われそうな決意のこもったその言葉に、

ヴアルトルートも、そして、他のウィッチ達も静かに頷く。

「さて。食堂は士官用でも下士官用でもどちらを使っても構わない。談話室も解放してある。作戦開始までの間に十分英気を養ってくれ」  
ゼムケの言葉に皆が敬礼を返す。

リベリオンの食事は味はさておき量だけは豊富だ。虫抑え程度の昼食しかとっていない皆にとつて、味はともかく腹を大いに満たすことが出来るのは僥倖だ。

特に、オラーシャ方面での前線では、ろくに食事がとれずなければしの固いパンで数日の上を凌ぐこともざらにある。

大規模な作戦前にきつちり腹を満たせる。それだけでも彼女たちにしてみれば有難い事だ。

「……サインをもらえる雰囲気じゃないっすね」  
ぽつり、とエツタが呟く。

『セイレーン』を倒せばそういう雰囲気になるわ」

ジェシカの言葉にエツタが『そっすね』と答える。

いきなりブリーフィングに参加させられたエツタだったが、正直、話を聞くまではそこまで深刻な事態だと思っていなかった。

「……やっぱ『隊長』といるとろくなことないっす」

「そうね。でも、アンタがいてくれて助かるわ。エツタ」

その言葉にエツタがぼかん、とした表情を浮かべ、そして、ぷい、と目を逸らす。

「……そういうの、ずるいっす」

131

「……ん……」

むくり、と信乃がベッドから起き上がる。

膝のあたりに重さを感じて視線を落とすと、椅子に座ってベッドに伏せた伊予がすう、すうと寝息を立てていた。

窓の外に目を向けると、既に日は落ち、薄暗い医務室の灯りに照らされた自分の顔が鏡のように窓ガラスに映っている。

検査服を着て、ぼんやりとした表情を浮かべている自分の間抜けな顔と目が合う。先程打たれた鎮静剤のせいか。ぐっすり眠っていた

ので、眠ってから起きるまでの時間の流れがわからない。

「……今、何時ですかね？」

「1830。遅い目覚めだな、シノ」

その言葉に顔を上げると、両手にプレートを持ったフランが医務室に入ってくるどころだった。器用に足で扉を閉め、近づいてくると、一つを信乃の膝の上に乗せる。

「まだ何も食べていないだろう」

「持ってきてくれたんですか？」

まあな、と頷くフラン。

「起きてから食事が届くまで時間がかかるだろう。空腹は待ってくれないからな」

プレートの上にはパンにはさまれた肉と牛乳。後は皿に乗ったマッシュポテト。味気ないようだが、冷めても食べれるようにとフランなりに配慮してくれたのだろう。

「ん……んん？」

フランと信乃の声に伊予がゆっくりと目を開ける。

「……一応イヨの分も用意しておいたのだが……」

「ハギちゃん!？」

がばり、と飛び起きる伊予。その勢いで膝の上のプレートが落ちそうになり、慌てて信乃が両手でそれをかばう。

「待ってください伊予!!食事が零れちゃいますよ!!」

「あ……」

その言葉に伊予が動きを止め、ちらり、とフランを振り返り、そしてもう一度信乃を見る。

「……その、怪我は……」

少し頬を赤らめながら伊予が尋ねる。

「少し痛みますが、随分楽になったと思います」

「……魔法が効いたんですね」

よかった。と伊予が呟く。

信乃の傷はふさがったものの、まだ内側のダメージは消えていない。なので、昼から先程まで付きっ切りで回復魔法が使えるウィッチ



が魔法を使い続けていたのだ。

『ちよつと痛かったですけど、元気になった事の方が嬉しかったですから』

たんこぶを作らされた相手にも関わらず、そう言うてにつこりと笑みを浮かべた新人ウィッチ。控えめに言つて天使だ。

「……一時はどうなるかと思いましたが、成程。運が良かったですね。あたし」

脇腹をさすりながら呟く信乃。

「イヨも疲れているだろう」

そういつてフランが信乃と同じ食事の乗ったプレート差し出す。

「私は別に……」

「出撃が無いとはいえ、体調を整えるのも我々の仕事だ。体の疲労は心にも作用する。無理をしても食え」

その言葉にプレートを受け取り、肉の挟まれたパンを手に取る。

ぱくり、と、伊予がパンを一口。

「……おいしい……」

固めのパンにはさまれた、味気のない塩味の肉。お世辞にも贅沢な代物とは言えないが、それでも朝食から何も食べていない伊予の口には何よりもの御馳走に感じられた。

無心でパンを頬張り、マツシユポテトを口に運び、パンに奪われた喉の水分を牛乳で潤す。

信乃は物を飲み込むと腹に響くのか、しかめっ面をしながら腹を抑えているが、余程空腹なのか、それとも任務と割り切っているのか、苦い薬でも飲むかのようにトレーの上の食事を平らげている。

「……軍医を呼んでくる。ゆっくり食べろ」

二人の様子を見て安心したように、フランが部屋を出ていく。

しばらくの間、二人は残った料理を黙々と口に運んでいたが、やがて、ぱつり、と伊予が口を開く。

「……ねえ、ハギちゃん」

「何ですか?」

「……ごめんね」

ぽつり、と呟く。

短い一言だが、その言葉に信乃はマツシユポテトを口に運ぶ手を休め、ふう、とため息を吐いた。

「……本当ですよ、と言いたいところですが、仕方ないです。狙われてたのがあたしだったら、同じ事に……」

そこまで呟いて肩を竦める。

「いや、伊予ならあたしみたいに怪我してないですよ。上手くやるはずですし、ジェシカだったら助けるどころか逆に返り討ちです」

そう言って信乃がぱくり、とパンに噛みつく。

「……大丈夫。伊予は強いです。それに、まだ強くなれますよ。あたしと違って」

その言葉がかつての誰かに重なる。

同じような言葉をかけてくれたウィツチ。

同じように、伊予達を庇うために一人でネウロイに立ち向かい、そして、二度と戻らなかった、憧れだったあの人。

『あの時』から比べて私は強くなったのだろうか。

魔力も技術も、そして戦闘の経験も積んだ。

だが、あの時の私が今の私なら、『あの人』は命を落とす事は無かったのだろうか。

ぽつりと考え、首を振る。

そんな事を考えているうちはまだまだだ。

伊予が目指すウィツチはこんなものではない。もっと、もっと。

「……強く、ならなきゃね……」

ぽつり、と伊予が呟く。

そのためにはうつむいてなどはいられない。自己嫌悪も後悔も、一人きりの所で嫌というほどすればいい。

「強くなる。だけど……」

信乃の言った言葉は大方は正しい。しかし、一部決定的に間違っているところがある。

「ハギちゃんも、一緒だよ」

「……え？」

思わぬ言葉に信乃が目を見開く。

そう。信乃もまた、強くなっている。

魔力が減少したというのに、あの時の信乃と比べても、今の信乃は確実に強くなっている。

信乃自身の評価以上に信乃が成長していることは、日常的に模擬戦を行っている自分が一番良く分かっている。

その証拠に、伊予はまだ、信乃と互角にしか戦えない。

「ハギちゃんが強くなるから、私も強くなれる。私に強くなつてほしいなら、まだまだ隠居ぶつた事言ってる場合じゃないよ。『萩谷飛曹長』」

「……藤田、中尉……」

いつからだったか、今では思い返せない。

エリートコースを歩む中尉殿を、名前で呼ぶようになったのは。

生意気な新任少尉殿に、親しみを感じ始めたのは。

「ハギちゃんは強いよ。でも、私も負けない。助けられたからには、次は私がきつと助ける。でも、その次はまた助けてもらうから」

その言葉に伊予をきよとん、と見つめていた信乃だったが、やがて、ため息をついて視線を落とす。

同じ部隊で、同じ年で、友人。そして、好敵手。

たどってきた境遇も、置かれた立場も全く違う。

だが。

先程の言葉に真実があったか。

伊予だけが強くなって、本当にそれでいいのだろうか。

「……そう、ですね」

答えは否だ。

伊予にとつて信乃は越えなくてはいけない存在であるのと同様、信乃にとつても伊予は、超えられたくない、超えられてはいけない存在だ。

昔とは違う。今の伊予は経験の浅い新任少尉殿ではない。自分が教える立場だったのはもう過去の話だ。

「……それに、ハギちゃんももつと戦果を上げないと、本土に戻され

「ちやうでしょ？」

茶化すように放たれた伊予の言葉に、信乃が、うえ、と眉を顰める。いつまでたつても士官教育を受けない信乃に対して、本国からは頻繁に士官教育の誘いが来ている。遣欧艦隊にとつて不要と見做されれば、すぐにでも内地へ送られかねない立場なのだ。

「いやいや。戻つたらまず二度とこつちに来れませんよあたし。せいぜい教官か……」

「技術部のテストウィッチですね」

「……嫌です。それだけは絶対に嫌です」

そう。それが最大の理由だ。

どういうわけか本土の海軍本部は信乃の事を『優秀なテストウィッチの資質あり』と見做しているらしい。

魔法力の問題に直面した際、試製であろうが何であろうが、最新鋭の武器やユニットを貪欲に試した時期が致命的な誤解を招いている。

違う。違うんですよ。

「テストウィッチなんて命がいくつあつても足りません。伊予がやればいいんです」

「嫌ですよ。これでも責任のある立場ですから。中尉ですよ？どこかの万年下士官とは違うんです」

その言葉にぐぬぬ、と憎々し気に伊予を睨みつける信乃。

「あたしは特務士官です。それに、中尉だろうが大尉だろうが、あたしにも苦戦してる伊予なんて小隊長がせいぜいですよ。若二号ですよ」「それじゃあハギちゃんはずつと小隊の二番機だね。若本中尉が上がりをおかえたら今度は私がこき使つてあげるよ」

「あたしは隊長もした事ありますよ。一時的ですけど」

「私だつて戦闘隊長を経験してるよ。臨時だけど」

笑顔で互いの痛いところをぐさぐさと刺し合う二人。もしここが『瑞鶴』なら、そのまま模擬戦に発展するところだ。

しかし。そこで能天気な声が部屋に響く。

「二人とも、思っていたより元気ねー」

「……何をしてるんだ、お前ら」

戻って来たのは軍医ではなく、フランと、見知った顔の女性。

ほんの一日ぶりくらいだが、ひどく久々にその顔を見た気がした。

「……オヘアさん？」

「もしかしてあたしの治療をする気ですか？やめてください。クラツシュさせられます」

「お医者さんはしばらく来ないねー」

にここに、と笑みを浮かべているオヘア。その横では苦々しい顔を浮かべたフランが頭を抱えている。

「……廊下で捕まった。駄目だって言ってるのに無理やり面会させろって……」

「ユーにも用があるね、フラン」

「私にはない。第一貴女は部外者だ。ミス・オヘア」

「部外者じゃないねー」

だが、オヘアは、ちっちちち、と指を左右にふりながら舌を鳴らす。

「ユーたちはミーの護衛ね。忘れたんですかー？」

「忘れてた」

「忘れてました」

「忘れてましたね……」

即答する三人。

「でもノープロブレム!!今思い出したねー!!」

そういうとオヘアが隣のベッドの脇から椅子を引っ張り、そこに座る。

「シノ、ユーは飛びたい？」

「当たり前じゃないですか」

ウィッチである以上、飛べるなら飛びたいに決まっている。腹の痛みもこの分なら耐えられる。元々痛みには強い方だ。

「ユー達は？」

その言葉に伊予とフランが顔を見合わせる。ウィッチというのは基本的に負けず嫌が多い。一度やられた相手にそのままにするのは当然その矜持に反する。

「……ちよっと待ってください。一体何を企んでいるのですか？ミ

ス・オヘア」

伊予の言葉にオヘアはにっ、と齒を見せて笑みを浮かべる。  
それは、まるでスオムスにいた頃のような、ティーンエイジャーの  
頃のような、悪戯っぽい、だが、屈託のない笑顔だった。

何故、ウィッチを志したのか。

その答えはウィッチによって様々だ。世界を守りたい、苦しんで人を救いたい。或いは名声を得たい、自分の力を示したい。

生活の為その報酬に惹かれたものもいれば、ただ空を飛ぶことが好きだと答えるものもいる。

では、そんなウィッチ達の一人、藤田伊予少佐はどうであったのか。

藤田少佐は1942年に欧州に渡り、終戦まで戦い続けたベテランウィッチの一人として知られている。

藤田少佐を評する声は人によって異なる。曰く、正義感の強いウィッチ。勉強熱心で努力家。兵学校出身だが、謙虚で、人の話を聞いてくれる。階級で相手を区別しない、等。

だが、彼女と長い付き合いのあるウィッチは苦笑を浮かべて肩を竦めた。

「あの子、かなり表裏が激しいですよ」

1992年発行『歴史探索』8月号 知られざる扶桑のエース特集より

1942 扶桑皇国 横須賀航空兵学校

――

「……はあ」

藤田伊予『元』一飛曹。

今日付けで少尉に昇進した少女が大きなため息を吐き出す。

扶桑の一握りのエリートウィッチのみが選ばれる欧州への派遣の決定と、少尉への昇進。

同じように欧州へ向かう事を夢見ていた同期や周囲の羨望を受けての辞令の交付を終えたというのに、何故か伊予の表情は晴れない。むしろ、重苦しいと言っても過言ではない。

「……空母勤務、か……」

欧州へ向かう空母の出航まであと一週間程。

その間に手続きを取り荷物をまとめ、もし家族に挨拶に行くなら早めに行くように、という校長の言葉を反芻しながら、新品の第一種士官服の第一ボタンを外す。

予備学校時代のセーラー服は着心地もよくデザインも気に入っていたのだが、士官候補として兵学校へと移った途端に着させられた詰襟の制服は、素材も相まってかどうにも息苦しい。

特に胸の辺りが。

身長割に胸が大きいとはよく言われるが、確かに、背に合わせて注文した詰襟の士官服は素材のせいか、カラーまできちんと止めているときゆうぎゆうと押し付けられて息苦しい。

一応士官学校時代はそのことを訴えて特注の制服を用意してもらっていたのだが、新しく配属になる『天城』にはその情報が伝わっていなかったらしく、新しい階級章の入った詰襟はやはりというかなんというか、一部がやたらと締め付けられる。

『天城』の出航までの一週間で特注できるかどうか。第一ボタンを外していても良いが、伊予の『らしさ』からすれば、これから知り合うであろう新たな先輩達に『だらしない』と思われたくない。

予備学校、兵学校共に品行方正、温和で控えめな優等生という自分を作り上げ、その恩恵にあずかってきた伊予からすれば、いきなりの路線変更は大きすぎる挑戦である。

「浮かない顔ね、藤田『少尉』」

背後からの声にはっと顔を上げ、慌てて胸元のボタンを留めようとするが、くすくすという聞き覚えのある笑い声にその手を止める。

「横川先生!?!」

「何を驚いてるのかしら? さっきまで同じ部屋にいたのに」

どうやら自分が出てくるのを待っていてくれたらしい。入学したばかりの頃からの恩師の笑顔に、ふう、と小さくため息を漏らすと同時に口元に笑みを浮かべる。

「ついさっき『謹んで拝命します』って言ってた子とは思えないわよ、その顔」

「そんなこと……あるかもしれません」



その言葉に愛想笑いを引っ込め、僅かに砕けた調子で肩をすくめる伊予。

「出航もしてないのにホームシック？行く前に一度実家に戻ってきたら？」

「ホームシックならとつくになつて、とつくに治りました。それに、たった一週間の間で南洋島に行って帰って来るなんて、時間がもったいないです」

伊予の故郷は扶桑本土から遠く太平洋を渡った南洋島だ。わざわざ数日を費やして故郷に戻っている暇など今の伊予にはない。

それに、今の状況で家族に顔を合わせる気にはなれない。

虚栄心ばかりが強い父に褒めそやされても、自分の置かれた立場に惨めさばかりが募るだけではなく、父の仕事を『継がされた』兄やレールに乗せられた姉たちの皮肉に晒されかねない。

そんなのはこちらから願ひ下げだ。

「じゃあ何？合わない服が気になるの？」

「それもあります、それだけじゃありません。あとそのジエスチャーは止めてください」

おどけた様に胸を持ち上げる仕草を試みせる教官……横川和美の言葉に、伊予が眉を吊り上げる。

「じゃあ、何が不満なのかしら？」

和美の言葉に、伊予が苦虫を噛み潰したような表情で呟く。

「……私の目標は統合航空戦闘団ですから。せめて欧州の基地勤務かと。空母勤務になるとは思ってませんでした」

統合航空戦闘団は扶桑の、否、世界中のウィッチにとって目指す場所の最高峰である。

激しい戦いを潜り抜けた実力、才能、全ての面において突出しているとみなされても、尚加入する事は難しいウィッチ達の頂点ともいえる最精鋭部隊だ。

勿論、伊予もいきなり配属できるなどと自惚れてはいないが、それならばせめて欧州の最前線で経験を積んで目に留まるような活躍をし、統合航空戦闘団に招聘されたいと思っていた。

だが、伊予に言い渡されたのは欧州の最前線ではなく、扶桑海軍遣欧艦隊機動部隊への配属。

つまり、空母に留まり護衛をするのが主な任務で、前線とは程遠い。女性誌や子供向けの雑誌を飾るウィッチは、欧州のグレートエースや前線で華々しく活躍する扶桑のウィッチばかりだ。遣欧艦隊のけの字も載っていない。

そう。そういった雑誌を愛読する年頃の少女達だけではなく、兵站の重要性を嫌というほど教官に教え込まれているような、ウィッチを志す予備学校生たちにとってもそれは同じ事である。

伊予も当然、入学してから一貫して前線の多国籍部隊への派遣を希望していた。

「養成学校からそのまま遣欧艦隊の機動部隊に派遣されるなんて滅多に無い事よ」

「……所詮私は、『その程度』のエリートだった、って事ですぬ」  
「それ『も』あるわね」

教官に対しての精一杯の皮肉も軽く受け流す和美。

一方、伊予は嫌な予感が現実となった事に内心失望にも似た気持ちかわいてくる。

自分が努力をしたのは、安全な後方でのエリートコースを望んだからではない。

欧州の前線で戦いたい。

そして、その頂点の統合航空戦闘団。いずれはそこで、華々しく欧州の空を駆けまわるはずだった。

それなのに、最初は予備学校の教官という、伊予の希望とはかけ離れた推薦が舞い込んできた。

ちやっかりしている周囲の同期の中には、安全な場所で高い俸給が支払われるとあって羨ましがる者もいたが、伊予からすればたまったものではない。

『君に教えられる教官がないから、君に教官をしてほしい』。

軍の偉い人達から直々にそう言われても伊予は首を縦に振れなかった。

卒業までの間に何度も具申をし、ようやく欧州への派遣が決まったと思つたら後方への配属である。

こんな事ならもつと手を抜くべきだったかもしれない。

思わずそんな事すら考えてしまう程、伊予にとつては不本意な辞令だったのだ。

「私も貴女に教官をさせるのは勿体ないと思つていました」

和美がそういつて伊予の肩を叩く。

「……ですが、遣欧艦隊……空母勤務に推薦したのも私です」

伊予が信じられないといった顔で和美を見る。

教官の中でも、そして周囲のウィッチを含めても、伊予にとって和美は信用できる数少ない人物だったし、自分を、そして自分の夢を理解してくれている人だと思つていた。

「……藤田さん。私が教官となつて色々なウィッチを見てきた中で、入学前から素質があると感じたウィッチに出会つたのは過去において二人だけです。一人は西沢義子さん、そしてその次が貴女」

何度も聞かされた言葉だった。だが、今の伊予にとつてはただのお世辞にしか思えない。

「でも、貴女はまだこれから。だからこそ、貴女にはいろいろな経験を積んでもらいたい」

「……」

到底上官に向けるものではない、非難がましい瞳を向けられても、和美の優しい気な態度は崩れない。

「藤田さんは機動部隊が安全な後方勤務だと思つているかもしれないけど……」

「……失礼します」

何を言つても今の伊予には意味の無い慰めに聞こえるのだろう。強引に会話を打ち切り、敬礼を見せる伊予に、和美が内心でため息をつきながらも温和な雰囲気のまま海軍式の敬礼を返す。

だが、和美には確信があった。

和美は単純に伊予の座学や飛行技術、成績だけを見て彼女の推薦を決めた訳ではない。

粗削りだが、夢に向かつて突き進む貪欲さ。

その為なら周囲にいい子ぶって見せるような計算高さ。

だが、そう言ったあざとさや、慢心していることに気が付かない青臭さも同時に持ち合わせている。

特に、最前線ではその慢心が命を奪う。どんなに魔法力が高くても、飛行技術が優れていても、身の丈を超えた自分への過信は即座に命を奪う事に繋がる。

それに気が付くまでは、彼女の夢はかなう事は無いだろう。

だが。

『あの子』たちがきつと変えてくれる。

今は恨まれても構わない。だが、きつと理解できる時が来る。

伊予を含め、遣欧艦隊という部隊を良く知らないウィッチたちは、空母勤務のウィッチ達を実践に乏しいエリートだとか温い後方勤務と評するが、実際はそんなことは無い。

若本徹子と西沢義子。

扶桑のトップエースの一角、否、名実ともに群を抜いた扶桑最強を誇る二人の天才ウィッチが遣欧艦隊の空母勤務、機動部隊に所属しているのには意味がある。

そして、その意味を知る事が、伊予の夢に最も近い道だと和美は確信していた。

真新しい士官服に身を通し、去っていく教え子の姿を見て、和美は誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。

「……大丈夫、貴女の夢はきつと叶うわ、藤田さん」

1942年 扶桑皇国海軍遣欧艦隊 空母『天城』

— 2 —

どん、という鈍い音がハンガーに響く。

ちらり、と整備兵たちがそちらを見るが、いつもの事とばかりにすぐ作業に戻る。

心配をしていないわけではない。

だが、何を話しかけても取り合う気がないのなら、話しかけても意

味がない。

「……何で……勝てないの……」

拳をハンガーの壁にたたきつけた伊予がぼつり、と呟く。

先程の戦いを思い出す。

天城に来てから一度も勝つことが出来ない、同い年の飛曹長との戦いを。

「っ!？」

「動きが中途半端です、少尉。逃げるなら逃げる、戦うなら戦う。いつまでも迷っているから、簡単に懐にもぐりこまれるんです」

まるで機械のように冷たい口調でそう言いながら模擬銃を胸元に押し当てる少女……萩谷信乃飛曹長の言葉に伊予はぎり、と模擬銃を握った拳を握りしめる。

「……お言葉ですが、飛曹長。迷っているのではなくて、隙を探していたのです」

「今の少尉の技量で見つかると思いますか？」

淡々と言い放つ信乃の言葉に、伊予がぎり、と歯を食いしばる。

「何度でも言います。中途半端な引出しなんて忘れてください。自然と体が動くまで、頭を使う必要はありません。今の少尉がどう小細工をしても、あたしに勝つのは無理ですよ」

そう言つて模擬銃を下ろし、踵を返す同い年の少女。

踵を返した少女の背中に思わず模擬銃を向けなくなる衝動に駆られるが、我慢する。

一度試したものの振り返りもせずに躲かれ、そして、逆に顔面に模擬弾を食らったばかりだ。

これで5戦5敗。信乃だけではない。他のウィッチと戦っても、勝てない。

信乃と戦う機会が多いのも、信乃が現在魔法力の低下からのリハビリ中で、少しでも多く飛ぶ必要があり、そのため、伊予以外にも必然的に模擬戦を行う機会が多いからだ。

現状の信乃はそれまでと比べ格段に能力が落ちていると聞かされていた。

だが、そんな信乃を相手にしても尚、伊予では鹵が立たない。当面の目標は信乃に追いつく事だが、その背中は想像以上に遠かった。何で、勝てないの。

勝てない相手じゃないのに。

飛行技術は自分とそう変わらないか自分の方が上。射撃に関しては明らかに自分の方が上回っているはずだ。

固有魔法が厄介だが、知っていればいくらでも対策がとれる。なのに、勝てない。

初めての模擬戦の事を思い出す。

新藤少佐から紹介を受け、皆に拍手で迎えられた。

兵学校の首席で、士官教育も受けたエリート。その言葉に皆が驚きと称賛の声を上げた。

実際、最初に初めて他のウィッチ達と共に飛んだ時も、少々意地悪な挙動を加えられようが、ぴたり、とその背について見せた。

飛行技術だけなら、今までの新人の中ではトップレベルだな。

美枝に褒められても、喜びより先に、当たり前前だという気持ちが強かった。

後方部隊のウィッチ相手なら、それも当然だという驕り。

思えばその時が、伊予が最も増長していた瞬間だったのだろう。

模擬戦に入ると、それまで伊予の抱いていた自信は一気に崩される事となる。

模擬戦の相手は新藤美枝、若本徹子、そして萩谷信乃。

その全てが、惨敗だった。

美枝相手には一度も背を取ることが出来ず、徹子に至ってはどこを飛んでいるか見つける前に模擬弾を食らった。

そして、三回目の信乃との模擬戦ではことごとく攻撃を躲されたうえ、連戦の疲労から動きが鈍ったところで背後を取られ、圧倒的に不利な状況に追い込まれたところで、美枝から模擬戦の中止を伝えられた。

実力は解った、という美枝の言葉に、思わず激高し、まだやれます、と訴えても、美枝は首を縦には振らず、その場は解散となった。

みじめすぎて泣きたくなかった。

勝てなかった事もそうだが、周囲にその事実を晒したこと、そして、階級も経歴も下の信乃が、実は魔法力の低下で普段の実力とは程遠かったという事実も、伊予の積み上げてきたプライドをズタズタに切り裂いた。

しかし、それは伊予の誤解だ。

本来であればさほど気に病む必要はない事なのだ。

扶桑海軍のウィッチは基本的に予備学校上がりで下士官……軍曹に当たる二飛曹が最低階級となるが、昇進に厳しい扶桑海軍で一飛曹……曹長に上がるころには皆一端のウィッチとなっている。

他国で言えば中尉、大尉レベルのウィッチが扶桑では一飛曹を務めていることも決して少なくはない。

尉官への昇進の為に士官教育を受ける必要があるが、基本的にそのためには一度扶桑に戻る必要がある。最低でも数か月、長くて一年近くかかるその教育機関の為に部隊を開けようとするウィッチは、将来的に内地に戻る事を考えているか、或いは部隊内での昇進に熱心な一部のウィッチなど、ごく少数に留まるのだ。

そして、そういった多数のウィッチの中でも飛曹長……欧州の部隊で言えば准尉に当たるが、そこまで来ると下士官の中でも特に優秀なものにしか与えられない特務階級であり、その権限は一般的な尉官と同等か、場合によってはそれを上回るとされている。

少尉の中でエースと呼ばれるウィッチはごく少数に過ぎないが、飛曹長の中でエースでない者はいない。

純粋な実力で尉官待遇を勝ち取ったウィッチが、例えば実力の半分だろうが、兵学校上りの新任少尉を翻弄することなど容易な事だ。

信乃は決して手を抜いていたわけではない。

普段の実力が出せないからこそ、そして、そんな状況で手を抜けば落とされると理解したからこそ、本気で伊予を落とすにかかった。

それだけでも、伊予の潜在能力の高さは十分に証明されていたのだ。

美枝が止めたのも、藤田伊予というウィッチの素質を十分に理解し

たからと、信乃の魔力の消耗を気にしたからで、決して失望したからではない。

だが、伊予はそう受け取れなかった。

今までの誇りが、夢が、敗北を認めることを拒否している。

ここでもたまたましては、いつまでたつても前線には行くことが出来ない。

自分が夢見た統合航空戦闘団で活躍することなど、いつまでたつても叶うはずがない。

焦燥感で気が狂いそうになる。こんな状態では、いつ国に返されてもおかしくはない。父親の期待に満ちた瞳が失望のそれに、兄たちのそら見たことかという侮蔑の表情を想像するたびに、叫びだしたいような気持ちに押しつぶされそうになる。

「荒れてるね、藤田少尉」

「……っ!？」

振り返り、そこに立っている髪の毛長いウィッチを見、居住まいを直す。

「……見苦しいところをお見せしました。飯森中尉」

いいよいいよ、と敬礼をする伊予を手で制する。

飯森房子中尉。

遣欧艦隊初期から部隊に参加し、美枝や徹子らと共に戦い続けた最古参の一人で、遣欧艦隊の戦闘隊長でもある。

遣欧艦隊以前の美枝との付き合いは長いが、気さくな性格で徹子達のようなたたき上げのウィッチ達とも親しく接している。

決して声を荒げることはないが、空での腕は美枝と同等。

否、戦闘技術も含めた総合力では美枝以上ともいわれるウィッチだ。

「何か私に？」

「うん。体力、残ってる？」

にこにここと尋ねる房子に、眉をひそめて尋ね返す。

「……はい、それが何か？」

「もう一回、飛んでみない？」



そういうと房子はくい、と空に向けて指を伸ばした。

— 3 —

「はい、これで終わり」

っん、と背中を模擬銃でつつかれ、房子が口を開く。

矢張り駄目だった。いつか信乃に目に物みせてやろうとこっそり練習していた捻りこみを駆使しても、背後すら取れない。

「来たばかりの頃から全然成長してない。むしろ駄目になってる」  
ぎり、と伊予が拳を握る。

解っている。そんなことは解っているのだ。

だけど、どうすればいいかわからない。何がおかしいのか、何が間違っているのか。

だが、房子は銃を下ろすと、思わぬ言葉を口にした。

「あー。やっぱり模擬戦はダメだね。ダメダメ。こんな事何十回、何百回やってももうまくなんてならないよ」

思わぬ言葉に『は?』と思わず口を開く伊予。

そして、それが失言だったと気が付き、謝罪を口にする前に。

「藤田少尉、前の模擬戦でハギが何て言ったか覚えてる?」

それが何か、と悪態をつきそうになるが、にこにこことほほ笑む房子を前に、僅かながら理性がまさる。

正直、頭に血が上って覚えていない。いや、思い出すことを感情が拒否する。

銃口を突き付ける時の、あの醒めた目で見つめられると、何も考えられなくなる。

「いえ、何も……」

「そっか」

その言葉に房子がため息をつく。仮にも上官の質問に最悪の答えをしてしまったことに、叱責を覚悟した伊予がうつむく。

だが。

「うん。そうだよ。私だって嫌だ。流石に怒るよ。あんな態度じゃ先輩失格。悪い子だ。ハギは」

え?と思わず声が漏れる。思わぬ房子の言葉に理解が追いつかない

い。

「ところで伊予ちゃん。上官からの質問。必ず答えて。敵の背後から銃を撃つときの鉄則は？」

「伊予ちゃん……って、何ですかその呼び方……」

「上官からの質問だよ？早く答えて、10、9、8……」

突然のカウントダウンに言葉を飲み込み、そして、ややおいて口を開く。

「……必ず後ろを見て、敵がいなか確認。それから撃つ、です」

伊予は教科書の内容はほぼ一字一句間違いないくらいには読み込み暗記している。だが、教科書は教科書、実戦は実戦。状況次第では不要ではないかと思う内容も少なくはなかった。

「正解。伊予ちゃん、今それしてた？」

「一対一で必要ありますか？」

「無いよ」

言い切る房子。当然のことだ。

だが、房子はそんな伊予の心中を見透かしたように、更に口を開く。

「でも鉄則は鉄則。鉄の掟なんだ。たとえ模擬戦だろうが、私もハギも、新藤も必ずやってる。もちろん、徹子もだよ」

「……え？」

思わず声が出た。そんな事、遣欧艦隊に来てから一度もやったことがない。

「気が付かなかったでしょ。でも、生き残るウィッチは必ずやってる。伊予ちゃんも気が付かないくらいに無駄なく、ほんの一瞬で。何故だかわかる？」

伊予の顔を覗き込むようにして尋ねる房子。思わず伊予は顔を伏せ、もぐもぐと口を開く。

「……いえ。でも……」

そんな余裕なんかない。目まぐるしい模擬戦の挙動では、そんな基礎的な動きなどしている暇がない。とにかく信乃を捕らえ、隙があれば引き金を弾く。

それで兵学校時代はいくらでも勝てた。信乃の動きはとらえきれ

ない程でもない。勝てるチャンスはいくらでもあった筈だ。

だが、勝てなかった。

「いいかい伊予ちゃん。兵学校の教科書ってのは、戦場に出たウィッチが……私達が死ぬ思いで得た教訓しか書いてない。伊予ちゃんの背後確認一つをとつても、多分今のハギの10倍は遅い。……その意味、解る?」

そういつて、ぽん、と伊予の頭に手を乗せる。

「多分ハギは言っていた筈だよ。一つの動きに集中しろつて。後ろにつかれたら逃げるための、『最善の』教科書通りの『最善の』動きを、後ろについたら攻撃するための『最善の』動きを。今はまだ、負けて当然。でも、基本を磨けば少しづつでも強くなる。いきなり強いウィッチはたまにいるけど、いきなり強くなるウィッチは見たことない。ここにきて、伊予も気が付いたでしょ?」

「……あ」

その言葉に、不意に信乃の言葉が頭をよぎる。

中途半端な引出しなんて忘れてください。

そう。確かに言っていた。

自分自身に余裕が無い中で、きちんと自分を見ていた。

「基本が身につけていないのに、基本を崩す事なんて出来ないよ。今のままだと、伊予ちゃんはいつまでたつても成長出来ない。折角良い筋してるんだから、それじゃもったいないよ」

そう。

きちんと信乃は言っていたのだ。自分が何をすべきかを。

ただ、それを伊予は聞いていなかっただけ。聞こうとしなかっただけ。

「……そう……だったんだ……」

ぽつり、と呟く。

情けなくて、恥ずかしい。

プライドをへし折られた時、皆の前で醜態をさらした時。

そんな事なんてどうでもいいくらい、今の自分が情けない。

意地悪でも、嫌みでもない。

あの子は、萩谷飛曹長は、きちんと言葉にして伝えてくれていたのに、私は何も聞こうとしなかった。

それだけの情けをかけられてなお、些細なプライドに固執していた事に。

「……あの、飯森中尉……」

「ん？」

「……あの……その……」

「うん」

にこにここと、優しい笑みを浮かべながら房子が頷く。促すでもなく、急かすでもなく。

「……ありがとうございます……ごいます……今まで、すみません、でした……」

口にするのと吃驚するくらい楽になる。

ああ、きつと、もつと、屈辱的な気分になるかと思っていたのに。

「……いいよ。信じてたから」

短い返事。だが、今の伊予にはそれで十分すぎるくらいだった。

「だから……教えてください。一から、私に」

その言葉に、房子はにっこりとほほ笑んだ。

そして。

その日から伊予は変わった。

信乃との模擬戦は相変わらず連敗続きだ。

しかし、負けても今までのように荒れた態度は見せなくなった。

そして、模擬戦が終わると房子と共に空を飛ぶ。ひたすら基本に忠実に。勝つことよりも、自らを一から見直し、確認するかのよう。

そのせいではたから見れば更に腕が落ちたとも見えるが、そうではない。

やっていることは基礎動作の確認。それを迅速に、正確に行う。房子が後ろを追いかけ、ひたすら基礎的な回避行動を。そして、カメラを手に、房子を追いかけ何度も攻撃のタイミングを。それを日が暮れるまで繰り返し確認していた。

「遅いよ、伊予ちゃん。若なら今の一瞬で視界から消える。もつと気

を配って」

「はい!!」

房子の後につきカメラを構えた伊予が答える。再度カメラを下ろし、房子の背を追い旋回。

白い航跡雲が、空に二筋の曲線を描いた。

— 4 —

「……」

その様子を見上げている信乃。ランニングの足を止め、どこか眩しそうに、その様子を見つめている。

「悔しいか、ハギ」

背後からの声に信乃がびくり、と身を竦ませる。

「若……」

そんな事は……と言いかけた信乃の頬に徹子が手にした瓶を当てる。

「ひぁ!?!」

「どうした?好きな奴だろ?」

そう言っ手渡されたラムネを受け取り、そしてしばらくそれを見つめた後、名残惜しそうにその瓶を徹子に戻し、首を振る。

「……訓練中ですから」

「温くなっても後悔するなよ」

そう言ってもう一本を目の前で開ける徹子。美味そうにしゅわしゅわとしたソーダ水を飲み干す様子を若干羨ましそうに見つめていたが、ぐつと堪える。

今はまだ、自分を甘やかす時ではない。

体力をつけようと走り込みを始めて、いかに今までの自分が魔法力に頼りきりだったか、痛いほど理解できた。

予備学校時代は日課だった運動で息が上がってしまうほどに体力が落ちている事に気付けただけでも、自分を見つめなおすには良いきっかけだった。

そう。

そう思わないと、ともすれば心が折れそうになる。

まずは薬でぼろぼろになった体を鍛えなおす事だ。

今の自分では実戦に対応できない事は、自分自身が痛いほど理解している。

「……アイツはもつと強くなるな」

だが、そんな信乃の気持ちを知ってか知らずか、ぽつり、と呟く徹子。

「……はい」

ぴくり、と一瞬眉が動いたが、その言葉に信乃も頷く。

否。頷かざるを得ない。

ほぼ毎日のように模擬戦を行っているから解る。

今の伊予はまだ、もう一度スタートラインに戻っただけだ。

今までセンスだけで飛んでいたためあやふやだった土台を、もう一度作り直す為。

目の前の伊予の姿が誰かに重なる。

きつと、伊予は強くなる。恐らく、自分の想像しないようなペースで。

「……諦めるか?」

「……諦める訳、無いじゃないですか」

徹子の問いかけに信乃が首を振る。

魔法力が減少した信乃に与えられた選択肢は2つ。扶桑に戻るか、ここに留まるか。

そして、後者には一つの条件がある。

配属された新人が実戦を迎えるまで、彼女に模擬戦で勝利し続ける事。

実戦に出すことが出来ないような新人にも劣るようなら、どのみちここに残っていても生き残ることは出来ない。

そのことは十分に承知している。自分に求められている最低限のボーダーラインも。

そして、本来の自分に求められていた筈の役割も。

戦場で本当に必要なのは『飛ばした方がいい』ウィッチではない。

『飛ばさなくてはいけない』ウィッチだ。

勿論、そこに至るまでは、実戦での経験が必要不可欠だ。伊予にはまだそれが欠けている。

それを補うまでは、周りのフォローが必要不可欠だ。

だが、信乃はそうではない。

伊予とは違い、実戦を積んでいる。新兵ではない信乃に求められているハードルは、もっと高く、もっと厳しい。

飛曹長の肩書を背負っている以上、ようやく実戦に出れる新人と同じレベルに甘んじているようでは、この遣欧艦隊ではただのお荷物だ。

そう。

本来、温情など必要ない。

自分が戦場に不要な存在なら、切つて捨ててもらわうべきだ。だからこそ。

「……強くなります。あたしは、もっと」

「……そうか」

信乃を扶桑に戻すように進言したのは他ならぬ徹子自身だ。そして、徹子は美枝が出した条件にも納得していないだろう。

美枝の条件は甘すぎる。

そして、信乃もそれを理解している。

徹子はどうにか戦えるだけのウイツチを二番機に付けるようなウイツチではない。

徹子が求めているのは、戦えるウイツチではない。自分の僚機と胸を張って言えるだけの、強いウイツチだ。

それだけの素質があつたからこそ、かつての信乃は徹子に鍛えられた。

今のあたしはそうではない。だから、若は何も言つてはくれない。

「……そうだな。オレは弱い奴の背を庇つて戦うつもりはない」

「……あたしも、背を庇われるつもりはありません」

そう言つて信乃は背筋を伸ばす。徹子に背を向け、前を向く。

「あたしはもう、前のあたしとは違うんです。だから、今のあたしに出来ることをするだけです」

そう言つて自らの頬を叩く。

今の自分の弱さは、他ならぬ自分自身が一番良く解っている。

今の自分は、若の後を雛鳥のように着いて回っていた自分でも、薬で恐怖を殺して言われるままに飛んでいた強行偵察部隊の一員でもない。ただの一介の飛曹長だ。

だからこそ、自分の弱さに言い訳は出来ない。弱さは全て自分で受け止めるしかないのだ。

だから、強くなる。強くなつて、飛ばなくてはいけない。

自分の前で散つていった、『ヴァジエト』の仲間たち。そして、助けられなかった人たちの分まで、自分は強くならないといけなのだ。



## 2-19. Her silent bravery

0400 ウェストハムネット基地 第一格納庫

—1—

翌日のウェストハムネット基地は、日の出前にも関わらず、あちこちから騒がしい声が上がっていた。

ハンガーでは整備兵が出撃に備え、夜を徹してストライカーユニットの最終調整を行っている。

そんな中、56FGの気の早いウィッチ達が何人も、自分のストライカーユニットに足を通し、或いはM2機関銃を手にとって、今日の作戦に向けての準備に余念がない。

「ふあ……」

「早いですね、クルピンスキーさん」

第一ハンガーに足を踏み入れ、自らのユニット、メツサーシャルフBf-109の方へと歩いていたヴァルトルートに、いち早くハンガーで機材の点検をしていたひかりが声をかける。

「一番乗りだと思ってただけ。元気だね、ひかりちゃん」

「……えへへ、それだけが取り得ですから」

ヴァルトルートの言葉に照れたように頭を搔くひかり。

確かに、かつてのひかりならそれも間違いではないだろうが、502JFWでの戦いや生活を経た今、その言葉は他のウィッチが聞けば、只の謙遜にしか聞こえないだろう。

しかし、他の部隊のウィッチの実力を知らないひかりからすれば、自分は未だに『一番下』のウィッチなのだ。

ヴァルトルートがひかりの言葉を否定したところで、ひかりの立場としては、それは先輩の優しいお世辞といった風に感じてしまうのも無理はない。

「それより、『チドリ』の調子はどう?」

「はい。昨日まで右足の舵の効きが少し重かったんですけど、ばっちり治ってます」

ある程度経験を積んだウィッチなら、魔導エンジンを始動する前に

足を通しただけでユニットのコンディションを掴める。502に入隊してから一貫してこの『チドリ』を使用していたひかりなら、猶更そのコンディションは敏感に感じ取れる。

その様子を見ていた整備兵が口を開く。

「雁刈軍曹は咄嗟の回避で左旋回を行う事が多いみたいですから、その辺りが痛みやすいんですよ」

ウィッチにはそれぞれ戦い方に癖がある。

直枝の二番機に付けることが多いひかりは、ネウロイの攻撃を避ける際に直枝との交錯を防ぐため左に体をひねることが多い。そのため、咄嗟の挙動でも右か左かと言われると左側に旋回を行う癖がついている。

だが、そんな事情はこの整備兵は知らない筈だ。

驚いたような顔をするひかりだが、ウィッチ同様、習熟した整備兵ならストラライカーを見ただけでそれを扱うウィッチの癖や戦い方で把握できるものだ。

「へえ、そこまできちんとしてくれたんだ」

「皆さんは今回の作戦の要ですから、特に入念に仕上げておきました」扶桑の整備兵に笑顔を浮かべ、ヴァルトルートが口を開いてユニットに足を通した。

整備兵の言葉通り、少ない部品や予備のメルスから引っこ抜いていたペテルブルグの時とは違い、魔法の伝達が格段に良くなっている。

ヴァルトルートの固有魔法『マジックブースト』は、強力な反面、魔導エンジンや魔力の伝達系統に大きな負荷をかける。そのせいで魔導エンジンも含め、あちこちガタが来かけていたパーツもあつたはずだが、この様子だとほぼオーバーホールに近い形で整備しなおしたのだろう。

一日でここまでの整備がされているとは思っていなかったもので、思わずヴァルトルートが感嘆の声を上げる。

「いいね。まるで新品みたいだよ」

「リベリオンのお蔭でここでは部品の節約とは無縁ですから」

かつかつの物資で常に四苦八苦しているペテルブルグの整備兵が

聞いたらすさぞ羨ましがる言葉だろう。

最も、四苦八苦させている原因の多くは、ヴァルトルートやひかり達『ブレイクウィッチーズ』が生み出したりもしているのだが。

まあ、普段から苦勞を掛けている分、彼らの努力に報いるためにも、一刻も早く物資をペテルブルグに届けなくてはいけない。

「無事に戻って来れたらお礼をしなきゃね」

「そうですね!!あ、でも、お菓子くらいしかないですし……」

「じゃあひかりちゃんかハグしてあげたら?きつとすごく喜ぶよ」

「そんなの下原さんかクルピンスキーさんくらいです」

「クルピンスキー中尉、雁瀨軍曹」

二人の言葉に目を細めていた整備兵が、ポケットから取り出した『それ』を二人に渡す。

「え?キャラメル……ですか?」

『それ』を受け取ったひかりが目を丸くする。

「うちの部隊の願掛けですよ……一昨日、あのユニットに乗ってた子にも渡してあげたんですが……」

ぽつり、と呟いた整備兵の視線の先をヴァルトルートがたどると、そこには、今回は使用されない二機の扶桑のストライカーユニットが、ヴァルトルート達のユニットと同じく、丁寧に整備がされていた。

零式54型試作2型に、紫電改42型。

生々しい血に塗れたまま雨の滑走路に転がっていたそのユニットは、そんな事を忘れさせるくらいに奇麗に塗装が塗りなおされ、ウィッチさえいれば今すぐにも空を飛べそうだ。

どんな気持ちで整備兵達があこのユニットを直したのか。それが解らないヴァルトルートではない。

「……だったら、効き目は抜群だね」

ポケットにキャラメルをしまいながらヴァルトルートが笑みを浮かべる。

そう。ユニットに乗っていたウィッチ……信乃は助かったのだ。

自分達を送り出した後、地上から見送る事しか出来ない整備兵達の気持ちは解らないでもない。

JG52の時も、機材の不調や負傷等で飛び立つ仲間を見送らざるを得なかった事があったが、その時の時間は過酷な戦場に放り出された時よりも、遥かに長く感じられたものだ。

「ねえ、ひかりちゃん。『あの』リベレーターよりはマシなお守りだと思わない?」

「酷いです。きちんと役に立ちました」

からかうようなヴァルトルートの言葉に、ひかりが抗議の声を上げる。

リベリオン製の世界一役に立たない拳銃は、一度はヴァルトルートの命を救い、そしてもう一度はネウロイの巣『グレゴリー』を破壊したのだ。勿論今でもひかりのポケットにはその『お守り』は大切に仕舞われている。役立たず扱いは納得がいかない。

「……ところでひかりちゃん。それも『お守り』?」

ヴァルトルートの言葉にひかりが一瞬きよとん、となる。その視線の先……ヴァルトルートが自らの左腕にまかれた黒い腕章を見ている事に気が付いたひかりが、いえ、と首を振る。

「さつき貰ったんです。その、特別な戦いだから、って……」

その言葉にヴァルトルートが改めて周囲を見渡すと、ユニットを点検しているリベリオンのウィッチや整備兵達も皆、同じように黒い腕章を腕に巻いている。

「あの……」

そして、ヴァルトルートにも声がかけられる。

その声に戻ると、そこには、リベリオン制服を着た、まだあどけなさを強く残す二人のウィッチが立っていた。

一人は、負傷した信乃を救助した回復魔法を使えるウィッチ。

そして、もう一人は、先日のブリーフィングで話しかけてきたウィッチだ。

「あの……クルピンスキー中尉……ですよね?」

ブリーフィングで話しかけてきたウィッチがおずおずと尋ねる。

「そうだけど、どうしたんだい?」

「お願いがあるんです」

対照的に、はきはきと口を開いたのは回復魔法を使えるウィッチの少女。

動きやすいように長い髪を後ろで一つに縛ったその姿は、先日回復魔法を使っていた時と比べ、随分と澆澆とした印象を与える。

二人とも、年齢的にはヴァルトルトの趣味の範囲には収まっていないが、あと2、3年もすれば思わず声をかけてしまいそうな素材の良さを感じさせる。

「これ、キャロル達の……仲間たちのコードレターなんです。もしよければ、皆さんもつけてくれませんか？」

そう言っただけ昨日話しかけてきたウィッチ……確か、マグレガー軍曹と呼ばれていた少女が腕章をヴァルトルトに差し出す。

よく見ると、黒い喪章には小さな文字で『HV』と『LM』で始まる6つのコードレターが刻まれている。

「……いいのかい？ボクが貰っちゃって」

「もしよろしければ、是非お願いします」

「はい、キャロル達も統合航空戦闘団の皆さんと『一緒に』戦える事を喜んでくれるはずですから」

そう言われては受け取らないわけにはいかない。

まだ幼さを残すウィッチ達から差し出された腕章を受け取ると、ヴァルトルトが笑みを浮かべる。

「もしよければあと3……いや、4つくないかい。後、君たちの名前は何？」

「私はリベリオン陸軍第八軍団第56戦闘群軍曹、ディアナ・シリングです」

「同じく、ニナ・マクレガーです……あの、昨日はお見苦しい所を」

はにかむように名を名乗る二人の少女達。

「気にしてないよ。仲間のために悲しむのは大事な事だからね」

「……しかし、軍紀に反してしまいました」

そう言っただけ表情を陰らせるニナ。

それを見てヴァルトルトがほほ笑むと、その肩をぽん、と叩く。「確かにそうだったかもね。でも」

そう言って、受け取った腕章の一つを腕に通すヴァルトルト。

「軍紀と仲間なら、ボクは仲間を取るよ」

二ナがその言葉に顔をあげる。

「ほら。『これで』この子達も今日でエースの仲間入りだね」

そういうとヴァルトルトが腕章を通した腕を二人に見せる。

彼女が思わず名前を呼んだ少女は彼女にとって上官か、先輩か、或いは友人だろうか。

感情をコントロールできないのはまだ軍属となって日が浅いからかもしれない。

しかし、仲間を想うその気持ちは流れる月日だけでは手に入らないものだ。

「どう？ 似合うかな？」

「……はいっ!!」

ヴァルトルトの言葉に二人のウィッチが揃って頷く。

ウィッチは只の兵士ではない。この欧州で、人々の希望を担い、そして、笑顔を与える存在なのだ。

だからこそ、時にはそう振舞わなくてはいけない。

まだ若いウィッチ達が自分の背を見て憧れるように、彼女達もまた、いずれ誰かの希望になりうる存在なのだから。

0400 ウェストハムネット基地 第二格納庫

—2—

「ああ、素敵!! ついに智子お姉さまが降臨しました!!」

一方、少し離れた航空機用のハンガーの隅では、『クラッシャー・オヘア号』のヘア号』の前でハルカが頬に手を当て、うっとりとしたような表情を浮かべていた。

「……注文の多いお嬢さんだぜ……」

げんなりとした顔を浮かべているのは『クラッシャー・オヘア号』の機関士のボブ。ノーズアートが得意で、仲間の機体や、時にはウィッチのユニットにも描いてやる事もあるが、こんなに注文の多い娘は初めてだった。

目の前には、ようやく仕上がった追加のノーズアート。渡された写

真だけを頼りに書き始めると、やれお姉さまはもつと胸が大きいだの、お姉さまの目はもつと力強く、かつ限りない暖かさにあふれているだの、やれお姉さまの髪はもつとサラサラとしているだの、注文が多い。

「お嬢ちゃん!!このままじゃ出発に間に合わないぜ。これで勘弁してくれよ!!」

目の前には完成(ボブ的には)した新たなノーズアート。『扶桑の巴御前』こと穴吹智子大尉が、ハルカの注文により海軍のボディースーツを着て、照れくさそうにこちらを睨みつけているという中々にフェチズムをくすぐる仕上がりになった。

「いいえ!!お姉さまを描くのであれば完璧にしないと……」

「それでいいね、十分ねー!!」

ハルカの隣に立っていたオヘアがハルカの言葉をかき消すように叫ぶ。

「今でもちよつと美化しすぎね!!このまま続けるとトモコがロマーニヤの絵画の天使様になるねー!!」

「何言っているんですかオヘアさん。むしろ智子お姉さまはこの世界に降り立った天使ですよ」

真剣な顔で基地外じみた事を言い出すハルカに肩を竦めるオヘア。

「とつととハンガーに戻るね。ハルカがいると怪しまれるねー」

「もうちよつと、もうちよつとだけ!!」

「……何してるんだアイツ」

一方、遠めからそんなハルカの様子を若干引いたように見ている直枝。

ハンガーに向かう途中で首を絞められた発情期の猫のような声でしたので覗いてみれば、これである。

「お前こそ、ここで何をしている?」

背後からの声に振り返ると、そこには見知らぬ背の高い女性。

流暢なブリタニッシュだが、纏っているのはリベリオンの制服ではなく、私服のようなライダージャケット。その下からはブリタニア空軍の制服が覗いているが、直枝は見たことが無い。

「……誰だアンタ」

「運送屋だ」

「嘘だ」

「ああ。嘘だ」

顔を顰める直枝に対し、飄々とした口調で肩を竦めるビューリング。

「ハルカの知り合いか？」

「あんな奴知らん」

「いや……オレは知ってる……『義勇独立飛行中隊』の……」

「ビューリング!!どこ行ってたね!!ミーがいない間ハルカを止めるのはユウの仕事ね!!」

エリザベス・F・ビューリング。

確か、ブリタニアの古い雑誌か何かで見たことがある。

国際ネウロイ監視航空団に所属し、その後義勇独立飛行中隊へと渡り歩いた、協調性が無い孤高のエース。

「あんた、雑誌か何かに載った事は？」

「あるんじゃないか？私は見てないが」

「オレは見たことあるぜ」

「忘れてくれ。どうせろくな事しか書いてなかっただろ」

「感銘を受けた」

「猶更忘れろ。私はウィッチの中でも最も悪い見本だ」

「菅野少尉!?!一体どうしたんですかー!?!」

ハンガーの入り口に立っていた二人を見つけ、オヘアとハルカが大声を上げる。

「ていうか、アンタこそこんな時に何してんだ」

直枝がハルカに言い返す。新兵でもあるまいし。

悠長にこんなことしてる場合じゃないという事はわかっているはずだ。

「え？あ、いやあ……あの人が、智子大尉の絵を描いているのを見てもたつてもいられなくなつて……」

「呑気にお絵かきか？良い身分だな」



「はあ、と直枝がため息をついて輸送機……C-47を見上げ、んと眉を顰める。」

「何だこれ」

「オヘア。私まで描くなと言っただろう？」

「描くなど言われれば描くに決まってるまーす」

そこに描かれていたのは、7人の少女。よく見ると、オヘアにハルカ、ウルスラまでいる。

「それに、ユーがいなければいらん子中隊にならないでーす」

「いらん子……義勇独立飛行中隊か？」

「そうね。いらん子ねー」

ほつり、と呟く直枝にオヘアが答える。

「そうか……でもな……」

C-47に描き出されていたのは最初から描かれていたオヘアに合わせて妙に肌面積の多いボディスーツを身にまとったいらん子中隊の面々。

更にはリベリオンだけではなく、扶桑、ブリタニア、カールスラント、ロマーニヤ。そしてスオムスのそれぞれの国旗。極めつけは『Crusher OHEA and others』の文字。

もはや迷彩どころか見つけて沈めてくれと言わんばかりだ。

「……頭痛え」

大きくため息をついて直枝が頭を押さえる。もはやどこから突っ込んでいいかわからない。

「菅野少尉じゃない。久しぶり」

「あんたは……」

近づいてきたブルネットの女性を見て直枝が眉を顰める。ある意味、ここに今最もはいけない類の人間だ。

グラフ社のカメラマン。デビー・シーモア。

「ああ、安心していいよ。カメラは取り上げられているし、記者室からは一歩も出させてもらっていない」

「出てるじゃねえか。それにその手にしてるのは何だ」

「これは特別。オヘアさんとこの基地の司令に頼み込んで、これを一

枚だけ取ることを許してもらった」

そういつて手にしたカメラを振って見せるデビー。

「おい記者。終わったらとつとと帰るぞ」

見ると、お目付け役だろうか。先日信乃を取り押さえていた小柄なリベリオンウィッチがぶつきらぼうな口調でデビーに話しかける。肩からはこれ見よがしに機関銃をぶら下げているが、デビーは気にした様子はない。

「全部終わったら君達にもインタビューしていいかい？」

「駄目に決まってるんだろ。何も話せねえ」

記者たちもデビーも、今基地で何かが起こっていることは知らされているが、それが何かはわからない。むしろ、積極的に知ろうとすればそのまま銃殺刑になる可能性もある。

「それじゃ菅野少尉。またどこかで」

「再会場所が天国になりたくなければとつとと歩け」

少女に促されてデビーがその場を後にする。

はあ、と直枝が肩を落とす。出撃前からどつと疲れた。

「こんな時に本当、何やってんだ……」

機密保持が保たれている証左かもしれないが、あと半日後にはあの世にいつているかもしれない自分達との温度差にめまいがしそうだ。

「こんな時だからねー」

そう言つてオヘアが直枝にウイंकを送る。

「ネウロイはきつとユー達が倒してくれるね。そうしたらすぐ出発です。絵なんて描いてある暇なくなるね」

「……勝手にやってろ」

「イエス、勝手にやってるねー」

呆れた様に一声吐き捨てる、直枝はハンガーを出た。すぐ後ろからハルカも出てくる。

「……なあ、本当にただ絵え描いてるだけだったのか？」

ぼつり、と呟きながら振り返る。

ハルカは普段通りとも、意味深ともとれる笑みを浮かべたまま、その問いには答えなかった。

時刻は0840。冬のブリタニアにしては珍しく天気は晴れ。遅い太陽が伸びり始めると、ウエストハムネット基地の周辺も徐々に明るさを増していき、雲一つはない、とはいかずとも、久しぶりの青空が一面に広がった。

ウエストハムネット基地の滑走路には、まるで見本市か何かと見まごう程の大量のストライカーユニットが並び、その間を整備兵たちが縫うように走り回っている。

そんな中、ジェシカはスピットファイアMk22……『J E—J』のコードレターが刻まれた愛機に足を通し、機材の離陸前チェックを行っていた。

「どつすか？隊長」

「飛んでみるまでは何とも言えないわ。アンタこそ、使ってる印象はどう？」

ジェシカの言葉にエツタが笑みを浮かべる。

「悪くないっすよ。Mk. IXに比べて馬力はあるっすけど、旋回性は余り落ちてないっすから」

「そ。じゃあ問題ないわね」

エツタが言うのならそうなのだろう。

「いい加減っすね」

「信じてるのよ」

「嘘っす。どうせちよつとでも気に入くわないと私のせいにするつもりっす」

「そこは信じなさいよ」

苦笑を浮かべ合う二人のブリタニアウィッチ。そして、二人の腕にはヴァルトルートに渡された黒い腕章。

「準備は出来た？二人とも」

「勿論よ」

ちらり、と目を声の方に送り、短く答えると、隣でB f—109に足を通していたヴァルトルートが頷く。

「その腕章、つけてくれたんだね」

「クルピンスキー中尉の為じゃないわ。別に私はこんなのはどうでもいいもの」

ジェシカの腕章を見たヴァルトルトの言葉に肩を竦める。

両脇に目を向けると、ジェシカやクルピンスキーだけでなく、直枝やひかり、ヴェスナや美也、ハルカといった面々も皆FG56のウィッチ達と同様、腕に腕章をつけている。

「素直じゃないっすね」

苦笑を浮かべるエツタにジェシカは肩を竦める。

「嘘じゃないわ」

別に彼女達の為でもない。自分は自分のために戦っている。

自分が活躍した翌日、自分の戦果を伝える新聞の記事を読むのが何よりも楽しいし、活躍に応じた俸給で休日を楽しく過ごすのはまさに至福の瞬間だ。

僚機が落とされないようにするのも、味方が減れば責任を問われ、結果として自分が不利になるからで、決して彼女達の為ではない。

それに、味方が落とされた後の休日は、そのウィッチの顔が頭をよぎって楽しむ気になれなくなる。

そう。自分の為だ。

自分の為にも、仲間には生きていてもらわなくてはいけない。

「私は自分の為以外に飛ぶ気はないわ。人のために飛んだところで、碌な事になった試しがないもの」

「口だけっすよ。口だけ」

「五月蠅い」

いちいち茶々を淹れてくるエツタをじろり、とにらみつける。

「いいロツテですねえ」

その様子を見てハルカが笑みを浮かべる。他のウィッチ達も同様だ。

「そうっすよ。感謝するべきっす。隊長の御蔭で私の撃墜数が減ったっす」

「素直じゃない僚機ね。シノなんて文句ひとつ言わずついてくるわよ」

「何言っても無駄って知ってるからっすよ」

直接話したことはないが、あの扶桑のウィッチとは一度ゆつくり話  
がしてみたい。色々分かり合える気がする。

「……さて、そろそろ時間だよ」

クルピンスキーの言葉に皆口を閉じ、表情を引き締める。

しばらくの沈黙の後、ぽつりと直枝が口を開く。

「……いくぜ、ひかり」

「はい、菅野さん!!」

「無茶は禁物。でも、全力を出さないと落とされるわ、美也」

「了解です」

ヴェスナの言葉に美也が頷いた。

前衛を任された二組のロッテが互いに言葉をかけあう。

「それじゃ、右は任せるよ、ハルカちゃん」

「はい。左はお任せです、伯爵様」

ジェシカが無言で懐中時計に目を向け、顔を上げるとおもむろに呟  
いた。

「エンジン始動」

ジェシカの言葉に整備兵がクランク始動のレバーを引く。

発進ユニットが自動でエンジンを回し、ジェシカが魔力を叩き込む  
と同時に一気に回転数が上がる。

左右につけたウィッチ達も同様にそれぞれのユニットを始動させ  
る。

それぞれの国籍を持つユニットが異なるエンジン音を上げ、勇まし  
い重奏を滑走路に響かせる。

「こちら菅野一番!!紫電改、出るぜ!!」

「雁淵ひかり、『チドリ』、出ます!!」

最初に飛び出したのは直枝。すぐ後をひかりが続く。

続いてヴェスナと美也が続き、ヴァルトルートとハルカがその後を  
ぴたりと追う。

「行くわよ!!エツタ!!」

「了解っす!!」

ジェシカの合図とともに二足のスピットファイアMk. 22が滑走路へと滑り出す。

第一陣となるJFWとHMWのウィッチ達が飛び立つと、すぐさま後ろに控えていたFG56のウィッチ達が飛び立つ。

「行くぞ『群狼』!!」

掛け声と共にゼムケが飛び立ち、その後を追うように次々とP-47を履いたウィッチ達が空へと上がる。一列が飛び立てば整備兵がすぐさま発進ユニットを脇へと運び、正面がクリアになると同時に次の列が飛び立つ。

空で一度旋回しながら4機つつのフォー・フィンガーを組み、ゼムケを中心に幾層もの楔型の隊列を組む。

「ハルトマン中尉」

「はい」

その言葉にゼムケの二番機についたウルスラが答える。先日のモスキートではなく、FW-190A-8。本来のウルスラのストライカーだ。そして。

「二ナ。いけるか?」

「はいっ!!」

ウルスラの改造したモスキートを履いた二ナが頷く。一晩付きっ切りでウルスラに使い方を教わった探査機のヘッドセットを耳に当て、ゼムケの言葉に答える。

「相手の速度は鈍重です。大まかな方向だけでいいので、音を逃さないように」

「了解……このまま12時、距離は300000です!!」

部隊からさらに高度を取り、ストライカーの限界高度まで上昇した位置から敵の位置を探索する。

「指示は私が出す。ハルトマン中尉は周囲の警戒と状況に応じた作戦指示を頼む」

「解りました」

フリーガーハマーを背負ったウルスラが頷く。4番機に付けたディアナと共に、補足された際の最終防衛を担うのもウルスラの役目

だ。

「……今度は、最後まで戦います」

ぽつり、と眩き、ウルスラが周囲へ目を向ける。

まるで双子の姉のような鋭い視線を周囲に向け、その頭では今後起こりうる様々な状況を計算し続ける。

「来やがったぜ!!」

前方を飛んでいた直枝が叫ぶと同時に一気に加速。

「行くぜ、ひかり!!」

「了解!!」

下方には無数のネウロイ。こちらが大部隊で来ることを察したか、その数はこちらのウィッチの総数か、それ以上か。

だが。

「遅え!!」

そう叫ぶと同時に急降下した二足の紫電改がネウロイの編隊の頭から突っ込む。ほぼ垂直の落下と共にネウロイと交錯。同時に、先頭を飛んでいたネウロイが一気に6機、光の破片となって飛び散る。

「オレが5機だ!!ひかり!!」

「わたしが2機です!!ずるしないでください、菅野さん!!」

互いに背を合わせ降下すると同時に周囲のネウロイを一気に蹴散らす。すぐさま身をひるがえして左右に分かれ、ネウロイが反応するより早く高度を取るため急上昇。再度ネウロイの編隊に突っ込み、上昇と同時に99式2号改を同時に掃射。編隊を突き抜け更に高度を取ると同時に、更に4機、ネウロイがはじけ飛ぶ。

「……すごい、雁淵さん」

「行きますよ、美也!!」

流れるようなひかりの動きに一瞬目を奪われかけるが、ヴェスナの言葉に美也もすぐさまダイブ。

「美也、後ろについて」

「はいっ!!」

上空の敵を察知したネウロイが数機、ヴェスナと美也に熱線を浴びせる。

「美也、冷静に。シールド解除と共に撃ちなさい」

「はいっ!!」

熱線が届く寸前、ヴェスナのシールドがそれを弾く。躲すことなくそのまま突っ込み、熱戦が途切れた瞬間。

「美也!!」

「はいっ!!」

ヴェスナのMG42と美也の99式が同時に火を噴く。更に4機、ネウロイが光の破片となって空に花を咲かせる。

「っ!!」

撃墜にも美也はヴェスナの背から目を離さない。ヴェスナがシールドを張ると同時に自身もシールドを展開。ネウロイの間をくぐり降下したまま速度を稼ぐ。

「撃墜数の稼ぎ時だ!!ひかり!!」

「はいっ!!」

ヴェスナ達を追おうとしたネウロイに狙いを定め、高度を取った直枝とひかりが再降下。美也の背後に取り付こうとしていたネウロイを一気に落とす。

「ひかり!!そのまま美也の後ろだ!!」

「菅野さんは!?!」

ひかりの言葉に笑みを浮かべ、直枝が旋回。自動空戦フラップが落ちると同時に、鋭くネウロイの本隊に切り返す。

「このまま抜ける!!」

真つ直ぐ向かってくる直枝に動揺したように、ネウロイが回避を始める。だが。

「逃がすかよ!!」

直枝が吼え、引き金を弾く。動きの遅れたネウロイを次々に撃ち落としながら、ど真ん中を突っ切っていく。

「くっ……後ろ……っ……」

一方、美也は背後からびたりとつけてくるネウロイを振り切れずに旋回を続けていた。雷電の旋回能力では巴戦は不利だ。徐々にネウロイの姿が近づいてくる。



「美也!!」

ヴェスナが高度を上げてその背後を突こうとするが、それよりも先に。

「三隅さん!!そのまま真っ直ぐ!!」

「雁淵さん!!」

ひかりの言葉に美也が雷電の火星エンジンに魔力を込める。扶桑のユニットには無い加速力で一気にその場を離脱しようとする美也の後ろから3機、ネウロイが追うが。

「このおっ!!」

自動空戦フラップを落とした『チドリ』が鋭く切り込み、ネウロイの背後を取る。

99式の引き金を弾くと、美也の後ろについたネウロイが3機、光と共に消失する。

「ついできて!!」

叫ぶと同時にひかりが美也の前に飛び出し、そのまま上昇。すぐ後ろをぴたり、と美也がつける。

「大丈夫!?!三隅さん!?!」

「あ、ありがとう……」

雁淵さん、と口を開こうとしたその瞬間。

「雁淵さん、美也!!」

「え……」

ヴェスナの言葉にひかりが目を見開く。

目の前の太陽を背に、黒い影が二人に向かって急速に近づいてくる。

だが。

「させない!!『マジックブースト』!!」

その間に割って入るようにヴァルトルートが弾丸のような勢いで飛び込んでくる。

身体をしなやかに捻らせ、そのまま急降下してきた『人形』と並ぶようにMP43を斉射。

ひかりに取り付こうとしていた『人形』が思わずその場を離れよう

とした瞬間。

「エツタ!!」

「はいっす!!」

エツタの構えたボーイズMk. 1対装甲ライフルの弾丸が『人形』の頭を射抜く。

動きを止めた『人形』に、美也が99式の斉射を浴びせると同時に、『人形』が光の粒と消える。

「やるじゃねえか、うっす!!」

「うっすじゃねえっす!!エツタっす!!」

直枝の歓声にエツタが抗議の声を上げる。一瞬の喜びもつかの間、残った小型ネウロイが再び集まりはじめ、一斉に高度を取るため急上昇を始める。

だが。

「馬鹿ね、そこは地獄の入り口よ!!」

ジエシカが叫び、シールドを展開。

集まってきたのが運の尽き。その空間を覆いつくさんとばかりに広がったシールドが一線に凝縮し、一筋の光の刃へと変わる。

「終わりよ!!『エクスカリバー』!!」

巨大シールドを圧縮した光の刃が上昇しようとするネウロイを次々に切断する。僅かにそれたネウロイもその熱量に焼かれ、そのまま光を放って消え去る。

「うわ……」

おもわずひかりの口から嘆息が漏れる。残った小型ネウロイの数十機が、瞬く間に切り裂かれ、或いはバターのように溶けて消え去る。

「……ふう」

「馬鹿なんっすか?いきなり最終兵器をぶっ放すとか?」

呆れたようなエツタの言葉にジエシカがふふん、と笑みを浮かべる。

「あんたがいるなら大丈夫よ、ウイングガール」

「……馬鹿が悪い方向に進化してるっす」

「……いやいや、凄いな」

苦笑を浮かべるヴァルトルート。

「それよりも警戒です!!」

ハルカの鋭い言葉に皆が周囲へと目を向ける。

「第二波、まだ来ないようです」

ヴェスナの言葉に皆が頷く。

「流石にこんなに早く終わるとは敵さんも思ってたねえだろうよ」

直枝が呟く。

ジェシカのお蔭で時間が稼げた。余裕をもって編隊を組みなおし、周囲への警戒へと当たるウィッチ達。

「隊長、私達は後方警戒つすよ?」

「知ってるわよ。アンタが良い恰好したから」

「じゃあもう二度と撃たないつす」

ジェシカの言葉にエツタが肩を竦める。軽口を叩き合いながらも、その視線は周囲に配られ、ほんの少しの異変も逃すまいと目を配らせる。

『こちらヴァルトルート。FG56、敵は?』

『こちら『LN—M』、こちらより10時方向、距離は10000。敵性反応、増えています!!』

二ナの魔導無線に皆が10時方向へと目を向ける。

「第二波のおでました。気合い入れろ、ひかり、美也!!」

直枝がぱん、と掌を拳で叩く。

「はいっ!!」

「了解!!」

ひかりと美也が新しい弾倉を99式にセットしなおし、ヴァルトルートとハルカが周囲に目を配らせる。

『こちら『LM—Q』。降下ポイントを確認!!』

「行くよ!!皆!!」

ヴァルトルートの言葉に再び押し寄せるネウロイの群れに向かう。

「中型発見!!」

「デカイのは貰うぞひかり!!」

「了解です!!」

敵編隊の中央部に位置する一際大きいネウロイに向けて直枝が飛び込む。その背後にひかりがぴたり、と付け、次の瞬間、ネウロイが熱戦を放つと同時に同時にシールドを張る。

直枝が吼え、99式から放たれた12.7mm弾が群がるネウロイを薙ぎ払う。

「美也は右!!」

「了解!!」

直枝とひかりの両脇、左右に分かれたヴェスナと美也が両脇から取り付こうとする小型ネウロイを撃ち落とす。

そして。

「ひかり!!」

「はいっ!!」

直枝の脇からすり抜ける様にして中型に近づいたひかりが一瞬、その装甲に手を触れる。

次の瞬間、ひかりの瞳が赤い色を帯び、身体をしならせると同時にフラップの急旋回を利用しつつネウロイから距離を取りつつ狙いを定め。

「そこだあっ!!」

片手に持ち換えたひかりの99式から放たれた12.7mm弾がネウロイの装甲の一点に集中する。

装甲が割れ、その奥から赤く輝くコアが露出する。

「菅野さん!!」

「おう!!」

誰よりも早くひかりの動きに反応した直枝がコアに向けて99式の引き金を弾く。

硝子が割れるような音と共にコアが弾け、中型ネウロイが次の瞬間はじけ飛ぶ。

一歩間違えればどちらかが大怪我を負ってもおかしくない超近接からの連携攻撃に、思わずその場にいた皆が息を飲む。

「次だ!!」

直枝の掛け声に、皆がすぐさま目の前の敵に意識を戻す。

「……凄い……」

ぽつりと、56FGのウィッチの一人がその動きに見入ったまま  
呟く。

第502統合戦闘航空団『ブレイブウィッチーズ』。

先日あれだけの大見得を切っただけの事はある。ストライカーの  
扱いはもとより、個々のウィッチがまるで一つの大きな個体のよう  
に有機的に補うような連携。そして、その合間を縫うウィッチ達の熟  
達した動き。

人類の最前線で戦う攻勢部隊の実力に、思わず皆の目が奪われる。

『こちら『HV-A』、目標を補足した。前を向け!!『群狼』!!』

その言葉に皆がはっと我に返る。眼下には黒い海。

そして、一筋の航跡を残しつつ、『それ』が徐々に近づいてくる。

駆逐艦の船体に、巨大な黒い卵のようなネウロイの本隊。写真では  
コアだった部分はハニカム模様のパネルに覆われ、周囲には無数の小  
型ネウロイがひしめいている。

『見つけたぜ、『セイレーン』!!』

魔導無線にウィッチの声が響く。

『こちら『LM-Q』!!第一中隊及び第二中隊は私に続け!!』

中隊長を務めるウィッチの声に56FGのウィッチ達が一斉に降  
下体制に入る。

高度10000メートルの距離からリパブリカンP-47ストラ  
イカーユニット『サンダーボルト』のP&WR-2800、ダブルワ  
スパ魔導エンジンが一斉に唸りを上げ、雷鳴のような音と共に一斉に  
『セイレーン』に向けてダイブを始める。

『LM-Q』、小型ネウロイ、こちらに向かって来ます』

『まとめて蹴散らす!!第一小隊、ぎりぎりまで引き付けろ!!』

その言葉に先陣を切っていたウィッチ達が一斉にM2重機関銃を  
構える。

『私の合図で撃て!!3、2、1……!!』

撃て!!の掛け声に合わせて、一斉にウィッチ達が機関銃の引き金を弾  
く。狼の唸り声のような機関銃の咆哮と共に、次々と小型ネウロイが

はじけ飛び、『セイレーン』への道が開けていく。

『第二小隊!! M9グレネード投下準備!!』

その言葉に一斉に第二中隊のウィッチ達に通学鞆のような形状のM9グレネードキャリアを構える。

鞆のようなキャリアに小銃用のM9グレネード弾を12発。投下スイッチを押す事で安全ピンを抜いたグレネードが落下するだけの非常にシンプルな爆撃装置だが、シンプルだけに扱いは簡単で、かつ故障の心配が殆ど無いという旧式ながら信頼性の高い兵器だ。

第一部隊が散開し、第二部隊が直上から『セイレーン』を補足した次の瞬間。

『投下!!』

合図と共に一斉にキャリアから切り離されたM9グレネードが、『セイレーン』に降下し、そして、次々と爆風を上げる。

表面を覆っていた黒いハニカム様様のパネルが次々に削り取られ、やがて、赤い光を放つ巨大なコアが徐々にその姿を現していく。

『…………』

写真だけだったその姿が露わになるにつれ、56FGのウィッチ達も、上空で指揮を執っていたゼムケ達も、そして、直枝やジェシカ達前衛部隊のウィッチ達も思わずその息を飲む。

「…………これが…………」

露わになった『セイレーン』の巨大なコア。間近で見ると、赤く輝くコアの奥で物言わぬ姿となったかつての仲間たちの姿がはつきりと捕らえられ、思わずウィッチ達が息を飲む。

だが。

『キャロル!! 待って!! 今助けるからっ!!』

二ナの叫び声が無線に響く。その声に、一瞬攻撃を躊躇っていた56FGのウィッチ達の瞳に力が灯る。

『第三中隊!! 爆撃投下!! 『セイレーン』を黙らせろ!!』

その言葉に第三中隊…………部隊の中でも練度の高いウィッチ達の手にした500ポンド爆弾が投下装置により次々とネウロイのコアに落とされていく。急降下により亜音速に達したP-47から次々と

放たれる大火力の爆弾により、『セイレーン』がまたたく間に爆炎と煙に包まれ、金属的なネウロイの悲鳴のような叫びが北海に響き渡った。

『やったか!?!』

魔導無線にウィッチ達の歓声が響く。

だが。

爆炎が晴れ、その場に姿を現した『セイレーン』の姿に、その場にいた誰もが言葉を失う。

未だ健在な深紅のコア。

そして、そのコアを守るように展開する『シールド』。

その文様は、欧州のウィッチ達が使用する魔法陣と酷似している。

それだけではない。

周囲を取り囲むように出現した無数の小型ネウロイと『人形』ネウロイ。

「ネウロイが……シールドを……?」

誰かの声が魔導無線に響く。

その声は僅かに震え、そして、誰もが目の前の『ありえない』光景を呆然と見つめていた。

だが。

「……上等じゃねえか」

ぽつり、と直枝が呟く。99式2型2号を握る指に、そして、もう反対の腕にも力を籠める。

むしろこれからが本番だ。欧州でも、否、この世界でも屈指の攻勢部隊の502JFWにとって、今までの戦いなどほんの準備運動に過ぎない。

「ひかり、ビビってんじゃねえぞ」

「菅野さんこそ、腰が引けたりしてないですよね?」

直枝の言葉にひかりが笑みを浮かべる。

燃料も弾薬も、残りは半分といったところか。

否、まだ半分も残っている。猛吹雪の中で弾薬が尽き、大型ネウロイを前にしたときに比べれば、ようやく肩の力が抜けて本調子になっ

た程度といったところだ。

状況は圧倒的に不利。だが、ひかりの教官はあのエディータ・ロスマン曹長で、その僚機は菅野直枝中尉なのだ。

この程度で怖気づくような軟な鍛え方をされているウィッチではない。

だからこそ、直枝が叫ぶ。その場にいる皆の勇気を奮い立たせるように。

「行くぜ!! 『相棒』!!」



## 2—20—I. SIREN

0930 ウェストハムネット基地 司令部

—1—

ノイズ交じりの魔導無線から断片的に伝わる、ウィッチ達の声に、司令部から窓の外を眺めながら、エイカー准将が拳を握りしめた。

作戦の終了予定時刻は既に過ぎている。

過ぎているが、ネウロイによる電波妨害は治まる気配はない。

先程までは辛うじて交信が可能だった無線も、今やノイズ交じりの断片的な音声を僅かに聞き取れるだけで、こちらからの通信に応答は無い。

それが意味する事は一つ。

コアの破壊の失敗。

そして、次に想定されるのは、敵ネウロイの反攻だ。

「……救護班を滑走路へ回せ。ネウロイの襲撃に備えて衛生兵と整備兵以外の手隙の兵士は対空砲火の用意」

「はっ!!」

傍らに控えていた兵士の一人がその言葉に短く敬礼をし、部屋を出ていく。

「ブリタニアに回線を繋げ。フランチースカ中尉他2名の出撃停止は現時刻を持って解除。スクランブル用意、第三、第四ハンガーの戦闘機部隊も用意させろ」

矢継ぎ早に指示を出すエイカー。それでもまだまだやるべきことは多い。

多数の負傷者を想定し、ウェストハムネットだけではなく近隣の空軍基地へのウィッチの受け入れの要請と、ブリタニア政府に、ネウロイの予測進路に該当する都市への緊急避難指示の警告。

そして、その合間合間に無線機から聞こえてくるノイズ交じりの魔導無線。

ぎり、と歯を食いしばる。

たった今戦場で戦っている、自分の年からすれば娘のような年齢の

ウイツチ達。

まだ若い、中には幼いと言ってもいい年齢の少女が、今まさにネウロイによつて命の危機にさらされている。

声は届いているのに、助けることは出来ない。

そう。

かつてエイカーも、一人の戦闘機乗りとして国の平和と自らの誇り、そして愛するものを守るために空を駆けていた。

だが、今の自分は何だ。

安全な部屋の一室で、少女達の悲鳴を聞く事しか出来ない、窓に映る自分の姿を睨みつける。

頬に深い皺を刻み、きつちりと整えていたブラウンヘアは白髪交じりのそれに変わっている、年老いた自分自身の姿を。

「……無様だな、アーノルド……」

ぽつり、と呟いた、その瞬間。

「た、大変です准将!!」

慌てて飛び込んでくる兵士の言葉にエイカーが振り返る。

「どうした!?何があつた!!」

「輸送機が一機、第二ハンガーから滑走路に向かっていきます!!」

「……なんだと!?!」

その言葉にエイカーが視線を落とす。窓の外、滑走路へと向かう誘導路を進んでいく一機の輸送機。

その機首には大きなノーズアート。

穴吹智子、エリザベス・F・ビューリング、エルマ・レイヴオネン、キャサリン・オヘア、ジューゼツピーナ・チュインニ、ウルスラ・ハルトマン、そして、迫水ハルカ。

見間違える筈が、否、嫌でも見間違えようの無いその輸送機……『クラッシュヤー・オヘアといらん子中隊号』が、無人の二番滑走路へ向かい悠々と進んでいく様子を、エイカーは唾然として見つめていた。

— 2 —

「おい!!その輸送機!!止まれ!!止まれっ!!」

「危険です!!戻ってください!!ミス・オヘア!!」

叫びながら整備兵達が滑走路に向けて移動していく『クラツシャー・オヘア号』を追いかけながら無線に向かつて呼びかける。

『こちらウエストハムネット管制、『クラツシャー・オヘア号』へ、離陸は許可できない、繰り返し……』

管制室からひっきりなしに届く離陸中止の無線に、だが、C-47の操縦桿を握ったオヘアは従うことなく逆に口を開く。

「何度繰り返し返されても答えは同じね!!危険は百も承知ね!!」

『ミス・オヘア!!一体何をしている!?!』

管制に割り込むように、無線の向こうから怒鳴る男の声が聞こえる。

「離陸の準備ねー!!」

『そういう意味ではない!!』

エイカー准将の怒鳴り声がコックピットに響き渡る。

『ミス・オヘア。民間人の輸送機の無断使用、本来なら軍議にかける必要があるが、今なら特別に不問にする。すぐに戻れ』

だが、その言葉にオヘアはオーウ、とどぼけた様な声を上げる。

「ミーのパパは弁護士ねー。裁判なんて怖くないね」

とんでもない答えが返ってきた。

「……何故だ?ミス・オヘア。何を考えている?」

「決まってるね、ジエネラル・エイカー」

エイカーの問いにオヘアが答える。

「皆を『助け』に行くね!!」

明快な答えだ。

あまりに明快すぎて、思わずそれが正しいと錯覚しそうなまでに。だが、エイカーは首を横に振る。

長年の経験が、常識が、その言葉を肯定する事を拒む。

『君一人ではどうにもならん!!それに……』

「ミー一人じゃないね。頼もしい子達も一緒ねー」

『……何!?!』

その言葉に視線を落とすと、整備兵達を振り払うように基地に待機していた……否、飛行禁止を解除し、スクランブルの準備を行っている

た筈のウィッチ達が滑走路へと向かっていた。

『イヨ、フラン、シノ、首尾はどうね?』

無線周波数のスイッチをウィッチ専用の魔導無線に切り替え、才へアが声を上げる。

『目的地』まで送り届けるのが私たちの任務ですから」

紫電改42型で滑走路に進む伊予が肩を竦め。

「私達の任務は輸送機の護衛ですし」

零式54型に足を通し、99式2号20mm機関銃を肩にかける信乃。

「戦闘は禁止だが、護衛は禁止されていない……いや、無理がないか? いや、無理じゃない……いや……」

ぶつぶつと口に手を当てながら自分に言い聞かせるようにP-47Mを滑走路に向かわせるフラン。

『何をしている!!ガブレシエフスキー中尉!!今すぐ戻れ!!』

エイカーの怒鳴り声に思わずびくり、と身を竦めるフランだが、口を開く前にしれつと伊予が無線に向けて一言。

『すみません。無線が不調のようでよく聞こえません。出撃停止は解除された様ですし、以後は輸送機からの指示に従います』

あまりにも白々しい言葉にエイカーが絶句する。

「……いいですか、フランチースカ中尉。私たちはあくまで事情を知らずに輸送機を護衛しようとしていたら、たまたま空で事情を知った体を装うんです。上官の命令は聞こえなかった。いいですね」

無線を用いず、フランの耳元で囁く伊予。

「それと、全部終わったら魔導無線は海に捨てて……落としておいた方がいいですね。後から調べられると厄介ですから」

反対側からこそつと耳打ちをする信乃。

丁寧な軍紀違反のアドバイスをするウィッチ達。

それを横で聞いていたビューリングが肩を竦める。

「全く。そんなに命令違反が楽しいか」

3人の後続き、『ハリケーン』に足を通したビューリングがポケットから取り出した『ほまれ』の最後の一本に火をつけながら滑走路に

侵入する。

「命令違反？なんのことですか？」

「私たちは『任務』に忠実に従っているだけですよ？」

しれっと答える信乃と伊予。

「護衛……そう、これは護衛。間違っていない。間違っていない」

「結構だ。うちの後輩にも見習わせたい。お前らは最高だ」

心底愉快そうにビュリリングが笑みを浮かべる。

そう。

これはあくまで『護衛』だ。

元々の伊予たちの任務は輸送機の護衛。機密任務から外された以上、空で何が起きているか等知る由もない。

目的地がカウハバだろうが戦場のど真ん中だろうが、輸送機がそこに向かうというのなら、輸送機とその『積み荷』を『護衛』するのが護衛部隊の任務である。

その護衛対象である『クラッシャー・オヘアといらん子中隊号』に積み込まれた『積み荷』。

ウルスラがこっそり持ってきた研究中の対ネウロイ用高性能爆薬に加え、密かにかき集められたありったけのネウロイ用爆薬。その総数約2トン。

ハルカやウルスラの密かな協力によりかき集められた爆薬により、『クラッシャー・オヘア号』は今や空飛ぶ爆弾そのものだ。

『こっそり詰め込むのが大変だったねー。502の子が来たときは正直肝が冷えたねー』

オヘアの言葉にしばらく沈黙が続いていたが、無線越しにエイカーがぼつり、と一言。

『それでどうにか出来ると思っっているのか？』

『出来る、出来ないじゃないね。やるか、やらないかね』

『命の保証はない』

『そんなの、ネウロイ相手なら皆一緒ね』

一瞬の沈黙。そして、エイカーが再度口を開く。

『……何故、そこまで出来る。ウィッチではなくなった君が』

その問いは、オヘアに向けられたものか。

或いは、オヘアを通した『誰か』に向けられたものか。

『……ユーと同じね。エイカー准将』

『……何?』

オヘアの言葉にエイカーが呟く。

『ユーだって、戦えるのなら戦うつもりね。命をチップにして、あの子達を救える勝算が少しでもあるなら、きっと同じことをするね』

『それは……』

『するね。もしユーが、『あそこにいる』パイロットと同じ年なら、きつと飛んでるね』

その言葉に、エイカーが顔を上げる。

第一滑走路に向かうリベリオンの戦闘機。

ネウロイを相手にするには、余りに非力なウィッチ以外の戦闘手段。

だが、そこに乗り組んでいるパイロット達は、例え勝ち目の薄い戦いだろうが、『飛ぶ』という使命から逃げ出そうとはしない。

もし、彼等が今命をかけている可憐な少女達を、この国に住む人々と己の誇りと共に見捨てるという馬鹿げた命令を出されたなら、果たしてどうするか。

もし、自分が56FGの司令である『アーノルド・エイカー准将』ではなく、第一次ネウロイ大戦時のエース、『アーノルド・エイカー大尉』ならどうしていただろうか。

答えは明白だ。

可憐な少女達が助けを求めているのだ。

ならば、飛ぶに決まっている。

「さあ、急ぐね!!ユーが悩んでいる間に若い子達が命を落とすね!!  
ジエネラルなら決断するね!!ミスター・エイカー!!」

普段の能天気な声とは違う、一喝する様な強い声。

そう。

『今の』彼女は、退役して悠々自適な生活を送るテキサスのカウガールではない。

例えストライカーユニットで飛ぶことが出来なくても、戦う手段を残している一人のエース。

ネウロイとの戦いの黎明期、後のJFWの基礎を築いた『いらん子中隊』のウィッチにして、リベリオンの英雄。

『クラッシャー・オヘア』ことキャサリン・オヘア元少尉だ。

「……解った」

オヘアの言葉に、エイカーが覚悟を決めた様に、ゆっくりと顔を上げた。

「……司令部より管制室へ。私が許可する。ミス・オヘアを滑走路に誘導したまえ」

— 3 —

「イエス!!」

管制室からの無線にオヘアがぱちん、と指を鳴らし、魔導無線へと呼びかける。

「賭けは成功ね!!ビュウリング!!」

「成功してしまったか」

ふ、と煙草の煙を吐き出し、肩を竦めるビュウリング。

滑走路に目を向けると、ボブやジョーイ、『クラッシャー・オヘア号』の搭乗員たち、それに、顔見知りとなった整備兵や衛生兵たちもこちらを見送っている。

「飛行機を操縦するのも久々ねー。テキサスの農場でセスナを飛ばして以来ね」

「……今何て?」

オヘアがさりり、と口にした言葉に信乃が呟く。

信乃だけではなく、伊予もフランも、同じような表情を浮かべているが、4人の目の前にいるビュウリングは煙草をくわえたまま素知らぬ顔をしている。

「……大丈夫でしょうか……」

「イヨは楽観的だな。私は駄目な予感しかしていないが」

伊予の言葉にフランが呟く。

「そんな事より准尉、煙草無いか?」

「そんな事!?!もうありませんよ!!」

ビューリングの言葉に信乃が怒鳴る。

「……しまったな。作戦終了後に吸う煙草がなくなってしまった。なあ。今から取りに戻っていいか?」

『いいわけ無いねー!!』

魔導無線の向こうからオヘアの怒鳴り声が響く。

『こちら司令部、ミス・オヘア、聞こえるか?』

「イエス、ばつちり聞こえてるねー」

良い無線使ってるねー、とオヘアが言うと、無線の向こうから非常にクリアなため息が聞こえてくる。

『敵は『人形』を含む小型ネウロイ多数と推定される。無線から推察するに、敵の『コア』はウィッチのシールドと同様の防御手段を持っている可能性が高い』

「それは怖いねー」

そう言いながらもオヘアの声に動じた様子はない。

『……犬死にはするなよ。死ぬならせめてそいつをぶち当ててからにしてくれ』

「勿論ね!!」

オヘアが叫び、操縦桿を強く握りしめ、管制に向かって力強く叫ぶ。  
「元』スオムス義勇独立飛行中隊』少尉、今は気ままなカウガール、キャサリン・オヘア!!輸送任務に行ってくるねー!!」

—4—

「この野郎っ!!」

直枝が怒鳴り、手にした99式2型の引き金を弾く。眼下に見える『人形』のうちの一体が13・7mmの弾丸の掃射に貫かれ、光の粒に代わるが、もう一体はするり、と身をひるがえし、降下して離脱する。

「ケイト!!しっかりして!!」

「……っ?わ、私……」

P-47を履いたウィッチがもう一人のウィッチの呼びかけに顔を上げる。



「いいからとつとと逃げろ!!」

直枝の言葉にこくり、と頷きその場を離脱していくウィッチ達。

「ひかり!!」

「はい!!」

すぐさまひかりが直枝の二番機の位置につき、再度上昇。

「菅野さん!!上ですっ!!」

太陽の向こうを見ると同時に直枝が手にした99式の引き金を弾く。

二手に分かれた小型に対応するように、直枝とひかりもそれぞれ手にした機銃の引き金を弾く。

「追うなひかり!!このまま突っ切る!!」

「了解ですっ!!」

小型ネウロイの編隊に食いつかれないように攻撃を散らしながら、直枝とひかりが上空へと上がる。

「いるぞ!!ひかり!!」

「はいっ!!」

そう叫ぶと同時に直枝とひかりは手にした99式2号2型改の引き金を上空の太陽に向けて弾く。

狙いをつけるのではなく、あぶりだすように。

太陽の中から黒い影が脇に飛び出す。小型を囿に二人の背後に回り込むべく待機していた『人形』だ。

「貰いました!!」

その言葉と同時に二人の脇を零式21型……眼鏡をかけたハルカのユニットがすり抜けて上昇していく。二人の姿を死角に、『人形』に悟られぬように近づいてきていたハルカが、降下して逃げようとしていく『人形』の脇をすり抜けると、そのまま急旋回。『人形』の背に食らいつく。

『人形』も旋回して回避しようとするが、こと格闘戦闘のみに関して言えば、未だに零式21型は扶桑の、否、欧州のユニットと比べても旧型とは言え遜色がない実力を発揮する。

「菅野中尉!!ひかりちゃん!!援護を!!」

その言葉に、直枝とひかりも身を翻す。直枝は上に、ひかりは下に。旋回して振り切ろうとする『人形』の背後を追うハルカ。

空中戦において一番無防備な状態は敵を攻撃する瞬間である。

その瞬間を狙い、ハルカの後ろに付け入ろうとする小型ネウロイに對して、優位高度から身を翻した直枝が上方から食らいつき、威嚇の掃射を行う。

そのまま回避するために降下していく小型の群れを追い、そのまま直枝が『人形』とハルカから小型ネウロイを引き離す。

そして。

「ひかり!!今だ!!」

「はいっ!!」

直枝より低い高度で待ち構えていたひかりが直枝の前に出る。ひかりと直枝の手にした99式2型2号が同時に鉛玉を弾き出し、次々に小型を光の粒へと変えていく。

「やりました!!」

『ごつちもです!!』

ひかりの言葉にハルカが無線で答える。

これでもハルカは対一の巴戦においては、直枝と互角かそれ以上の実力を誇るウィッチだ。お膳立てをしてやれば『人形』の撃破など容易いものだ。

「……ひかり、解るか?」

「……はい」

高度を上げ、再度一番機の位置に戻りながら呟いた直枝の言葉にひかりも頷く。

これで倒した『人形』は5機。

相手が直枝とハルカ、そしてひかりという、東部戦線のエースだという事を差し引いても、直枝の知る『人型』はもつと手ごわく、そして、巧妙にウィッチ達の隙をついてきた。

かつて、たった2機で当時の502のうちの半数近くが食らいつかれるという被害を被った事を考えても、この『人形』は明らかに『人型』と比べ劣化している。

「質より量って事でしようか？」  
ぽつり、と呟くひかり。

『人形』の動きは確かに不可解だ。

だが、今は考えている暇はない。

そう。

「考えるのはこいつら全部ぶちのめしてからだ」

そう言って直枝が眼下を睨みつける。

目の前にいる小型ネウロイの編隊。負傷者を抱えながら離脱しようとしているリベリオンの逃げ遅れた一小隊を追いかけている。

「もう一度いくぜ、ひかり!!」

引き金に手をかけた直枝が素早く周囲を警戒する。死角にネウロイの姿は無い。

「はいっ!!:菅野さん!!」

ひかりも同様に背後を確認し、そして、一気に高度を落とす。

目の前のネウロイに照星を合わせる。

二人の銃口が同時に火を噴き、目の前の小型ネウロイは次々にはじけ飛んで行った。

—5—

『こち……3中隊……第4小……M—E』……離脱完……帰……しま……』

ノイズ交じりの魔導無線から56FGの最後の小隊の離脱が伝えられる。

ここに残るのは502と507、そしてHMWのウィッチ達、それと、殿を務めたゼムケら一小隊。

回復魔法が使えるディアナは仲間たちと合流し負傷者を治療しながらウエストハムネット基地へ引き返しているの、残っているのはウルスラと二ナだけだ。

「……どう見る、中尉」

「状況は不利です。ですが……」

ゼムケの問いにウルスラがぽつり、と呟く。

「あの『人形』、数は多いですが、私達を襲った『人形』に比べ動きも

能力も各段に劣ります」

「数ほどの危険性は無い、と」

こくり、とウルスラが頷く。

「それに、ネウロイの動きも、こちらを積極的に襲ってくるというよりも、防衛に徹しているかのようです。まるで、何かに怯えているように」

先日の疑念への答えが、輪郭を持って浮かび上がってくる。

セイレーンは、生み出せない魔法力をどうやって手に入れたのか。

先日は直視することが躊躇われた『セイレーン』のコアを再度睨みつけ、ぽつり、とウルスラが呟く。

「……ようやく雁淵軍曹の疑問の答えが解りました」

戦闘機を一瞬で蒸発させ、駆逐艦を一撃で大破させるだけの威力を持つネウロイの熱線を、ウィッチであればシールドを用い、一人で防ぐ事が出来る。

それに必要な魔法力がどれだけのものか。

そして、取り込んだウィッチからそれだけの魔法力を奪っていたとすれば。

仮定に過ぎないが、ウルスラには確信があった。

もしそうであるのなら、『セイレーン』の一連の動きも、そして今現在の動きも、すべての辻褄が合う。

自ら生み出せないのなら、それを取り込む。何故あの『コア』にウィッチが取り込まれているのか。今となっては答えは一つだ、

ウィッチの持つ強大な魔法力と、輸送機や、『エルドリッジ』に乗り組んでいた兵士達の持つ微細な魔法力。

そう。

「魔法力を奪い取る為です」

周囲の『魔法力』を手当たり次第に取り込み、吸収することで、『セイレーン』は『人形』と『シールド』を生み出すだけの魔法を手に入れた。

だが、その魔力には限りがある。ウィッチは生きてこそ魔法力を生み出せる。吸収し、命を奪ってしまえば、それ以上魔法力を生み

出す事は出来ない。

だから、『セイレーン』は、あの時、強引な手段を使つてもフランを、そして伊予を……ウィッチを取り込もうとしていたのだろう。

だが、ウィッチをコアに取り込めなかつたせいで、『セイレーン』もまた、魔法力が枯渇してきている。

「……大手柄ですよ、シノさん」

思わずウルスラが呟く。

ゼムケ達が後一手を打てないのと同様、魔力が枯渇しつつある『セイレーン』も、決定的な一手を打つことが出来ない。

恐らく、この場にいる皆がそれを肌で感じているだろう。

鈍足な足で、この場を離脱しようとしている『セイレーン』。

だが、今いるウィッチの火力もまた尽きようとしている。

『人形』を生み出す力を失つても、相手は大型のネウロイであることに変わりない。

そして、魔法力が残っている限り、シールドでこちらの攻撃を防ぎ続ける。

通常の小型ネウロイを迎撃しつつ、あの巨大な『コア』を破壊するには、それ相応の『火力』が必要だ。

「……ひかり、援護は任せませ」

そういつて直枝が自分の手にした99式をひかりに放り投げる。

「援護つて、まさか……」

ぎゅ、と手袋を嵌め直し、直枝が拳を握る。

「オレにはまだ、『こいつ』がある」

「……全力で行くわ。エツタ、お願い」

ジェシカの言葉にエツタがため息をつき、そして、残弾の尽きたポイズを放り捨てる。

「仕方ないっすね。海で遭難したくなければ帰りの分の魔力は残しくつつすよ?」

そういつてエツタがジェシカの両肩に手を当てると同時に、エツタの掌が青白い光に包まれる。

「約束は出来ないわ」

回復魔法に近いが、少し違う。

エツタの固有魔法『魔力転移』。

自らの魔力を他のウィッチへ分け与える能力。

だが、一度使用するとエツタ自身の魔法力も大きく削がれるため、一度の戦闘で使用できるのはせいぜい一度きりだ。

後一手の一押し。

幸いにして、ここには『まだ』、その可能性が残っている。

その一手となる一撃を持つ二人のウィッチ。

直枝の『剣一閃』。

そして、ジエシカの『エクスカリバー』。

共に攻撃に特化した固有魔法だ。シールドを破るには、ここで最も適している。

だが、どちらかが必ずシールドを破壊し、そして、仮にシールドを破壊したとしても、もう一人の力が不足していれば、あれだけの巨大なコアは破壊出来ない。

二人の固有魔法のどちらかでシールドを破壊することが前提となる、分の悪い賭けだ。例えば二人の固有魔法でシールドを破壊しても、残されたウィッチ達の火力ではコアを破壊しきれない。

『……直ちゃん、危険な賭けだよ』

「解ってる」

ヴァルトルトの無線に直枝が答える。

「……でも、やるなら今しかねえ」

直枝が呟く。

『セイレーン』のコアの中には、今すぐにも飛び立ちそうな小型ネウロイが何機も透けて見える。さながら、卵から羽化する前の昆虫のようだ。

間もなく敵の新たな攻撃が始まる。

迷っている暇は無い。

覚悟を決め、皆が顔を上げた、その瞬間。

『イエス!! どうやら間に合ったみたいねー!!』

唐突に響いた魔導無線からの声に、その場にいた誰もが思わず耳を

疑  
っ  
た。  
。

「……ええ……？」

思わずひかりが口を開く。ウィッチの飛行速度と比べ遙かにゆつくりとした速度で近づいてくる機影を確認し、思わず直枝が呻くように、そして若干の呆れを交えたように呟く。

「おい、あれってまさか……」

『クラッシャー・オヘア号』……でも、あれって……』

ニナが呟く。ゆつくりと近づいてくるC—47輸送機にペイントされている派手なノーズアートを見、信じられないといった表情を浮かべている。

『来ました来ました!!待ってました!!智子お姉さま!!』

ハルカの能天気な声が魔導無線から響く。

しかし、喜んでいるのはハルカばかりで、他のウィッチ達は突然空域に現れた『クラッシャー・オヘア号』改め『クラッシャー・オヘア』といらん子中隊号』の雄姿、もとい場違いさに唾然とした表情を浮かべている。

否。もう一人を除いて。

「遅いです。オヘア」

ぽつり、とウルスラが呟く。

その口元には笑みが浮かび、瞳にはしてやったりといった表情が浮かんでいる。

「中尉、どういうつもりだ」

「……これが本当の『後一手』です。ゼムケ大佐」

そういうとウルスラがFw—190に魔力を送る。

「ハルトマン中尉!?!」

「話はあとです。大佐」

そういうとゼムケが止める間もなく、ウルスラが真っ直ぐ輸送機へと向かっていく。



『待たせたねー、ウルスラ』

「もう少し早く来れなかつたんですか？」

『准将の説得に時間がかかったね』

オヘアが答える。

「お待ちしてました!!智子お姉様!!」

そういつて近づいてくるハルカ。

「どうするウルスラ。幻覚が見えているようだが」

「そのまま利用しましょう」

ビューリングの問いかけにウルスラが答える。

「いえ、あの。冗談ですが？」

「そうなんですか？本気だと思っていました」

「おいハルカ。煙草持つてるか？」

「持つてるわけじゃないじゃないですか!!」

二人の言葉にむくれた様に怒鳴るハルカ。

そして。

「イヨさん。『予定通り』、ゼムケ大佐と合流してください。着弾地点の座標指示はお任せします」

「了解!!」

ウルスラの言葉に伊予が上昇を始める。

「シノさんとフランさん。ハルカさん、私と共に機体の護衛を」

その言葉にウィッチ達が楔型の密集陣形を組む。

空の上のパンツァーカイル。奇しくもそれは、かつていらん子中隊がスオムスで最初の戦果を上げた時と同じ陣形だ。

「先頭は……」

「あたしに任せて下さい、ウルスラ」

信乃の言葉にウルスラが一瞬驚いた顔を浮かべる。

信乃の使用する零式54型は、この場にいるウィッチ達の履いているストラライカーの中でも特に防御の薄いユニットだ。ネウロイの熱線をまともに受けるには非力に過ぎる。

「無茶をするなシノ、私に任せろ」

「無茶じゃないです。自信があるんです」

フランの言葉を遮り、信乃がウルスラへと目を向ける。  
眼鏡越しのウルスラの瞳と、信乃の瞳が交錯する。

「……解りました。正面はシノさんに任せます」  
「了解です!!」

ウルスラの言葉に返事を返し、信乃が輸送機の正面へびたり、とつける。

『ちよつと、ちよつとシノ!! 一体何考えてるの!?! 馬鹿なの!?!』

魔導無線から聞きなれた声が響いてくる。

『ジェシーこそ。何ぼーつとしてるんです? 戦果をあげるチャンスですよ』

『はあ!?!』

信乃の言葉にジェシカが素つ頓狂な声を上げる。

『聞いてください、皆さん』

ウルスラが無線に向かって語り掛ける。

『これからこの輸送機を『セイレーン』にぶつけます。私の開発した対ネウロイ用爆薬と通常爆薬、これなら『セイレーン』を破壊できます』  
ウルスラがウエストハムネット基地に持ってきたのは探知機だけではない。何かの役に立つと思つて持ってきた試製品と爆薬。

「……破壊力こそ正義です。いつか大型に試してみたいと思つていましたが、まさかこんなに早くチャンスが訪れるとは思つてもいませんでした」

何時になく興奮した口調で呟くウルスラ。普段はマイペースなその口調も、今は若干早口になっている。  
そう。

今でこそ真つ当な科学者のような顔をしているが、スオムスにいたころのウルスラは爆発に魅せられ、いかに敵を爆破するかに命を懸けていた少女だった。

とにかく時間さえあれば爆発物を開発し、そして躊躇なく実験してハンガーを破壊する。

フリーガー・ハマーの前身となるフリーガー・アス……ロケット弾の開発を独自で行つたのもその一環だ。

そして、その本質は変わっていない。

ジェットストライカーや、役に立つのか良く解らない兵器の開発の合間を縫って、新型の火薬の開発に余念がないし、何かしらの理由をつけて『それ』をこつそり持ち込んでいるであろうことも、彼女をよく知るかつての仲間達いん子中隊なら容易に想像のつく事だった。

「藤田中尉、どういうことだ」

近づいてくる伊予にゼムケが尋ねる。飛行停止だったはずのウィッチ達が輸送機を一機引き連れ突然現れたのだ。本来ならば命令違反どころの問題ではない。

だが。

「飛行停止はエイカー准将によって解除されました。今の私たちの任務は、あの輸送機を無事、『セイレーン』の『コア』に送り届ける事です」

『こちら第56戦闘隊第3中隊長、フランチースカ・S・ガブレシエフスキー中尉。残存ウィッチへ。輸送機の護衛を求む』  
魔導無線にフランの声が響く。

その間にも『クラッシャー・オヘアといらん子中隊号』は高度を落とすつつ速度を上げながら、真っ直ぐ『セイレーン』に向けて突っ込んでいく。

セイレーンもその姿に気が付いたのか、『コア』が赤く輝きだす。同時に、真っ直ぐ進んでいた船体部分がゆっくりと回頭を始め、爆撃に備えるかのようにその進路を変えていく。

「ギャビー!!」

『お願いします、隊長。やらせてください!!』

無線の向こうからフランの声が帰ってくる。

「……覚悟はできているな?」

ネウロイと戦う覚悟。そして、軍紀に背いたこと。

如何なる戦いになるのかも、如何なる罰が下るのかも、全てを受け入れる覚悟があるのか。

『イエス、ママ』

ゼムケの懸念を払いのける様に、フランの返事が間髪入れず魔導無

線に響く。

「……そうか」

小さくうなずき、ゼムケが伊予を見る。

「お願いします、大佐」

その言葉にゼムケが頷く。この場の指揮官はゼムケであり、全てのウイツチは彼女に従う義務がある。

だからこそ、ゼムケは決した意思を伝えなくてはいけない。

いらん子達の、成長した部下達の、文字通りの捨て身の覚悟に答えるために。

『残存戦力に告ぐ。我々は残された戦力を持って、『セイレーン』を殲滅する!!』

この空域に残ったウイツチ達の魔導無線に、ゼムケの凜とした声が響いた。

出来るな、というゼムケの無言の問いに伊予が頷き、眼下の『セイレーン』を睨みつけ、魔導無線のスイッチを入れる。

そう。ウイツチは……ウイツチならば、同じ敵に二度も不覚を取ったりはしない。

「ヴァルトルートさん」

「ヴェスナ、残りの燃料は？」

「少ないです。基地に戻ることを考えると、戦闘飛行は持つて後一度です」

ヴァルトルートがその言葉に頷く。

「十分だね。ヴェスナ、美也ちゃん。『輸送機』の突入を援護するよ」  
その言葉に二人が頷く。

Bf-109と雷電が輸送機に向かい、その左右、楔型の両端に身を寄せて加わる。

「ご協力感謝します。クルピンスキー中尉」

ぱちり、とウインクするヴァルトルートに、ウルスラが短く答える。

「どうして黙ってたんですか、中尉」

「言ったら止めますよね？」

「当たり前です」

「だからです」

くすり、と笑うハルカ。はあ、とヴェスナがため息をつく。

「どうせ止めても止まらないのが中尉です。だったら、せめて一言言って下さい……一応、同じ部隊の仲間ですから」

「いきなりどうしたんですか!?抱いてくれるんですか!?!」

「前言撤回です。ずっと黙っていて下さい」

二人のやり取りに苦笑を浮かべる美也。

自分の送られた507JFW……かつては『いらん子中隊』と呼ばれていた事も勿論知っているし、成程、その残滓というか何故そんな言われ方をされていたのか、時折その面影が見え隠れすることもある。

「美也、無理は……いえ、今は無理をさせます。ですが、このくらいの無理が出来ずに前線では生き残れません」

だが、今は違う。

皆優秀で尊敬する先輩達だ。危険を、そして軍紀を冒してまで、皆を助けるために助けに来てくれた。

そして、この『輸送機』は、そんな先輩達からの大切な『贈り物』だから。

「はい。生き残って見せます。今回も、そしてこれからも」

力強く美也が答える。

『いい返事ねー。流石ミー達の後輩ね』

満足げな声が魔導無線から伝わってくる。

『お前は何も教えていないだろう』

『ノー。ビューリング、後輩は先輩の背中を見て育つものねー』

『成程。お二人は自ら反面教師を示しているわけですね』

『そういうウルスラさんも人の事言えませんよね。こんなのこっさり用意しておいて』

思わず苦笑を浮かべるヴェスナ。

懐かしい声と懐かしいやり取り。

自分がかつて左遷同然にスオムスに来たばかりの時も彼女達はこんな調子だった。

こうはなるまい、こうはなりたくないと思いつつ、気が付けばまだ彼女たちの背には追い付いていない。

『攻撃、来ます!!』

信乃の言葉に皆が口を閉じ、一斉に顔を引き締める。

技量が無い、協調性が無い、やる気も根性も無い。

無い無い尽くしの『いらん子中隊』。

だが、そう言われ続けながらも、彼女たちは数々の戦いを潜り抜け、そして誰一人欠けることなく生き残った。

だからこそ、彼女たちは『いらん子』だが、正真正銘、歴戦の魔女なのだ。

そして、次の瞬間。

「……来る」

ぽつり、と信乃が呟く。

体に突きさすチリつとした痛みの代わりに、目の前に生じたシールド一杯に赤い光が広がり、そして。

輸送機を囲むウィッチ達の張るシールドが一つに重なり、輸送機と、それを囲むウィッチ達よりも遥かに大きな一枚のシールドへと変化した。

「……え？」

思わず二ナが呟く。

二ナだけではない。隣にいるゼムケも、その場にいたウィッチ達が皆驚きに目を見開く。

『同調シールド』

複数のウィッチの魔法力をシンクロさせ、シールドを融合させる。

シールドの操作技術の一環だが、同調させるにはウィッチ同士の間接距離を保つ必要があるため、一定の場所に留まる事の出来ない空戦で使われることは滅多に無い。

信乃が同調シールドを覚えたのも、実戦で使用するためというよりも、減少した魔法力を補うために行っていたシールド操作の訓練の為である。

普段は使いどころのない、曲芸のようなシールド技術だが、輸送機

の周囲を取り囲んだまま一定の距離を保っている今ならば、個々の魔法力に関係なく、輸送機を取り囲むウィッチ全員の、『魔法力の総和』による巨大なシールドを張る事が可能となる。

そう。

たとえば、先頭にいるのが魔法力の低い信乃でも、その後ろには信乃よりも遥かに魔法力の高いウィッチ達がいるのだ。

この状態で全員のシールドを同調させれば、輸送機とその前を飛ぶウィッチを丸ごとカバーする巨大な一枚のシールドに出来る。

「……このために敢えて先頭に？」

「どうです？少しは見直してくれました？」

ウルスラの言葉にしてやったりと言った表情を浮かべる信乃。

そして。

『皆さん!!降下進路を後10度修正!!速度はそのまま。オヘアさんの離脱のタイミングはこちらで指示します!!』

『了解ね!!』

伊予の無線越しの言葉にオヘアが返す。

周囲に『人形』や小型ネウロイが未だ潜んでいる可能性も零ではない。ゼムケが周囲を警戒する中、魔導無線に耳を当て、伊予は輸送機に向けて上空から指示を送り続けている。

「それも自動演算か？」

「いえ、自動演算は触れたものにしか作用しません。ただの計算です」

淡々と、まるで当たり前のことのように言い放つ伊予。

ウィッチの中にも適正、不適正というものがある。

指揮に適したものの、戦いに適したもの。

性格的にも普段の態度からも、目の前の藤田伊代という中尉は指揮官向きだと思われる。実際、ゼムケの第一印象もそうだった。

だが、それはあくまで『印象』に過ぎない。

伊予は後方から指揮を行うタイプではなく、あくまで『戦闘』に特化したウィッチだ。

信乃が歪ながら洗練された、防衛的なインファイターであるのなら、伊予の神髄は、理詰めと計算に裏打ちされた、攻撃的なアウトファ

イター。

例え離れた位置であろうと、たかだか数百マイルで飛翔する物体を、数十ノットの標的に命中させること等、造作もない事だ。

……船体は元のまま、セイレーンのコアに特別な動きなし。ならば、取れる回避行動は操舵のみ。

コアの大きさはおよそ20メートル、船体速度は回避時最大でおよそ15ノット。

最終的な着弾地点を割り出すまでに必要なタイムリミットはパイロットの脱出を考慮した着弾の30秒前。

知識、そして視覚を含めた五感から割り出した情報を繰り返し反復しながら収集し、分析し、そしてさらに計算を繰り返し、より正しい答えを導き出す。

そう。例えば、船の航跡に見える僅かな違和感。当然ネウロイもそのままでは直撃する進路を取り続けるわけがない。

敢えて熱線を撃ち続けるのも、『それ』をごまかすため。

例え弾かれても、熱線を撃ち続けるのは、『敵』の視界を塞ぎ、自らの進路の変更を悟らせないため。

取り舵を一杯に取っていた船体の転回が徐々に緩やかになり、そのまま、面舵方向へと進路をずらす。

しかし、その全てが伊予には見えている。

『5秒後に機体を反対方向に30度、突入角度を5度上方に修正』  
『了解したね!!』

伊予の位置からは相手の動きが手に取るように解る。

指示を出しながら、ちらり、と視線をゼムケへと向けると、その意味を理解したゼムケが頷き、口を開く。

『……ジョンソン大尉、菅野中尉、準備は整っているか?』

『任せろ』

『こつちも準備できてるわ』

ゼムケの問いに答える無線越しの声。

『藤田中尉、突入までの時間は?』

『後40秒。オヘアさん』



『オーケー!!いつでも固定出来るね!!』

その言葉に再度ネウロイを睨みつける。進路を変えた輸送機に対し、再度反転を試みようとしているようだが、もう遅い。

『機体を5度修正した後に進路を固定、離脱してください』

『了解ね!!』

伊予の指示に、オヘアが操縦桿をロープで固定するとそのまま操縦席を立つ。搭乗口を開け放ち、目の前に広がる空と海に向かって躊躇なく飛び出す。

『ビューリング!!ミートの事は任せるねー!!』

その言葉と同時にハリケーンで輸送機の脇に付けていたビューリングが急降下。オヘアのフライトジャケットの首根っこを掴む。

『ハギちゃん!!』

『皆、あたしの合図で散開!!用意!!』

シールドを張りながら信乃が怒鳴る。

『ジョンソン大尉!!菅野中尉!!』

『了解!!』

ゼムケの合図にジェシカがシールドを展開。

『エツタ!!』

『了解つす!!屍は拾うつす!!』

『死なないわよ!!叩き割れ!!『エクスカリバー』!!』

魔力の刃と化したシールドを構えたジェシカが、ネウロイに向けてそれを叩きつける。展開したシールドとシールドがぶつかり合い、魔法の火花がはじけ飛ぶ。

『まだまだあつ!!』

更に、ネウロイの直上から直枝が真っ直ぐに急降下。

拳に圧縮した魔力を込め、『エクスカリバー』の上からさらに一撃、叩きつける。

『『剣一閃』!!』

拳がシールドに突き刺さる。

攻撃に特化した二振りの『剣』が、徐々にネウロイのシールドを侵食し。そして。

次の瞬間、直枝の拳を中心に、ネウロイのシールドが音を立ててはじけ飛んだ。

「離脱します!!」

信乃の言葉にシールドを張っていたウィッチ達が一斉にその場を離脱。

ネウロイに向けて落下していた輸送機が真っ直ぐに『セイレーン』のコアに向かって突き刺さり。

2000キロ、2トンの爆弾と化した『クラッシュャー・オヘア』というらん子中隊号』が光を放ち、『セイレーン』と共に炎と爆発音に包まれた。

「……っす!!」

ジェシカと直枝の前に飛び出し、咄嗟に張ったエツタのシールドを、無数にはじけたネウロイの『コア』の残骸が叩く。

「隊長!!菅野中尉!!無事っすか!?!」

「……もちろんよ、エツタ」

「……おう、助かったぜ、うっす」

「うっすじゃねーっす!!エツタっす!!」

疲れ切ったような顔をしているジェシカと直枝が懨然とするエツタの顔に薄い笑みを浮かべる。が。

「……っ!!」

一瞬浮かべた笑みが凍り付く。

はじけ飛んだコアの破片が海に落下する直前。すべてのコアがびたり、と宙に静止する。

「……まさか」

誰もが愕然とした表情を浮かべる。

煙が晴れ、徐々に明らかになっていく爆発の中心地。

その殆どを爆発によりえぐり取られ、まるで大きなクレーターのよくな跡を残す『セイレーン』のコア。

だが、そのコアは依然として赤く輝き、そして、ゆっくりとコアが元の位置に集まろうとしている。

「……まさか『真コア』!?!」

ヴァルトルートが叫ぶ。

コアの中に小さな真のコアを宿した、二重コアの構造を持つネウロイ。

表向きのコアを破壊しても、その奥にある『真コア』を破壊しなければ撃破出来ないネウロイだ。

「残りの部分を破壊するんだ!!早く!!」

そう言いながらもヴァルトルートは手にしたMP43短機関銃を構えなおす。

「二人とも、魔力を回復するつす!!」

咄嗟に固有魔法を使おうとするエツタを、ジェシカがその手を掴んで制止する。

「何してんのよエツタ!!あんたの魔力が足りなくなるわ!!海に落ちるわよ!!」

「今はそれどころじゃないつす!!」

長時間の戦闘とシールド、そして固有魔法による魔力の消費で皆体力も魔力も限界に近い。それでも皆、武器を構えなおし、残された『セイレーン』の残骸へと向かおうとする。

だが、それよりも早く。

「任せて下さいっ!!」

その中を、一人の、誰よりも体力に自信のあるウィッチが、一直線に『セイレーン』に向かっていく。

「雁淵軍曹!?!無茶です!!」

「駄目です!!戻ってください!!」

脇をすり抜け真っ直ぐネウロイに向かうひかりを信乃とウルスが制止する。

だが、二丁の99式2型2号改機関銃を構えたひかりは真っ直ぐに、『セイレーン』に向かっていく。

『セイレーン』の『コア』の残骸部分のすぐ近くで体をひねり、『チドリ』の主翼が『コア』を横薙ぎに掠める。ちりっという火花が起こり、その先端がはじけ飛ぶが。

「見えました!!」

叫ぶと同時にひかりの双眸が赤い色を帯びる。固有魔法の『接触魔眼』により、コアの残骸の奥で息をひそめていたもう一つの『コア』の位置がはつきりとその瞳に写し出される。

「そこだあっ!!」

くるり、と身を翻しながらひかりが叫び、両脇に抱えた機関銃の引き金を弾く。

二丁の99式2型2号の銃口からはじき出された13mmの銃弾が『セイレーン』のコアを削り取り、そして、今度こそ次の瞬間。

『セイレーン』のコアが、否、セイレーン全体が白く輝き、硝子のように、或いはペテルブルグの吹雪のように、白い無数の粒となって弾け飛んだ。

「ひかりっ!!」

「雁刈さんっ!!」

シールドを張るが、その勢いに弾き飛ばされて落下していくひかりの両腕を、間一髪で直枝と美也が抱きとめる。

「……やった!! やりました!! 菅野さん、三隅さん!!」

そういつて屈託なく微笑むひかり。

「うん……」

そして、そんな様子を僅かに潤んだ瞳でひかりを見つめる美也。

「……つたく、どうすんだよその主翼」

その言葉にひかりが、あつ、と呟き『チドリ』へと目を向ける。

両手に機銃を持っていたから仕方がないとは言え、ユニットごと

『セイレーン』と接触したのだ。

ネウロイと接触した『チドリ』の左側の主翼の半分ほどが千切れ、エンジンからは白い煙が上がっている。

「ああっ!? ゴ、ごめんね『チドリ』!!」

慌てて謝罪の言葉を口にするひかりだが、当の『チドリ』は無茶な主人に抗議するかのようにはぶすん、と白い煙を上げ、そのまま左足の魔導エンジンを停止させる。

「うわ……ど、どうしよう、どうしましょう菅野さん」

うろたえるひかりにはあ、とため息を吐きだし、直枝が苦笑を浮か

べる。

「そのくらいならすぐ直るだろ。それよりも……」

そういつて直枝が顔を上げる様に促す。ひかりが顔を上げると、その場にいたウィッチ達はこちらに向かってくる姿が目に入る。

「やったつす!!大戦果!!大戦果つすよ!!」

「やりましたね!!雁淵軍曹!!」

「ひかりちゃん、格好良かったよ!!」

歡喜の表情を浮かべたウィッチ達にもみくちやにされ、ひかりが目を白黒させる。

「わあっ!?か、菅野さん!?三隅さん!!」

助けを求める様にひかりが手を伸ばすが、当の二人は互いに顔を見合わせ、苦笑を浮かべて肩を竦めるのみだ。

「あの、皆さん!!落ち着いて……ひゃっ!?誰ですか!?変なところ触らないでくださいよお!!」

歡喜の輪の中心で目を白黒させているひかり。

そして。

その輪を見下ろしていた一人の少女が、そつと腕に巻かれた腕章を撫でる。

「……終わったよ。見ててくれたよね。キャロル……」

歡喜の声の中で、親友に向けて呟いた二十の声は、誰に届くでもなく、北海の青い空への彼方へと消えていった。

2—20—III. Epilogue —Let's  
go to Kaupava—

—1—

「……終わったな」

「はい、終わりました」

北海の青い空に降り注ぐ、細雪のようなきらきらとしたネウロイの残滓を見上げながら、ぽつり、と呟いたビューリングとウルスラが顔を見合わせ、そして、どちらからともなく笑みを浮かべる。

「やったね!!ミー達の大勝利ねー!!」

「勝ったのはあいつらだ。私達ではない」

「ああ……お姉さまが……」

一方、一人ハルカだけが消え去ったネウロイの方角を見つめ、複雑そうな表情を浮かべていた。

「会心の出来だったんです。輸送任務が終わったらあの部分だけを切り取って、一生の宝物にするつもりだったんです」

どうやら『セイレーン』を倒したことより、一晩中かけて完成させたノーズアートの爆発と共に四散したショックの方が上回っているようだ。実にハルカらしい。

「……今更だが、何故わざわざ私達の絵まで描き足した？」

「ミーだけが爆発するなんて嫌ね。死なばもろともねー」

ビューリングの問いにオヘアが答える。その言葉にウルスラが、そしてビューリングも、苦笑じみた笑みを浮かべる。

「それはそうですね。特に、ここにいない誰かさんたちは」

そう言っただけで遠い目を見上げるウルスラ。しかし。

「見るウルスラ。手が震えてきた。きつとオヘアが重いに違いない」

「ユーのは単にアルコールかタバコが切れただけねー!!基地に着く前にミーを落としたら承知しないねー!!」

ぎゃあぎゃああと騒ぎ立てるビューリングとオヘアを見、ウルスラがため息を吐きだす。

全く、いらん子はいつまでたっても『いらん子』だ。  
だが、それでもいいのかもしれない。

そんなことをぼつりと考えつつ、ウルスラは口元に苦笑ともつかない笑みを浮かべ、そして再び空へと目を向けた。

「……っ!？」

同時刻。ロマーニヤ。

「どうしました、准尉？」

突然、ぶるり、と身を震わせたジュゼツピーナ・チュインニ准尉の様子を見て、まだ幼さを残す少女が首をかしげる。

手には爆撃用の模擬爆弾と、その投下装置。

「いや、なんか急に悪寒が……」

「大丈夫ですか？風邪……は無いでしょうけど」

かつて聞いたことがある扶桑のことわざを思い出しながら呟く若手ウィツチに、チュインニがジトつとした目を向ける。

「……何が言いたいのか？」

「いえ、今日はいい天気だなんて」

そう言っごまかすように空を見上げるウィツチにつられ、チュインニも空を見上げる。

視界の先に青く広がるロマーニヤの冬の空に、チュインニが思わず目を細める。

きつと、この空はどこまでも……そう。

かつて愛した、そして今でも思い焦がれる『あの人』のいる扶桑の空までつながっているのだろう。

「……ほんとだ。いい天気……」

そう呟き、空に向かってそつと手を伸ばすチュインニ。

「……きつとこの空は、トモコのいる国までつながっているのね」

……最も、その視線の先はアフリカで、そこにいるのは愛しの『トモコ』ではなく、その親友の一人の『ケイコ』なのだが、その事をチュインニが知る由はない。

「……へくしっ」

同時刻。スオムス。

執務室の机でくしゃみをするエルマ・レイヴオネン中尉。

「あっ……」

その勢いで脇にあったコーヒーカップが倒れる。

「ああっ？」

慌ててもとに戻そうとした勢いで肘に当たった机の上のインクが床に落ち、ついでに書類の束もどさどさと音を立てて机の上に散乱していく。

「あああああっ!!」

その様子を絶望的な顔で見つめるエルマ。

「どうしました？」

「……ハツキネン中尉……」

執務室に顔を出したハツキネンが、立ち上がるうとして中腰になったまま今にも泣きそうな顔をしているエルマを見、そして、たつぷりとコーヒーを吸った書類の散乱した机の上を見、板張りの床に広がるインクを見、最後にはあ、とため息をつく。

「……最近そういう事は無いと安心してました」

「私もです……」

「一体どうしました？」

「わかりません。急に寒気がして、くしゃみをしたらこんなこと……」

再度ため息をつくハツキネン。

「……バケツとタオルを持ってきます。エルマ中尉は机の上の整理を……」

「面倒ないです……」

くるり、と身を翻して部屋を去っていくハツキネンの背中にぽつり、とエルマが呟いた。

「……あらっ？」

そして、同時刻。扶桑。



かつての上司だった江藤敏子の営む喫茶店で久々の休暇を満喫していた穴吹智子が、コーヒーの入ったカップを手に取ろうとして眉を顰める。

「……何で割れてるのかしら」

「おや？どうかしたのかい」

訝し気にカップを見つめながら首をかしげる智子の脇から、エプロン姿の敏子がひよこつと顔を出す。

「え？あ、ち、違います、私が割ったんじゃないよ……」

わたわたと首を振る智子の顔に苦笑を浮かべる敏子。

「気にしなくてもいいわ」

そういうと敏子が机からカップをひよい、と持ち上げる。

「形あるものはいずれ壊れる。どんなものでも」

「……すみません」

「だから、気にしなくてもいいわよ。でもね、形ある限り壊れないものもあるわ」

「……はあ……」

くすりと笑う敏子の意図がつかめず、首をかしげる智子。

「それはね、『絆』よ」

そういうと、敏子が智子の前の机の上、折りたたまれた紙と便箋を見つめる。

その手紙の宛名には、ブリタニア語で書かれた『穴吹智子様』の文字。

そして、その差出人の名前は。

『いらん子中隊、ブリタニアに再集結？』

この写真は、1945年の2月にグラフ社の専属カメラマンであったデビー・シーモア女史がブリタニアのウエストハムネット基地で撮影した一枚だ。

『天候不順』により順延していたスオムスへの義援物資の補給の再開を前に、新たに描かれたノーズアートの前で取られた写真には、元独

立義勇飛行中隊のキャサリン・オヘア女史を始め、ブリタニア空軍のエリザベス・F・ビュリリング中尉、カールスラント技術省に所属するウルスラ・ハルトマン中尉、そして、第507統合戦闘航空団『サイレントウィッチーズ』に所属する迫水ハルカ中尉が同時に収まっている。

彼女たちは皆第507統合航空戦闘団の前身である『スオムス独立義勇飛行中隊』に所属していたウィッチであり、彼女たちを同時に収めた写真は1939年以来見つかっていないので、貴重な一枚と言っている。

共に写っているのはリベリオン陸軍のエースであるフランシスカ・S・ガブレシエフスキー中尉と第502統合航空戦闘団の菅野直枝中尉であり、彼女たちがどういった経緯で写真に納まったのかは不明だが、当時のウィッチ達が集極的な交流を行っていた貴重な記録としても史料価値の高い一枚と言えよう。

扶桑皇国『決定版 世界の魔女たち 1945年編』より

—2—

0800 ウェストハムネット基地 第一滑走路

その日のウェストハムネット基地の空は曇天。

既に日が上がり数時間を経過している筈だが、基地の周囲は明け方のように薄暗い。最も、これがブリタニアの冬の当たり前の風景であり、数日前までの晴れが続いた空の方が珍しいのだ。

そして、空の色は、この場にいるウィッチ達の心の内を映し出したかのようなもある。

「……どうしてこうなったんでしょう」

白い息を吐きながら、ぽつり、と零式54型に足を通した信乃が呟く。

「命令違反の懲罰にしてはおかしいです。おかしすぎます」

「……あきらめた方がいいよ、ハギちゃん」

その脇で、はあ、とため息をつく伊予。

信乃の履いた零式同様、増槽が取り付けられた紫電改43型は、こ

れからの任務が長距離に及ぶことを暗に示している。

「覚悟はできているとは言った。だが、何なんだ、これは。何故私が……」

ネイビーブルーに塗装されたP-47Mに足を通しながらぶつづつと呟いているのはフラン。

当然ながら命令違反を犯した3人のウィッチには基地に戻ると同時に厳しい査問が待って……いなかった。

代わりに待っていたのは、『瑞鶴』からの新たな任務の通達。

そしてフランにも、ゼムケから軽い注意と決して軽くはない任務がさらりと告げられた。

「アンタたちは自業自得よ。でも、なんで私まで」

「そうっす。こんなの絶対おかしいっす」

そう言つてスピットファイアMk-22に足を通したジェシカとエツタが揃つてため息をつく。

「あれだけ活躍したのに作戦は極秘扱い。おまけに部隊に戻るところか、『あの人』のお守りの続行なんて、絶対におかしいわ」

「栄転のはずだったっす。憧れの第一中隊に配属になって、ようやく面倒な先輩からおさらばできたと思つたのに、こんなの無いっす」

恨みがましく呟くブリタニアのウィッチ達の背後から声がかかる。

「よう。準備できてるな」

「よろしく願います、皆さん!!」

笑みを浮かべながら声をかけるのは菅野直枝と雁淵ひかり。それに502、507のウィッチ達も、ハンガーから運びだされて滑走路に並ぶ、それぞれの機材の発進装置に登っているところだ。

「……命令ですから」

はあ、とため息をつく一同。先日その『命令』を逆手にとつて輸送機を飛ばしたとは思えないウィッチ達の言葉に、直枝が愉快そうに笑う。

「そう暗い顔すんな。今回の話を聞けば皆喜んで歓迎してくれる。なあ、伯爵」

「そうそう。うちには偵察ウィッチはいないしね。夜間飛行の経験も

あるみたいだし、ラル隊長が喜ぶよ」

「え？萩谷さん、『うち』<sup>502JFW</sup>に来るんですか!？」

「そういう意味じゃねえよ!!」

「行きませんよ!？」

ほぼ同時にクルピンスキーとひかりの言葉を否定する直枝と信乃。ふと、互いに顔を見合わせ、肩を竦めて苦笑を浮かべ合う。

「……拾った命、簡単に落とすんじゃないぞ。萩谷」

「そっちこそ。ユニット壊さないでくださいよ、菅野中尉」

差し出された拳をこつん、と叩きながら信乃が答える。

『セイレーン』との戦いを終えてから数日。

伊予やフランやジェシカ達、そして、新しく新調した信乃の飛行服のポケットには、502と507のウィッチ達に半ば押し付ける様に渡された菓子やウィッチのブロマイドの類がぎつしりと詰まっている。

その対価の見返りに何を要求されるか。今から戦々恐々である。

「502には菅野さんと下原さんがいますから。これ以上扶桑のウィッチが加わると、外交問題になりかねないです」

「それは残念でしたね、伊予」

「いい加減忘れてください、ハギちゃん」

にまにまと笑みを浮かべる信乃にぶす、とむくれた顔を見せる伊予。

欧州に来たばかりの頃、堂々と遣欧艦隊のウィッチ達の前で『統合戦闘航空団に入隊するのが私の目標です』と言ってしまったせいで未だにこの件については信乃だけではなく、美枝や徹子からもかわれ続けられている。とんだ黒歴史だ。

「うちなら問題無いですよ。扶桑でもブリタニアでも、勿論リベリオンでも、可愛い子ちゃんならいつでもウエルカムです」

「……何か言ってる」

そう言いながら自分達を見つめているハルカのねっとりとした視線に、ぶるり、と身を竦ませるフラン。

「中尉の言葉は無視してください。戦力が足りないのは確かですが

……」

「嫌です。今度こそただの輸送任務なんです。変な事に巻き込まれるのはもう懲り懲りです」

そう言つて肩を竦める信乃。

その背後には、今回の件で失われたC-47に代わる新たな機体……リベリオンから提供された『クラツシャー・オヘア2世号』と、今まで足止めされて飛び立てなかった各国の輸送機。

それに、度重なり報道されたオヘアの義援物資の寄付に感銘を受けた、リベリオンを始めとする各国の退職ウィッチや兵士達から提供された義援物資を運ぶ輸送機がずらりと並んでおり、その総計は30機を優に超える。

これだけの大編隊を護衛するとなると相応の数のウィッチが必要となる。502や507のウィッチ達では到底護衛が足りない。

そう、だからこそ必要となるのが『新たな任務』である。

『護衛はよろしく頼むねー、『新しいいらん子達』!!』

魔導無線から能天気なオヘアの声が響く。

きつと途中で基地に立ち寄るたびに注目的になるだろう。

新たに義援物資を積み込んだ『クラツシャー・オヘア二世号』には、『いらん子中隊』だけでなく、502や507、そして、この戦いに参加していたウィッチ達、果てはゼムケやエイカー、そして、あの回復魔法を使えるウィッチまで、ところ狭しとウィッチ達の姿が書き込まれている。最早ノーズアートというよりボブという画家によつて描かれた一つの作品である。

「恥ずかしいです、菅野さん」

「……殴つて壊してえ……」

ぼつり、とひかりと直枝が呟き。

「雁淵さんやヴェスナさんはまだしも、私まであの絵の中に加わるのはおこがましい事では無いでしょうか?」

「そんな事言つても無駄です。一連托生ですよ、美也」

何とか消してもらおうと遠回しに無駄な努力をする美也。

そして。

「……スオムスってやっぱり寒いっすよね？」

「今年の冬はまだ暖かい方ですよ。マイナス20度を下回る日の方が少ないですから」

「……ユニット、凍らないのかしら」

「普通に凍るよ」

エツタとジェシカの問いにヴェスナとヴァルトルートが答える。

「ハギちゃん、オラーシャにいた事あるよね？」

「シャワーには気をつけて下さい。下手すると死にます」

そんな彼女達に命じられた新たな任務。

それは。

ストライクウィッチーズ 二次創作

『<sup>L</sup><sub>e</sub><sup>t</sup><sub>s</sub> <sup>g</sup><sub>o<sup>t</sup><sub>o</sub> <sup>K</sup><sub>a</sub><sup>u</sup><sub>h</sub><sup>a</sup><sub>v</sub><sup>a</sup> 輸送機を前線まで護衛せよ』</sub>